

---

# まだ見ぬ君に

冬子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まだ見ぬ君に

### 【Nコード】

N2243F

### 【作者名】

荻子

### 【あらすじ】

百年にわたる争いに終止符を打つための政略結婚。その前夜、姫が女官と入れ替わった直後に騒乱がおきる。姫は身分詐称のまま婚約者でもある敵国王太子と逃げることに。それは両国を巻きこむ新たな争乱のはじまりだった。逃亡劇の顛末と国に行く末は。本編完結。後日譚などあり。

次世代編「雪の陰翳」開始。

## 序章

そこは奥の宮の一隅。窓辺に椅子を寄せ、頭を突き合わせるようにして、一つの絵姿をのぞきこんでいる二人の少女。双子か姉妹かと思わせるほどに似通った面差しの彼女たちは、従姉妹同士だった。緑陰に木漏れ日が差し込む。煌めく光は磨きこまれた真鍮におさまった人物の細密画と、それをみつめる少女らの上に均等にそそぐ。熱心に見つめる少女は上質ながら機能的な女官の出で立ちをし、関心を持ち切れずにいるようすの少女は豪華な衣装に身を包んでいる。

「ねえ、なかなかの美男子じゃない？」

「そうかしら」

「今までに持ち込まれた縁談の中では、一番ましでしょう？」

「もう確定の縁談ですけれどね」

ふっと小さく息をついた少女は、二重の大きな目をしばたたかせた。どうでもいいとでも云いたげな投げやりな風情に、女官姿の少女が薄く笑う。

「見栄えと条件はこれまでで、一番ましな殿方よ？」

「確かにね　隣国の王太子、容姿端麗、頭脳明晰、温厚篤実、浮名を流すこともなし……胡散臭すぎはしない？」

細い指先が絵姿をはじく。それを手にしていた従姉は、そんな従妹に咎めるような一瞥をよこしたものの、じきに笑いだした。

「その逆の評判でも困るでしょう？　嫁ぐのはあなたなのだから」

「あなたが乗り気なら入れ替わってもいいのよ。私たちがこれほど似ていることはほとんど知られていないのだから、あなたが青蘭姫でも支障はないのよ。本来の血筋でいえば、あなたが直系なのだから」

「青蘭せいらん、私は生まれたときから姫でもなんでもないので。無茶をい

わないで」

「ごめんなさい」

諭す従姉に、青蘭は素直に詫びる。そんな従妹の髪を、彼女はやさしく撫でつける。

「あなたがどうしても嫌だというのなら、閨のときだけでも入れ替わってあげてもいいのだけれど。さすがに代わりに御子を産んでさしあげるわけにもいかないから」

「とんでもないわ、そんなこと。私の願いはあなたの幸せなのよ。そんなことをあなたにさせるぐらいなら、おとなしくどのような閨にだって、私自身が赴きます」

「私の願いもあなたの幸せなのよ　青蘭、それだけは忘れないでね。あなたの幸せのためなら、私はなんだってできるから」

「それは私だって同じなのよ」

ひどく生真面目な顔で言い募るうとする青蘭の唇を、従姉の細い指が塞ぐ。

「あなたが幸せなら、私も幸せ。あなたが不幸なら、私も不幸。それだけは忘れないで」

「……雪蘭、それは私も同じ」

「分かっているわ　私にとって一番大切なのはあなたよでも、あなたはこの国の姫。私のことは三番目にしておいてね」

長いまつげに囲まれた瞳を睨り、青蘭はかすかに首をかしげる。

「三番目？」

「一番は私たちの故国である“葉”、二番目はあなたの夫となる殿方」

「一番はともかく、二番目はわからないわ」

「大丈夫、私の勘はあたるのよ　それはあなたも知っているでしょう？」

雪蘭の悪戯っぽい笑みに、青蘭もはじめて薄い笑みを浮かべた。

「ええ　でも、大切なものに順番なんてつけられない、それは分かっているわ」

「ありがとう、青蘭」

従姉妹同士は額を寄せ合って微笑み、共に絵姿をみつめる。

黒髪に黒い瞳、すつきりとした立ち姿は毅然として頼もしくすらある。

この絵が真実、その人をあらわしているのであれば、悪くない話には違いない。敗戦の人身御供として差し出されるとしても、それが即ち未来を語るわけではない。

夕星ゆいせいが瞬しゅんいている。奥庭おくにわに落ちる影はすでに濃い。林泉をぬけてくる風は、初夏の夕べであつても心地よい。

こんこんと湧き出す泉の縁に腰かけて、彼女はふうっと息をついた。

故国を出立してすでに十日以上たつた。

馬を駆れば数日の距離だが、両国をあげての婚姻の嫁入り行列は、なにかにつけて大仰で、とても行程を稼げるものではない。行く先々で歓迎を受け、敵国でもあつた隣国に入つてからは、出迎えの一行もまじつてさらにその足は遅くなった。心底うんざりしたところに、ようやく新たな故郷となる隣国の王都に到着した。

「雪蘭には悪いけれど、本当に息が詰まる」

王族の女性は顔をさらすことはない。薄絹で面を蔽い、自ら声を発することもない。それでも事実上衆人環視だつた道の上には心底辟易し、鬱屈した想いを持て余す。

二人の関係は、ごく身近に仕えるものでなければその真実を知ることもなく、彼女たちを見分けることもできない。それに青蘭はすっかり甘えていた。旅の最中にもいよいよ嫌気がさせば、雪蘭に入れ替わつてもらつたこともあつた。さすがに妃としての立場まで入れ替わつてもらつたわけにはいかず、その甘えも今宵が最後だ。

女官の服装は隣国でも似たようなものだつた。そもそもとは同じ一つの国だつたのだから、その風俗が似通っているのも当然。国

が割れ、二つに別れてすでに一〇〇年以上たつ。それでも今のころはつきりと感じるほどの違いはない。

引きずることもない、足首までの衣装の裾。動きを妨げることはない無駄のない袖。すつきりと結びあげた髪。普段その逆の制約に煩わされている青蘭には、女官の衣装はなにかと意にそぐう都合のいいものだ。

無駄に着飾るからこそその王族という立場は分かっている、個人の好みまでは如何ともしがたい。あまり堅苦しいことが好きではない青蘭にとって、姫としてのあれこれは息苦しいばかり。

小さく鼻歌を口ずさみながら、泉の水をすくう。指の間からこぼれおちる湧水は、ひどく冷たくて心地いい。思わず目を細めたそこへ、唐突に何者かの存在を察して、素早く振り返った。

「そこでなにをしている」

深く響く、静かな声だった。

林泉を中心とする奥庭をかこむ銀柳の木陰に立つ姿は、暮れなずむ光にもかるうじて見てとれた。

紺青の衣装に身を包んだ、すつきりとした立ち姿。上背もあるようだった。凛々しいまなざしと、賢明な顔立ち。

その見覚えのある容姿に、青蘭はとつさに立ち上がる。

「殿下でいらつしやいますか？」

裳スカートの裾を持ち上げ、咄嗟に身を折る。すかさず返された反応に、声音の鋭さが和らぐ。

「青蘭姫に仕える女官か？」

「はい」

顔を伏せたまま、青蘭は応じる。下手に面をさらせば、今だけとはいえ一時的に入れ替わっていることが、のちのち露呈しかねない。「かようなところでなにをしておる」

「息抜きを　姫様からお許しを得ましたので」

「……彼の姫は身近なものに寛容なのだな」

どこか感慨深げな物言いに、つい顔をあげてしまった。

そこに立っているのはまがうことなく隣国の王太子にして、明日には夫となるその人だった。

あの絵姿に修正は入っていなかったのだと、妙に感心する。興味深げに無遠慮な視線を向けてくる女官に、王太子は訝しげに首をかしげる

「吾の顔になにかついておるか？」

「いえ、とんでもありません。失礼いたしました」

慌てて再び頭を垂れ、その陰でひそかに首をかしげる。夕闇のなかとはいえ、彼はまったく彼女の正体に気づいていないらしい。

「しかし、明日には婚禮という夕べに侍女を好きにさせるのだ。さほど手のかからぬ方ということか」

「確かに姫様はおひとりでもなにかもなされようとなさいますが、着替えから食事にいたるまでの一切合財に人手を介さねばならぬというのは、たまらなく煩わしいことでもあった。思わず漏らしてしまった本音に、彼は小さく笑う。

「一風変わった姫のようだな　だが、これ以上はもう問うまい」

「何故にございますか？」

「先入観を持ってしまふからな」

「……はあ？」

合点がいかぬといたげに首をかしげる女官に、王太子は生真面目に応じる。

「妻とする女性は妃一人と決めておる故、思い込みで左右されたくないのだ」

「……けれど、絵姿をお目になされば、多少なりとてお感じになる印象もおありなのでは？」

「ゆえに見ておらぬ」

「妻となられるお方の容姿をご存じないのでですか？」

「見ておらぬ故な」

勝手に先入観を抱いて、実際に人となりがそれとは違うというのは相手にも失礼だろう、とあくまで大真面目にかえしてくる彼に、

青蘭は思わず笑いかみ殺す。

「期待もなさっておられぬと？」

「すべては己の目で確かめ、決めたいだけのことだ」

気難しげに眉間に皺を寄せる。青蘭は肩の震えを堪えるのがやっとだった。

真面目な人柄らしいとは耳にしていたが、そこには馬鹿がつくほどらしい。いつかの女官相手にもこの対応なのだ。融通が利かないのだろうが、悪い印象でもない。

「なんだ？」

必死に笑みを押し殺している青蘭の様子を察してか、怪訝そうに険しい表情を見せる。

「いえ、なんでもありません」

従容と頭を垂れつつ、口元が緩むのはなんともしようがない。確かに従姉の勘の外れることは滅多とない。

「そなたもそろそろ主のもとへ戻れ。夜風が冷えてきた」

「はい」

静かな物言いは心地よい。

笑みを浮かべたまま面を上げ、小さく頷いた女官に、王太子もいちいち頷き返す。

その時、唐突に騒がしくなった。鬨の声上がり、王宮の表のほうより火の手が上がる。ゆるい風になにかが燃える、きな臭さがまじっている。

「？」

何事が起つたのか。見当もつかず狼狽し、立ちすくむ。

王太子も同じ方向を見、腕を組んだまま言葉はない。

そこへなんの前触れもなく、二人の前に影が跪いた。

青蘭は驚いて息をのむ。王太子はあらかじめ予想していたのか、身じろぎ一つしなかった。

「青蘭姫の一行に、刺客が混じっていたようです。陛下がお斃れになりました」



「なんだと?」

「こちらへ向かってくる手勢もございます。一刻も早く避難なさってください」

影は落ち着いた声でそれだけ告げると、立ち上がり急ぎ足で木蔭へ向かう。王太子もその後ろ姿に続きかけたが、不意に思いついたように青蘭の手をつかんだ。

「巻き添えにならぬように、そなたも来い」

「!?!」

有無を言わさぬ腕の力。

事態がわからないまま絶句し、引きずり込まれたのは奥庭の石畳にたくみに隠された通路への入り口だった。

## 第1章 脱出 1

葉はもとは一つの国だった。東西の二つの国に別れてすでに百年以上の時がたつ。両国はともに自国の正当性を主張して譲らず、故国統一の名の下に夥しい量の血が流されてきた。

西の葉王家の国、西葉。葉王家の姫は俗世とは隔絶された奥の宮で育つ。そこは現王お手つきの女性ばかりが収容される後宮の一角でもあった。

後宮の主は王妃である。彼女だけは奥の宮をはじめとする、後宮のなかを自由に行き来することが許される。裏を返せば、主であってもその自由は後宮内に限定されている。

王子が生まれれば三つになる頃に東宮につつされる。王女の場合は結婚か出家か、あるいは一生を奥の宮で過ごすか、その三つしか選択肢はない。

いったん後宮にはいると死ぬまで出ることはいできない。生きたまま出入りできるのは、王子と王女、そして嫁ぐ王女につき従うごく一部の女官に限られる。

そんな流動の少ない一定の人間が構成する環境は、ひどく閉鎖的なものとなる。そこでは主であるはずの妃妾やその所生の子女が、そのやるかたない憤懣のはけ口となることすらあった。

それは表だって礼を失するようなやり方ではなく、巧妙かつ陰険に、集団で行われるため、的となった人間に逃げ場はない。ささやかな失言をたしなめる者はおらず、ちょっとした失態はその被害を受けた者に原因がなすりつけられることすらあった。

「雪蘭さまと青蘭さまが似ていらっしやるのは見かけだけのこと。

聡明さと優雅さにおいては比すまでもありません。あの父君にしてこの姫君ありですわね」

「英邁にして温雅であられた紅柱こうけい殿下のお姿が本当にお懐かしいこと。愚昧な弟君に位を譲って退かれたのに、あのような若さでお命を……きつと陛下がひそかに手をまわされたに違いありませんわ」「血は争えぬとは申せ、青蘭さまはまことに気難しくていらっしやるうえに愛らしさの欠片もお持ちでない」

青蘭は、聞こえがよしの悪意に満ちた囁きに曝されて、成長したようなものだった。

国で一番高貴な女性であったはずの母を早くに亡くし、唯一の味方であるはずの乳母も頼りにはならなかった。

乳母は優しく気立てのいい女ではあったが、気が弱く、下級貴族出身という出自に委縮していた。長じるにつれて、彼女を守ることすらも青蘭の役割の一部となっていた。

王妃は産褥がもとで亡くなった。その原因となった娘の青蘭に、王は見向きもせず、奥の宮に半ば放置して顧みることがなかった。

愛妻を失つてのちは後宮に近寄ることすらしなくなった。王妃亡きあとの寵愛を期待していた女たちの不満が、その因である青蘭に集中したのは無理もなかったのかもしれない。

そんな悪意に満ちた環境に慣らされてしまう前に、盾となってくれたのはたった一人。一つ年上の従妹、雪蘭だった。

つまずいた拍子に膝の力が抜けそうになる。つんのめりそのまま前へ倒れかけた体を、逞しい腕が支えてくれた。

「……あ　ご……申し訳ありません」

とっさに抱きかかえるように回された腕は、記憶にある誰のものよりも太く逞しかった。

どこかまだぼんやりとした意識で、果ての知れない暗い隧道の先を見つめる。

薄暗い庭を、雪蘭に手をひかれて、あてどなく歩いたことがある。

そんなことをまるで他人事のように、遠くに思い起こしながら、現状を改めて認識する。

事態が理解できないまま、反射的についてきてしまった。非常事態だということだけは確かだが、それがどういふものなのか見当もつかない。

そんな状態で云われるままに、明日には夫となる人だとは云え、敵国の王子について来てしまった判断は、迂闊だったかもしれないけれど悪意にさらされて育ったためか、この先はともかく、今この時に自分に害なす人間かどうかを見分ける力には長けているつもりだった。

外界と通じる通気口のようなものが、どこかに設けられているらしい。わずかだが、確かに空気の流れを頼に感じる。

眼を開けていようとしまい、なにも変わらない。自分の指先すら見分けられないほどの、深い闇。星のない夜よりもさらに暗い。そんな状態では手を引いてくれる温もりだけが唯一の頼りとなる。一心に歩いているうちに、いつのまにか幼いころを思い出していたらしい。雪蘭に手をひかれて歩いた記憶が、生まれてから最初の鮮明な思い出だった。それ以前の記憶はひどく曖昧だ。おそらく自分で封じてしまったのだろう。

そういうしているうちに迂闊にも躓いてしまい、先を行く人の手を煩わせてしまった。

慌てて謝ったものの、動転してさらに足元がよろける。

背後から片腕がまわされ、体ごと抱きすくめられる。それが自分を転倒から守ってくれた結果だと分かっている。動揺が生じる。ずいぶん腕も胸板も逞しいということを感じつつ、そこに戸惑いが生じる。奥の宮で同性しか知らずに育った身には、異性がどういふものなのか実感としては分からないままだった。

「いや、かまわぬが。怪我はないか？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

こくこくと頷き、何度も足元を確かめてから立つと、ようやく解

放される。

このように立ち止っている場合でないことは、彼の気振りから察せられる。それなのに追想に耽っていた己の間抜けさに情けなくなる。

「足元には気を付けられよ　といつても、この暗闇では無理があるな」

「注意すればなんとか」

しばし考えこむような沈黙ののち、唐突にすぐそばにあるはずの気配が動いた。何事かと立ちすくんでいると、不意に足もとからすくわれた。

「っ」

ふわりと体が浮き上がる。それこそ事態が飲み込めず、目を白黒させる。おぶわれたのだと理解するのにしばしを要する。反射的に抗議しかけたが、苦笑いが機先を制された。

「非常時だ、非礼は許されよ。この暗がり故人目を気になさる必要はなかるう。体裁よりはまず命だ。今は堪えられよ」

「……はい」

不承不承でも頷くしかない。彼の言葉はもつともだ。そんなことは分かっている。わかつてはいても、そういう問題ではないと抗議したい部分もある。どんな状況であれ、こんな風におぶわれることがどれだけ恥ずかしいかなんてことは、彼には説明するだけ無駄なのだろう。

「……あの、でも、重くはないですか？」

「軽くはないな、人一人だ」

「……申し訳ありません」

むっとしながらも一応謝する。そこに潜む気色を察してか、彼は小さく笑った。

「だが、重くもないな。女性というのは案外軽いものなのだ。少々拍子抜けしたほどだ」

「　それほど重そうに見えていましたか？」

内心衝撃を受けつつ、なんとか持ちこたえる。王子の言葉に悪意はない。それだけにたちも悪い。

「そなたと同じくらい的身丈の少年ならばもつと重いな。女性を背負うのはこれがはじめてだ。故に見当のつけようがない。少年を目安にしていたが、やはり男と女では勝手が違うものらしい」

問題点が微妙にずれている気もするが、あくまで生真面目な様子に、憤慨するのまばかばかしくなってくる。第一、出会ったばかりの女官相手に、こんな会話をしている場合ではないはずだった。

実際、歩く速度も先ほどより格段に上がっている。上背はあるが、筋骨隆々というわけでもない。それでも息切れ一つない。体を鍛錬するということを知らない身にも、ひどく頼もしく思われる。

「ところで問うが、女官殿の名は？」

「え、あ……せ、雪蘭です」

とつさに問われても、従姉の名を騙るだけの分別はまだ残っていた。その答えに、彼がちらりと振り返る気配があった。

「蘭？ 王族か？」

しまったと一瞬思ったものの、考え直す。この先どうなるかわからないにせよ、青蘭と雪蘭が酷似していることは偽りようがない。その状況を利用するつもりなら、出自は下手に誤魔化さない方がいいかもしれない。

「王族の資格はありません。母が王族ではありませんので」

「だが、王家に連なるのであろう」

「父は先の王太子 現王陛下の兄であった紅桂でございます。母は東宮に仕える奴婢でした」

「……娘御がおられたか」

その口ぶりから、伯父の話が広く知られていることを感じ取り、青蘭はそつと息をついた。父がその兄を殺めたという風聞も、同じく広まっているのだろうか。

## 第1章 脱出 2

頬に冷たいものがはじけた。隧道に入ってから絶えず滴ってくる。最初のうちこそいちいち驚いていたが、もう慣れてしまった。髪も服も湿り気を帯び、わずかな肌寒ささえ覚える。

青蘭はそっと頬に残った滴を拭いた。

「しかし、そうなるこそなたは青蘭姫と従姉妹同士ということになるな」

父の噂を知ってか知らずか、彼はそのことに興味はないようだった。

「はい」

「親しくしておられるのか」

「姉妹のように育ちました」

「そうか」

彼はわずかに歩みを遅らせ、一言断って彼女を背負いなおす。

青蘭は思わず彼の服を強く握った。体がひどく強張っていることによくやく気付く。

「……ということは、少なくとも雪蘭殿はこの件とは無縁かも知れぬな」

「……え？」

低い呟きに、青蘭は口ごもる。独り言にしては大きく、話しかけられたにしては主旨が読めない。

「このような時にそなたに行動の自由を許したのは、そなたの身の潔白を明かすためかも知れぬ」

「……姫がかかわっておられると？」

声とともに身の内から冷えていく。それに気づかぬのか、彼は落ち着いた調子で続ける。

「仮定の一つだ。その逆も考えうる。姫ではなく、そなたが関与しているということもな。あのような状況で、何故あそこにいた。そ

れもまた考えようによつてはあやしいと云えよう」

「……」

「刺客が花嫁の一行のうちにまじっていたというのは確かだ。吾があそこにいたのは、その報告を受ける故だったからな。いつまで待っても手の者が来ぬと思えば、かわりにそなたが来た。報告が遅れていたのは先に刺客が動いた故だ。まあ、おいおい明らかになるう。それまではそなたの身の安全は保障する。無関係であればそれでよい」

無防備に背と後頸部をさらしながら、まったく頓着しない様子でそんなことを云う。もし彼の云うように自分がかかわっているとすれば、これほどの好機はないというのに。懐に刀子の一つでもしおばせておけばいい。髪にさしている簪一つでも、首筋を狙えば十分だ。

真意を読み取れないまま、声の震えを堪えて問う。

「そつでなければ？」

「利用価値があれば役に立ってもらう。そつでなければ、それはその時だ」

「……もし仰るように私がかかわっていたとすれば、この状況はまずいではありませんか？」

彼の肩にのせた手にわざと力をこめる。彼は振り返りもせず、小さく笑った。

「確かにそつだ。その場合は吾が甘かったということだ。だが、ここでそなたが吾に害をなさなかつたからといって、それがそなたの潔白の証となるわけでもない。なにか考えがあつて、今はあえて手を下さぬということもありうるからな」

「……つまるところなにをしてもしなくても、疑わしいということですね」

「そついうことになるな」

青蘭は小さく息をつく。抓ってやりたい衝動に駆られる。

「云わせていただければ、これは東葉の自作自演ということもありえ



ます。これを口実に一気に葉の統一をはかることも可能です。東葉は西葉の姫を手に入れたわけですから」

「肝が据わっているな」

その口ぶりは楽しそうだった。青蘭はそれにむっとする。

「疑い出せばきりがありません」

「確かにな　しかし、このようなことになって恐ろしくはないのか？」

「怖がってみたところでどうにもなりません。私も姫も潔白です。それだけは明白ですから」

「後ろめたいことはない故、恐れる必要もないか」

「はい」

憤りの勢いもあつてきつぱり断言すると、王太子は笑いだした。

「では、身の潔白のあかしをたててみよ」

「いいでしょう」

挑戦を受けてたつような気迫で云い返すと、さらに忍び笑いがかえってきた。一方的に青蘭が立腹しているだけで、彼は明らかに楽しんでる。それがさらに小憎らしさをおおる。

「頼もしいことだ　泣きわめいて手がかかるようなら置き去りにするのもやむを得なかったが、その調子ならば大丈夫だな」

言葉につられて顔を上げれば、うつすらと明かりが見える。それは外からのものではなく、焚かれる炎のものらしい。暗がりの果てに揺れる灯火は、日の光にも勝る。

「もうじき終わりだ。少しは落ち着いたか？」

「はい、おかげさまで」

当てつけるように云い返すと、また忍び笑いが伝わってきた。

掲げられた松明の炎はゆらゆらと揺らめく。やはりわずかながら空気の流れがあるらしい。

燈明が投げかける仄かだが確かな世界は、温もりを感じさせる。それは石壁が苔むし、絶えず天井より滴がしたたり、足元には水がたまる、冷え冷えとした環境であってはなおのことだ。

思わず明りに手をのばしたくなる。手をかざせば、不自然に強張った四肢の痛みも和らぐような気がする。そんな衝動を押し殺し、かわりに手が触れている衣を強く握りしめる。おぶつてくれる背は広く、支えてくれる腕は確かに温かい。

控えめだった足音が大きく響くにつれ、松明はより高く掲げられる。

暗闇だった世界に影が生じ、眩しさに目を細める。

松明を手に行っている人物を先頭に、その後ろにはうずくまる影がいくつかあった。王太子がその光の輪のなかに姿を晒すと、それまで明かりを掲げていた人物も素早く膝を折る。

「殿下、ご無事でしたか」

「ああ、この通りだ」

淡々とした返事に、その場に安堵感が満ちる。だが、じきにそこに困惑が生じた。青蘭はそれを敏感に悟る。無意識のうちに身をすくめると、王太子はわずかに振り返った。

無事に主が現れたはいいが、その背にかさばるお荷物までのせてくるとは誰も予想していなかったのだらう。しかもそれは女官で、衣装といえば西葉のもの。西葉に任務で赴いていた伺見（かきまみ・間者）だとしても、王太子の背におぶわれてくるはずもない。

「こちらは雪蘭殿　青蘭姫の従姉殿にあたられる。たまたま居合わせ、身の安全を図ったまでのこと。警戒するに及ばず」

ここで背より下ろされるかと思っていたが、彼はそんなそぶりを見せなかった。

落ち着いた物言いに、けれど彼らの戸惑いは消えない。ましてや国王を害した下手人のまじっていた花嫁御寮の血縁となれば、警戒するなという方が無理だ。

「しかし、殿下……」

「詮索はあとでいくらでもできよう。だが、今は一番肝要なのは何か。よく考えよ」

「はっ」

松明を掲げた男は浅く頭を下げると、次の瞬間には素早い身のこなしで立ち上がった。いた。

上背は王太子と同じくらい。髪の色もその顔立ちも平凡で、特にこれといった特徴もない。ただ、叩頭する途中で投げかけられた眼差しは印象的だった。眼光鋭いわけではないが、隙を見せればなにもかも見透かされそうな、油断を許さないものを秘めている。

「そちらのお方を」

「かまわぬ。このまま吾がおぶっていく。それよりも急げ。今は一刻を争う」

「しかし……」

さすがに王太子をこのままにもできないのだろう。食い下がろうとする従者の肩を押しつけ、無言のまま彼は歩き出す。膝についていた数人の男たちも慌てて立ち上がり、主の後を追う。

押しやられた従者は黙って主の先に立ち、松明をかざして歩き出す。

この成行きに青蘭は慌てた。

「あの、私なら歩けます」

「転んで怪我でもされれば、ゆくゆくは足手まといになる」

「けれど」

言い募ろうとしかけたところで、唐突に断りもなく背負いなおされた。その拍子に言葉を飲み込む。

「うるさくするならここに置いてゆく」

「……承知いたしました」

「それでよい」

彼はちらりとふりかえり、わずかに笑みをみせる。

ほのかな灯りのなかで見るそれは、嫌に印象的だった。とっさに目をそらし、青蘭は顔を伏せる。

「私は姫の身の潔白のあかしをたてねばなりませんから」

「やるべきことを心得ているなら生き延びねばな」

「はい」

素直に応じると、「なんだ、妙にしおらしいな」と小憎らしいこ  
とを呟く

肩につかまる指先に力を籠めて爪を立てると、彼はまた小さく笑  
った。

「補足」

伺見をあえて「かきまみ」としています。「うかみ」とすると忍者  
の別称になってしまうので、違う読み方にしました。典拠は古事記。

## 第1章 脱出 3

隧道はずいぶん長く続いてた。それまでとは一転して、王太子はほとんど口をひらかなかった。従者達も沈黙のまま先を急ぐ。

おとなしく身を預けた青蘭は、道を照らす男の後ろ姿が王太子のものに似ていることに気付く。同じ衣裳を身にまとっていれば、とっさに見分けることはできないだろう。彼の側近であり、時には身代わりをつとめることもあるのだろう。

自分と雪蘭の関係にもそういう側面がある。時々入れ替わるのはそのためでもある。双子のように似通っているからこそ、意識的に互いを演じる練習をする必要があった。

整然とした足音が後からついてくる。軍靴の重々しい音は、乱れること無く残響を引く。近衛の者達なのだろう。松明をかけた男の襟章は一本の大木をあらわすもので、西葉の近衛も同じ襟章を用いている。

沈黙と規則正しい足音と背のぬくもりに、いつのまにか微睡みにとらわれていた。

優しく揺すぶられていた。夢見心地のままうつすら目を開け、頬に微風を感じる。空気は黴臭いものではない。

寝呆け眼であたりを見回す。鬱蒼とした森らしく、木々の葉擦れが囁きかわしている。枝葉の彼方にぼつかりと口が開き、そこから月明かりが差し込んでいた。

今夜は半月。あえかな光に浮かび上がるのは、風化して崩れかけた石壁と男たち、そして落ち着きなく地面をかく馬たちだった。

男たちは静かに囁きかわしている。武装しているらしい。金属が触れ合う音もする。

「そろそろ起きていただこうか」

青蘭が身じろぎしたのに気付いたらしく、声がかかる。

「起きています。おろしてください」

彼は無言で膝をおった。その背から慌てておりようとして、足元がふらつく。長時間おぶわれていたせい、膝にうまく力が入らない。そのままぺたりと座り込んでしまう。

その気配に彼は立ちあがりながら、肩越しに振り返る。

「人並みに腰が抜けたか」

「足に力が入らなかっただけです」

きつい口調で言い返し、急いで立ち上がりかけたところを阻まれる。いつの間にか軽く肩を押さえこまれていた。睨みつけるようときくと顔を上げると、至近に王太子の顔があった。月明かりの影になって、その表情は見えなかったが、声は笑みを含んでいた。

「次は顔から着地されるおつもりかな」

「平気です」

「ほう、では、試してみられよ」

ぐいと両腕を掴まれて、無理に立たされる。そのまま支えてもらっていても、足元は不安定なままだった。いつの間にか、痺れてしまっていたらしい。

「このまま腕を放しても？」

そう云って、からかうように笑う。すっかり見透かされているらしい。青蘭は口惜しさに唇を噛み、ついつと顎をそびやかす。

「難儀している女性をからかうなど、いいご趣味とは思えませんけれど」

「おや、お困りでしたか？」

そう問いかける声は、あきらかにおもしろがっている。本気でその足を踏みつけてやりたかったが、不幸にも足を動かせる状況ではない。

彼はそんな心中などすっかりお見通しのように、いやにゆったりとかまえている。歯噛みしたいところだが、不利な状況は如何とし

がたく、俯いて渋々折れる。

「……う、腕をかしていただければ」

不本意ながらそう頼んだところに、馬が連れてこられた。

王太子は片手で青蘭を支えたまま、もう一方の手で馬の鼻面を軽く撫でてやり、従者から手綱を受けとる。

ぼかんと見上げる青蘭に、彼はいたって真面目な顔で告げた。

「この先は馬で行くのだが、雪蘭殿は徒歩で行かれるおつもりかな。その場合、あいにく腕を貸すことはかなわぬのだが」

「っ」

あくまで真顔で応対され、青蘭は一瞬戸惑う。返答につまづいてるところを、またもや不意に抱きあげられた。両腰をつかんで抱えあげられじたばたしかけたが、その出鼻をくじかれた。

「生憎これ以上からかっている余裕はない。おとなしく乗れ」

答える間もなく馬の背に押しやられ、横座りのままで鞍の端をつかんで辛うじて姿勢を保とうと努力している間に、軽々と彼も同じ背にまたがった。

「騎乗の経験は？」

「ありません」

「ではしっかり口を噤んで吾につかまっている。でなければ舌をかむぞ。その場合、遠慮なく捨てていく故な」

「！」

答える隙も与えず、彼は忠告だけすると馬の腹を蹴った。とたんに大きく揺さぶられ放り出されそうになる。見栄も体裁もなく、ともかく手近なものにしがみつくなかない。ただ必死に彼の服地を握りしめ、その胸に顔を伏せるようにしてともかく食いしばっているしかなかった。

気がつけば震動はおさまっていた。風を切る音も、髪がなぶられることもない。体中が石にでもなってしまうたかのように、ひどく

こわばっている。しがみついていた指先の感覚は鈍く、顔を上げようと少し体を動かしただけで、関節の一つ一つが軋るような、痛みとも違和感ともつかないものが生じる。思わず小さく息をのむと、ふっと体が解放される心地がした。それでようやく体を支えるように、背に腕が回されていることに気づく。同時にすべての記憶が蘇った。

こわばりを堪えつつ面を上げると、間近に見覚えのある顔があった。

「さすがに眠っていたわけではないようだな」

しげしげと真顔で観察した挙句の言葉に、青蘭はむっとした。騎乗は初めてかと問うておきながら、その言い草はないだろうと憤慨する。確かに云われたとおりに対処する他なかったわけで、初心者にとってそれがどういふことか彼は知っていたということになる。

「そ、そんな、よ、ゆうが、どこ、に……」

舌がもつれる。口惜しさとやりきれなさに思わず涙がにじむ。さつさと彼の服にしがみついている指をほどいて鞍から飛び降りたいところだが、体がいうことをきかない。思うに任せず、苛立ちと腹立たしさに歯噛みしたいところだが、指先一つ思うように動かない心も体も軋むようだ。

渾身の力で睨みつけることだけが、唯一できることだった。

いくら睨みつけたところで、半月の闇に阻まれる。それでも気迫は伝わったのか。そっと青蘭の頭に撫でるように手を添えた。

「悪かった」

自然と抱き寄せられる形になる。抵抗する気力もなく、なされるままに胸元に顔を寄せる。遠慮がちに髪を撫でる手つきはぎこちないが優しく、傍にいない従姉を想起させる。

そのまま涙が流れるままに身をまかす。泣きむせぶわけでもなく、ただ静かに落涙し続けている青蘭の気配に、彼はさすがに困っているようだった。

「……しばらくここで休憩をとる　馬から降りた方が楽ではない



か？」

子供をあやすような口ぶりに、青蘭は小さく頷く。彼は一言断つて先に馬から降り、それから青蘭を抱きおろした。

ちらりと見た月の高度は変化している。馬上で過ごした時間は短いものではなかったらしい。すっかり強張ってしまった体が悲鳴を上げる。膝どころか全身が不自然にこわばり、両足で立つことすら難しかった。それでも意地で立とうとしたが、彼は予想していたように青蘭を切り株に腰かけさせた。

「座るぐらいはできよう？」

「……はい」

案じる声に、青蘭は顔を上げることができなかった。

確かにこの騒動に自分は関与していない。自分が関与していない以上、雪蘭もかわってはいないはずだった。それでもこの事態にかわりはない。独身最後の夜だからと、雪蘭と入れ替わった己の軽拳を嫌悪する。

花嫁の一行のなかに暗殺者が混じっていたという。その当事者は青蘭であり、雪蘭ではない。けれどこうして入れ替わっている以上、雪蘭は青蘭の責を問われる。なにが起こっているのか。それを知るすべはない。ただ、己の行動が迂闊だったことだけは確かだ。

顔をあげられずにいると、ほどなくして目の前に湯気のたつ木の椀がさしだされた。

「薬湯だ。少しは気分が紛れよう」

「ありがとうございます……」

顔もあげず、拒みもせず、ただ機械的に応じれば、困惑する気配が伝わってきた。

両掌に受け取った温もりは確かなものだった。促されるままにすれば、甘く優しい香りがひろがる。それはじわじわと体中に浸透し、指先と唇から強張りが少しずつ解けていくようだった。

深々と息をつけば、わずかに安堵した空気が伝わってくる。

よつやっこの思いで顔を上げれば、心配そうな眼差しと正面から

ぶつかる。そうしてようやく、青蘭はもう一つの現実を思い出した。なにか云おうと乾き強張った唇を動かす前に、遅れてやってきた一騎があつた。

背や肩に幾本もの矢を受け、半死半生の態で王太子一向に追いついた彼がもたらしたのは、東葉王の死の報せだった。

## 第1章 脱出 4

息絶えたその人は、夜露にぬれた草のうえに横たえられていた。彼を取り囲むようにして膝をついた人々は、一様に押し黙っている。そのなかで王太子だけが立ちつくしていた。

枝葉の切れ間からさしこむ月明が蒼く照らす。

悼むように首を垂れて面を伏せる人々のなかで、佇む彼の顔だけがさらされている。

青蘭だけが、彼らから離れて見つめていた。王太子に座らされた切り株は、彼らから僅かばかり遠かった。

もたらされた報せの衝撃は大きく、それに続いた使者の死がさらに空気を重いものに変えた。

その間、青蘭を気にかけるものは一人としていなかった。ただ一人、文字通り他人事のように事態を見つめているしかない。自分が異分子でしかないことは分かっていた。

東葉王を手にかけた凶手は、西葉から来た花嫁の一行にまじっていた。西葉のものに違いないだろう。

彼らにとつて雪蘭を騙っている青蘭は西葉の人間で、よりもよつてその花嫁の従姉だという。しかも、実は従姉の雪蘭せつらんですらなく、花嫁たる青蘭姫当人だということは夢にも思わないだろう。この凶事をもたらした本人だと知られれば、いったいどんなことになるのか。

使者の体から抜かれた矢は八本だった。しかも矢柄は東葉のものだ。単に敵と間違われて射られたのか、それとも窮地を脱した王子の手のもの知った上で射かけられたのか。

王太子をはじめ彼らが、この事態をどこまで把握しているのかわからない。矢柄が自国のものだと分かった時の空気は、良いものはなかった。

死者を見つめる王太子の面は凍てついたように動かない。わずか

にひそめられた眉宇以外は、無表情といつてもよい。

彼らが悼んでいるのは、目の前の使者だけではない。その死と引き換えに伝えられた、もう一つの死。

彼らの王、東葉の王の死。

青蘭は引き結んだ唇の端から、そつと息を押し出す。この場では指先一つ動かすことすら躊躇われた。自分はここにいることを許される人間ではない。

ただ、凍りついたように息をつめ、けれど目をそらすことも許されない。

東葉の国王は王太子の父でもある。そんな当たり前の事実を、立ちつくす人の姿を見つめながら何度も反芻する。

彼は握り拳ひとつ作るでもなく、ただ静かに身じろぎ一つせず死に顔を見つめている

東葉の王と西葉の王は、対照的な君主だった。

東葉王は、若くして即位した頃から英邁な王との評判高かった。民衆の人気は篤く、その一方で果断な面もあり貴族や軍、官吏へ睨みを利かせることも忘れなかった。親しまれつつも恐れられる、そんな王だった。

そして、青蘭の父、西葉の王はまるつきり逆の支配者だった。

葉王家の血筋は、女系で受け継がれていく。

神の娘を始祖とするその血は、女を介してのみ伝わるとされる。

故に王族を母に持たなければ、たとえ父が国王であっても王族とはみなされない。

王位すら女を介して伝えられてきた。王族を母に持ち、さらに直系とされる葉王家の娘を娶ることによってようやく即位できる。

葉の国が二つに分かれたとき、西葉王家はその当時の女王を始祖に持ち、東葉王家は女王の弟からはじまる。

葉の再統一にあたり、血筋の面で正統性を持つのは間違いなく西葉王家だ。しかも東葉王家の“直系”には、何故か王女の産まれることはなかった。

一〇〇年以上に及ぶその時間のなかで、一人も王女が誕生しないことに、西葉はそれこそが動かぬ証左だとばかりに自国の正当性を声高に主張し、一方の東葉は民を育て、軍と官吏を律し、国を養い、国力を増すことで対抗してきた。

その結果が、二人の現王に結実したともいえる。

今や両国の民の暮らしには歴然たる差が生まれている。それがさらに憎しみを生んだとも言えるかもしれないが、それは西葉が怠惰に空費した一〇〇年のつけともいえる。

後宮で育った青蘭はそれを知らずにいた。

今回の婚儀にあたり機転を利かせてくれた雪蘭のおかげで、なにも知らないまま嫁ぐということは免れた。

雪蘭は父を亡くした七歳まで王宮の外で育った。その後も父と縁のあった者たちとの交流が絶えることはなく、それが功を奏した。

西葉の王位継承権を持つ青蘭の結婚にすら、国王は関心を示さなかった。その無関心をいいことに、雪蘭と青蘭は自分たちの思うままに支度を整えることができた。

それはただ単に西葉王女としてのものではなく、両葉王家で最も高貴な血を持つ、次期『葉』の女王としての矜持を示すためのものであった。

それは物質面だけでなく、主に青蘭とそのそばに仕える女官たちの教育に重きを置かれて行われた。それを王は知らない。

東葉は西葉の王女を王太子の妻として迎えることで、西葉の次期王位も手に入れたも同然だ。次代で、実質的に葉は統一される。西葉が東葉に併呑されるという形で、それを許すことはできない。だからこそ、青蘭も覚悟をきめて嫁いできた。

あらゆる面で東葉に劣る西葉の人々の、最後のよりどころは王家の正当性のみ。

西葉最後の王女として、そして新たな『葉』の女王として、青蘭には両国民を対等な同じ『葉の民』として結び付ける役目がある。

敗戦の降伏の証として嫁ぐのだとしても、それだけは忘れてはい

けないと、雪蘭は何度も繰り返してくれた。

そして、この現状。

未だに争いは続いていたのだ。

戦場のことなど、なにひとつ知らない。人の死にすらほとんど接したことはない。

戦も人の死も、長きにわたる祖国の争いの歴史も、どこか他人事のように遠くに感じられていた。

それでも、自分が嫁ぐことでそれらに終止符が打たれることに、ひそかな誇りすら感じていた。幼い頃から、王女という以外の価値を持たぬ役立たずと誇られ、嘲られてきた。そんな自分にしか果たせない役割があることが、正直にいえば嬉しくもあつた。

けれど、そんなことで終わらせられるものではないのか

東葉の王が死に、王太子が宮城を追われた。使者の話では王城も占拠されたという。それが誰の手によるものか、今のところ全く分かっていないようだった。

目星ならついているのかもしれないが、誰もそんな話はしようとなし。

さらなる混乱と争いを招くために、嫁いできたのだとすれば

王太子は死者の傍らに膝をついた。動くことのない胸元は濡れている。それが黒く見えるのは、衣の色なのか、それとも蒼い月光のためなのか。その濡らしているものが何なのか、青蘭にも分かっていない。

未だ乾ききらぬ血。顔や手など見える部分を汚していた血は拭われ、その死に顔は安らかにさえ見えた。

わずかに残っていたこめかみの汚れを、王太子は手袋を脱ぎ、その指先で拭った。それに誰かが声を詰まらせ、続いて押し殺した嗚咽が漏れた。

王太子は拭いとった指先をじっとみつめ、ようやく握り拳をつくり、それを額に押し当てるようにして面を伏せた。

その拳がわずかに震えていることを、青蘭だけが見取っていた。

ますますいたたまれない想いで、身を縮こまらせる。

両国の和平など笑止千万。自分がもたらしたのは新たな争いだけだった。

そして自分がその張本人たる青蘭姫だということを、ここで曝け出せるだけの勇気も持てない。

ただ小さくなって息をひそめていることしかできない。

しよせん、自分はその愚昧な王の子で、雪蘭とは違うのだ。

ぐつと唇をかみしめると、じわりといやな味が口内に広がる。

消えてしまいたいような想いで面を伏せる。

広がる血の味。それを吐き出すこともできず飲み下せば、吐き気ともなんともつかないいやなものがこみあげてくる。それを堪えていると、厳しい声がすべての空気を立ち切った。

「では出立する。皆、整えよ」

それにこたえる低い応えには、すでに揺らぎはない。整然と動き人々の気配に、それでも顔を上げることできない。

このままここに置き去りにされるとしても、いつそその方がいい。

「行くぞ」

声をかけられ、反射的に顔を上げる。そこには王太子その人がいた。厳しい顔をしているが、青蘭を咎めるいろも責める気色もない。ただ急がせる意志だけははっきりしていた。

「」

いいです、置いていってください、と。

そう応じようとした。けれど、干上がった喉を伝う空気は声にならず、わずかな痛みが走っただけだった。

その口元を見て、王太子は明らかに眉をひそめた。膝をつき、反射的に逃げようとした青蘭の顎をとらえ、手袋をはめた指先で唇をなぞる。

「ばかなことをする」

「……」

「そなたのせいではない」

「……」

いくら出そうとしても、声にならない。ぱくぱくとただいたずらに口を動かす青蘭に、彼はやれやれと苦笑しあやすように頭を撫でる。

それに振り払うこともできず、俯くことしかできない。涙をこらえると、ようやく喉の強張りが和らいできた。

「あの人は死んで、あなたのお父上も……」

「ああそうだ。だが、今は悼んでいる暇はない。二人の死を無駄にせずに済むことが、まずはすべきことだろう。それはそなたも同じことだ。行くぞ」

小さな頭を抱え寄せるようにして一瞬抱擁すると、次の瞬間には青蘭の細い腰に手をまわしひよいと肩に担ぎあげた。

「なっ」

衝撃で、すべての感情が一瞬遠ざかる。まるで荷物のように肩におわれて、青蘭はかっとなる。

「なにをなさるんですかっ!？」

「ぐずぐずしている暇ないと言っただろう」

じたばたする暇もなく、次には軽々と馬の背に乗せられる。結局ここまでと同じように王太子と同乗していくことになるらしい。

それを誰も咎めようとしなかったが、鋭い視線はいくつか感じた。それを確かめる勇氣は、青蘭にはない。

青蘭の後ろにまたがった王太子は、うつむく彼女の細い体を抱き寄せ、その耳元にそっと囁く。

「後ろめたいことがないなら堂々としていよ。吾らの間には一〇〇年の恨み辛みがある。青蘭姫に仕えるそなたがいちいち委縮しては、主の負担が増えるばかりだ。そなたが盾になれんで如何する」

「はい」

「今はそれで良い」

ぼんと軽く頭を叩く、その声は優しくかった。



## 第1章 脱出 5

二回目の休憩は月が傾くころだった。けれど暁は未だ遠い。森は果ての知れないほど広く深い。闇は見透かせず、森の天蓋の切れ間からさしこむ月影はしだいに薄れていく。

一行がたどる道は古いものようだった。敷石はあちこちめくれ、草木が芽吹いている。それでも倒木が行く手を塞ぐようなことはない。常に整備はなされているのだろう。むしろ道の荒れ具合には、意図的なものも感じられるほどだ。

古道のかたわらでの休憩では、火の焚かれることはなかった。

騎乗に慣れてきたとはいえ、一日二日でなんとかなるものでもない。青蘭は未だに騎手にしがみついているだけでせいっぱいだ。だが、一行や道の様子を眺める余裕も少しは出てきた。

それと反比例するように、ある場所に今まで感じたことのない違和感を覚えていた。

馬の背は飛び降りられない高さではない。だが、すっかり強張った体では、無様な着地で怪我をしかねない。

いい加減そうと悟っておとなしく騎手の腕に身をゆだねれば、見透かしたような含み笑いを隠そうとしないのでむっとする。反論すれば、どうせまた皮肉ともからかいともつかない言葉を返され、さらに不愉快な思いをするだけだと諦めた。

そつと降ろされる。今度は膝が砕けることもなく、自分の足で立つことができた。確認するように爪先立ち、とんと踵を下ろしてみる。膝から力が抜けることもない。安心してほつと肩を落とせば、ようやく体を支えていた腕が外された。

「少しは慣れたようだな」

「殿下のおかげでございます」

恭しく頭を垂れてみせれば、苦笑する気配が伝わってくる。

「いやに素直だな」

「しおらしく振舞わせていただいた方がよろしいかと」

顔をあげてにこりと笑ってみせると、王太子は一瞬眉をあげたが、じきに微苦笑した。

「その意気だ」

「はい」

今度こそ素直に頷くしかない。口惜しさがこみあげてくる。どうあっても相手の方が一枚上手らしい。妙な対抗心が芽生えてくる始末だ。

小さく頬を膨らませた青蘭の頭を軽く撫で、王太子は「ここで待つておれ」と声をかける。意図が分からず青蘭がきよとんと見上げると、一步踏み出したそこで立ち止まった。

「用をたすならあちらの繁みの奥がよかろう。道からあまり外れるな。誰も行かせぬ。気を使う必要はない」

「……わかりました」

他に云いようはないのかという非難をこめて眼を眇めたが、それは通じないらしい。訝しげに真顔で首をかしげられ、本気で蹴るか殴るかしたくなる。

言葉で諭したところで、逆に「ほう、それが女心というものなのか」などと妙に論点のずれた理解が得られればいいところだろう。だからといって、それがその後の彼の行動に反映されるかといえ、そのあたりの期待も薄い。いわゆる徒労という奴だ。

わざと大きくため息をつく、それをどう解したのか。彼はわざとわざそばに戻ってきて、また青蘭の頭をなでた。

「尿意が近いなら我慢する必要はない。暗がりか怖いならついていてやるるか」

「けっこうです」

ついてきたら殺してやる、という意思をこめて低く応じると、さすがにそれは伝わったようだった。

剣呑な空気を察した王太子はおとなしく去ってくれた。

それを確認し、青蘭はちらつと言われた繁みの方を見る。

お言葉に甘えたわけではないが、合理的な判断に基づいて繁みをかき分けていくことにした。

しばしのち。苦い思いで忠告のありがたみを噛みしめながら戻りつつ、青蘭は別の気がかりにとらわれていた。

生理的欲求を片づけ、不自然な体の強張りも解け、人心地取り戻しつつあるのと正比例するように、ある感覚が大きくなっていく。正直に言えば、歩くのも辛くなってきた。

王太子に云われたとおり馬のそばまで戻ったものの、そこに腰かける気にはなれない。しゃがみかけて先ほどのことを思い出し、諦める。木の幹に凭れることもできそうになく、所在なげに立っているしかない。

やはりここでも、他の者たちから少しばかり離れるかたちで置かれている。それはどちらか一方ではなく、両方のためなのだろう。

王太子でありながら、青蘭の身を他のものに委ねようとしなくても、そのためなのか。こうまで主の意思が明確である以上、誰も彼女を害するような真似はしないだろう。せいぜい慇懃に無視されるくらいのもので、それ以上の害が及ぶとはとは思えない。それすらも思いやってくれているのか。

そこまで考えて、青蘭はふうつと息をつく。

成り行き任せでここにいる自分とは違い、彼は意志と責任を持ってここにいる。そして、彼は先刻部下を亡くし、父の訃報を耳にしたばかりなのだ。

青蘭自身の肉親の情は薄い。父と兄がいるが、彼らはある種の記号に近い。そこに感情を伴う思いは存在しない。それはお互いさまのはずだ。だからといって、“肉親の情”まで分からないわけではない。

雪蘭が稀に両親について語る時、そこには必ず親子の情愛が感じられた。青蘭が似たような感情を抱くとすれば、それは雪蘭と乳母しかない。

気の弱い乳母は確かに頼りにはならなかったが、生まれてすぐに亡くしたわが子に向けられなかった情愛のすべてを青蘭に注いでくれた。そこに身分の差からくる遠慮が入ってしまうのは、しようのないことでもある。

雪蘭にいたっては云うまでもない。王太子に語ったように、姉妹同然だ。

英君と名高かった亡き東葉国王。

彼にとつてその存在は“父”だったのか、それとも“王”だったのか。ただ、彼もまたそんな王の跡継ぎにふさわしいと評されている。

あの拳のわずかな震えを思い出し、青蘭はうつむく。

その拍子に肩口を滑り落ちてきた髪が視界をさえぎる。無意識に手をやれば、結びあげていた髪はすっかり崩れていた。簪が残っているのが不思議なほどの乱れ具合だ。

そのまま探り当てるままに簪を抜き取り、すっかり髪を下ろしてしまう。流れ落ちてくる髪は鬱陶しいが、なぜかすつきりするような心地だった。

心に浮かぶのは、雪蘭のことばかり。青蘭姫として残ってきてしまった従姉。雪蘭が雪蘭として残っているのなら、彼女に害の及ぶ危険性は他の女官と大差ない。

けれど、雪蘭は青蘭として残っている。青蘭の安否がはつきりするまでは、彼女は西葉王女として振舞うだろう。

“青蘭姫”としての立場は、それだけで利害に左右される。葉王家直系王女としての立場に利を見出すものもあれば、それを障害とみなすものもある。その両方の可能性を青蘭も雪蘭もわきまえていく。

状況が分からない以上、青蘭にできることはその無事を祈ること

だけ。

そこへようやく王太子が戻ってきた。なにやら少なからぬ荷を手  
にしている。

悄然と佇む青蘭を訝しむこともなく、利き手で運んできた木の椀  
をさしだした。

「やはり尻が痛むか。これは鎮痛の効果がある。飲めば少しは楽に  
なるう」

「

お尻を撫でていたわけではない。ただ痛みをこらえて立っていた  
だけだ。それにも関らず見越したような言葉に、青蘭は無言で目を  
瞠った。

受け取ろうとしない彼女に、彼は眉をひそめる。

「騎乗に不慣れなら恥ずべきことではない。むしろよくここまで堪  
えたと、褒めてさしあげたいところだ」

「

痛むから座らぬのだろうか？」

青蘭は無表情で押し黙る。それ以外に対処のしようがない。

王太子はそんな彼女に首を傾げると、あろうことが確認するよう  
に手を伸ばしてきた。臀部に触れようと。

「

不快な音が響いた。

青蘭は自分の行動に驚いて凍りつく。音源は王太子の頬で、それ  
を張り飛ばしたのは己の手だった。

さすがに周囲も凍りつく。

一瞬の沈黙ののち、殺気がみなぎる。静かな波を感じたのか、王  
太子は片手をあげてそれを制し、振り返りもしなかった。

「やはり痛むのだな」

「

飲め」

ぐいと手元に押し付けられる。固まって受け取ることができない。

無言のままいたずらに瞬かせる。

そんな様子を見極めると、彼はふつと苦笑ともなんとなくつかないやわらかな笑みを浮かべた。

唇に器の縁が押し当てられる。少しずつ流し込まれるそれをようやく嚙下し、青蘭はむせた。

「悪いが体裁を取り繕っている余裕はないのだ　たとえそなたが女性でもな」

咳きこみ苦しげに丸めた背を撫でる手に、詫びる気色はない。

まっすぐに見据えられ、声を出せないまま、青蘭は小さくうなずいた。

今は非常時なのだ。それだけは肝に銘じなくてはならず、この場の判断を下せるだけの経験も根拠も持たない。選べるのは彼を頼りとするかしないかということだけだ。

苦しく咳きこむ背を、優しく撫でてくれる手がある。

青蘭は息苦しさに涙を浮かべながらも、むせはなかなかおさまらず。それでも詫びるようにそっと張り飛ばした頬に触れた。

「見かけによらず怪力の持ち主のようだな。痣になったらどうしてくれる」

「……」

乾いた唇が言葉を刻む。それを見届け、彼はふつと眼尻を下げた。「この期に及んでも男を張り飛ばすほどの気概があるなら頼もしい限りだ」

「非は殿下にあります」

どんな理由であれ尻を撫でようとするなど、言語道断。たとえそれが案じる故だとしても、許せることではない。その理屈が通る相手かどうかは別として、青蘭はきっぱりと言いつつ切った。

「……そのようだな」

彼はさも痛そうに頬をさすり、悪びれる様子もなく笑ってみせた。

青蘭はむつとしながら、その一方でほつとしていた。確かに彼は温厚な性分らしい。よくよく考えるまでもなく、今の青蘭は王女で

はなく一介の女官にすぎない。それにもかかわらず、手を上げられても声一つ荒げるわけでもない。これが兄の蒼杞ならば、今頃青蘭の命はないだろう。

それどころか、どこまでも青蘭を気遣ってくれる。西葉まで届いていた王太子の評判はだてではないのだ。それなのに、肝心なところで無神経なのはどいうわけなのだろう。

反省するようすのない王太子に、青蘭は小さくため息をつく。

諦めるしかないかと肩を落としたところに、一式の衣類を押し付けられる。戸惑いつつ見れば、それは東葉の軍服だった。

## 第1章 脱出 6

とつさに受け取ったそれは、ずしりと重かった。黒の服地とその縁取りが、あえかな月光にかすかに光る。

目を凝らしてみれば、それは銀色だった。銀なら東葉、金なら西葉のもの。他にもいくつか大きな違いはあるかもしれないが、暗がりでもなおかつ畳まれた状態で見分けるには、手掛かりはそれくらいしかない。

手にしたものの、どういふことが分からず顔を上げる。

王太子はさらについてきた従者から靴も受け取った。その顔から先ほどの笑みは消え、落ち着いた冷徹さが戻っている。

「それに着替えていただこう。もうじき夜が明ける。女官姿の連れがあつては目立つ」

「はい」

青蘭は素直に首肯した。どちらの国の軍にも女性はいない。つまるところ男装ということになり、抵抗感がないわけではない。けれど今は非常時であり、王太子の指示に従うと決めたのは青蘭自身だ。王族の衣装と女官のそれを比較するまでもないが、あたりが明るくなれば目立つに違いない。

「一人で着替えられるか？」

「たぶん、できます」

基本的な形に両国ともに大きな違いはない。ここには他に同性はいない。なんとか自力で着るしかない。ただの姫君育ちならそれすら難しいだろう。何度も入れ替わってきたおかげで、たいていのことは一人でもできる。それをあらためてありがたく思いながら、青蘭は服と軍靴を手に繁みの奥に身を隠した。

男ものが身の丈にあうとは思っていなかったが、着替えてみれば



さほど不恰好でもなかった。ただし靴は大きかったので、紐をきつく締めた。

脱いだ女官の服は畳んで下生えの雑草の奥に押しこむ。その形跡を念入りに誤魔化す。多少のことでは見つからないはずだと確認し、一行のもとへ戻った。

身なりを一変させて戻った青蘭を、王太子は検分するように眺め、数ヶ所直させると納得したように頷いた。

「近習見習いの予備だが、大きすぎることもなかったようだな  
まあ、それらしく見えないわけでもない、か。少々可愛らしすぎる  
きらいもあるが、これまでこういう見習いがいなかったわけでもなし、な」

最後の言葉は背後に控える近衛たちに向けられたものらしく、忍び笑いが広がる。それを青蘭は少し意外な思いでみる。

王太子が生真面目な性格だということは評判でも耳にしていたし、短い時間だが、これまでの出来事で、多少なりとも自分の目でも確かめた。もっとと臣下を厳しく律しているような印象があった。それはあくまで思い込みに過ぎなかったらしい。

皆、一応一歩下がって控えてはいるが、青蘭の男装姿には興味津々らしく、遠慮なく不躙な視線を向けてくる。これまでそんな目に曝されたことのない青蘭は、むっとしつつもいちいち睨みかえす気にもなれず、無表情を装っていた。

よくよく考えれば、これまでの青蘭に対する王太子の態度は、この臣下たちと共通するものがある。正しくこの主にしてこの臣下あり、だ。

「無理をして男装しているようには見えんな。一応、見習坊やに見えんでもない。安心せよ」

「……はあ」

男装ではなく男に見えると云われて素直に安心して良いものか。

青蘭は複雑な心境で、それでもひとまず応じる。気のないその声に、王太子は訝しむように眉を上げる。

「女に見えるようでは意味がなかつた。なにが不服だ」

「男装しているからといって、女には見えないといわれて喜ぶ女がいるとも思っているのか。腹を立てるのも馬鹿らしくなり、かといつてまともに受け答えする気にもなれず。」

青蘭はわざと大きなため息をつき、それから毅然と顔をあげた。

「ともかく、先を急ぎましょう」

「ああ、そうだな」

突然、余興の終わりを告げられて、珍しく王太子の方が気圧されたようだった。それでも圧倒した気にもなれず、青蘭はなんとも情けない気分ですべてを落とした。

依然、古道は森のなかに続いている。それでも森閑とした暗がりには徐々に薄れはじめ、ようやく長い夜が明けようとしている。

一行は行程を稼いでいるようだが、どこへ向かっているのか分からない。青蘭にはそれが順調なのかどうなのか判断のしようはない。騎乗する前に、腰当てと称するものを王太子から渡された。毛皮を柔らかくぬめたもので、腰から下げて文字通り臀部を守るものらしい。そのあまりに実用的な形状に、青蘭はさすがに言葉を失った。それはいかにも股から臀部にかけて守るといふ使用目的に、これ以上なく適しているように思われる。

王太子はいかにも真面目で、青蘭の身を慮ってくれていることはその表情から知れた。実際、鎮痛剤を用いても痛みはじくじくと続いていて、腰当ての必要性は身をもって理解している。

それにしても、それにしても、だ。

王太子その人から、その装備の仕方を伝授される青蘭を見守る近衛たちの視線は、どう考えても彼女に同情的だった。

この場にいる誰も、まさか男装の麗人その人が、王太子の妻とな

るはずだった王女だとは思ってもいない。そう仕向けたのは青蘭自身だが、その“青蘭姫”と従姉妹同士だということは知らせているわけだ。血縁が近ければ、そこに妻となるはずだった女性の面影を重ねてみたりはしないものだろうか。

確実に女扱いされていけないことに、青蘭は複雑な思いだ。

もし、これが雪蘭と立場が逆だったならば 本当に自分が雪蘭で、雪蘭が青蘭だったなら、この王太子をこの上なく大切な従姉の夫として認められるだろうか。

認めるも認めないも、問答無用の結婚には違いない。それでも、こうして人となりを知る機会を得れば、考えてしまう。

相性の問題なのか、彼とのやり取りはむっとすることが多すぎる。一晩だけの短いかわり、もう何度そんな思いをしたか数えたくもないほどだ。

それでも、雪蘭の“予感”が外れているとは思えない。そう思わせないものを、彼は確かに持っている。

こんな事態が起こらなければ、今日という日に青蘭は彼の妻となっていたはずだった。それはそれで悪くはなかったかもしれないが、もはやこうなってしまうては過去の話だ。

「夜が明けてきたな」

振り落とされようにすっかりしがみついているので、さほど大きな声を出さなくても話は通じる。それでも耳元で風が切れる。

「はい」

「どこへ向かっているのか訊かぬのだな」

「きかない方がよいかと」

ためらいなく答えると、青蘭の体を支える腕がぴくりと動いた。

「何故に」

「知らなければ答えようがありませんから」

今の青蘭に分かることは何一つない。それならば、事態が明確になるまで、いつそ何も知らずにいた方がよいかもしれない。

この先一人脱落し、万が一王太子と敵対する方の手に落ちること

になつたとしても、なにも知らなければ彼らを窮地に陥れようはない。

逆にいずれ明らかになる事態が、青蘭と王太子の立場を敵対させるものであつたなら、敵方との関わりは最小限にとどめておいた方が無難だ。

王太子はふつと小さく息をつく。

ちらりと目を上げれば、何とも微妙な形容しがたい笑みを浮かべている。まだ森は続き、暁はここまで届かない。ほの暗さの残る朝のなか、その顔はひどく険しいものだつた。それと同時に、あの真鍮の絵姿に偽りはなかつたのだと呑気な感慨を抱く。

「そなたは、なにをどこまで知っている？」

「先に云わせていただきますが、私と姫はこの事態にはなんのかわりもありません」

「それは承知している。それ以外のことだ」  
「必要だと思われることを」

できるだけ表情を殺し、まっすぐに王太子の横顔を見据える。その視線を予想していたように、彼も冷やかな一瞥を寄こした。

「それは姫も同じか」

「はい」

一瞬、視線が交叉する。

目を眇めれば、彼は口の端をわずかにつり上げた。

「小憎らしい顔をする　頼もしい限りだがな」

「」

言葉を返そうとしたとき、急に強い力で抱き寄せられた。何事かと視線をめぐらせば、他の者たちも一齐に手綱を引いて馬を止めようとしている。驚いて前を見れば、ゆるやかな弧を描く古道の行く手に、武装した東葉軍の姿があつた。

急に静止させられ、いきりたつ愛馬の首筋を叩いてやりながら、彼は低く呟いた。

「ようやくのお出ましか　」

言葉と同時に浮かんだ酷薄な微笑に、青蘭はびくりと体を震わせ  
る。

「吾に任せておけ」

彼はそう囁くと、青蘭の頭をぽんと軽く叩いた。

## 第1章 脱出 7

薄明とともに靄がたちこめる。

日が昇ってもなお仄暗い森の陰は白くかすみ、その先行きの不透明さがますます不安をあおる。

石畳がところどころはがれ、灌木が枝を伸ばし、上からも鬱蒼と古木が枝葉をしげらせる。そんな道の先に現れた一行は、道が細く見通しも悪いためその人数を計ることができない。

東葉（とうは）の軍であれば安堵してもいいはずだが、王太子のようすから青蘭（せいらん）は警戒心をとくことができなかつた。

ぎゅっと彼の衣の端を握ると、さり気ない動きで下ろしていた外套の頭巾を被らされた。

夜明けとともに軍服を着用しても鞍に横座りしては意味がないと諭され、青蘭はしぶしぶ馬の背にまたがることを承知した。背後からしつかり王太子が支えてくれる分、体の安定はとりやすい。正直にいえばこれまでよりずいぶん楽になった。

「……？」

青蘭は強引に頭巾を目深にかぶらされ、その影からつかがつように顔を上げる。彼は片手でその頭を押さえこむ。

「あまり顔を上げるな」

「はい」

状況はどうであれ、面をさらさない方がいいのだろう。もしこのまま穏便に騒乱が終息するとしても、王太子妃となるはずの姫とそっくりな　　というかその当人なのだが　　顔を知られずにすむことしたことはない。

一行のなかには他にも頭巾を被っている者もいる。特に青蘭だけが目立つわけではないが、他に二人乗りをしているものはいない。ましてや王太子に同乗させてもらっているとすれば、それだけでも十分目を引く。

少しだけ頭巾をあげ、成り行きを見守る。不安でしようがないが、王太子自らがそれを見越したように任せるといつてくれたのだから、最悪の状況ではないのかもしれない。

皺になるほどきつく外套の端を握りしめる青蘭に、王太子はにやりと口の端を持ち上げてみせる。むっとして頭巾の影から睨みかえすと、ぽんと頭を叩かれた。

「吾を信じられるか？」

その問いの意図が読めず、青蘭はついつい振り返ってしまふ。

そうしつつも、片方の耳には待ちかまえていた一行と、こちら側の誰かのやりとりが聞こえる。その声は、あの隧道で松明を掲げていた男のものらしい。

王太子は注意深くそのやりとりを見守っている。頭に置かれた手は重く、指先にわずかだが力がこもっている。

彼はなにをどこまで把握し、なにを予測できずにいるのか。

青蘭は既知の情報を思いめぐらせる。

この状況で彼がもつとも恐れる事態はどんなものか。西葉さいはより国力のある東葉とはいえ、問題がないわけではない。けれど、この騒乱の経緯のいつさいがわからない青蘭には見当もつかなかった。

万能の人間などいない。なにもかも知る存在があるとすれば、それは神だけだ。

彼は自分のなにを信じられるかと問うているのか。そして青蘭は彼のなにを信じられると判断すべきなのか。

じつと端正な横顔を見つめる。厳しく引き結ばれた口元、まっすぐで冷徹な眼差し。その面を振り返ってみる臣下はいない。

息をつめて答えられずにいると、視線だけが青蘭に向けられる。それは返答を急かすものではないが、なにかを探るようなものだった。

青蘭は笑ってみせる。少し強気に見えるように、厭味ったらしく口の端を歪めてみせた。

「弱気ですか？」

「　　どうか」

王太子はかすかに眉をあげ、次いで微苦笑した。やり込められてばかりだった分、少しは胸がすく。

青蘭はにこりと頬をゆるめる。そうすると柔らかな印象が強まり、幼く見えることを青蘭は自覚していない。王太子はわずかに目を細める。

問われるまでもない。もう決めたことだ。

「信じます　だから、大丈夫ですよ」

「……説得力に欠ける根拠だな」

「それをどうなさるかは殿下次第です」

「確かにそうだ」

乱暴に青蘭の頭を撫でると、彼はまた先ほどまでの油断のない表情に戻る。

同時に青蘭の不安もいつの間にか和らいでいた。彼の衣の端を握る力に変わりはないが、それは縋るためではなく、共に闘うような心地へと変わっていた。

王太子と青蘭は一行のほぼ最後尾にいる。後ろには三騎が控えているだけで、あとは前方の一隊を警戒するように全神経をそちらへ向けている。

両者の中間位置でのやりとりはじきにすんだ。戻ってきた近衛の一人は、そのまま王太子のもとへ報告にやってきた。

「昨夜、王城より有事を知らせる狼煙があがったそうです。苓公殿れい下も王城脱出を果たしこちらへ向かっておられるそうです」

「わかった。では、予定通りこのまま向かう」

「はっ」

彼は浅く一礼し、さっと踵を返した。自分の馬に跨ると、その背から檄を飛ばす。

前方の一隊は馬首を返し、王太子の先鋒をつとめるように進みは



じめた。一行もその後が続く。王太子も馬の腹を軽く蹴った。  
「彼らは？」

「この地方の守備隊だ　　苓公配下の、な」

苓公という称号に、青蘭も聞き覚えがあった。

王太子の従兄、葉明柊<sup>よめいしやう</sup>。

苓家出身の女が乳母役をつとめているため、苓公とも称される。

ごくごく近い者以外は称号で呼ぶのが習わしだ。守備隊が彼の配下だということは、このあたりは苓家の領地なのだろう。

「というわけで、吾らが向かっているのは王都の南西、苓南<sup>れいなん</sup>の砦だ」  
まるで心中を見透かされていたような言葉の捕捉に、青蘭は頭巾の影でちろりと舌を出す。

大雑把な東葉の地図は頭に入っているが、そこに張り巡らされた道の全てを把握しているわけではない。ましてやこの古道は表向きの地図にはないものだろう。

「苓公もご無事でよろしゅうございましたね」

「ああ、そうだな」

穏やかに尋ねると、平板な声が返ってくる。ちらりと振り返れば、その面は無表情だった。

葉明柊は王太子と最も近い血縁のはずだ。

彼等の両親はともに兄弟姉妹で、よって明柊は王太子に次いで王位に近い。が、まだ王族の女性を妻に迎えていないため、王位継承権の条件は整っていない。

王太子自身も先の西葉との戦の後、葉家直系の青蘭との婚約が正式に整うまで立太子できずにいた。東葉であつても即位するためには、女性王族との婚姻は切り離せない。

ただ、現国王の第一嫡出男子は出生と同時に東宮の称号を得る。

東葉ではそれは即ち王太子の別称とも見なされる暗黙の了解があり、それが西葉王家との一番の違いだ。

「吾の身になにかあれば、次に青蘭姫の夫となるのは明柊だ」

「そうですね」

青蘭は東葉に嫁ぐのであって、それがこの王太子であると定められていたわけではない。

このような事態が起こらず、無事に婚儀を終えていたとしても、先々寡婦となるようなことがあれば、その時は次の王位に近い者と再婚することになる。

「そして、青蘭さまになにかあれば、青蘭さまの兄上が西葉の王位を継ぐことになります」

青蘭の兄、西葉東宮蒼杞は従妹を娶り、すでに一女も儲けている。この従妹も直系王族で、青蘭に次ぐ王位継承権を保持している。蒼杞はその妻の夫として西葉国王となる権利を得ている。

“青蘭姫”として残してきてしまった、雪蘭の身が案じられる一番の理由がそれだった。東葉国王を害し、その混乱に乗じて“青蘭姫”も排除して、一番利を得るのは兄。

そのため奥の宮で青蘭に仕える女官は、身元のしつかりしたごく少数に限られてきた。この度の嫁入りではそういうわけにいかず、急遽多数の女官を採用した。青蘭と雪蘭が頻繁に入れ替わっていたのも、危険を避けてのことだった。

二人が双子の如く似通っていることを知るのは、奥の宮から仕えてきた数人のみ。青蘭姫は常に紗の覆いで顔を隠しているので、身近に仕える者もその素顔を見ることはできない。女官長と姫、この二人が頻繁に入れ替わっていても、そのことに気づくものはいなかった。

「そうなればまた両国の対立が続く」

「はい」

「吾はそれを防ぎたいのだ」

「そのための婚儀です」

けれどそれは相手が明柊であっても叶えられる。それを承知で、

青蘭は明言した。

「明柊にその意志はない」

「その根拠は？」

雪蘭は青蘭姫と姉妹同然に育った。そんな彼女に敵手への悪印象を植え付けておくのも一手には違いないが、王太子の人となりにその方法はそぐわない気がする。

「いや、失言だ　今はまだな」

「まだ、とは？」

「判明する時がこなければいいということだ」

なにかを含んだ声音だった。それ以上言葉を継ぐ気配はない。そのかわり、ずり上がっていた青蘭の頭巾を引き下ろす。その手つきは乱暴だった。

彼は、従兄への明言できない懷疑を抱いているということなのだろうか。

青蘭は抗議するように彼の手を振り払い、小さな声で云い添えた。

「　　姫も同じことを望んでおられます」

「……それはよかった」

心底ほっとしたような呟きだった。意外なほどの素直な感情の発露に、青蘭は思わず振り返ろうとした。その頭をまた背後から乱暴に抑え込まれる。

「きよるきよるするな」

「　　照れておられるんですね」

「気のせいだ」

無然とした声に、青蘭は忍び笑いを殺せない。しばらく笑い続けていると、咎めるように頭巾の上から軽く頭をはたかれた。

## 第2章 砦 1

目が覚めてみれば、あたりはすっかり暗闇に包まれていた。

横になり、眠っていたらしい。寝具はこれまでに使ったことがないほど粗末なもので、かすかに黴臭い。敷布団も薄いものらしく、寝返りを打とうとしただけで体中がきしんだ。

少なくとも室内にいることは確からしい。風の吹き抜ける音がする。それにつられて見上げれば、高いところの窓が開いていた。その向こうに半月が見える。窓に格子ははまっていない。

ゆっくりと起き上がる。あえかな月明かりに次第に目が慣れてくる。

そこは石造りの一室で、簡素な作りの机と椅子、それに寝台が設えてあるだけだった。寝台のそばにも小さな円卓が置かれ、その上に見覚えのある衣類が畳んであった。

視界に寝台がうつるということは、確かめてみるまでもなく床に直接寝かされていた。敷いているものは薄く、これでは体中が悲鳴をあげても仕方ない。

ゆっくり起き上がれば、思わず呻いてしまう。

「ここは……？」

上半身を起こし、暗がり透过して手がかりを探す。それと同時にゆっくりと記憶が蘇る。

昨夜からの一連の出来事を思い返す。夕暮れの思いがけない邂逅。それからの長い夜。そして夜明けに守備隊と合流し、砦に向かったはずだった。記憶はそこで途切れている。ということは、そのまま馬上で眠ってしまったのだろう。

どれくらいの間、その状態が続いたのか知りようはないが、王太子にひどく迷惑をかけてしまったことだけは確実だろう。結局、今の今まで熟睡していたわけだから、自分の図太さには呆れてしまう。こうして目覚めた場所は、砦の一室なのだろう。それにしても、

何故、床で眠らされていたのか。空いた寝台があるのにそれを使わせてもらえなかったということは、そこには別の主がいるということになる。

誰も青蘭せいらんの正体を知らずとも、王太子と近衛に限れば彼女が女性であると承知している。女官に過ぎないとはいえ、女性を床に転がしておくなどどういう見なのか。

抗議したくとも誰もいない。仕方なく起き上がる。

さつさと延べられた寝具をたたみ、思案した末に寝台の下の隙間に押し込む。調べてみれば掃除は行き届いているようで、寝台の下にも埃一つなかった。

小卓の上の外套は、青蘭に支給されたものだった。皆内でこれがあるかどうか分からないが、とりあえず羽織って身支度を整える。

一連の動作を手早くすませ、青蘭は小さく息をつく。

うるたえる前に出来ることをすませてしまえるのは、雪蘭せつらんのおかげだ。

はじめて毒殺されかけたのは、一〇歳の時。

十日近く生死の境をさまよった末に命は取り留めたものの、すっかり快復するには半年ほどかかった。

青蘭に毒をもったのは傍仕えの女官で、毒見のすんだ食事に巧みに毒を仕込ませた。彼女は引責という形で自害した。ことを怪しんだ雪蘭が亡き父の知己を通して調べた結果、彼女には兄の息がかかっていたことが判明した。

兄蒼杞そうきはその頃、従妹との婚約がととのったばかりだった。青蘭より数か月遅く生まれた従妹も直系王族で、青蘭に次ぐ王位継承権保持者だ。その当時、兄は一三歳。

暗殺未遂は彼自身の意図によるものか、それとも近しい何者かが仕組んだものなのか。

青蘭の不調は表向き食当たりとされ、調査などいっさいされなかった。この先も真相が明らかにされることはないだろうし、青蘭も兄の真意など知りたくもない。

ようやく快復した青蘭に、雪蘭は入替りをそそのかした。

それは最初のうちは周囲のものたちをからかう意図で、一種の遊びとしてはじまった。

誰も気づかないことがおかしく、また、それまで知らなかった解放感を味わうことができた。新しい遊戯を青蘭がいたく気に入ったとわかると、雪蘭は本格的な替え玉を提案した。思いがけず女官としての生活を知る機会を得た青蘭は、素直にそれを楽しんでいた。

雪蘭の本当の意図を察したのは、入れ替わっているときに彼女が倒れた時だった。

いつも使っている香に、無臭の毒物が混入していた。その時雪蘭にふんしていた青蘭は室内におらず、香炉のもっとも近くにいた一人の女官が落命した。素早く異常を察した雪蘭の機転でそれ以上の被害者を出さずにすんだが、雪蘭自身も数日寝込んだ。

そのような事態に至ってはじめて、青蘭はようやく理解した。従姉の、この己の命を危険にさらすような真似を、青蘭は強く詰ったけれど、同時にその意味をすでに理解してもいた。

兄の冷酷な人となりにつつまれる逸話は、いくつも耳に届いていた。青蘭になにかあれば、王位は兄にわたる。彼がよい為政者になるとは考えられなかった。優れていなくともいいが、殺人鬼に大権を与えるわけにはいかない。

閉ざされた奥の宮に育ったとはいえ、青蘭はその向こうに広がる世界に無知だったわけではない。雪蘭を通して様々なことを知っていた。

そのおかげでこのような事態に巻き込まれても、とりあえず落ち着いていられる。

俯くと髪がこぼれかかってくる。まとめておいたはずの髪が、解かれている。誰かがほどこしてくれたのか、それとも眠っているうちに解けたのか。髪をまとめるにも適当なものがない。仕方なく耳にかける。

ついでに頭巾を目深にかぶり、扉を押してみる。鍵はかかっている。

ない。閉じ込められているわけではないらしい。それだけ確認すると、今度は椅子を踏み台にして窓から外をのぞいてみた。もう少し上背があれば十分のぞけるのだが、青蘭には空しか見えない。

高い塔の一室だとわかった。山の背をのぞむ森のなかに設けられた砦には、いくつも尖塔がある。ここはそのうちの一つで、のぞいている風景がどちらの方角なのかは分からない。

かそけき月明かりを受ける世界は青い闇に沈み、地形を見分けることは難しい。人の営みを思わせる灯りは見当たらない。

記憶の地図を頼れば、苓南<sup>れいなん</sup>の砦は、山の背と呼ばれる、葉<sup>よう</sup>を東西に分ける長大な山脈にいくつかある山越え道を見張るために設けられたものだ。築城は葉が分裂してからで、詳細な情報はない。

夜が明けなければ、確かな手掛かりは得られそうにない。

青蘭は椅子からおりと、そのまま腰かけた。

女官にすぎないとはいえ、青蘭の騙<sup>かた</sup>った雪蘭<sup>せいは</sup>は西葉<sup>さいは</sup>の王族の血縁だ。西国の婚姻は未然に終わり、東葉<sup>とうは</sup>の王を手にかけてのはおそらく西葉の刺客。それを承知で監禁しておかないというのは、どういう見なのか。

たかが女官と侮られているのか。それはありえないだろう。あの王太子がそこまでお人よしとは思えない。

王城は落ちたとはいえ、ここはまだ王太子にとっては味方の砦。だが、守備隊と合流した時、彼は青蘭に身分を隠すように指図した。事態が見極められるまでは、何事も隠しておいた方がいいという判断なのだろうか。

ということとは、青蘭自身も実は西葉王女だということを明かすのも、よくよく思案した方が良いのだろう。

「動きづらい」

声にせず、小さく呟く。そうすることで、こみあげてくるどうしようもない不安を誤魔化す。

王太子はどこへ行ったのか。この部屋から出ていいのか、じっとしているべきなのか。下手にうろろろすれば、近衛以外の砦の守備

兵にいらぬ疑念を抱かせる恐れもある。

そういえば、ここは男所帯なのだ。そこに女性が一人まぎれこんでいれば、どういうことになるか。考えが及ばないわけではない。ただ、実感が伴わない。男性とほとんど接することなかった奥の宮育ちでは、どうしようもない。

そこでようやく、何故、王太子が青蘭に男の振りをし続けるよう促したのか分かったような気がした。

「気をつけなければ」

知識だけでは用心の及ばない部分がある。ましてや女のみの閉ざされた世界育ちの青蘭にとって、男ばかりの軍の暮らしなど想像もつかない。なるべく目立たないようにしておくにこしたことはないのだろう。

机に突っ伏す。また眠気がとろとろと忍び寄ってくる。それに身を任そうかと迷っていると、ごくごく控えめに扉が叩かれた。



## 第2章 砦 2

机の上には蜜蝋に灯りが点された。温かな光が室内を照らす。

頭巾を下ろし、面をあらわにした少女の口元には笑みが浮かんでいる。二重の目はなにやら嬉しげに輝き、白い顔を縁取る髪も艶やかに波打つ。疲労の影は未だ抜けきらないが、生気の戻った顔はそれだけで十分に愛らしく見える。

湯気の立つスープと麺麭を前に、青蘭せいらんのおながが大きくなった。

そういえば昨夜からほとんどなにも口にしていなかったことを思い出す。

「冷めないうちにどうぞ」

それをここまで運んできてくれた男は、短く促す。

「はい」

木の器に手をのばしながら、机の傍らで壁に凭れる男をちらりと見上げる。

彼はあの隧道で松明を掲げ、守備隊とのやりとりも任されていた人物だった。無駄のない黒の軍服は、彼の引き締まった体つきを明らかにする。巨軀ではないが、長身を活かしたしなやかな動きを想像させる。

無造作にまとめられた髪や、いつもなにやら考えこんでいるような風情、さりげない仕草の一つ一つ、それらすべての印象がある人物と重なる。意識していなければ身につけようのないことばかりだ。特に印象を残さない地味な顔立ちが、その狙いをさらに高めるのだろう。

「なにか？」

ちらちらと向けられる視線に、彼は穏やかに問いを返してきた。

青蘭はこくとスープを一口飲むと、そのまま顔を上げる。向けられる眼差しはやわらかい。昨夜はやけに油断ならないものを感じさせられたが、あれは気のせいだったのか。

「失礼ですが、あなたは？」

「さんりょうりん 蕨綾霖と申します、せつらん 雪蘭殿。王太子殿下のめのい乳母子にして、東宮近衛中将を拜命しております」

その声もまた柔和。壁にもたれたまま姿勢を正さないのは、雪蘭が王族ではないと知っているためだろう。だが、それは無礼というよりは気取りのなさで、親しみやすさを醸し出している。昨夜の印象さえなければ、青蘭も早々に気を許したかもしれない。

「中将殿でしたか」

器を卓上に戻し、敬意を示すように手を膝の上でそろえる。

「……色々とお気に召さなかつたでしょう」

あれこれを思い起こしつつ、申し訳なさそうに視線を上げる。綾霖は微笑して首を振った。

「お気づかいは無用です。それより冷めないうちに召し上がってください」

「はい」

ありがたく言葉に従う。食器が空になるまで待っていてくれるのだろう。なにか聞き出すにしても、食事を終えるまでは答えてもらえそうにない。綾霖も青蘭に問いただしたいことがあるのだろう。そうでなければこのような危急時に、中将の彼がわざわざ来るはずはない。食事のことなど配下に任せればいいはずだ。

空腹も手伝って、あっという間に平らげてしまった。冷めてしまった気取った料理より、よほど美味しかった。心底の満足した笑顔で「ごちそうさまでした」と綾霖に礼を述べれば、彼はわずかに目を睨り、じきに頬をゆるめた。

「このような粗食でご満足いただけましたか」

「はい、十分です。では、ご質問を。私にわかる範囲で、お答えします」

笑顔を崩さずに切り込めば、中将はわずかに眉を動かす。そんなところも彼の主とよく似ている。

「参りましたね。しかし、何故そうお考えに？」

「中将殿に給仕をしていただく身分ではありませんから　それに、  
それどころではないのではありませんか？」

笑みをはいたまま小首を傾げてみせる。彼は降参するように苦笑  
し片手をあげてみせた。

「お言葉通りです。殿下はとんだ懐刀を拾ってこられたようですね  
入手なさった経緯を教えていただけましょうか」

「しよせんはなまくら刀にすぎません。女官としての心得がなっ  
ておりませんで、職務放棄をしているところを偶然拾っていただきま  
した」

「偶然だと」

「偶然です」

にこやかにきつぱりと言いつれば、綾萩は小さく溜息をついた。

「では、そういうことにしておきましょう」

それで納得しろといわれても、無理な話だろう。それは青蘭も承  
知している。

「殿下も同様にお疑いです。けれど、私も姫も、この事態には一切  
かかわっておりません。殿下にお連れいただいたのは、その疑いを  
晴らすためです」

一転して厳しい表情で断言する。

綾萩は無表情のまま、青蘭の目をまっすぐに見つめた。そこに感  
情のいろはない。ただ、昨夜と同じ印象を抱く。やはり、気の許せ  
る相手ではない。

目をそらさずにいれば、綾萩はまた表情を和らげる。腕を組み、  
壁にもたれる。目線を伏せるようにしつつ、眼の端に青蘭の顔をと  
らえている。それは、どれほどわずかな表情の変化も見逃さないも  
のだった。

「それで殿下が納得なさったのなら、私が差し出口をはさむ必要は  
ありません」

「殿下は殿下、綾萩殿は綾萩殿でしょう。信じてくださいとは申し  
ません。信用はお願いするものではありませんから」

青蘭は生真面目な顔に笑みを浮かべる。媚びるでもなく、同情を引こうとするわけでもない。そんなことをすればいい結果は産まないだろう。根拠があるわけではないが、姑息な手段が通じる相手でないことだけは確かだ。

綾霖は表情をゆるめる。それはこれまでの表情に比べると、ごくごく自然にうつる。

「確かにあなたの仰るとおりです。信用に値するかどうかの即断は避けましょう。ただ、そういうところが殿下のお気に召したようですね。あなたを小姓として遇するそうです。よって、今宵からあなたがお休みになるのはここです」

台詞の後半は、明らかに意図的な物言이었다。その期待通り、青蘭はぼかんと口を開け、次いで硬直する。言葉の意味はゆるゆると脳裡でとける。

「それは、殿下と同室ということですか？」

「皆に余分な部屋はありませんからね」

綾霖は同情的な表情で、けれど無情に言い切った。

青蘭は反射的に立ち上がるうとしたが、膝に力が入らず、結局背もたれに力なく凭れかかる。

いくら世間知らずの青蘭でも、それがどういふことかという弁えはある。つつがなく婚儀が終わっていれば、今宵、確かに青蘭は王太子と閨を共にするはずだった。が、今の青蘭は雪蘭であり、婚礼は成立していない。いくらある意味予定通りとはいえ、事情が違すぎる。

「あくまで殿下は雪蘭殿を小姓として遇される、ということですよ。

あの方は男色の嗜好をお持ちではない。どうしてもお嫌ならば我らと同室となりますが、近衛だけでなく守備隊の者たちもおります」

「大部屋、ですか」

「一〇人が一部屋でひしめき合っています。殿下は雪蘭殿を男性に見えないこともないと仰っておられました。同じ感想を持つものは少ないと思いますよ。それに、たとえ男性だと見なされたとし

ても、それが即ち雪蘭殿の身の安全を意味するものでもありません」  
青蘭はその理由を問いかけたが、結局口をつぐんだ。さすがに綾  
霖もいいにくそうにしている。だからわざわざ、王太子に男色の嗜  
好はないと喋ってくれたわけだ。

厚意に感謝するように笑みを浮かべ、青蘭は頷いた。

「分かりました。あくまで私は小姓として殿下にお仕えします」

「それが賢明でしょう」

綾霖も安堵したように小さく首肯し、空になった盆を手にする。

退室の意図を察して、青蘭は礼を述べ小さく頭を垂れる。

そこで彼は足を止めた。

「……殿下のお言葉が気に障ることもあるでしょうが、悪意はない  
のです。気にせず、流していただいた方がいいでしょう」

「そのようですね」

青蘭も思わず苦笑する。分かっているなら受け流せばいいのだが、  
ついついむきになってしまつのは何故なのか。自分でも不思議だっ  
た。

そんな反応に、綾霖も微苦笑する。そこにはわずかに同情ものぞ  
く。

「殿下は女性とどう接すればよいのかご存じでない。雪蘭殿への態  
度は、お気に入りの小姓にかまつときとまつたく同じです。昔から  
そうなのですよ」

諦めたような口ぶりに、青蘭は目を瞠る。

「綾霖殿にも？」

「困った方です。このようなことにならず、無事に婚儀がなつて  
いたとしても、あれでは妃殿下に愛想を尽かされてしまつのではな  
いかと、近衛一同案じていたほどです。雪蘭殿のような方ならその  
懸念もないのですが、青蘭姫では如何でしょうね」

くすりと思わず青蘭は笑う。

「ご心配無用です。姫も気の強い方、負けてはおられませんでし  
ようから」

顔をほころばせた青蘭に、綾霖も頬をゆるめる。

「心強いことです。そのためにも、この事態の收拾をつけねばなりません」

綾霖は盆を脇に手挟むと、恭しく一礼して下がっていった。独りになった青蘭はふうっと一息つくくと、机に頬杖をつく。

王太子は少なくとも近衛からは親しまれているらしい。人となりの一環に触れることができ、何故か心が浮き立つようだった。

## 第2章 砦 3

わずかな呼吸すらひどく大きく感じてしまうほどに静かな夜だった。

階下の部屋や通路、厩、武器庫、眺望楼、門、いたるところで人々は言葉を交わし、せわしくなく行き交っているのだろう。

東葉の王城は落ち、王も刺客の手にかかった。王太子は逃げ延びたものの、果たして正確な情勢を把握しているものはいらぬのか。

西葉との戦いで圧倒的な勝ちをおさめ、その王位継承権を持つ葉王家の直系の王女さえ手に入れ、両国の統一まであと一歩というところまで迫っていた東葉。

そんな隆盛の頂点にあつたかのように思われた国が、一転、一夜にして先も知れぬ混迷の最中にある。

運命とは女神の気まぐれのようなもの。すべてを知るは神のみとされ、人はただ神にすがり祈るしか術はないといわれる。

それを、青蘭は思い返す。

これまで何度となく祈りを捧げてきたが、それが報われたことなど一度もない。

第一、その女神の裔と言われる自分がこの程度なのだから、実は神などたいした存在ではないのかもしれない、などと身の程もわきまえないことを考えてしまふ。

そんな想いはさすがに雪蘭にも漏らしたことはない。従姉も熱心信心しているようには思われなかったが、神を軽んじるような発言はしなかった。

東葉のこの事態に、兄が一枚噛んでいないとはとうてい思えなかった。

花嫁より遅れて出発した兄の一行も、婚儀前日には東葉王都に到着する予定になっていた。蒼杞の一行が国境を超えたのは婚儀の二日前のこと。特に急がずとも夕刻には到着するはずだった。

その知らせが届く前に、青蘭は雪蘭と入替り、抜け出してしまった。それが今となっては悔やまれる。兄の動向には最後まで警戒すべきだった。

蒼杞は王都についたのか。それとも、無関係だったのか。それならば、今、どうしているのか。

諜報活動などはすべて雪蘭の担当だった。青蘭はただほけほけと言われるままに他人任せにしてきた。そのことを今更ながら酷く悔いる。雪蘭を疑うわけではない。己のことにも関わらず、それを雪蘭に丸投げし、のほほんとしてきた己の無責任さ加減が恥ずかしくて仕方がない。

けれど、今更いくら悔やんだところで仕方がない。

それよりも、これからどうすべきかを考えなければならぬ。もう傍に雪蘭はいない。一人で考え、判断しなければならぬのだ。それがどれほど難しく、心細いものか。雪蘭がそれをこぼしたことは一度もなかった。

「雪蘭、ごめんなさい」

詫びてみたところでむなしばかり。今、これから、どうすればなにを選択し、どう振舞えば、再び彼女に会えるだろうか。どうすれば、彼女も、己も、守れるか。

雪蘭ならば、どう考えるだろうか。

青蘭は机に突っ伏す。部屋の主が戻ってくる気配はいつこうになる。彼から新たな情報を得ることもできない。持ち合わせの手札をいくら持ち変えてみても、結論は出ない。

八方ふさがりなまま、瞼を閉じる。出てくるのはため息ばかり。それすら鬱陶しくなり、呼吸を小さく繰り返しているうちに、いつしか眠りに引きこまれていた。

夢つつつに誰かが触れているようだった。遠慮がちな優しい手つきに、青蘭はなかなか目を開けることができなかつた。



雪蘭の仕草に似ている気もするが、何故か絶対的に違うような気がして、ようやくうつすらと目を開ける。根拠はふわりと抱きあげられたような感覚だった。さすがの雪蘭にもできない芸当だ。

半ば夢見心地で開眼すれば、視野にうつったのは見なれた顔だった。いや、見覚えはあるが見なれたというには時期尚早か。

「……………」

とっさに呼ぶべき名が出てこない。名は知っているが、ぼんやりした心地で呼ぶには他人行儀な名前だった。

とりとめなく、その名を探り当てようと思いが空回りする。その間に、あっさり寝台に移されてしまった。目を丸くしていると、視線があつた。慌てるでもなく、実に落ち着いている。

「起してしまつたか」

ぶつきらぼうな言葉には、詫びるような響きもある。驚きの余り言葉もない青蘭を寝台に横たえると、彼はあっさり手を引いた。

「よく眠っていると思つたのだが」

「……………」

ぱくぱくといたずらに口を開閉するさまに、王太子はぶつと小さくふきだした。

青蘭は慌てて上半身を起こす。むっとして眉をひそめつつも、言い返す言葉が出てこない。そんな様子を面白がるように、彼は青蘭の髪をくしゃくしゃと掻き乱す。

「なんだ、襲われるとでも思つたか？ 残念ながら、吾は男と子供には食指が動かぬ。安心せよ」

力づくで頷かせるような仕草に、いよいよ青蘭の怒りは沸点に達した。

「失礼な！」

その手をはたき落とし、かみつかんばかりの勢いで抗議する。

王太子は驚いたように目を睨つたが、じきに愉快そうに眼を眇める。それがまた、気に障る。

「ほう、では、手をつけてもよいのか？」

青蘭の体の両脇に手をつき、口の端をゆがめながら顔を近づける。その途端に青蘭は体をこわばらせる。予定通り婚儀が済んでいれば、そうなっているもおかしくはない時間だ。まったく男女の間に無知なまま嫁ぐわけではない。知識だけとはいえ、夫婦になるのがどういうことは承知している。覚悟はしていたはずだが、婚儀の前にそれどころではなくなってしまう。そんなものはいつの間にか遠いものになっていた。

「だ、駄目です！　だ、だいたい、殿下は、ひ、妃殿下にしか手をおつけにはならないでしょう!？」

青蘭は必死の態で叫ぶ。そもそもその妃殿下は自分なのだが、今はとりあえず雪蘭なので、自分のことではないと棚を上げる。

青蘭のあまりに悪あがきな態に、王太子は酷薄な笑みを浮かべて間近で見据える。その目のいろに明らかにかいかいを見出して、青蘭は眉をひそめる。

「それはあくまで理想だ。男とはそういう衝動を堪えるのが難しい時がある　　いったい、それがどういふことか、そなたは存じておるのか？」

「知っています」

「　　ほお？」

息がかかるほど顔を寄せ、王太子は青蘭の目をのぞきこむ。そこにあるのはあくまで面白半分に楽しんでいるだけの気色。青蘭は手探りでたどりついた枕をきつく掴むと、勢いよくその顔に叩きつけた。

それはふかふかの羽根枕だった。いくら力ませに殴りつけたところで、たいした衝撃は与えない。羽根が飛び散り、枕は静かに二人の間に落ちる。思いがけない攻撃をまともに食らった王太子はとっさに目を閉じたらしいが、枕が落ちる頃には呆れたように青蘭を見据えていた。

青蘭は再び枕を掴む。その指先が白くなっているのを見ると、彼はおとなしく身を引き、立ち上がった。

「色気の欠片もないな　本当にどういふことが、知っているのか？」

「……だから、知ってます」

青蘭は王太子を睨みつけながら、嫁ぐ前に伝授された一通りを滔々と並べ立てた。それを聞いた彼は、心底うんざりした顔を見せる。「そなたに手をつけるくらいなら、心得のある男の方がまだましというもの」

間違ったことは云っていないはずだった。青蘭は何故彼がそんな表情でそんな台詞を吐くのか、まったく理解できない。

「……男と子供には食指が動かぬのではないのですか？」

見当違いな言葉に、王太子は小さく息を吐く。

「なまじな子供より男の方がましなほどだ　子守はごめんこうむる」

「　な、なにか間違ったことを申しましたか？」

勇気を振り絞って問えば、さらにげんなりしたような視線が返ってきた。

「間違っておらぬが、間違っておる」

「……？」

困惑顔で眉をひそめて悩む青蘭の頭を、王太子は乱暴に掻き撫でる。

「分からぬかぎりは子供だということだ」

「……仰ることがわかりません」

「己で考えよ」

突き放すように云い切ると、そのまま乱暴に青蘭の肩を押して横にならせ、頭まで布団をかぶせてしまう。もごもごと足掻くのを布団の上から押さえつけ、「さっさと眠れ」と命じた。

青蘭がおとなしくなると、ようやく手が離れる。青蘭は寝台に手をついて起き上がり、反対に王太子の腕を掴んだ。

「寝台は殿下がお使いください。私は床で寝ます」

「なにを」

「私は小姓としてお仕えすると決めたのです。主従のけじめはきちんとつけねばなりません」

きっぱりと言いつくと、啞然とする彼を押しつける。寝台から降りると、その下から寝具一式を引きずり出し、手早く整えるとさっさと布団にもぐりこんでしまった。

王太子は寝台に腰かけ、呆れたように丸くなった布団の膨らみを見つめる。その背中が主に向けられているらしい。説得しようにも断固として拒む気迫に満ちている。

結局あきらめたような大きなため息が漏れ、じきに灯りが消された。

暗闇が満ちると青蘭はほっとして、あっさりと思いの縁に陥落する。

そして、翌朝目覚めてみれば、いつのまにか寝台にうつさされていたのだった。

## 第2章 砦 4

寝がえりをうつた拍子に目が覚めた。

柔らかな枕に頬をすりよせながら眠気を払うように瞬かせれば、その向こうに一つの光景があつた。

高い窓からさしこむ光は、部屋の奥を照らしている。窓の下に置かれた机の上は、それでも十分に明るい。装飾の一切ない、実用本位の机と椅子には主がいた。

きつちりと後頸部で髪を結わえた横顔は、まず凜々しいと言える。その鋭い視線はもっぱら手元の紙に注がれていた。

昨夜は床にのべた寝具に潜り込んだはずなので、覚醒時にこの構図が見えるのはそもそもおかしい。

ゆつくりと、それが誰で、ここがどこで、どんな状況にあるのかを示す欠片が集まってくる。それらが一つの絵を成したとたん、青蘭らんはがばつとはね起きた。

「……………」

第一声がまず出てこない。挨拶が先か、それとも小姓として詫びるべきなのか、それともいつのまにか寝台に移動させられていたことを問い詰めるべきか。

ぱくぱくと口を開閉させていると、机の主がゆつくりと振り返つた。その口の端はすでに歪んでいる。青蘭はしまったと臍はそをかむ。

「寝坊だな。小姓としては失格だ」

「……………も、申し訳」

慌てて詫びようとしたが、声が裏返る。半端に乾いた喉に声帯が空回りしているようだった。

王太子はくつと笑い、そのまま手を伸ばすと寝乱れた青蘭の頭をくしゃりと掻き乱す。

「よく眠れたか？」

「はい」

面を伏せてまごつきながらも頷く。彼はほんと小さな頭を軽くたたき、そのまま手を放した。それ以上かまうことはせず、再び紙に目を落とした。

「さつさと身なりを整えよ。ここでは着替えなどない故な　それから、横の髪は下ろしておけ。顔を隠した方がよかるう」

机と寝台の間には小卓がある。そこに近衛の紋章が縫いとられた細長い布が置かれていた。近衛で髪が長いものは皆これを使っている。王太子も同じものを用いている。寝台からおりて手早く軍服を整えた後で、その布を手にする。そこで青蘭ははたと困った。

東葉ひつばの近衛では短髪のものが多いようだった。長いものでもせいぜい背の半ばまでくらいだった。それに対して青蘭の髪は腰よりも長い。頭巾をかぶって誤魔化せればよいが、それでは皆のなかではかえって不審を買いかねない。

女官も王女も常々仰々しく髪を結びあげるものだから、必要な長さではあるのだが。

手に取る髪は艶やかに光沢を放っている。唯一、雪蘭せつらんよりも美しいと賞されるのが髪だった。

無言でそれを見つめたのち、青蘭は王太子に声をかけた。

「殿下、刃物を貸していただけませんか？」

「なにをするつもりだ？」

「髪を少し調整します」

「髪だと？」

振り返った王太子は、訝しげに眉をひそめながらも、太刀の小柄こづかを抜いて寄こす。それを受け取る青蘭に殺気のないことを知ってか、警戒よりも好奇心の勝った様子で見守る。

小柄を受け取ると、青蘭はそのまま無造作に髪を一掴みにし、刃先を押しあてた。

「おい　！」

制止する間もなかった。

青蘭は刃物を用い、思い切りよく髪を切ってしまった。掌からこ

ぼれた房がぱさりと床にちらばる。それは朝の陽ざしに濡れ濡れと光る。流れ落ちる滝のようだった髪は、無残にも肩より長い程度になり、不揃いな切り口をさらしていた。

「気は確かか？」

「確かです。私の髪は小姓を務めるには長すぎました。違いますか？」

悔やむ様子もなくあっさりと反問され、王太子は気圧されたように口ごもる。

「それはそうだが……」

「髪はまた伸びます。必要なら髻かもしもあります」

にこりと笑ってみせ、小柄を返す。王太子はそれをなんとも複雑な表情で受け取った。

「思い切ったことをする　髪は女性にょせいの命いのちだろう」

「今は女ではありませんから。小姓として扱ってくださるなら、それにふさわしい形なりがあるかと」

頓着することなくさっさと短くした髪を近衛の布で束ねる。

王太子は小柄を鏢かざりに戻す。机に向い紙を手に取りうとしかけたが、納得いかない気色で再び振り返った。

青蘭は外套を羽織、顔が隠れるように横髪を指先で梳くようにして前へ流しているところだった。横髪を残して無造作に髪を束ねたその姿は、可愛らしい小姓に見えなくもない。

「問うが、西葉さいはの女性はどのように思い切りのよいものなのか？」

元々は同じ国だったわけで、たかが百年でそれほど気質に大きな違いが出るものだろうか。

むしろ進取の気象に富んでいるのは東葉の方で、西葉の方が古色蒼然として旧来のやり方に拘泥している印象がある。少なくとも東葉における両国の違いの認識はそういうものだった。

「私は奥の宮育ちなので他の女性のことは存じません。ただこういう時、雪蘭なら」

そこではっとして口を閉ざす。つるりと出してしまった名前に、

血の気が引いていくようだった。ここで取り乱してはさらに疑惑を招く。青蘭は必死に平静を装った。

「も、申し訳ありません……日頃、二人きりの時は互いに呼び捨てていたものですから」

それは嘘ではない。雪蘭は青蘭を名前で呼んでいた。

「姉妹のように育ったと云うておったな。取り繕う必要はない。それはそれで構わぬ」

雪蘭と青蘭。呼び方でいえば一字違いに過ぎない。そのおかげか、王太子はそれで納得してくれたらしい。

「はい 青蘭ならこういう時にどう判断するだろうかと考えました」

「ほお、青蘭姫か それほどしっかりした女性なのか？」

王太子は興味を持ったのか、眉をあげ、青蘭の言葉を待つ。

「はい。実際的というか、頼りになる方です」

これは雪蘭のことだが、嘘ではない。青蘭は彼女を頼ってばかりだった。

実感のこもった言葉に、彼は意地悪く口の端をゆがめる。

「立場でいえばそなたの方がしつかりせねばならぬだろうに、姫も気の毒なことだ。そなたは気丈ではあるが、少々危なっかしい感も拭えぬ故な」

「……悪うございましたね」

肩を落として目を眇めれば、王太子はからからと笑う。

「心意気は買うが、無茶はするな。姫がしつかりしておられるのは、そなたが心もとない故もあるう」

「肝に銘じます」

王太子の言葉は耳に痛い。青蘭は悄然としながらも素直に頷く。

「では、朝食をとってきてくれ 中将、控えておるか？」

扉の向こうへ届くように、王太子は声を張り上げる。じきに扉が開き、綾糸あやいとが現れた。

「この者を厨ちゅうへ案内してやれ 呼び名が雪蘭殿ではさすがにまず



いな……白霖<sup>はくりん</sup>とでもするか。斬家<sup>ざん</sup>の縁戚だということにしておけ」「承りました。では、白霖、ついてこい」

綾霖の昨夜の恭しい態度とは一変した、ぞんざいな態度に青蘭は素直に従う。

彼女を小姓として扱うということは、この乳兄弟の間でも徹底されるらしい。

螺旋階段は、人が行き違うのが難しいほどに狭いものだった。王太子の部屋の上は見張り場となっており、実質最上階にあたる。同じ塔の階下にもいくつか部屋があり、綾霖は階段を降りながらその一つ一つを言葉短かに説明していった。

青蘭はそれを必死の思いで脳裡に収めていく。

問題は塔を降りてからだった。

王太子の居室のある塔は、砦の中央にある。他に砦を取り巻く防壁沿いに五つの塔があるという。他に厨、食堂、兵舎、武器庫や厩、鍛冶職人の小屋など数知れない設備があり、複雑に通路が入り組んでいる。

自慢ではないが、青蘭はどちらかといえば方向音痴の気がある。

綾霖の跡を追うのが精一杯で、砦の構造を把握するどころではなかった。

せめて厨までの道順だけでも覚えようと、きよろきよると目印を探す。

「あまりきよろきよろするな。目立つぞ。面があらわになっておる」「はい」

慌てて顔を伏せる。すれ違う男たちは屈強ぞろいで、華奢な青蘭はまるつきり子供のようにだった。

なんとか厨にたどりつけば、ここでも逞しい数人の男が腕をふるっていた。

そのうちの一人に綾糸は声をかける。短い応酬があつて、木の盆に湯気の立つ二皿がのせられたものが寄こされ、青蘭に押し付けられた。木の器の中身はどちらも同じもので、木匙も二つあつた。

「一人で戻れるか？」

綾糸の問いに、青蘭は躊躇つた末、正直に首を振つた。

「十中八九、迷いそうです」

「無理もないか」

盆を持たされたまま、来た道に戻る。厨のある塔を出て、建物と建物の間の狭い庭を横切ろうとしたとき、馬蹄の音がとどろいた。

「苓公れいこうがおつきになつたぞ！」

いくつもの声がこだまする。それは王太子の従兄、葉明柊（ようめいしゆ）

う（の到着を知らせるものだった。

## 第2章 塔 5

中庭がにわかになぎやかになる。その騒ぎに紛れるように、綾霖（りょうりん）は青蘭の袖を引いた。

「ここにはまずい。今のうちに殿下のお部屋へ」

不自然に急いではかえって人目を引きかねない。それまでと変わらない歩調で、けれど先を急ぐ。

急ぐあまり盆を取り落とさないようするのがせいっぱいだつた。見覚えのあるような気のある通路を戻り、ようやく塔の入口にたどりつく。

綾霖は素早くあたりをうかがい、誰もいないことを確認する。

「私は急ぎ殿下にお知らせしてきます。あなたは気をつけて階段を上ってきてください。最上階が殿下のお部屋です。大丈夫ですね？」

「はい」

「近衛のものか殿下がお戻りになるまで、部屋からは出ないようにあなたが雪蘭殿であることを知るのは近衛だけです。苓公は鋭いお方です。くれぐれも悟られないように」

口早にそれだけ囁くと、身を翻して階段を上っていく。軽やかな足音がいくつも重なるように上へと響いていく。青蘭はそれを追いかけるように螺旋階段をのぼる。

塔の中心を周回するように一段一段踏みしめていると、間もなく目が回るような心地に襲われる。少し気分が悪くなり立ち止っていると、上の方で扉の開閉する音が響き、二つの足音が近づいてきた。綾霖は早くもあの部屋まで辿りついたのかと、感心しながら階段の脇に身を避ける。

ほどなくして綾霖と、それに続いて王太子が姿を現した。険しい顔で階段を駆け下りてきた王太子は、青蘭を見つけると表情を和ませその歩調をゆるめた。

通りすがりざまに足を止め、ぽんと頭に手をのせる。青蘭は盆を持っていくためその手を払うこともできず、仏頂面で睨みかえす。

「早くお行きください」

「部屋にいつ戻れるか分からぬ。これはそなたが食せ。夜までかかるかもしれない。いくら腹が減っているからと一時いちじきに平らげるなよ」

まだ朝も早い。先を見越しての忠告はありがたいが、その物言いがいちいち気に障る。

「承知いたしました」

「ではおとなしくしておれ」

つつけんどんな物言いに王太子は愉快そうに口の端をゆがめ、青蘭の髪を掻き乱す。それを鬱陶しそうに首を振って払おうと苦闘していると、苦笑を噛み殺す綾蔀と目があった。中将殿は詫びるようにかすかに頭を下げてくれたが、その目には同情より楽しげな光があった。

二人が揃って姿を消すと、青蘭は壁にもたれたまま深々と溜息をついた。

「さすがは乳兄弟。結局揃って人の悪いこと」

苦々しくひとりごち、もう一度溜息をつくと気を取り直して部屋を指した。

部屋に戻り、扉を閉める。盆を手にしたまま扉に凭れる。人が二人横になるのが精一杯の狭い部屋だが、戻ると心底ほっとしている自分に気がつく。

机に盆をのせ、念のために扉に鍵をかけるべきかどうか迷う。王太子が在室している間は階段に綾蔀が控えていたようだが、今は誰もいない。いつかの小姓に過ぎない青蘭のために人手をさく必要はない。

扉の前のしばらく逡巡したのち、鍵をかけるのは諦めた。小姓に過ぎない身でそこまでするのは逆に疑いを招くかもしれない。

自分はただの小姓にすぎないのだと繰り返し、不安は残るがそのままにした。たとえ男色嗜好の輩に目をつけられることがあったとしても、まさか王太子の居室で暴拳に出るような真似はしないだろう。

不安で仕方ない。今、信頼できるのは王太子と綾羅だけ。その二人も実際のところ味方なのか敵なのかわからない。成り行きと雪蘭の勘だけを頼りにここにいる。

不安の余り敵味方の区別をつけたいと焦る気持ちを宥めるように深呼吸を繰り返す。

「雪蘭ならどう考えるかしら」

呪文のように繰り返す。

雪蘭なら、雪蘭なら。

東葉とうはに対抗できる王太子として人々の期待を集めていた紅桂こうけい。ただ一人その血を引く、紅桂の愛娘雪蘭なら。

青蘭は、その英傑な紅桂を殺したと噂される愚昧な現王の血を引く。同じ血を受けた兄にはなにかと暗い噂が付きまとい、実際に東宮では奇怪な人の死が相次いでいる。東宮に仕えるというだけで人々は震え上がるとも聞く。紅桂を害したのも兄である可能性のあることも知っている。

青蘭の立場はその兄より上に位置するはずなのに、それをどうするにもできなかった。ただ、自分一人の命を守るだけでせいっぱいだった。

それを気に病む青蘭に、雪蘭は自分にできることは絶対に死なないことだと諭し続けた。

青蘭が死ねば、西葉さいはの王権は兄にわたる。それだけは絶対に防がねばならないことだと。それが最も多くの人々を守ることにつながると。

それでも無力感は拭いきれなかった。力のない、知恵もない、人望もない。ないないづくしの青蘭の支えは雪蘭だけだった。雪蘭がすべてを与えてくれた。

孤独と心の痛みに折れそうになっていた青蘭の前に、雪蘭が現れたのは七つの時。それからずっと守ってくれたのは雪蘭だった。

そして、今、また青蘭は一人でここにいる。雪蘭はいない。雪蘭がいないと、どうすればいいのかわからない。だから、考える。雪蘭ならどう考えるだろうかと。

気がつけば、頬を伝うものがあつた。それを指先で拭う。

「これくらいで泣いては駄目よ」

雪蘭なら、そう云って笑うだろう。

だから、青蘭も笑ってみる。ほっとするようできて、心はうつろなままだつた。

気鬱な思いとは裏腹に、体は空腹を主張した。誰もいない空間に、その音は嫌に大きく響く。思わず吹き出してしまい、しばらく笑い続けてから、青蘭はようやく机にむかつた。

「まずは腹ごしらえよ、青蘭」

従姉を口真似てみる。それは本当に雪蘭が囁いてくれたようだった。

昼を過ぎても誰も塔を上がってくる気配はなかつた。

王太子は従兄である明格めいこうを信用しきれない様子だった。嫁いでくる前に、雪蘭が東葉の国内情勢を調べさせ、青蘭もともに把握してきた。

青蘭の知る限り、明格にまつわる悪い噂はなかつた。確かに王太子に次いで王位に近い立場にはあるが、野心的な側面をうかがわせる評判はない。疑いを招くようでは迂闊うがたとしか言いようがないが。むしろ警戒心を抱かせてくれる程度の方が、底の浅さが知れていて御しやすいとも言えるのかもしれない。

王太子も明言はしなかつた。信用すべきか疑うべきか。そのどちらとも決めかねている様子だった。それを青蘭に判断できるわけがない。

昨夜、明るくなつてから一体の地形を把握しようと考えたことを思い出す。椅子を運び、窓をのぞきこんでみる。

そこに広がるのは森と、その彼方にわずかに拓かれた農地、そして雄大な山

々。山の背を一望することができた。砦は森のなかの小高い丘の上に築かれているらしい。

青蘭が山の背のその山容を目にするのははじめてだった。東葉の王都は山の背からは遠く離れていた。輿入れの際も山脈から遠く、もつとも発達し、安全な街道が選ばれた。西葉の王都からも山並みが見えることはなかったが、東葉の王都ほど遠くはない。

白日のもとでも険峻な峰々は雲の彼方に身を隠し、白い山麓はやがて青い山裾へと変じていく。夏になつてもとけることのない万年雪だという。今はまだ初夏。雪が舞うのはまだまだ先だ。

その尾根を越える峠道をこの塔から望むことはできないが、そこから通じているのであるう街道が山裾から砦に向かつてのびている。今、その道に人の姿はない。

この事態に、西葉はどう動いているのだろうか。そもそも、どう絡んでいるのだろうか。なにを狙っているのか。兄の企みならば、真つ先に狙われるのは青蘭のはずだった。

それにしても、故郷西葉との風景の違いに目を奪われる。

西葉では、山の背から流れ出るいくつもの大河によって形成された平野が国土の大半を占める。雪どけ水は時として氾濫を繰り返すが、絶えず滋養に富んだ土も運んできてくれるため、沃野に恵まれ豊作が続く。さほど労をかけずとも一定の収穫がえられるため、西葉の農業はあまり発達していない。

東葉は山がちな土地に大半を占められ、耕地は限られている。その反面、鉱物は豊富にとれる。けれど、人間にはまず食料が必要となる。国民を自国の生産だけで飢えさせないためには、その耕地は狭すぎる。西葉では人の手が入ることのない山の斜面や森まで開かれ、また生産性を上げるために農業は著しく発達した。穀類に限つ

て両国を比較すれば、同じ面積の土地から上がる収穫量は倍も違ってもいわれる。

また、東葉は西葉だけでなく東の隣国よくは翼波とも常に緊張状態にある。翼波は東葉の鉾山を狙い、その次には西葉の沃土をも求めているといわれている。翼波は荒野と山ばかりの国で、まず農業を行うことが難しい。そしてその山からはなにも産出しない。貧しい国の人々は荒々しく、そして武力に富んでいる。

その点、西葉は東葉以外の隣国を持たない。周囲を海に囲まれた大きな半島のほぼ全土を占めている“葉”の国は、そのほぼ中央で土地を分断する山の背の東西でその気候も風土も大きく異なる。それは次第に東西の民の気質にも変化をもたらした。

地平まで続く青い森と、それを縁どる淡い緑の耕地が広がる。やがて山の裾と融合し、白い山肌へと変じ、白い雲海のあわいに消えていく。

はじめて目にする、美しい光景だった。

「……綺麗」

呟き、嘆息をもらす。

ほぼ爪先立ってその光景に見とれていたが、じきに疲れて椅子から降りる。

手持無沙汰なまま机に向かってしていると、あとは眠気がやってくるのみ。誰かが来てくれるまでは待つていようとなんとか睡魔と戦っていたのだが、それもあえなく敗退してしまった。

それからどれほど時間が経過したのか。

足音が階段を上ってくる。気が張っていたのか、青蘭はじきに目を覚ました。

慌てて椅子から立ち上がり、髪を整える。上がってくるのが近衛とは限らない。誰かの意を受けた皆の守備隊の可能性もある。

窓から差し込む光はすでに頼りなく、茜色に染まっていた。狭い



部屋にも暮色が満ちる。昨日はじめてこの部屋で目覚めたのもこんな時刻だったと思い返していると、じきに部屋の前で足音がとまる。

青蘭はうつむき加減で息をつめて待ち構える。

ノックもなしに唐突に扉が開かれた。それにてつきり王太子が戻ったのかと顔を上げると、そこに立っていたのは見覚えはあるようだが、しかし見覚えのない若い男だった。

ノックもなしに入ってきた男も、驚いたようにその場で足を止めた。窓から差し込む光は西日。赤銅色に染め上げられたのは若い男だった。それだけをとっさに見極めると、青蘭は面を伏せた。

窓を背にしているため、青蘭の顔は影になってよく見えないはずだ。そう自分に云いきかせ気を落ちつかせる。

「いったい誰だろう。」

誰かに似ているのは確か。それもかなり相似性は高い。けれど、服装に見覚えはない。目になじんできた近衛ものではないし、守備隊のそれでもない。

機能的かつ形式化された意匠は軍の正装を思わせる。それも高級士官のものに違いない。残照を受け暗色としか分からないが、服地の光沢は天鵝絨のようで、いつかの軍人とはとても思われない。

やたらときらびやかだが、やくたびれた感のある外套の裾から太刀の石突いしつきがのぞいている。下を向けばいやでもその足元が目に入る。奇石がちりばめられ儀礼ばった長靴は泥で汚れている。まるで儀式の途中で抜け出してきたようないでたち。

ほぼ同時に脳裏に蘇ったのは、印象的な切れ長の深い瞳。時に厳しく、時にからかうように、そして稀に優しげに細められる双眸。

絵姿を初見した時から、目に焼き付いていたのは特にその目元の印象だった。

一瞬で得た闖入者の面影がその印象と重なるうとしたその瞬間、その本人が追いついてきた。青蘭せいらんは緊張のあまりもう一人、いや二人分の足音に気付かなかった。

当人の後ろには彼の乳母子ちのちごたる綾あやもいるらしい。顔をあげずとも、その足元を見れば誰なのかは分かった。

「苓公れいこう、この部屋は違うというておるだろう！」

珍しくその声には狼狽ろうたいがにじんでいる。彼が感情をあらわにする

ところにあまり接したことのない青蘭は、どんな顔をしているのか気になってしょうがない。

「悪い悪い、いつもはここが俺の部屋だったからな。うっかりしてたぜ。最上階の部屋はもつとも高貴なお方に。さあ、どうぞ、王太子殿下」

「……苓公」

あまりに頓着しない物言いと、すっかり苦り切った口ぶりに、青蘭は堪え切れず少しだけ顔を上げた。

扉を開けはなつたまま、同じくらしい背格好の二人の青年が対峙している。先ほどの口ぶりもさもあらんとばかりに険しい顔をしているのは王太子だった。そして、非難に満ちた眼差しになどどこ吹く風とばかりにあっけらかんと笑っている青年。

彼らのまとう雰囲気は対照的だが、よく見れば雪蘭と青蘭ほどではないにしろ、その顔立ちは良く似ている。

磊落に笑っている青年こそが、苓公こと葉明柎（うきは）なのだろう。

王太子とは父方・母方の両方で従兄弟にあたる。彼の父は東葉王王弟、母はその王妃の姉だった。青蘭と雪蘭の関係よりも血は近い。まるで兄弟のように似ているのも無理もない。

「その他人行儀な呼び方はやめてくれといってるだろ。昔のように『にーちやま』と呼んでくれとまではいわないからさ。あの頃の前はほんとに可愛かったよな。いっつも俺のあとをついて回って、舌足らずな高い声で『にーちやま、にーちやま』って連呼してさ。それがなんでこんな風に育つんだ？」

ほぼ同じ背丈の従弟の頭を乱暴に掻き乱す。王太子はさも嫌そうにその手を振り払い、その手の届く範囲から退避するように一歩後退した。

それに青蘭は既視感を覚える。まるつきり王太子と自分のやりとりの焼き直しではないか。

二人の後ろでは、階段から室内をのぞきこんでいた綾萩（りょうし）が必至の態で笑いをかみ殺している。

「毎回毎回その話はもういいとっておろう。だいたい、先日も王城で同じことを申し上げたはずだが？」

「そうだったかい？ 悪いね、忘れてしまったみたいだ。俺が昔のことを覚えてられないのは、お前が一番よく知ってるだろ？ せめて“明柊”と親愛をこめて呼んでくれよ。たった一人の従兄だろう？ それより、お前、ほんとに残念だったな。せつかくやつと嫁取りが決まったつてのにさ、それが寸前に台無しだからな。しかも青蘭姫はなかなか可愛らしい姫君だって評判じゃないか。惜しいことをしたな」

明柊が慰めようと一歩進み出て手を伸ばしてくるのを、王太子はさらに後退して避ける。

「可愛らしいだと？ どこにそのような根拠が」

王女はその実の親兄弟にすらまともに容貌すがたを曝すことはない。実際の容姿がどの程度のものなのか、知りえる異性はせいぜいのところ医者と夫と、やがて生まれるかもしれない息子くらいのものだ。

訝しげに眼を眇める王太子に、明柊はにやりと口の端をゆがめる。「お前のことだからどうせ青蘭姫の絵姿も見えていないだろうとは思ってたが、凶星か あの入城式で見なかったのか？ 青蘭姫の被か衣つぎの裾を持っていた女官を。あれは姫の従姉だという話じゃないか。見事な黒髪と白い肌の、なかなか綺麗な女だったぞ。従姉があれなら、姫の器量もそう悪くはないだろう？」

そう思わないか？ と問うような口ぶりに、王太子は気難しい顔で眉間に皺を刻む。

青蘭には明柊の後ろ姿しか見えないが、その台詞に血の気が引く。このまま彼が振り返れば、この小姓こそがその女官だと気付かれてしまうかもしれない。

返事がないことにもかまわず、明柊は陽気に続ける。

「あんまり女気がないから、実は王太子殿下は男色家じゃないかって噂がたつたのはお前も知ってるだろ。単に堅物なだけだと分かっているから、俺は信じてなかったけどな けど、だ。お前、やつ

ぱりそうだったのか？」

その疑問符と共に唐突に明柊が振り返った。不意打ちに、びくりと青蘭は縮みあがる。彼の背後では王太子も綾霖も揃って顔をこわばらせる。

明柊はつかつかと歩み寄ると、体をこわばらせて後ずさる青蘭の様子などお構いなしにいきなり両腕を掴んだ。

「こんな愛らしい小姓、いつから侍らせてるんだ？ 青蘭姫の入城式の時には見かけなかったぞ。まるつきり女の子みたいじゃないか。おい、お前、名は何という？」

そう問いながら、青蘭の顔をのぞきこもつとする。青蘭は体を硬直させ、ひたすら首をすくめて俯く。明柊は「おやおや」とため息をつき、その腕を放した。強引に上向かせるような真似はしなかった。そのことに青蘭は心底ほつとした。

青蘭のかたくなな様子に一步下がり、腕組みをして観察は続ける。「で、名は？」

「……」  
「さん はくりん  
斬白霖だ」

代わりに答えてくれたのは王太子だった。ひどく救われた心地で、青蘭はほつと息をつく。その様子を明柊は見逃さない。

「斬、か。中將の一族か？」

問われて、綾霖が進みでる。

「はい。私の遠縁にあたります」

「遠縁か。斬家のものにしてはやけに優雅な物腰をしていると思っ  
たよ。なるほどね」

感心したように再び青蘭をしげしげと眺める。その視線を感じて、青蘭はひたすら身を縮こまらせてうつむくばかり。

じきにその前に王太子が立ちはだかった。

「もう気がすんだろつ。さっさと自室で休んでこられよ。ついでにその馬鹿げたなりも改めていただきたい」

「その言い草は横暴だぜ、碧柊。（まきしゅう）これでも宴の最中に命からがら逃

げてきたんだ。道化じみた格好も仕方ないだろう。そもそもお前の花嫁をお迎えするために着飾ったんだ。ひいてはお前のため。それをそのような物言いは冷たすぎる」

明柊は大げさなほど悲しげに嘆いてみせる。それにうんざりしたように王太子はあつちへ行けと手の甲で払う。

「相変わらずつれないねえ、碧柊は。そんなに俺が嫌いかい？」

「ああ、大嫌いだ」

すげない返事に、明柊はさらに大仰に頭を抱えてよろけてみせる。二、三步よろけたついでに、素早く青蘭の腕をつかんで引き寄せた。

「明柊！！」

王太子が鋭く詰り、強引に青蘭を奪回する。そのわずかな一瞬に、明柊は青蘭の頬に唇をかすらせていた。

「俺は女も男もいける口なんだ。その朴念仁に愛想が尽きたら俺のところにおいで。大切にするよ」

と、艶やかな笑顔でさらに接吻まで投げてよこす。

青蘭は王太子の背後に逃げ込んだまま、啞然として見送る。

「待て、明柊」

「そうそう、そうやって名前でも呼んでくれると嬉しんだよ、碧柊。で、なんだい？」

明柊はさも嬉しそうにほほ笑む。同じような造作でも、人となりが違つとこれほど華やかな笑みを浮かべることができるらしい。そもそも二人とも並より美形である。

王太子は不愉快そうに眉間のしわをますます深くする。

「そなた、どうやってあの騒乱から逃れたのだ？」

「どうやってっつて？」

くすりと笑い、王太子にそのまま歩み寄る。その肩に親しげに手をかけ、耳打ちするように唇を寄せる。その時、彼の背後に隠れる青蘭に意味ありげな一瞥を寄こすのを忘れなかった。

「命からがら、だよ　お前が無事だと聞いた時は、嬉しさでここが震えたよ」

そう囁き、大げさに己の心臓のあたりをさすってみせる。

碧柊はうんざりした顔で後ずさり、同時に従兄の肩を押しやって遠ざけた。

「つれないね」

「当たり前だ」

「かなわぬ想いに胸を震わせるのも、人生の楽しみの一つには違いないけれど 切ないものだね」

うっとりとして碧柊に囁きかけ、彼が太刀の柄に手をかけるのを見届けると、嫣然と笑って去っていった。

「……あれが、苓公殿下ですか？」

王太子の袖を強く握ったまま、呆然と青蘭は囁いた。

階段で頭を垂れて苓公を見送った綾霖は、苦笑しつつ戻ってきた。

「はい、殿下の天敵です」

「綾霖」

低い声で名を呼ばれ、乳兄弟の中将は詫びるように肩をすくめた。青蘭は細かな震えに掴んだままの王太子の袖を放すことができない。頬をかすめるように、とはいえ、生まれてこの方異性からあんな風に触れられたことはない。身がすくんでしまい、強張りは容易に解けない。

「大丈夫か？」

「……はい」

かすれた応えに、王太子は困り果てた顔でともかく頭を撫でてくれる。他に術が見つからないのだろう。異性に対して免疫がないという点では、二人ともに似たようなもの。

「……」

「どうした？」

小さな呟きを聴き逃した碧柊は、それを拾おうと身をかがめてくれた。その耳元に、青蘭は大真面目に囁いた。

「上には上がいるんですね」

それまで優しくかった仕草が、急に乱暴になったのは言うまでもな

61



## 第2章 砦 7

目配せを交わして笑い続ける小姓と乳兄弟を、王太子は苦り切った顔で見据えている。二人ともに首をすくめて笑いをおさめたが、口元のゆるむのはどうしようもない。

碧柎は苦々しげに溜息をつき、咎めるように青蘭の頭を軽く叩いて脇へどかせて、椅子に腰かけた。ついでに机を一瞥し、盆の上の食器が二皿共に空になっているのを確認する。その仕草に気づいた綾霖が黙ってその盆を下げる。

「あ、それなら私が下げてください」

慌てて青蘭が横から受け取るうとしたが、それを王太子が制した。綾霖に任せよ。ついでに仕事もある故な」

綾霖もその言葉をうけて青蘭に頷いてみせ、そのまま下がる。

その後ろ姿を見送る青蘭に、王太子は寝台にでも腰かけるように促した。

「……苓公殿下はお気づきになったでしょうか」

青蘭は気がかりを隠しきれない声で呟いた。無意識のうちに指先が頬に触れる。柔らかい感触がかすただけだが、困惑とかすかな不快感を拭いきれない。

指先でさすっていると、それを見咎めたように王太子は目を眇め、椅子に腰かけたまま青蘭の方へ腕を伸ばしてきた。何事かと身を引く前に、乱暴に節くれだった指先でその頬を拭われる。

痛みを伴うほどの力に、青蘭は顔をしかめて睨みかえす。その手を払いのけた。

「痛いではありませんか」

「ふん」

彼は何故か面白くなさそうに鼻先で笑い、椅子にもたれかかる。

青蘭は痛み残る頬を撫でさすりながら、不可解な彼の態度を横目で観察する。

「そなたが女性だじょせいということには気づいたかも知れぬ。夕日ゆづりが逆光になっておった故、顔まではつきり見ておらぬだろうとは思うが」「本当に私が女だとお気づきになられたのなら、何故なにも仰らなかつたのでしょうか。それだけでも十分不審でありましょうに」「面白そうだと判断したのだろう。あれは楽しむことにかけては貪欲故にな。そなたにどうかからんでくるか、想像もつかぬが……」

文字通り頭を抱えるような仕草に、青蘭は不謹慎にもまた口元がゆるんでしまいそうになる。

「ところで、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか」「なんだ？」

「情勢はどのように 姫様の安否が気にかかって仕方ないのです」「雪蘭せつらんのことを思えば息がつまりそうになる。」

その切実な表情に、彼はやや眉をひそめた。青蘭はその表情に思わず胸を押さえた。

「よもや、よくない知らせでも？」

「急くな。そういうことではない。正直にいおう。王城がどうなつておるのか、今のところ何一つ情報が手に入っておらぬのだ。伺見かきまみを放つてある。もうしばし待たれよ。姫のことが分かり次第、そなたにも知らせる」

「……お願いします」

不安を隠しきれず、両手を握りしめるようにして頭を下げる。王太子は「ああ」と小さく答えると、まるで子供をあやすようにその頭をなでてやる。

「不安に思うのは無理もない。そなたは吾を信じるというてくれた。故に、それを裏切るようなまねはせぬ」

「はい」

小さくうなづく、力づけるように華奢な肩を叩き、再び椅子に凭れた。

青蘭は取り乱しそうになってしまったことを恥じ、小さく息をつくと口元に笑みを浮かべて顔をあげた。

本当は雪蘭のことばかりでなく、いつたいなにが起こっているのか、それも気になるところだが。王太子にはそれを話すつもりはないらしい。必要であればいずれ説明してくれるだろう。信じると決めたのだ。

かわりに、別のことを相談する。

「先ほどのお話に戻りますが。もし、何故女の私が小姓のふりをしてここにいと問われるようなことになりましたら、如何いたしましよう」

「先にいっておくが、絶対にあれと二人きりにならぬよう、肝に銘じておけ。そうなった場合、そなたの操がどうなっても知らぬからな。あれは自分でも云うておったように、女でも男でも見境がない。どうやらそなたは気に入られておるようだしな」

「……はい」

絶句しつつも、神妙に頷く。諦めと軽侮の混じった声には、説得力があった。

「問われればそなたのことは吾の女だともいうておくが。わざわざそのようなことで先に釘をさすのも妙ではあるし……そなたももしも時は吾と付きおつておることにしておけ。さすがに思いとどまるだろう、と思つのだがな……」

確信とはほど遠い語尾ははえらく説得力に欠ける。

青蘭は眉をひそめ、困惑顔で王太子を見る。

「いいきれないんですね」

「ああ」

「では、ともかく二人きりになるような状況は避けるよう努めます」「それが一番確実ではあるな」

王太子は困り果てたような顔で、深々と溜息をついた。

いつも余裕綽々だと思つていた彼に、こんな表情をさせる人物がいることが、青蘭はおかしくて仕方がない。

「苓公殿下は読めない方ですね。あれはどこまで本気でいらっしやるのですか？」

「それが分からぬのだ」

だからこそ、苓南の誓からきた守備隊と出会ったとき、彼の態度は煮え切らなかつたのだらう。

「幼いうちはああではなかつたのだが、いつしか。吾にも彼の真意は読めぬ。そのくせ、あれの周囲には疑惑を招く要素が多すぎる。疑惑を招くくせに、確証は掴ませない。それがあれ独特の遊戯なのか、それとも疑惑が真なのか　いつもはぐらかされてばかりだ」

苦り切つた言葉には、かすかに感情が混じっていた。できれば疑いたくはないのだ、とそんな本音が透けて見えるような。

「疑い、ですか？」

「彼の両親のことはそなたも知っておるか？」

「はい」

「明柊こそが東葉直系だという意見もあるのだ。あれの母は吾の母の異父姉に当たる故な」

母系の血筋こそがものをいうのは両国ともに同じ。西葉であつても、同じような意見は上がるだらう。というよりも、西葉にあつては碧柊が王太子とみなされることはありえない。父親の身分は問われない。姉妹の順序にこそ重きを置かれる。

西葉であれば王妃にふさわしいのは明柊の母であり、碧柊の母は王弟と結婚することになつていたはずだ。

「……確かにそれはそうかもしれないませぬね」

「東葉では父親の身分も問われるのだ。吾の祖父　母の父は王族だつた故な。だからわが母が王妃に選ばれた。そのあたりが東西では少々違う事情だな」

「そうですね」

西葉王女たる青蘭には理解しがたいことだが、表向きは頷いておく。

「だが、明柊の母　伯母上はそうは思つておられぬ。明柊こそが王太子にふさわしいと昔から憚ることなく公言されておられてな。明柊はそのことに一切触れぬが、母を敬愛していることも確かだ」

「……」  
「もう一つ加えるなら。吾の父と叔母上は若いころは恋仲にあったらしい。それを父親の出自を理由に引き裂かれ、妹である我が母が王妃となった」

そんな事情は初耳だった。青蘭には言葉が出てこない。結婚する以前に男性と恋仲になるということそのものが理解の範疇を超えている。

「こ、恋仲に、ですか……」

「王族の結婚は義務故、意に沿わぬ結婚は当然だが、それでも長年連れ添うことになるのだ。気持ちが通じているにこしたことはなからう。その点、父も叔母上也気の毒なことではあると思う。立場上、頻繁に顔を合わせることになるのだからな」

机に片肘をつき、王太子は小さく息をついた。

燃えるような夕日は遠ざかり、ゆっくりと空には藍が深まっていた。闇の帳は次第にこの部屋にも忍び込みつつある。うすぼんやりとした夕間暮れの一室で、その横顔の秀麗さは印象的だった。

「殿下ご自身も気持ちは通じていた方がよいとお考えですか？」  
「それにこしたことはなからう。事実上人身御供のような形で嫁いできていただいた故、それは難しいかも知れぬがな。そもそもその前にこの事態を一刻も早く収集せねばなるまい」

「……殿下は、姫のことをどう思っていますか？」

「そなたの話を聞く限り、連れ添うには心強い方であるようだ  
先入観は持ちたくないなどというたが、身近で親交のあるそなたから聞く話ならば当てにならぬ風評ではないしな」

そう呟いて、何故かにはかんだようにも見える笑顔を青蘭に向ける。

青蘭がした姫の話はほとんど雪蘭のことだった。

笑みを返しながらも、何故か胸の奥がちくりと痛んだ。

## 第2章 砦 8

青蘭を揺り起したのは王太子だった。

眠い目をこすりながらなんとか起き上がると、王太子は椅子の背にかけてあつた外套をまとい、身づくろいをしているところだった。室内はまだ薄暗い。夏の夜明けの早さを思えば、時刻はずいぶん早いはずだ。

簡素な机の上の蜜蝋はあと少しで燃え尽きそうだった。それを眠る前に新しいものと変えたのは青蘭自身。先に眠るように促され、素直に従った。

机の上には書簡がいくつも投げ出されている。ちらりと目をやるが、字を読み取る前に回収されてしまった。

結局あれから彼は一睡もしていないのだろうか。

几帳面に手にした紙を机の上で軽く揃えて整える。その横顔に、疲労の影は見えない。

昨日の明柁との一件でずいぶん印象が変わったような気もしたが、基本的に彼は他人に体調や感情を悟らせないのだろう。

「白霖、目は覚めたか？」

一揃えにしてまとめた書簡を、ぐしゃりと握りつぶす。そして、青蘭に呼びかける低い声。

青蘭はびくりと肩を震わせ、一呼吸おいて王太子を見上げた。

この薄暗さ、そして自分を白霖と読んだそのことと、王太子の声。なにかあつたのだ。もしくは、ようやく判明したのか。

青蘭は緊張して言葉を待つ。

王太子は髪を結わえる結び布を口にくわえ、無造作に髪を束ねなおしていた。ゆるんでいた髪をきつく結わえると、凜とした横顔がさらに厳しく引き締まる。空を見据える眼差しは鋭い。

窓の向こうももはや夜の闇ではない。夜明けに白む直前の淡い闇。そして、やわらかな蜜蝋の灯火。

その境に佇むような彼の姿は、切れ味鋭くそのくせ見る者を惑わせる怪しい光を放つ神刀の輝きを思わせる。

東葉あづはに嫁ぐ前に、青蘭は宝物庫の奥深くにしまわれてきたそれと対峙してきた。

王室の祖である女神が手にしたという神刀の写し。本物は神殿の総本山で守られているという。

正確に言えば、それをふるったのが女神自身であるかどうかは定かではない。担い手にはもう一人候補が存在する。それは女神の太刀にして盾でもあったという人の子。彼を父とし、そして女神を母として、葉王家よつぎは誕生した。それは遥かな古のこと。

神代から伝わるという太刀の刀身には一片も曇りもなく、ゆるやかに優美な弧を描く反りはしたたかにして強靱な粘り強さを思わせ、装飾一つない実用本位の拵えは清廉潔白な女神の性格にふさわしいものだった。

その太刀と並んで収蔵されてきたものが、盾。こちらは写しではなく、本物である。女神の印が刻まれた他に装飾性のないそれは、経てきた年月を思わせる手かかりは一つとしてなく、鑄造されたその瞬間ときをそのままにとどめていた。

いずれ青蘭の“夫”が西葉の王として即位する時に必要とされる。形式上は女王として即位するのは青蘭自身だが、祭祀をつかさどる巫女王にすぎず、国権は夫のものとなる。そのため、いつしか王統の継承権を自身が握るにもかかわらず、“女王”は王妃と通称されるようになった。

その、二つの神器。正確には太刀の方は写しであって本物ではないが。順当に婚儀が終わっていれば、いずれ彼がそれらを手に青蘭の夫として“西葉王位”を襲い、それをもって名実ともに“葉”の統一が成るはずだった。

けれどその時、青蘭に見えたものは、そういうものではなかったような気がした。

彼は青蘭の太刀と盾には違いない。けれど、その意味合いが従来

とは異なるような気がした。

髪を縛り終えた王太子は、自分をみつめたまま放心している青蘭に眉をひそめた。起こされたばかりで寝ぼけているという風ではない。

黒目がちで瞳が大きく、実際の年齢より幼い印象を与える双眸が、まるで鏡面のように光を帯びて見えた。表情も欠損している。だからといって自失している様子もなく、妖しげというよりも幽明の境にいるようだった。

「雪蘭殿？」

その呼びかけに、青蘭は小さく肩を動かした。ゆっくりとその瞳孔から光が失せ、今度こそ呆けているような“表情”が戻ってきた。「いかがした、まるで神がかったようだったぞ」

訝しさのまじった呆れたような声に、青蘭は明らかに動揺を見せた。

「……私はなにか？」

声が震えていた。わずだが、体も震えている。

すぐるような目に、碧柎くまじゆうは思わずたじろぐ。あくまで比喻として口にしただけであって、実際に神がかりをみたことがあるわけではない。そういえば、“真の直系”である西葉の王女が巫女でもあることを思い出す。けれど、彼女は王族ではないはずだった。

「いや、呆けておったのでな　まだ寝ぼけておるのか？」

「……そうかもしれません。でも、もう覚めました」

青蘭は誤魔化すように笑ってみせ、ぽんと自分の頭を叩く。彼はそれ以上言及せず、何気ない口調で問題を切り出した。

「今日中に砦を発つことになろう。状況は悪い　吾にとってはな。そなたはこのまま王城に取って返した方が安全かもしれぬ。その場合供をつけてやる。まずは中將から話を聞け。そして自分で判断を下せ」

思いがけない言葉だった。

今度こそぼかんと見上げる彼女を一瞥することもせず、王太子は



部屋を出て行こうとする。青蘭は咄嗟にその後ろ姿を追いかけようとして、寝台から転落した。

あきらかに人が落ちた音に、さすがに彼も足を止めた。

床の上に蹲った青蘭は、痛そうに額をさすっている。

「顔から落ちたのか？」

「はい」

苦笑する毗には、痛みのみならず光るものにじんんでいる。

王太子はとつてかえし膝をつく、傷をかばう青蘭の腕を強引にどけた。

派手な音をたてたわりに、そこは薄い発赤と擦り傷がいくつもあるだけだった。うつすらと血がにじんでいる。みれば、顔をかばったものらしく細い腕のあちこちにも擦り傷とうち身があった。

思わず小さく笑うと、無言で抗議するように鋭い視線が返ってくる。

そうとう痛かったのだろう。

幼かった頃、明柊（めいしゅう）と庭園で遊んでいた頃には似たようなことは何度もあった。ひどくなつかしい心地で、ついついその頃のやり方でしてしまった。

傷口にかぶさる前髪をかきあげ、唇を寄せるとその舌先で傷口をなぞった。

ひりひりと焼けるような額に、生温かく柔らかな感触が伝わっていた。

反射的に青蘭は凍りつく。傷をのぞきこんでいたので、そもそも王太子の顔はかなり近くにあった。痛みのみならずそんなことまで気にしていられなかったが、今度は事情が違う。

なにをされたのか分からずばかんと顔を上げれば、彼は小さく笑いながら立ち上がるうとしていた。

「かすり傷だ、唾でもつけておけばじき治るっ」

そしてほんと青蘭の頭を叩き、そのまま部屋を出ていった。

啞然と見送っていると、入れ替わりで綾萩（りょうりん）が入ってくる。

床に蹲り、あちこちに血をにじませて呆然としている青蘭を目にすると、慌てて駆け寄ってきた。

## 第2章 砦 9

主の去った後の椅子はまだかすかにあたたかい。蜜蝋の灯りを受けやすいように燭台を動かして、綾萩は手当ての準備のためにかいがいしく動いている。

綾萩はまず水を浸した布で傷口を洗ってくれた。彼が運んできていた水差しと空の盥は、そもそも誰のために用意されたものだったのだろう。

口先では礼を述べながら、つつい空いている方の指先で額に触れてしまう。

「顔から落ちたのですか？」

「ええ」

「ばつが悪くて笑うしかない。」

「顔に傷が残ったらどうするんですか？」

手をどけてくださいと言いついて、綾萩は額の傷も拭ってくれた。何故か心残りの想いも感じながら、青蘭は小さく息をつく。

「普通はそういう風にいつてくださいませよね」

「また殿下がなにか？」

問う前から予想はつくといいたげに、綾萩は苦笑する。

「唾でもつけておけば治ると笑われて」

「不服そうに前髪の上から額をさする。」

綾萩は仕方ないですねと肩を落とし、ふと眉をあげた。

「まさかとは思いますが、殿下が？」

「……」

さすがに答えられず、気まずげな顔で黙り込んでしまう。

王太子と入れ替わりで入室した時の彼女のようすも、ただ寝台から落ちたにはおかしかったもしれない。

中將にも察しがついたらしく、深々と溜息をついた。

「中將殿もされたことが？」

「はい」といつても、ずっと昔のお互いにまだ子供だった頃のことです。ですから、それがあの方の癖だというわけではないのですが。たまに小姓見習いの子供が入ってくると、今でも稀にないのですね。父性本能が刺激されるのか……基本的に面倒見のよい方なので、よい父親になる素養をお持ちだとも云えるのですが」

云い繕う分、多弁になる。言い訳するほど苦しくなることをようやく悟つてか、彼はなんともいえない表情で口をつぐんだ。

いくら小姓として仕えることになったとはいえ、青蘭は妙齡の女性だ。こうして男装をしても、その持前の愛らしさは損なわることはない。成熟した美よりも愛らしさが勝る分、保護欲をそそられるといえはそうかもしれないが。

青蘭は納得のいかない想いをかみしめていた。

もう17歳になる。一つ違いの雪蘭と何度も入れ替わったが、疑われたことはない。従姉は十二分に年頃の娘らしさをまとっている。

青蘭は自分でも気づいていなかった。青蘭も従姉を装っている間は、確かにそれらしい年頃に見える。けれど、塗装がはげて地金が見えてくるにつれ、年よりも幼く見えてしまう。それは外見よりむしろ青蘭自身の性質のためだ。

「あなたを見ていると、私でもついつい世話を焼きたくなりますからね。殿下のお気持ちも分からないではありませんが。あなたにとつてはそれですむことではありませんね」

「……悪気でなさってわけではないことは分かっていますから」

「水に流してくださいますか？」

「はい」

素直に頷くと、何故か同時に目があってしまい、二人は小さくふきだした。

「本当に申し訳ありませんね」

「本当に」

くつくつとしばらく笑ったのち、青蘭は一呼吸置いて姿勢をただした。

「それでは、お話を聞かせください。中将殿」

綾糸は壁にもたれかかり、静かに切り出した。

すでに高い窓から淡い光があふれつつある。日の出は反対側の方角になるため、眩しいほどではない。長い一日になるかもしれないと、青蘭は小さく息をついた。

「雪蘭殿はなにをどこまでご存知ですか？」

「東葉王陛下が西葉の手の者により弑されたらしいとのみ。殿下はそれ以外のことはなにも仰られませんでした。先ほど、私は王城に戻った方が安全かも知れないとは仰られましたが、それだけです」

彼がそう判断するにいたるまでに、経緯はあつたのだろう。昨晚だけでなく、一昨日の夜も書簡が届いていた。それに険しい顔をしていたのは、青蘭も目にはしている。

「まだ状況は混乱しています。今、分かっている範囲で説明しましょう」

そう云いおいて、綾糸は腕を組んだ。

青蘭があのある庭で王太子とはじめて会ったころ、大広間では花嫁の入城式に引き続き宴がひらかれていた。

王女は面纱で顔を隠し、さらに十重二十重に張り巡らされた帳とほじに守られて臨席する。それをいいことに、青蘭は雪蘭に我がままを云つて入城式と宴の間に入替ってもらっていた。

王女は出席せねばならないが、女官の一人くらい欠けても支障はない。声をかけられることがあっても、王女が自ら直接答えるようなことは絶対はない。必ず女官長がさしさわりのない短い応えを返す。それはある種の儀式めいており、慣例通りの受け答えが繰り返されるだけの退屈極まりないものだった。

だからこそ青蘭はこれが最後を言い訳に逃げ出すのを選んだわけだが、今となつては悔やまれるばかりだ。

花嫁の一行のなかには、青蘭の父・西葉王さいはの代理である遣使もまじっていた。遣使が東葉王に謁見するため前に進み出たおり、遣使の隋人の一人が東葉王に刃物をむけたということらしい。

宴には入城式直前に東葉王都に到着した蒼杞そうきの一行も列席していた。王が斃れた瞬間、その一行が太刀を抜いたらしい。花嫁として上座にあった青蘭を守るはずの、西葉近衛小隊の者までそれに続いたという報告もあるという。

それでも両者あわせても百名前後に過ぎない。さらに宮殿の外にも数百人が控えていたはずだが、東葉軍の数が圧倒的に勝っていたはずだ。それにもかかわらず西葉側が不意を突く形で有利に動き、上級貴族を人質にとられた東葉側は抵抗もできずあっけなく王城を明け渡してしまった。

西葉の軍人とは別に、東葉軍の中からも所属不明のものたちがそれに呼応する形で王城制圧に加担した。

両国の国境沿いの森に潜んでいた東葉軍の一師団が越境していたらしく、夜明け前には東葉王都翠華すいかに到着した。混乱に乗じて王都までもが易々と占領されてしまった。

その翌日には本体である軍団が国境を侵した。

「何故、そんなことに……」

冬の終わりの戦いで、西葉は惨敗した。

圧倒的な勝利を手にした東葉は、西葉軍をほぼ解体した上、王位継承者である青蘭を差し出させた。それは事実上、東西にわかれた葉の再統一への布石であり、同時に西葉の滅亡を意味した。

「おそらく、東葉側の有力者の中に内通者がいたのでしょう」

綾霖は苦々しさを隠しきれない様子で応じた。

青蘭にも西葉軍の解体の経過は知らされていた。東葉による内政干渉は順調に進んでいるように思われた。

「けれど、どうすればそのようなことを隠しきれるのですか」

隠すには規模が大きすぎる。確かに西葉の自衛のため、王家直属の軍団が一つだけ残された。それとて東葉の監視下に置かれていた

はずだった。

「だからこそ、内通者は有力者でなければ無理だということですよ」

「内通……統一を阻むものが東葉側に？」

まさかと顔をひきつらせた青蘭に、綾霖は小さく首を振った。

「祖国統一を皆が皆、諸手をあげて歓迎しているわけではありませんせん」

「……それもそうですね」

何事にも利害が絡む。両国が対立していてこそ、利を貪ることができるものがあり、立場を守れるものがある。二つの国に分かたれておよそ百年。両国は争いを繰り返しながらも、それぞれの国内ではそれなりの安定を得ていた。それにはそれだけの理由があったのだ。

「王太子殿下と苓公殿下が共に王城を脱出され、この苓南の砦におられることは知られています。西葉東宮は軍団を率いてこちらを指し、南下しているとのこと。当主を人質に取られ、あるいは亡くし、他の貴族たちは未だ混乱のなかにあります。援軍を期待できる状況ではありません」

戦力は苓南の砦の守備隊と、苓家の領主の手勢のみ。王太子の率いる近衛師団も不意打ちにちりじりになり、未だ全員が集まりきっていないわけではないという。せいぜい数百から千。万を擁する西葉側に到底かなう数字ではない。

青蘭はうなだれつつ、力なく呟いた。

「だからこそ、殿下は私に翠華へ戻った方が良いかもしれないと仰ったのですね」

打ちのめされる。なにに、ではなく、すべてに。

青蘭は文字通り頭を抱える。吐き気がこみあげてくる。なにを考えばよいか分からず、ただいたずらに拍動が増す。まるで耳のすぐそばで鼓動が繰り返されているように、耳についてはなれない。

雪蘭、と声にせず呼ぶ。本当は叫びたい。雪蘭、助けて、と。どうすればいいのか教えてほしかった。呪いのように従姉の名を心の

中で繰り返し返した末、ようやくとの思いで呟いた。

「一刻……一刻だけ、時間をくださいませんか」

絞り出すような声に、綾森は沈鬱な面持ちでうなづいてくれた。



扉が静かに閉まり、綾霖の足音が遠ざかっていく。螺旋階段に規則正しい残響が幾重にも絡まるのを遠く聴きながら、青蘭は深々と溜息をついた。

一刻、とは区切ったものの。

正直、頭は真っ白で、どんな考えも浮かんでこない。いたずらに鼓動だけが早鐘を打つ。

はやく決めなくては、結論を出さなくては。

焦燥感だけが胸を焼く。

空回りを続ける思考と、苛々と募るもどかしさ。

頭を抱えて俯き、ひたすら考えようとするが、どうにも動揺がおさまらない。

指先を頭皮に食い込ませ、唇を噛みしめているとぼたりとなにかが滴り落ちた。

使いこまれた机の上に、黒々とした小さな滴の跡。指先でなぞると、かすかに温かい。それと同時に鈍い痛みが走る。

「……」

手の甲を押しあててみれば、一筋の跡。それも同じく薄明の中では黒く見えた。

それを舌先でなめとる。嫌な味がするが、鈍痛とそれが少しは気分を落ち着かせてくれたようだった。

それと同時に、近づいてくる靴音に気づく。遠い残響が次第に近づく。その足取りに耳を澄ませ、誰が来たのかを悟り、青蘭は困惑した。

まだ、結論は到底出せない。綾霖は一刻だけ待ってけると請け合ってくれたが、その主は了解してくれなかったのだろうか。

事態は刻一刻と悪化している。それどころではないことはわかる。けれど、決断を迫るなら、もっと前から知らせてほしかった。

自分なりに色々考えてはいたが、まさかこんな事態になっているとは。予想外に過ぎた。事態を把握することすら満足にできていない。動揺している時間はない。けれど、それが分かっているからといって、感情まで制御できるわけではない。

雪蘭なら動揺などしないだろうか。もっと落ち着いて事態を把握し、即断できるだろうか。

きつと、できる。雪蘭なら。

けれど、自分は雪蘭ではない。ここにいるのが本当に雪蘭だったなら、こんな非常事態に彼らを煩わせずにすんだかもしれないのに、そんな自己嫌悪をしている暇はない。それが分かっているながら、青蘭の想いは逃げる。逃げていると分かっているから、尚更に自己嫌悪は募る。

再び、噛みしめてしまう。痛みで気持ちのおさまるような気がした。

結局、結論を出すこともできないまま、彼が扉を開いた。

青蘭は重い体を引きずりながらのろりと立ち上がり、席を譲る。だいたい、小姓として振舞うなら、ここに座っていたことすら間違っている。

俯いたままの青蘭に声もかけず、彼は運んできたものを机の上に置いた。ふつと温かな臭いが鼻孔をくすぐる。つられて顔を上げると、そこには盆にのせられた湯気の上がる木の器があった。

王太子は振り返ると、青蘭の顔を眺め、次いで深々と溜息をついた。

「またか このような癖は早々に治せ」

節くれだった硬い指先が、やさしく青蘭の唇を拭った。その指先にも血が付いていた。それを検分するように見る彼の表情は苦しい。

またやってしまったと、冷静に一步離れて己を見つめるような心地になれば、呆れてものもいえない。恥ずかしさでうつむけば、両肩を強引につかまれた。抗う間もなく引きずられるように移動させられ、また椅子に座らされてしまう。

「ともかく食せ。空腹だどろくな考えも浮かばぬものだ。まずは腹を満たせ。それから考える」

「けれど……」

強引に木匙を持たされる。

「吾はもつすませた。摂れる時に摂っておかねばな。これも務めだ」  
食欲がないと訴える前に封じられてしまった。

確かに、食べられる時に摂っておかねければならない。空腹で倒れたりすれば、迷惑をかけるだけだ。これ以上足手まといになりかねない条件は増やしたくない。

「だいたい、食欲がないなどごねるのはただの我儘だ。それこそ、今はそんなことをいっていられる場合ではない。」

「はい」

小さいが、しっかりした口調で応じると、小さな笑いが降ってくる。

何故かその笑顔を見たい衝動にかられ、振り返って見上げる。彼は子供を見守るような温かな眼差しで、青蘭を見つめていた。

「如何した？」

「いえ いただきます」

戸惑った末に、にこりと笑ってみせる。笑うのは難しかった。笑えただろうかと不安がよぎれば、彼は口の端を意地悪気に歪めた。

「食い意地がはっているようなら大丈夫だな」

「！」

思わず木匙を握る手に力が入る。むっとした顔で握り拳を作るのを確認すると、彼はぽんと青蘭の頭に手をのせた。

「ほら、早く食せ。冷める」

「言われずともいただきます！」

ぱしりとその手を払い落とし、青蘭はふいと顔をそむける。椀を手にすると王太子に背を向け、ぱくぱくと食事をはじめた。

「ゆっくり食べよ 一刻後にまた来る」

そう云い置いて、彼は出ていった。

最後の言葉は優しいが、厳しいものでもあった。

青蘭は手を止め、しまった扉を振り返る。

「……ありがとうございます」

誰もいない空間に、言葉が落ちる。

なんとも言えない気持ちがかみ上げる。それは嬉しさなのか、感謝なのか、それとも気恥ずかしさなのか。青蘭にも分からない。ただ、今度はきちんと面と向かって伝えたいと、そう思っていた。

一刻も経つと、西向きの窓からも朝の明るさがさしこんでくる。その淡い光のなかで、青蘭は穏やかな容子で座っていた。

果たしてどんな決断を下したかと、案じながら長い階段をのぼってきた王太子は、彼女の落ち着いた表情にとりあえず安堵した。

「結論は出たか？」

「はい 足手まといでなければ、このまま残らせてください」

碧柝はしばし黙した後、腕組みをして壁にもたれた。

「重ねて申すが状況は悪い。それに吾はもはやそなたも青蘭姫のことも疑つてはおらぬ 姫のためにも、そなたは戻つた方が良いのではないか？」

表情は険しい。自分で判断しろとはいったが、十中八九戻ると結論すると思つていたのでろう。

青蘭は小さく首を振る。

青蘭がここに残れば間違はなく足手まといになる。それを承知で残ると決めたのは、それなりの理由あつてのことだ。それは彼にも理解しておいてもらった方が良くてもあつた。

「東宮は 蒼杞さまはいずれ姫を亡きものにしようとなさるでしょう。これまでも何度とあつたことです。私がここで戻つたところで防ぎきれるものではありません。それよりも一刻も早く事態を收拾し、姫を救出していただけるよう尽力させていただいた方が良くないと考えました」

兄がなにを考えてこのような事態を引き起こしたのかは知らない。それでも、いくら考えても彼に命を狙われる公算は高いように思われた。

青蘭が生きている限り、西葉の王位も、葉の玉座も兄の手には届かない。青蘭が死んではじめてようやく彼の出番となる。ましてやそれまでに青蘭が結婚し、万が一王女を出産すれば、さらにそれは

彼から遠ざかる。

ここで雪蘭として東葉王都翠華すいかに戻ったところで、二人諸共命を落とすことになりかねない。

本当は一刻も早く雪蘭のもとに戻りたい。けれど、そういうわけにもいかない。

絶対に死なないというのは、二人の間で固く結ばれた約束だった。今となってみれば、入城式の後の宴の前に入替るのを認めてくれたのは、日ごろ厳しい雪蘭にはおかしなことだった。

長かった旅程と堅苦しい入城式にうんざりし、閉口していた青蘭の不機嫌をやたらと指摘し、入替ってほしいと云いだすように仕向けられたような気もする。

おそらく雪蘭は直前になってようやく蒼杞の企みを掴んだもの、もはやどうしようもなかったのだろう。

東葉の不意を突く形で勝利をおさめ、万が一にも葉の統一をはかれるような事態になった場合、真っ先に邪魔になるのは青蘭だ。青蘭だけでも逃がそうと、入れ替わるように仕向けたのだろう。

それを知らされていれば、青蘭は絶対に入れ替わることなど云い出しはしなかった。そんな場所に大切な従姉を残して逃げることなどできない。だからこそ、雪蘭はなにもしらせてくれなかったのだろう。

真の狙いの知らせないまま、遊戯のように女官と王女の入替りをそのかした従姉だ。青蘭を守るためならば、本当に自らの命を危険をさらすこともためらわない。

そんな彼女との約束をみすみす破るような真似につながる行動は、青蘭には選択できなかった。

こうなると、もはや雪蘭は命を落としている可能性すらある。

そこまで思い至った時、青蘭は思わず撰ったばかりの朝食を戻しそうになったが辛うじて堪えた。

葉王家直系の王女として生まれ、雪蘭の助力でここまで生き延びることができた。

父が犯したかも知れぬ罪、そして兄にまつわる悪業。同じ血をひくものとして、青蘭にはそれを正す義務と償いと務めがある。

絶対にあなたは死んではだめ。

幾人もの女官が目の前で落命した。自分の命より大切な従姉ですから、生死の境をさまよった。それらを目の当たりにしても、雪蘭は青蘭に生きることを命じた。

青蘭の自己評価は低い。雪蘭と比すれば、どれほどの価値もないと思っっている。それでも己の命を優先せねばと考えるのは、もはや刷り込みに近い。

物心つく前から、周囲から存在を、価値を、否定され続け、自分でもそれを受け入れていた幼子。そんな青蘭の前に現れた、救世主のごとき存在。彼女のいうことならば、どんなことでも無条件で受け入れた。自分を肯定してくれる唯一の存在故、その温もりと信頼には逆らえなかった。

青蘭にとつて、雪蘭は絶対的な存在で、己の世界の根幹にかかわる唯一の存在だった。故に、その言葉に逆らうことはできない。

「それも、青蘭姫ならどう考えるか、か？」

「はい」

応じる青蘭にためらいはない。それに、王太子は眉をひそめる。

「そなたはそれでよいのか？」

「はい」

生真面目に頷く青蘭に、王太子は小さく息をついた。彼の抱く危険は、彼女には通じない。

「尽力、と云うたな。では問う。そなたになにができる」

「紅桂殿下の残したものがありません」

「ほう　その実態は如何なるものだ？」

「西葉における組織網にございます」

実際に掌握しているのは雪蘭だが、青蘭にも同じだけの術がゆだねられている。蒼杞のことは青蘭を納得させる暇がなかったため、雪蘭はあえて伏せたのだらう。それ以外のことは青蘭も雪蘭と同等

に把握してきた。ただそれをどう活かすかは、雪蘭に任せっきりだった。

思いがけないことを耳にしたというように、王太子はわずかに目を睜った。手ごたえを得た青蘭は、畳みかける。

「西葉貴族のすべてが蒼杞さまを支持しているわけではございません。むしろ、蒼杞さまを恐れている者の方が多いほどです。此度、西葉がこのような暴挙に出たからと言って、それが西葉の総意というわけではございません」

だからこそ、青蘭もこれまで生き延びることができたのだ。

碧柊は目を眇めるようにして青蘭を見据えていた。それでも臆することのないように納得したのか、姿勢をただすとそのまま青蘭のそばまで歩み寄り、右手を差し出した。

「ではご尽力いただきこう、雪蘭殿」

重々しい言葉。その表情にいつものようなからかう気振りはみじんもない。青蘭は一呼吸置き、その手を握り返した。

「承りました、殿下」

軽く握手を交わしたのち、碧柊は青蘭の顔にかかる前髪をそつと指先ですくう。

「なれど、真に後悔せぬか？」

「……絶対に死んではいけないと約束したのです」

俯き加減で応じる青蘭の顔は今にも泣きそうだしそうに強張っていたが、彼はあえて指摘はしなかった。

「では、その盆を持ってついてこい。色々支度がある故。それから、これだ　太刀は扱えるか？」

そう云って、腰帯にさした太刀を鞘ごと抜いてよこした。

小ぶりの太刀だった。砦の兵士たちと比べれば華奢でみえる青蘭だが、女性としては小柄なわけではない。上背だけなら小姓見習いの少年と名乗ってもおかしくない。

その太刀は青蘭にも扱いやすいものだった。刀身の中ほどから反りが入っている。刃先を上にして腰帯にさすと、王太子は眉を上げ



る。

「ほう、そうさすか」

「この長さなら、この方が抜きやすいですから」

武芸は王女の嗜みの一つでもある。その一方で高貴な女性が掌の固くなるほど訓練するものではないとも窺められたため、鍛錬していたわけではない。武人と比べれば心得があるうちにも入らない。

昔から葉では女性も武芸をたしなんできた。上古、女神自ら太刀を手にし戦ったという伝承にのっとりての伝統だが、次第に廃れ、あまり熱心にするものではないという風潮もある。

それでも、伝統は伝統。特に貴族階級の女性なら必須とされる。そのくせ、あまりに勇名をはせると、縁談が遠のいてしまうということもままある。

東葉ではその風潮が強く、わざわざ娘に得物を与えない親もいる。

「100年たつと、それぞれに違いが出てくるものなのだな」

「？」

「東葉の女性ならそうはいくまい」

東葉王家でも時代が下るにつれその傾向が強くなり、今では王女には太刀の一通りの扱いは教えるが、武芸ということまではやらせない。王女が太刀を手にするのは儀式のときのみだった。

ましてや太刀の長さや反り具合から抜刀のしやすさ考慮して、刃を上向きにさすなどできることではない。

感心したようにしげしげと見つられ、青蘭はなにを思ったか眉をひそめた。

「どうせ西葉の女は怖いですよ」

巷にはこんな話がある。夫婦喧嘩をしても、東葉の女ならせいぜい鍋や桶が飛んでくるくらいだが、西葉の女は血の雨をふらせるといふ。太刀を手にするれば腕前が夫より上な妻もいるほどで、特に西葉では笑い話にならないこともある。

青蘭に睨まれて、ようやくそれに思い至ったのか、王太子は笑いだした。

「いや、遅しくていいことだと吾は思うがな。守ってやりたくとも、その腕が届かぬこともある。太刀を手にした敵に囲まれてへたり込んでしまう女性より、共に戦ってくれる西葉の女性の方が吾は良い」  
「……それをいわれて、私はどうお返しすれば良いのです？ 同等に見なしていただいたお礼を述べるべきか、それとも頼りない殿方と詰るべきなのですか？」

素直に困惑する青蘭に、碧柊はまた笑う。

「好きなようになさるがよい」

ほんと青蘭の頭を軽く叩き、行くぞと促す。納得いかない顔で青蘭が続こうとすると、彼は扉をあけたまま足を止めた。振り返ると、盆を持ったまま何事からきよとんと見上げる青蘭の頭に手をのせる。  
「そなた、何事も青蘭姫を指標に判断していると思うておるようだが、それは違うのではないか？」

「え？」

「ここにいるのはそなただけだ。そなたが自分で考え、判断を下したことだ。その過程で姫のやりようを参考にしたのだとしても、実際に考えておるのはそなただろう。なんとすべきか……もう少し、そのあたりを自覚せねばならぬと思うがな」

「……」

いわれていることが分からず、青蘭は沈黙する。その困り切った顔に、王太子は少し困ったように眉尻を下げた。

「いわれて分かることでもないな　そなたは確かに頼りないが、吾は頼もしいと思っておるぞ」

「……ますます分かりません」

いつものように、からかわれているわけでもないらしい。青蘭はますます理解に苦しみ、眉間にしわを寄せた。

彼は苦笑いし、「まあ、よい」と呟いた。そしてやおら顔を近付け、青蘭の耳元に囁いた。

「そなたは吾か綾霖か、せめて近衛のものから絶対に離れるな少々解せぬことがある。なにが起こるか分からぬ故、絶対に傍を離

れるでないぞ」

その声は低く、冷やかに響いた。

## 第2章 砦 11 (後書き)

補足：青蘭に渡された得物を小ぶりの太刀としていますが、実質的には打ち刀と同じです。反り具合も同じです。太刀はもつと切っ先に近い方から反りが入ります。太刀は本来刃を下に向けます。刃が上を向いた時点で打ち刀とすべきかもしれませんが、そう書くとなんだか江戸が舞台の時代劇のような印象になってしまうので（あくまで私が、ですが）そっとしておいてください。

螺旋階段を降りたところで、青蘭は足を止めた。足のはやい王子のあとを雛鳥のように懸命に追い、ひたすらぐるぐると回るはめになったため、少なからず気分が悪くなっていた。

先に行く王太子に声をかける余裕もないまま、青蘭は壁にもたれて少し屈む。

塔の外の風は、初夏の朝の瑞々しい心地よさで頬に触れる。

苓南の砦は、砦といっても街道守備隊の主要拠点でもあり、常時一定の人数が駐屯しているため、その規模は城に近い。

城壁沿いにある五つの塔からのびる直線の通路は、砦の中央で交わる。その上に王太子や苓公の居室のある中央の塔が聳えていた。

中央の塔の階段は門に通じる広場に面している。通路や広場は人々や馬でごった返していた。あちこちでなにやら指示する大声や怒声が飛び交い、防具をつけた大柄な男たちが全身から金属音を立てながら行き交う。

引き立てられる馬にもすでに防具が取り付けられていた。

いよいよ出陣が間近に迫った緊迫感、まったく戦場を知らない青蘭の肌にも感じられた。雑然としているようでいて、一つの目標に向かって人々は動いている。騒然としつつも、緊張の糸が張りつめている。

近衛の軍服を身につけ、髪を切り凛々しく一纏めに束ねてみても、青蘭の体格の貧弱さはなんともしようがない。鎧は小さな鉄の板を革で編み上げたもので、軽量化が図られているが、青蘭が身につければ立っていることすら難しいだろう。

ゆっくりと呼吸を繰り返しながら、顔をあげてあたりのようすをよく見る。

非常に不利な事態だときいたが、そのわりに悲壮感は漂っていない。それは何故だろうと内心首をひねりつつ、なんとか気を取り直

して立ち上がると、王太子が慌てた様子で戻ってくるどころだった。

「白霖、なにを」

「申し訳ありません、少し気分が悪くなっ……」

「今ごろご起床かい。ずいぶんと大切にされてるねえ」

するりと脇から肩に手を回される。こんな事態にもかかわらず、

朝からこの調子のいい物言いは、一人しかいない。

青蘭は息の詰まるような想いで身を竦ませ、恐る恐るそれを確認した。さりげない仕草でがちり青蘭を抱き寄せてしまった当人は、実に上機嫌で碧柊に笑顔をふりまいていた。

「これほど愛らしいのだから無理もないが、ここまでお前に大切にされているのかと思うと妬けてくるよ。俺にはとことん冷たいのね」

「明柊」

底冷えのするような声で低く名を呼ばれると、苓公は嬉しげに身を震わせてみせる。その拍子にさらにきつく抱き寄せられる形になり、青蘭は逃げられなくなる。力づくで押さえこまれているわけではないのに、身をよじることさえかなわない。手にした盆も取り落としてしまったが、騒然した空気にかき消されてしまう。

「朝からお前に名を呼んでもらえるなんて、今日はいいい一日になりそうだ」

「人生最後の日になってもよいのか」

そばで聴く者があれば、肝が冷えるような殺気に満ちている。それにも負けずに、明柊は青蘭を引きずるようにして嬉しげに従弟に近づいていく。

「長年の片思いがかなうなら、死んで本望だ」

「では殺してやる。その前に、それを返せ。それは吾のお気に入りで」

首根っこを掴まれ、乱暴に引きはがされる。一時的に首がしまつて呼吸ができなくなる。ようやく解放されてもひどく咳きこんでしまう。抗議しようにもその余裕もない。その背を碧柊の手が撫でて

くれる。

「この期に及んでけち臭いことをいうな」

名残惜しそうに手を伸ばしてくる明柊のそれを乱暴に払いのけ、碧柊はぐいと青蘭を自分の背後に押しやった。

彼の影に隠れ、青蘭はやっと人心地を取り戻す。それでも到底顔を上げられる状態ではない。雪蘭と相似形のこの顔を、真正面から苓公にさらすわけにはいかない。

「お前はとつくに朝食をすませたくせに、まだ盆を持ってどこへ行くのやらと気になってしょうがなくてね。そうすれば連れだって塔から降りてくるじゃないか。王太子殿下が手ずから食事を運んでくださるなんて、前代未聞だろう。妬けるのは当然じゃないか」

明柊はわざわざ碧柊の背後をのぞきこむ。狙い通り従弟が眉間にしわを寄せ、乱暴に明柊を押しやるうとすると、それを待ちかまえていたように逆にその腕を掴んだ。

腕を掴まれた碧柊はしまったと振りほどこうとしたが、それ以上に力だがみつかれ、どうにもならない。

青蘭は慄いて後ずさる。

子供同士なら無邪気で微笑ましいが、どう見ても尋常な構図ではない。

「明柊……」

碧柊の声がわずかに震える。あまりの剣呑さに固唾をのんで見守っていると、ひゅんと音がして白刃が空を切った。

「ひっ」

声を飲んだのは青蘭だった。太刀を抜き放った碧柊は、容赦なく従兄に切りつけた。

「おおっと」

明柊は間の抜けた声を上げながら、易々とそれを避ける。見事な身のこなしに、青蘭は武人としての彼の資質を思い知らされた。

「ひどいなあ、いきなり切りつけるなんて」

「死んで本望だと申したではないか」

男に二言はないと言って、碧柊はさらに太刀を構える。明柊は奇声をあげて飛びのき、そのついでにすっかり呆気に取られていた青蘭の顔を正面からのぞきこんでいった。

形の良い唇が笑みに歪み、切れ長の眼はまるでおもちゃでも見つけたように楽しそうに煌めいている。日に焼けた精悍で凜々しい顔は、華やかな艶っぱさをも持ち合わせていた。同じような造作でも、その持ち主の気質一つでこれほどまでに異なるものかと思わせるほどに。

一方、驚きのあまり目を瞠って口をぽかんとあけている青蘭は、実際の年齢以上に稚く見える。見事な黒髪に縁どられた白い貌と黒目がちの大きな目は、とうてい少年のものではない。

「っ」

己のあまりの迂闊さに、青蘭は顔をひきつらせて息をのむ。慌てて顔を覆ったが、後の祭りだ。

それに気づいた碧柊は、とたんに醒めた目をして太刀をおろした。抜き放ったままだが、自然に切っ先をおろしている。柄は利き手である右手で軽く握ったままだ。

それこそが彼本来の構えだと知る明柊は、素早く刃の届かぬところまで退いた。

「昨日はちらりとしか顔を拝せなかつたから気になっていたんだよ。やはり愛らしい小姓だね、まるで女の子のようだ。どこかでお会いしたような気もするが、これほどの可憐さをこの俺が見忘れるはずもないしねえ。斬家のものなら、いずれかの折に王城でお目にかかったかも知れないね」

「そういうことだろう」

碧柊は明柊の視線を遮るように青蘭の前に立ちはだかる。

「まあ、そういうことにしておこうか。よく似たご令嬢もいらっしやっただよう気もするが、それも気のせいかな？」

「気のせいだろう。お前は気が多すぎる。いちいち覚えていられぬと言っておったではないか」



「そんなこともいったかな」

無責任に言いおいて、明柊はからからと笑った。

「4度目にお目にかかれる日を楽しみにしているよ、白霖殿」

さらに接吻を投げてよこし、碧柊はあきれかえったように息をついた。

明柊はそのまま陽気な足取りで去っていく。

ようやく王太子の影から顔をのぞかせた青蘭は、心底くたびれた想いで肩を落とした。

「4度目？ まだこれで2度目なのに……」

「1度目は入城式のときだったと言いたいのだろう」

碧柊は苦り切った口調で応じ、落ちた盆と食器を拾い上げた。青蘭は慌ててそれを引き取り、二人は強張った顔を見合わせた。

「そなたが雪蘭殿だと確信したようだな」

「けれど、何故、なにも仰られないのでしょうか」

「面白がっているのだろう」

彼はそう云って苦笑して見せた。だが、そんなはずのないことを一番よく承知しているのは碧柊だった。

初夏の風を想わせる香がまだたちこめていた。

幾重もの紗の帳がおろされた寝台には、白絹の寝具が用いられ、主の就寝を待つのみとなっている。ここで、花嫁ははじめて花婿と顔をあわせ、閨を共にするはずであった。寝具からほのかに立ちのぼる香りは、まだ年若い花嫁の緊張を和らげるためにたきこまれたものだったのか。

腰高の窓辺に椅子を寄せ、一晚中まどろむこともできずにいた彼女は、いつこうに効かぬようだった。まんじりともせず長い夜を過ごしたその顔には、疲労が影を落とす。

高々と結いあげた髪は、花鳥にみたてたとりどりの貴石や金銀をあしらった步揺（ほゆう：かんざし）や生花でふんだんに飾られていたが、それらも今はすべて外され、傍らの小卓の上に積みまわっている。

とき流された髪は肩のあたりでゆるく結わえられている。やわらかな絹糸の如き黒髪は、腰に届くほど長い。

衣装だけが宴にのぞむ盛装のままだった。

払暁の光は未だ届かぬ。夜と朝の端境は闇を靄でときほぐしたように曖昧で、その移ろいも定かではない。

彼女は窓の棧にもたれ、焦点のあわない視線をさまよわせていた。それがわずかに眇められる。注視していなければわからないほどの、わずかな動きだった。

わずかに呼吸をするように唇が動く。

「姫は？」

「城の何処にも」

影が囁く。いずこに潜んでいるのかは知れぬ。

「遺留品も？」

「姫につけておりましたかきまみ視見の遺骸のみ」

「手掛かりがあるはずもなし」

「はい」

「姫を探して。生きていれば必ず接触を求めてくるはず」

「はい」

影が消える。焰が燃え尽きるほどの、わずかな気配を残して。

黒目がちの大きな瞳を細め、口の端を引きむすぶ。

その時、隣の控室の扉が静かに叩かれた。主寝室の隣には、女官の控える小部屋がある。

外と通じる唯一の扉の前には、警備と称した見張りの兵がはりついている。上層階にあるため、他に逃げ道はない。

静かに滑り込んできた女官長は、三〇前後の小作りな顔だちの女だった。

天蓋付きの大きな寝台を中心に、名高い画家により描かれた衝立や凝った意匠と重厚な装飾に飾られた様々な家具の並ぶ広い室内。

その片隅に少女の姿を見つける。

近づけば、ようやく振り向く。くつきりとした目には勝ち気な光が宿っている。それ以外は無表情に近い。女官長ともう一人だけが知る、彼女の素顔だった。

「姫につけておいた覗見かきまみが殺された。姫に関する手掛かりは見つからない。おそらく城内にはいない」

「東葉王は崩御なされ、王太子は行方知れず。王太子の従兄の苓公は王城を脱出したそうです」

「城を掌握しているのは蒼杞そうき」

「はい」

眉間に皺が寄る。その名を彼女が口にする時、必ずと言っていいほど見せる癖だった。

「事態が明らかになるまで、私が姫を演じるしかない」

「そつでございますね」

「香露かうろう、狭霰せうせんと共に私に協力を」

「勿論です、雪蘭さま」

その応えに、少女はかすかに笑んだ。

香露と呼ばれた女官長ともう一人の女官狭霰の二人だけが、青蘭と雪蘭がたびたび入れ替わっていることを知っている。

二人は雪蘭について奥の宮に入り、それ以来10年以上にわたり仕えてきた。それは亡き主、葉紅桂（ようこうけい）の遺志でもあった。彼女たちは幼児期を西葉東宮で過ごし、紅桂が廢太子となる以前の子供のころから傍近くで忠勤に励んできた。

「姫さまはご無事でございますよ」

「おそらくは　あの子になにかあれば、必ず私にはわかる」

雪蘭は静かに断言し、膝の上にのせた手をきつく握りしめる。香露はそつとその上に手を重ねた。

雪蘭が香露のいれてくれた茶を飲んでいると、なんの前触れもなく扉が開かれた。

乱暴に開かれた扉は壁に跳ね返る。

扉を開いたのは兵士だった。そして彼らは慌てて膝をつき、頭を垂れる。

彼らに一瞥もくれず、断りもなく踏み込んできたのは、紺の繻子織の絹地に銀の縫いとりの西葉東宮の衣をまとった青年だった。

肩をおおう髪は濡れ濡れと光り、切れ長の涼やかな目元。端正な顔立ちの印象は、彼の妹よりも従妹である雪蘭との方がより似通っていた。

「そなたが青蘭か」

はじめてみる妹の素顔を、彼はどんな感慨も見せずに眺める。

「兄上ですか」

「ああ、蒼杞だ」

嫁ぐ前の父王への挨拶のうちに、間接的に二人は顔を合わせている。正確には青蘭と蒼杞だが、雪蘭も青蘭に従いそばに侍っている。

だが、御簾越しの視界は悪く、その顔立ちを覚えられるほど身近に接することはなかった。

「これはいつたいなんの真似です」

静かに詰る妹に、彼はかすかに眉をひそめた。

「なんだ、その態度は。私はそなたを救い出してやったのだぞ。女神の直系であるそなたが、みすみす東の葉王家を僭称する詐欺師の手に落ちるのを防いでやったのだ。感謝すべきではないのか」

「そのようなことをお願いした覚えはございません」

きつぱりと言い返せば、とたんにその端麗な面が醜く歪んだ。

「そなたは分かっているのか。吾等の体に流れる血こそ、女神から受け継いだ尊いものなのだぞ。それを、王族を名乗るのをおこがましい山師に渡すなど、言語道断ここまで代々受け継いできた純潔の血を汚すなど、許されることではない」

「なれど仕方のないことでありましょう。戦に敗れたのですから。そして、その指揮を執っておられたのは、兄上、あなたではありませんか」

そのこめかみに血管が浮かんだように見えた。その瞬間、雪蘭の頬に灼熱感が走った。反動で椅子から転がり落ちる。そばに控えていた香露が慌ててその身を抱き起こす。

蒼杞は汚らわしいものに触れてしまったとでも言いたげに、厭わしそくにその手を払っていた。

「そなたは貴い血が汚されるのを良しとするのか葉王家直系の王族としての矜持はないのか」

「どのような矜持です。血筋に胡坐をかいた末が、この有様ではありませんか。墮落したのは西葉王家です。だからこそ、女神直系である我が国が敗れたものではありませんか」

次に腹部に衝撃が走る。雪蘭はさきほど口にしたばかりの茶と茶菓子を吐瀉した。蒼杞がその足で妹であるはずの青蘭の腹を蹴ったのだった。

「なにも知らぬくせに抜け抜けと」

憎々しげに言い捨てる、踵を返して去っていった。  
腹部を抑えて痛みに顔をゆがめる雪蘭を、香露が抱きとめた。

結局、青蘭には袖のない鎖帷子が渡された。

鎧を着てみたものの、立てはするが走るのも難しいような状態で「体のいい鴨だな」という王太子の一言で片付けられてしまった。

鎖帷子も袖があると、せつかくの敏捷性が損なわれてしまう。消去法で袖無しとなった。

王太子に従っている以上、陣頭に立つ可能性は低い。刃より流れ矢の危険性の方が高いだろうというのが彼の意見でもあった。

状況はかなり不利なため、陣が崩れていつせい潰走の可能性もある。彼は逃げやすいのが一番だと笑ったが、青蘭には笑えなかった。胴着の上に鎖帷子を着込むと、鎧よりはましとはいえずしりと重く、肩に食い込む。試しに抜刀してみたが、やはり動きにくかった。「いたずらに太刀を抜くでないぞ。たいした腕前でもないのだ、そんなものを振り回す暇があったら、ともかく逃げる」

水をさされてややむっとしたが、彼の言うとおりであった。

「逃げるが勝ちとも申しますしね」

意趣がえしの皮肉のつもりだったが、彼は大真面目に頷き、偉いぞと誉めるように青蘭の頭を撫でた。

肩透かしを食らったようで、青蘭は気が抜けた。

「刃を抜けば相手と同等に己の命も危険にさらすことになる。生きのびるには逃げるのが一番確実だ。逃げられず戦わなければならぬ状況は徹底的に回避すべきだ」

諭すように言い含められて、青蘭はそこに状況の厳しさをひしひしと感じた。

実際に彼は何度も戦場に立つてきたのだ。西葉やもう一方の隣国との戦で。死ぬわけにいかない立場は青蘭だけではない。

ましてや東葉王が崩じた今、碧柊の生存は絶対だ。明柊に王座は渡せないと断じた根拠はなんだったのか。彼がただ玉座に固執して

いるためだけではないように、青蘭には思われる。

考え込んでいるのもお構いなしに、次は馬のそばにつれていかれる。

一人で乗るのはまだ無理だが、少しは慣れておけということだった。

しかしこのような時に青蘭にはかりかかずらわっていて大丈夫なのかと問えば、王太子は指示を出すだけだからかまわぬという。ましてや青蘭が西葉内に影響力を持つと分かった以上、非常時に備えて傍から放さないほうが得策だとも付け加える。身も蓋もない言いざまに呆れつつも、それこそが彼の長所だとも思う。やり方としては賢いものではないが、信じようと決められた理由はおそらくそういう部分だ。

「なにが気にかかっておられるのですか？」

問えば、ささいなことだと笑う。ささいなことなのにこれほど警戒するのかと重ねて訊けば、それがたちまち命にかかわることもあると返され、逆に己の不明を恥じることになった。

気性の穏やかな馬だからと、とりあえずあぶみに脚をかけたがる段階からはじまる。

誰もがやすやすとまたがっていたため、初心者にはそれすら難しいとは思いつきもなかった青蘭はしばらくそれだけに専心することにした。

そこへ近衛がやってきた。王太子に用件があったらしく、しばらく青蘭は一人になった。

孤軍奮闘していたがあと少しで馬が身じろぎし姿勢が崩れた。落馬する、と歯を食いしばったが、途中で抱きとめられた。

「ありがとうございます」

てつきり王太子だと思つて油断していた。

「君に一人でこんなことをさせるなんて、あいつは冷たいやつだね。君にはてつきり大甘なのかと思つていたけど。それとも愛の鞭かな？馬に乗れなくては、小姓は勤まらないからね。かわりに私がてと



りあしとりで教えてあげよう。私は優しいからそんなにかたくならずともいいんだよ」

耳元で熱っぽく囁かれ、それが誰か悟った青蘭はおののいた。よりにもよって二人きりだとは。

彼女を抱きとめた明柊はそつとおろしてくれたが、放してはくれなかった。背後からすっぽりと抱きすくめられ、逃れようもない。

「で、殿下、おはなしください」

「そんなに怯えなくていいんだよ。とって食うわけじゃない」

「信用できません」

「それはあいつがそう言ったからだろう？何故あいつの言うことなら信じられるのに、俺のことは信じられないの？悲しいな」

切なげに嘆かれても同情できるはずがない。じたばたとあがいてみだが、拘束はゆるがない。

「王太子殿下を信頼すると決めたからです」

「根拠は？」

「ああいう方だからです」

それが理由になるかどうかは別として、いやに自信をもって断言してしまった。明柊は青蘭の耳元で溜め息ともなんともつかない吐息をもらした。それから笑いだす。

「間違つてはいないと思いますが」

笑われるのも分らないでもないが、実際に笑われるとぼつが悪くなる。

「いや、これ以上はない正論だ。あまりに的を射すぎているね、失礼、気を悪くしたかな？しかし、君は本当に碧柊が好きなんだね」

くすくすと笑われ続けて青蘭は段々頬があつくなってくる。それが何故か判らないにも関わらず、次第に動転してくる。それを誤魔化すように青蘭は反論に出た。

「れ、苓公殿下もそうではありませぬか」

「……確かにね。ああ、そうなると君は同志にして恋敵ということになるのだな。俺は君をめぐって碧柊と恋敵でもいいよ、それも魅

惑的な選択だ。実に悩ましいところだ」

「好きになさってください」

馬鹿馬鹿しくなつて青蘭は投げ遣りになる。

雪蘭だということは確実にばれているのだろうが、要はその正体が青蘭だと知らなければそれでいいのだ。王族でもなく女官にすぎない姫の従姉が態勢を左右するはずがない。王太子の従兄である明終に、雪蘭であることまで隠す必要もないかもしれない。

「おっと、君の主人が戻ってきたよ。あれは怒り心頭だね。凜々しくて惚れ惚れするよ。彼は君に執心なようだね、俺を睨み殺さんばかりだ」

「苓公殿下が逆撫でばかりなさるからではありませんか？」

厭味まじりに返せば、明終は深々と溜息をつく。

「好きな子苛めは俺の性だからね、愛が深ければ深いほどね」

「屈折しておられますね」

「愛の在り方は人それぞれだからね。愛の求道者の道程は辛く険しいものなのだよ」

「はあ……」

「あきれてるね？」

「有体に申し上げれば」

「ついつい彼の調子に巻き込まれてあっさり肯定すると、明終はくくつと喉の奥で笑った。

「気に入ったよ。碧柊は君に譲つてあげよう。頼んだよ」

そしてやつと解放してくれた。青蘭は彼の手の届かないところで逃れる。

「返答は？」

「よくおつかえいたします」

よく分からないまま口答すると、彼は少し不服そうだったが、すぐそこまで険しい形相の王太子が迫っていたせいか肩をすくめて諦めたようだった。

「かわりに姫への伝言を聞いておきましょうか？」

「？」

「青蘭姫への伝言だよ。この軍の主力は苓家だからね。俺の指揮下にある。君より先に姫にお目にかかるだろう」

「ではじきに参りますと」

「承った　すぐに会えるかどうかは分からないがね」

「殿下？」

青蘭はさらに問おうとしたが、先に氷のような冷ややかな声が降ってきてしまった。

「明柊」

言葉と同時に青蘭は手を捕まれ、強引に碧柊の背後に押しやられてしまった。それでも碧柊は手を離してくれない。

「ずいぶんと暇を持って余しているようにみえるが」

「まさか。愛しい我が君に用があったからこそ、小姓殿とお待ち申し上げていたんだよ」

「で、その用件とは？」

「出陣の用意は整った」

まるで舞踏会のはじまりを告げるように、明柊は艶やかに告げた。

明柊めいしゅうの話した通り、西葉軍さいはを迎える軍の主力を苓家の軍が占める。碧柊配下の近衛で王城を脱出し、この砦にたどりつけたものは現在300にも満たない。苓家軍と連動するにも一翼を任せられる人数ではない。

苓家の主力もこの非常事態に全軍が揃っているわけではない。報告によれば西葉軍は3万。それを迎える苓家の軍は1万に満たない。最終的には砦にこもつての籠城戦になる可能性が高い。

劣勢を補うために王太子も近衛を率いて出陣はするが、身の安全をはかるため後方につくことになっていた。

苓南れいなんの砦の外にはすでに数千の苓家軍が揃っている。近衛も隊列を整えその後方に控えてくれるようにという、いわば催促だった。

明柊の求めに碧柊も応じ、傍に控えていた綾霖あやづきに指示する。中將は一礼すると急ぎ足で仲間のもとへ向かった。

その後が続こうとする碧柊を、明柊が呼び止める。腕を掴まれていた青蘭も止まらざるを得なかった。

「なんだ？」

「この戦い、なにが起こるか分からないからね、愛するものは手元から離さない方がいい」

「なにがいいたい？」

「言葉のままだよ。たまには『にいちやま』の忠告を素直に受け取ったらどうだい。愛しい弟の身を想つてのことだよ」

「これ以上相手をしている暇はない」

碧柊は冷たく言っつて踵を返す。

「そうだね」

その声音に、青蘭は思わず振り返った。見送る明柊は笑っていた。だが、細められたその目は、笑んでいるのはなく、眇められているように見えた。

「さつさと行くぞ」

やや乱暴に腕をひっぱられる。

「……はい」

彼にしては珍しく苛立ちが感じられ、青蘭は戸惑う。その一方で明柊のことが気になっていた。先ほど彼の目と、そしてもう一つ。それがなんだったのか、咄嗟に思いだせない。

「あれが気にかかるか？」

「え？ ええ」

彼の問いと自分の応えが微妙にずれていると感じながらも、青蘭は頷く。とたんに手首を握る手の力が増す。痛いほどの力だが、何故か苦情を口にできない。

「なにを話していた？」

「落馬しそうになったので、助けていただきました」

「それで？」

「それで ああの調子で……」

王太子はいったい自分になにを問おうとしているのか。青蘭は見当がつかず、口ごもる。話したことといえば、冗談のようなことばかりだ。王太子に接している時となら変わりなかった。

「ど、どれだけ苓公殿下が王太子殿下のことを愛しているかを語っておいででした」

とたんに腕を掴む力が緩む。心なしかその肩も落ちたようだ。げんなりした気配が漂い、その歩む速度も低下した。

「で、何故にああいうことになった？」

「落馬しかけたところを抱きとめて下さった後、放していただけなくて 私のこと可愛いとは仰っておられましたか」

「だから二人きりになるなど言うたのだ」

「あれは不可抗力です それに、私を置いていかれたのは殿下ではありませんか」

王太子が悪いわけではないが、青蘭とて油断していたわけではない。一方的に責められるのも癪で、ついつい抗弁する。

彼はついに足を止め、手を放した。無意識にその手首をさすってしまう。かすかに赤くなっていた。振り返った彼もそれに気付き、気まずげに眉をひそめた。

「悪かった」

どれについて詫びているのか分からなかった。青蘭は薄く笑って頷いた。

「いえ けれど、気にかかることがあったような気がして」「なんだ？」

穏やかな問いかけに、ようやく青蘭はほっとする。先ほどの彼の様子は彼女を戸惑わせた。

「姫に 青蘭に伝言を届けてやるとおっしゃられたので、私は『じきに参ります』と託したのですが、殿下はすぐに会えるかどうかは分からないと付け加えられて。それがなんだか……」

最後まで口にすることはできなかった。

王太子は再び青蘭の腕をつかみ、駆けだした。今度こそ有無を言わさぬ強い力だった。青蘭が躓こうがついていくのに必死だろうがお構いなしだ。

砦の庭の一角に集っている近衛たちはすっかり支度を終えていた。「吾の馬をひけ！皆、騎乗せよ！乗ったものから城門を出よ。一刻の猶予もない！！」

「殿下？」

「散り散りになってもよい、ともかく苓州から出よ！苓公が裏切り者だ！！」

声を限りに碧柊が叫んだ。衝撃に似たものが走ったが、驚いた様子を見せるものはいなかった。皆、素早く馬にまたがる。

じきに碧柊の前にも馬が引いてこられた。碧柊は先にまたがり、ぐいと青蘭の脇に手をまわして抱き上げた。

「殿下？」

「説明している暇はない。ともかく吾にしっかりしがみついておれ。顔を伏せていよ」

手綱をとるや馬首を返し、馬の腹を蹴る。いつせいに多数の馬が動き出し、馬蹄が地鳴りのように轟いた。

騎馬の群れは城門にいつせいに向かう。突然の近衛のこの動きに、苓家の紋章を負った兵たちが慌てる。動揺しつつも太刀や弓を手にとる。

近衛兵たちも太刀を抜き放った。

「城門を閉ざせ！馬に狙い矢を射かけ、落馬したものを血祭りにあげよ！」

朗々とした声が城壁の上から響いてきた。聞き覚えのある声に、まさかと青蘭は顔をあげる。

城門はすぐそこだった。すでにそこを潜った近衛兵もあるらしく、城壁の上では皆の外へ向けて弓を持ち走り寄る影もある。

その城門のすぐ上に、彼は立っていた。彼は明らかに混戦の中にある青蘭と碧柊を見分けていた。

嫣然と笑みを浮かべ、青蘭と目が合うと片目すら閉じてみせた。

「二人連れが王太子だ。碧柊を討ちとれ！」

それは従弟に愛を囁き、辟易させていたときと同じ声音だった。

風を切る音が何十にも重なり、まさしく雨の如く矢が降りそそぐ。青蘭は王太子の胴にしっかり腕をまわし、体を縮こまらせてしがみついていた。その方が彼の動きの妨げになるにしても、最低限ですむ。

兜や背中に矢尻が弾ける。直接身を傷つけられるわけではないが、その衝撃と音は心の底から慄かせるには十分だ。

碧柊にも青蘭をかまっている余裕はなかった。

降りかかる矢に注意を払っているゆとりはない。太刀を抜き放ち、四方から迫る白刃をはねのける。そうしつつ、城門へと急がねばならない。砦の外にも苓家の兵たちがひしめているはずだった。

一難去ってまた一難だが、このまま砦の内側に閉じ込められてしまえば、文字通り命運は断ち切られる。

ともかく、あの鉄扉にその前途を閉ざされる前に抜けなければならぬ。

近衛兵たちが狭いそこへいつせいに殺到するため、その閉門もしりじりとしか進まない。

出陣の準備は整っていたとはいえ、砦内の苓家兵のほとんどは馬に乗っていなかった。弓を射る者以外は太刀を抜き、近衛隊へと押し寄せる。

その刃は人よりもその馬に向けられる。馬をつぶせば、騎手は落馬する。そこを襲った方が効率も良い。

碧柊の太刀は、その長身の半分ほどもある長大なものだ。それを振りかぶり、馬を狙う輩をなで斬りにする。

悲鳴や呻き声が上がリ、血しぶきが飛ぶ。

倒れた者を馬が踏み潰し、負傷者を絶命させる。その血潮が中庭を浸していく。

馬をつぶされ、落馬したものにいつせいに振り下ろされる刃。



折り重なる怪我人と骸を踏み越えて馬を進める。もはや人命など気に留めているゆとりはない。

ともかく、城門を抜けなければならない。

血糊に足を滑らせ、その均衡を崩した兵を切り捨てる。振り下ろした手首を返し、その隣の兵の首筋を下から斬り裂く。

そして、反対側から馬の脚を狙う輩にも同様に無情な死がもたらされる。

青蘭は目を閉じ、必死の思いで逞しい体に取りすがっていた。頬に生暖かなものがかかるのを何度も感じた。怒号、悲鳴、嘶き、耳慣れない鈍い音、それはおそらく人が切りつけられるもの。

ぴりりと頬が焼けるような痛みが走る。

青蘭は思わず目を開けた。そして、その前に王太子の背後から馬の脚を狙う者がいることに気づく。まるで一つ身のようにして王太子に身を寄せている青蘭など認識していかないらしい。王太子が応戦に精一杯なことに、油断しているのか。

白刃がきらめく。それが即ち次に何を意味するかを悟った青蘭は、咄嗟に刀の柄をつかんで抜き放つと、そのまま振り上げ、兜の首を蔽う部分と鎧の境目のわずかな隙間に刃をつきたてた。

そのまま得物を失っては元も子もない。

首の反対側まで突き出た刃を引き戻すと、まるで噴水の如く血が噴きあがり、彼女の顔にも降りそそいだ。顔をそむけて視界が奪われるのを避ける。眇めた視界に、目を大きく睜り、力なく開いた口から声にならない最後の呼吸が押し出されるのを見る。

「雪蘭殿？」

彼女の抜刀に気づいた碧柊が、刃を跳ね返したすきに声をかける。自身の脇腹に顔を伏せるようにして、背後を見る彼女の顔は隠れている。

「私なら大丈夫です、こちらは私にお任せください」

暴れようとする馬の背で、振り落とされないように彼の体にしがみつきつつ、効き手で刃をふるうことは難しい。女の腕力で切りつ

けることは難しく、いかに効率よく急所を突くかということに集中する。

碧柊にはそれをやめさせることはできなかった。

四方八方から押し寄せる敵を相手に、一人で立ち向かうには限度がある。

それを物語るように、じわじわと近衛は人数を減らしていく。

「二人連れは困だ！王子はあっちにいるぞ！」

どこからか声上がる。その先には東宮の紋章を染め抜いたマントをまとった人物がいた。

綾萩りょうしんだと、青蘭はとっさに思った。

身を蔽う黒のマントの背に白く浮かぶ、東宮の証。目深に被った兜。その下の素顔を見なければ、正体を知ることには難しい。

それでも、つられたように敵兵はそちらに向かう。

一変した人の流れの隙を突くように、王子は馬の腹を蹴った。

それに気づいた幾人かの近衛が無理にでも道を開く。

青蘭も渾身の力で襲いかかる刃を跳ね返し、切りつける代わりに切っ先を鋭く突きだす。

混乱、そして、喚声、悲鳴、絶叫、血の匂い、嘶き、手のしびれ、残る感触は人の命を断ち切るもの。

「ばかもの、王子はそっちの二人連れだ！」

まるで一人で双刀をふるうような青蘭と碧柊に、注意が戻る。

しかし、ちょうど二人は馬一頭ぎりぎり抜けられるまで閉ざされつつある鉄扉の隙間を抜けるところだった。

城壁の上からの弓箭は届かない。前後を守る近衛が太刀となり、敵の刃を遠ざける。「城門を抜ければ左に、南へ逃れてください！」

誰かが叫んだ。

碧柊は二人を切り捨て、さらに一人の頭を蹴り飛ばし、そして馬の腹を思いつき蹴った。

青蘭は抜き身の太刀を鞘に戻すこともできないまま、必死の思いで彼の服をつかむ。その腕を守るのは厚手の皮の袖と籠手のみ。脳

天まで突き抜けるような痛みが左腕を走る。

右腕にも同じ痛みが走り、一瞬意識が遠ざかりそうになったが、きつく唇をかみしめてそれを堪える。

目を閉ざすこともできず、遠ざかる景色を目に焼き付ける。

碧柸と青蘭ののった馬を守るように、外で持ちこたえていた数騎の近衛がつき従う。

外で待ちかまえていた敵兵は、予定より早く城外に出てきた近衛を殲滅することはできなかった。

城壁から射かけられる矢は、味方まで巻き込んでいく。

死に物狂いの近衛の反撃と同志討ちに、砦の外でも混乱が生まれていった。

その隙をつく形で、なんとか城門の前から遠ざかる。

誰かの言葉通り、王都とは反対側に当たる南側には敵はいない。

おそらく、城内で王太子をはじめとする近衛を壊滅させる計画だったのだろう。場外にまでその余波が及ぶとまでは想定していなかったのか。

追いつがる苓家の騎兵を討ち果たそうと、一人、また一人と近衛の数も減っていく。

碧柸は太刀を握ったまま、その逞しい腕かいなでまるで雛鳥を守る親鳥のように少女の華奢な体を支え、ひたすらに馬を走らせた。

### 第3章 森 1

森はいつ果てるとも知れなかった。

古道はなんども曲がりくねり、森を貫いている。あちこちに分岐があり、果たしてそれらを正確に選り取りすることができたのか。碧椏には自信はなかった。

方角を確かめるには樹上にあがってく山の背くがどちらにあるかを確かめねばならず、そのようなまねは鳥でもなければできないはずもない。

選択を違うことなくまっすぐに南下できていたとしても、苓州を抜けるには翌朝まではかかるだろう。

そこまで休憩なしに馬がもつはずはなく、また、それ以上に早急に対応せねばならないのは連れの手当てだった。

途中、森の天蓋の切れ間から太陽がのぞいた。その高度から時間をはかり、碧椏はいったん馬をとまらせた。

いつの間にか同行者は力を失いぐったりしていた。その体を片手で支え、もう一方の手で手綱をとってきた。その姿勢では、連れの顔を見ることはできない。せいぜい、その背中が力なく弛緩していると知れるのみ。

声をかけても反応はない。馬上で慌てて抱き起こせば、痛みのおせいかわずかに顔をゆがめる。それだけを確認し、まずは安堵した。

そつと馬から抱き下ろす。柔らかな草の上に横たわらせ外套を脱がせてみて、碧椏はそこで眉間にしわを寄せた。

鎖帷子のおかげで上半身の体幹に傷はないようだった。問題は両上腕。両袖は血を吸ってぐっしりと濡れている。

傷を改めた彼は、深々と溜息をついた。両腕に皮革の袖を貫通した矢尻が残っていた。矢尻を抜けば出血が止まらなくなる恐れもある。それを案じてか、矢柄は途中でへし折られていた。

道中、なにやらごそごそしている気配は確かにあった。おそらく

自力で2本の矢柄を折つたのだらう。思い返してみれば、その直後あたりから彼女の力が抜けていったような気もする。痛みの余り失神したのか、それとも失血のためか。

碧柊は己の外套の裾を食い破り、細い紐状にすると彼女の両腕の付け根を縛りあげた。これ以上血を失わせるわけにはいかない。定期的に拘束を解いて血流を戻してやらなければ、今度は組織が壊死して腐り落ちるおそれもある。

他に目立つ外傷はなく、碧柊はほっと息をついた。

乱れかかる髪を指先ですくいのけてやれば、白磁のごとき頬にも血飛沫がこびりついていた。それは返り血なのか、それとも己のものなのか。

砦から逃げ出す際に、彼女も太刀をふるっていた。その太刀は鞘に戻されていたが、血糊に汚れている。そのままではそれが固まり抜けなくなる可能性もある。

彼は小太刀を抜くと、その汚れを外套の裾で拭った。刀身の刃こぼれは少なく、切っ先に血脂が集中している。

己の非力さを補うために少女がどのようにこれをふるったかを思い、眉をひそめる。奥の宮で王女に傳ってきた女官に、実践の場があつたとは思えない。

それにもかかわらずこれだけの働きができたということは、それだけ故国西葉における王女をとりまく環境に厳しいものがあつたということだろう。

青蘭姫が何度も命を落としたかけたことは、公にはなっていない。それを碧柊が知る術はない。けれど、西葉東宮ネ蒼杞にまつわる評判と状況を鑑みれば、事情を察するのは容易い。

その彼と従兄が結託したのかと思うと、彼らへの憎悪より自己嫌悪の方がより己を苛む。完全に信じていて裏切られたわけではない。常々、疑惑を拭い去ることはできなかつたのだ。それでこの結果だ。甘かつたとしか言いようがない。

小太刀をもとあつたように戻し、碧柊はそっと息をつく。このま

ま手当てをしてゆつくり休ませてやりたいのはやまやまだが、日暮れまでにできるだけ距離を稼ぐ必要がある。

再び騎乗し、碧柊は先を急いだ。

森の夕暮れは一步先んじてやってくる。

日差しが傾きはじめたことに気づいた碧柊は、そこで道を折れた。わずかだが、古道からそれる道らしき形跡があることに気づいた。下生えのしげみのなかにわずかに残る痕跡は、確かに人が行き来したものらしい。最近はそれも絶えたのか、消えかけている。

夜になってしまえば、松明の明かりだけでこれに気づくのは難しいだろう。

どのみち、このまま怪我人を抱えて逃げ切るとは難しい。碧柊は覚悟をきめて道をそれることにした。

碧柊だけなら苓州から脱出することは可能だろう。それでも傷を負った連れを置いていく気にはなれなかった。

冷静に考えれば、彼には彼女を置いてでも逃げ切る責任がある。王太子としての責任を全うするためなら、故国を売り渡すような真似をした明柊にこのまま国権を渡すわけにはいかない。

そのためにはなんとしても生き延びなければならぬ。それが分かっているながら、何故ここで少女を見捨てることができぬのか。

西葉国内に父の残した組織網を受け継いだというが、それがどれほどのものなのか、詳細は知らされていない。己の命を危険にさらすほどの価値があるのか、それが定かでない状況でこの選択は愚かしいの一言に尽きる。

それでも彼女を優先するのは、一種の勘に近いものがある。

塔のあの部屋で、一瞬彼女がみせた不可思議な表情。

碧柊を見つめる眼差しは、彼女のものであつて、なかった。彼女自身の視線にまじる他の存在を感じた。それは圧倒的な力もち、人

一人の持ち合わせる眼力ではなかった。後になって幻視という言葉  
を思い出した。

東葉王家には厳密には王女は存在しない。東葉王家に王女はこの  
100年の間、一人も生まれていない。それは曲げようのない事実。  
それ故、東葉の“王女”に神がおりることはない。

故に神がかりを一度も見たことのない碧柊だが、それでも少女の  
その様子にその言葉を思い起こした。

だが、雪蘭も王族ではない。母親が王族ではない以上、西葉では  
王女を名乗ることはできない。それでも神がかり的な様子を見せた  
のは、それだけ本来の“葉王家”の血筋に近い証だともでもいうの  
か。

そんな東葉には存在しない“巫女姫”を、碧柊には見捨てること  
はできない。

西葉に比して現実的な判断を下す東葉の人間も、先祖たる“女神”  
の気配には抗えないということなのか。

複雑な思いで碧柊は腕の中の少女を見つめる。

たとえ女神の影響がなかったとしても、結局のところ、彼女を見  
捨てることなどできないのではないだろうか。その理由こそ、彼の  
もっとも知りたいところではあったのだが、今のところ明らかにな  
りそうにない。

夕闇と共に雨が降りはじめた。雨脚はあつという間に強くなり、  
碧柊はほっと息をついた。これで犬による追跡も防げる。

幸い完全に暗くなる前に、窪地に隠れるようにして建てられた小  
屋を見つけることができた。

どうやら地元の住民の狩猟小屋らしい。この時期、この地方の住  
民たちは農作業に専念しているはずだ。だからこそ、ここへ続く道  
は夏草に飲み込まれようとしていたのだろう。狩猟小屋が使われる

のは、食料の乏しくなる冬に限定される。

小屋のそばには桶とけいを用いて水も引かれていた。

荒天の気配を察した碧柎は、小屋に残されていた鍋や桶に水を汲んでおいた。

悪天候はこの際ありがたい。

炉で火を焚いても煙が目を引くことはないし、小屋は古道から離れた窪地にあるので灯りが人目をひきつける恐れも低い。馬も屋内につなぐ。

黴臭い古藁を炉のまえに敷き詰め、その上に碧柎の外套を広げて青蘭を横たえた。

木の器に水を汲み、体を支え起こして唇を濡らしてやればわずかに動く。唇はすっかり乾いてひび割れ、黒く凝った血の塊があった。また食いしばった拳こぶし句に破やぶつてしまったのだらう。

このまま折れてしまふかと案じれば、笑顔を見せる。それはいかにもせいっぱい笑って見せていますといういじましささえ感じさせられるものだが、その心意気は悪くない。むしろ好ましくもあつた。

気丈たかぢな性質かと思えば、ふと気の弱さを垣間見せる。本来の性格はどちらなのだらうかとも思うが、こうして唇の傷を見れば、なんとなく想像はつく。弱さを自覚しつつ、それをなんとかしようという粘りを見せる。そこに『青蘭姫なら』という言葉をかぶせてしまっているが、彼女自身が持つ力のはずだ。それには気づいていないようだが。

「……」

こくりと一口嚙か下した後、うつすらと目がひらいた。

焦点の合わない眼が焰を映す水を見つめる。

「もう少し飲んだ方が良い」

その言葉が耳に届いたのかどうか。少女は二口、三口と口をつけた後、むせて咳きこんだ。

「っ」



その拍子に痛みが走ったのだらう。身を縮こまらせて顔をゆがめる。碧柊がゆっくりその背をなでてやると、ようやく人心地を取り戻したのか、顔に表情が戻った。

「……殿下……ご無事なのですか？」

ゆっくりと顔をあげ、そこに碧柊の姿を認めると確認するように手を伸ばし、その拍子にまたうめいた。

「吾は無事だ。そなたこそ」

「私は大丈夫です」

顔をゆがませながら笑う。碧柊はたまらずその頭を片手で胸に押し当てる。

「大丈夫なわけがなからう 己で矢柄をへし折るなど」

「……そういえば、まだ矢尻が残ってますね」

へへつと誤魔化すように笑う。それすら傷に響くのか、最後に小さく息をのむ。思わず体ごと抱きしめたくなるが、傷を想ってそれは思いとどまる。

「そうだ、馬鹿もの。矢尻は取り除かなければならぬ それにも

し、そなたが耐えられるなら、その傷は縫った方が良い」

「縫う、ですか」

「そうだ」

傷は深手だが、場所的には命にかかわるほどではないだらう。それでも傷が開いて出血が続けば生命を脅かす。かといって、傷口がふさがるまでここで静養しているわけにもいかない。最もいい方法は、傷口を縫ってしまうことだ。

「縫えるのですか？ 道具は？」

「道具はある 一応講義は受けた」

頼りないことこの上ないが、他に方法はない。傷口を焼く手もあるが、化膿する危険性も高い。

胸元に抱き寄せた小さな頭がかすかに動く。ためらっているのだらう。矢尻を取り除くだけでも苦痛は計り知れない。碧柊とて想像するだけで冷汗が浮かんでくる。

「な、なるべく綺麗に縫ってくださいね。傷が残ると縁談に支障が出ますから」

「冗談めかして応じる声はわずかに震えている。碧柊はぎゅっとその頭を抱きしめ、その耳元に囁いた。

「売れ残った時は吾が引き取ってやるっ」

「ご遠慮します」

即答した声は、かなり本気だった。

### 第3章 森 2

ばちばちと火のはぜる音が雨音に紛れる。

草葺きの屋根にも激しく叩きつける雨の滴の気配は、粗末な小屋のなかにも伝わってくる。

初夏の夜。

湿気と冷気がないまぜになり、寒気と暑気の境が曖昧になり心地よさとは程遠い。

少女は炉の前でぐったりと脱力しきつて眠っている。ほどいた黒髪は焔に濡れたような艶を帯びる。疲労のにじむ白い顔を縁取るそれは、彼女が流した涙で湿っていた。

碧柙は絞った布でその額に浮かぶ汗を拭ってやる。

面にこびりついていた血痕を拭ってやると、頬に斜めに走るに傷が現れた。矢尻か刀の切っ先が掠めたのだろう。拭われた傷口には再びつつすらと血がにじむ。

青蘭が寝台から落ちたあの朝にしたのと同じようにその頬に唇を寄せかけたが、何故かためらった後に身を引いた。前髪をかきあげるとふつと息をつき、横目で寝顔を見つめる。

はじめて会ったときはふつくらとしていた頬は、この数日でいくらかこけたように見える。

夕闇のなかでも結いあげた黒髪が艶やかに光っていた。髪をあげていれば年相応に大人びた印象もあつたが、こうして見ると稚さが目をひいた。

矢尻を取り除き、沸騰させた湯をさまして傷口を洗った時点で、すでに痛みのがあまり青蘭はぐったりしていた。

火であぶった針に糸を通してある間、彼から目をそらして弱弱し

い口調ながらもとりとめのないことを話して気を紛らわせているようだった。

いざ縫合となると強い腫で針先をにらみつけた後、覚悟を決めたように強張った笑みを浮かべた。

「お願いします。何度も言いますが、き、綺麗に縫ってくださいね」  
「そのためにはじつとしておいてもらわねばな　怖気づいたか？」  
「だ、誰が」

きつと眉尻を吊り上げる。その頭を褒めるように撫でてやると、お定まりのように嫌そうな顔をした。

「痛み止めだ。先に飲んでおけ」

鎮痛剤は常備している。それを砕いて水で溶いたものを渡すと、彼女はおとなしく口にした。薬の苦みに顔をしかめる。

「痛みより苦みの方が苦手か？」

「どちらも苦手です。今だって痛いのですから、さっさと縫ってください」

気丈にそうは言っただけだが、実際にはじめると終始呻きつづけていた。それでも最後まで暴れはしなかった。

はやく終わらせてやりたかったが、縫い目が雑では傷口が開きやすくなる上、痕も醜く残る。それが嫌ならじつとしていると言いつても縫ったことはない。碧柊自身、傷を縫われたことはあ

縫合が終わると、青蘭は深々と溜め息をつき、それから疲れ果てた笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

擦れた声で囁くと、力尽きたように目を閉じてしまった。眠ったというより失神したに近いのだろう。全身にぐっしりと汗をかいていた。

血を吸って濡れた胸着は先に脱がせて、碧柊が洗った。肌をみせることに一悶着あったが、言い聞かせるとおとなしく従い、下着姿になってくれた。碧柊にとっても目の毒ではあったが仕方ない。

一仕事終えてみれば、その下着もぐっしょりと湿っている。碧柎はしばし逡巡した後、覚悟を決めるように小さく息をついた。

眼裏まなづらに焰が揺れる。

ちらちらとゆらめく灯りと頬に感じるぬくもりに、ゆっくりと覚醒へ誘いざなわれる。

頬に伝う汗を拭おうと無意識に腕を動かし、激痛が走った。呻いて体を縮こまらせると、慌てた様子でその背を撫でてくれる手があった。

「迂闊に動かさぬ方が良い。気がついたなら鎮痛薬を服用せよ。少しはましになろう」

言いきかせる声には気遣いが滲んでいる。

再び横になって深呼吸を繰り返していると、手早く整えられた薬湯がさしだされた。

それを受け取ろうと半身を起しかけ、青蘭はようやく状況に気が付いて小さく声を上げた。

起き上がるうとした反動で肩がむき出しになり、確かめるまでもなく上半身になにもまとっていないことにも気づく。上に掛けられていたのは、自分のものではない一回りも二回りも大きな胸衣。見れば、木の器を手に気まづげに顔を背けている碧柎は、逞しい胸板をあらわにしている。

ずり落ちかけた彼の胸衣で慌てて肩まで隠し、警戒心もあらわに見据える。

「……どういうことですか？」

「仕方なからう、汗ですっかり濡れていたのだ。あのままでは体温を奪われる。それに着衣も清潔にしておくにこしたことはない」

ともかく早く飲め、と器を押し付けられる。その間も、王太子はそっぽを向いている。青蘭はおずおずとそれを受け取り、ほっと息

をついた。

よく見れば、彼は明らかに目のやり場に困っているらしい。その横顔が赤く見えるのは、焔の照り返しではなく赤面しているのだと気付き、青蘭は今更ながら気恥ずかしくなってきた。

それを誤魔化すように一気に薬湯を飲みほし、結局むせてしまった。咳きこむと傷にひびく。痛みと息苦しさに涙がにじむ。

「苦しいだろうが、飲め」

湯冷ましを口元に押し当てられる。むせる衝動を堪えてなんとか一口二口飲み、さらに軽く背を叩いてもらっているうちに、次第に治まった。

「いちどきに飲むからだ。迂闊な」

「……」

いつものように反射的にむっとしたのだが、どう返していいかわからず俯いてしまう。予想外の反応に戸惑ったのか、彼も口ごもってしまった。

気まずい沈黙がしばらく続いたのち、碧柊は黙ってごろりと横になり、背を向けてしまった。粗末な床の上にじかに横になっている。悠悠とした広い背中には傷痕がいくつもあつた。

「悪いが二つとも傷跡は残ろう。そなたがよく堪えてくれた故、はじめてにはうまく縫えたと思うが、傷そのものが大きい故にな」  
青蘭はそつと包帯の巻かれた両上腕に触れる。痛みはあるが、いくらかましになったような気もする。

「……はい」

どう応じていいかわからず、そつと息をついて室内を見回す久しく人の手の入っていないようだった。炉の近くには青蘭や彼の衣類も干されている。寝床をおおうのが彼の外套だと気づく。となれば、彼が上半身裸でいるのも道理だった。

「殿下、外套をお使ください」

「よい、そなたが使える。藁の上で寝たことなどなかるう。明日は雨でもここを発たねばならぬ。少しでも眠っておけ。傷の治りに障る

「う」

「では、せめてもう少し火の傍へ。夏とはいえ冷えます」

「……それもそうだな」

むくりと起き上がると、焰の明りの届くところまで移動し、また背を向けて横になってしまった。

青蘭は横になったままその背中<sup>の</sup>傷を数える。

王太子である彼が陣頭に立つことはそうあるはずはない。亡くなった東葉王の即位以来、両国の戦はしだいに東葉に有利に展開するようになった。拳句、冬の終わりの戦いで西葉は大敗を喫した。

それでも何度が戦局が混乱することはあつたと聞く。東の隣国翼波<sup>は</sup>との戦いはさらに熾烈を極めるともいう。

彼の背の傷をつけたのは、西葉なのか翼波なのか。

もし無事に婚儀が済んでいれば、とつくにこんな風に彼の背中を見つめて眠る夜を過ごしていたのかもしれない。そんなとき、どんな思いでこの傷を見つめただろう。

「殿下、今後はどのようになさるのですか？」

「ともかく岑州を抜ける。その先は王領だ」

「……王領まで岑公の手が回っている可能性はありませんか？」

「分からぬな」

「国王陛下弑逆の真相を知るのはごく一部のもののみです。もし、岑公がそれらすべての罪を殿下に着せた上で、自分が敵を討つたと発表すれば」

「王領でも吾はお尋ね者だな」

笑った声はかすかに乾いていた。青蘭はその背にそっと触れようと手を伸ばしかけたが、痛み<sup>に</sup>ひきつり、途中で下してしまった。

「もし もしそうだったら、西葉へお行きになりませんか？」、

「西葉だと？」

なにを言い出すのかと、驚いた顔で彼は青蘭を振り返った。

「はい、岑州へ。せつ……いえ、私は岑家の養女となっております。そして岑家はわが父紅桂殿下の乳母<sup>めい</sup>をつとめておりました。山の背

を越えたあちらは岑家の一族の領地です」

「……だが、吾は敵国東葉の王太子ぞ」

なにを言い出すかと目を瞠る碧椛に、青蘭はできるだけ悠然と微笑んでみせた。



### 第3章 森 3

肌寒さを感じ、目を覚ました。炉の火は消えかかっている。火をかきおこして薪をくべると、火のはぜる音がして徐々に焰が大きくなる。

まだ闇は深い。

明るさを増した炉辺で、彼女の安らかな寝顔が明らかになる。掛物代りの彼の胴衣がややはだけ、白い肩があらわになっていた。それから目を逸らしながらぎこちない手つきで隠し、碧柊は小さく息をついた。

明け方が近いのか、冷気が増している。

そつと立ち上がり、立てつけの悪い扉の隙間から外をうかがう。夜の闇は深く、雨は未だに続いている。霧がたちこめているようでもあった。幸い、雨脚は和らいでいる。

干した衣類は未だ湿っている。それを火にかざし乾かしているうちに、青蘭せいらんがもぞもぞと身じろぎした。

案じたとおり、寝起きのためか無造作に動こうとして呻いている。碧柊はその頭の上に彼女の衣装一式をのせてやる。

「だからゆっくり動けと云うておるに。まあ、目は覚めたるう」

「おかげさまで」

やや強張った声がかえってくる。皮肉な物言いをされ、またむっとしているのだらう。それと同時に戸惑いも伝わってくる。

碧柊は彼女に背を向けた。

「全部乾いておる。袖を通せ……といっても、自分でできるか？」

「ありがとうございます 難しいようでしたら、手を貸していただけですか？」

「無論だ」

静かな室内に衣擦れの音が嫌に耳につく。

碧柊はわざと音を立てるように火をかき起こし、底の凹んだ鍋に

水をつつし炉にかける。干し肉を湯に入れ塩をたすと、かすかに空腹を刺激する香りがたつ。

その背に、ためらいがちに声がかかる。

「なんとか整いました」

「痛みは？」

「自制止内です」

「では朝食だ。まだ暗いが、明け次第発つ」

湯気の立つ椀を押しつけると、彼女は黙って受け取った。

腕を拳上きむじょうするなど大きく動かさなければ、痛みもさほどではないらしい。

息を吹きかけて冷まそうとしている姿を横目で見ながら、碧柊は自分の衣類を乾かしにかかる。青蘭にかけていた胴衣が戻ったので、肌寒さは遠のいた。

「殿下は？」

「椀は一つしかない」

「では」

「慌てるな。火傷をするぞ。そうでなくとも唇をまた噛み切ったのだからな」

じろりと窺めるように一瞥すると、彼女はばつが悪そうに口元を椀の影に隠した。

ふっと小さく息をつき、再び焔に向き直る。

じきに椀に口をつけようとしたものの熱さにやられたのか微かな呻き声が聞こえ、碧柊はやれやれと肩を落とした。

「慌てるなと云つておろう。今はそなたにすっかり滋養をつけてもらわねばならぬ。いざとなれば岑州しんしゅうへ案内あないしてもらわねばならぬのだからな。まずは傷をしっかり治せ」

「……はい」

苦笑した末に、彼女は冷めるのを待つことにしたらしい。

「少し、おうかがいしてもよろしいですか？」

「なんだ？」

「綾羅殿あやしろもおられぬのに、手慣れておられますね」

仮にも王太子だ。日頃からこういったことを手ずからこなしているわけではない。皆でも日常的なことは主に綾羅や他の側近たちの役割で、彼は悠然と座っていた。

「必要に迫られてな」

「とおっしゃると?」

「昔、翼波よくばとの戦いで軍が総崩れしてな　そのとき、指揮を執っていたのは吾だったのだが。数日、一人で国境をさまよったことがある。あれで懲りたのだ」

自嘲の笑みを浮かべつつちらりと隣を見れば、彼女は意外そうな顔をしていた。

「吾は戦略家ではない。むしろ戦下手だ。兵法家として優れているのは明柊めいしゅうだ」

碧柊は10代後半頃から父に代わり何度も出陣している。戦勝を重ねてきたため、戦上手との評判も高い。彼女がそんな表情を見せたのも、そのためだろう。

「ほとんどは明柊の手柄だ。吾は明柊の提案を承認しただけのこと。とは言っても、吾ら二人だけで諮ったわけではない。老練な父の参謀達も加わっておったしな。自ら軍略をたてるまでもなかった」

「……けれど、それを是とするかどうかをお決めになったのは殿下でいらっしやるのでしょうか?」

「そうだが」

それがどうしたと問うように返せば、青蘭は応じる代わりに腕に口をつけた。

ただ、考え深い眼をしているため、言葉を待つ。そうしていると一口スープをすすってにこりと笑った。

「美味しいです」

「そうか……」

「いくら良い案があっても、それを却下されれば活かされることはありません。それを用いるかどうかをお決めになったのが殿下なら、

それは勿論立案者の手柄でもありますが、殿下の功績でもあるのでありませんか？」

生真面目な口ぶりは、碧柊を慰めたり阿ったりするものではなかった。それだけに、彼も苦笑する。

「吾に都合よく解釈すれば、そういう考え方もできような」

「なにを用いるかという判断力も一つの才能だと思います。それに、あれほど嫌っておられる苓公殿下のことも、認められる点は拘泥なくお認めになられる」

「それとこれとは別だろう」

「そうお考えになれることが、まずは大切だと思います。蒼杞殿そしきにはお出来にならぬことです」

無気力で怠惰な父・西葉王さいはにかわって戦の指揮をとったのは兄だった。そのもとで軍功をあげた將軍たちは、のちに様々な罪状のもと肅清された。それらすべてが濡れ衣だったと言い得る。

その経緯なら碧柊も知っている。ある意味、そのおかげで東葉は勝利できたようなものだ。

「自分より優れたものは認められない。あの方はそういう人間です」

「それを誰も止められなかった。西葉が敗れたのは自業自得です」  
ひどく思いつめた目で焰を見つめている。

碧柊はそつと手を伸ばし、彼女の唇を指先で押さえた。

「やめよと云うておるだろう。何度云えばわかる」

「……」

青蘭は目を睜り、次には頬を赤らめて俯いた。それでも思いつめたような険しい表情は変わらない。

「何故、そなたがそのような顔をする。従兄とはいえ、そなたにどうにかできたこととは思われぬがな」

不可解な思いで問えば、彼女は口ごもる。

「そなたの前に責を問われるべき人間は何人もおらう。それに、奥の宮で王女にかしずいていた一介の女官になにができよう？」

「できないことを言い訳にすれば、なにもせずとも良いということになりかねません」

「厳しいな　ではこうなった今、そなたがすべきことはなんだ？」

宥めるつもりで水を向ければ、しばしの沈黙ののち、彼女は毅然と顔をあげた。

「……殿下に勝者となっていたたくことです」

まっすぐな強い眼差しに、思わず気圧されそうになる。

「この状況でそれを吾に求めるか」

苦笑まじりに応じて、彼女の瞳の光は揺るがない。それは彼女のものでありながら、別の何者かの力をも加わっているかのように炯炯と輝く。

「はい　殿下はそれができるお方です」

「……それは神託か？」

碧柊はそつと手を滑らせ、その頬をなぞる。その拍子に彼女は我にかえったように瞬かせた。

「え？」

「……また神授かみさずけたようだな……そなた、本当に王女ではないのか？」

びくりと身を震わせ、体を引こうとする。碧柊はその顎をとらえ、それを許さない。のぞきこむ瞳は、先ほどとは異なり弱弱しくたじろいでいる。

「……ち、違います」

彼女は視線を逸らす。それをどう解すべきか思索した末、碧柊はその手を放した。

「……そなたがもし青蘭姫であったなら、色々と助かるのだがな」

「……どういう意味ですか？」

「詮無きことを申したな。悪かった。気にするな」

抗弁するように彼女は視線を尖らせ口を開きかけたが、結局再び視線を落とした。

「……私にはなにもできませんから」

かすれた声で弱弱しく呟き、悄然とうなだれる。

「そういうことではない」

「いいえ、私は役立たずなのです。愚かで、なにもできない。なんのためにここににいるのか。いつも足手まといで、取り柄もなく……」

「そうではないと云うておろう」

苛立たしく険のある声音で言葉を遮ると、彼女はまた唇をかみしめる。

「私など……」

「まだ云うか」

不快感は最高潮に達した。抗おうとする腕を封じ、強引に顎をとらえ、無理矢理その唇を唇で封じた。

### 第3章 森 4

不意にがたんと大きな物音がした。碧柊はとたんへきしゅうに身を翻し、太刀を手にすると音のした扉の傍へにじり寄る。

そつと外をうかがい見れば、立てつけの悪い扉の隙間からひときわ強い風が吹きこみ、炉の炎を大きく揺らした。外には薄明のなかに霧がたちこめている。

息を殺して外をうかがうことしばし。

警戒をといて小さく息を吐き　そしてはつと我にかえる。

恐る恐る振り返れば、炉の前に蹲り俯いている少女の姿があった。呆然とした様子で口元を押さえていたが、視線を感じたのかゆつくりと顔をあげる。

その目が合う寸前に、碧柊はさつと立ち上がった。青蘭はそれにびくりと肩を震わせる。

それを眼の端に捕えて、碧柊はわずかに口の端を歪める。動揺しているのはお互い様だ。何故あのような振舞いに出してしまったのか自分でも不可解だった。分かっているのは愚かしいことをしでかしたということだけ。

腹立ちまぎれに舌打ちをうってしまふ。

それを耳にして、ようやく青蘭も我にかえた。なにをされたのか咄嗟に理解できずにいたが、忌々しげに舌打ちした碧柊を、何故か愕然とした思いで見上げた。

碧柊は青蘭の方をちらりと見ることもせず、険しい表情で外套を手に取り素早く身につけた。干してあった青蘭の分も手にすると、ようやく向き直る。

「夜明けだ。発つぞ」

かたい口調で告げ、青蘭のそばに膝をつくと傍らに置いてあった鎖帷子を手に取った。さすがにこれだけ重量のあるものを、片腕を負傷した青蘭は一人では身につけられずいた。

「重いだろつが身につけておいた方が良い。まずは腕を通せ。ああ、腕はあげずとも良い。吾がやる」

帷子を着せかけてもらう間、青蘭は一言も発しなかった。碧柗もそれ以上なにもいわない。

最後にふわりと外套を肩にかけ、留め金をしっかりとめてやる。その間、青蘭は身を強張らせてうつむいたままだった。

碧柗はそのまま立ち上がるわけにもいかず、自分の膝をぎゅっとつかみ、視線をさまよわせながら呟いた。

「悪かった　だが、もうあのようなことは云うな」

青蘭は顔を上げようとしない。上げられなかった。先ほどの彼の舌打ちが耳についてはなれない。

同時に鼓動が増す。聞こえがよしの舌打ちや大きなため息を、青蘭は知っている。物心つく前から耳慣れたもの。優しい声ややわらかな温もりよりも、青蘭に親しかったのはそういうものだった。

随分前から　雪蘭がやってきてからはあまりに耳にすることはなかったが、それでもそれに伴う胸の疼きは未だに心の奥底で確実に脈動している。痛みは簡単に今でも鮮やかに蘇る。

ぐつと唇をかみしめる。やめるように言われたことなど耳には残っていないかった。

泣けば泣いたで鬱陶しいと嘲られ、涙を見せなければ可愛げないと罵られた。泣いた時の方が屈辱感は強かった。

涙をみせればあきれかえったように溜息を吐かれ、さらに厭味な言葉を二つ三つ浴びせられればすむことが多かった。

泣かなければいつまでも苛みは続いた。泣きだしたくて顔を歪めれば、それはさらにひどくなった。それでも涙をこらえ、相手が飽きるまで耐えた。そんな時はひどく疲れたが、泣いてしまった後に残る、呼吸すら億劫になるよううつろな気持ちになることはなかった。

だが、打ちのめされることにはわりはない。次第に心を凍らせ、表情一つ変えずにすませられるようになった。



7つの頃の青蘭は、笑うことを忘れていた。いや、それまで笑うことなど知らなかったのかもしれない。それを教えてくれたのは雪蘭だった。

俯いたきり身じろぎしない青蘭の肩に、碧柊は仕方なく触れようとした。先ほどのこともあり、たやすく触れるのは躊躇われたが。

「雪蘭殿？」

肩に指先が触れた瞬間、青蘭ははっとして身を引いた。凍りついたような眼差しとこわばった表情は、明らかに彼を拒んでいた。再三言い聞かせてきた唇をかみしめる癖もそのままだった。

碧柊は行先を失ったその手を戻し、事態を持って余すあまり小さくため息をついた。それは主にこんな状況を作り上げてしまった自身に向けられたものだったが、さらに青蘭がきつく唇を噛みしめたことには気づかなかつた。

「ともかく猶予はない。行くぞ」

「……はい」

青蘭は低く応じて立ち上がった。

外套は雨をはじいてくれたが、湿気を伴う寒さにも似たものは確実に忍び込んできた。

馬に乗る前に再び鎮痛剤を飲まされ、乗せられる。体を支えてくれる碧柊の腕が時折傷口に触れて痛みが走るが、苦にするほどではない。

この時点で古道に戻るのにははや危険だと思われた。小屋へと導いてくれた小径こみちは、頼りないながらも森の奥へ続いていった。それを持たざる。

時間の経過も分からず、ただ肺腑へと忍びこむような霧雨だけが変わらずに降り続けている。

青蘭はうつらうつらと馬上で過ごした。途中で何度か大木の下

わずかに雨を避けられる場所で休憩もとつたが、ただぼんやりと雨を眺めているしかない。

森は薄暗く、果てしない。覚めない夢のようだと思つ心地は、まるで他人事のようにだった。

碧柊はあれこれとできる範囲で心を砕いてくれた。それは青蘭にも伝わったため、礼こそ述べたがそれ以外になにを言えばいいのかわからなかった。

なにかを口にしてまた溜息を吐かれるのが怖く、何故つい先刻まであんな風に気安く会話ができたのだろうか。自分でも不思議なほど、大切ななにかを見失ってしまった。

碧柊のあの振舞いについては、極力考えるのを避けていた。どう考えればいいのか分からないというのが一番近い。あれがどういうことを意味する行為かは知っている。が、あの状況は嫁ぐ前に故国で教え込まれたどんな状況にもそぐわない。どう解釈すべきか見当がつかず、それを考えようとする心揺れる自分をどうしようもなくなくなる。

八方ふさがりな心地で膝を抱えて小さく息をつくと、少し離れて幹に凭れていた碧柊が遠慮がちに顔をのぞきこんだ。

「痛むか？ それとも具合が悪いか？」

「いえ」

目が合うのを避けるように視線を落として小さく頭を振ると、「そうか」と安堵したように呟き、また気配は遠ざかる。

先刻までなら、力づけるように肩か頭あたりを軽く叩いてくれのかもしれない。それを寂しく思いながら、青蘭は今度はそっと息を吐いた。

再び夜が巡ってきたが、雨はやみそうにない。道はなんとか続いていたが、今夜は雨風をしのげる屋根を期待できそうにはない。

ひとときわ大きな大木の下の地面が乾いているのを確かめると、碧柊はここで休もうと提案した。

もはや自分でもどこにいるのか見当もつかない。未だに苧州内なのか、それとも王領に入っているのか。ただ徒に森の中をさまよっているだけなのか。

まったく先の見えない状況は、精神的にも厳しい。その上、連れは黙然と口を噤んでしまったきりだ。あのような振舞いに及んでしまった自業自得故に仕方ないとはいえ、気づまりな空気はさらに気を滅入らせる。

まだ明るいうちに支度をはじめ。

馬をつなぎ、荷の大半はそのまま馬の背にのせたままにしておく。完全に乾いた落ち葉だけを集めると、苦勞の末になんとか火をつけられた。相変わらず雨は降っている。古道から完全に離れてしまっている分、人目を引く心配は低くなっているかもしれない。

焰が大きくなったところへ、やや湿っているが細い小枝を足す。ぷすぷすとくすぶつたのち、無事に燃えうつる。さらに石を拾ってきて、火を囲むように小さな炉をこしらえた。

小屋から失敬してきた鍋に雨水をためると、その上にのせる。

あとは湯が沸くのを待つだけとなるころには、すっかり日は暮れていた。その間、彼女は黙っておとなしく木の根元に蹲っていた。

火のそばに呼べばおとなしく従うが、碧柊からやや離れて腰を下ろす。手を伸ばせば届く距離だが、隣ではない。気軽に触れられないその距離に、碧柊は仕方ないとそつと息を吐いた。

沸かした湯をこれまた勝手に拝借してきた椀にうつし、鎮痛剤を混ぜて手渡すと、彼女はおとなしく受け取った。

いかにも熱そうな湯気に息を吹きかけるわけでもなく、ただぼんやりとその水面みなもを見つめている。

「傷は痛むか？」

「それほどでも」

答える声に生氣はない。碧柊はわずかに眉をひそめる。

「あとで傷を見せてもらっぞ」

「はい」

機械的な応えに、碧柊は小さく息をつく。すると、ぴくんと青蘭が肩を震わせる。

「……如何した？」

訝しげに問うと、青蘭は小さく首を振った。

「なんでもありません」

俯き加減で湯気の立つ椀を見つめる横顔は、ひどくこわばっている。

碧柊は目を眇め、手をつくとき青蘭の方へ身を寄せた。顔をのぞきこもうとすると、ますます下を向いてしまう。

「なんでもないという顔ではない」

「本当に、何でもありません」

溜息が怖いのだとはどうしても言い出せず、青蘭は身を固くする。「なれど」

納得しない碧柊はその華奢な肩に触れようとする。その寸前、気配を察したのか、青蘭は身を引いた。

「触れないで」

絞り出すような細く悲痛な声音に、碧柊はびくりと身を震わせて手を下げた。

「悪かった……」

碧柊は静かに詫びると身を引き、元の位置に戻ると薪をたした。

小さくなりかけていた焰が再び勢いを取り戻す。

雨は相変わらず音もなく降りしきり、時々高い梢から雫が滴り落ちる。

火のはぜる音が時折響き、夜はまだこれからだった。

### 第3章 森 5

どれほど時間が経過したのか。

焚き火をはさんで、二人は目を合わすことも言葉を交わすこともなく過ごした。まだ日の浅い付き合いだ、こんなことははじめてだったかもしれない。

森は深く広い。横行する獣の数も知れない。

苓南れいなんの皆までの逃避行はある程度人数もあり、夜間も移動したためさほど警戒する必要はなかった。

しかし、こうして二人きりとなれば気を緩めることはできない。火を焚いていてもその危険性はさほど変わらないだろう。それでもないよりはましだった。

それにこの雨。湿った冷気は初夏といえども身にこたえる。怪我人もいる。火の番を怠ることはできない。

焔の向こう側で、青蘭は膝を抱えたままほとんど身じろぎしなかった。沈んだ目で揺れる火焰を見つめている。

時折、遠吠えや不意な物音がするとぴくりと肩をふるわせる。放心しているわけではないらしい。

顔色は悪い。干し肉を湯で戻しただけのスープも、すすめればおとなしく口をつけた。傷口を確認する時も、始終体をこわばらせてはいたが、抗いはしなかった。

その傷口が赤くなり、熱を帯びはじめたことが、気がかりだった。化膿しかけているのかもしれない。酷くなるようならば、もう一度手当てしなさなければならぬ。

傷の化膿を防ぐという薬湯を与えると、顔をしかめながらもなんとか飲みほした。そのまま横になるように勧めたが、黙って首を振ると膝を抱えて丸くなってしまった。

風が吹き、雨滴が木の葉を叩く。その思いがけない大きさに、青蘭はまた肩をふるわせた。小さく息をのむ。不安そうに自分の肩を

抱く指先に力がこもっている。

「そろそろ休んだ方が良い」

「はい」

おとなしく頷き、のろのろと横になる。碧柊は外套を脱ぐと、そつと近づいた。それに彼女は警戒心をあらわにする。碧柊は手にした外套を掲げるようにしてみせ、「これをかけよ」と声をかけた。

「けれど」

「今宵も冷えよう。遠慮するな。吾は慣れておる」

傍らに膝をつき、遠慮がちにその体を外套で覆ってやる。青蘭は伏し目がちに小さく礼を述べた。荷の一部を枕代わりに仰向けになるしかない。どちらかを下にすれば、圧迫された傷が痛む。

そつと外套を肩まで引き上げる指先が、かすかにふるえている。

碧柊は彼女が心底自分を怖がっているのだと思い、そんな思いをさせてしまった自分に小さくため息をつく。それはほぼ無意識の行為。やりきれなさのにじむその吐息に、青蘭がびくりと身じろぎし、また唇をかんだ。

「痛むか？」

「いえ」

決して目を合わそうとしない。

かたくなに背けられる視線に、碧柊は仕方なくその場を去った。

それからどれほど経過したのか。

うとうとしかけた碧柊は慌てて頭を振って眠気を払い、枯れ枝をたした。

雨で湿っているため、一度にくべられる量は限られる。それでも火勢でぶすぶすと燻されて乾くと、焰は勢いよく燃え上がった。

朝までもつだろうかとその量を眺め、それから焚き火の向こうで青蘭が膝を抱えて丸くなっているのに気づく。

両腕の傷が痛むため、寝返りをうちかけては小さく呻き、結局は仰向けで眠っていたはずなのだが。

膝を抱えて丸くなった姿勢が気にかかり、そっとその顔をのぞきこめば、眉間にしわを寄せて小さく震えていた。

額には細かな汗が浮かんでいた。

「額に触れるぞ」

起きているのかどうか定かではなかったが、驚かさぬように声をかけ、遠慮がちにその頬に触れる。やはりびくりと肩を動かしたが、それ以前にがたがたと全身を震わせていた。

恐る恐る触れた頬も熱かった。恐れていた事態に至ったかと、碧柊は唇をかんだ。

ひどい熱だった。

歯の根もあわぬほどに身を震わせる体を抱き起こし、解熱剤のまぜた湯冷ましを飲ませようとした。震えのあまり、その口の端からこぼれていく。

碧柊は眉間にしわの寄せたのち、小さく息をつくとそれを何度かに分けて口うつしで与えた。

青蘭は小さくむせたが、なんとかその大半を飲み下すことができたようだった。

「非常時だ、許せよ」

腕の中でむせる背中を撫でてやりながら、その耳元で小さく詫びた。

熱が上がりきるまでは震えはおさまらない。その寒さといえはまるで氷のなかに身を沈められているかのようだ。

それを知る碧柊は、そのまましっかり抱き寄せ、その上から外套で二人の体をすっぽり覆った。

「上がりきれば楽なる故な」

言いかけたところで、その耳に届いているかは分からない。

それでも辛そうに時々呻きながら震えている様子を見れば、声をかけずにはいられない。

頬をよせれば、熱くやわらかい。

邂逅からの短い時間のなかで、その体を身近に接する機会は何度かあった。意識しないように努めてきたが、体を温めようと抱き寄せれ、それを嫌でも感じざるを得ない。

そんな状況ではないと己を戒めつつも、見た目より華奢でありながら、やわらかな体と甘いような香りをついつい意識してしまう。

全身で、さらには言葉でまで、拒まれたのはつい数時間前のことだ。その記憶と衝撃はいまだに生々しい。このような状況でもなければ、触れることはできなかった。後ろめたさを覚えつつ、熱さえ下がればもうこんなことはしないからなと言葉にはせず繰り返す。

人並みに本能的な欲望というものは持ち合わせているが、劣情のままの行動を自分に許すことはできない。では、あの口付けはなんだったのかと思えば、頭痛を覚える。

文字通りの口封じだった。衝動は苛立ちだった。劣情とは違う。そもそも伴侶となる女性以外には手を出さないつもりだ。利害関係で結婚するわけだが、せめて妻には誠実であろうと決めている。

彼女の望むように自分が勝者となり青蘭姫を取り戻せたとしても、このような事態に至っては予定通り婚姻に至るかどうかは分からない。二つに割れた国を一つに戻すための婚姻でなければ意味はない。それがどうなるか分からない以上、なおさら手をつけるわけにはいかない。ましてや彼女は青蘭姫の従姉であり、随分と二人は仲睦まじいらしい。最も情を通じるわけにはいかない相手だ。

ひとたび意識するようなことになれば、それを自制するのは難しいだろう。

どちらかといえば情があつく、移り気でもない。多情ではない故に、一人の女性にのめりこむ恐れがある。その自覚があるため、できるだけ女性を遠ざけてきた。

まったく接触がなかったわけではないが、そもそも花嫁候補となりうる貴族階級の娘が人前に出てくることはない。身分の高い娘は深窓に育つものであり、初夜にはじめて互いの顔を見るとというのが



普通だった。結婚したのちは、夫と共に公的な場に顔を出すことも珍しくない。

王城勤めの女性たちは身分が低かったり、すでに既婚だったり、相手となりうる若い女性の姿を見かけることはほぼ無かった。

後宮に母を訪ねるときだけはそうもいかなかったが、あの華やかさを苦手とする碧柊は、子としての義理だけ果たすと早々に退出した。そんな息子を、母は仕方ない子ねと笑っていたものだ。

その母も数年前に亡くなった。父の最期を思えば、それで良かったのかもしれない。

碧柊が生まれた時、ひどい難産だったとき。そのせいかその後子供を授かることはなかったが、最後まで睦まじい夫婦だった。

明柊の母である叔母と父が若い頃に相愛であったと知った時は驚いたが、両親の現在を見ていけば、それは過ぎ去った遠い日々のお出来事なのだろうと自然と納得できた。

碧柊の短い生においても、すでに懐かしい日々がある。それは誰しも同じだろう。

どんな事情で一緒になるにせよ、伴侶には誠実であろうとする決心は、そんな両親への想いもあつてもかもしれない。

だからと言って、今この時に腕のなかにいる少女をこれまでのように意識せずにおられるかといえ、それもとうてい無理なように思われる。

「ともかく今は怪我人だ」

思わず声に出して呟いていた。それが己に言い聞かせるように響いたため、碧柊は力なく苦笑した。

### 第3章 森 6

熱はさらに二昼夜続いた。その間、碧柊はつきつきりで看病に当たった。

ようやく熱の引いた朝、青蘭が目にしたのは靄を透かしてさしこむ払暁の光だった。

靄の彼方に樹影が様々な濃淡で折り重なるように浮かぶ。いつだったか、奥の宮の女たちの無聊を慰めるために行われた、影絵で語られる物語の背景のようだ。

焚き火はくすぶり、焰は消えていた。白い灰ばかりが目につく。その向こう側に、太刀を抱え込むようにして幹に凭れて眠る姿があった。碧柊だった。

いつもきちんと結わえられていた髪はやや乱れ、こぼれた髪が頬にかかっている。日焼けした精悍な顔には、疲労の色が濃い。

青蘭が彼の眠っているところを見たのははじめてだった。

数日分の無精髭が口の周りや頬をおおい、疲労ですさんだ面は、生真面目な青年を粗野な荒くれ者に変えていた。

数日でこれほど面変わりすることもあるのかと、少し驚きつつ横たわったまま見つめた。

体はすっかり楽になっていた。熱く疼いていた両腕の痛みも和らいでいる。倦怠感に支配されているが、頭の芯はすっきりしている。熱にうなされている間、酷い寒さでどうしようもなかった。火が傍にあっても、まるで真冬の湖に沈められているかのようだった。

以前、毒殺されかかった時もそれが抜けきるまでは酷く苦しかったが、苦痛の程を比べれば似たり寄りだったりだったかもしれない。

けれどそれも途中で温もりに包まれ、少しだけ和らいだような記憶がある。熱に浮かされていたため定かではないが、夢ではなかったと思えるだけの実感が残っている。誰かが時折声をかけてくれていた。励ますように、諭すように。

朦朧としていて最初は誰か分からず、雪蘭せつらんの名を呼んでしまったような気もするが、こうして目が覚めてみれば彼以外の誰であるはずもない。そうとなれば、あの温もりが誰のものだったのかもはっきりしてくる。

青蘭は上を向いて小さく息を押しだした。幾重にもかぶさりあう枝葉を透かし、わずかに届く光に目を細める。

苓南れいなんの咎を逃れてすでに幾日たつのか。もはや青蘭には分からない。一日二日ではないことだけは確かだった。

何故、王太子は自分を置いていかなかったのだろう。怪我人にかずらっている場合ではないはずだ。まずは自身が逃げ延びなければならぬはずなのに。それが彼に分からないはずもない。

少しだけ腕を動かしてみる。痛みはあまりなかった。

無意識のうちに指先が唇を探りあてる。それに気付いて、一人で紅くなり眉をひそめた。

そんなはずはない。

あの時、彼は彼女が青蘭姫だったと口走った。青蘭が口にした“青蘭姫”の話はすべて雪蘭のことだ。彼もそんな雪蘭の人柄を好ましく思ったようだった。

この窮地では“雪蘭”ではなく、しっかり者の“青蘭姫”のほうがいいかと思っただろう。

それは青蘭も分かっている。分かっているが、ここには自分しかない。これまでなんとか持ちこたえていた足元が、あの時いちどきに崩れてしまったような気がした。

やはり、自分では駄目なのだ。そして、それは自明の理でもあった。

眦まなひじりがあつくなり、こみあげそうになるものを堪えようと目をこすっている、碧椏が身動きした。

「目が覚めたようだな」

億劫そうに欠伸を押し殺しながらの言葉に、青蘭はゆっくりと起き上がった。

「はい……」

短く答えながら、継ぐ穂に迷う。ここで終わらせてしまえば、また重苦しい沈黙が戻ってしまうだろう。けれど続ける言葉が見つからない。

「痛みは如何ほどだ？ 具合は？」

問いかけながら背伸びをし、次にだるそうに肩を回す。

青蘭に気を遣ってこちらを見ないのではなく、寝起きでぼんやりしているように見える。珍しいと思いつつ、つつい観察してしま

う。  
「痛みはそれほどでもありません。具合もずいぶん楽になりました」  
「それなら良い」

安堵したようにふっと肩の力を抜き、視線を感じたように振り返った。

「また吾の顔が如何したか？」

訝しげな眼差しに、青蘭はとっさに目をそらすこともできず、誤魔化すように笑った。

「いえ、あの……ずいぶんと面変わりなさったと けれど、また、とは？」

碧柊は自分の顔を顎から頬にかけて撫であげ、その感触に苦笑した。

「だいぶ無精髭が伸びたようだな またというのは、あの時も、はじめて会った時も、そなたは吾の顔をしげしげと眺めておったろう」

「……あれはお詫び申し上げたはずですが」

「根に持っておるわけではない。ただ、ふと懐かしい感じがしてな。あれからさほど日にちも経っておらぬのにな」

懐かしむように目を細め、微かに笑って青蘭を見つめる。その眼差しの優しさに、青蘭は思わず目をそらした。

「色々ありましたから」

「そうだな」

その相槌が何故か楽しげにも聞こえ、空耳かとそつと視線をむける。

消えかけた火を再び大きくしようとしている碧柊の顔は、未だに疲労の影は去っていないがひどく穏やかだった。

「悠長にしている時間は あれから何日経ったのですか？」

不安げな青蘭の声に、碧柊はちらりと余裕のある笑みを見せた。

「皆を出てから5日目だ」

「そんなに……」

愕然と肩を落とす彼女に、碧柊は口の端を歪める。

「そうだ。だが、まだ捕まっておらぬし、そなたの熱も下がった。

これ以上悪くはなるまい」

他人事のように気楽な様子に、青蘭は拳を握る。

灰の下には火種が残っていたらしく、枯れ葉にうまく燃えうつった。そこへ水をいれた鍋をかける。

「そのようなわけがあるはずではありませんか。私のことなど置き去りになさるべきだったのです。殿下には生き延びる義務がありなのに」

「だが、そなたも死ぬのだろう。青蘭姫との約束であろうが」

「それは私の事情です。それを殿下が気になさる必要は」

抗弁する青蘭を、碧柊は冷やかな眼差しで沈黙させた。気まずげに黙り込むのを一瞥すると、にやりと意地悪気に口の端を上げる。

「つまらぬことを言い募るようなら、またその唇を塞ぐぞ」

「っ」

びくつと体を震わせた青蘭は、慌てて口元を押さえる。

その様子に、王太子は愉快そうに笑った。

「効き目は大きいようだな それから、何度も言うておるよう唇をかむのもやめよ。見つけたときは同じように計らうぞ」

明らかにからかわれている。青蘭は耳まで真っ赤にして睨みつける。

「な、なんということを」

「初心な娘は扱いやすうて助かる」

「お戯れも程々になさってください」

怒りもあらわに抗議すると、碧柊はひやっとするような眼差しを寄こした。

「戯れではない。嫌ならば今後はするな」

「するものですか」

切実な顔で断言すると、彼は再び笑いだす。青蘭は悔しさと恥ずかしさの入り混じった想いで見据える。何故か、その笑顔は少し切なげにも見えた。

### 第3章 森 7

風が頬をなぶっていく。

窓は北向きに設けられている。窓の外には格子がはめられ、それは花と鳥を模した文様を成している。模様の部分には色硝子や鉄板がはめられ、外の景色を見ることはできない。風は鮮やかな模様の隙間から吹きこむ。

窓辺の椅子に腰かけた少女の髪が流れる。吹き抜ける風は涼しく、直射日光のさしこまない部屋は真昼であつても心地よい。

「雪蘭さま」

香露いんりゅうが湯気ゆけのたつ茶器をさしだす。それを受け取るうと体をねじりかけ、雪蘭は眉をひそめた。

「ご無理なさらずに。まだ痛んで当然です」

「そのようね」

声に波はないが、その手は腹部に触れている。昨日、青蘭せいらんの兄あに蒼そう杞きの蹴られた痕は、未だに内出血と痛みとなつて残っている。

雪蘭は小さく息をつき、背もたれに身を預ける。

「この窓では外も見えない。これほど東葉とうはは葉の王女を封じたかつたらしい」

東葉の始祖はおよそ100年前の葉女王の同母弟。二人は双子だったという。

姉が女王として即位し祭祀を司り、それに基づき弟が政まつりごとをとりしきった。

治世の最初の10年は葉に繁栄をもたらした。その後、葉は二つに割れた。

弟が姉を退位させ、自分の妻である王女を新たな女王に祭りあげようとした。

旧勢力は女王をかついで反撃に出て、主に新興勢力と軍の指示を集めていた弟側と衝突した。

その結果、弟側が敗れ、東葉に逃れた。

その頃の東葉はまだ鉾脈も見つかっておらず、深い森と厳しい気候、農業に適さない土地柄から辺境扱いされ、葉の中央政権による支配は完全には及んでいなかった。

それどころか翼波よくはの民の居住地も点在しており、実質的には広大な両国の緩衝地帯となっていた。

その当時、実質的には東葉は葉の一部とはみなされていなかった。王弟勢力を東の辺境へ追いやったことで、女王側は安心してしまった。その数は警戒するには値しないと見なされた。

東葉に逃れた人々は元々住み着いていた人々を取り込み、時には翼波の民すら飲み込みつつ確実にその数を増していった。

西葉から逃れてくる人々もあった。

西葉国内では絶えず陰謀術数が渦巻き、敗れたものは一族諸共に滅ぼされる。その敗者たちが東葉に逃れるようになった。

その頃には鉾脈が次々と発見され、東葉は確実に経済力をつけていた。それは農業の育成と様々な技術力の向上に回され、軍備も拡張されていった。

東葉は航海技術をも発達させ、翼波を通さず遠方の国々との交易経路を開発した。

その金の匂いを敏感にかぎ取った西葉の商人たちは、ひそかに東葉と取引をはじめた。そのために東葉に移住する者も少なくなかった。その当時、西葉にとって東葉は未だ存在しない国であった。そのため表立って咎められることもなかった。

技術者には西葉の数倍の報酬が支払われ、その噂につられて移住してくるものも後を絶たなかった。西葉ではごく少数の人々にその利益が集中し、職人たちへ還元されることはほとんどなく、彼等の暮らしは貧しかった。

国の東側でのこの動きを、西葉も見逃していたわけではなかった。彼らが東葉に見出した価値は、金蔵という意味においてだった。

東葉にとって不都合な様々なことを見過ぎす代わりに、彼等の手元



には少なくない金がもたらされた。確実なもう一つの勢力の胎動に、彼等はその金のために気付かないふりをした。

そして、それも終わりを迎える。

確実に力をつけた東葉は、ある時を境にその存在を明らかにする。それは確実に“国内”に存在するもう一つの葉の国を認めようとしていない、西の葉に対して独立を宣言するものだった。

まず、東葉の民との混血を拒んだ翼波の人々が追われた。

東葉と翼波の確執はここから始まる。東葉こそわが故郷と唱える翼波側にも、歴史的背景を持つ言い分があった。

東葉の独立を、西葉が認めるわけはなかった。一地方の叛乱としか見なさず、その正確な実力をはかるうともしなかった。

1万にも及ばない1個師団を派遣しただけで、それを押さえようとした。当時の東葉の軍は5万。それも訓練の生き届いた精鋭ぞろい。一方の西葉軍はろくに練兵すら行っていないような状況だった。結果は火を見る明らかだった。西葉軍は惨敗したが、東葉はそのあとを追って攻め込むようなことはしなかった。

それから半世紀以上たつ。西葉側の軍の立て直しなどもあり、戦況は一進一退で決着はつかなかった。

その理由の一つには東葉が自国の育成に専念し、無駄な戦を避けてきたという事情もある。翼波との戦いの方が切実であり、西葉との戦いはその次だった。

西葉側は決して東葉を認めなかった。もう一つの“葉”を名乗る僭称者を誅滅しようとして“討伐”軍を何度もさしむけた。

東葉が敗れることはなかったが、勝利したからといってその勢いに乗じて西葉へ攻め込んでくるはなかった。そのため西葉側は東葉をただの山師であるのみならず、女神の真の末裔たる“葉”を畏れて侵入できないのだと勝手に解釈した。

ただ、東葉側は適切な時期を見定めていたにすぎない。

そして、いよいよその時の到来を確信した東葉は、この春に西葉へ攻め込み、瞬く間に西葉王都を落とした。

その100年の間。

西葉王室内部での権力闘争に敗れた葉王家直系の王女をいただく勢力が、東葉に亡命することは何度かあった。その王女たちは東葉王に嫁いだが、彼らの間に王女が産まれることはついになかった。

その逆恨みのためか、東葉では女性に対する制約が厳しい。決して王女には女王を名乗らせず、祭祀にたずさわる時以外は後宮にとじこめて表には決して出さない。

西葉でも似たような状況だが、公の場には必ず列席する。王妃の臨席は、青蘭の母が亡くなって以来王妃不在のため絶えてはいるが、西葉の後宮のつくりはもつとゆつたりしている。そこは女神の娘である女王の聖域であり、それを守るために閉ざされていた。

一方、東葉の後宮は王妃を閉じ込める意図がはっきりしている。直系ではなくとも少しでもその血筋に近い傍系の“王女”である王妃の存在は絶対条件であり、そのくせ絶対に王女を産まないその血は疎まれた。

「けれど、それも仕方のないことではありませんか。東葉にはついに一人の王女も生まれなかったそうですから」

東葉王女は傍系王族にのみ生まれている。その傍系王女を妻に迎えても、それでも直系王家に王女は生まれなかった。

「理をもって治める東葉においても、血への信奉はついに捨てきれなかったか」

珍しく感慨のこもるその声に、香露は目を伏せる。

「西であったも東であったも、葉は葉でございましょう。だからこそ100年の時を経て、まだ葉は葉の血を求めるのでしょうか」

「国が二つに割れたのも、女神の意志だと？」

雪蘭は静かに問い、そつと茶器に口をつけた。ゆるやかな芳香が身の内に満ちていく。深々と息を吐き、閉ざされた窓の向こう側へ視線を巡らせる。

「姫が　青蘭が無事であれば、その時こそ私も女神を信じよう」

その無事を確信しつつ、不安もまた拭いきれない。そんな心中を

うかがわせる雪蘭の肩に、香露はそっと触れる。  
そこへ、蒼杞の訪れが知らされた。

### 第3章 森 8

父が亡くなった時、雪蘭は8歳せつらんになったばかりだった。

その頃、雪蘭は両親とともに岑州しんにいた。父の乳母であり後見人である岑家の居城ろっかで穏やかに暮らしていた。

その父は時折王都六華を訪ねていた。雪蘭も生まれは六華だが、育ちは岑州だ。王都がどんなところなのか、両親や岑家の人々から聞かされるしか知るすべはなかった。

その時も、父は六華を訪ねていた。そして二度と帰ることはなかった。

かわりにもたらされたのは父の死の知らせだった。

雪蘭は王族ではないが、父は廃嫡されても王族だった。王族の遺体は王家の霊廟に葬られるものとされ、遺体との面会もかなわなかった。

そして雪蘭は父の遺言通り王都に戻り、奥の宮に入った。

青蘭の命を守ることを最優先にしつつ、父の死の真相も探った。

そしてほどなく明らかになる事実。

父が亡くなったのは、東宮においてだった。そして、当時の東宮の主は蒼杞。まだ10歳にすぎなかったとはいえ、彼にまつわる暗い噂はすでに出回っていた。

それ以上の詳しい事情は分からないままで。

けれど、雪蘭にとってはそれで十分だった。

父に続いて青蘭まで失うわけにはいかない。ただそれだけのために、ここまでやってきたのだ。

入室した蒼杞は使われた形跡のない寝台を不躰に見まわし、昨日の暴力にもかかわらず臆した様子のない雪蘭を不愉快そうに見やっ

た。

切れ長の目が冷やかに妹をとらえる。

「本日は何用でございますか」

感情を一片も忍ばせない声音に、蒼杞は形の良い眉をひそめた。

「わざわざ知らせにきてやったのだ」

「なにをでございますか」

心情の起伏をわずかもうかがわせない無表情に、苛立たしげに足をふみならず。

「そなたの夫になろうとした匹夫はまんまと逃げおおせたそうだ。

だが、安堵せよ。そのあとをそなたの夫となる男が追っており。じきに朗報が届こう」

「 どういうことでございますか」

東葉王太子碧柎が逃げ延びたことは雪蘭も知っている。けれど、それ以上の新たな知らせはもたらされていなかった。

はじめて動揺を見せた妹に、蒼杞は満足そうな笑みを浮かべた。

「れいめいしゅう 苓公明柎を知っておるか」

「 はい」

苓公は王太子の従兄であり、東葉の王位継承権は王太子に次ぐ。知略に富み、王太子の片腕であるともいわれている。それもあってか、軍務の実際の多くは彼にまかされていたらしい。明るく華やかな人柄は一方で軽薄だとの誹謗を生みながらも、人気を集めている。

「そやつがそなたの夫となる」

「」

「そなたを妻に迎えられるなら、東葉は身分をわきまえわれらに臣従すると云いおつてな。そなたもどうせ夫とするなら、身の程知らずの愚か者より賢明な者の方が良からう」

得意げに語る蒼杞を、雪蘭は絶望的な心地でみつめる。

自分が把握しておけばいいと考え青蘭には知らせなかったが、明柎は21という若さですでに何度も疑惑の目を向けられている。に

もかわらず、のうのと逃げおおせてきた曲者だ。

それを彼は知らないのだろうか。そんな人物の言葉を鵜呑みにしているのだろうか。

同時に悟る。

彼は自分の耳に心地よい言葉にしか耳を傾けないのだ。

そして、不愉快な言葉を口にした人間には容赦ない。何故、父が亡くなったのか。その真相の一端が見えたような気がした。

西葉の軍の解体には明柊もからんでいた。その裏側でなにが行われていたのか、雪蘭にもつかみ切れていない。それはどれほど巧妙にことが仕組まれ運ばれたかという証でもある。

それを可能にした苺公明柊。

その性質たちの悪さが如何程のものか、分かるうというものだ。蒼杞を言いくるめることなど造作もなかったのだろう。

「 兄上のご深慮、ありがたく存じます 」

微笑を浮かべて恭しく頭を垂れた妹に、蒼杞は訝しげな表情をちらりとみせたが、じきに機嫌をなおした。

「 そうであろう。じきに不届き者の首も届こう 」

「 待ち遠しゅうございます 」  
にこりと笑ってみせる。

青蘭の心からの笑顔はややあどけなく、その分人の警戒心を解きやすい。雪蘭もとりわけ好きな青蘭の笑顔だが、それをここでは利用する。

案の定、蒼杞はすっかり気をよくして出ていった。妹の態度の急変に不審感を抱かなかつたらしい。

残された雪蘭は、切実な思いで溜息をついた。

「 つくづくおめでたい方だ 」

雪蘭の父紅桂が亡くなった経緯は香露も知っている。それだけに雪蘭の落胆の程は、香露にも手に取るように分かった。

あのような手合いに父は命を奪われたのか。

彼自身が自ら手を下したかどうかは問題ではない。彼の意思のも

とにそれが行われたということが口惜しい。

推測が当たっていれば、父を手にかけて10歳の子供は未だにその時のままでいる。

この10年、西葉では彼の手によりさまざまなもの失われた。

拳句、国も存亡の危機にある。それは今や西葉だけでなく東葉まで巻き込み、“葉”そのものを揺るがそうとしている。

「私は“青蘭姫”としてどう振舞うべきなのか」

幼い頃はあらゆる質問に答えてくれる頼もしい声があった。だが、小さな問いかけに答えてくれる声はとうに失われた。

香露はやわらかな絹糸のような主の髪をそつとなでた。

### 第3章 森 9

ある時、王都六華から戻った父は、幼い雪蘭の小さな体を抱いて庭へ出た。

それは今と同じ時季<sup>ときざゆ</sup>。

庭には様々に改良された多くの蘭が咲き乱れ、または咲き初めようとしていた。

「そなたと同じ“蘭”を負<sup>お</sup>う姫がおられるのだよ」

「私と同じ？」

舌足らずな言葉遣いで、けれど理知的な光を早くも宿す娘の瞳に、父は優しく微笑した。

「そう、この国で“蘭”を名乗ることができるのはそなたと王女だけだ」

「せつらん？」

「姫は青蘭姫とおっしゃる。そなたたちは同じ姓は名乗れぬが、この花と同じ名を有しているのだよ」

そつと娘を地面におろし、その体に腕をまわしたまま膝をついて目の前の青い蘭の花弁に触れる。

それは妖艶絢爛で多様に競い合う花々のかげに隠れるように、けれど凜として咲く小さな青い蘭だった。父はその隣に雪のような花弁の蘭を置く。

「私は白い蘭」

「そう。そなたたちは従姉妹同士だ。女神の血にとらわれないそなたが、やがてはこの花をお守りするのだよ」

雪蘭は父の腕からはなれると、青い蘭の小さな鉢を手にとった。それは幼い雪蘭の腕には少々重かった。

その重さは今も手に残っている。

円卓の上に置かれた小さな鉢。そこにはあの日と同じ花が咲いている。



兄を敬う態度を示し始めた妹に、蒼杞は気分を良くしている。

青い蘭を望めば、数時間後にはこの鉢が届けられた。

「可憐な蘭でございますね」

「青蘭の花」

珍しく姐と呼ばす、その名を口にした。

香露はそれに気づき、薄く笑む。

「気休めだが」

花卉に触れる指先は、そこにいない従妹の髪を梳くように優しく  
つた。

情報は覗見かきまみと蒼杞そうしからもたらされた。

蒼杞はおだてればべらべらと戦況を話してくれた。それを裏付け  
る覗見の報告がある。

彼の話には誇張や嘘も多くまじっていた。果たして事実をどこま  
で把握した上で、滔々と語ってくれているのか。

王太子と、彼を追う苓公れいなんは荅南の砦に入ったという。明柊はじき  
に王太子の首を提げて戻るだろうと、蒼杞は笑った。

翠華城下すいかでは西葉軍による乱暴狼藉が横行し、略奪もすさまじい  
という。

手向かうものは容赦なく切り捨てられ、人々は攫さらわれ、足手まとい  
になる老人や幼子も刃の餌食になっているらしい。

「このままでは城下には雑草一本残らぬやもしれませぬ」

報告の最後にそんなことを言い添えた。通常、覗見は事実のみを  
告げる。よほどの惨状が繰り広げられているのだろう。

そして蒼杞はそれを止めようとしなない。知らぬのか、それとも気  
にとめていないのか。おそらくそのどちらでもないのだろう。

城内では城下以上に陰惨な光景が展開されていた。

王城での略奪はいつさい禁じられた。それは蒼杞一人の権利とさ

れたからに他ならない。彼は奪うのではなく、破壊を徹底した。雪蘭たちが軟禁されている後宮にまでその手は及んでいないが、王城の半ばは廃墟と化しつつあるらしい。

それと同時に、人質に取られた貴族たちも日一日と人数を減らしている。なにが行われているのか、報告を聞くまでもなかった。

腐敗臭を嫌った蒼杞が、犠牲者たちの遺体を温室に放り込むよう指示したため、気候とあいまってその室内はすさまじいことになっているらしい。

蒼杞が王太子のかわりだといって持ってきたのは、さん 蕪東宮大夫の首だった。

目をむき舌の飛び出した顔には苦悶が刻まれていた。

わざと刃こぼれした太刀で、時間をかけて引き切ってやったのだと得意げに告げられ、さすがの雪蘭も本気で気分が悪くなった。それに蒼杞は気を悪くするどころか、ますます上機嫌になった。

その首が誰とつながるものか、雪蘭も知っていた。

蕪東宮大夫は碧柊の後見人である、乳母の一族の当主だ。碧柊が即位した暁にはそれなりの地位を約されていた有力貴族であり、綾りよ 霖うづんの父でもある。

王太子と共に逃れた青蘭の世話を焼き、命を賭して逃してくれたのが、生首となり果てたその人の息子だとは、雪蘭には知りようもない。

蒼杞がその不愉快な手土産を一緒に持ち帰ってくれたあと、雪蘭はその場に崩れて嘔吐した。

香露かうろうが慌てて駆け寄り、狭霰さえいが陶器の盥うをもってきた。

喉が胃酸で焼け、その痛みで涙が滲むほど嘔吐した後、ようやく雪蘭は顔をあげた。

そのおもては白い蠟の仮面と化していた。

「父さまもあんな風に殺されたのかしら」

平坦な口調だが、言葉遣いは奥の宮にくる以前の子供のころに戻っている。

「雪蘭さま」

香露がそつとその肩に触れようとしたが、それは乱暴な仕草で拒まれた。

女官長の手を払いのけると、雪蘭は狭霰のさしだした布で口元を拭い、静かに立ち上がった。

「絶対に許さない　絶対に殺させない」

目の前の敷物には血だまりができていた。それは点々と扉から続き、再び戻っていった。

ようやく切り落としたばかりのそれを自慢げに、そして無造作に彼はそれをわしづかみにして運んできた。汚れると行って滅多と外さない手袋はなく、素手で薄くなった髪に指をからめていた。

生々しい血臭がたちこめている。

狭霰がたちあがり、全ての窓を開け放つ。昼下がりの生ぬるい風が空気を攪拌する。

赤黒い血だまりから目をそらすことなく、雪蘭は拳をつくる。その手が細かく震えていた。

「絶対に青蘭は殺せない」

従妹を守る。それははじめて彼女の笑顔を見た時にきめたこと。だが、その決意はさらに固いものとなった。

はじめて会ったとき、驚いたのはむしる周囲の大人たちだった。

奥の宮の主たる青蘭姫のもとへ挨拶に伺候した雪蘭一行を迎える側も、迎えられる側も同様だった。

「なんとまあ」

「ほんに」

両脇に女官を従え子供には大きすぎる椅子に腰かけた幼女は、新たな住人たちに対面した。

周囲の声に誘われるように、恭しく頭を垂れていた雪蘭も顔をあげた。

ともに表情を欠いたまま、二人の子供ははじめて視線を交えた。

椅子の背と手すりには玉がはめ込まれ、豪華な刺繍の施された絹地をはった椅子は、宮の主にふさわしい。

童形に結われた髪には、色鮮やかな硝子玉を連ねた歩揺ほゆがさしてある。

共に参内した香露に促され、雪蘭は主となる従妹に挨拶した。

それに主は黙って頷くのみだった。頷いた拍子にその歩揺がすかな音をたてる。

結び残された横髪が艶々と光る。ふつくらと白い肌。くつきりとした黒い眼。幼いながらも端正な顔立ちには生気が欠け、等身大の人形のようにも見える。

対する雪蘭も無表情ではあったが、こちらは緊張もあってのことだった。

はじめて従妹と対峙した雪蘭は、不思議な心地で彼女を見つめた。

まわりが驚いた理由はじきに分かった。

鏡に映したようだ。まるで双子のようだ。

女官たちは驚きと好奇心をにじませ、にぎやかに囁いた。

「お並びになつてはいかがですか？」

楽しげに声をかけ、姫の返事も待たずにその体を椅子から抱き下ろす。

わざわざ主である王女を椅子からおろし、雪蘭と並んで立たせた。仰々しいほど恭しい態度と手つきに、偽りがうつる。

雪蘭は妙にはしゃぐ奥の宮の女官たちを、冷めた眼差しで観察する。

一つ違い。背丈にも顔立ちにも、さほど大きな差はない。

一方は華やかな衣装に身を包み、片方は喪に服していることをあらわす黒一色をまとっている。

対照的であるほど、その相似性が際立った。

香露の目にもまさに双子のような二人だった。

女官たちは小さな従姉妹同士をかこんでやかましくはしゃいだ。

それに香露と狭霰はさりげなく目配せを交わす。

どれだけ自分たちが礼儀を逸しているのか、彼女たちは分かっている。いない。

雪蘭が苛立ちに眉をひそめると、香露はさりげなく口をはさんで少女たちを二人きりで庭に逃してくれた。

雪蘭は従妹の腕をつかんで庭の奥へと逃れた。

しよせんは奥の宮とて大きな鳥かごの一部にすぎない。どこへ逃げられるはずもない。案じて追ってくる者はなかった。

まるで駆けるような早足で林をつつきり、ようやく足を止めたのは連れが躓いたからだだった。転倒は免れたが、肩で大きく息をしている。白い頬には汗が伝っていた。

「ごめんなさい、大丈夫？」

慌てて詫びると、王女は小さく首をふった。

そつと顔をのぞきこむと、すつと視線を逸らす。頬を伝う汗を指先で拭おうとすると、びくりと身を震わせた。その思いがけず大きな仕草に、雪蘭も驚いた。

「触られるのは、いや？」

その問いにも応じない。やはり無表情なまま、どこにも眼差しの焦点をあわせずにいる。

聞こえていないわけではない。

だが、応じず、目も合わせず、なにも話さない。

王女が唾だとは聞かされていなかった。

困り果てた雪蘭は木の下に日溜りをみつけ、そこに座ろうと促した。

そして、その間もずっと手をつないだままだったことに気づく。

そのまま一緒に腰を下ろす。日差しを浴びた下草はやわらかく温かい。

並んで座るとスカートの裾がふわりと広がり、華麗な花と黒薔薇が咲いているようだった。

重なり合う襷の上に繋いだままの手をおく。雪蘭が手を離さず指を滑らせしっかり握っても、王女はその手をふりほどきはしなかった。

そのまま交わす言葉もなく日向ぼっこをしていると、なんの前触れもなく肩に重みがかかる。

見れば、雪蘭の肩に寄り掛かるようにして、姫が小さな寝息を立てている。

そっと手を放して、従妹の頭を膝の上につつす。膝に小さな重み加わる。あどけなく愛らしい寝顔に、ようやく雪蘭は彼女が生きていることに納得できたのだった。

宮の主が軽んじられていることは、幼い雪蘭にも感ぜられた。

王女にふさわしく日々飾り立てられ、恭しく扱われていても、おのずと滲み出るものがある。

それは奥の宮の空気を支配していればなおのこと。

最初、雪蘭にはその正体が知れなかった。それまでに覚えのない

違和感を抱きつつも、未知なことだけに知りえようがなかった。

だが、それもじきに悟ることになる。

言葉の端々に滲む棘、いたずらに苛むような皮肉、わずかばかり大きすぎる溜息、隠す気のない忍び笑い、目配せ、嘲弄。

その中心にいるのはいつもその主だった。

なにが起こっているのか悟っても、その意味が理解できず、雪蘭は困惑した。

悪意とは無縁に育った彼女に、人の持つ別の側面を思い知らせてくれた。

王子を父に、奴隷を母に持つ、自分の本来の階級が母と同じであることを承知している。そんな身分など関わりなく、さん斬家で両親と父を敬う香露や狭霰に囲まれて育った雪蘭は、自分が大切にされてきたことをこの時あらためて知った。

雪蘭は誰に相談することなく、じつと静かにすべてを悟るまで観察続けた。

そして、ある日、その観察に終止符を打つ。

その年最初の雪が降りそうな夜だった。

西葉南部の温暖な斬州育ちの雪蘭に、王城の冷え込みははじめて体験する眠れないほどの寒さだった。

雪蘭の部屋は青蘭の主寝室の隣にあった。

女官扱いとはいえ、現国王の兄の娘であり、今や有力貴族斬家の姫でもある彼女への扱いは王女に準じた。

窓掛けはきつちりと閉じられているはずなのに、一条のあえかな光がさしていた。

それは青の玻璃ガラスを透かしたように淡い。

月を想い、寝台から抜け出す。厚手の毛織の長衣を羽織り、そつと窓掛けをくる。

しつとりと露の降りた庭に、幽き月明かりが満ちる。

一面の波頭のようにきらめく光に誘われ、外へ彷徨い出る。

白露しろつゆを踏むと、やわらかな室内履きが少しずつ濡れていく。寒さは呼吸を伝って身の内に侵入してくる。それを阻むように口を閉ざしても、わずかに漏れる吐息が煙となって散る。

蒼い月影はすべての内側に忍び込み、その存在の裏側から影となつてあらわにしているかのようだった。

中空には雲一つなく、澄み切った大気は澄んだ音が響きそうに晴れ渡る。

星明かりもかすむ。

いざなわれるように庭の半ばまで歩み出て、そこでようやくもう一つの人影に気づいた。

それは空を見ず、しゃがみこんでうなだれていた。

肩を抱くように膝を抱え、丸く丸くなるように。まるで一つの丸い庭石のようだった。かたかたと震えるかすかな影に、ようやく生きていと知れる。

雪蘭は異常を察し駆け寄った。

それは一つ年下の従妹だった。薄い夜着一枚きりで、足元は裸足。露に濡れ、草の葉がついている。

ぎこちない動きで顔を上げる。そのおもてはすっかり強張っている。ただただ体が震えている。

雪蘭は膝をつき、長衣で彼女をくるむ。抱き寄せるとまるで氷のようだった。人の体がここまで冷えることがあるのかと、わずかに怯んだ末、さらに力強く抱きしめる。

青蘭はなされるがままに身を預けている。

なにが起こっているのか、考えるまでもない。

確信をこめて顔を上げると、王女の寝室の窓掛けがわずかに動いたような気がした。

けれど、誰も出てこない。

さすがに鍵はあけていったかもしれないが。



雪蘭は青蘭がこのまま死んでしまうのではないかと不安になり、さらにきつくきつく渾身の力で抱きしめる。

かける言葉も出てこない。  
濡れた岩肌のような頬に頬を擦り寄せ、少しでも体温を分け与えようと体を密着させる。

引き結んだ口の端からもれる息が立ち上る。いたずらに失われていく熱がもどかしい。

こぼれそうになる涙をこらえる。それはじきに冷え、氷の粒になる。

ただただ必死に抱き寄せ、頬を擦り寄せていると、ようやく彼女が呟いた。

「……………」  
けれど、届かない。

「なあに？」  
力を緩めず、そつと囁く。

共に教えを受けるとき以外に、彼女の声を聞いたことがないことにあらためて気づく。

「……………たい」  
「え？」

顔をのぞきこむと、彼女はまた俯いてしまった。それでも、言葉を紡ごうとする。

「……………あつたかい」  
「うん」

小さく頷いて、もう一度抱きしめる。  
躊躇いが伝わってきた後、小さな息がもれる。

「ちよつとだけ……………痛い」  
耐えかねたような言葉に、雪蘭は慌てて腕を緩める。

「ごめんね、大丈夫？」  
「うん」

答えてくれるのが嬉しくなり、雪蘭は従妹の肩に額を押しあてた。

「ここは寒いわ」

「……うん」

「私、寒くて眠れなかったの。でも、二人だとあったかいのね……  
ねえ、一緒に、寝てくれない？」

ねだるように囁くと、戸惑いに身じろぎするのがわかる。

それごとぎゅっと抱きしめると、やがて腕のなかで小さくうなづくのが分かった。

それから肩を寄せ合って雪蘭の寝台に戻ると、布団のなかに頭まで潜り込みしつかり抱きあった。

子供同士の体温はうっすら汗をかくほどの温かさで、二人は朝までぐっすり眠った。

香露が窓掛けをあげると、眩しい光がさしこむ。

二人の少女は一つの布団のなかでもぞもぞと目をこすったり身動きする。

「あら、雪がつもっておりますよ」

明るい峻しに、雪蘭は勢いよく飛び起きる。そのまままだ眠たげな青蘭をせかして、薄い夜着のまま窓辺に駆け寄る。もう、寒くはなかつた。

わずかな窓の隙間から外をのぞくと、庭は真っ白に煌めいている。照り返しに目を細めつつ、「綺麗ね」と囁くと、彼女はわずかにはにかんだ。

それが、雪蘭がはじめてみた彼女の笑顔だった。

### 第3章 森 11

二日前に東葉王太子は苓南の砦から逃亡したという報を、覗見かきまみがもたらした。

近衛の多くは砦で討ち死にし、逃れた者も散り散りになつたらしく、王太子自身も単独で逃れた可能性があるという。

青蘭の行方はいまだに知れない。

もっとも欲しい情報は欠片も手に入らず、届く知らせは悪いものばかり。

雪蘭は深々と息をついた。

この西葉による侵攻に、西葉貴族のほとんどはかかわっていない。軍の本体は王家直属のものであり、あとは蒼杞そうきお気に入りその側近や彼の乳母の家が加わっているくらいものだ。

よつて、西葉軍3万という軍勢の最大値はいまのところ増えようはない。

岑家しんからの報せもようやく届いたが、西葉国内では一様に揃つて事態の成り行きを見守っている状態らしい。

蒼杞は東葉の王都を落としたものの、王太子とその従兄れい苓公にも逃げられ、まずはこの二人を討つのが最優先だった。

3万という軍で十分だと判断したのか、西葉貴族へ出兵を求め命令は下されていない。二人を討つことができれば、自ら出陣し参加するものも現れるかもしれない。

苓公はいったん苓州まで逃れたのちに態勢を整え、すぐさま反撃に打って出た。

それと同時に発表されたのは、東葉国王が西葉東宮に討たれたことと共に、それに結託し西葉軍の国内への侵入を手引きしたのは王太子碧柊きしゅうだったというものだった。

苓公明柊はその裏切り者を苓南の砦で見事に討ち果たし、さらに西葉軍との戦いでも目覚ましい戦果をあげている。

その経緯を蒼杞は楽しげに語った。  
すべて計画通りだという。

東葉王弑逆と西葉軍侵入の罪はすべて王太子碧柊に着せ、それを打ち果たした成果を手に明柊は次の東葉王位につく。

それに敗れた形となる西葉側は、彼の要求に従って青蘭を東葉王妃にさしだす。

同時に西葉王位継承権は繰り上がり、蒼杞の正妃が第1位となる。彼はその夫として西葉王として即位するというものだった。

そんなことが本当に可能なのかと雪蘭は内心想ったが、口には出さなかった。

葉王家直系の青蘭が生きている以上、たとえ東葉に彼女をさしだしたとしても、本来の意味での王位継承権は消失しない。青蘭王女が生存している限り、その継承権が消失することはない。

その青蘭を東葉にさしだすということは、東葉に西葉王位を請求する正統な権利を与えることになる。

それ承知しているのかいないのか。もし分かっているとしても、明柊ならば言葉巧みに言いくるめてしまうことも容易いだろう。

蒼杞は、明柊が本当の“葉王家”である西葉を敬い畏まっていると思っっているようだった。

正統な葉の王子である自分を裏切るような真似をしないと、本気で信じているらしい。それだけ己の血筋への自信は絶対であり、信仰に近い。まるで明柊を殉教者のように見なしてさえいる。

明柊は100年前、女神の娘にして真の王たる女王を裏切った、東葉王室の祖の罪を償おうとしているのだと話す。

蒼杞が去ると雪蘭はいつも深々と息をついてしまう。

あくまで兄が正しく、妹にはその言葉に逆らうことは許さない。

従順にして素直に兄を敬う妹を演じなければならぬ。当初、彼女

が批判的な態度を示したことなどすっかり忘れてしまったらしい。

「本当におめでたい方」

「すっかり口癖になってしまわれましたね」

苦笑しつつ香露こうろうが茶器をさしだす。

それを受け取り、ゆっくりと椅子の背に凭れる。

雪蘭がいくら態度を軟化させ、機嫌をとるように媚びてみても、

軟禁は解けない。

“西葉軍を討ち払った”明終が入城するまで、室内以外での自由は認めないとはねつけ、それ以上繰り返せば明らかに機嫌が悪くなったため口にはすることはできなかつた。

城下及び城内では、相変わらずの光景が繰り返されているという。

主だった貴族の当主達は蒼杞の餌食になり、城下から西葉兵以外の人影は消えたともいう。猫や犬の姿すらない。

主を失った貴族たちは未だに当主の安否すらつかめず、王都へ攻めのぼることもできず、自領に引きこもって武装をかためている。

西も東もその理由は違えど、次の態度を決めかねているという状況は似たようなものだ。

ことの真相を知る者はわずか。

苓公明終は今や表向きは故国を救わんと数少ない手勢だけで奮闘中のいわば英雄候補であり、これが成功すれば東葉王位につく十分な条件を得る。

共に戦うのは苓家の、政への影響せいへい力はこれまでの比ではなくなるだろう。

苓公の狙いが東葉王位だけとは思えない雪蘭は、できるだけ蒼杞から話を引き出そうと試みた。そして、その確信を深めていった。

「青蘭の行方が最も気がかりだが、碧柎殿の消息も気にかかる。いたい、無事でおられるのか」

「手がかりはまったく？」

「皆無だ。苓公も反逆者として苓州内と王領内で手配をかけている

が、まだ足取りはつかめていないらしい。ということは死体も見つかっていないのだろう。どこかで息を潜めておられる可能性は高い」この同じ頃、苓南の砦からそう遠くない森のなかで、探し求める二人が一緒にいるなどと、雪蘭は夢にも思っていなかった。

城下から西葉軍が引き上げていくという急な報せがもたらされた翌日、蒼杞は一人の客人を案内してきた。

朝のうちにももって知らせてき、支度を整えておくよという伝言まであった。

湯浴みをすませ、蒼杞の用意した衣装にあらためた頃に、その人はやってきた。

開かれた扉から入ってきたのは、最初に蒼杞、次に鎧姿の青年だった。

身の丈は蒼杞と同じくらいで、兜を脇に抱え、身の丈ほどもあるうかという大ぶりの太刀をさげた姿は凜々しい若武者ぶりだった。

日焼けした顔は人好きのする穏やかな表情を浮かべており、一見した限りは人格者に見えないこともない。涼やかな目元には艶めいたものもあり、人目を引きつける。

雪蘭にはその顔に見覚えがあった。正確にはよく似た人物を知っている。会ったことはないが。

「青蘭、苓公明柊殿だ」

「ほお、これは愛らしい王女殿下であらせられる。このような方を妻に迎えられるとは、これ以上の誉れはありません」

彼は雪蘭ににこりと笑いかけると、恭しく蒼杞に頭を垂れた。

「聖なる女神の娘だ、くれぐれも大切にしていただかねばな」

「それは勿論。その証として、東葉は西葉によくお仕えいたしまし  
よう、殿下 いや、陛下とお呼びすべきですね」

いかにも感謝しているように応じる。決してへりくだっているわ

けでも媚びているわけでもない。心の底からの言葉と態度のように感じられる。

一瞬とはいえ、雪蘭も本当に彼がそう考えているのかと思いかけたほどだった。それを阻んだのは、得体のしれない違和感だった。あくまで苓公は蒼杞を敬うように接し、蒼杞はそれにご満悦という様子だった。

いくつかやりとりを交わしたのち、苓公が二人きりにして欲しいと云いだすと、上機嫌の蒼杞は素直に引き上げていった。

「ようやく二人きりになれましたね、青蘭王女殿下」

「……」

互いに仮面を外したことを確認するように、二人は見交わす。

苓公はあくまで穏やかな笑みを浮かべているが、先ほどまでのどこか不自然だった印象は拭われていた。それでも、心意を読み取ることなど容易にできそうにない。

対する雪蘭も笑顔を消し去り、一片の感情も含まない眼差しで彼を見つめる。

「素直な方だとあなたの兄上よりお聞きしていたのですが、どうやら違うようですね」

「」

苓公はふふつといやに艶めいた笑みをもらす。それを薄気味悪く感じた雪蘭は、わずかに目を眇める。

その表情の変化に、苓公は嬉しそうに微笑む。

「やはりいい顔をなさる。俺と二人きりの時は、是非そういう顔を見せていただきたい。麗しいお顔は表情に富んでいるに限る。俺はお人形に興味はないのでね」

いきなりくだけた物言いで、断りもなく顔を近づける。

突然息がかかるほど間近に迫られた雪蘭は、手元にあったクツシヨンを掴んだ。

それすら予期していたように、武骨な指が細い手首を掴んで動きを封じる。

「いきなり押し倒すような無粋なまねは嫌いでね、安心していただいて結構」

「冗談めかしておきながら、手首に加わる力は半端なものではない。からかうような光を帯びる眼を、雪蘭は冷たく見据えた。

「では、手を放して」

「御意 わが麗しの君、その氷のような眼差しまで雪の結晶のようにお美しい」

半ばうっとりとして囁きながら、その奥底に冗談めかしているわけでもからかっているわけでもない、冷え切った光をのぞかせる。それをあえて雪蘭にさらしたような印象を残した。

彼は雪蘭の白い手を取って口づけけると、さっと身を引いた。

「では、今日はこれで失礼いたしましたよう」

嫣然と囁き、恭しく礼をすると、退室する。その扉が閉ざされる寸前に、不意に足をとめて振り返った。

「そういえば、ひとつ忘れておりました」

「

警戒するように眉をひそめると、彼は満足そうに微笑む。

「伝言です、『じきに参ります』と あなたによく似た愛らしいお方から。確かにお伝えしましたよ」

「……苓公殿！！」

思わず雪蘭は立ち上がり、大きな声で呼ばわったが、彼はそれに応じず扉を閉めてしまった。



## 第4章 宿場 1

森を抜けること二日でようやく木立が疎らになり、視界が開けた。山の背の、遙々とした雲海を抱く山並みは西にあり、森とそのあいだに拓けたのはどうやら牧場らしい。

瑞々しい緑の草原が広がっていた。

放牧された家畜が、あちこちでのんびり草を食んでいる。

渡りくる風は、気のせいか心地よく乾いているような気さえする。樹影にとどまるように馬を止めた碧柎の腕が、ごく自然に青蘭の細い腰にまわされる。

落馬を危ぶんでの思い遣りだとは分かっているけれども、青蘭は居心地の悪い想いで、同時に頬に熱を感じる。

馬は止まっているのだから、落ちる心配はほとんどない。それに青蘭も随分と馬に慣れた。彼は馬上で背後から青蘭の体を支える時は、傷のある上腕をできるだけ避けようと、なにかある度に痛みを尋ねてくれる。

過保護すぎると思うが、負傷した青蘭の扱いへの戸惑いも感じられる。戦場において怪我はつきものだが、それが無縁であるはずの女性となると勝手がわからず困惑しているのかもしれない。同じ人間なのだから男性となら変わりはないはずだが、そう容易く柔軟に対処できないのが、碧柎らしいとも言えるのかもしれない。

傷の酷い痛みを感じることはほとんどなくなっていた。擦れれば違和感があるが、思わず息をのんでしまうような痛みは稀になった。一時は発熱で傷の悪化を危ぶんだが、その後は順調に治っている。青蘭はこれまで自他を問わず傷口など見たことはなかったが、碧柎の見立てではそういうことらしい。

「さて、ようやく森を抜けられたが、ここがどこかはまったく見当がつかぬ」

「山の背側に出られただけでも、ようございました」

太陽の位置さえ分からぬ森のなかで、二人は方向を見失っていた。草に飲み込まれつつある小径が、人の住む地へ続いているだろうという見込みだけを頼りにここまでやってきた。

あとは雲に隠れた尾根を越えていくのみだが、その峠道は限られている。

「みたところ牧場のようだな」

点在してのんびり草を食んでいるのは馬が多い。

馬の育成を主とした牧場ならば、貴族が経営するものか、王領ならば軍の直営である可能性が高い。

もし明柊が手配をまわしていれば、最も危険な場所の一つともなりかねない。

その認識は共通している。

碧柊は馬首を返して来た道を戻り、森の縁から遠ざかるとようやく馬を止めた。

「しばらくは森の縁にそって行った方が良からう」

もどかしくはあるが、それが一番安全な方法だった。

砦から逃れて八日になる。

その間ずっと森のなかにいた。いったい、事態はどうなっているのか。

青蘭はそれについてなにも云わなかった。云えなかった。

碧柊に任せるしかない。自分にできることといえば、なるべく彼の足を引っ張らないことだけだった。

自分にも、彼にも、それぞれに背負っているものがある。

一時は自分を置いて逃げてくれればいいのにとすら思ったが、冷静になってみればこれ以外に選択肢はなかったと云える。

雪蘭との絶対の約束。なにかあっても守ると決めた約束。それがどういふことかということ。兄がこの事態を招いたのなら、それを治めるのは青蘭の役割だ。

そして、明柊に疑いを抱きながらも、甘さ故にそれを防げなかつ

たという碧柊。共に同罪ともいえるのかもしれない。

青蘭は自分の正体について碧柊に話すべきかどうか迷っていた。こうなってしまうえば、もはや隠しておく必要はないと思われる。むしろ隠しておくべきではないのかもしれない。

青蘭が西葉王女であることを知れば、碧柊がとるべき手段が広がることはあっても、狭まる恐れはない。ともに手を携えることもできる。両国の和平を望む碧柊の想いは、青蘭も同じ。そのために嫁いできたようなものだ。

敗戦の賠償として西葉から差し出された生贄である“青蘭姫”に対し、彼は勝者として見下すような態度は一切見せなかった。むしろ伴侶して同等にみなしてくれている。

明柊には明言してしまつたが、信頼できる人物だと思っているし、実際に手を結ぶに相応しいのは彼しかない。

それでも告げることができない。

何故なのか、理由は分からない。自分がなにかを恐れているということだけは分かっている。では、なにを恐れているのか。見当もつかない。結局のところ分からない、の一言に尽きてしまう。

小さく息をつく。それを碧柊は見逃さない。

「痛むか？」

碧柊の手綱を握る腕が、偶然だが青蘭の右上腕に触れていた。またがっているため、背後の彼に表情を見られる心配はない。

青蘭は慌てた様子で頭を振ってみせた。

「違います　ちょっとほつとしたものですから」

「ほつと、できるか？」

まだ気の抜ける状況ではない。訝しげな響きは無理もない。

青蘭の返答は苦し紛れのものだったわけではない。

「ずっと森のなかにいると、常に視界が閉ざされていましたから。少しでもひらけてくるとほつとします」

「なるほど」

「殿下はそうはお思いになられませんか？」

水を向けると、しばしの沈黙があった。

あの接吻の件以来、二人は気まずい沈黙のなかで時間を過ごすことが多かった。それ故か、彼は言葉を探しているのか。

気楽なやり取りができていた感覚を、共に取り戻せずにいる。

それは青蘭にとっては何がゆいことだった。その歯がゆさがぎこちなさを生み、二人の溝をひろげていく。それはわかっていたとしても、容易くなんとかできるものではない

「視界がひらけたからと云うて、先行きまでがひらけるわけでもない故な」

自重するように皮肉を含んだ辛い言葉に、青蘭は思わず笑う。

「意外と悲観的でいらっしやるのですか？」

「気分には左右されるほど稚<sup>わか</sup>くはない」

彼とてまだ21歳に過ぎない。それがおかしくて、青蘭の声が明るく抗弁する。

「物事の見方が情動に影響されることもありませんよ」

笑みを含んだ響きに、碧柊も口元をゆるめる。

「そうだな 人は浮かれた時ほど愚かな行動をとりがちだ」

「それと激情に駆られたとき……」

別段、意図があつての言葉ではなかった。

何気なく紡いだすぐ後に、あつと口を嚙む。ほぼ同時に、背後から気まずげな気色が伝わってきた。

「……そうだな」

なんとも重たげにこぼれた言葉は、自嘲の響きをもつ。

決して当てこすつたわけではないのだが、それを言い訳するのも不自然に思えて、結局青蘭は黙りこむ。

片方の沈黙は、結局共有されてしまう。

いつそう気まずくなつた空気だけを引きずって、馬は森の縁を黙々と南下していった。

## 第4章 宿場 2

ようやく牧まきから農地に風景が変わる。

稔りの秋はまだ遠い。かわりに野菜の花や熟した夏野菜の鮮やかな彩りが目を引く。

牧とは違い、農地は森のすぐそばまで迫っているので、二人はさらに用心しなければならなかった。

陽が中空にかかると、森の外から吹きつける風も緩く温いものとなる。

額にうつすらと汗がにじむ。

泉や小川を見つけるたびに水浴し、できるだけ衣も洗うようにしてきたが、着替えがない上、先を急ぐため思うようにかまえていない。

もう10日以上石鹸を用いていない髪や肌が臭っているのではないかと、青蘭はひそかに気にしている。ましてやこうして二人で馬にまたがっていると、背後から体を支えてくれる彼のことさらさらに気にかかる。身長差がある分、頭上にちょうど彼の顔がきてしまうのだ。

気にすればするほど痒いような気さえしてくるが、だからといってごそごそと掻くのも憚られる。口を引き結んでひたすら堪えていた。

どうしても汗ばむため、衣の臭いも気にかかる。特に襟元や袖ぐりなどがべたつくような気がして、休憩時などに碧柊の目を盗み、嗅いで確認しているところをしつかり見られていたこともある。

目があつてしまい、真っ赤になって口ごもっていると、彼も自分の胸衣をひっぱり嗅いでみせた。

「なに、気にする必要はない。できるだけ水浴びもしているのだから、これくらいならましな方だ。男ばかりになるとまったく気にか

けぬ奴もおるし、もともと体臭のきつい奴もおるからな。それと比すれば、そなたなど歯牙にもかからぬ」

「それはどうもありがとうございます」

嬉しい比較ではない。裏返せば、それと比べればましという程度には臭っているということになる。

それでも彼なりの思い遣りに基づく発言には違いない。

いい加減、彼という人間を理解した青蘭は、諦めて小さく息をつくしかなかった。

そんな経緯があつたので、余計に気になるのは仕方ない。

頬を一筋の汗が伝う。それを手の甲で拭い、密かに息を押し出すと、急に彼が馬を止めた。

「？」

振り返ろうとしたが、それより先に碧柊が馬から降りた。

さしだされる腕におとなしく身を委ねれば、抱き下ろしてくれる。その腕にすがりつくようにして足元を確かめながら、顔を上げる。

彼はしっかりと青蘭の体を支えながら、周囲へ視線をめぐらせていた。

つられるように青蘭もそちらのほうを見やる。

「集落がある。今なら出払って家の方は留守だろう」

「どういう……」

「この先、この衣装なりではまずかろう。とはいえ、着替えはない」

彼の言わんとするところを察し、青蘭は押し黙る。

近衛の衣装は一目でそうと知れる。確かにこれでは森から出ようがない。

「さきほど、少し戻った所に窪地があつたらう。あそこまで馬をひいて戻っておれ。じきに戻る」

ほんと青蘭の頭に手をのせて、苦笑まじりにいいきかせる。

青蘭はなにか云おうと口を開きかけ、結局おとなしく手綱を引き受ける。

「馬は離れた所につないでおれ。もし、なにかあつても決して森か

ら出るでないぞ　もしもの時は、ともかく逃れよ。一人でも山の背を越えて西葉へ逃れよ」

そう云って、西の空を見上げる。

青蘭は小さく息を吸い、思い切ってその手を払いのけた。

「そんなわけにはまいりません」

「何故だ？」

「殿下には生き延びる義務があります。私にもあります。それをこうしてここまで私を守り連れてきて下ったのは殿下です。私には殿下をお助けする義理があります。それに、私一人であの峠を越えることは難しいでしょう。私は世間のことをなにも知りません。殿下のお力添えがなければ、私は義務を果たせません。私がいなければ、殿下が岑家しんとつながをつけることは難しいでしょう　私たちはお互いが必要としているのです」

身丈のある王太子をまつすぐに見上げて断言してみせると、彼は驚いたようにわずかに目を瞠もったのち、くつと笑った。

生真面目な表情で頑固そうに口の端を引き結ぶ少女の白い手をとると、身をかがめてその甲にそつと唇を落とした。

「約そう、必ずそなたを西葉へ連れていく……そなたにも果たしていただかねばな　吾を勝者に」

「必ず」

目を上げれば、見下ろす少女は嫣然と微笑み、その瞳に勁つよい光を宿している。眼差しが絡めば、口の端をゆつくりともちあげる。それは見なれた彼女の微笑みではなかった。

碧柊はそれに笑みを返さず、背を伸ばして手を放し、また彼女の頭を軽く叩く

彼女はびくりと肩を震わせた後、呆けたような表情でゆつくりと碧柊を見上げた。

「……殿下？」

「ともかくそなたは吾が戻るまでおとなしく隠れておれ。そなたがすべきことはそれだけだ」

「はい」

幼子に噛んで含めるように云いきかされ、青蘭はちらと不満げないろを浮かべたが、結局素直に頷いた。

「いい子だ」

ぐしゃりと髪をかき乱され、青蘭は「やめてください」と迷惑そうにその手を払いのけた。碧柊はそれに笑い、青蘭はそれを懐かしいような想いでみつめていた。

碧柊が戻ったのは、それから間もなくのことだった。その手には粗末な衣類があった。

「見合うものは置いてきた」

後味の悪さの誤魔化すように呟き、それを彼女に押しつける。

受けとると、その木綿の衣は粗末ながらも清潔なものだった。常の上質な綾絹を身につけてきた青蘭にとって、それははじめて手にする珍しいものだった。

碧柊はしげしげとそれを見つめる青蘭に、馬をどこに繋いだか問い、さつさとそちらに向かう。轡をとって戻ると、青蘭は見なれないすつきりとした農婦の衣をひろげて眺めていた。

「東葉の民は西葉の民ほど豊かではない。それとて貴重な衣類には違いない」

「そうですね 殿下もお着替えに？」

「それは後だ。われわれは立派な盗人だ。まずは逃げる」

身軽に馬にまたがると、身を乗り出して断りもなく青蘭の腰に腕をまわした。

軽々と抱きあげられ、青蘭も慣れた様子で鞍に跨った。

「盗人になる前から手配されて追われておりますのね」

青蘭の溜息まじりの言葉に、碧柊は苦笑しつつ手綱を入れた。

夕暮が迫るまで常足と速足を繰り返して距離を稼ぎ、ようやく馬が



ら下りた時には集落からは十分に遠ざかっていた。

「明るいうちに着替えておけ」

碧柊は男ものを青蘭から受け取ると、その場で背を向けてさっさと着替えはじめた。

青蘭はその無神経さに小さく息をつく。それを聞きつけたように、彼はいたってまじめに促してきた。

「そなたもさっさと着替えよ。覗き見の趣味はない故、安心せよ」

「覗き見していただくかいてもありませんから、安心させていただけます」

厭味まじりに呟くと、生真面目な口ぶりで返してくる。

「そんなことはないぞ。なかなか白くて良い肌を」

そこでようやく己の失言に気づいてか、その動きが止まった。

青蘭は無言でつかつかと近寄ると、渾身の力をこめてびしゃりと素肌の背中を張り飛ばす。

その反動で右腕に痛みが走り、思わず顔をしかめて小さく呻く。それみたことかと云いたげに彼は振り返った。こちらも痛そうに肩間にしわを寄せている。

「無闇に暴力をふるうからだ。そもそも、そなた、奥の宮の育ちにしては少々粗暴に過ぎぬか？ それとも西葉の女官は皆そうなのか？ いくら東葉の女性ウチゴトメより武芸に長けているとはいえ、東葉の男より気性が荒いということはあるまい……」

殺気をこめて眇めた目と目が合うと、碧柊は口を嚙み、また背を向けて着替えを続けた。

「東葉の男性が皆、殿下のように無神経でいらっしやるわけではないうですわね。少なくとも綾羅殿りょうらと苓公れいこう殿下はそんなことはおっしゃいませんでしたもの」

碧柊の失言に何度もむっとしたり、態度を硬化させたりしてきた青蘭だが、ここまではつきりと苦情を述べたことはない。

碧柊は心なしか背を丸めながら一言返した。

「以後、気をつけよう」

## 第4章 宿場 3

ずっと身につけてきた肌着の上から上着と裳（巻きスカート）を着用する。木綿の上下は涼しく、簡素な意匠は身動きしやすい。

近衛の衣装は小さくたたんで茂みの奥に隠す。その形跡を消すように茂みをならしていると、少し前にも同じようなことをしたこと思い出される。着替えるたびに動きやすくなっていくのはいいが、その分状況は悪くなっていく。

青蘭は複雑な気分で見つめ、小太刀を手にとる。さすがに農婦の衣装にそれはそぐわない。かといって、手放すわけにもいかない。

大判の毛織の肩かけの端を胸元で結び、着替えは完了した。小太刀は裳の腰の部分にはさみ、肩かけの影に隠れるように工夫する。

彼のもとへ戻ると、すっかり日は暮れてしまっていた。

薄灯りでは互いの輪郭でしか見分けはつかない。

「なんとか格好はついたか？」

「おそらくは」

表情の見分けもつかず、声の調子だけが頼りになる。

小太刀をどうしようか相談しようと口を開きかけると、彼は青蘭の肩に手をかけた。

「殿下？」

「あちらに灯りが見えよう？」

碧柘は肩にのせた手で、青蘭の体の向きを変えさせる。

木立の間をのぞきこむと、遠くに明かりがちらつくの見える。

一つや二つではなく、夕闇のなかに淡い光ようになって固まっている。

「小規模だが、町だろう。夜なら人目も引きにくい。行って様子を見てくる」

「なれど」

「危険は伴おうが仕方あるまい」

なにも分らないという現状以上の危険はない。それは青蘭も分かっている。

それでも思いとどまらせた衝動を堪え切れない。

いつそ付いていきたいが、それが足手まといとなり、最悪の事態を呼び寄せることにもなりかねない。連れて行ってくださいという言葉を押し殺すのが、せいっぱいだった。

「なんだ、案じてくれておるのか？」

からかうような笑みを偲ばせる声で、碧柊は青蘭の頭をくしゃりと撫でる。

葛藤をあっさり指摘した上に、さらになんでもないことのように笑い飛ばされ、青蘭は頬にかつと熱を感じた。暗がり所幸しい、それを見咎められることはない。いつものようにその手を払いのけ、そっぽを向いた。

「案じてなどおりません、信賴しておりますから」

「それはそれでありがたい、としておくか」

「？」

苦笑まじりの彼の声が腑に落ちず、青蘭は彼を見上げる。その表情は夕闇に阻まれ読めない。

彼はそつと彼女の手を取ると、身をかがめて口づける。青蘭は全身を強張らせた後、慌てて手を引いた。碧柊もあっさりその手を放す。

「殿下？」

「礼だ、信賴のな」

茶化すように囁くと、つないであった手綱をとき、馬の轡をとった。

「では行ってまいる。そなたはここに潜んでおれ。迎えに来るまで動くでないぞ」

「はい、お気をつけて」

青蘭はつとめて明るい声で見送った。

胸の前で組んだ手が、指先が白くなるほどきつく握りしめ震えているのを見られずに済んだことを、ありがたく思いながら。

青蘭は木の幹にもたれて森の外を眺めていた。

身につけている衣服は暗い色遣いで、暗がりで見立つ心配はない。そこからは街道と町の方向を見晴らすことができた。なにかあれば一目でわかる。森に逃げ込むにも、こうして眺めている方が安全だった。

片手は膝を抱え、もう一方の手は小太刀の鞘を撫でる。そうしていると少しは安心できた。

星の瞬きと、地平の明かり。夜空にも浮かび上がる山の背の山容は遠くに知れる。

ずっと塔や森のなかにいたため、こうしてひらけた光景を目にするのは久しぶりだった。

小さく息をつき、ひよつとするとはじめてもかもしれないと思いたおす。

奥の宮は閉ざされている。そこで生まれ育った青蘭は、嫁ぐために国を出るまで外を見たことがなかった。雪蘭が来てからは様々なことを学んだが、それは即ち知っているとということにはならない。

無事に婚儀が終わっていれば、今度は東葉の後宮の主として再び外を見ることはなかったかもしれない。

それを考えれば、望んだ状況ではないが、これはこれで貴重な機会なのかもしれないとまるで他人事のようにおもえる。

女ばかりの奥の宮育ちにもかかわらず皆では男性ばかりに囲まれ、馬に乗り、幾日も入浴することもなく、男装し、この手で人を殺め覚えのあったことは飢餓感だけだった。

幼いころ、雪蘭が来るまではろくに食事を与えられないこともあ

った。それはほんの気まぐれのようにはじまり、数日水も与えられないこともあった。酷く痩せこけたり衰弱したりするまでに至らなかったのは、それが唐突にはじまり唐突に終わったせいだった。

頻繁に起こることもあれば、一年ほど起こらないこともあった。

宮の主を医師の注意を引くほどに、痩せ細らせるわけにはいかなかったのだろう。

飢えと渇きに耐えかねて、草の葉に宿った露を飲み、庭木に実った果実で凌いだいこともある。

そんな王女の姿を遠巻きにして、くすくすと笑い合う女官たちの笑い声は、今もまざまざと思い出せる。

柘榴を手にし、その指先を赤く染めた時などは、まるで己の身を食らっているようで浅ましいと嘲り笑われた。

実際、石榴は悪鬼の食らうものだとされていた。

口の中が苦くなる。不愉快さに眉をひそめつつ、指先を見つめる。暗闇にその肌が見えるはずもないが、そこに幼いころ、石榴に染まった指先の記憶が重なった。

同時に、もう一方の指先が小太刀の柄を探りあてる。

そういえば、この小太刀を男の首に突き立てたのだった。

大きく見開かれた目と、ぱくぱくと魚のように開閉を繰り返した口を思い出す。

小太刀を引き抜いた際、鮮血を浴びたような気もする。

その後も、何人にこれを突き立て切りつけたのか。

記憶はすつぽりと抜け落ちていた。

日が暮れても暑さは残っている。頬を伝う汗を無意識に手の甲で拭い、その温さにびくりとする。

確かにこの頬に返り血を浴びたのだ。まるで噴水のように噴出した鮮血は、雨のように降り注いだ。

頸部には太い血管が通っているから、急所になる。

力の弱い女の身で確実に狙うなら、急所。胸は肋骨に阻まれる。狙うなら、頸部か腹部。腹部にも太い血管が通っている。太ももで

もいい。内側を狙えば、失血死も狙える。

青蘭はただの嗜みとして、武芸をおさめたわけではない。もつと実際のな武術を教え込まれている。それは自分の身を守るため。叩きこまれたといつてもいい。だからこそ、これまで実戦経験がなかったにもかかわらず、急所を見定めて確実に手を下すことができたのだ。

思わず小太刀を手放す。

人を殺めたという事実が、腑に落ちてこない。まるで他人事のようだった。

だが、その手には確実に人の肉を断つた感触が、頬には浴びた血潮の温もりが、残っている。

青蘭はぐいと頬を拭い、手を地になすりつけ、その感触を拭い去ろうとした。けれど、いくら繰り返してもそれはなくならない。

血がにじみ、痛みが走るほど繰り返しても、それは消えることはない。

それはもはや心に刻まれてしまっているのだと、拭っても拭いきれるものではないことを悟りつつ、それでも衝動を堪えることはできない。

口のなかにも鉄錆の味が広がる。

気分が悪くなる前に、悪寒が走る。

それはなにに由来するのか。

病的なまでにそれを繰り返していると、いつの間にかすぐそばに人の気配があった。

びくりとして逃げ出そうとすると、その手首をつかまれる。

声にならない悲鳴をあげ、振りほどこうとしてもかなわない。

「吾だ、なにがあった」

ただならぬ彼女の様子を察してか、碧柊は青蘭の傷にも構わず両腕をつかんで問質す。

「……血が……」

力ない呟きに、碧柊ははっとして手を放す。

「傷が開いたか？」

青蘭は大きく首を振る。

「血の感触が消えなくて……それに、私……」

青蘭は俯き、だらりと全身の力を抜く。そして喘ぐように呟いた。  
「私、人を殺したのですからね」

奥の宮でも何人の女官が亡くなったか。あえて数えないようしていたが、本当は知っていた。

人の死の上に、己の生はある。今更知ったことではあるまいに。そんな想いに笑いだしたくなる。笑う以外に他になにができるというのか。

碧柊はその言葉にはっとする。

目の前の少女は、はじめて人を殺めたのだった。戦場では殺すか殺されるか。それを覚悟しろとは言うのは容易い。だが、奥の宮で俗世を知らずに育った無垢な娘にそれができるのか。

そつと腕をまわし、抱き寄せる。びくりと体を震わせたが、抗いはしなかった。青蘭は広い胸に抱き寄せられると、どうしていいかわからず身を強張らせるしかない。

「そなたのせいではない」

きつく抱きしめて、碧柊は囁く。

「そんなわけがあるはずありませんか」

青蘭はその胸にすがりつきながら、小さく頭をふった。

泣きたいのか、唾りたいのか。混乱した感情に嵐のように翻弄される。それに溺れまいとしがみつくと、彼はしっかりと抱きとめてくれた。

## 第4章 宿場 4

ひくりとしゃくりあげると、宥めるように髪を撫でていた手が肩に置かれる。

「落ち着いたか？」

碧柊の腕のなかで、青蘭は小さく頷いた。

厳しい表情で少女を抱き寄せていた彼は、ようやく腕の力を緩める。

渾身の力ですがりつくようにしがみつき、面を伏せていた彼女も、すすりあげながら小さく息をついた。

「……申し訳ありません」

「そうではなからう」

「？」

顔をあげ、かすかに首を傾げる仕草。それに碧柊はかすかに笑う。「胸を貸してやったのだ」

「……ありがとうございます？」

小首をかしげながらの頼りなげな呟きに、もう一度その小さな頭をそつと抱き寄せる。

「それでよい 少しはすつきりしたか？」

青蘭は広い胸に額を預けながら、泣き疲れてぼんやりした頭でもう一度頷いた。背と髪と額に感じる温もりの優しさに、気が遠くなりそうだった。

「吾らの生は他者の死の上にある だからこそ、生き延びねばならぬ」

王太子の装いで、剣戟の向こうに消えた綾霧<sup>りょうりん</sup>。

香をたき、その場で崩れた女官。

毒見役の顔ぶれがどれほど変わったか。

運び込まれた花の棘や、仕立てられたばかりの衣装に仕込まれた針に倒れたもの、自死として片づけられたものの不審を拭いきれな



かったもの。

向けられた刃から身を呈して守ってくれたもの。

商人の持ちこんだ商品から選んだ簪かんざしにすら、毒が仕込まれていたこともあった。

青蘭はきつく眼を閉じる。眼裏まなこに甦る、いくつのも死に顔。

そして、皆での近衛たちの奮闘。あの中からいつたい何人が逃れられたらう。

積み重なった屍の上に立っているのは、ともに同じ。

青蘭はなんとか踏みとどまり、きつく彼の衣を握りしめ、小さく肯く。

「はい」

涙声で、それでもはつきりと頷けば、碧柊がそつと頬に指先を滑らせて顎を捕える。

頬を伝う涙はまだやまない。

それは悼みの涙ではなく、覚悟の涙だった。

彼の唇がそれをすくい取る。

「見事に生き延びてみせますわ」

頬に感じる温もりに肩をすくませながらも、青蘭はしっかりと誓う。

「その意気だ」

碧柊は小さく笑いながら耳朶のそばで囁き、震える唇を指先でなぞるとそつとその額に口づけた。

額に唇を寄せられても、青蘭はじつとしていた。頭の芯がぼんやりしていて、なにをされているのかはつきりと理解できない。

碧柊はそつと唇をはなすと、そのついでに青蘭の胸に腕をまわし立ち上がるついでに彼女も立たせる。

「さあ、行くぞ。宿を手配してきた故、早く戻らねばな。腹も減ったろっ」

そつ言い残して、碧柊は馬をつれに行く。

青蘭はかがんで小太刀を拾い上げ、再び裳の腰に押し込む。

同時に空腹感を覚える。そういえば、今朝から一滴の水すら口にしていない。急に喉が渴くのと同時に、腹がその存在を訴える。

夜の静寂まじしにあまりに分かりやすい音が響き、青蘭は顔を赤くして腹を押さえる。そうしたところでその所業はおさまらない。ままならない自分の体に困り果てていると、馬の轡むまのむちとって王太子が戻ってきた。

「その調子なら大丈夫だな」

「聞こえてましたか？」

馬は少し離れた所につながれていたはずだ。

「腹は減れば鳴るものだ、当然だろう。恥ずかしがることではない」  
鐙やんに足をかけて身軽にまたがり、そのついでのように軽々と青蘭を抱きあげる。

青蘭はそういう問題ではないということを、彼に説くべきかどうか迷った末、諦めた。それに費やす気力は残っていなかった。

鞍くらに横座りにした少女が素直に体を預けてくると、碧柎あきは支えるように胸に腕をまわす。彼女の腰元の小太刀に気づくと、無言で受け取って剣帯にさした。

そうして町へ向かいながら、内心ではひどくほっとしていた。

他意はなかったとはいえ、どさくさまぎれに口づけてしまった。

抱き寄せたままでは仕方ないとしても、それ以上の行動はそうとは云い切れない。

そのようなつもりはなかったのに、気がつけばあのさまだ。慌てて、だが出来るだけ自然に取り繕ったおかげか、彼女は今のところ彼の行動を気にとめていないらしい。それにほっとしながらも、自重じじゆうの必要性を切実に感じていた。

森の外れから街道に出ると、ほぼ正面に町の明かりが見えた。

とはいえ、東葉へ嫁ぐ途中に目にしたいくつもの大きな都市とは

比べものにならないほど、その灯りはわずかなものだった。

道すがら、碧柊は町で仕入れてきた情報を青蘭に説明した。

宿が数軒と、居酒屋が1軒あるだけの小さな町だという。

王領と苓州れいしゅうの境に近く、西葉への峠道へも通じている。

居酒屋で仕入れた情報とは、青蘭が見越したように国王殺害と西葉と通じた罪で碧柊の手配が回っているということだった。

「共に少年を一人連れている可能性もあるという話だった。女連れだとは出回っていないらしい。明柊はなにを考えておるのか」

明柊は斬白霖さんぱくりんと名乗った小姓が女性だということはもちろん、彼女が青蘭姫に仕える女官にして従妹でもあることを知っている。

それを明らかにしないのは何故なのか。

明柊は雪蘭のことをどこまで把握しているのか、それは分からない。

花嫁に随行する人間のことは、事前に東葉側に通知されていた。

だが、碧柊はそのなかに姫の従姉が混じっていることを知らなかった。

碧柊は知らなかったが、明柊は知っていた。

雪蘭が王族に連なることはその名を見れば一目瞭然だ。

少し調べれば、雪蘭の養家が王兄紅桂こうけいの乳母の一族であることも判明するだろう。王位よりも女をとった彼が、愛娘を奴婢の階級に落としておくわけがないことも想像は容易い。だからといって、雪蘭自身にはなんの力もない。王族ではなく、養家の後継者でもない。ただの貴族の娘に過ぎない。

ましてや現王と王位を争った紅桂の遺児であり、母は奴婢に過ぎない。ただの日陰の存在にすぎない。その彼女が握るものを、蒼杞そうきすら知らない。

明柊は彼自身が云っていたように、素顔をさらすことのない青蘭姫への好奇心だけで雪蘭に興味を抱いたのだろうか。

それとも何処からか、この従姉妹たちが実の姉妹のように仲睦まじいことを知り、何かの役に立つと考えたのかもしれない。雪蘭と

親しくなれば、行く行くは西葉王妃となる青蘭に近づくことも容易くなる。

彼ならば有り得そうなことだ。反面、碧柊ではそういうことは考え難い。

切れ者という評判を裏付ける雰囲気をもとってはいるが、その実、嫡出という生まれのためか詰め甘い印象を青蘭は抱いていた。

「色々とお考えなのでしょう」

それ以外に言いようがなかった。彼がなにも考えていないはずはない。明言できるのはそれだけだ。

「その供が少年を装った少女かもしれないと付け加えれば、それだけで片はつこうにな　あれは弄るくせにとことん追い詰めることはしない。どこかに逃げ口を用意しておくのだ」

淡々と語る口ぶりに、滲むいろがある。それが明るいものなのか暗いものなのか、青蘭には判断できなかった。

「だから、最後までお疑いになれなかったのですか？」

「……そうやもしれぬ」

皆での二人のやりとりから察すれば、幼い頃から少なからず交流があったことはわかる。明柊の口ぶりではいたって子供らしい無邪気な時期もあったようだが、いつまでもそういつわけにはいかなかったのだろう。

二人の間には玉座があり、それぞれに抱える桎梏やしがらみがある。

西葉とて似たような事情だが、分かりやすく妹の命を狙った兄の態度は、ある意味ではありがたかったのかもしれない。青蘭の兄への想いに揺らく余地はない。

気鬱な沈黙のまましばらく馬を進めると、町の入口の前で火が焚かれているのが目に入った。

「この先、顔を上げるな。宿につくまで声も潜めておれ」

「なにが……」

乱暴に後頭部を押さえこまれる。

抗おうとすると、厳しく静かな声がそれを封じた。

「兵が見張っておる。注意を引くようなまねはするな」

びくりと肩を震わせ、青蘭はそっと前方を見る。少しずつ近づいてくる町は低い石壁に周囲をぐるりと囲まれているようだった。その入り口である門は開かれ、その前で篝火が焚かれ、その灯りを受けて曝されている影は吊るされた人間のようだった。

「!?!」

青蘭はとつさにそれがなにか分からず、碧柎を見上げた。王太子の表情はほとんど見えないが、そこに答えはあった。

「捕えられた近衛の者だ。縛り首にされ、曝されておる。見せしめだ」

近衛には入れるのは最低でも下級貴族からと身分は固定されている。貴族にとつて、一番屈辱的な処刑方法が絞首刑だった。

武人を基本とする彼等に処刑はない。死を言いつけられた場合は、己の愛用する太刀で自死する決まりだ。それは男に限られたことではなく、女であっても作法は同じ。

絞首刑はよほどの大罪を犯さなければ行われず、事実上その例は数えるほどしかない。

青蘭は口を押さえて顔をそむけた。

「誰なのですか？」

「そなたは知らぬだろう」

淡々とした口ぶりで応じながら、碧柎は青蘭の腰に腕をまわして抱き寄せる。凭れかからせて、眠っているふりをすると耳打ちした。青蘭は唇を噛みしめつつ小さく肯き、ぎゅっと彼の胴衣の裾を握った。

碧柎は強い力でその体を抱き寄せ、震える青蘭の手を包むように手を重ねた。

宿の厩に馬をつなぐと、碧柎はそのまま青蘭を伴って居酒屋の扉を開けた。

宿と居酒屋の兼業は認められていない。そのおかげで喧騒に悩まされることなく休めるのだが、不便といえば不便だった。

宿から居酒屋まではすぐだった。その道すがら、彼は彼女にいち驚かずに静かにしているように言いさせた。

小首を傾げると、彼は慣れない手触りの顎をさすりながら苦笑する。

「奥の宮とは正反対のところ故な」

「正反対、ですか」

「男ばかりで喧しいところだ」

そういった彼の言葉通り、その店内は外へ漏れていた騒音から覚悟した以上のものだった。

煙草と酒と人いきれでむっとしている。

顔を隠すように目深にかぶったシヨールの影から、青蘭は興味津々に店内を見やる。碧柎は角に目立たない席を見つけると、青蘭の手をとってそちらへ導いた。

促されるままに腰かける。あちこちで騒ぎ立てる男たちを適当にあしらいながら近寄ってきた女性に、碧柎はなにやら話しかけている。喧騒でその内容までは聞こえない。

卓をはさんで反対側に腰を落ち着けた碧柎が、肘をついて顔を寄せてくる。膝に手をのせて物珍しげに店内を見渡していた青蘭に手招きする。そうしないと互いに声が届かないことに気付き、彼女もならつ。

「食べられぬものはあるか？」

「え　いいえ……ここで食事を？」

不思議そうに少し離れたところに座る男の3人連れを見やる。

彼等の手元にあるのはなにやら飲み物が入っているらしい瓶と人数分の木の杯だった。

不思議なのは赤い顔をしたものが多いことだった。窓が開き、心地よい夕べの風が吹きこんでくるため、汗ばむほどではない。

「他の者たちも食べておろう」

「そうですが、食べているというよりは……」

「酒が目当ての者の方が多いだろうな」

「酒、ですか」

「呑んだことがないか？」

なにやら愉快そうな視線を受け、青蘭は首をかしげる。

「いえ、少しなら。儀式の際には奥の宮でも供されますから」

「それはおそらくたしなむ程度というものなのだろうな」

「どういふ程度なのか、青蘭には見当がつかない。」

祭事に即しての酒は盃一杯。神への捧げものは恩恵の一環としてわけ与えられる。それ以外に口にする機会はなかった。

じきに食事が運ばれてきた。湯気とともに食欲をそそる香りがたつ。それと引き換えに給仕の女に彼はなにか手渡していた。

その視線に気づいた碧柎は、彼女の当初からの戸惑いの理由をようやく悟ったように苦笑した。

「これは銭だ<sup>かね</sup>」

「そういつて、銅貨を手渡す。」

受け取ったそれを、青蘭はしげしげと眺める。丸くて薄い、そして小さい。指先で弾くと金属質の音が響く。

「使い方は後で説明する。先に食せ<sup>くみせ</sup>。冷める」

「」

指先に銅貨を握ったまま、青蘭はもの言いたげに王太子を見た。

彼は焼きあがったばかりのなにかの肉の塊をじかに手に取ったところだった。目が合うと、すかさず鋭く眇められる。内心の動揺を見咎められ、青蘭は感傷的な逡巡を恥じ、目の前の皿に手をのばした。

吊るされた死体も、彼が手にしている肉も結局は同じこと。踏み

しめるか、噛みしめるか。

野菜とともに柔らかく煮込まれた肉汁が口内に広がる。

「うまいか？」

「はい」

強がりではなく、空腹に広がるその味は極上だった。こぼれそうになるものを誤魔化すように嚥下し、ふつと息をつく。塩漬けした干し肉を水や湯で戻すだけの食事が続いた末のこの食卓は、これまで口にしたどんな贅沢な料理よりも御馳走だった。

「いつでも食べられるわけではない。摂れる時に摂っておくことだ」  
「はい」

ただ泣きたいのか、泣きたくなるほど美味しいのか。それも判断がつかぬまま、青蘭は食事を続けた。

そこへ杯が一つ運ばれてきた。満たされているのは濃紺にも見える深い色合い。ぷんと甘い香りに混じって独特の香気がまじり、酒だと知れる。ただし、青蘭には未知のものだった。

「景気づけに一杯だけな」

碧柊はそう云って笑った。言い訳がましい言葉の響きを感じ取りつつも、嗜好品としての酒を知らない青蘭にはそれが何に由来するのか分からない。

ただ興味深そうに眼を見開いて瞬きする様子を見て、碧柊は悪戯心を刺激されたらしい。

「呑んでみるか？」

「いいのですか？」

「ああ」

ことごと小さな音を立てて素焼きの杯が置かれる。器としては素朴で粗野であり、注がれたものも王城で振舞われるものとは比べものにならない。そんなことは青蘭には与り知らぬこと。好奇心も手伝って、恐る恐る、けれどかなり乗り気で口に運ぶ。

酒独特の匂いより、果実のような甘い香りが先立つ。口当たりは優しく、飲みやすい。くいと一息に飲み干してしまった。



「おい」

「……はい？」

きよとんと顔を上げる。その手元にある杯は空になっている。碧柎はしまったと舌打ちしたが、あとの祭りだった。

眉間に皺を寄せつつも、こみあげる笑いも誤魔化しきれず。

「旨かったか？」

「はい」

急速に紅潮しつつある頬に満面の笑みを浮かべて嬉しげにうなずく。

それを前に窺める無駄を悟って、碧柎は酒の追加を注文した。

かさばるお荷物を背負って宿に戻る道すがら、碧柎はさんざん後悔していた。

「弱いなら一気飲みなどするな」

果実酒を一息で飲みほしてほどなく。耳まで赤くなったなと思うとほぼ同時に、卓を枕に撃沈したのだ。

酔った勢いで要らぬことを口走られるよりはましと、黙々と残された料理を平らげた碧柎だが、泥酔の連れを背負って帰るのも彼の役目だった。

荷物というにも背負ってしまえば軽い。

幸い宿も近く、酔いつぶれた相方をおぶって戻った客のために、宿の主は部屋の前まで付き添い、わざわざ扉を開けてくれた。

酔った勢い云々の付け足しに立腹しつつ、感謝する。

一応、若い夫婦連れを装って宿は取ってある。別室にした場合、なにかあった際に対応しきれない恐れがあるためだが、少年の供をつれた王太子の手配が回っていることへの対処でもある。

おぶってきた体を寝台に横たえる。

ごろりと横になった青蘭は、それにも気付かず心地良さそうに寝

息を立てている。

乱れたスカート裾を直す代わりに掛け布団で覆い、頭の下に枕を入れてやる。

小さな頭を支えた手を引こうとすると、思いがけず彼女がその手に手をからめてきた。

「……おい」

酔っぱらい相手に戸惑いつつ、碧柊はそれをほごうとする。

酔った少女はその手の甲に頬を擦り寄せてきた。

「……蘭、いっしょ……あつたかい……」

誰に囁いているのか。頬を染めつつ、呷く表情はあどけないものだった。

「それは酒のせいだ」

溜息とともにそつと手を引いて、そつと額にかかる髪を指先ですくい取る。

姉妹同然に育ったという青蘭姫と雪蘭。夢見心地で囁くそれは思いつくのか。一つに寝台で供寝とせぬしたこともあったのだろう。まるで双子のような面差しの少女が頭を寄せ合って、安らかに眠っている様は想像するだけで微笑ましくもある。

それにすら後ろめたいような想いを抱き、碧柊は外套をまとったまま冷たい床に横になった。

<つづく>

柔らかな日差しを差し込む窓辺で、一人の少女が頭を抱えていた。寝台から抜け出し、窓辺に置かれた粗末だが丈夫そうな木製の椅子に腰かけ、小卓に突っ伏している。吹き抜ける風が寝乱れた髪を揺らしていく。

厩のある宿の裏庭に面した窓は、表の通りの賑わいとは比べれば静かなものだ。

そこへ青年が入ってくる。手には木製の杯と器。底の浅い器からは湯気が立ち上っている。

寝台は人の這い出したままに乱れている。そこを一晩占拠していた人間は、自分の行いを懺悔するように顔を伏せていた。

やれやれと苦笑しつつ、窓辺まで寄ると外を見まわす。それから彼女の肩を揺すった。

ぐずぐずと面をあげた少女の顔は蒼く、いかにも具合が悪そうだった。

うつうつとしていたのか、傍にいたのが誰かを理解するまでにしばらくかかる。その間、彼はじっと待っていた。

「殿下」

「……まずは水だ」

清水の満ちた杯を手渡され、青蘭はゆっくりと口に運ぶ。よほど喉が渴いていたので、一息で飲み干そうとするのを途中で邪魔された。

「何故にそなたはそうがつつくのだ、まったく、奥の宮の育ちはとつてい思えぬな」

「」

不機嫌そうに睨みかえされ、碧柘はその眉間の皺を指先でつついてやる。

「一気に飲めば、吐くことになる」

指摘通りだったのか、青蘭は口元を押さえて俯く。堪えているのは頭痛と吐き気、そしてなんとも言いようのない倦怠感。

「二日酔いだ、愚か者め」

「」

「なんだ？」

聞こえなかったため、身をかがめて耳を近付ければ、細い手が伸びてきた。

「教えて下されば良かったのに」

恨みがましそうに眇めた目で見据え、やや乱暴な仕草で彼の襟元を鷲掴みにする。

一瞬息が詰まりかける。どうしてこう粗暴な振舞いが可能なのか。奥の宮ではよほど上手に猫を被っていたのだろう。それとも東葉より古い血筋と歴史を持つ西の葉（よつ）の国は、祖神（おやがみ）たる女神の有り様により近いということなのか。

碧柊は気弱なくせに強気な娘を興味深く見つめる。

「一気に飲み干すとは思わぬだろう」

まっとうな言葉に、彼女も痛いところをつかれたのか。恥じるよ  
うないろを見せつつ、その手を放した。

「昨日は朝から一滴も口にしていなかったのです」

皆から逃れてからこちら、彼女は一言も空腹や喉の渇きを口にすることはなかった。腕の傷の痛みすら、じつと堪えていた。

碧柊は「そうだったな」と呟くと、取り上げた杯を返してやる。

「ともかく少しずつ飲め。それから朝餉だ。塩味だけの粥ゆえ、これなら喉も越そう」

「……ありがとうございます」

力なく礼を述べると、青蘭はのろのろとそれを受け取り、小さく息をついた。

「誰もが一度は通る道だ。昼頃には治まるだろう」

「殿下も身に覚えが？」

「ああ、ある。何度もな。幾度も二度と過ぎるほど飲むまいと思うが、こればかりは無理だな」

自嘲もこめて薄く苦笑する。無精髭に覆われた顎をさすりながらの言葉に、違和感はない。青蘭は一口清水を含むと、力なく微笑する。

「それほどに酒とは良いものですか？」

「ああ、良いものだ。むしろ愉快地な気分になれよう。そなたも昨夜は楽しそうだったぞ」

「そうでしたか？」

飲んだ直後から次第に体があつくなり、それと同時に眠くなったことしか覚えていなかった。首をかしげる青蘭の手のなかの杯は空になっている。そこに水を注いでやりながら、碧柘は笑う。

「ああ、従妹殿の名を呼んで笑っておった」

その言葉に、さつと彼女の顔が強張る。

「……名を？」

「ああ」

彼女がとたんに表情を曇らせた理由など、彼には想像もつかないだろう。

酔った後の記憶はない。夢見心地にみていたのは、遠い日の初雪の朝のこと。はじめて他人と眠った温もりの夜の記憶。今朝、二日酔いとやらの酒の逆襲に会うまでのほんの束の間、夢現に噛みしめたのはその優しさだった。

雪蘭と呼んだに違いない。その名は呪いにも似て、彼女にとって一番大切な名であり、言葉であり、支えでもあったから。

雪蘭を名乗る娘がその名を慕わしげに呼ぶことを、彼は不審に思わなかったのだろうか。

夢を見て呟いた彼女のことを、ただ彼は微笑ましげに語った。

王女と女官が入れ替わることなど、普通は考え及ばないだろう。だからこそ、有効な手立てとして用いてきたのだから。

何故、彼が不審に思わなかったのか。それは分からない。不審を

抱いていないと分かったただけでも良しとするしかない。踏み込めば、要らぬ疑惑を呼ぶ。

そこまで考えて、どうしてまだそれを伏せていようとするのか自分でも分からなくなる。

表情を険しくて俯いた姿をまた二日酔いの波が寄せてきたのだからと解釈して、彼は立ち上がった。

「吾は出かけてくる。昼までには戻る。なにかあればこの窓のすぐ下に小屋の屋根がある。そこへ飛び降り、厩の馬を使え。金も半分置いてゆく」

小さな革袋を青蘭の膝に乗せる。

使い方を習っていない青蘭はその重みをただ感じるしかない。

「宿のすぐ近くにおる故、じきに吾も駆けつける。有事の際は出来るだけ騒動を大きくせよ。逃げる際は昨日入ってきた門とは逆に逃げよ。できれば山の背を目指せ」

「はい」

小さく頷くと、不安の色を隠せない華奢な肩を力づけるように軽く叩いて、彼は出て行った。

ちよつと市の立つ日であったのか、通りには即席の店が続々と支度を整えつつあった。

町の周辺には取り巻くように農家が散在している。牧畜と農業を兼ねる家が多い。地味に乏しい土地柄故豊かな稔りは期待できないが、ささやかな街道の宿場町を通過する旅人達の腹を満たすには十分だった。彼らが現金収入を手に行ける貴重な機会でもある。

引いてきた荷車を横着にそのまま店のかわりにするものもあれば、布を広げて商品を並べる者もいる。

戦火はここまで及んでいない。

それはもつぱらもつと北の王都翠華<sup>すいか</sup>の周辺に集中しているらしい。

苓州<sup>れいしゅう</sup>まで迫った西葉軍を苓公・明柊<sup>めいしゅう</sup>が撃破し、王都を奪還せんとさらに進軍しているらしい。

一時は不穏な空気も漂ったのかもしれないが、戦火が遠ざかったと聞けば、あとは暮らしが続くのみ。

北方の戦火を逃れて南方の都市や領土に向かう人々で、むしろ宿場町は通常よりにぎわっているらしい。

西に西葉に通じる峠道をのぞみつつも、難所で名高いそこを越えて援軍がやってくる可能性は極めて低い。碧柊もそこが難所だとは知っている。実際に目にしたことはないが、切り立った断崖に沿うように細い山道が刻まれ、東西を行き来する隊商のなかには滑落事故で命を落とすものも少なくないらしい。無理に軍を通したとしても、その何割かを崖の下に失う計算を最初からおこななければならぬほどだ。だからこそ安穩とした空気も漂っているのだろう。

町を歩く彼の姿は若い流れ者にしか見えない。翼波<sup>よくは</sup>との負け戦のおり、一人はぐれて辛酸をなめた経験を無駄にはしなかった。身をやつして城下に下りることは日常の一部でもあった。

彼が探しているのは、西葉に向かう隊商だった。

青蘭と二人だけで峠道へ向かえば、警備の目を引きやすい。彼一人で逃れたとしても、夫婦連れを装うために女を雇うこととて十分に考え得る。それよりは隊商に紛れてしまった方が安全だった。すでに隊商路として何度も往復し見張りの兵に顔が利くものであれば、云うことはない。

王領内での食料は自給では賄い切れていない。どうしても西葉からの食糧の輸入に頼らざるを得ない。西葉は西葉で様々な鉱石や薬草、東葉特産の高級毛織物など欲しいものはいくらでもある。

問題は、このご時世に発つものがあるかということだが。

昼には戻ると言ったが、それまでに目途をつけるのは難しいかもしれない。

そう考えつつ、まずは情報を集めようと居酒屋に向かおうとした碧柊の肩を叩くものがあった。

「王太子殿下、どちらへ向かわれます」

「へへへへへ」



彼が宿に戻ると、彼女が待ちかまえていた。扉が開くなり、がたんと大きく音をたてて椅子から立ち上がった。今朝の具合の悪そうな気色は治まったようだが、不安のためかすっかり青ざめていた。

「口を何度も開閉させるが、結局声にならなかつたらしい。きつくスカートを握りしめた拳が細かく震えていた。

「遅うなつて悪かつた」  
あつさりと言ひつつかつと歩み寄り、まだ緊張を残した面で見上げてくる白い額を曲げた指の節で軽くつついた。

「案じたか？」  
からかうように笑んでみせると、彼女は口の端を引き結び、それから艶やかに笑い返す。

「いいえ　ただ、少々待ちくたびれただけにございます」  
「よし、その調子だ」

満足げに口の端を歪め、王太子は少女の髪を軽く撫でる。彼女はせっかく整えた髪を乱され、眉をひそめるとその手から逃れるように身を引いた。

それを追うような真似はせず、彼は手にしていたものを空いた椅子に置く。

「これは？」

「西葉に向かう隊商に雇われることになった。そなたにはまた小姓に戻ってもらう。名前は覚えておるな？ 蘆白さんぱくだ。唾だと伝えてある。ただし耳は聞こえる。そのように振舞えるか？」

「はい　それで遅くなられたのですか？」

「そういうことだ」

青蘭は椅子に積まれたものを手にする。すべて男ものだった。

「詳しいお話はあとでお聞かせいただけるといいでしょうか？」

「ああ。だが、先に身支度をせよ。湯も頼んである。ついでに湯浴みもすませるがよい」

その声を待っていたように、扉が叩かれた。

湯浴みと着替えを済ませると、廊下に出ていた彼が戻ってきた。濡れた髪を梳き流し、風に任せる。夏の陽射しが暮れなずむ頃、風はまだ熱をはらみ薄っすらと汗ばませる。思い切りよく短くした髪も、じきに乾きそうだった。

布で丹念に髪の水気を拭う青蘭に対し、碧柊は整えられた寝台に腰かけたものの、すっと目をそらす。

それに気づかぬまま、青蘭は言葉を待つように王太子を見つめる。彼は町で仕入れてきた情報を取捨選択しながら青蘭に伝えた。

あの苓南れいなんの砦での裏切りの日。明柊めいしゅうはあのまま苓州軍を率いて南下していた西葉軍と戦火を交え、見事にそれを討ち払ったという。さらなる追撃を受けた西葉軍は、軍を率いていた西葉王太子蒼杞そうきとともにすでに国境の向こう側へ引き揚げたらしいという話だった。すべて伝聞に過ぎない。それでも、まったくの出鱈目ではないはずだ。

いつしか青蘭はその手を止め、厳しい顔で口を引き結んでいた。彼女がなによりも誰よりも気にかけていること。それを彼も知っている。彼は小さく息を吐き、ただ平淡に告げた。

「苓公は王城に置き去りにされた青蘭姫と結婚し、東葉王位を継ぐぞうだ」

「苓公殿下が、青蘭と……」

膝の上に置かれた手が拳を作る。

ひどく思いつめた様子で、少女は唇を噛みしめる。無理からぬことと思う一方、状況にも関らずいつこうに治らぬ悪癖が癪に障る。

「今、ここでそなたがそのような表情かおをしたとてどうにもなるまい」  
心ない言葉が口をついて出る。

少女は大きく眼を睜つたが、じきに鋭い眼差しで非難するように見据えてくる。碧柊の言葉は酷いが、一面、どうにもできない現状を示すものでもあった。

ただ、それが彼女の心情を思いやっての言葉ならば、そんな顔をさせることはなかっただろう。確かに思い煩つたところでどうにもならないのだ。それを汲み取つての台詞なら、同じ言葉でも彼女は頷いたかもしれない。

その口ぶりには八つ当たりにも似た苛立ちが込められていた。唇をかむしかない少女へ向けられた苛立ちが。それは決して彼女を侮蔑するものではない。だが、思いやりとは真逆の負の感情には違いなかった。

彼女はただ静かに怒りを漂わせて彼を睨みつける。それ以外に感情の発露がないように。同時に、白い歯が桜色のやわらかな唇を食い破らんばかりに食い込む。きつく食いしぼるように引く結んだ唇から、白い歯がかすかにのぞく。

「殿下こそ、もうどうにもなりませんわね。あの苓公殿下のことです。じきに式を挙げてしまわれるでしょう。こうなってもなおあなたに青蘭姫と葉の王位を掴むことができませんようか」

まっすぐに見据えつつ、容赦のない言葉を吐く。

碧柊の面が強張る。

「……吾には無理だと申すか？」

「あなたの甘さが招いた現状です。両国の争いを終わらせる。ただそのためだけに、せつ……青蘭姫は葉王家直系の王女の矜持を曲げて嫁いでこられたのです。私の大切なところを……姉を　こんな茶番の犠牲にするためではありませんでした。このように頼りにならぬお方なら、いつそ明柊殿にお預けした方が安堵できるというものの」

「　そなたは吾を信じると申したではないか」

碧柊はぐいと彼女の顎をとらえ、もう一方の手で抗うとする手を卓の上に縫いとめて、のしかかるように組み敷いていた。

吐息が絡むほどに間近に互いを感じつつ、阻む壁はこれまでになく厚い。

ほとんど憎悪に近い光を浮かべ、互いに睨みあう。

のしかかる重さから逃れようと足掻く体をさらに乱暴な仕草でかき抱く。

彼女はその重苦しさから逃れるように身をよじり、唇をかみしめる。艶やかな頬に朱色の筋が伝う。それを見咎めるように碧柊は食いしばる齒列の間に指先をねじ込んだ。

口内に鉄錆の味が広がると、驚いたように大きく眼が見開かれる。その隙を見計らうように、彼は乱暴に再び唇を奪っていた。

<つづく>

日が暮れてから、彼は2人の客人を迎えた。一人は無精髭を生やした青年。もう一人は夏にもかかわらず外套ですっぽりと全身を覆い、頭巾を目深にかぶった少年だった。

小さな宿場町でも一番上等な旅籠。その中でも最上の部屋は、もっぱらその広さと清潔さに値がおかれているらしく、調度はたいしたものではない。それでも、碧柎が押さえたどちらかは床で眠らなければならぬ部屋よりははるかにまだ。

簡素だが座り心地の良い椅子に、2人は黙って腰をおろした。少年の方は唾だという話だった。従者らしく主が先に腰かけるのを待ち、小さく促されてようやくその隣にかけた。

「そちらが従者の少年ですか？」

穏やかな物腰と善良そうな面にかすかな笑みを浮かべて問えば、青年は小さく頷く。

昼間は警戒を解かないながらも温和な雰囲気を漂わせていたが、今は心なしかとげとげしくもある。それは宿の訪ねてきたときから漂っていたため、今の状況が理由ではないのだろう。

頭一つ半は背の低い連れの少年への気遣いのぞかせながら、最低限しか声をかけない。その声も気のせいかわわばって聞こえた。

さて、ここへ来るまでになにかあったかと伺い見る。

頭巾の奥から観察するような眼差しを感じ、彼は穏やかに笑んでみせた。それに返ってくるものはなかった。

「失礼ですが、昨日共に宿へ入られたのは女性のようでしたが」  
居酒屋の片隅で彼らを見つけたとき、すでに連れの“少年”は泥酔していた。顔こそ見ていないが、その体つきは女性だとしてもまったく違和感はないようだった。だからこそ、慎重に注視させたのだ。手配されている王太子は、少年を連れてくるかもしれないということだった。女性連れだとは聞いていない。

「女装させていたのだ。吾は小姓の少年連れだという話だったのだな」

「それは賢明なことです。しかし、では何故またそれをお止めになったので？」

この2人が連れ同士だということが分からなければ良いのだから、それはどうでもいいことでもあったのだが、何故か引っかけりを感じて彼は問う。

青年は片眉をあげ、肩をすくめた。

「これでも剣の腕は役に立とう。女に剣を振り回させるわけにもいくまい」

「確かにそうですね」

嘘をつくのが下手なわけではないが、しれっと誤魔化せる性分でもないのだろう。青年に関してはいささか融通のきかない堅物だという評判もある。それがこういふことかと思いつながら、それよりも気になるのは連れの少年の方だった。

「ところで彼の身元は？」

把握しておく必要はあった。なにが鍵となるかは知れない。

「吾の乳兄弟である斬綾綵の縁者だ……綾綵は吾をかばって生死も知れぬ。せめてこれだけは生き延びさせてやりたい」

青年の乳母子ちちごが斬家の長子であることは彼も知っていた。その役割が王太子の影武者でもあることも。そうであれば、彼が少年を気にかけるのも無理からぬことである。

ようやく納得し、彼は「分かりました」と微笑む。

「では御兄弟ということでは如何ですか？ええと、彼の名は？」

「白綵だ」

「そのままの名ではまずいかもありません。念のために殿下は碌綵殿、弟御は晴綵殿でいかがですか？」

「良かるう」

分かったなと問いかけるような仕草を受け、少年も小さく頷く。

「では、そういふことでよろしく願います、碌綵殿」

「ああ」

「それではお部屋へご案内いたしましょう。今後は失礼ながらございな言葉づかいをお許し頂けましょうか？」

「ああ、構わぬ」

先に立ちあがった彼に従い、青年も席を立つ。

少年もその後続くのを確かめて、扉の前で彼は足を止めた。

「碌碌殿、その言葉づかいももっと砕けた調子でお願いいたします」  
「承知した　いや、そうだな」

青年ははじめて薄い笑みを浮かべた。

2人は階下の一室に案内された。2人部屋は先ほどの主の部屋とは比べものにならないが、狭いながらも居心地は良さそうだ。板張りの床がきしむことはなく、裏庭に面した窓には硝子もはめられている。開け放した窓からは、温い夜風と灯りにつられた羽虫などが入ってくる。

雇い主が去ると、当然ながら部屋に2人きりで残される。

彼女は頭巾を上げることせず、彼の後ろでじつと立ち尽くしている。

居たたまれず、彼は手近の寝台に腰をおろした。

「便宜上だ。仕方あるまい　もう手出しはせぬ。信用せよと云うても無理かも知れぬが」

言葉を紡げば唇がひきつれる。痛みを感じて無意識に指がふれる。それは彼の無体な振舞いに、彼女が抗った証だった。これを商人がどう見たか、それを思うと苦笑いするしかない。

二つの寝台の間には小卓があり、その上に置かれた燭台にはすでに火が灯されていた。

微かな風に焰が揺れると、壁に落ちる二人の影も歪む。

苓南の皆の王太子の居室はこれよりも狭かったが、そこに二人でいることにさほど思うことはなかった。

彼女は返事もせず、身じろぎもしない。扉の前にまるで彫像のようになっている。

頭巾を外してその面を確かめたい衝動を堪え、碧柎は手にしていた外套をひとまとめにして小卓にのせる。剣帯も外して枕元に太刀ごと置くと、ごろりと横になり、彼女に背を向けた。

「俺は先に寝る」

食事はこの宿へ移る前に居酒屋ですませていた。とはいっても、その直前のいざこざで二人とも食事どころではなかったが。彼女に食事をとるように強くいつた手前もあり、無理矢理腹を満たした。

風が吹いたのか。火影がゆるりと揺れる。

吹く風はぬるいが、寝苦しいほどではない。野宿が続いた身にとって、寝台での眠りは有り難いはずだった。

だが、いっこうに眠りは訪れない。

しばらくなんの気配もなかった。まだ立ち尽くしているのかと肩越しに確認しようか迷ったところに、ようやく床を踏む靴音が響く。外套を脱ぐらしい衣擦れの音がやけに響く。遠慮がちな物音がしばらく続いたあと、寝台がわずかに軋んで灯りが消された。

穏やかな寝息はいつまでたっても聞こえてくることはなかった。

<つづく>



翌朝、目を覚ましてみれば隣の寝台はすでに空になっていた。彼が自分で整えたのか。使った形跡はない。一晩中まんじりともできなかった。それはお互いさまだったかもしれないが、少なくとも彼が出ていったのは深更ではないはずだ。

夏の夜明けははやい。東の空がかすかに白む頃に、ようやく眠りに落ちることができた。窓から訪れる風はまだ涼しい。陽も高くはない。それほど長く眠ったわけではないらしい。

起き上がる。こみあげる生あくびを噛み殺そうとして、唇に違和感を感じる。そういえば、昨日また自分で食い破ってしまったことを思い出す。それとほぼ同時に起こったことも。

森で文字通り口封じにされた時とは異なっていた。乱暴にのしかかられ、抱きしめられ、組み敷かれた。圧倒的な力でねじ伏せられたが、不思議と恐怖感はなかった。ひたすら怒りの衝動に支配されていたせいだろう。

そのあとの口付けは噛みつかれたようなものだ。よほど前の方が優しかった。両方とも衝動のもとが欲望でないことは何となく察している。それでも力づくで一方的に唇を奪われて嬉しいはずはない。

その前に無理矢理ねじ込まれた彼の指先。その皮膚を食い破ってしまっただろう。口内にひろがった血の味がまだ残っているような気がする。その不快感に反射的に口を開きかけたところに唇を重ねられ、さらに貪るように侵入しようとしてきたもの。

知らず、指先が唇をなぞっていた。そこにまだ熱が残っているような気がして、頬があつくなる。

咄嗟に思い切り噛みついてやれば、彼は小さく呻いて身を引いた。口元から滴る血を見ても溜飲を下げることはできなかった。その血

を拭う手の指先からも紅いものが滴っていた。

それから一言も会話を交わしていない。

彼が下す必要最低限の指示に従い、ただ黙ってその後に続いた。紹介された商人が、何故彼の正体を知ってなお手を貸そうとするのか。それを聞く気にもなれなかった。

原因はどれだろう。

己の無力さを指摘されたことか。しかし、それは反面まっとうな指摘でもあった。彼があのような口調でなければ、自分もあんなことを云いはしなかった。

自分の身代りに王城に残った雪蘭。雪蘭である“青蘭姫”を明柊が王妃に迎えるということは、少なくとも彼女が無事であるということの証にもなる。

けれど、本来そのような役割が彼女に回るはずはなかった。たとえ彼女が名に“蘭”を持つていても、いくら青蘭と相似であったとしても、彼女は王族ではない。

それでも雪蘭はその結婚を受け入れるだろう。むしろ、都合だと判断するに違いない。こんな風に離ればなれになってしまうことは計算違いだったとしても、結果的には良かったと。

青蘭は明柊がどこまで事態に関わっているのか知らない。碧柊に害をなそうとし、その役割を襲おうとしている。首謀者には違いない。その企みがどれほどの大きなものなのか、知るすべはないが。

唯一つ確かなのは、それは青蘭と雪蘭が望んだ形ではないということだけ。

そして、明柊は“雪蘭”が王太子とともに逃げ延びたことを知っている。そのことを“青蘭姫”に告げるだろうか。

青蘭が無事だと知れば、雪蘭はなにか策を練るに違いない。今の状況では多くを知ることができるのはどう考えても雪蘭の方だろう。青蘭は雪蘭配下の覗見かきまみと連絡をつける術すら知らない。

もし、明柊が“雪蘭”のことを話せば、雪蘭は連絡をつけようとしてくれるだろう。青蘭が岑州しんへ向かおうとすることも察してくれ

るかもしれない。

ともかく岑州へつけばなんとかなるだろう。

しかし、それまで明柊が“青蘭姫”との婚儀を待ってくれるかどうか。

奥の宮で二人で彼の絵姿を目にした時。彼女は青蘭が嫌なら閨での入替りをも受け入れるような発言をしていた。あくまで冗談だったが、それがこんな形で現実になるうとは想いもよらなかった。

王族として生まれた以上、閨のことも務めの一部。そう割り切っている青蘭は、自分の閨房については感傷的なこだわりはない。しかし、大切な従姉には自分と同じような結婚はさせたくなかった。自分には叶わない、幸せに通じるような婚姻を望んでいた。

この婚儀を防ぐ手立ては一つしかない。

本当の青蘭姫が名乗りを上げることしかない。しかし、そうした場合、一番危険にさらされるのは雪蘭でもある。

少なくとも今は、青蘭姫が入れ替わっているということを嗅ぎつけられてはいけない。雪蘭の命の保証はない。

部屋の隅の小さな家具の上に水差しと空の盥が用意されていた。

水差しにはすでに水が満たされている。彼が準備してくれたのだろうか。

青蘭は空の寝台をじっと見つめる。

葉の行く末を任せるにふさわしいのは誰だろう。

したたかな明柊か。それとも碧柊か。兄の蒼杞は論外だ。

西葉国内ではどのような動きとなっているのだろうか。

分からないことばかりで頭が痛くなりそうだった。

選ぶのは青蘭の役割なのか。

相談できる相手は一人しかない。ふさわしい人だと分かっている。それでも、云い出すことはできなかった。

もし話せば、正当な王女たる青蘭を担いでの動きを選択するだろう。それは相手が誰であっても同じことだ。それが間違っているというのではない。

ただ、そうなれば、雪蘭の命が危なくなるかもしれない。明柊はためらいなく彼女を切り捨てるだろう。それとも、使い道を探っ  
てしばらくは生かしておくかもしれないが。

雪蘭のことを思うと、どうしても話せない。

約束したはずだった。

一番は私たちの故郷

「でも、雪蘭、やっぱり一番大切なのは……」

一人の命を守るために、沈黙を守るといつのか。

今とて、屍の上に立っている。その山はなんのために築かれたの  
か。

『吾らの生は他者の死の上にある　だからこそ、生き延びねばな  
らぬ』

彼の言葉が蘇る。同じことを当の雪蘭も云ってはいなかった。

分かっている。分かっている。やはり決心がつかない。

ぐずぐずと洗顔をすませ、身支度を整える。

彼が書き置き一つ残さずいないということは、長く空けるつもり  
はないということだろう。

窓掛けを引いて胴衣を脱ぐ。下着姿になり、濡らした布で寝汗も  
拭う。

ぐるぐると思いは同じところを回っている。

今、ここで彼に真実を知らせたところで何ができるだろう。

自分も無力だが、それは彼とて同じ。

昨日、あんなことを云うつもりはなかった。

売り言葉に買い言葉というが、そんなものがあることをこれまで  
知らずにいた。雪蘭と争ったことはない。奥の宮では争いは無粋な  
ものとされ、もっと婉曲に陰湿に行われた。

それなのに、青蘭といえは彼と出会ってからは怒ってばかりいる。  
それを彼は気にとめることなく受け流してくれていたが、昨日はそ  
うもいかなかったのだろう。

同じところで立ち尽くしているのに、こんなところで互いに傷つ

けあってどうなるというのか。

青蘭の方から歩み寄らなければならぬ。あんなことがあった以上、彼からそうするのは難しいだろう。

胸元を拭いつつ、ふと手をとめる。

西葉に逃れて、それからどうするか。碧柊の手を取るのなら、結局彼を夫とすることになるのか。

両腕の抜糸はまだ済んでいない。痛みはほとんどない。傷跡は残りそうだった。

白くて良い肌だと褒めてくれたが

そこまで思い出して、いきなり恥ずかしくなる。

耳にまで熱を感じつつ、それを誤魔化すように慌てて残りを拭いていると、いきなり扉が開かれた。開けたのは碧柊だった。

薄暗い部屋に、青蘭の白い肌がぼんやりと浮かび上がっている。

お互いに凍りついたように見つめ合う。

一瞬遅れて、青蘭が胸元を両手で蔽い隠す。それにはっと我にかえった彼がまた扉を閉める。

閉じられた扉に向けて、空になった水差しが投げつけられた。

<続く>

割れた水差しの始末をしてくれたのは、宿の主の妻だった。

扉の前に散らばった破片は、部屋から出ようとして落としたといえは通じるが、その肝心の扉に明らかな傷がついている。どちらかが投げつけたということだ。

夏だというのに室内でも頭巾を目深にかぶってじっと寝台にかけている小柄な人物と、無表情を装いながらも気まずさを隠しきれずに窓枠にかけている青年。

兄弟だと聞いているが。

さて、どちらが犯人か。

彼女は無駄な言葉を発さず、てきぱきと処理を済ませる。

「余計な手間をかけたな」

出ていこうとする背に声をかけたのは青年の方だった。

それに客向けの寛大な笑顔で応じて、扉を閉める。

こなごなになったものを投げつけられたのが誰なのか。分かったような気がする。となれば、投げつけた人間はもう一人の人物しかない。

兄弟げんかにしては奇妙な空気に、本当の間柄は違うのかもしいわねと心中で呟きつつ、宿場町の旅籠のおかみの心得としてそれ以上の詮索をやめたのだった。

おかみが出て行ったあと、残されたのは沈黙だけだった。

あそこで彼女がまるで女のような悲鳴をあげていれば、すべては水泡に帰していた。黙って物に当たってくれたのは幸いだ、果たして本当にそれで良かったのか。

おかみが出ていく時に残した一瞥には、意味ありげなものが含まれていた。

「……明け方まで起きていたろう。故に、まだ眠っているだろうと思つて声をかけなかったのだ」

それは本当だった。起きていたとしても、まさかあの状況は想定していなかった。

青蘭にもそれは理解できる。だが、せつかなんとか気持ちを宥められつつあつた矢先だけに、むしろ火に油だった。

彼に悪気がないことも分かっている。あの後に続いた狼狽ぶりは演技ではないだろう。彼になにか悪い点があるとすれば、それは間の悪さに違いない。

「ともかく悪かった　さきほどからさんざん詫びているのだ、返事くらいしても良からう」

「……唾ですから」

かすれたような声で囁く。皮肉と厭味がたつぷりこめられている。その屁理屈に、碧柊は困惑する。

昨日に続く今朝の出来事で、彼女が怒るのも無理はない。しかし、臍を曲げた女の機嫌のとり方なぞ習ったことはない。お手上げだった。

「明日には発つ。その前に打ち合わせは必要だ。聞き分けてくれ」  
まるで頑是ない子供に言い聞かせるような言葉に、青蘭はぴくりと眉を動かした。が、言葉を探しあぐねている彼の姿に、結局妥協を選ぶしかなかった。

「彼は……」

渋々肝心なことを切り出そうとすると、「しっ」と先を遮られる。

「近くへ」

用心するにこしたことはない。

青蘭は小さく息をつく立ち上がり、窓際に置かれた椅子に移動した。

「あの者の正体は知らぬ」

「なっ……」

あまりに率直なその言葉に、青蘭は絶句した。それを口にした当

人はこれまでの様子はどこへやら、王太子然とした落ち着きを払っている。

「吾の顔と素性を知っておった。そしてこの事態の真相もな」

「誰が仕組んだかということも、ですか？」

「ああ。吾を見つけたら力を貸すようにある筋からいつかおるらしい。あれには他に本来の務めがあるようだ。そこまでは決して明かすまいが」

「いったい誰が……」

そう呟きつつも、脳裏に浮かぶ一つの顔があった。そして、彼が負っているらしい本来の務めも。

黙り込んだ青蘭の顔は頭巾の影になり、見えることはない。にもかかわらず、碧柊は「心当たりがあるのか？」とすかさず問いかけた。

「あ、いえ……もしかすると、姫の手のものかもしれません」

「青蘭姫の？」

「はい。私を探しているのではないでしょう。城内に私の死体が必要ならば、どうにか逃げ延びたものとお考えになったのかもしれませんが。もちろんこのような状況ですから、独自に情報収集なさっておられるのが一番でしょうけれど」

本当の狙いは青蘭姫の搜索だろう。けれどそれをまだ明かすわけにはいかなかった。

碧柊はだいぶ伸びてきた髭を撫でつけつつ、考え深げに視線を彷徨わせる。

「しかし、何故そのついでに吾に手を貸すのか」

利益が見いだせない。王太子の後ろ盾である斬家の領地まで逃してくれるのならまだ理解できる。しかし、その斬家の縁者を連れてわざわざ山の背を越えようとする東葉王太子の意図を、あの商人はどう読んだのか。

ただ単に、どのようなことであれ手を貸すように云いつけられているだけなのかもしれないが。



「それは私などには分かりかねます　それで、お聞きになった真相というのは？」

「ああ、これは大がかりな茶番らしいということだ。蒼杞殿そつきと明柊が手を結んでいた」

「やはり」

「ああ、やはりだ　吾もとんだ大間拔けた」

苦い笑みが浮かぶ。

青蘭はそつと頭巾の影からその横顔を盗み見た。その言葉は独白めいていて、どんな言葉も待つものではなかった。どのような言葉をかけたところで、慰めにもならない。今、彼が必要としているのは慰めではない。

「これで蒼杞殿は西葉王への足がかりを得、明柊もまた同じ。奴らの目的は共通しておったわけだ」

悔しげな口ぶりだった。

「　少しは期待なさっておられたのですか？」

「ああ　西葉との戦後処理を、あれは手ぬるいと評しておったからな。統一を見越して手を打つなら、もっと厳しく対処せねばならぬと。ただ、吾の目的は西葉の併呑ではなく、祖国の統一であったからな。長く尾を引くこととなりそうな遺恨は避けたかった……それもたいがい甘いものであったが」

珍しく暗い眼をする彼を、青蘭はただ見つめるしかない。

「苦言を呈しつつも最後には『愛しい君のために力は惜しみませんよ』と云ってくれたのだがな」

従兄弟の口真似をさも嫌そうにしながらも、浮かぶのは苦い笑い。国の行く末を話せる関係を二人は持っていたのだ。少なくともそこで碧柊が自分の心を偽る必要はないと思っていたのだろう。

青蘭はそこに自分と雪蘭の関係を重ねる。およそ似ても似つかぬ温度の違いはあるが、根底に流れるものには近いものがあるような気がした。だからこそ、彼は青蘭の従姉への想いを汲み取ってくれたのかもしれない。

「……西葉に行く目的は訊かれましたか？」

「いや。だが、蘄州を目指すなら西葉を経由した方が安全だろうと云っておったから、そう考えておるのではないか。王領もこの先はずいぶん警戒が厳しいらしい。蘄州は遠い故、西葉の港から船で行くならその手はずも整えましよう」と申し出てくれた」

青蘭の存在を伏せている以上、商人も岑<sup>しん</sup>家のことは考えなかったのだろう。

「事態は明らかになってきましたが、山を越えたら殿下はどう手を打つおつもりですか？」

「二人が手を結んでいることを暴露するしかないだろうな。蒼杞殿はずいぶんと大勢の東葉貴族を殺めて行ってくれたらしい。それと明柊が手を組んでいたと聞けば、方針を変えるものも出てこよう。それがどれほどの力となるか、まったく読めぬがな」

困ったものだと云いながらも、その口ぶりはさばさばしており、笑ってさえいる。

頭巾の影で青蘭は首をかしげたのに気づいたのか。

「不安がっておる暇はない。それよりも有効な手立てを考えねばな」

気楽にいい放って、傍らにある小さな頭を優しく撫でる。

その陰で青蘭は唇を噛みしめた。

その一番有効な手立てとなるのは、他ならぬ自分自身だった。

<つづく>

相変わらず軟禁状態は続いていたが、雪蘭は外部と遮断されているわけではない。

明柊が入城したその日のうちに、蒼杞は表向き敗退しおちていく西葉軍のあとを追って帰国した。

そういう事態の変化を、明柊は雪蘭に逐一知らせてきた。覗見の報告もそれを裏付けるものばかりで、彼に彼女を謀る気がないのか、それとも独自に情報収集をしていることを見抜かれているのか。その見極めは難しい。

明柊は贈物として花やら装飾品や絵や書物とあらゆるものが贈りつけてきた。本人も日に一度は顔を出し、賛辞を並べ立てては雪蘭を閉口させる。

それから数日後、明柊は彼女を外に誘った。

最初に連れてこられた時は夜だったせいもあり、城内の様子はさほど印象には残っていない。

明柊は自ら恭しく扉を支えて彼女が廊下へ出るのを見守った。守衛の二人も後方に控えている。

扉口までついてきた女官長に、彼は安心して任せるよう艶めいた笑顔で囁いた。彼女は少女のように頬を赤らめこそしなかったが、苦笑しつつ主に目配せを寄越した。

いい加減、彼いわく“日々求愛こそ人生”に慣れてきた雪蘭は肩をすくめる。

最初の対面で兄には恭順してみせつつ、彼には昂然と応じてみせた“青蘭姫”をお気に召したらしい。

ご機嫌うかがいに足繁く通うわりに、いくら従妹のことをほのめかしても薄く曖昧な笑みを浮かべるのみで答えてはくれない。

詳しいことは分からずとも、明柊が青蘭を知っていたというだけでも得難いものだった。

雪蘭は岑州<sup>れい</sup>周辺に覗見を放つよう指示を下した。もしそのあたりに青蘭がいるなら岑州<sup>しん</sup>を指すかもしれない。同時に碧柊の逃亡も耳にしていたため、その力となるよう付け加える。二人が共にいることまでも一応念頭にはおいたが、事情が分からないためそれ以上手の打ちようがなかった。

雪蘭にあてがわれた部屋は最上階の一番奥まったところにあつた。後宮そのものが高い塀に囲まれ、さらに四角い塔として聳えている。出入口は一ヶ所しかない。もう一つあるにはあるが、そこをくぐるのは先に人の世から去つたものに限られる。

中庭を囲む形で設けられた回廊は、雪蘭の居室と同じく凝つた飾り窓に視界をさえぎられていた。風だけが吹き抜ける。

明柊は時折傍らを歩く雪蘭へ眼差しを送りながら、素面のくせにまるで酔っぱらいのように浮かれた様子で、調子のいいことを並べ立てる。

雪蘭はそれを風の音と同等に聞き流し、適当に受け流す。まるで気のないその様子に聞いていないのではと訝しんだ明柊が突っ込むと、的確な返答で応じる。

手強い方ですねと可愛げのなさをそれとなく指摘されても、雪蘭は嫣然と微笑むだけだった。

思いがけず強い風が吹き抜け、結いあげた髪がやや崩れる。顔に落ちかかる髪を押さえようと足を止めた雪蘭に倣い、明柊も立ち止まる。乱れた艶やかな黒髪は濡れたような光沢を帯びる。それをそつと指先ですくい上げると、びくりとはじめて彼女は明らかかな反応をみせた。

「見事な髪だ。触れると真に極上の絹糸のようだ」

「これより上等な絹糸をご存知でしょう」

まるで双子の如き従姉妹たちだが、その髪質だけを取り沙汰せば青蘭の方が濡れたようにしっとりとしている。

「俺はこちらのほうが好みですよ」

雪蘭が引き合いに出したもう一つの“絹糸”を知っていることを

隠そうともしない。

真意をはかりかねて、雪蘭は一步退こうとする。しかし、明柊はその髪を放さず、逆に一房に口づける。雪蘭はそれを無感動な目で見つめる。

「やはりこれしきのことと動じたりなさいませぬね」

「そのような可愛げは持ち合わせておりません」

淡々と言いつれば、彼は愉快そうに瞳を揺らしてその手を放した。

「同じ蘭の花でもまるつきり逆でいらっしやるらしい」

「蘭は多彩な花ですから」

「そうですね　あなたは凜とした雪のような蘭を思わせる。もう

一つの花は可憐で小さな愛らしい青き蘭　まるであなた方は正反対だ」

囁く声は嘆じるようであり、まるでなにもかも見とおしたようにからかうような響きをも含んでいる。

雪蘭は小首をかしげてさも愛らしい仕草で微笑む。

「名が体を表すとは限りませんわ」

「それならそれで一興　楽しみ幅が広がるというもの」

明柊は艶やかに微笑すると、そつと雪蘭の手を取った。

「では翠華<sup>すいか</sup>の城をご案内いたしましょう」

後宮と外をつなぐ唯一の扉はすぐ目の前にあった。

雪蘭は彼の手を振りほどこうとはしなかったが、握り返すこともなかった。

新たな後宮の主の前に、衛兵が引きさがり膝をつく。

その扉に手をかけつつ、明柊は振り返った。

「西葉の後宮はどのような様子ですか？」

問いかけの真意を読めぬまま、雪蘭は言葉を額面どおりに受け取る。

「後宮に西も東もありませぬわ」

事務的に応じれば、彼は何故かわずかに苦笑した。

「目的は同じ故、そうかもしれないませぬね」

その口ぶりに、珍しく感情がにじむ。ただ、それがどのようなものか読み取れず、雪蘭はまっすぐに苓公を見上げる。

まるで星明かりのない夜の底のような眸に、明柊はそっと息をつく。

碧柊と明柊も父母共に兄弟姉妹という血の近さ故に似通った顔立ちをしていながら、持前の気性故にまとう空気はまったく異なる。ましてや双子かと思誤るような二人でも、その気質によつてはまったく異なる魅力を帯びる。彼の囁きに目を白黒させ、むしろ愛らしかったもう一輪の蘭に比べ、ここに咲く花は氷から研ぎだしたように冷やかに煌めいている。

「だが、俺は華を隠し部屋で密やかに愛でるつもりはありません。華は愛でられてこそその華。白い蘭は咲き誇るのがふさわしい」

うやうやしくその白い手をとると、甲に口づける。

雪蘭はその手を振りほどくことはせず、ただ冷淡に目を細めた。

<つづく>

扉をくぐると、昼下がりの光が溢れた。

真昼でも眩しさとは無縁な暮らしが続いていた雪蘭は、足をとめて目を細める。

「姫君？」

じきに気づいた明柊めいしゅうが振り返り、雪蘭の手をとった。

扉の向こうには跳ね橋がおろされていた。後宮のある塔の周囲には堀がめぐらされ、水が満たされている。

季節は移ろい、盛夏へと向かっている。

直射日光と堀の水面みなもに乱反射した光が目を刺し、視野に黒い影が焼けつく。

珍しく眼を眇めて辛そうな表情を浮かべた雪蘭に、明柊はその理由を察したのか顔を寄せて囁いた。

「その白い肌が夏の日差しに損なわれては一大事。俺に影のあるところまでご案内させていただきます」

歩くのに支障があるほどではなかったが、否やと返す前に手首を掴まれてしまう。

拒む間もなく手を引かれるままに跳ね橋を渡ると、回廊にたどろつく。北向きの回廊は夏の午後でも涼しく、いったん眩んだ目にも優しい明るさだった。

気がつけば明柊はもう手を放してくれていた。

雪蘭は乱れかかった髪を手で撫でつけて整え、自分を見守るように動かない明柊にかまわず堀の向こうに聳える後宮の塔を見上げた。花柱はなはしらの別名を持つその塔には、外側にも優美な装飾が施されている。女神の娘の住まいにふさわしい麗々しい鳥籠。いつの時代より女神から王権を授かったその娘を囲い込むようになったのか。女王を守る筈だった柵はいつしか檻に変じた。

「何故、わたくしを外へお連れになったのですか？」

苓公は、通常王族の女性が人前に出る時に必ず顔を隠すために用いる薄いヴェールを使わせなかった。

元々女官であるため、面をさらすことに抵抗はないが、王女としては有り得ないことだった。後宮で素顔をみせたのは、相手が兄と婚約者となつた明柊だけだったからだ。

「あなたのような美しい女性を一人で愛するのはもつたいないでしょう。けれど、あなたは俺の妻となる方だ。要するにせいぜいみせびらかして羨ましがらせたいのですよ、世の男どもをね」

愉快そうに笑ってみせるくせに、その目は決して笑っていない。

それが真の理由ではないと悟り、雪蘭は小さく息をついた。

「不服ですか？」

「お好きになさってください」

輿入れした西葉王女が従姉である女官とよく似ているという噂は、嫁ぐ前からずいぶん広まっていたらしい。入城式でやけに入替つた青蘭に視線が集中しているような気がしたのは、事実だった。人々は秘められた王女の面影を少しでも見出そうと興味津津だったらしい。それを知つたのは、迂闊なことに後になってからだった。

他人事のように云い捨てられ、「冷たい方だ」と嘆いてみせる明柊に、雪蘭はうんざりした口調で声をかける。

「それで、どちらへご案内してくださるのですか？」

「では、こちらへ」

明柊はそれまでの嘆きぶりなど瞬時に拭い去り、もつたいぶつた笑みを浮かべてみせた。恭しく右手をとる。雪蘭は一人で歩けますとそれを振り払おうとしたが、その前に彼がわずかに強く手首を握つた。

「重々しく遇されるのも務めのうちですよ。奥の宮でお育ちになつた深窓の姫君は、お一人で軽々しく闊歩なさるものではない」

顔を近づけたわけでもないのに、その囁きは嫌にはつきり届く。

雪蘭も軽拳を思い至り、やり込められたような悔しさを感じつつも、愛らしく微笑んでその白い繊手を委ねた。



その先は文字通り廃墟だった。

瓦礫はきれいに片づけられ、あとには装飾や壁、家具、絵画などありとあらゆるものはぎ取られた、いわば骨組だけが残されているような状態だ。

あちこちに黒く変色したなにかが流れたような形跡が残されていた。

怪訝そうに眼を止めれば、明柊はそれに素早く気づいて「血の跡ですよ」と囁いた。

場所によつては胸が悪くなるような悪臭の残された場所もあった。おそらくは腐臭だろう。表情を変えればまた彼がわざわざ解説してくれるのだろう。

それを想つて顔色一つ変えずにいれば、まるでそんな胸中を見透かしたように薄い笑みを向けてくる。それを気に留めずないふりをしていれば、それすら承知しているようにわざとらしく嘆じてみせるので、雪蘭は次第に苛々としはじめていた。

廊下と部屋という区別以外はつかない状態だった。

そんな巨大な廃墟のなかを行き交うものは少ない。城にかまつている余裕はないのだろう。

それでもすれ違う兵たちは、明柊に気づくと足をとめて恭しく一礼し、その場にまるで不釣り合いな美姫に目を瞞つて二人の後ろ姿を見送った。

あえて明柊は連れが誰であるかを説明しはしない。明らかに女官ではないでたちと、まるでかしくような明柊の態度に、誰であるか推すのは容易い。

それにかなり常識はずれなことではあるが、彼ならば婚約者を外に連れ出すことくらいやってのけそうだと思われているようだった。ひととき広いホールに通された雪蘭は思わず足を止めた。

文字通り見る影はないが、一段と高いところに設えられた椅子の

残骸は玉座のなれの果てだった。

「あそこで伯父上は命を落とされた」

「そうでしたわね」

目をそらすこともせず、ただ冷静な声音で応じる。

明柊はくつと口の端を持ち上げ、押し戴くように彼女の手を包み、その甲に唇をおとす。

雪蘭は振り払いたい衝動を辛うじて堪え、かわりに嫣然と微笑んでみせた。

「それとも、ここまで兄がしでかすとは、計算違いでしたか？」

「耳の痛いお話をなさる。確かに多少のことは想定しておりましたが、まさかここまでなさるとは。並みの方ではないようだ」

「いまさらなにを驚いたふりをなさって」

皮肉な言葉とは裏腹に、浮かべた笑みはやわらかい。

明柊もそれを見惚れるように見守りつつ、目に浮かぶ光は冷ややかなものだった。

「いや、それは本当ですよ。諸侯を皆殺しにし、城下ですら似たような惨状です。挙句に城内はこれですから。裏で密かにはいえ、手を組んだ相手に少しは遠慮していただきたかったものだ」

「ここまですれば、あなた方が手を組んでいたとは誰も思いませんまい」

「どうでしょうね。実際、従弟殿は逃げおおせたまままだ。彼は俺の裏切りを知っている。そしてあなたもね、姫君」

「従弟殿　碧柊殿下」

「そう、本来、あなたの夫となる筈だった本物の王太子殿下です。しかし今や立派な売国奴。追われる身だ」

「楽しそうですね」

皮肉をこめて囁くと、彼はいかにも楽しそうに微笑んでみせる。

「ええ、楽しいですよ。どこまで逃げおおせ、どんな反撃に出てくれるか。このまま捕えられたり、どこかで行き倒れになるようならとんだ見込み違いだったということになるが」

その場合はつまらないですね、と付け加える。

「……まるで遊戯のように楽しんでおられるの？」

「ええ、遊戯ですよ。人生とはいかに楽しく暇をつぶすかということに尽きる。あれがどれだけ楽しませてくれるか、期待しているんですよ。それに、これでも一応約束は守っておりますし」

「約束？」

酷薄な笑みに気圧されたが、それに続く言葉を紡ぐ声はやわらかかった。

つられるように問えば、明柊は目を細めて「ええ、約束です」と囁き返す。それは誰と交わしたもののなのか。何故が続けて問うことはできなかつた。

「ところで姫君」

明柊は跪き、なにかを乞うように雪蘭を見上げる。

雪蘭は何故かその口元に浮かんだ笑みに拒むことができないまま、まっすぐに見つめ返す。

「あなたには女王となっていたたく　俺の共犯になっただき  
ますよ」

思いがけない言葉に、雪蘭は言葉を失った。

<続く>

隊商の出発はその二日後だった。

その間、碧柎は苛だちを商人にぶつけはしなかったが、表面上は穏やかにいても内心じりじりと焦っているのは確かだった。

それを察した青蘭は、あてがわれた部屋に戻ると代弁するように口に出した。

「随分とのんびりしていますね」

「品が揃わぬらしい」

「それにしても、両国の関係は日増しに緊張を増しておりますのに、二人ともに明柎と蒼杞が組んでいたと確信しているわけではないけれど、知る範囲で振り返ってみれば十分に考えられることだった。その二人が結託を隠し通すには表向きの敵対関係を続ける必要がある。」

そのせいか、西葉へ通じる峠道へ通じるこの宿場町でも、日増しに行き過ぎる兵の数が増えつつあった。

「それはそれ、これはこれなのだろう。戦時にもっとも潤うのは商人だ。如何なる時とてふさわしい振舞い方を心得ておるのだろう」

実感のこもる言葉に、青蘭は口をつぐむ。戦はなにかと物入りだ。物資の購入をめぐっては苦い想いを何度となく味わわされてきたのだろう。

暑さはに日増しに厳しくなり、日が暮れても温い風が吹き抜けるようになった。西葉と比べればまだ過ごしやすいが、二人きりとなれば気づまりな想いは拭い去りがたく、さらに寝苦しい夜が続いていた。

朝になれば隣りの寝台は空で、昼過ぎにならなければ戻らない。その行き先を問うような真似を、青蘭はしなかった。

そして出発当日の朝、一行ははじめて顔を合わせた。

護衛は青蘭と碧柎を含め四人。隊商の主たる商人とその配下、しどけない雰囲気を漂わせた女が三人に目的は知らぬが西葉へ向かう男が三人、総勢十五人だった。

わざわざ自己紹介はしなかったが、護衛にあたる四人は商人により紹介された。

護衛役の後の二人も二人組のようだった。目つきは悪いが身だしなみにはうるさそうな男と、不潔ではないがまるで構わないこれといった特徴のない男。二人ともに年のころのは同じくらい。碧柎とさほど変わらないようだった。

碧柎が紹介されると、しどけなく荷車に腰かけた女たちがひそひそと囁きを交わす。爪先から頭の前まで値踏みするように絡みつく視線に、当人はまったく気づいていない。まったく頓着せずに護衛仲間となる男たちとなにやら楽しげに話しこんでいる姿に、青蘭は何故か苛立ちを覚える。

青蘭は女たちのまとう空気から、その職業をなんとはなしに悟るかといって、彼女たちを蔑む気持ちはない。いかに男の気を引くかということに腐心するという点では、後宮とて同じようなようものだ。それを生計たじきとする彼女らは、一人の男の寵愛を争う女たちほど浅ましくはない。

それでも、女たちの関心を買いつつ、その自覚に欠ける彼の様子は気に障った。

賂まいないが功を奏したのか、宿場町を発つときは特に咎められることはなかった。

朝に発つたが、昼を過ぎてもいつこうに山の背は近づいてこない。峠を越えるには早くて五日はかかるという話だった。

昼食を兼ねて休憩をとることになり、頭巾の影で無理やり喉に押し込むように食事をすませた青蘭は、人目を避けて小川のほとりま

で足を伸ばした。

一応碧椋に声はかけたが、護衛仲間と意気投合したらしい彼はぞんざいな返答を寄こすばかりだった。

面白くない気分を引きずりつつも目的地まで足を運び、鬱陶しい頭巾をようやく下ろす。

生ぬるい風であつても、頬に感じる空気の流れは心地よかつた。

汗をいくら拭いても、まとわりつくような不快感までは除き難い。膝をつき、掌にすくい取る水は山脈に源を発するためか冷たく心地よい。

それで汗と汚れを洗い流し、ようやく一息つける。元々毎日の沐浴を欠かさなかつた青蘭にとって、心底ほつとできるのは食事より体の汚れを拭い去ることことのほうが大きい。

冷たさと心地よさにほつと人心地を取り戻したそこへ、唐突に手拭いが差し出された。

まったくその気配を察することはできなかった。

啞然とする青蘭に、微笑みかけたのはあの3人の女のうちの一人だった。

「思ったとおり、綺麗な顔してるね。あんたの兄さんには他の奴らが目をつけたからさ、あたしはあんたに目をつけてたんだよ」

やけに艶めかしく微笑み、細い指を青蘭の顎にかけると啞然としているのもお構いなしに唇を重ねてくる。

「!?!」

香水でもつけているのか。ふわりと柑橘系のさわやかな香りに包まれる。啄ばまれるような口付けは、あくまで柔らかく優しい。

ほぼ力づくで乱暴に唇を奪われてきた身としては、うっとりするほど細やかなものだった。

それでも相手は同性である。

焦って逃れようとするが、意外と力強く抗いきれない。

食いしばった唇を舌先が探り、片方の手が背を伝いながら下半身へと滑っていく。

進退きわまりねじ込まれた舌を噛むしかないという状況に至る。

「それくらいにしてやってもらえないか」

苦笑まじりに割って入ったのは碧柊だった。

突然声をかけられ、女は驚いたようだが、悪びれた様子はない

「あら、せつかく手ほどきしてあげようと思ったのに」

「まだまだ子供でね」

「 過保護なお兄様なこと」

それ以上の手出しは許さないという彼の気色を悟ってか、女は艶然と微笑むと碧柊の頬に唇を寄せ、去り際になんとも悩ましい流し眼を青蘭に送って去っていった。

「俺より先に言い寄られるとはな」

「ご冗談はおよしく下さい」

耳まで赤くしながら、ぷいと顔を背けて唇を拭う。

「まんざらでもない様子だったぞ？」

「 さぞいい見世物だったのでしょうね」

底冷えのするような声で、皮肉るように応じる。

食むように唇を貪り、齒列を探る舌先は思い出すまでもなく悩ましく官能的だった。それを声をかけずに見物していたとなれば、悪趣味この上ない。

青蘭はむかむかしながら頭巾を目深に下し、皆の所へ戻ろうとする。

機嫌を損ねたと悟った碧柊は、慌ててその手首をつかんだ。

「悪かった だが、下手に口をはさんで疑いを招くわけにもいかぬだろう」

「 それで呑気に見物なさっていたわけですね」  
きつとねめつけて、その手を振りほどく。

「 だから悪かったと 」

「 あなたより彼女の方がよほど口付けはお上手でしたよ」

眉間にしわを寄せつつ皮肉気に笑ってみせる。碧柊は返す言葉を失う。

「弟して遇するなら徹底してください」

これ以上の手出しはすると言外に告げて、青蘭は踵を返し碧柊を置き去りにして去った。

残された碧柊はなにが失言だったのか分からぬまま、その後ろ姿を見送るしかなかった。

<つづく>



歩いているだけで汗がにじむ。

頬を伝う滴を拭いながら、頭巾の影で青蘭は小さく息を吐いた。いつの間にか季節は初夏からいよいよ盛夏へと移ろっていきらしい。

その間の記憶はこれまでの人生のなかで最も濃密でありながら、まるで一夜にみた夢の如く実感を伴わない。

日の出と共に起き出し、身支度と朝食をすませるとあとはひたすら歩きづめだ。

陽はそろそろ中天にかかろうとしている。

閉ざされた空間で育った彼女が、これほどの時間と距離を自分の足で歩くのははじめてだった。

初日だった昨日はひたすら歩くことに専念してなんとか夕方まで持ちこたえることができたが、一日で両足に立派な靴ずれと肉刺ができてしまった。

疲労困憊のまま、それでも碧柊と共に夜警にあたる。夜半にはあとの二人組と交代することになっていた。焔を絶やさないように頭巾の影から焚き火を見つめていても、ついつい体が眠気にかしく。

そんな彼女に碧柊はともかく休めと云い渡し、強引に横にされてしまった。起きようとする頭を押さえこむ手に、逆らう力がなくなれば、そのまま優しく幼子をあやすように髪を撫でてくれる。そのままとうとうとまどろみかけながらも、結局眠りに陥れなかったのは痛みのせいだった。

痛む足をどうすればいいか分からずともかくさすっていると、じきに碧柊もそれに気づく。

足をみせるよう言われたものの、素足をさらすことを躊躇っていると静かに、けれど厳しく窘められた。しぶしぶ起き上がって長靴を脱いで足をみせると、彼は眉間にしわを寄せて溜息をついた。それにびくりと体を震わせると、半ば呆れたような、そのくせやけに優しいな笑みを浮かべて青蘭をみつめ、そつと頭を撫でてくれた。

「この状態でよく辛抱したな　だが、無理はするなと云っておるだろう」

「……申し訳ありません」

傷が酷くなれば、足手まといになる。そうなる前に碧柊に相談すべきだったが、もう遅い。自己嫌悪に満ちた暗い声で詫びると、俯いて肩を落とす。

碧柊は困ったような顔をしたが、じきに小さな頭を抱え込むようにして引き寄せられた。そのまま逞しい肩に頭を預けると、耳元であやすように囁かれる。

「咎めたのではない。褒めたのだ。いい加減、素直に受け取れないのか？」

青蘭にとっては思いがけない言葉だった。

呆れたような口ぶりにかわりはないが、そこに青蘭をかつて苛んだような響きはまったくない。むしろそれとは正反対のものだった。

「……ごめんなさい」

戸惑った末に、結局同じ言葉を繰り返す。それに彼は苦笑したようだった。

「こついつときはありがとございますの方が相応しかろう」

「そつでしようか？」

「おそらく。少なくとも詫びるよりはな」

そうですねと返そうとしたが、何故か言葉にならなかった。かわりに小さく頷き返すと、彼もかすかに笑ったようだった。

それから足の手当てをしてもらい、渡された鎮痛剤を飲むと、あつという間に眠りに引き込まれてしまった。

一夜明けると昨夜の泥のような疲労はきれいに失せていた。しかし四肢や傷の痛みはきっちり残っていた。

朝食後にまた薬を渡され、いったん痛みは和らいだが、それもつかの間だった。

朝も念を押すように無理をするなど言われたが、彼は彼の役割があり、今は馬にまたがり一行の少し先を進んでいる。

痛みは氣力を削ぐ。次第にぼんやりし、ついつい遅れがちになる。まるで子供のように華奢な少年の腕など誰もあてにはしていないのは明らかだった。

ぐいと汗をぬぐい、唇を噛みしめると少しは意識がはつきりする。うつむいてひたすら歩くことに専念していた彼女は、列の中ほどの荷車の荷台から誰かが飛び降り近づいてくるのに気づかなかつた。「辛そうね」

突然声をかけられ、びくりと体を震わせて立ち止まってしまった。頭巾の影から見れば、よりもよって昨日唇を重ねてきた女だった。

戸惑う青蘭におかまいなしに、彼女は「いらっしやい」と囁くとその手を引いて引きずるようにどんどん進む。

痛みに顔が歪む。苦痛の呻きを必死で堪えつつついていく。幌の付いた馬車のそばまでくると、彼女はゆっくり進むその荷台に身軽に飛び乗った。

「のぼって」  
戸惑っている、無理矢理手を引かれる。つんのめるようにこけそうになっても、女は手をはなさず強引に引つ張り上げられてしまった。

勢い余って荷台に転がりこむと、横になっていた二人の女が薄目を開けて咎めるような一瞥を寄こし、そろって背を向けてまた眠ってしまった。

荷台には女たちの荷が積まれ、その間に彼女らは思い思いに横に

なり、荷物に凭れかかったりしていた。

青蘭を連れ込んだ女は荷台の縁と幌にもたれかかるようにして場を開けてくれた。困惑していると、寝返りを打った他の女の足に蹴られた。仕方なくその厚意に甘えることにした。

荷物と荷物の間の狭い空間だった。一人ならともかく、二人となると相当狭い。その上、日中のこの暑さだ。女は胸元が大きくあいた半袖の涼しげなかつこうをしているが、青蘭は胸にきつく晒を巻いている上、きっちり着込んで外套まで羽織っているのだ。肩を並べるどころかきつちりと体は密着する。暑苦しいことこの上ないが、痛む足を引きずって歩き続けるよりはましだった。

碧柊が彼女に自分のことを頼んでくれたのだろうかと訝しんでいると、そんな心中を見透かしたように女が笑った。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。もう、昨日みたいなことはしなから。これはそのお詫びみたいなもんだからさ」

頭巾を下ろすこともなく、小さくうなずく。それで満足したのか、女は笑って頷き返した。媚を含まない笑顔はむしろあどけなく、実は自分とそれほど年が違わないのではないかと青蘭ははっとした。

「あんたの兄さんって優しいんだね」

女の呟きに、青蘭は首をかしげた。その言葉に異議があるわけではなく、その響きにこめられた思いがどういうものか咄嗟に分からなかったからだ。

「弟思いの兄さんだろ？」

それには素直に頷いた。その仕草をどうとつたのか、女は小さく笑う。

「あたしにも弟や妹がいたからさ　あたしが男だったら、今でもあんたの兄さんみたいに傍にいて守ってやれたんだろうなと思ってさ」

青蘭を気にかけてくれたのは、そのかわりなのだろうか。青蘭は戸惑っていた。首を傾げるのもおかしいような気がする。

そんな青蘭にかまわず、彼女は続けた。相手が発する言葉を持た

ないことを彼女も知っている。ただ、誰かに聞いてほしいだけなのかもしれない。

「5年前の冷たい夏、あなたは覚えてないかい？」

青蘭のことをいくつも年下の少年だと思っているのか、覚えてなくとも無理ないかもねと呟いた。

「秋にはほとんど稔らなかつた。うちにはあたしの下に3人弟妹がいてさ、あたしが身売りするしかなかつたんだよ。そうすりゃ1人分口が減る上、金も入る。家族が冬を越すには金が要つたんだ」

己を憐れんでの言葉でも、青蘭の同情をひこうとするものでもなかつた。さばさばした声は、ただふと昔を懐かしみたくなつただけ、ただそれだけのものようだった。そこに何故か明るさのようなものを感じて、青蘭は戸惑う。その過去は決して明るいものでも幸福なものでもないはずだった。

青蘭は困惑して俯く。

5年前の冷夏と、その農業への被害の深刻さは青蘭も知っている。西葉でも同じような状況だった。農家では娘の身売りが相次いだ。取り締まるべく王領では禁止令が下されたが、実質的には守られることはなかつた。そうしなければ冬を越すことができない人々がいた。そうせずに春を迎えられたのは、むしろ少数だったかもしれない。

知っていた。けれど、知らなかつた。

それがどういうことか、本当の意味で理解できるはずがなかつた。その冬も、青蘭はいつもの年と変わらず春を迎えたのだ。

頭巾の影の顔が強張る。その空気が伝わったのか、彼女は申し訳なさそうにそつと青蘭の腕に触れてきた。

「ごめんね、そんなつもりで話したんじゃないんだよ。ただ、誰かに聞いてほしかつただけでさ。あなたの兄さんを見てたらさ、あたしが男だつたら、なんて思つてさ……けどね、ほんとにあたしが男だつたら、あの冬に家族のなかから死人が出たろうよ。売る娘のいなかつた家はそうだったらしいからね。だから、それでよかつた

んだ……あのとき、身を売れるのはあたししかいなかった。それで誰も死なせずにすんだ。それにあたしも生きてる。あたしは自分のできることをしただけなんだよ」

それで弟たちを守れたんだから、と呟いた。それはせめてもの慰めか、それとも矜持か。

そつと影から伺い見る。女は詫びるように青蘭を見つめていた。その瞳に翳りはあるが、同時に強さも存在する。それは果たすべき役割を果たした人間のものだった。

青蘭はその眼を直視することができなかった。

果たすべき役割は青蘭にもある。それから眼を逸らそつというのは、間違いなく自分だった。

<続く>

焚き火の向こうで膝を抱えて丸くなった少女は、先ほどから同じ仕草を何度となく繰り返していた。ちらりと視線を寄こしては、彼と目が合うのを恐れるようにじきに伏せてしまう。

なにか云いたいことがあるような素振りには、昼ごろから見え隠れしていた。しかし彼女が言葉を持たないということにしてある手前、二人きりになるのを待つしかなかった。

夜警につくときは頭巾を下ろしている。はじめて会ったときは腰まで届くほどあった髪は、肩のあたりでばっさり切り捨てられた。じきに伸びますと笑ったが、思い切ったことをするものだとなかなか驚かされた。

気丈なようでも、そうでもない。容易く心を乱すかと思えば、伶俐な判断も示す。今にも折れてしまうのではないかと不安になるほど心もとないかと思えば、彼が秘匿している不安ごと救い上げてくれるほどのしなやかさで逆に包み込んでくれもする。惑わされるが、同時に惹きつけられる。

短くなった髪は首の後ろで束ねられているが、いくらかは白い頬に落ちかかる。見事な髪だとはじめて目にした時から思ったが、焚き火に艶を帯び、少しやつれて研ぎ澄まされた顔にかかるそれは妖しげですらあった。

街道に並んでとめられた荷車の方からはつい先ほどまで酔っぱらいの賑やかな笑い声が響き、夜の静寂しじまを乱していた。それもやがてやむと、今度はどこからか大きな鼾いびきが響いてくる。徐々に大きくなり、そして次第に小さくなり、また大きく響きはじめる。規則正しいそれは、ひどく間抜けでほっとさせられる。

荷馬車がすれ違えるだけの広さをもつ街道は石を敷かれ、道端も草が掃われ十分に手入れされている。この先の峠はいくつもある峠

越えの中でも最も悪路として知られている。それでもこれだけの手入れがなされているということは、密やかな交易がいかにかんに行われているかという証左に他ならない。

西葉側はそもそも東葉との交易など認めておらず、東葉はその密貿易をむしろ推奨しているほどだ。だが、そこから上がる利潤のいくらかが王領にも落ちねば意味はない。税収が実態をどれほど反映しているかを思うと、苦笑するほかない。

道の両脇には深い森が広がる。だいたいの数は減ったとはいえ、人を襲う獣が未だに横行している。夜盗の類よりも、警戒すべきはそちらの方だった。

焚き木を足す。音を立てて焔が歪むと、少女はもはや何度目か知れない視線をよこした。わざと注視すれば、それを避けるように面を伏せる。

なにかを逡巡しているらしい。だが、それ以上のことは分からないう。水を向けてやるしかないのかと思案しはじめたところを見計らったように、ようやくかすれた声が聞こえた。

ひどく緊張しているのか。ひきつった声は言葉にならない。

「 どうした? 」

つとめて柔らかく問うてやっても、なかなか言葉にすることは難しいらしい。

そつと体を滑らせるようにして、距離を詰める。

少女はぴくりと肩を震わせたが、逃げようとはしなかった。昨夜、足の傷を診てやったことでやや心を許してくれたのかもしれない。

今夜も傷の手当てをしたのは彼だったが、やり方を教えて欲しいと云いだしたのは彼女からだ。知っているに越したことはなく、碧柘は丁寧に説明しながら傷を洗い膏薬を塗りなおしてやった。片足を済ませると、もう一方の足は自分でやってみるよに云ってやるとほつとしたような気振りをみせ、彼に複雑な思いをさせた。

昼間も戻ってみれば、どういいうわけか昨日の女と仲良く肩を並べて眠っており、呆れさせられた。自分の知らないところで下手に男



と親しくされるよりはましだが、性別を偽っているという意味を分かっているのかどうか。

あとで女にとって自分は弟の代わりのようなだと明かし、その後もおとなしく世話をやかれるにまかしていた。

それをどういうわけか面白くない気分で見ている自分がいることにも気づいていた。

警護を担当している以上、ずっと彼女の面倒を見てやることはできない。手を出してこないのならば、これ以上安心して委ねられる手はないに違いないのだが。

「辛いなら今無理に話す必要はない」

ひどく思いつめた顔をしている。

彼女が以前からなにかしら胸の奥に秘めていることを、彼はなんとなく察していた。時折、過剰なほどに自分を責める。その理由は想像もつかない。

今、切羽詰まったような表情で逡巡に揺れているのは、それが理由なのだろうか。

きつく両手を握りしめ、唇をかみしめている。

そんな様子は痛々しく、奥底に隠している事情も気にはなるが、それ以上に優しくしてやりたくなる。

けれど、手を伸ばせば身を強張らせる。それは自分が招いた結果だが、これ以上彼女を傷つけたくはない。

どうにかしてやりたいが、どうしてもやればいいのか見当もつかない。

彼の言葉に少女は力なく首を振る。赤い眼をしていた。眦が潤んでいる。

「どうしても聞かねばならぬか？」

静かな問いかけに迷いなく頷く。

覚悟を決めたような眸の光に、碧柊は小さく笑った。

「分かった。では、そなたが自分で云うんだ。いくらでも待ってやる」

そつと手をのばして頬に触れると、彼女はぴくりとわずかに肩を動かしたものの逃れようとはしなかった。

眼を合わせるのは辛いらしく、視線はさまよう。結論は出ているが、口にするにはひどく勇気を要するのか。硬い表情で唇をかみしめる。親指でその口元を押さえると、驚いたように目をあげた。目と目が合うと瞬時に耳まで赤く染まる。何とも切ない顔で目線を伏せる。そんな様子を見てるとひどく守ってやりたいような心地になるが、その衝動をなんとか堪える。

言葉を待つといったのは、他ならぬ自分だった。

抱き寄せるかわりに髪を撫でてやる。しばらく俯いてその優しい仕草に身を任せていたが、やがてゆっくりと身を引き、まっすぐに顔を上げた。

大きな瞳に焚き火の焰が映え、揺れていた。

「私が 青蘭なのです」

噛みしめすぎてうっすらと血の浮かんだ唇が、そう紡いだ。

< 続く >

なかなか言葉にならなかつたはずなのに、いざ口にするとやけにはつきりと響いた。

沈黙がおちる。冬の朝の静けさのようだった。耳が痛くなるほど凍った空気と、全てを一色に塗りこめた雪。

高鳴る鼓動だけが支配する。

まっすぐに彼の眼を見て告白することができた。直後に目を逸らしたい衝動に駆られるが、ぐつと堪える。

それまでの優しく見守るような眼差しが一変する。一瞬大きく見開かれ、それからすつと細められる。

「そなたが青蘭姫だと？」

「はい」

しつかりと答えることができた。

本当は苦しいほどに拍動がはやまり、今にも気を失ってしまいそうなほど緊張している。声が、手が、全身がかすかに震えているのがわかる。

「真なのか？」

「はい」

小さく頷くと、彼は考えこむように視線を落とす。厳しい表情だった。

青蘭は胸が苦しくなる。ずっと謀ってきたのだ。もっと早くに彼を信じると決め、その上そう明言までした。その時に話しておくべきだった。今、ここで明かしたところで彼の心証が良くなるはずもない。軽蔑され、嫌われても仕方ないと覚悟を決めていた。いくら覚悟していても、その瞬間を待つ時間は辛いものだった。

「では、翠華すいかの姫というのは？」

視線は焰に注がれていた。

「雪蘭です。私達は双子のように似ております」

「では、何故あの庭にそなたがいた？」

青蘭は俯き、ぼつぼつと経緯を語った。

おそらくは兄そしき蒼杞の企みを知った雪蘭が実際に青蘭だけ逃そうと入替りを提案したこと。それを不思議に思わず、受け入れたこと。云われるままに林泉の庭へ出て、碧柘と遭遇したこと。その後のことは彼も知るとおりだ。

碧柘はしばらく黙りこんでいた。

「あの時、あの庭でわが手のものがかきまみ覗見らしき者を一人始末している。その者がそなたを逃す手はずだったのかも知れぬな」

「……おそらくは」

「すべては偶然か　それとも女神のご意志か」

青蘭には答えられなかった。

碧柘は視線をあげ、項垂れる少女をじっと見つめる。

膝の上で握りこんだ指が白くなり、かすかに震えている。頬にかかる髪も揺れていた。

「何故、今まで黙っていた……いや、話せなかったのだろう　雪蘭殿の命が危うくなる故な」

従姉の名に、その薄い肩がぴくりと動く。しかし、答えない。

「黙っているのは分からぬだろう。咎めているわけではない」

その声は思いがけず穏やかで優しくかった。そのせいか、思わず堪えていたものがわずかに堰を越えてしまう。ぼたぼたと粟が拳の上  
に落ちるのを、彼も見ていた。

「雪蘭殿のためだったのだな？」

「……違います」

抗弁する声が震える。

「なにが違う。その涙はそのせいだろう」

「雪蘭は何よりも国を　葉よちを大切にするように云っておりまして。けれど、私はそうはできなかつた……約束したのに、私にはどうしても……雪蘭を失うのが怖くて　私のせいで雪蘭が死ぬなんて……」

……」

「そなたにとっては雪蘭殿が最も大切なのだな」

気がつけば温かな胸に抱きとられていた。強引に抱き寄せられ、さらに逃れられぬように強い力で封じられながら、その一方でひどく優しい手つきで髪を撫でてくれる。

息がつまり、涙も乾いてしまう。半ば混乱の極みでただひたすら身を固くしていると、束の間、額に柔らかい温もりが押し当てられた。それが唇だったと気づき、呆然とする。彼の意図がまったく読めなかった。

「よく話してくれた　辛かっただろう」

それだけで十分だった。

まるで土手が決壊するように抑えてきたものが溢れだした。しがみつくようにすがりつく。涙があふれ止められない。感情の洪水に翻弄され、言葉が見つからない。ただ溺れまいときつく彼の服を掴めばその上から手が重ねられ、握りこんだ指をほどき指がからめられた。

頬を伝う涙を唇ですくわれる。流れた痕を遡るようにたどり、瞼にも口づけが落とされる。それはもう一方でも繰り返された。

さらに嗚咽を堪えようと食いしばる唇に唇が重ねられる。反射的に逃れようとするその後頭部を抱え込まれ、さらに深く唇が重ねられた。

繰り返し口づけられ、次第に深く求められる。舌が絡められ、逃れようとしても許してくれなかった。

やがて温かな感触は首筋へと移ろっていった。呆然と見開いた眼に、彼の髪がうつる。ぷんと汗の香りがした。肌をさらに熱く柔らかな感触が伝っていく。きつく吸われると、痛みとそれ以上に未知の感覚におそわれ、びくりと体が震える。知らず、甘い息が漏れる。

いつの間にか胸元をひらかれていた。鎖骨のくぼみを舌先に探られ、さらに緩められた腰帯と胴衣の下から武骨な手が滑りこんでくる。

青蘭はさすがにそこではと我にかえり、渾身の力でのしかかってくる大きな体を押しやるうとした。

彼もそこで動きを止め、訝しそくに顔をのぞきこんできた。青蘭は目にいっぱいの涙をためていた。

「まだ早かったか？」

「……」

言葉にならず、開きかけた唇を引き結ぶ。

眦からこぼれた涙に唇が寄せられる。びくりと身を震わせたがそれ以上拒む気にはなれなかった。

「言っておくが、こんな事態になっていなければ、吾らはとつくに夫婦になつていたのだぞ」

からかうように耳元で囁かれ、くすぐったさに肩をすくめる。耳朶を甘噛みされると、いったん冷めかけた熱がまた戻ってくる。

「夫婦が何をするかを教えてくださいたのはそなただろう？」

皆でのことを思い出し、いたたまれない想いがこみあげてくる。彼が子供だと呆れた理由をようやく悟る。

「ですけど……」

得体のしれない熱から逃れようと、彼をさらに押しやる。しかし逆に再び抱き寄せられ、息ができないほど強く抱擁された。

「兄が弟を襲うわけにもいかぬからな。今はこのくらいで辛抱してやる」

腕が解かれると、青蘭は弾かれたように逃れた。乱れた胸元をかき寄せ、落ちた腰帯を慌てて拾う。

そんな彼女の動揺ぶりとは対照的に、碧柊は悠然と笑っている。

「こんなこと……」

「婚約しているのだ、別にかまわぬだろう」

「今まではしなかったではありませんか」

くるりと背を向けて胸元を整える。狼狽しているせいか、なかなか手際よくなおせない。

その背後からふわりと腕が回された。

「殿下」

逃れようとしたが、逆に強く抱きしめられる。

「碧柊だ」

「え？」

「名を呼んでくれ 青蘭」

耳元でささやかれると、急に切ないような胸苦しさがこみあげてくる。

「分かりましたから……碧柊、殿」

「まあいい」

少し不満げに呟き、頬に唇を寄せる。青蘭は身をよじったが、放してくれるはずもなかった。

「そなたが雪蘭殿ならこんなことはしない」

「え？」

「はじめて会った時に云っただろう。妻とする人は一人だと。吾はどうあっても青蘭姫の夫とならねばならぬ。雪蘭殿であれ、誰であれ、青蘭姫以外の女性に手は出せぬ。だからずっと堪えてきたのだ

だが、そなたが青蘭姫その人なら何も問題はない」

「……私が“青蘭姫”だからですか……」

何故かがっかりしてしまう。

青蘭の声がいくらか沈む。それをどう受け取ったのか、彼は頬や生え際に何度も口づけながら呟く。

「そうだ」

体から力が抜ける。抵抗がやむと彼は再び口づけてきた。気が済むまで青蘭の唇を貪り、しなやかな体を抱きしめた末、ようやく解放される。

休むように促され、半ば放心したまま従う。荷物を枕にすれば、その頭もとまで寄ってきて髪に触れる。優しく撫でられているうちに、眠気が押し寄せる。

「この先のことは明日、二人で考えよう」

夢見心地に聞きながら、ふと悲しくなる。自分が雪蘭なら、もっ

と頼もしい相談相手になれるのに。けれどどうあがいても、青蘭は青蘭でしかなかった。

< 続く >



その朝、青蘭は朦朧としながら起きだした。

深更に夜警を交替し、休息用にあてがわれた最後尾の荷台まで引き上げる。商品でもある毛皮の山を布で覆っただけの簡易な寝床は、夏には少々暑苦しいが寝心地は悪くない。問題は二人で使うには少々狭いという点だった。

寝ぼけ眼の青蘭をそこまで背負って運んだ碧柊は、寝床に放り込まれるなりその真中で膝をかけるようにして丸くなった彼女に溜息をついた。

仕方なく他の荷に凭れかかって一夜の休息をとる。ゆっくり休めるわけではないが、野営に慣れた身にはそれでも十分だった。

そんな次第で寝床を占領していたことにも気付かず、青蘭は泰平楽に安眠を貪った。

すっかり日が昇っても起きだしてこないため、先に身支度を整えて荷台から降りていた碧柊は戻つてのぞきこむ。そこにあどけない寝顔を見つけて苦笑する。

彼が荷台に上がった反動で揺れるが、それでも彼女に眼を覚ます気配はない。

そつと傍らに膝をつきそつとゆり起せば、ようやく目をひらいた。まだ焦点の合わない眼でぼんやりと碧柊の顔を見る。あまりの無防備さに悪戯心を刺激される。

「朝食だぞ 青蘭」

耳元に唇を寄せて囁いてやれば、びくりと肩を震わせて瞬間で目を覚ましたらしい。目を睨り碧柊を見上げる。長い睫毛が開閉を繰り返す。状況を把握するのに時間を要しているらしい。

その隙に乗じて朱唇をついばんでやると、みるみるうちに耳まで朱に染める。半ば無意識に後ずさる様子を複雑な思いでみつめなが

ら、膝の上に配られたばかりの朝食の包みをのせてやる。

「おはよう、青蘭」

「……おはようございます、殿下」

もそもそと起き上がり、寝乱れた髪をばつが悪そうになおしながら視線を外す。彼の視線を受け止めきれないようだった。碧柎はその傍らに片手をつき、顔を近づける。青蘭は驚いたように顔をあげる。

「碧柎だ」

大きな黒い眼をのぞきこむようにして囁くと、彼女は近すぎる顔を押しやろうとする。

「……分かりましたから、碧柎殿」

これ以上なく頬を紅潮させる。碧柎は彼を押しつけようと無駄に足掻く彼女の手を取ると、その甲に口づけてさつと身を引いた。

青蘭はほっとしたように困惑した眼差しを彷徨わせる。

「食事と身支度は手早くすませた方がよい。もうそろそろ発つ。足の傷のことは商人に話しておいた。そなた、今日は無理はせずここで休んでおれ」

「けれど、それでは」

あくまで二人一組の計算で雇われたはずだ。今のところ役に立つどころか足手まといになっているが、だからと言って開き直ったように振舞うわけにもいかない。

「大丈夫だ　咄嗟の時に傷が原因で動けぬが最もまずい。峠の関まではあと三日だ。関で何が起こるか分からぬからな」

「……そうですね」

心苦しいのだろうが、それが現実と悟って受け入れたようだった。「あの女にも一応声をかけておいた。様子を見に来てくれるかも知れぬ」

「　ありがとうございます」

自分でもいささかならず過保護だと思ふ。それを察したように彼女は苦笑まじりに礼を述べた。

碧椏が言い置いて行ったように、出発して間もなく、あの女が最後尾の荷台の幌を持ち上げて顔をのぞかせた。

「上がるよ」

一言断ると、身軽に乗り込んでくる。

彼女ら3人もいわば商品の一環で、逃亡を防ぐために列の中ほどの荷車をあてがわれている。そのわりに気ままに動くことを許されているが、いざとなればそうはいかないのだろう。

すでに頭巾を目深にかぶっていた青蘭は、その陰で微笑しつつ彼女のために場所を空けた。そこに腰をおろした彼女は、おもむろに青蘭の頭巾をおろしてしまった。

「？」

「こんなとこまで被ってる必要ないだろ。それに、あたしはあんなの顔も知ってたんだし」

悪意のない笑顔を向けられると、青蘭も抗いようがない。苦笑しつつその言葉に従うことにする。

半ば強引に頭巾をはぎとられて乱れてしまった髪を直そうと手を伸ばしかけると、先に彼女の方が手を出してきた。

「なおしてやるよ」

青蘭の束ねた髪をほつき、懐からとりだした櫛で梳る。肩を覆う程度に短くなってしまう髪でも、梳けば梳くほど艶としなやかさが増す。

優しい手つきに青蘭は束の間ひどくほっとする。よく雪蘭がそうして髪を梳かしてくれた。なにかもよく似通っている二人だが、この髪質だけは明らかに違うのよねとつくづく感心したように呟きながら。

そうしていると、ふと手が止まる。

「これ、どうしたんだい？虫にでも……」

首筋のところを指先で触れられて、青蘭ははっとした。昨夜のこ

とを思い出し、耳まで熱くなるようだった。

その様子に彼女も察しがついたらしい。

「……あんたたち、実際は兄弟じゃないんだろ？」

青蘭はかろうじて反応を押し殺した。小さく首を振ると、彼女はふうんと疑わしそうに呟く。

「まあ、兄弟でもない話じゃないらしいけどね」

とんでもない誤解をされているらしいが、ただすためには口を開かねばならない。仕方なくともかく首を振る。

そんな青蘭に彼女は訝しげに眉をひそめる。

「でも、昨夜なんかあつたんじゃないのかい？あんたの兄さんの様子もなんだか昨日とは違ってたしさ」

どう違っていたのか見当もつかない。今朝の様子は昨夜のあの時の雰囲気のままにあまやかなものだったが、まさか他の人間に対してまでそんなわけはあるまい。

「まあ、いいけどね。そこまで大切にされてるのを見ると、ちよつと妬けてくるけどね」

その言葉に青蘭は思わず振り返る。問うようなその表情に、彼女は眉をあげ、それから眉をひそめた。

「もしかして、自覚してないの？」

咎めるような口ぶりに、青蘭は慌てて首を振る。

そついうわけではない。過保護なほどだと思っているが、それは傍から見てもそつらしいというのが驚きだった。

「みてりゃわかるさ。だから兄弟じゃないんだろつて聞いたんだよ。それなら分かるからね。あの兄さんはあたしたちにはちつとも興味がないようだしね。誰が迫ってもあつさりかわされてさ、女には興味ないんだろ、あの人？」

青蘭は首を振りそつになり、何故かとどまる。女らしさで云えば彼女らにかなうはずもない。彼女らに関心を示さなかったのがふりだったのかどうかまでは分からないが、少なくとも自分についてはそつではないらしい。けれどそれは自分が青蘭姫だからなのか。

また暗い思いが去来する。

俯いた青蘭にかまわず、彼女は手早く髪をまとめてくれた。

「外に出るときは頭巾をかぶるときなよ、それ、目につくからね」  
からかわれ、抗議するように振り返る。彼女は櫛を懐になおしながら、意味ありげな笑みを返してきた。

その時、幌の外から声がかげられた。碧柊の声ではない。それではいったい誰なのか。

二人は顔を見合わせ、彼女が「誰だい？」と声をかけた。

「ちよつとお邪魔しますよ」

幌をあげ、顔をのぞかせたのはあの商人だった。

<続く>

商人は二人に平等に微笑みかけた。

「少々外してもらえますか」

その言葉は女に向けられた。彼女は青蘭の顔を見る。大丈夫だというように肯いてみせれば、心配そうな素振りを残しつつも荷台からおりた。

「ここではなんですので、御者台の方へお越しただけますか」

それだけ云いおいていったん姿を消す。じきに御者とのやりとりが聞こえ、荷車は止まった。

青蘭は頭巾をかぶり、荷台からいったん下りる。着地すると靴ずれや肉刺に痛みが走るが、昨日ほどではなかった。

言われるまま御者台に回りこめば、そこには商人の姿しかなかった。

「手綱は私がとりますので、隣へどうぞ」

そう云われれば従うしかない。隣に座ればじきに荷馬車は動きだした。手綱さばきは手慣れたものだった。

「もともとここが私の出発点なのですよ」

裸一貫から成りあがったのだろう。青蘭は頭巾の影で小さく頷いた。

「やはりあなたは女性でしたね」

何の前置きもなしにそう言われたが、不思議と青蘭は落ち着いていた。

「王太子殿下のお気の遣われようからそうではないかと慮っておったのですよ」

男装するように指示した本人からそれがばれていては意味もない。だが、仕方なくもあった。青蘭には多少太刀が使えるという以外、

実際にこれと云つて役に立てることはない。奥の宮育ちの体では体力も高が知れているし、そもそも小姓のふりをするなど最初から無理がありすぎたのだ。

それもまあ碧椏の正体を知っている彼が相手だから云いだせたことで、本当に正体を伏せて潜りこむなら青蘭は娼婦のふりでもするしかなかっただろう。それも相当に無理があつただろうけれど。

青蘭はただじつとしていた。下手なことを口走るより、相手から少しでも引き出した方が賢明だ。

「警戒なさるのは無理もない。先に私のことから明かしましょう。私の主は岑家当主、岑雪蘭さまの義兄上です。雪蘭さまから青蘭殿下をお探りするよう指示が下されております。それに一昨日、新たな情報がもたらされました。青蘭殿下は東葉王太子と行動を共にしておられる可能性ありと」

淡々と告げられ、青蘭は頭巾の影でそつと息をついた。

ほつとしつつ、それでも緊張は解けない。どこまで信頼していいのか判断できなかった。即答を避ける。

「それからこれを」

懐から取り出したものを手渡される。それは掌におさまるほどの小さな絵だった。何のことが分からないままよく見てみれば、ひどく見覚えのあるものだった。

「  
」  
「そのもとなつた絵は、東葉の王太子殿下が花嫁のために特別に描かせたものかどうかがつております。王太子殿下が苓南れいなんより行方不明になられたため、雪蘭さまが至急模写させてお配りになられました。これでは証となりませんか？」

実物と比べれば小さいがそこに描かれた彼は、確かに青蘭がはじめて目にした夫となるはずだった人物だった。

懐かしいような心地でそれを見つめながら、青蘭は小さく頷いた。

「ええ、私が青蘭です」

「よくご無事でいらっしやいました。雪蘭さまもお喜びになられ

るでしょう」

「そうね」

その彼女は未だ翠華すいかに“青蘭姫”として在る。

こうして岑家配下の者に本物の青蘭姫の無事が確認されたということは、いよいよ雪蘭の身に危険の及ぶ可能性が高まることとなる。こうなってもなお、青蘭に出来ることは無事を祈ることだけだった。

「東葉東宮殿下は姫さまのことをご存知でいらっしやるのですか？」

「昨日までは私を雪蘭だと誤解しておられたわ」

「そうですか」

彼はそれで納得したようだった。

昨日と今日で二人の人間に様子の違いを悟られてしまう碧柊のことを思うと、青蘭は笑っていいのかどうか分からなくなってしまった。

それからしばらくして、碧柊が戻ってきた。ただ青蘭の顔を見にきたつもりだったのだろうが、御者台に二人並んでいるのに気づくと慌てた様子で近寄ってきた。

「どういっつもりだ」

表情は冷静だが、その声には険があった。

「まずはお乗りください」

促されて、青蘭は横にずれる。結局、商人と碧柊に挟まれる形になり、なんとも居心地の悪い想いをする。

どちらかといえば小柄で丸い体形の商人と、御者台にその長い脚を持って余すように座っている碧柊の間で、青蘭は身をすくめるようにして小さくなる。膝の上に置いた手をぎゅっと握りこむと、その上の上に大きな手が重ねられる。思わず振り払おうとしたが、押さえこむ力の方が強く敵わなかった。

すぐにそういうことをするから見破られてしまうのだという呆れ



た想いと、何故彼はこんなことをするのだろうという戸惑いの間で、青蘭はただじつとしてゐるしかなかった。

「お話は青蘭殿下からうかがいました」

商人は温和な笑みを浮かべて碧柎に語りかける。

碧柎はぴくりと眉を動かし、ちらりと青蘭を見る。重ねられた手にわずかに力が込められる。どうということだという無言の問いかけなのだろう。青蘭は答えようがなく、気付かないふりをした。

「私の配下のものは皆、岑家にお仕えする者です。ですがそうでない者も混じっております故、関を越えるまではこれまで通りでお願ひいたします」

「ああ、承知した 関の警備はどのようなのだ」

「いずれの関も厳しくなっているようです。ですが、増員されたという報せはありません。念のため、日時を合わせて峠の向こうまで岑家の兵が出迎えに来ることになっております」

商人の言葉に、碧柎は眉をひそめる。

「それではかえって疑いを招かぬか」

「いえ、吾等が東宮殿下が撤退されて以降、報復を恐れてどこも峠道には神経質になっております。岑州でも数日おきに関の近くまで警備隊が出向いておりますから、特に怪しまれる恐れは低いかと思われませす」

「それならば任そう」

すつと重ねられていた手が引かれる。

碧柎は腕組みをして何事か考え込んでいるようだった。

「西葉の国内情勢のこと、姫には話したのか？」

「まだお話しておりませす」

二人の声は平淡でいて、なにかを含んでいた。青蘭はそれを微妙に感じ取り、顔を上げる。碧柎と目が合うと、いつものように軽く頭を撫でてくれた。

そうしながら、彼は青蘭の頭越しに商人と視線を交えている。

青蘭は答えを求めて落ち着きなく頭をめぐらせた。

「なにが起こったというのですか？」

商人は答えようとしない。それに関しては碧柎に一任しているのか。

青蘭は碧柎の腕に手をかけて答えを乞うように見つめた。

「西葉国王が崩御なされた」

「……父上が」

何故、という言葉が喉の奥で消える。病床にあったわけではない。持病を持っていたという話も聞いたことはなかった。

同時にまさかという思いが込み上げ、気がつけば指先が細かく震えていた。

「兄上に？」

指先が白くなる。細い指先が上腕に食い込む。碧柎はそっとその上に手を重ねた。

「処刑されたそうだ　そなたを東葉に売り渡したという罪状で」

「……」  
「がくつと崩れそうになる。傾ぐ体を支えようと碧柎が腕をさしおぼす。肩を支えられながら、青蘭は踏みとどまった。

「大丈夫です　兄ならそれもおかしくはないでしょう、昔からそういう人でした……」

肉親の情とは無縁な父娘関係だった。

妻を亡くした元凶と娘を顧みなかった父とは、17年間で顔を合わせたのは東葉に嫁ぐ前の一度きり。どんな感慨も浮かばなかった。ただ、この人が西葉国王にして自分の父親なのかと他人事のように見つめただけだった。

兄蒼杞も父と同じく遠い肉親だった。ただ、何度も命を狙われ、傍近くで仕えてくれたものが何人も命を落としたことで、親しみよりは憎しみの方が強かった。

「兄にとって邪魔になるのはもはや私だけですのね」

生きていると知れば、きっと殺しに来るだろう。たとえどんな手を使っても。

青蘭はきつく唇をかみしめる。おめおめと殺されるわけにはいかない。

気がつけば肩に手が回されていた。しっかりとした頼もしい力強さが伝わってくるようだった。

「大丈夫だ、吾が必ず守ってやる」

「はい」

青蘭は少しためらった末、素直に小さく頷いた。

<続く>

峠の関には明後日にはたどりつく。道の傾斜は増し険しくなってきた。

遠かった山々も日増しに近づき、尾根を隠す雲海が刻々と変化していくさまも見えるようになってきた。かわりに日中の暑さは和らぎ、夜となれば涼しくしのぎやすい。

商人の言葉どおり、その後も二人の役割は変わらなかった。

三日目の夜も先に碧柎たちが夜警につき、深更には交代することとなっている。

焚き火に枝をくべる。立ち上った火の粉を眼で追うように顔をあげた青蘭に、碧柎が声をかけた。

「昨夜の話の続きだが、よいか？」

ぼんやりしていた青蘭は、その言葉に急に現実に戻される。

はっとして碧柎を見れば、彼は真面目な顔でこちらを見つめていた。

「はい」

小さく頷く。

青蘭が“青蘭姫”だと分かった以上、今後の話は重要になる。覚悟はしていたが、いざとなると身が硬くなる。

「そなたにはなにか考えはあるか？」

最初から単刀直入に問われ、青蘭は口ごもる。

この事態を何とかしなければならぬ。そのためには自分自身の存在が重要な鍵となることも分かっている。では、実際になにをどう考えればいいのか。

葉王家直系の王女である意味。そのために碧柎は西葉の降伏と引き換えに青蘭姫を要求した。彼女を妻に迎えることで、ゆくゆくは

葉を統一するために。

けれど、もうその方法は通用しない。では、どうすれば良いのか。青蘭自身が持つ役割に変わりはない。変わったのは状況だった。青蘭は伏し目がちに小さく首をふった。それは予測の範疇だったのか、碧柊は「そうか」と呟いただけだった。

ずっと心もち目が細められる。はじめてみるような厳しい眼差しだった。昨夜からの甘やかないろは微塵もない。何故かそれを受け止めきれず、青蘭はそっと目をそらした。

「そなたにはどれだけの覚悟がある？」

「え？」

静かなその問いの意図が読めず、青蘭は反射的に顔を上げた。

碧柊の表情は変わらない。

「吾にそなたの身分を明かしたということは、同時に雪蘭殿の身が危うくなることも覚悟している　そうだな？」

「……はい」

今更動揺することではない。承知の上で打ち明けたのだ。彼が問おうとしていることは、そういうことではない。それを感じ取り、緊張が増す。青蘭の声はかすれて震えた。

「葉王家直系の王女として　女神の末裔として、そなたにはそれを担うだけの覚悟はあるか？」

「　　いったいなにを問おうとしておられるの……」  
それだけ云うのがせいっぱいだった。

碧柊はちらりと一瞬視線を泳がせ、それから青蘭の隣に移動してきた。

青蘭は反射的に後ずさりかけたが、彼の眸にそうはさせない強い力を感じて動けなくなった。

「あれから汪永わうえいと話し、吾もよくよく考えたのだが　」

汪永とはあの商人の名だった。青蘭が荷台に戻った後も、二人は長時間なにやら話し込んでいた。その内容までは聞こえなかったが、それを契機に碧柊は考えをまとめたのだろう。

「吾はそなたを妻に迎え、そなたの夫として二つの葉をまとめるつもりだった。そなたはただ吾の傍らにいてくれてさえいればそれで十分のはずだった。吾はそなたのもつ価値を利用するつもりだったからな。だが、それはもう無理だろう。この状況ではもうそなた自身が自分の持つ力を用いるしかない。吾はそう考えておる」

「私自身、が？」

依然、話の筋は読めない。

碧柊は触れてこようとはしない。ただ、隣でまっすぐに青蘭を見つめる。その瞳に宿る意志の強さに、青蘭はこれまでになく彼を恐れた。

「ああ、そうだ。そなたが女王として即位する。それが最善の策だろう」

「じよ、おう……でも、それは」

「これまでのような名のみのお飾りとしてではなく、古の女王のように自ら立つのだ」

彼の言おうとしていることが理解できないわけではない。だが、青蘭は凍りつく。想像したこともなかった。

長い間、王女はただ王権を次代に引き継いでいくだけの存在だった。

太古においては祭りが政をも意味していたが、時代が下るにつれそれらは分かれたれ、政は政治として男が司るようになった。王権を引き継ぐのは王女でありながら、それを手にするのはその夫だったのだ。

碧柊もその方法で葉をまとめ上げるつもりだった。だが、二つの葉の国はどちらもさらに乱れようとしている。東葉王子である碧柊の名のもとに再びまとめ上げることは不可能ではないだろうが、酷く難しいには違いなかった。

「でも、私は……」

「考えたこともない、か？」

青蘭はこくりと頷く。

「そのように育てられていないことも、教育されていないことも承知している。一人で立てというわけではない。もちろん吾も尽力する。だが、立つのはそなただ。まずはそなたが心を決めねば成り立たぬことだ」

「……私、は……」

声がかすれて言葉にならない。

「今すぐ決めるというわけではない。だが、猶予もさほどあるまい。よく考えてくれ」

そつと力づけるように肩に手が置かれる。だが、それも一瞬だった。思わずその感触を追いつかりかけ、青蘭はそんな自分にはつとめる。

「殿下、あなたは？」

なにかを求めるように、けれど、それが何なのか自分でも分からないまま、青蘭は彼を見つめた。

碧柊はそれにわずかに眉宇をひそめると、ぎこちなく目をそらした。

「女王の即位にあたり、盾の選定が必要となる。その時に吾を選んでくれるならば……そうでなかったとしても、臣下として一生そなたを支える」

それは一連の儀式だった。まずは王女が女王として即位し、女神の盾と称される役割に一人の男性を選ぶ。それが即ち夫であり、実質的には王となる。それがいわゆる婚儀でもあった。

青蘭が自身で即位するのならば、碧柊が夫である必要性は絶対ではない。

「分かりました。考えます」

青蘭は喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

選べ、とは言わないのですね。

それを言っただけだったのか、それとも望んでいないのか。

青蘭は膝を抱える。無意識のうちに指先が首筋に触れていた。はつとしてひそかに赤面する。碧柊は焰を見つめている。その眼には

珍しく揺れるものがあつた。

昨夜、あのまま身を任せていれば、盾はどうあつても彼しかいはいはずだった。だが、実際はそうではない。

彼は“青蘭姫”だからこそ彼女を求めた。だが、もう彼が“青蘭姫”を求める理由はなくなつた。

青蘭は膝に顔を埋める。なぜか涙がこぼれた。その理由を薄々だが、ようやく悟りはじめていた。

< 続く >



交代の頃合になっても青蘭は眠っていないようだった。

焚き火の向こう側に横たわる背に声をかければ、小さく頷き起き上がった。そして頭巾を目深にかぶる。護衛の二人組も商人・汪永わうえいの配下だという。だが、これまでどおりに振舞うこととなっている。青蘭と碧柎の素性を知らされているのかどうか。二人は碧柎に軽口をたたき、青蘭を労った。

寢床のある荷馬車に戻る道すがら、先を歩いていた青蘭がふと足を止めた。頭巾を少しずらして顔をのぞかせ、天を仰いでいる。

「どうした？」

碧柎も同じように中空を見上げたが、星月夜がどこまでも広がっているだけだった。月がないため星影は清ひやかだが、特に気を惹かれるものはない。

青蘭は何でもないというように小さく首を振り、また黙って歩きだした。

青蘭は荷台の後部で足をとめる。

碧柎は「おやすみ」と云いおいて、去ろうとした。さすがに同じ床で休むわけにいかず、碧柎は荷台の前部になんとか空間を作り出してそこで体を休めている。

その背に、はじめて彼女が声をかけた。

「殿下　いえ、碧柎殿」

小さいが、凜とした声だった。

「どうした……いや、どうなさった、姫」

誰が聞き耳を立てているか分からない。碧柎は彼女のそばまで戻ると、声をひそめて囁いた。

青蘭は迷うそぶりを一瞬みせたが、唇を引き結んで毅然と顔をあげた。

「正直にお答えください。あなたは、私にできるとお考えですか？」  
思いがけない提案に、心は揺れるばかりなのか。落ち着いて聞こ  
える声も、かすかに震えていた。

自信などあるはずもない。渦巻いているのは不安と疑念ばかりな  
のだろう。

頼りにできる言葉を欲しているのだろう。それにどれほど根拠が  
ないと分かっているても、続けるような台詞を。

碧柊はそれを悟り、小さく首をふった。

「できないではない。するかしないか、それだけだ」

その言葉に少女が息を飲むのが分かった。欲しているのはそんな  
言葉ではない。それは碧柊も分かっている。そして、それが求めて  
はならない言葉だということを、彼女も理解しているはずだった。

「先ことは決して誰にも分かりえぬ。それはあなたも分かっ  
ておいでだろう」

「……ええ」

力なく青蘭は視線を落とす。

薄い肩。か細い手足。衣に隠されたその体がいかに華奢であるか。  
それを知るだけに碧柊は痛ましい想いで少女を見つめる。その肩を  
抱き寄せ、なにも思い煩うことはないと言いつつ、囁いてやりたくなる。

だが、それでは駄目なのだ。

傀儡として担ぎあげること、平時なら可能だろう。事実、これ  
までの実態もそれに近かったのだ。特に西葉では。

だが、西葉東宮蒼杞と碧柊の次に東葉王位に近かった明柊が組ん  
でいるのだ。それも、どうやら雲行きは怪しくなりつつあるよう  
だ。

蒼杞は父を手にかけてことで西葉の王権を手にした。明柊も雪蘭  
扮する“青蘭姫”を妃に迎え東葉王に登極するという。

それに引き換え、今、碧柊の手にあるのは目の前で頂垂れる少女  
一人だけ。

だが、彼女こそが最大の力を持つ。国境を越えた連帯を可能にす

るのは、葉の正当な王女であり、女王たりうる青蘭だけだ。それも  
当人がその気にならなければ、力は半減する。生半な決起は結局崩  
壊につながる。しない方がましだろう。

「もし私が決めなければ……碧柊殿はどうなさるのです？」

まだ逃げ口を求める。それを責める気にはなれない。その役割を  
葉の王女から取り上げたのは歴代の男たちだった。それを急に負え  
といわれて、背負えるわけではない。絶対に嫌だと泣き出さなだけ  
まだましだともいえる。

「そうなれば、吾が立つしかあるまいな。あなたに吾の妃となつて  
いただくことが大前提だが、その場合、姫にさせていただくことは二  
つだけだ」

「二つ？」

「吾の子を生み、吾の無事を祈る、それだけだ。あとは我に任せて  
いただければ良い」

「……」

それは本来、彼女に予定されていた人生だった。にも拘らず、青  
蘭は口ごもる。

無事を祈る。それは相当に厳しい状況の中でのこととなるだろう。  
わざわざそこまで口にする必要のないことは、彼女の揺れる眸をみ  
ればわかることだった。

追い詰めたいわけではない。むしろ守ってやりたい。すべての煩  
いから。

しかし、碧柊にそれだけの余裕はもはやない。彼女の力を借りる  
しかない。最も確実に彼女を守るためには、彼女自身が自ら立つこ  
とを選びそれを彼が全力で支える事が最善だった。

彼女は胸の前で手を組み、そこに逡巡を抱きしめるように俯いて  
いた。月明かりすらない夜でも、その細かな震えが見て取れるよう  
だ。

だが、碧柊はじつと堪える。今できることは、待つことだけだ。  
やがて青蘭は顔を上げた。細かな表情までは見えないが、切実に

なにかを求める眼差しがまっすぐに碧椋をとらえる。

「……もし、決めたとすれば　ずっとそばに居てくださるのですね?」

「ああ、必ずだ。決して違たがえぬ」

思わずそつと頬に触れる。彼女はその武骨な掌に頬を擦り寄せるように頷いた。

「　もう少し、考えさせて下さい」

「ああ」

そつと髪に触れて撫でる。彼女はそれを払いのけはしなかった。

殊勝に頭を下げ、「お休みなさい」と云いおいて幌の向こうに姿を消した。

<続く>

白々と夜が明ける頃に、青蘭は荷台から抜け出した。夜通しほとんどまんじりともできず、横になっているのもたまりかねてというところだった。

道の片側は傾斜になっており、注意して下りれば溪流のそばまで行くことができそうだ。足場を確かめようとのぞきこんでいると、いつの間にか背後に碧椏が立っていた。

起こさないようにとそつと動いたつもりだったが、武人でもある彼は青蘭の思う以上に敏感なのだろう。

「沐浴か？」

無造作に問われて、青蘭はとっさに顔を赤らめる。

宿場町を発つてから水場になかなか出合えず、洗面すらままならなかった。多少のことは我慢しなければならぬと分かっているが、そこに流れがあると分かればどうしても惹かれてしまう。

「発つにはまだ間があるな。俺が見張ってやろうか？」

人の耳を気にしての碎けた口ぶりに違和感を抱きつつ、青蘭はその申し出を有り難く受けることにした。

「でも、のぞかないでくださいよ」

声を抑えて念を押すと、彼はにたりと口の端を歪める。

「今更その必要もないだろう」

わざと艶っぽく囁き返され、途端に耳まで熱が走る。からかわれていると分かっているにも、止めようがない。

声を荒げて抗議しようとしたが、先にしつと唇を指先でふさがれない。それにはつとして辛うじて言葉を飲み込んだものの、気が治まらない。足を踏んでやろうと試みたが、あっさりかわされ踏鞴を踏んでしまった。勢い余ってこけそうになったのを、背後から抱きとめられる。

ふわりと包み込むように片腕で華奢な体を支えながら、彼は青蘭

に笑いを押し殺した声で耳打ちする。

「人を足蹴にする元気はあるようだな」

「！」

せめてと肘鉄を食らわそうとして、これもまたよけられてしまう。くるりと身を返すと、碧柊も素早く青蘭を解放して後じさった。

にやにやと笑っているのを睨みつけているうちに、次第にはかばかしくなってきた。苦笑ともため息ともつかないものが漏れた。

気を取り直して彼に背を向け、斜面を降りようと慎重に踏み出すと、今度は彼の方が慌てて後を追ってきた。

「気をつけるよ」

注意を促す声は、本気で案じているものだった。傍目で見ても明らかほどに、彼は青蘭を大切にしてくれているという。それをようやく実感し、感謝もこめて振り返り頷き返すと、今度は手が伸びてきた。

「そんなところで振り返るな。体勢を崩して転げ落ちたらどうする」  
上腕をしっかりとつかんで窘める。

まだ傾斜はそれほどきつくはない。青蘭は過保護ぶりに呆れて笑ってしまふ。

「なにがおかしい」

「別に」

「青蘭」

咎める声に今度はしつと青蘭が指を立てる。

「私は晴霖せいりんですよ、碌霖ろくじん兄上」

声を潜めて囁くと、碧柊は呆気にとられた顔を見せ、じきに苦笑した。

「そうだったな」

くすりと笑い返し、青蘭は心のどこかでひどくほっとしていた。

彼とこんな風にやり取りをしている時が、最も楽しく気持ちがいいと思える。ずっと雪蘭のそばでなければ安らげることなどないと思っていた。それが違ったらいいということに、ようやく気付きはじめ

ていた。

青蘭は碧柊を信頼することにして、溪流のほとりで肌をさらしていた。

数日ぶりに肌を拭えば、清涼感にひどくほつとする。水は冷たいが、身を切るほどでもない。

碧柊は木の幹に背を預け、斜面を見張ってくれていた。

ほどなく水から上がり身支度をとのえていると、衣擦れの音にたまりかねたように彼が口を開いた。

「姫は嫌だとか無理だとは申されぬのだな」

「え？」

その言葉の意味を解しかね、青蘭は手をとめる。

「いきなり女王として即位しろと言われても、頭から拒んだりなさらぬのだな」

「そのことですか」

自然と溜息をついてしまう。

そう出来ればどれほど気が軽くなることか。それでもそう出来ない理由は一つしかない。

「私は王女ですから」

望んで得たものではない。だが、そう生まれ、育ってきた。あの彼女が長女であり、それ故に身を売るしかなかったように、青蘭は王女であり、それに伴う果たすべき責務がある。

それを拒むことは容易いが、できないように雪蘭に仕向けられてもきた。彼女との約束は青蘭にとっては絶対であり、その上幾人が目の前で、そして知らないところで命を落としていったかしのれない。その贖いの責任は自分にあると青蘭は考えている。

「それも、雪蘭殿との約定か？」

「はい」

問う声にかすかな苛立ちが含まれていることを察しつつも、それ

がなにか見当がつかないまま青蘭は「終わりました、ありがとうございます」と声をかけた。

洗いざらしの髪をたらしたまま、碧柊の傍らに立つ。そんな青蘭を碧柊はちらりと一瞥し、自分の前に座るよう身振り以示した。

「まだ髪が濡れておる」

まだ話の続きがあるのだろう。青蘭はなんとなく浮かない気分で従う。確かにこれだけまだ髪が濡れていれば、頭巾をかぶることもできない。

ようやく東の空から陽射しがあふれ、夏の早い夜明けに世界はどんどん明るく照らされていく。

「姫はなにかにつけ雪蘭殿だな」

「そうでしょうか？」

「そうだ」

自覚が伴っていないことに、逆に呆れたように碧柊が視線を寄越す。まるで咎めるような視線を受けてもその理由が分からず、青蘭はただ困惑する他ない。

「確かに前にも話したな、かようなことを。その時も云うたと思うが、そなたはどうなのだ？」

どうしても物言いが雪蘭として彼女に対していた時のものに戻ってしまう。碧柊はそれを一々改めるのを諦めたらしい。それにほっとしつつも、青蘭は視線を落とす。

「どう、と問われましても……雪蘭のいうことが間違っているとは思いませんし」

「雪蘭殿が云うことならすべて正しいというのか？」

「違います、そういうわけではありません。彼女だって間違っこともあります」

慌てて訂正すると、碧柊の冷やかな眼差しと目が合ってしまう。

「姫は自分でそう判断しておるのだな」

「そう です……同じようなことを、以前にも仰いましたね、そ  
ういえば」



「そうだ」

「苓南れいなんの咎、で？」

確認するように首を傾げると、拳で軽く額を小突かれる。

「きちんと覚えておるではないか　で、吾の云いたいことはやつと分かったのか？」

「はい　多分」

「多分、だと？」

じろりと見据えられ、青蘭はぴくりと肩をすくめる。

「多分？」

碧柊は低い声で繰り返す。

「だって……ここには雪蘭はいません　いるのは、私だけですから」

自信なげに言葉を紡ぐ。それでも視線を上げれば、真正面からのぞきこむような彼と目があつた。どんな表情をすれば分ならず困つたように眉を下げると、彼は小さく吹き出す。

「何故、笑うのですか？」

「いや、別に　はやく髪を乾かせ。置いていくぞ」

「そんな　傍にいてくださると仰つたではないですか」

慌てて碧柊の腕をつかみ、青蘭はそこではつとする。

碧柊も驚いたようだった。

「冗談に決まつておろう」

彼の言うとおりだった。冗談に決まつている。これまでも軽口や憎まれ口は珍しくなかつたはずなのに、なにを今さら動揺しているのか。

「そ、そうですわね……」

さつと手を放し、青蘭は笑つてごまかす。動揺に混乱が重なり、それ以上取り乱さないように平穩を装うだけで精いっぱいだった。

< 続 < >

幌をあげ荷物に凭れて後方に広がる下界を眺めしていると、汪永<sup>おうえい</sup>が顔をみせた。

荷馬車は傾斜が増してきたこともあり、さらにゆっくりと進んでいる。歩いたところで追うのは容易い。

沈んだ様子の青蘭をどう見たのか、再び御者台に誘う。特に拒む理由もなく、青蘭はそれにのつた。

汪永は相変わらず見事な手綱さばきで馬を操る。その隣に腰かけ、頭巾の影から青蘭はぼんやりと彼の手並みを眺めていた。

考えるべきことがあることは分かっているが、一晩考えてみても結局結論は出せそうになかった。

思いは同じところをくるくるまわる。

碧柊にも問われたが、これはあくまで青蘭が自分一人で結論を出さなければならぬことだ。

雪蘭との約束が理由の一つであることまでが間違っているとは思わない。が、約束を守るために決心をするのでは、本末転倒だ。雪蘭の意志はそんなところにはないと分かっているし、それは青蘭も同じ思いだ。

だが、思ってもみなかったことに変わりはない。

雪蘭とてこんな事態まで思い至っただろうか。だが、血筋を伝えていくだけの器に過ぎない王女である青蘭に、雪蘭によってもたらされたあらゆることは先例のないことばかりだった。

すべては雪蘭の亡き父<sup>ちち</sup>紅桂<sup>こうけい</sup>の遺志に基づくらしい。青蘭の父に西葉王位を譲った伯父。

見知らぬ伯父を青蘭は思う。

彼はなにを意図して愛娘を奥の宮の姪のもとへ送り込んだのだろうか。一時は王太子であり東宮でもあった彼が、葉の代々の王女の

あり方を知らなかったはずはない。だからこそ、思うところがあつたのかもしれない。おそらくは青蘭の父には考えもつけなかったようなことを。

伯父が娘に託したものを、姪である青蘭は受け取れたのだろうか。だが、そもそもその彼は自ら王位を捨てたのだ。今、青蘭がしようとしていることと逆ともいえる。

雪蘭の母は東宮につかえる婢だったという。彼女を妻とするために、彼は王位を捨てた。それまで青蘭の母は紅桂と婚約していた。彼が去つたのち、青蘭の両親は結婚し、父が王位を継いだ。

紅桂は王位を捨てたのだ。混乱を避けるために王都を去り、遠く離れた山深い辺境の岑州に移った。

だからと言つて、国を見捨てたわけではなかったのだろう。だからこそ、雪蘭になにかを託した。

伯父は王都で亡くなつたと聞いている。確信はないが、おそらく兄蒼杞あきが絡んでいるのだろう。雪蘭にも、彼女についてきた香露かろうにも直接問うたことはない。そうだとされるのが怖かつたし、そうであつたとしても決してその疑念が肯定されることのないことも悟っている。

だが、それでもその推論は当たっている。そんな強い想いがいつの頃からかあつた。

青蘭は雪蘭の敵の妹であり、彼女自身の従妹でもある。実の兄を疎ましく思い、父に親しみを抱くこともできず、ただひたすら従姉だけを姉のように慕つてきた。その想いに嘘はない。ひとつだけ真実があるとすれば、それだけだ。

雪蘭も実の妹のように大切にしてくれた。そこに偽りのないことを青蘭は知っている。雪蘭の心を疑つたことはないが、それでも青蘭ほどに従姉妹だけがすべてでないことも知っている。

青蘭は自分が王女でなければ誰も傍にいてくれないことを、幼いころから忘れたことはなかつた。

だからこそ雪蘭の期待に応えようと懸命だつた。そんなことをせ

ずとも彼女の心が変わりのないことを承知していながらも、そうせずにはいられなかった。そうしなければ自分自身が安心できなかった。

その一方で、何事につけ優れている従姉と自分を比べて強い劣等感も感じていた。いくら努力しようとして従姉にかなうわけはなく、そんな彼女は誰にも認められ愛される。引き換え自分にそんな価値はない。けれど、そんな自分でも彼女は愛してくれる。

矛盾した思いだが、それはごく自然に長年にわたり青蘭を支配してきた。

同時に雪蘭の敵である兄への憎しみと、彼の妹であるという負い目も知らぬ間に積み重なり、強くなっていった。

だが、今ここで碧柊に求められていることは、それを理由に決めることではない。それも分かっている。そしてそれはおそらく雪蘭の真意であることも。

だからこそ、雪蘭は父の敵を一言も語らなかった。時々言葉少なに懐かしい思い出を語るのみだった。ただそこには親しみと肉親の愛情がにじみ出ている。それはごくごく自然な隠しようのないもので、それ故に青蘭の胸にも響き、蒼杞への憎悪をいっそう煽った。

青蘭はそれらすべてを切り離して決めなければならない。

今こそ、王女として、青蘭姫として自分に出ること、すべきことを見定め、道を選び取らなければならない。

「迷っておられるようですね」

「ええ。あなたも話は聞きましたか？」

「はい」

「私に　できるでしょうか」

「それは誰にもわかりませんよ」

汪永は手綱を軽く引きつつやわらかく否定した。

馬の歩みが遅くなる。少しずつ前の荷馬車と距離を開けるつもりらしい。

「碧柊殿にも同じことを言われました」

そう云って、青蘭は薄く笑う。

「殿下とてご本意ではないのでしょうか　姫さまにこのような重荷を背負わせてしまうような選択は」

「……そうなのでしょうね」

この考えを切り出した時の彼の様子は、とても乗り気とはいえなかった。それでも、これしかないと分かっているのだ。

「しかし、もう殿下お一人の手に負える事態ではないことも確かです」

「そうね　一人では無理だわ」

一人では無理。そう悟ったからこそ、彼はこの提案をしたのだ。力を貸してくれとは言わず。そういわれれば、青蘭は手を貸さざるを得ない。だからこそ、自分で考えるように仕向けてくれた。

「けれど、私でも一人では無理です」

「それは勿論そうでございます　しかし、そうではございません」

「そうね、一人では無理　二人でも難しいわ。もっと手が要る」

「お二人なら可能でしょう」

ふたり、と青蘭は声に出さず呟く。

頭巾の影から隣に座るずんぐりとした丸い体形の男を見る。年のころはいくつくらいなのか。さっぱり見当もつかない。

「まずは岑家の力が必要です」

「ご心配いりません　そもそもそのおつもりで殿下をここまでお連れになったのではないのですか？」

「そうでした　まさか自分が押し出されるとは思いもしなかったけれど」

そう云って、青蘭は苦く笑う。

一人では無理だが、二人なら

すべきことがあり、力を貸してくれる人がいて、自分の力を欲してくれる人がいる。あとは成すか、成さざるか。それだけだった。

雪蘭を想う。

なにがあっても一番大切な人は彼女に違いない。けれど、自分は

“青蘭姫”なのだ。

成すべきことは成すべきだと、そう教えてくれたのは雪蘭だった。  
それを青蘭も正しいと思っている。

< 続く >

その夜も焚き火をはさんで二人は時を過ごしていた。

「寒くはないか？」

青蘭は外套にくるまり丸くなって体を休めている。

明日には峠を越える。ここまできると万年雪をいただく尾根は目前に迫り、頂上付近の不安定な雲行きまでつぶさにみてとれる。

夜にもなると涼しいを通り越して肌寒くすらある。獣を遠ざけるための炎がありがたい。

「少々涼しいですね。でも火がありますから十分です」

青蘭は手をつき顔を少しあげて応じる。その顔に嘘はないようだ。碧柊は「そうか」と頷き、薪を足す。火の粉をあげて弾けるその音に二人揃ってしばらく耳を傾けていたが、ふと思いついたように青蘭が口を開く。

「碧柊殿こそそろそろ疲労がたまっておられるころではありませんか？」

そう云いながら、ゆっくりと上半身を起こす。その拍子に短い髪がざらりと流れた。

「そのようなことはない、が　　なんだ、案じてくれておるのか？」

「はい」

からかうようににやりと笑ってみせたのに、彼女はあっさり肯いた。あまつさえうつすらと笑んでさえている。

碧柊は少々面食らって眉をひそめた。

「……どういっつもりだ？ 気味が悪いな」

「酷い言い草ですね　　素直に受け取れないのかとおっしゃったのは碧柊殿でしょう」

青蘭は苦笑しつつも咎めるように目を細める。それももっともだったため、碧柊は「すまぬ」と率直に詫びた。それにたまりかねた



ように姫がくすくすと笑いだす。

「なにがおかしい」

「だって、おかしいでしょう 私には素直に受け取れと言っておいて、ご自分は如何なのですか？」

揶揄する声には苛立ちも責める気色もない。呆れたように、そしてこれまでに見せたことのないなにかを滲ませて、微笑笑している。碧柊に向けられる眼差しには逆にからかいかえすような光さえあった。

碧柊はそれを受け止め損ね、不自然に視線を逸らす。

「しかし　そなたが素直だと調子が狂うというか……」

「でも、素直になれとおっしゃったのは碧柊殿ですよ」

「だがな……」

云い募る碧柊に、小さく笑いながら青蘭はいざり寄る。気がつけば少女は目の前にいた。反射的に身を引けば、その分彼女が距離を詰める。

「何の用だ？」

気圧されながらも往生際悪くややきつい口調で問い詰める。

少女は艶然と微笑むと、王太子の首元を両手で驚掴みにした。

「お返しです」

悪戯つぼく眼を細めたかと思うと、力任せに引きよせて唇を重ねる。束の間触れあっただけの淡い口付けだった。

「？」

碧柊が目を白黒させていると、青蘭は肩をすくめてちらつと舌を出してみせた。

「ざまあみる、です」

楽しくて仕方ないように笑いつつも、その頬は熱を帯びたように次第に赤くなっていく。わけが分からないままに魅せられ、碧柊が思わず手を伸ばそうとすると、さっと身をかわして後ずさる。

「おやすみなさい、碧柊殿　明日はいよいよ関ですから、気を引き締めなければいけませんわね」

「 ああ 」

軽拳を咎めるように見据えつつも、青蘭はあくまでにこやかだった。

清婉な笑みを残してもといた場所に戻ると、今度こそ背を向けて丸くなる。

碧柊は化かされたような心地で取り残され、小さな背中が規則正しい呼吸を繰り返すまで呆然と見つめていた。

翌朝も青蘭はいつもと変わらない様子だった。

碧柊は態度を決めかね、流されるままに結局いつものように対した。

荷馬車の荷台で揃ってぼそぼそと朝食にありつきながら、碧柊は青蘭に注意を促す。

「 なにがあつてもそなたはまつすぐに西葉領に向かえ 」

「 なにがあつても、ですか…… 」

「 そうだ。そなたになにかあれば、そこですべて終わりだ。なにを犠牲にしても生き延びる。それがそなたの義務だ 」

彼女は分かっていると云いたげな顔をしつつ、素直に受け入れることはできないようだった。口を開閉し、結局苦い顔で言葉を飲み込んでかすかに頷いた。

「 関の兵は20人前後だ。こちらは武器を扱えるものは3人。そなたもそこそこ扱えるようだが、決して応戦しようとするな。汪永おつえいに従い、ともかく関を抜けてまつすぐに西葉しんに向かえ。そこまで岑家の兵が来ている筈だ 」

そのように手筈も整えてある。ひたすらまつすぐに進めば、さほど労せずとも岑家の懐へ逃げ込めるはずだった。

「 分かっています。けれど、碧柊殿も私との約束を忘れないでください。関の守備兵を相手に勝つ必要はないのですから、確実に逃げ延びてください……でなければ…… 」

「でなければ？」

碧柊の問いかけに青蘭は一瞬逡巡をみせたが、最後に決意したようにまっすぐに視線を返した。

「私一人では無理です。東葉の方々の力を乞うには、あなたの存在が必要不可欠です」

その言葉は切々と響いた。碧柊はいったん眼をそらしたが、じきに真摯な眼差しを返した。

「吾に望むのはそれだけか？」

青蘭は目を瞠つたのち、躊躇いながら小さく頭を振った。

「……そばに、いてください」

「それは、臣としてか？ それとも盾としてか？」

碧柊の眼差しは真摯だった。傍にいたといった言葉に嘘はない。たとえどのような形であつても、終世その誓いは絶対だった。

だが、それにも在り方がいくつかある。彼女の望みに従うまでだが、彼には彼の望みもある。それが一致すれば幸いだが、そうとは限らない。

青蘭は躊躇うように視線を彷徨わせる。

碧柊はただじつと待った。

やがて、青蘭は俯いたまま消え入るように囁いた。

「……私の盾として」

「それを吾に望むか？」

それが彼女の意志ならば、彼にはもう自分をとどまらせる理由はなくなる。それだけにまだ彼女が迷っているのなら、待つ必要がある。自分のためにも彼女のためにも明らかにする必要があった。

それを察したのか。青蘭の顔は次第に赤く染まっていく。膝の上に置かれた両手は、指が白くなるほど強く握りこまれている。

ちらりと視線を泳がせる仕草も見せたが、碧柊がそれを阻む素振りを見せると観念したように小さく頷いた。

「はい……」

もつとなにか言いたげに口をぱくぱくさせていたが、結局言葉に

はならないようだった。

耳朶まで赤く染めて黙り込む。緊張しているのは明らかだった。だが、それはこれまでのように彼を拒むものではなかった。肩が細かく震えている。

彼の言葉を待つように、じつとうつむいている。

碧柊はわざとだらしなく結わえた髪の毛、こぼれかかってくるのをかきあげる。

なにか云おうとしても、言葉にならないのはこちらも同じらしい。告げるべきものを声に出来ないまま、距離を詰めても彼女は逃げようとはしない。

そつとためらいがちに抱き寄せれば、身を強張らせながらも素直に預けてくる。

白皙の頬が朱に染まっている。頬ずりしたくとも、無精髭にためられた。

かわりにさらに強く抱擁すれば、たまりかねたように小さく吐息が漏れ、碧柊の耳に触れた。

そつと頤に指をかける。ゆっくりと上向かせれば、耐えかねたように伏せ目がちにする。そつと朱唇を啄ばめば、観念したようにぎゅっと目を閉じる。子供のような表情にふと笑みが浮かび、同時にどうしようもない愛しさがこみ上げてくる。

何度も軽く唇を重ねていると、ぎこちなくか細い腕が碧柊の首に回される。

それを合意とみなし、碧柊はさらに深く唇を重ねた。

< 続く >

火のはぜる音を、夏の夜に心地よく耳にする機会があるとは思ってもいなかった。

日中過ごしやすくなった分、夜には冷え込む。冷涼な空気はややもすると凍えるほどだった。

外套にくるまり火のそばにいればそれも和らぐ。それでも火の当たらない背は依然寒くさらに膝を抱えて丸くなると、それに気づいたように彼が口を開いた。

「寒くはないか？」

問う声は短い。青蘭はそれに答えた後、彼がくべた枝がはぜながら焔に包まれていくのをぼんやりと見つめていた。

はじめて会ったところから、彼の青蘭への細かな配慮は変わらない。れいなん苓南の筈でもそれは誰に対してもそうだった。人の上に立つ分、その様子をよく見ているのだろう。それは彼の立場であれば必要なことであり、特に青蘭にだけ優しいわけではないとずっと思っていた。そうではないらしいと悟ったのは、峠に向かつてからのこと。それも身分を明かしてからのそれは傍目にも明らかだと知らされ、正直に言えば単純に嬉しくはなかった。青蘭が西葉王女だからこそ、なおいつそう大切にされるかと思うと心中複雑極まりない。もし自分が真実雪蘭だったら、彼の態度が変わることはなかっただろう。何故そう思うと悲しくなるか考えないようにしてきたが、いったん理由が明確になりはじめればすべてを悟るのに時間はさほど要しなかった。

その理由はありふれた単純なものだった。だからこそ、自分自身が理由でないことが哀しくなるのだ。それでも、彼を引きつけておただけの価値を自分は持っている。自分が王女であるということだけで十分に縛りつけておける。彼は言葉通り終世傍にいてくれるだ

ろう。それでなくとも誠実で義理堅い人柄なのだ。たとえ他に心惹かれる女性が現れたとしても、青蘭を裏切るようなことはしないだろう。それができる人間ではない。

それでも構わないと思ってしまう。傍につなぎとめておけるなら、それでも仕方ないと。それは彼の实直さに付け込むことになり、本当に彼を思うならそんなことをすべきではない。

盾として選ばずとも臣として仕えてくれるという言葉に嘘はないはずだ。そうすれば、彼はやがて己の心になう女性を見つけ、幸せになれるだろう。本当に彼を想うなら、忠誠以上のものを求めるべきではない。個人としての幸福を願わなければならぬ。

けれど、本当にそんなことができるかと己に問えば、首を振るしかない。彼があのような眼差しを他の女性に注ぎ、口づけるのだと思うと、それだけで絶望的な気持になる。

他人に渡すなら、どんな手段をつかっても縛りつけておきたい。

そして、それは青蘭には可能だった。彼が自分の傍にいてくれるなら、その理由はなんでもいい。国のためでも、野心のためでも。

それは同時に“葉の女王”としての青蘭にとっても必要なことである。両国を一つにまとめ上げるならば、夫でもある盾として最もふさわしいのは碧柊だ。二つに分かれた王家の末裔同士であることが、最も適している。青蘭の次の代のことを考えてみても、それは重要なことだった。両王家の血を引くものが登極してはじめて、ことは完成する。

つらつらと考えて、はつとする。すべて言い訳じみている。つまるところ、傍にいてほしい、それだけだった。

碧柊は本気で葉をまとめ上げ、平和にしたいと考えている。だからこそ、青蘭を欲してくれている。そしてそれは青蘭自身の願いでもある。そのためには二人で力を合わせるのが最善だ。その上、青蘭の想いは彼にあるのだから、幸運だったと思えばいい。彼が同じ気持ちでなくても、大切にはしてくるだろう。それだけでも十分だと思わなければならない。そもそも結婚は王族の務めなのだから、

そこに感情を持ちこむのが間違っている。

青蘭に出来ることがあるとすれば、賢明な女王となり、そのためにも良き伴侶であることだ。彼のために出来ることがあるとすれば、それが最も道理にもかなっている。

国のために女王となるのか、彼をつなぎとめるために女王となるのか。その区別はひどく曖昧だった。

彼の望みをかなえるために女王となれば、青蘭の望みもかなう。それは間違っているのだろうか。歪なものを感じつつも、青蘭はそれを肯定することもできない。

息苦しいような想いで顔を上げれば、碧柊の端正な面が視界に入る。わざと無精髭を生やし適当に髪を結び、だらしなく服を着こなして荒んだ風に流れ者を装っているとはいえ、それ以上に疲労の影が濃い。碧柊自身にももう他に打つ手がない。

帰るべきところを失い、追い詰められているのは同じだった。碧柊の方がさらに厳しい立場におかれている。憂いはあるだろうが、それを彼は青蘭には見せなかった。それは王太子という立場にあるものの矜持であり、責任でもあるのだろう。

これまでそんな風に彼のことを考えたこともなかったことに気づき、青蘭はそんな自分にはっとした。

「碧柊殿こそ、そろそろ疲労がたまっておられるころではありませんか？」

自然と気遣う言葉が口をついて出ていた。

青蘭の珍しい言葉を茶化そうとするのも気に留めずに鷹揚に応じれば、戸惑いを見せる。やはり気遣われるのには慣れていないらしい。それに思いがけない青蘭の態度にも当惑しているのだろう。これまでさんざん彼の態度や行動に翻弄されてきたことを思うと、おかしいのと同時に溜飲が下がる。

調子づいて青蘭から軽く唇を押しつけられ、さらに動揺している。

「ぞまあみる、です」

ようやく勝てたと思いつつも、同時に恥ずかしさもこみあげてくる。ここで動揺を見せては逆転されてしまうかもしれない。青蘭は波立つ心中を隠すようにわざと微笑んで、そのまま撤退した。

翌朝もいつもと変わらない態度でいれば、碧柊は戸惑いながらも結局態度を決めかねたようだった。

幌馬車の荷台で、幌を下ろしたまま向かい合って朝食をとる。焼いた麵麩に干し肉をはさんだだけの簡単なものだった。これから関に向かうことを思うと緊張で食欲が萎えるが、そんなことを言っている場合ではない。

青蘭が食べ終わるのを待って、碧柊はなにがあっても先に逃げるように云った。

予想していた言葉だったが、素直に納得できるわけもなく、結局渋々頷く代わりに彼に念を押さざるを得なかった。

「分かっています。けれど、碧柊殿も私との約束を忘れないでください。関の守備兵を相手に勝つ必要はないのですから、確実に逃げ延びてください……でなければ……」

「でなければ？」

碧柊の問いかけに、青蘭は逡巡する。その先に言葉をつなげば、自分の心情まで吐露してしまいそうだった。

それでも彼は言葉を待っている。告げるべき言葉を口にしなければならなかった。

「私一人では無理です。東葉の方々の力を乞うには、あなたの存在が必要不可欠です」

それは本当のことだった。青蘭の心のうちとは関係なしに、事実としてそうだった。隠すべきことのない言葉だったが、彼はいったん眼をそらした。何か想う風に視線を巡らせ、じきに真摯な眼差しを返してきた。



「吾に望むのはそれだけか？」

まるで秘めた想いまで見透かされたような言葉だった。

青蘭は目を瞠ったのち、躊躇いながら小さく頭を振り上げた。言葉にしなければ伝わらない。

「……そばに、いてください」

「それは、臣としてか？　それとも盾としてか？」

最も恐れていた言葉だった。

それを自ら問わずにすんだことにほっとしながらも、もう誤魔化しようのないことも悟る。彼は青蘭の望みに従ってくれるだろう。

彼の真意に関わらず、それが自分の務めだと彼は考えているはずだ。

口にした瞬間に失恋するのも同然だった。

青蘭は切ない辛さを押し殺し、告げる。それは相手には通じない告白だった。

「……私の盾として」

「それを吾に望むか？」

夫として、盾として、女王の伴侶として、それを彼に求める。

泣き出したい衝動を青蘭は必死にこらえた。体が震える。

やはり彼は拒まないのだろう。青蘭がそれを本意だと告げれば、彼に拒む理由はない。それは同時に青蘭が女王として立つことを呑むことであり、そのためにどんな形でも支えとなることが彼の務めだった。

思う相手が自分を受け入れてくれることが、これほど哀しいことだとは思わなかった。林泉の庭で遭遇することもなく、なにも知らないまま婚儀が済んでいればこんなことで思い煩うこともなかったはずだった。

耐えかねて視線をそらしたが、逃げることを許さない彼の気迫に押し戻される。

「はい……」

やっとの思いで頷いた。それ以上の言葉を継げば泣き出してしまいそうだった。

いつそ拒んでほしい。だが、そうして欲しくない。

相反する想いに翻弄されそうになるのを、ぐっと堪える。あとは返答を待つだけだった。

俯いて言葉を待っていれば、やがて遠慮がちに抱き寄せられる。

やはり彼は青蘭を拒むはずがなかった。青蘭は静かに落涙し、諦めてその腕に身をゆだねる。

眦があつくなる。それを堪えていると、さらに強く抱きしめられた。嬉しさはなかった。ただひたすら悲しいだけだった。

こぼれるものを堪えかねて、小さく吐息をもらす。さらに滴が頬を伝う。それを彼の肩に押し付けて拭う。

やがて顎に指をかけられ、上向かせられる。必死に涙をこらえていると、唇が重ねられる。もうこれで後戻りはできなくなった。

泣き出すかわりに腕を彼の首に回す。それまで優しく啄ばむようだった接吻が深くなり、さらに強く抱擁される。涙が次々とこぼれて頬を伝う。それをどうとったのか、彼は優しく唇で涙をすくい取ってくれた。

< 続く >

朝から雲行きは怪しかった。

いつもは尾根のあたりにとどまっている雲が陰鬱な鈍色にびいろに低く垂れこめ、峠のあたりまで覆い尽くそうとしている。

青蘭は頭巾の影からそれを不安な思いで見つめた。

碧柸は騎乗して先に行く。その後には5台の幌馬車が続く。殿は汪おう永配下の二人組がつとめている。

青蘭は先頭の荷台にいた。手綱を取るのは汪永で、青蘭は彼の背後の幌の陰に隠れるようにして膝を抱えていた。

荷台はひどく揺れる。揺れるたびに手元の小太刀の柄を握りしめてしまう。

「そんなに緊張なさる必要はありませんよ」

背中を向けたままにもかかわらず、見透かしたように声をかけられ、青蘭は思わず目を瞠る。幌の陰からそつと顔をのぞかせると、汪永はそれすら分かつていたように笑みを浮かべてちらりと振り返った。

「大丈夫です、お任せください」

青蘭はわずかに頭巾をずらし口元に笑みを浮かべてみせた。

碧柸も時々馬をとめては一隊が追いつくのを待ち、青蘭が顔をみせると小さく頷いてみせた。

昼前に1羽の小鳩が汪永のもとへ飛んできた。

彼は手袋をはめた指先にそれを止まらせると、小さく口づけて朗らかに笑った。

「このまま進みましょう」

青蘭はそれに強張った笑みを浮かべた。

碧柸も鳥に気づいて馬をとめていた。

汪永は落ち着いた表情で頭を下げてみせる。碧柸も黙ってそれに頷き返し、幌馬車と並行して馬を進めた。

青蘭はついつい不安で彼の方を見てしまう。その度に力づけるような優しい眼ざしが返された。青蘭は口元だけ微笑して肯き返しながらも、頭巾の陰でついつい潤みそうになる眼を見られずにすむことをほっとしていた。

汪永は馬を進めながら、峠を越えてしまえばその向こうに西葉側の関があり、そこで岑家の手勢が控えていると説明した。

万が一、東葉側の関で不穏な成り行きが見られれば、青蘭は馬にまたがってともかくまっすぐに進むよう云いきかされていた。

両国の関の間の道はじきにきりたった崖沿いにかわるらしい。馬ごと滑落しないようにと、うんざりするほど念を押したのは碧柸だった。

そうこうしているうちに、道はいよいよ細くなり両脇の崖は切り立ったものとなっていく。

吹きつける風は次第に強くなり、空模様はいよいよ怪しくなってきた。今にも降り出しそうだった。

先行きの不安を煽るような雲行きに青蘭は、緊張と気鬱を吹き飛ばすように深呼吸した。その時、坂道の先に石造りの建物が見えてきた。

青蘭は腰帯に小太刀をさし、柄をいったん抜いて戻した。

「そう殺気立つてはいけませんよ、殿下。何事もなければこのまま通過するだけなのですから」

「ええ」

青蘭は小さく呟くと、汪永の隣の御者台に腰かける。

荷台から青蘭が移ったのに気づくと、碧柸はそちら側へ馬を移動させてきた。

「なんだ、珍しく緊張してるのか？」

からかうような口調に、青蘭は思わず苦笑する。少し頭巾をずら

してその影からわざと睨みつけながら、きつぱりと首を振ってみせる。

碧柘はにやりと口の端を歪めた。

「その意気だ　ともかく滑落だけはしてくれるなよ」

まだ云うのかと呆れたが、口に出すわけにもいかず小さくうなずく。それでもなにやらまだ心配そうだったが、彼のそんな様子が青蘭の緊張と不安を和らげてくれた。

一行が近付くとすでに関の柵は閉ざされていた。

切り倒した原木を並べただけの急ごしらえの柵だった。これまで柵など不要だったのだろう。両国の戦いは山の背北側の平野部で繰り返され、急峻な峠道ばかりの南部で行われたことはなかった。

柵の前には事前に報告の合ったとおり20人前後の兵が並んでいた。

武装は通常だが、すでに半数のものが抜刀している。威嚇目的だろうが、隊商相手にずいぶんともものしい。

明柘は西葉との国境線を警備するためそちらへ兵を集中しているという。峠の関の兵員はあくまで見張りに過ぎない。見れば、詰所の裏の崖の上には狼煙台があり、その傍らには人影があった。

「この天候では狼煙を上げてもかいがあるかどうかは微妙だな」

ぼつりと碧柘が呟いた。彼は馬から降りることもなく平然としている。それどこか冷静に状況を見定めているらしい。

何度も戦場に出て指揮を執ってきているのだから、このくらいで動じていてはつとまらないのだろう。それは分かっている、実際に目の当たりにすると酷く頼もしくうつる。

汪永が手綱を引き幌馬車をとめると、後続もそれに倣う。全体が止まったのを確認してから汪英は手綱を置く。

関所の隊長が一步踏み出す。

汪永は御者台から降りる際に鷹揚な笑みを見せ、ゆったりと近寄

っていく。

碧柎はゆっくりと青蘭の座る御者台のすぐそばまで馬を寄せてきた。

「なにかあつたらじきにこれに乗り移れ。柎はなんとかして開ける」  
声を押さえた低い囁きに、青蘭はほんのわずかだけ頷いてみせた。  
汪永は関所の警備隊長となにやら話し込んでいるようだった。それが緊迫したものかどうかもわからない。

なにかが手に当たり、青蘭ははっとする。雨粒だった。  
それが合図となったわけではないが、検問がはじまった。

汪永が隊長と抜刀した部下を案内してまわる。一台ずつ幌を上げ、一つずつ荷を明らかにしていく。その間にも雨脚は急激に強まり、すべてが終わるころには碧柎も青蘭もずぶ濡れになっていた。

そう遠くないところで雷鳴も轟き、光が空を横切る。

汪永が隊長とともに戻ってくる。

なんとか無事に終わりそうだと安堵しながら、碧柎を見ると目があつた。彼は泰然としていたが、青蘭と目が合うとかすかに目を眇めて小さく首を振った。

まだ油断するなということなのか。

青蘭は水を吸って顔に張り付く頭巾をずり上げ、油断なく見回す。雨が顔にはじけ、視界が奪われる。

汪永達は雨など気にならない様子でゆっくりと戻ってくる。汪永が雷雨に負けじと声を張り上げて何やらしきりに話している。

恰幅のいい隊長は鷹揚に頷き返しつつ、先頭の幌馬車の後部までさしかかるとさりげなく腰に佩いた太刀の柄に触れた。

それはごく自然な動きだったが、ほぼ同時に青蘭は碧柎に腕を掴まれていた。

「っ！？」

ぐいと強引に引き寄せられ、馬に乗せられる。体勢を整える間もなく手綱を押しつけられる。それを彼女がしっかり受け取ったかどうかを確認することもせず、碧柎は馬から飛び降りていた。

振り落とされないように馬の首にしがみつinaながら、青蘭は振り返る。

ちょうど碧柎が隊長と切り結んだところだった。剣劇の音は雷雨に掻き消される。

2合、3合と切り合う。体格で劣る碧柎だが、互角に渡り合っているようだった。

青蘭がぎゅっと噛みしめる。手綱を握り、体勢を立て直す。

柎の前に立ちはだかつていた残りの兵たちも、一斉にこちらへ向かってきている。

守備態勢を取り遅れた青蘭の前に、あの二人組が立ちはだかり応戦する。

青蘭も邪魔な頭巾をずりおろし、小太刀を抜き放った。

二人組は背中合わせに戦い手際よく兵を片づけていくが、多勢に無勢の劣勢に変わりはない。

武器を手にした騎乗の青蘭のもとにも二人の兵が向かってくる。左右からはさまれる形になり、青蘭は一瞬迷ったが、思い切り鎧で馬の腹を蹴った。

利き手に握った太刀で浴びせられる太刀を受け流す。あまりの力に腕がしびれたが、なんとか太刀を取り落とさずにすんだ。

同時に足に灼熱感が走る。急に馬を走らせたため反対側からの直撃は避けたが、切っ先が脛脛を切り裂いていった。

「早く行けっ！！」

雷鳴がとどろく中、辛うじて声が響く。それは碧柎のものだった。振りかえりたいたいの堪え、青蘭は膝に力を入れて馬の体をはさむ。阻むものいなくなった柎を、自力で開かなければならなかった。

< 続く >

閉ざされていたはずの柵の扉が開きつつあった。

どうやら関所の建物の陰に味方となるものが二人潜んでいたらしい。彼らの手で鍵が壊され、少しずつ開かれつつある。

青蘭は柵の前で馬を止め、興奮気味の首筋を叩いて宥めてやっていた。

「後ろっ！」

誰かが叫んだ。青蘭は反射的に小太刀を構えて振りかえった。急に馬首を返すような器用な真似はできず、不自然に身をねじるしかない。

追いつがってきた東葉兵が切りつけてくる。思い切り振り下げて辛うじて切っ先を弾き飛ばすのが精一杯だった。

馬術に長けていない青蘭は、下馬した方が動きやすいと判断して敵とは反対側に下りる。

それも既に先読みしていたように、兵も馬の反対側へ回り込んでくる。

夕立のような雨に足元はぬかるみ、轍の跡を泥水が川となって流れていく。

青蘭はともかく柵の方へ逃げようとしたが、その先を塞がれる。援護は期待できない。一人で逃げ延びるしかない。

特に大きな体格の男ではなかった。だが、兵としてここにいる以上、鍛錬は積んでいるはずだ。西葉の兵と比べ、東葉の兵は訓練が行き届いている。青蘭がかなうはずもない。

身分を名乗ってみたところで、それを彼に判断できるとは思えない。

青蘭は覚悟をきめて小太刀を構えた。力で勝るはずもなく、剣技においても同様だった。油断なく相手を見据えつつ、必死に考えを巡らせる。



後じさりつつ、馬の陰に回りこむ。その拍子に石に足元をとられ、尻もちをつく羽目に陥ってしまった。その隙を付け込まれないはずがない。

それでも太刀は手放さなかった。もう一方の手は泥濘を探る。

兵はわざといたぶるように悠々と近づいてくる。青蘭はきつと臍を決し、空いた方の手に泥を握りこんだ。いつでも振るえるように小太刀の柄をしっかりと握る。

ぎりぎりまで逃げ出したい衝動を堪え、ひたすら相手を睨みつける。

緊張のあまり、もう雨の音も雷鳴も聞こえない。

冷静に距離をはかる。

兵はいつでも切りつけられるように太刀を構える。青蘭はそろそろといつでも立ち上がれるように体勢を整える。

華奢な少年が、まさか髪を切った男装の少女だとは思えないのだろうか。

細い腕に貧相な体つきでは万が一にも勝ち目がないのは、彼にとっても明らかだった。

にやにやと酷薄な笑みを浮かべつつ近づく。その距離を目測する。男は太刀をこれみがよしにかざし、距離を詰める。一突きで青蘭の体を地面に縫いとめられるほどに迫った。

青蘭はぐつと唇をかみしめると、思い切り勢いづけて横に転がり、その際に手にした泥を兵の顔めがけて力いっぱい投げつけた。

狙い通り泥が顔に命中する。青蘭は転がって脇によけると、すぐさま立ち上がり、泥に視界を奪われて膝をつく男の首を小太刀で刺し貫いた。

肉を断ち、筋を断つ感触がそのまま伝わってくる。

顔を歪めつつ、倒れこむ男の背に足をかけて太刀を引き抜く。

切断された血管から血が噴き出したが、激しい雨にたちまちのうちに飲み込まれていく。せりあがるものを堪え、青蘭は太刀の血脂を男の外套で拭くと立ち上がる。

柵の扉はすっかり開かれ、その向こうから地響きのような蹄鉄の音が伝わってきた。

じっと目を凝らせば、猛烈な降りの雨しぶきで白くかすむ視界の向こうに、いくつもの騎影が見える。一瞬錯覚かと己の目を疑ったが、じきにそれは確かな輪郭を持って現れた。

「援軍よー!!」

力限り叫ぶ。雷雨は激しさを増すばかりで、青蘭の高く澄んだ声はかき消されてしまう。

青蘭は雨しぶきの向こうに必死になって碧柎の姿を探した。

同時に痛み感覚が戻ってくる。立っているだけで足の痛みに気が遠くなりそうになる。髪を縛っていた布をほどき、膝の下できつく縛って止血をはかる。

碧柎は二人を相手に戦っている最中だった。

青蘭は一瞬握った小太刀を見つめる。足元に横たわる屍。それはもしかすると自分だったかもしれない。殺すか殺されるか。今はそれだけで腹を括る

戦闘はあちこちで行われていた。多勢に無勢で旗色は明らかに悪い。もうすぐそこまで援軍は迫っているが、間に合わないかもしれない。常に紙一重なのだ。

幸い誰も青蘭には注意を払っていなかった。

小太刀をしっかりと握って駆けだす。碧柎と対峙しようとしていた3人目の背に突撃し、刃を突き立てた。

不意に一人が倒れたため、碧柎と対峙していた二人の兵も気をとられる。その隙に碧柎は正面の一人を斬り伏せた。

そのままくるりと踵を返し、もう一人とも切り結ぶ。そうしながら眼の端にずぶ濡れの少女の姿をとらえていた。

「逃げると云っただろう!!」

「援軍です!」

叫び返ししながら、青蘭に気づいて斬りかかってきた兵と切り結ぶ。刃こぼれがし、衝撃に腕がしびれる。

「莫迦、まともには切り合うな。逃げる!!」

しかし逃げれば背中を斬りつけられる。

それは互いに分かっている。青蘭は苦笑しながら口先だけ詫びる。  
「申し訳ありません　それも難しいようです」

さらに激しい斬撃を受け止めきれず、切っ先が頬をかすめた。痛みが走るが、躊躇っている余裕はない。

また泥を用いてやろうかとも思ったが、その猶予はない。次に攻撃を受ければ太刀が折れるか、防ぎきれずに一刀両断にされてしまいかもしれない。

青蘭は間合いを詰められないように後退し続ける

一方の碧柊は残る1人も斬り捨て、青蘭のもとへ駆けつけた。

「顔に傷なんぞこさえよって」

「お気に召しませんか？」

「当然だ　花の如き顔かはんせを如何心得る」

軽く叱りつけながら、碧柊は踏み出すと切り結び、次の攻撃では見事に胴を薙ぎ払った。

そのまま倒れこんだ男の体は、泥のなかに沈む。

それを青蘭は複雑な心地で見つめる。

「　お見事でございます」

「姫もなかなかの腕前でいらっしやる」

血指に汚れ刃こぼれのした太刀を拭くと、次いで青蘭の頬に滲む血を拭ってやる。だがじきに新たな血がにじみ、碧柊は眼を眇めた。いつしか雨脚は和らいでいた。そこへ援軍が到着する。劣勢はあつけなく優勢に転じた。

呆気なく片がつき、碧柊も青蘭も太刀をおさめた。

「お二人ともご無事でございましたか」

よろよると近づいてきたのは汪永だった。彼も奮闘していたらしく、あちこち服が破れ血もにじんでいる。

目ざとく青蘭の足に気づくと、「お怪我を？」と眉根を寄せる。

それで碧柊もようやく気付いたらしく、顔をしかめる。

「じきに手当てを」

「大丈夫です。さほど深い傷ではありません」

痛みをこらえて笑ってみせたが、お構いなしに碧柊に抱きあげられてしまう。

「へ、碧柊殿？」

「汪永、馬車を動かさせ。はやく姫を岑州へ。傷痕が残ってはいかぬ」  
「そうでございますな」

汪永は奮闘の興奮の余韻もあつてか、珍しく勢いづいたまま幌馬車を動かすように声をかけていく。

碧柊は青蘭を腕に抱いたまま、最後尾の馬車に向かう。

「歩けます」

青蘭は下ろしてくれと抗おうとしたが、碧柊は意に介さない。

「碧柊殿」

やや語気を荒げて抗議すれば、じろりと冷やかな一瞥が返ってきた。

「吾は姫にとにかく逃げるようにお願ひ申し上げたはずだが。それをお守りくださらなかったのかどなたかな　それに、この傷はあなたお一人のものではない。これ以上その白い肌に傷跡を残されてはたまらぬ」

にやりと口の端を歪められ、青蘭は反射的に頬を染める。

「……もう、そのいやらしい言い方はいい加減よしてください」

「吾も単なる男に過ぎぬ故な」

悪びれる様子もなく断言されると、何故かばつの悪い想いをするのは青蘭の方だった。

おとなしくなった青蘭をこの五日の間、彼女の寢床でもあった荷台の後部に横たえようと、碧柊は馬車を出すよう合図した。

あらかた現場を片づけた岑家の兵が、碧柊と青蘭のいる隊列の後部を指してやってくる。

荷台に乗ろうとしていた碧柊は、ふと何かが気になったように振り返り、眼を瞠った。

崖の上の狼煙台にいたる石段に、人影があつた。そこへ岑の騎兵がやつてくる。そのなかに弓を携えている者を見つけると、素早くその人影を射るよう命じた。いずれこの峠の関が破られたことは知れ渡るだろうが、少しでも遅いにこしたことはない。

じきに矢が放たれた。それは見事にその背に命中し、火を手にしていた男は狼煙台に達する前に倒れ伏す。

ほつと息をついたのも束の間、なにか得体のしれない地響きが崖の上から聞こえてきた。

「なんだ？」

碧柊はその場にとどまり、音の源を探すように視線を巡らせ、じきに顔色を変えた。

峠道をふさぐ目的で、崖の上に仕掛けが施されていたらしい。それを射られた男が作動させたのだろう。土煙をあげながら大小さまざまな岩が急斜面を転がり落ちてくる。

「落石だつ、皆、ここから離れろっ！！」

碧柊の大音声に、青蘭も何事かと荷台から身を乗り出す。轟音はその耳にも届いていた。同時に馬車の歩みが速まる。

「碧柊殿っ！！」

青蘭は声の限りに叫んだが、あつという間に落石に飲み込まれてしまった。

<続く>

さきほどまでのあれだけの雷雨の後にもかかわらず、土埃がもうもうと立ちこめる。

青蘭はそれに目を細めながら、未だ止まらない馬車の荷台から飛び降りた。着地に失敗する。頭をかばうようにして転がり、なんとか足をすりむくだけですんだものの、泥濘のせいで全身泥だらけになっっていた。

「碧柊殿!!!」

必死に名前を連呼しながら駆け寄ろうとしたが、その手前で下馬した誰かの腕に阻まれてしまう。

「放してっ、碧柊殿が!」

青蘭は身を擦って抗おうとしたが、しっかりと背後から抱きすくめられて動きを封じられてしまう。

「まだ、駄目です　あなたまで御身を危険に曝すおつもりですか、青蘭殿下」

冷静になるようにといくら云い聞かせられても、まるで耳に届かない。

ともかく放してと叫びながら必死に逆らい、捕えられた腕に爪を立てて抗った身を擦って自分を捕えた男を睨みつける。このような時なのに、まるで無風の湖面のように深く静かな眼差しが青蘭を見つめていた。

「　放しなさい。この身に触れることを許した覚えはありません」  
冷やかに命じると、ようやく束縛を解かれる。

青蘭をとらえていた男は一步下がると恭しく頭を垂れ、「申し訳ありません」と短く詫びた。

その間に他の者たちが馬から降り、落石現場の方へ近寄っていく。それ以上石が落ちてくる気配はなかった。

青蘭は頭をさげたままの男には一顧だに与えず、現場へ駆けつける。

すでに土埃はおさまり、大小様々な石が狭い峠道をすっかり塞いでいた。

人為的な落石だった。

青蘭は絶望的な心地で見つめる。重なり合った岩の間から馬の脚がのぞいていた。

苓州の州兵たちはこれ以上落石の恐れのないことを確認すると、救助にとりかかる。

青蘭は動き回る兵たちの間に、必死になって一つの姿だけを求める。

「まずはこっちだ！」

膝まづいていた兵が叫び、人を集める。青蘭もそれにつられるように近寄った。

人を押し潰すほどではないが、十分凶器となり得る大きさの石が転がり、その間に倒れ伏した人間が一人。ぐったりと投げ出された四肢や体を大小様々な砂礫が覆っている。それを払いのけ、兵がそつと慎重に抱き起こす。仰向けにされたその額には血が流れ、黒髪がべったりと嫌な感じに濡れていた。

「碧柊殿……」

呟く声はかすれていた。嫌な具合に喉が乾く。からからに干上がった口内は、ねばりつくように開きにくい。

取り巻いている兵たちを押しつけようとすると全身泥だらけの小柄な人物に、彼等は訝しげな視線を注ぐ。だが、後方から青蘭をとらえていた男が何事か叫ぶと、さつと表情を改めて脇へ退き道を開けた。

膝をつき頭を垂れる兵たちにかまわず、青蘭は負傷者を抱きかかえた男に問う。

「脈はしっかりしておられますが、意識がありません。怪我の具合は医者にみせなければ何とも申し上げようが……」

碧柎はまったく意識がないようだった。前頭部を負傷しているらしく、抱きあげられた拍子に血潮が逆流し、その無精髭に覆われ泥にまみれた顔をさらに汚していく。

青蘭はその傍らに膝をつき、そっとその頬に触れた。まだ温かく、胸は浅く上下している。今はまだ。

振り返れば、兵たちはまだ頭を垂れたままだった。頬が熱くなるようだった。

唇をかみしめ、立ち上がる。昂然と顔をあげて冷やかに告げる。

「呑気になにをしているのです。さっさと碧柎殿を運んで手当を  
残りの者は他の者の救出に当たりなさい、早く！！」

「はっ」

兵たちは短く答え、急いで救出活動を再開した。

意識のない碧柎の体は、4人に担がれて慎重に運ばれていく。

動悸が酷く、今にも気が遠くなりそうだった。

そこへ先ほどの男がやってきて、青蘭の前で膝を折った。他の兵とは明らかに出で立ちが異なる。ここまで指揮を執ってきたのは彼なのだろう。

「お迎えに参上するのが遅くなったばかりにこのようなことになり、  
申し訳ありません」

「あの雷雨では仕方ないでしょう。済んだことはともかく、一刻も早く碧柎殿の手当てを頼みます」

「承りました。恐れながら青蘭殿下にも治療が必要かと」  
足の痛みが三度疼きだしたことに気付き、青蘭は深々と息をついた。

「そうですね」

歩きだそうとするが、ひどく体が重い。だるさとも、ひどい眠気とも、痺れともつかない何かが急速に募っていく。視界がぶれると思つた次の瞬間には、なにも分からなくなっていた。



青蘭、あなたの髪は本当に極上の絹糸のように艶やかで滑らかで、こうして撫でているだけでうっとりしてしまうわ。

そう囁きながら、髪を梳り、結ってくれるのはいつも雪蘭だった。優しい指先、朗らかな声、温かな眼差し。

大好きな従姉。大切な友人。

青蘭が想うのと同じだけ、愛情を返してくれる。注いでくれる。けれど、それは私が王女で、あなたの従妹だから

誰かが髪を撫でている。その感触に、ゆっくりと意識が引き戻される。

頬を滑る指先。懐かしい香りが鼻孔をくすぐる。

「せ、つ、らん……？」

瞼が重かった。ゆっくりと瞬きすると、顔を半ば以上枕に埋もれさせるようにして眠っていたことに気づく。

のろのろと顔を上げながら、従姉を探した。

「お気づきになられましたか？青蘭さま」

柔らかな声音だった。高くはないが、澄んでいる。静かに心の奥へ沁み渡るような響きだった。

聞き覚えのある、けれど初めて耳にするその声に、青蘭は驚いた。寝台の傍らには穏やかに微笑する女性がかけていた。きつちりと結びあげられた髪は艶やかな黒髪。くすみのない白磁の肌に美しい弧を描く眉、切れ長の目の深い海の底を思わせる瞳に青蘭が映っていた。誰かに似ている。そして、自分にも。

呼びかけるべき名を一つだけ、知っている。けれど、目の前の女性には明らかに彼女ではない。彼女だとするには、成熟しすぎている。少女とも娘ともも言うえない、大人の眼差しをもった美しい女性だった。

「あ、の……」

「私は蓮霞れんかと申します　雪蘭の母でございます」

「雪蘭、の……」

声がかすれた。同時にひどく納得していた。雪蘭と姉妹といつてもいいほどに彼女は娘によく似ていた　そして、青蘭にも。

青蘭の母の名は青蓮せいれんという。同じ“蓮”の名を持つということは、雪蘭の母もまた王族の血をひいていたのだ。

後宮や東宮に仕える奴婢が男性王族の子を産んでも、父親の血筋は一切考慮されない。奴婢の腹から生まれた子は、父親が誰であれ奴婢として扱われる。雪蘭の母という人もそういう存在だったのだらう。それを伯父紅桂が見染め、妻として遇するために王位を青蓮を捨てたのだ。

「お察しの通り、私は紅桂さまや陛下の異母妹にあたります。恐れながら、青蘭さまのお母上、青蓮さまとは従姉妹にもなります」

「そう、ですか……」

青蘭はひそかにしみじみと納得していた。

何故、父方の従姉妹だというだけでこれほど自分と雪蘭が似ているのか不思議ではあったのだ。ただでさえ、西葉の王族は近親婚を繰り返し血が濃くなりすぎている。その中でもこれほど血が近ければ、似ていても不思議はない。

そんなことを思いながら、一方で心が次第に波立ちつつある。何か、肝心なことを忘れている。こんな風にのんびり話している場合ではなかったはず

「碧柊殿下のもとへ行かれますか？」

「

脳裏にぐったりと血に染まっていく碧柊の顔が浮かび上がる。弾かれたように慌てて寝台から降り立ったとたん、足に激痛が走る。よるめいたところを蓮霞の腕に支えられた。

「青蘭さまの脚の傷も深かったのですよ。こんな風に動いてはいけません。傷口が開きかねません。ご案内しますから、まずは落ち着

いてくださいませ」

「あの方は？碧柊殿は？」

必死にすぎるような思いで蓮霞を見つめると、彼女は曖昧に微笑んだ。

「ご無事です　まだ、意識は回復なさっておられません」

「まだ？……あれからのくらい経つのですか？」

「ほぼ丸一日です」

丸一日たっても意識を回復していない。その事実には、体の力が抜けそうになる。動悸が増し、目の前が暗くなるようだった。

さつと表情を曇らせた少女を支えるように、蓮霞はさつと華奢な体を抱き寄せる。

身長はほとんど変わらないが、雪蘭の母は円やかに優しい体つきをしていた。その柔らかな肩に顔を伏せ、青蘭はじつと動揺を堪える。さつと背を撫でてくれる仕草は雪蘭と切ないほど似通っている。そして、亡き母と同じ“蓮”という名を持つこの女性に、初対面にもかかわらず、青蘭は素直に身を預けていた。

<続く>

顔や体の泥は拭われ、足と頬の傷も丁寧に手当てされていたが、髪にはまだ泥がこびりついていていた。青蘭の安静を優先してくれたのだろう。

侍女に手伝ってもらいながら手早く湯浴みをすませ、衣装を整える。本当はなりふり構わず碧柎の枕元へ駆けつけたかったが、蓮霞れんかにやんわりと釘を刺された。

青蘭が下した結論は先に岑家へ伝えられていた。青蘭は女王として王権を取り戻すために故国の土を踏んだのだ。それに相応しい振舞いを要求される。ことはすでに動き始めている。碧柎の意識が戻るまで待つことはできない。

青蘭は虚ろな目で鏡に映る己の顔を見つめていた。

もし、このまま碧柎が目覚めることがなかったら 万が一、命を落とすようなことになれば……

ともかく、一刻も早く顔が見たかった。そのためにはなるべく侍女たちの手を煩わさないようにするしかない。

蒼杞そうきが父西葉王を弑した今、青蘭は喪に服さなければならぬ。装いは白地に黒と色が定められ、飾りも銀細工のみの装飾性の低い歩揺に限られている。

短くしてしまつた髪を結びあげるのに少なからず手間取つた。髻かもしの用意もなく、飾りで誤魔化すこともできないため、服喪の際に着用する透かし織りの黒の被衣かつきの、織りの細かなものを選んでなんとか取り繕う。

再び被衣で面を蔽う生活に戻ることに、青蘭はより憂鬱を深めていた。

「では、私がご案内いたします」

そう云って、青蘭の手を取つたのは蓮霞だった。

長い廊下は複雑に入り組んでいた。

山の背の裾野に建つ岑家の城は、その傾斜に合わせて設計されている。一見まっすぐな廊下でつながっていても、場所によってはここが2階だったり1階だったりする。

虚ろな目で力なく歩く青蘭の手を、蓮霞はそっと包み込むように握る。

「大丈夫ですわ、姫さま」

優しい囁きに、青蘭はかすかに首をかしげる。

この人は何をどこまで知っているのだろう。

「そうでしょうか……」

「ええ、姫さま　私の勘は当たるのです」

目を細めてふわりと包み込むように微笑む。同じ笑い方をする人を知っている。その人は母親と同じことをよく口にした。私の勘は当たるのよ、と。

嫁ぐ前にもそう云っていたけれど、果してそれは当たっているのだろうか。

まだ、意識は回復していない。そんな彼の枕元を訪れたからと言って、その事実が変わるわけでもない。それでも、一刻も早く駆けつきたい。せめて、その顔だけでも見つけていたい　こんなに苦しくて辛いばかりなのに、それでも雪蘭の勘は当たったと言えるのだろうか。

大きな窓には紗の帳がおろされ、室内はやわらかな明るさに満たされていた。

その光に届く寝台で、彼は眠っている。

部屋につくと蓮霞はそっと青蘭の手を放した。それにも気付かず、青蘭は引き寄せられるように寝台に近づく。駆け寄りたいのに、まるで恐々とした様子だった。

まるで今にも崩れそうな古い床を歩むように慎重に歩み寄り、よ

うやく傍にたどりつく。胸の前で両手を握りしめ、息をつめて見める。

血や汚れは拭われ、髭も綺麗に剃られていた。日に焼け、少しやつれたような端正な寝顔。やはり彼は貴公子然としているほうがそれらしく見える。

頭部には包帯が巻かれ、その白さが目にも心にも突き刺さるようだった。

静かに上下する胸を見つめながら、そっと腕に触れる。手首の脈を探し、そこに確実な脈動を感じるとようやく安堵したように肩の力を抜いた。

「頭部の打撲の他に特に大きな傷は負っておられません。あとは意識を回復なさるのを待つのみです」

寝台の反対側に医師がいたことに、はじめて気づいた。

青蘭は小さく頷き、じつと碧柘の端正な顔を見つめる。

はやく眼を開けて自分を見つめてほしい。皮肉っぽく笑いながら名前を呼んでほしい。節くれだった武骨な指に絡める指を握り返してほしい。

「いつ、とは分からぬのですね」

不思議と落ち着いていた。取り乱し、泣き伏せてしまつかと恐れていたが、穏やかな寝顔を見つめていると奇妙なほど心は鎮まった。

「はい」

医師も言葉を選ぶことはしなかった。

「そうですね」

静かな声はわずかに震えていた。蓮霞がそっと動く。医師の背後に控えている青年に目配せし、壁際に立つ侍女たちにも促して部屋から立ち去る。

「我等はしばらく退出させていただきます」

厳かに告げ、返事を待たずに扉を閉めた。

誰もいなくなった部屋で、青蘭はようやく涙をこぼした。

ぼたぼたと涙が掛け布に染みを作る。

そつと手を伸ばし、精悍な顔に触れる。壊れものを扱つように恐る恐る。両手で頬を包み込むようにし、親指を滑らせる。早くも髭が伸びかけているのか、ほんの少しざらざらしている。

何度も何度も飽きることなく繰り返す。時々、か細い声で名を呼びながら。

けれど、いつこつに目の開く気配はない。

頬から唇へ指先を滑らせる。唇は乾いてひび割れかけていた。身をかがめ、顔を近づける。

瞼や頬に雫がはじける。けれど、反応はない。

そつと唇を近づけ、束の間重なる。

瞼は動かない。

頬に頬に触れて、耳元に囁く。

「私のために戻ってきてください」

そして、想いを打ち明けた。

青蘭は部屋から出ると、廊下では蓮霞と一人の青年が待っていた。少し離れて侍女たちが控えている。

青年は昨日、青蘭を抱きとめたあの人物だった。

青蘭と同じく、服喪を表す衣に身を包んでいる。東葉王の喪に服しているのか、それとも彼自身にも何かあったのか。

「私は岑家しんえんりゅう当主袁柳と申します。昨日は大変失礼いたしました」

「いえ、かまいません。昨日はお互いにそれぞれではありませんでしたから」

落ち着いた様子で穏やかに応じると、袁柳は恭しく一礼した。

昨日、一瞬にして青蘭を狼狽から引き戻した底知れない静かな眼差しは同じだった。端正というほどでもないが、有力貴族の若き当主らしい品格ある風貌の持ち主で、穏やかというよりは伶俐な印象を人に与える。

試されている、と青蘭は悟った。

やむを得なかったとはいえ、若い男女が二人きりでしばらく道行きを共にしていたのだ。それを勘ぐるなという方が無理だろう。元々婚約していたとはいえ、青蘭はその道中に彼を夫とすることを改めて決心した。そんな彼女が女王として王権を奪還するために故国に舞い戻ってきたのだ。

それが敵国王子にほだされた挙句唆されてのものなのか、それとも本人の意志に基づくものなのか、そしてそれに賭けるだけの器があるのか。

青蘭を迎え入れるということは、岑家の命運を彼女に委ねることになる。それだけの価値があるかどうかを判断するのは、当主として当然のことだ。

正統な王女だからというだけで考えなしに担ぎあげられてしまうよりは、値踏みの末に支持された方が確実に勝利を掴むことができるはずだ。

ましてや今、碧柊はいつ目が覚めるとも知れない。青蘭は一人、自分の意志で行動を示さなければならない。

もし、彼が無事であれば青蘭は頼りきってしまっただろう。こうして独り立ちを余儀なくされたことは、青蘭にとってはむしる良かつたのかもしれない。

もう、誰かに頼りきりになるのはやめようと決意していた。碧柊に守ってもらうのではなく、彼と支え合っていくためには、まず青蘭が一人で立てなければならぬ。

青蘭は被布を外した。自分の目でしっかり見定めなければならぬ。

「では袁柳殿、まずは現状を教えてください。それから次の手を考えましょう」

白皙の秀麗な顔をあらわにし、青蘭は悠然と告げた。



< 続  
>  
>

その部屋まで青蘭を案内したのは、袁柳えんりゅうだった。

扉を開けると恭しく頭を垂れ、どうぞと入室を促す。青蘭は浅く首肯すると、滑るような足取りで扉をくぐった。

さほど広い部屋ではない。だが、眺望は素晴らしかった。

天井までの高さのある壁一面の窓の向こうには、夏の緑野が広がっている。

山の中腹に建つ立地を十二分に活かした眺めだった。秋になれば一面実りの金色こんじきの野に変わるのだろう。この領地からどれだけの収穫が上がるかを、一目で知らしめるかのような風景だ。

その部屋の中央には焦げ茶の卓が一つ置かれ、その縁には輝石を用いた装飾が施されている。その石が産出するのは間違いなく東葉だった。

卓の周りには二人の男がいた。扉が開くと同時に立ちあがり、頭を垂れて王女を迎える。

背の高い方は30代半ばくらいか。袁柳より頭半分ほど背の低い男性は、青年というより少年と称する方がふさわしいような幼さの残る顔立ちだった。二人ともに服喪の出で立ちだった。

「わが一門の分家の当主達です。あちらは岑袁楊しんえんよう、こちらは岑袁棋しんえんきと申します」

年配の男が袁楊で、少年が袁棋だった。二人はそれぞれ紹介されると恭しく頭を垂れた。青蘭は小さく首肯する。

二人は王女が素顔をさらしていることに驚いたそぶりも見せなかった。表情に出さない。容易く真意を悟らせない。

悔りがたい一門には違いない。あの雪蘭を育て、送りこんできたのだ。

紅桂こうけい亡き後、彼等がどんな思惑で雪蘭を通して自分に関わってきた

たのか。これまで考えたこともなかったことに気づき、愕然とする。もちろん、青蘭だけに賭けているはずはない。貴族内での権力争いは陰湿を極めている。いくら権力闘争から遠ざかるうとしても、油断すれば陥穽に落とされる。積極的に敵をはめるより、徹底的に守りに徹した方が結果的には生き残れる。西葉はそういう国だった。そのため、したたかな貴族ほどいくつもの抜け道を用意している。

袁柳が椅子を引いて着座を促す。青蘭は優雅に腰かけた。

王女が凜と背筋を正すのを待つて、3人も席に着いた。

「では、袁楊、そなたから説明を」

袁楊は青蘭に黙礼し、ゆっくりと口を開いた。

「まずは今回の事態についてです。殿下はどこまでご存知でいらっしやいますか？」

「兄　いえ、東宮と苓公れいこうが仕組んだことのみ」

もう、蒼杞を兄とは呼ばない。彼はもう明確に敵なのだ。

「苓公ともお会いになられたことがありませんか？」

「ええ。彼は苓南れいなんの皆で西葉東宮を討つと称して兵を整えておきながら、結局は碧柊殿に刃を向けました」

「それで辛くもお二人だけが逃げ延びられたのですね」

青蘭は小さく頷いた。

あの皆で自分たちをかばい逃してくれた近衛たち。はたして幾人が無事に逃げ延びられたのだろうか。碧柊の衣をまとい名乗りをあげて注意を惹きつけた綾罽じよつりんが無事にいるとは考えにくい。

それでも、考えれば心が乱れる。無事を願わずにはいられない。

なるべく顔に感情を出さないようにしよう。そう思いながらも、ついつい沈み込む心は隠しきれない。だが、いつまでも思い煩っている場合ではない。

青蘭は続けるように視線で促す。袁楊は目礼で応じた。

「苓公には、お二人が入れ替わっておられることに気づいた様子はありましたか？」

「いいえ、私のことは雪蘭だと思っているようでした　雪蘭から

も報告が寄せられているのでしょうか？彼女は無事なのですか？翠華すいかはどのようなになっているのです」

雪蘭のこととなると容易く籠たがが外れてしまう。青蘭はなるべく声の調子を押さえつつも、問わずにはいられなかった。

「雪蘭さまはご無事です。詳しいことは後ほどご説明申し上げます」  
「分かりました」

本当はもつと詳しく聞きたかった。だが、物事には順序というものがある。侮られないためにも、どうしても知りたかった安否がはつきりしただけでも良しとするしかない

「続きを」

「はい 先の敗戦後の我が国の軍の解体の責任者は苓公でした。その時点から東宮殿下は苓公と接触を持たれておられたようです」  
先に持ちかけたのはおそらく明柎めいしゅうからだろう。あの自尊心だけは人一倍高い蒼杞から近づいたとはとても考えられない。

「それで？」

「東宮殿下は青蘭殿下の御輿入れに乗じて兵を動かされました。東葉側の国境警備をわざと手薄にしたのは苓公のようです。ご婚儀前夜の宴でことを起こす手筈となっていたでしょう。それに間に合うように軍は越境し、翠華の近くまで迫っていたようです。宴において西葉国王を殺害し、同時に碧柎殿下のお命も狙うことになっていたようですが、こちらは替え玉を出席させてご本人は現場に居合わせられておられなかった 青蘭殿下も雪蘭さまと入替り、宴には出席なさらなかったのですね」

「ええ」

雪蘭に唆されたのだと言い訳しそうになったが、我ながら見苦しいと口を噤んだ。

「雪蘭さまが異変を悟られたのは宴の直前だったため、青蘭殿下にお知らせる余裕がなかったようです。密かに青蘭殿下だけをお逃しする手筈となっていたのですが、何故か殿下は碧柎殿下と共に落ち延びておられた」

「私を逃すはずだった雪蘭の手の者は、運悪く碧柊殿の配下の手にかかったそうです。私が碧柊殿と逃れることになったのはあくまで偶然です。あの方は私と雪蘭の顔もご存知なかったのですから」

3人は一瞬怪訝な顔をみせた。

婚約時に肖像画の交換がなさるのはごく当たり前のことだ。容姿に不足があつた場合、肖像画に多少手心が加えられることもあるにはあるが、青蘭の場合その必要は全くない。肖像画を見ていれば一目でそうとわかる筈だった。青蘭も雪蘭も共に稀なほどの麗人だ。青蘭はいちいち碧柊の信条を説明するのも面倒なので、彼のための釈明はしなかった。

「 苓公は宴の直後に翠華を脱出しています。表向きは逃れてということになっていますが、すべて偽装です。それについては雪蘭さまが東宮殿下と苓公の口から直接お聞きになっておられます」

「 蒼杞ならあり得そうなことだ。いい気になってぺらぺらと話したのだろう。」

だが、明柊までがそうしたということは意外だった。本物の青蘭姫だったならともかく、雪蘭を謀るのは難しいだろう。それを悟って彼は明かしたのか。それとも単に翻弄するためか。おそらく、後者だろう。雪蘭でも明柊だけは手に負えないのではないだろうか。「碧柊殿が隠し通路と古道を使って逃げるだろうと踏んだ苓公が守備隊を動かし、苓南の砦へと導くように手配したのでしよう」

「おそらくは殿下のおっしゃる通りかと。そして、苓公は碧柊殿下を討とうとしたが失敗した。そのまま砦を発つと北上し、東宮殿下と戦火をまじえてみせた。東宮殿下は敗退と見せかけて東葉より軍をお引きになった」

「そして父上を討つた……どのような名目であろうと、親殺しは大罪です。それだけでも王位を継ぐ資格のないことは明白」

祖先を尊ぶ風習の強い葉において、尊属を害することはどのような理由であろうと死罪とされる。そのため実際に尊属殺人を犯した

としても、表沙汰には絶対にしない。それをあえて明らかにしたのは、蒼杞らしいことではあった。

そして、同じ罪を碧柎にかぶせようとしているのは明柎だ。

「ですが、即位式の準備を進めておられます。それに諫言したために、われらの先代当主は命を落としました」

そう告げて、袁楊はじつと青蘭を見つめた。そこに表情はない。

袁柳も同様だった。袁棋のみがわずかに唇を引き結んでいる。

「では、あなたがたは？」

「われらは東宮殿下の出陣後、父の厳命で国元に帰されました。父たちになにかあれば喪にかかわらずすみやかに跡を継ぐようにと

われらも父同様、東宮殿下の王位を認めません。正当な王は間違はなく青蘭殿下であらせられます」

「」

3人は椅子を立つと青蘭のすぐそばまで歩み寄り、膝をついて恭しく頭を垂れた。

青蘭は冷ややかに3人を見下ろす。

「私になにを求めるのです」

「われらが王に　葉の女王におつきいただきたいのです」

茶番だった。

青蘭から支持を乞うのではなく、即位を要請されそれに応じることで力関係がはつきりする。推戴されたという形が最も理想的だ。それを彼等も分かっている。

「西でも東でもなく、“葉”の女王に」

袁柳は繰り返す。“王”により骨に抜きにされ徐々に形骸化していった女王の位。

だがそれは古に立ち返るのではなく、新たなはじまりでなければならぬ。

古来、女王は顔を隠し、自ら声を発することもなかった。存在の曖昧な、王権の象徴としての存在だった。それ故に次第に力を失っていくこととなった。

けれど青蘭は被衣を取り、自らの意志でここに立ち口を開いている。それは雪蘭が教えてくれたことでも、碧柎を授けてくれたものでもない。

「そのためにそなたたちは如何する？」

「心よりの忠誠を。わが一族、領民をあげて尽力させていただきま

す」

「宝印に誓えますか？」

「もちろんでございます　すでに用意しております。これを、陛

下に」

袁柳は懐から折りたたんだ紙を取り出し、捧げるように差し出した。

青蘭はそれを受け取り、広げる。それが宝印だった。

本来宝印は神殿が発行する護符だが、その裏に誓約文を認めて主に差し出すためにも使われる。神の名を記した護符を用いることで神にかけて誓約する証となす。万が一それを破れば、たちどころに神罰が下るといふ。宝印を焼いた灰を飲ませれば、誓いを破ったものはもたえ死ぬとも言われている。

青蘭も額面どおりに受け止めているわけではない。だが、これを差し出すということは一族の命運をも差し出すという確かな証であり、これ以上のものはない。

新王が即位する時、貴族たちは皆これを提出する。決して破られることのない忠義の証とするために。そして彼ら三人は当主となつたばかり。王として青蘭を選ぶという確かな意思表示でもある。

「分かりました。受け取っておきましょう」

丁寧に畳み、懐にしまう。そして三人に席に戻るよう促した。

「しかし、私は王位を担うものとしての教育を受けてはおりません。この先、如何様にして事を成すのか。そなたらに考えはあるのですか？」

自分の無知と無力は隠しようがない。それを無理したところで道を誤るのがおちだ。

毅然としつつ、自分の持ちえないものは率直に他に求める。それ以外のやり方を青蘭は思いつくことができなかった。

袁柳達はその言葉にはつきりと頷いた。彼の顔に一瞬浮かんだ表情に、青蘭は自分の方法が間違っていないことを確信する。

一人ではしよせん無理なのだ。それを素直に認めることは、決して逃げでも愚かなことでもない。

「その前にもう一つ申し上げたき議がございます」

「雪蘭の、いえ、東葉のことですね」

「左様でございます」

「苓公も即位の準備を進めているのでしょう？」

「いえ 苓公は雪蘭さまを“葉”の女王として擁立しようと動い



ているようです」

袁柳は言いよんだ末、青蘭をまつすぐに見つめて告げた。

「なっ……」

青蘭は絶句する。

思いもよらなかつた。だが、碧柊も同じ結論にたどりついたのだ。伶俐な明柊であればなおさらだ。そして、それこそが彼が雪蘭の正体を疑っていない証でもある。

「……いえ、驚くまでもないことですね　雪蘭はなんと？」

「ぎりぎりまで苓公の指示に従うとのことですよ」

そして、一番効果的な段階でその身分を明かすつもりなのだろう。

「私と碧柊殿が無事だったという報せは？」

「雪蘭殿の手元まで届けるには最短でも3ないし4日かかります。

早くても明晩か、明後日になるかと」

「そう……いざという時になって、彼女を救出できる公算は？」

「正直に申し上げますと難しいでしょう」

袁柳は心持伏し目がちに応えた。彼は雪蘭にとって義理の兄にあたる筈だつた。雪蘭が幼いころを語るとき、彼の名前もしばしば口にはぼつた。楽しく懐かしい記憶と共に。

雪蘭は自分の死を覚悟している。それを悟り、青蘭は堪え切れずに俯いた。

袁柳が救助は難しいと言っている以上、青蘭に出来ることはもはやない。さらにそれに追い打ちをかけるのは、青蘭の即位に他ならない。それでも、やらねばならない。

一番大切なのは故国だと、青蘭に言い聞かせてきたのは他ならぬ雪蘭だつた。それは今や西葉のことだけではない。ましてや青蘭は“葉”のために嫁ぐはずだつた。それは今も変わらない。

思いが揺らぐ。瞑目すれば、脳裏に雪蘭の姿が浮かぶ。

きつとここに彼女がいれば、青蘭を叱りつけるだろう。躊躇っている猶予はない。ここで迷っていたところで、結果はおそらく変わりはない。可能性は失われていくばかりだ。

青蘭は唇を結び、毅然と顔を上げた。眦は熱を帯びるが、潤むことも許さない。

「分かりました 何事も無駄にせずに済むよう、最善を尽くしましょう。引き続き、雪蘭とは連絡を密にとつてください。おそらく、一番手強い敵は苓公となるでしょう」

苓公明柊のもとにいる雪蘭が一番の情報提供者となつてくれる。望んだわけではないが、それだけの危険に彼女が身をさらしている以上、青蘭は絶対に負けるわけにはいかなかった。

「まずは、西葉の国内情勢とそなたたちの考えを聞かせてください。まずは足元を固めることから始めなければなりません。」

密議は夕刻まで続いた。

青蘭は疲労と精神的な衝撃から回復しきれず、途中で何度か気が遠くなりかけた。青蘭の身を案じる岑家の男性陣が中止を申し出たが、時間が惜しいと続けさせた。判断力が鈍るかもしれないという恐れもあったが、青蘭が自らそれを下す必要はほとんどなかった。

権力闘争の裏の裏までかくような真似をしたことのない青蘭には、彼らの話を理解するだけでせいっぱいだった。裏と表を使い分けるのは貴族の基本だが、そこに怪奇じみたものが渦巻いていることを知らずにいた。

王族というものは基本的に利用されるものであって、排除される対象ではないため、貴族より詰めが甘いのは確かだ。

蒼杞の狂気じみた振舞いのため、当主を失う貴族が急速に増えている。こちら側に引き入れられそうな貴族は確実にその数を増やしている。

すでに岑家と姻戚関係のある貴族を抱きこむことには成功しており、さらに青蘭の生存と無事が明らかになれば態度を明らかにする

貴族も増えそうだった。

問題は、いつ青蘭の無事と共に女王として即位する意思を明らかにし、どこでどのよう<sup>に</sup>即位するかという時機だった。早すぎても遅すぎてもいけない。

そして、その登極のさいに誰を盾として選ぶか。

一人になつた青蘭はようやく深々と溜息をついた。目の前には静かに呼吸を繰り返す青年が横たわっている。

手を伸ばし、そつと頬に触れる。髭が伸びかけているのか、ざらざらとした手触りは温かい。寝顔は穏やかだった。夢を見ているのだろうか。それとももつと深い眠りなのだろうか。眠りですらないのかもしれない。

青蘭は迷うことなく彼を盾として選ぶことを告げた。袁柳もそれについては賛成してくれたが、問題は彼がいつ目覚めるか。目覚める日が来るのか、ということだった。

眠り続ける人を夫として選ぶことはできない。そして、盾の選定は即位と切り離せない。

いつまでも待ち続けることはできない。

青蘭は碧柎に覆いかぶさるようにして、その頬に頬を寄せる。恐々と逞しい背に腕を回した。

「お願い、早く眼をさまして。私は他の人を盾に選ばなければならなくなる……それだけは絶対に嫌です」

涙がとめどなく頬を伝い、彼の髪を湿らせていく。それでも、応じてくれることはついになかった。

日が暮れ、星が瞬きはじめても、彼が目を覚ます気配はない  
医師とその助手がそつとその体を抱き起こし、少量ずつ水分と汁  
物を与えた。

誤嚥すれば肺炎を起こす恐れもあるが、なにもしなければ衰え消  
耗するばかりだ。それでも意識が戻らぬまま寝たきりの状態が長引  
けば、次第に体は弱っていくだろうという話だった。

再び二人きりになると、青蘭は彼の腕を握った。

意識がなくとも、声は届くという。諦めることなく声をかけ続け  
れば、意識を取り戻すこともできるかもしれないと医師は最後に付  
け加えた。

青蘭は密議のことを耳元で皮肉をこめて囁いた。それが尽きると  
日頃の彼の行いへの苦情を訴え、次いで口ごもりながら感謝ものべ  
た。つとめて明るくあろうと務めたが、最後には泣きながら王家に  
伝わる古い唄を口ずさんでいた。

碧柊の傍を離れようとしない彼女を思いやってか、夕食はそこへ  
運ばれた。栄養価の高く消化も良い粥の口当たりは優しく、食欲は  
無いながらも空にすることができた。

夜も更けてくると蓮霞れんかが迎えにやってきた。

「碧柊殿下のお傍には夜通し誰かがついております。青蘭殿下はお  
休みください。碧柊殿下がお目覚めになられたとき、あなたさま  
がお元気でいらっしゃらなくては」

そつと諭されて、青蘭は素直に応じた。

湯浴みをすませ夜着に着替えると、青蘭の求めに従って侍女たち  
は下がった。

寝台に横になる気になれず、窓の傍に置かれた椅子に腰かける。  
目が覚めたのは昼近かった。丸一日近く眠っていたという。それ

でも疲労は癒されず、さらに密議で気力を消耗してしまった。

心身ともに疲弊して正直に言えばへとへとなのだが、頭の芯が凍りついたように醒めきっている。まるで泥濘の海のなかで果てもなく足掻きつづけているようだった。

その時、仄かな灯りが射しこんだ。侍女たちに下がる際に灯りを消すよう云いつけたので、室内は暗闇に沈んでいた。そこへ密色の温かな光が投げかけられ、青蘭は顔を上げた。

静かに扉が閉められ、誰かが入ってくる。忍び足ではあるが、気配を殺そうとしているわけではない。眠る人を慮つての遠慮を感じ、青蘭は誰何したりはしなかった。

「青蘭さま、お目覚めでしたか」

「……蓮霞さま」

窓辺に少女の姿を見つけ、彼女は少し驚いたようだが、じきに微笑んだ。夜着に薄手のものを羽織った肩には、艶を帯びた髪が流れている。優しい笑みに青蘭は慈母という言葉を思い起こす。

蓮霞は蜜蝋の燭台と、もう一方の手には盆を持っていた。椅子の傍らの小さな円卓に盆をのせ、運んできた玻璃の杯を手にする。暗い色合いの液体がとろりと揺れ、ふんと甘い香がたつ。

「寝つけそうにありませんか？」

「ええ」

かすかに揺れ続ける灯火を見つめる顔は、ひどく憔悴している。蓮霞は案じるように目を細め、そっとその杯を手渡した。

「果実酒です。気持ち解ければ、次第にお眠りになれましょう」

「……ありがとうございます」

小さく呟いて、青蘭はそれを飲みほした。まるでやかな口当たりと喉越しだった。少しずつ胃のあたりから温まってくるような心地に、椅子の背に身を預けて力を抜くことができるようになる。それではじめて自分がずっと緊張していたことに気づいた。

蓮霞は空になった杯を受け取っても、すぐに下がるうとはしなかった。

「寝台にうつりましょう」

そう促され、青蘭は手を取られるまま素直に従う。

蓮霞は無言のまま青蘭の隣に腰かけ、背後から腕をまわして青蘭を抱き寄せた。少女の頭を肩にもたれられ、そつと優しく髪を撫でる。もう一方の手で、氷のように冷たい華奢な手に手を重ねる。

温もりに包まれた青蘭は、半ば呆然と身を任せる。まるで揺籃よつらんであやされているようだった。

蓮霞の体は温かく、そして柔らかい。遠慮がちに頬を寄せれば、先ほどの果実酒とは違う甘い香がする。それは春の日溜りの花壇でまどろんでいるような心地だった。

「蓮霞さま、申し訳ありません」

「如何なさいました？」

「雪蘭を……私は雪蘭を危険な目に遭わせてしまっています。その上、この先、私のせいで命まで危うくなるかもしれません」

蓮霞の様子に変化はない。ただ、優しく髪を撫で続ける。

青蘭は小さく礼を述べて離れようとしたが、思いがけない力強さに阻まれた。蓮霞は両腕で青蘭をかたく抱き寄せ、やわらかく手に吸いつくような髪に頬を寄せる。

「蓮霞、さま？」

「……あなたのせいではありません。すべては私のせいなのです。私が紅桂こうけいさまの手を取ったから……紅桂さまが王位についていれば、今のような状況は避けられたはずでした」

紅桂は幼いうちから聡明で、人々の尊崇を集めていた。王位にくのに不足はなく、それどころか生れながら王者の素質に恵まれていた。だが、王女ではなく異腹の妹を妻に選んだため、それはついにかなわなかった。

代わりに王位を継いだ青蘭の父は、その兄とは対照的な愚王となつた。

青蘭を抱きしめる蓮霞の体は細かく震えていた。

自分を選んだためにすべてを失った夫。その罪を購うように娘は

奥の宮に送り込まれ、今や敵の手の内にある。

もし、蓮霞が異母兄の手を拒んでいれば、国が傾くこともなかったかもしれない。

少しずつ頬にかかる髪が湿っていく。その感触に、青蘭ははっとする。

誰一人として傷ついていない人はいない。

青蘭は己の力の無さを嘆き呪ってきた。碧柊は事態を許してしまった自分の甘さを責めていた。父の死を見越しながらもその命に逆らえなかった岑家の若き当主達、国の行方を案じながらも愛する人の手をはなせなかったこの美しい叔母は娘を失おうとしている。

だが、今さらどうしようもない。もし時間を巻き戻せたとしても、違う選択ができるだろうか。もう取り返しようはない。あるのは苦く重い現実だけだった。

誰しも抱えている哀しみに変わりはない。

青蘭はこみあげる熱いものを堪えようとは思わなかった。

頬を伝うものは辛く温かい。血潮も涙も同じ体から湧きいずる。

「蓮霞さま、誰のせいでもないのですわ、きつと……」

冬の夜、体だけでなく心まで凍えてしまった青蘭を温めてくれた雪蘭。その温もりをくれたのはこの女性ひとでもあった。

翌日も朝から青蘭は岑家の当主達と頭を突き合わせていた。

彼らの間で交わされる会話の聞き役に徹するのが専らで、挟めるような意見を持ち得ようがない状態だった。

聞いているだけで、決して状況が甘いものでないことは知れる。だからといって打開策をひねり出せるわけではない。そのあたりは当主達を頼りとするしかない。下手に口をはさめば妨げにしかないため、どうしても問わなければ理解できない折にのみ口を開いた。

青蘭が言葉を発する機会はほとんどなかった。雪蘭と共に学んだ知識がなければ状況を理解することもできず、説明を求めることもなどとてもできなかっただろう。

袁柳達は自分たちだけで議論しているようでいて、青蘭の存在を忘れることはしなかった。青蘭の表情を読み取って、適宜補足していく。説明を求める必要がなかったのは、彼等のこまやかさのおかげもあった。

西葉王都からもたらされ続ける報せは、蒼杞の振舞いが残虐さを増していることを物語っていた。

常軌を逸していたのは今に始まったことではないが、隠蔽しようとする父王の意志もあり、東宮にまつわる暗い噂にとどまっていた。その重石が外れてしまった今、もはや誰にも彼をかばうことはできず、ましてやその行動をとどめることなどできるはずもない。

東葉での彼による戦禍のすさまじさは、すでに西葉でも知れ渡っている。彼を敵に回すことを考えただけで、背筋の凍るような想いをした者は多い。

彼は狂気に支配されているのか、それともただ残虐なだけなのか。青蘭にもそれは分からない。10代のはじめから妹の命を狙うなど、



権力への執着は早くから明らかだった。正気を失っているわけではないのだろう。

この状況は青蘭には有利に働くだらう。現状では競々としながら蒼杞の機嫌をうかがっている貴族が多いが、青蘭の存在が明らかになればこちらになびく者も少なくはないだろう。

だが、袁柳達はあくまで慎重だった。見込みでは動かない。そんな彼らの一番の懸念は、岑家が青蘭を担ぎ出すことそのものだった。「雪蘭が私に女官として仕えていたことは知られているのだから、今さら“青蘭姫”と岑家のつながりを疑う余地はないはずでは？」

「そこが問題なのです」

袁柳は腕組みをして、袁楊へちらりと視線を流した。彼は一回り以上年上の袁楊を頼りとしているようだった。上級貴族の中でも名家としての家格を誇る旧家の当主となるには、袁柳はいささか若すぎる。年のころは碧柊と同じくらいだろう。経験が足りているとは考えられない。

袁楊は本家の主と己の立場、そして状況を弁えているようだった。あくまで本家の当主を盛りたてようとする姿勢を明らかにしている。

袁楊が話の続きを請け負った。

「雪蘭殿は我らが身内です。そして殿下とは従姉にあたります。岑家が意のままにできる雪蘭殿に王女の身分を騙らせているだけで、翠華の“青蘭”さまこそが本物ではないかと指摘されかねない。青蘭殿下が確かに王女だとする証がないのです。裏を返せば王女ではないという証もないのですが。その上、雪蘭殿の“青蘭姫”もおられる。確かに葉の女王たり得るのは殿下お一人ですが、この状況では疑心暗鬼が先に立ちます。殿下を主として戴くということは、一族の命運をかけることに他なりません。確たる根拠をお持ちにならないければ、動きたくとも動けぬ者も出てくるでしょう」

「私が王女だという確かな裏付けが必要になるわけ、か」

「おそれながら」

青蘭は思いもしなかったことに少なからず困惑していた。

自分が王女であることは間違ない。すべてを知る袁柳達も疑ってはいないだろう。だが、確かに真相を知らぬ第3者から見れば詐称を疑われても仕方がない。

考えみれば確かにそうで、納得もできる。だが、ではどうすれば良いかと問われればさっぱり分からない。

険しい顔で沈思する青蘭に、若い当主達は目配せを交わす。そこにはいささかならず後ろめたく感じているような気振りがあった。

「手立ては二つあります。一つは神殿に認めさせることです。幸い聖地は隣の王領にあります。総本山の大神官の言質を得ることができればこれ以上の裏付けはないでしょう。大神官のお認めであれば、ゆくゆくは東葉でも通用するはずです」

青蘭達も越えた峠を通って、わざわざ参詣に来る東葉の民も少ない。

西葉と比べて現実的な国民性の東葉でも、信仰そのものが揺らいでいるわけではない。むしろ敬虔な信者は東葉にこそ多い。それは“祖国”である“葉”から切り離されているという感覚が拭いきれないためもあるのだろう。

「そうね。では、もう一つでは？」

青蘭の問いに、袁柳はいったん眼差しを落とし、それから思いきるように口を開いた。

「寄州公をご存知ですか？」

「ええ」

寄州とは岑州の隣にある王領で、先ほど話にも出た聖地のある州だった。王領州は王家の直轄領だが、実質的な管理は王統家と呼ばれる準王族に委ねられている。王統家は8つの王領に8家が存在する。

王統家の役割はもう一つある。西葉王家で直系の王女が絶えたこととはないが、その配偶者となるべき男性王族が不在となることは何度もあった。その場合、王統家の男子が準王族から王族に格上げされ、王配となる。

現在の寄州公もその一人で、年のころは30前後、特に良くも悪くも取り沙汰されることはなかったはずだ。それ以上のことを青蘭は知らない。

「寄州公は王統家八公のなかでも上位に位置する方です。寄州公の承認を得られれば、王統家の多くをこちらに引き込むことができるでしょう」

「王統家が動けば、他の貴族も動きやすくなるわけね」

「はい」

「では至急、大神官と寄州公に会いましょう　ここに呼びつけるわけにもいかないのでしょうか？」

「はい、仰るとおりです　それと、もう一つ申し上げたきことが先ほどからなにか云い洩していることには、青蘭も気づいていた。頷いて続きを促す。

袁柳は小さく息をついた。

「寄州公とはすでに密かに話がついております　彼は、盾の候補としての名乗りを希望しております」

「　盾として？」

青蘭の顔が険しくなる。尖った声に、袁柳はただ黙って首肯する。王統家であれば、即位のおりに盾の候補となる資格はある。

「私に盾として選べとっているの？」

「そういうわけではありません。盾をお選びになるのはあくまで殿下のご意志です」

「王配となることを引換に承認すると云っているわけではないのね？」

「明言はしておりません」

だが、暗に要求しているのと変わらない。

青蘭は唇を噛んでしばらく考えていた。

「　碧柎殿のことも知っているの？」

「碧柎殿下のことを知るの是我らのみです」

「　では、好きにさせなさい。即位してしまえばこちらのもので

す

口の端を歪め、艶然と微笑んでみせる。

岑家の当主達はそんな青蘭に少なからず驚いたようだが、じきに微笑して頭カブを垂れた。

地平と空の間が紅蓮の炎に溶かされていく。

薄くなびく雲は薔薇色に染まり、紅の天を東へ視線を流せば、次第に紺青へと色調はかわっていく。

邸の背後に聳える長大な山脈は、一足早く夜を背にしているだろう。

青蘭は寝台の傍に椅子を寄せ、そこに横わたる人の手を握ったまま空の転変を見つめていた。

時折ぼりぼりと話しかけるが、返ってくる言葉はない。伏せられた瞼の陰で瞳が動いている気配もない。

意識が戻らぬまま三日が過ぎた。たったそれだけしか経っていないのに、その類は早くもこけてきたような気がする。

思い返してみれば、翠華の王城落城から続く逃避行のあいだに、彼はずいぶん面変わりした。

彼が携帯していた食料も、本当は1人分程度しかなかったのだろう。青蘭にはそうと悟らせなかったが、今となってみれば彼が自分と同じだけ食事を摂っていたようには思えない。

畏を仕掛けて小動物を獲ったことは何度かあったが、移動を優先していたため十分ではなかったはずだ。

不寝番もほとんど彼が務めてくれた。いくら頑張ってみても青蘭は途中で眠ってしまい、気がつけばとつくに夜は明けていて、すでに彼が朝食を準備してくれていた。その上、日中の馬での移動では騎乗に慣れない青蘭を常に気遣ってくれた。

いくら翼波との戦いで散々な目に遭ったことがあるとは云え、青蘭のようなお荷物を抱えていては比較にならないだろう。

疲労が蓄積していかないはずがない。頭部の打撲傷をのぞけば酷い怪我は負っていないという。なかなか目覚めないのは、たまりにたまった疲れのせいかもしれない。

そんな根拠のないことを思い、青蘭は身を乗り出してその頬にそっと口づける。反応はない。少し落胆しながらも、その頬を指先でなぞる。

そうしていると何故か、碧柊がやたらと自分に接触してきた気持ちができるような気がする。触れていると安心できる。そして、同時にそれだけではない。ずっと触れていたいという思いの理由を、彼女が明確に悟るのはもう少し先のようだった。

やがて西の天が淡い藍に包まれるころ、夕餉を運んできてくれたのは蓮霞れんかだった。青蘭の存在が公にされるまでは、この邸に逗留していることはできるだけ秘されている。

礼を述べて食器をのせた盆を受け取った青蘭に、蓮霞は気懸りを隠しきれない眼差しを向ける。

「逃避行の間に殿下と御心を通わせることがおできになったのですね」

「……え？」

「暇さえあればずっと枕元に詰めていらっしやるのですから」

そつと繊細な指先が青蘭の髪を撫でる。その感触に素直に身をゆだねながら、青蘭は小さく首を振った。

「そうだったらいいのですが、おそらくはそうではありません」

碧柊殿は私が王女だから望んでくださっただけ……私も彼も、“葉”の統一と平和を願っています。私たちは志を同じくする同志のよくな関係にすぎません。少なくとも、彼にとっては「

青蘭は切なげに瞼を伏せる。

蓮霞は目を細め、そつと姪の体を抱き寄せる。

「想いをお伝えにならなかったのですか？」

「私の思い違いですもの。そんなことで煩わせたくはありません。そつと想う分には障りはないのですし、碧柊殿は義理堅い方です。私以外の女性に手をつけられることもないでしょう。夫としてずつと傍にいてくださると誓ってくださいました。私にはそれ以上のことを望むことはできません」

「けれど」

「ずるいことかもしれませんが、私は彼がずっと傍にいて下さればそれで十分なのです」

「それではお辛いでしょうか？」

「想いの通じないことが確かになってしまつよりはましです」

青蘭は視線を落とす。片方の手は碧柎の手を握つたままだった。いくら指をからめても、かえされるものはない。それはこれからの二人の関係を象徴するように思われて、それでも手を離すことはできなかつた。

蓮霞は姪の髪に指をからめる。癖のない髪はするりとほどける。子供の髪のような柔らかな手触りは、久しく会っていない娘を思い出させる。

「それでも、お伝えした方が良いでしょうに想われます　私には」

「……私は臆病なのです」

「青蘭さま、傷つくことを恐れていては前へは進ませぬわ」  
蓮霞の声はやや低く、たしなめるように響く。青蘭は小さく首を振る。

「問うまでもないことなのです　碧柎殿は私が“青蘭姫”だからだと明言されました。それをもう一度聞きたいとは思えません」

諦めを含んだ暗い眼差しに、蓮霞はそれでも引き下がらなかつた。  
「それでもです　人の心は変わるものなのでから」

「諦めるなど仰るのですか？」

「通じぬ想いはありません」

「……けれど」

「言葉にしなければ伝わりませんよ」

優しく頭を撫でる仕草は、どうしても雪蘭を思い起こさせる。雪蘭はいつも青蘭に勇気を与えてくれた。

「　そう、でしょうか？」

「ええ、そうです」

「……叔母上は？」

「想いは隠しきれるものではありませんのよ」  
妙に実感のこもった言葉に、青蘭は力なく頷くほかなかった。

翌朝、青蘭は用意された喪の正装に身を包んでいた。

一切の装飾を省くかわりに、極細の絹を用いた最上の絹が惜しげもなく使われている。あくまで慎ましやかに抑えながらも、流れるような線と美しい襷で見事な輪郭を描く。重ねた衣の微妙な質感の変化がさらにそれを際立たせる。

それでほっそりとした体を包んでも、若くしなやかな肢体の魅力を隠すことはできない。被きで覆い隠された顔はいかばかりに美しいだろうか。そんな邪推を抱かずに済む者の方が少ないだろう。

青蘭は顔をあらわにすべきかどうか迷っていた。今はしきたりに従っておいた方が良いでしょうという袁柳えんりゅうの言葉に従うことにした。「即位なされば、殿下の思うままです」

そう云って、彼は微笑んでみせた。青蘭も思わず笑い返してしまつた。

必要であれば自尊心などいくらでも捨てられる。すべて詭弁にすぎない。これだけは曲げないと決めたことのためであれば、どんなことも苦痛ではない。

青蘭はなるべく織りが細かく、向こうから見えにくいのが、見透かすには支障のない被衣かすきを選んだ。

云いなりになりそうな従順な王女を演じる。それは夫となる王配にすべてを委ねてきた王女の伝統的な姿であり、警戒心を刺激する恐れはない。それに騙されるのであれば、騙される方が悪い。

4頭立ての軒車のこまにのり、ゆっくりと過ぎゆく風景を目にしながら、青蘭は横たわったままの碧柎へ想いを馳せていた。

もしこのまま彼の意識が戻ることがなかったとしても、自分のすべきことはもう一つしかない。それを貫き成し遂げることこそが、



想いを成就させることになるのかもしれない。

無意識に唇をかみしめる。そんな自分にはっと気付き、慌ててやめる。何度もやめるように云われた癖だ。

もっと自分に自信を持つようにも云われた。それは愚かな過信ではなく、自分の行いに責任を持ってということだったのかもしれない。

これまでは雪蘭が指標だった。その結果が思うようなものでなかったからと云って、彼女に責任転嫁をした覚えはないが、自分で責任を負うこともしてこなかったような気がする。

そんな風に思いはじめると、これまでの自分を不甲斐なさに頼が熱くなる。碧柊が目覚めるかどうかに関わりはなく、彼に対しても雪蘭に対しても恥ずかしくない人間になりたいという想いに偽りはなかった。

岑州しんから寄州き公の城までは軒車くるまを急がせても三日はかかるという。早馬を飛ばせば一日あれば事足りるがそういうわけにもいかない。

碧柁へきしゆうのことは袁柳えんりゆうと蓮霞れんかに託した。安心していつてらっしゃいと微笑んだ叔母に、不安はほんわずかだが和らいだ。

同行するのは袁楊えんりゆうだった。このような時に本家の当主が国元を空けるわけにはいかない。それにこうしたことには袁楊の方が向いているでしょうと、袁柳は薄く笑った。

それに袁楊の妹は寄州公の弟に嫁いでいるという。袁楊はそういう縁で寄州公とも親交があり、八公のなかでも最初に声をかけることになった。寄州内に聖地がある以上、避けて通ることはできない人物だけに幸運でしたと袁楊は微笑んだ。

「幸運というのは？」

「我が家は岑家の分家筋に過ぎませぬ。本来ならば王統家と釣り合う家格ではありません。それを公弟のたつての願いで妹は嫁ぐことになりました。先代の本家当主の養女として、本家筋の姫としての身分を整えての縁となりましたが、まさかこのような事態になるとは思ってもおりませんでした」

「 たつての願いと珍しいのですね？」

本来は当人たちの意志などお構いなしに縁談は整えられるものだった。袁楊の妹はよほどの美女との評判だったのだろうか。学者然とした風貌の袁楊も決して見目が悪いわけではないが、人目を引くほどではない。

「妹は本家に行儀見習いが上がっております折に、寄州公の代理で訪ねてこられた弟君の目にとまったようです」

「 そういうことがあるですね」

中級下級貴族の娘が行儀見習いと称して本家筋の主人へ奉公にあらがることは珍しくない。そこで見染められてという話は珍しくない

らしいが、青蘭にとってはまったく縁のない世界のことだった。

「王統家は王統家内で婚姻を結ぶのが常識ですが、寄州公はあまりそういうことに縛られる方ではありません。妹が分家筋の出でもいっこうにかまわぬと、一族の口を封じてしまわれました。今回のことも向こうから接触を図ってこられたようなものでした」

「向こうから？」

「はい。我等が前当主の厳命で国元に帰りつくのとほぼ同時に。その時はまだ殿下の安否もつかめておりませんでした。ともかくこのままでは互いにまずかろうということ。寄州公はどちらかといえば気骨ある方のため、東宮殿下には目をつけられておられたようです。東宮殿下のご帰国直前に王都から国元へ御戻りになりました」

蒼杞そうつきは実父に対してすら遠慮しなかった。いくら王統家の筆頭でも容赦するはずもなかっただろう。

「賢明な判断だわ」

青蘭は複雑な思いで溜息をついた。

こんなことになる前に、誰かに兄を止めることはできなかったのかだろう。兄の妃である従妹の王女はどうしているのか。次々と名前は思い浮かぶが、結論は一つだった。無理だったからこそ、このような事態に陥っているのだ。

暗い表情で外を見つめる。道は整備されているため、軒車の揺れはひどいものではない。転寝するのにちょうど良いくらいだが、このような気持では無理そうだった。

軒車の窓は開け放たれている。そうでなければ昼間の暑さには耐えられたものではない。日は傾きつつあり、野辺にはまだ農作業に精を出す人々の姿がある。真昼の暑さを避けて涼しくなりはじめる頃から日暮れまで働くのだという。

夏のはじめに東葉へ向った時には、ほとんど外を見ることはできなかった。今はこうして望むものを目にすることができ。それを青蘭は素直に喜ぶことはできなかった。

「もし国の内が乱れれば、このあたりはどうなるのかしら」

山と深い森に抱かれた東葉とは違い、西葉は地平まで沃野が広がる。素直に美しく豊かな光景だと認めることができる。東葉とは全く異なる美しさだった。

「戦となれば農地も村も街も焼かれましょう。巻き込まれずにすむ者などおりますまい」

「……そうですね　でも、それは避けられないことでもありませんよ」

「多少の戦火は避けられないでしょう。ですが、それもやりようによつては最小限に抑えられるはずですよ」

「……そのためにも寄州公を味方につけねばなりませんね」

「ご案じ召さることはないでしょう　少なくとも私はそのように思います」

盾の候補を希望した寄州公に青蘭と袁柳は警戒心を抱いたが、袁楊はそうではないというのか。

被<sup>かす</sup>きの陰の怪訝な様子を察してか、袁楊は微笑した。

「お会いになればお分かりになりましょう」

「　そう」

青蘭は心もとないまま肯くしかない一方で、袁楊が不確かなことを口にする人間だとも思えなかった。

岑家の邸を発つて3日目の夕方、軒車はようやく目的地に到着した。

寄州の州都でもある街外れの高台にその城はあった。城としか言いようのない規模だった。岑家の本邸とは比較にならない。

軒車は門を潜り、木々の間を抜けてようやく止まった。

その頃にはすでに日は暮れ、前庭には篝火が焚かれている。

先に袁楊が軒車を降りた。開かれた軒車の扉の向こうからやりとりする声が響いてくるが、その内容までは分からない。じきに降り

るよう恭しく呼びかけられ、青蘭はゆつくりと腰を上げた。

降りる際に手を貸してくれたのは袁楊ではなかった。暗がりでは細部まではわからないが、身につけているものは喪服のようだった。この3日の間にまた新たな被害者が出たのだらうかと、青蘭は被きの陰で眉をひそめた。

「足元にお気を付けてください」

囁く声は低く心地よく響く。発音に訛りはなく、それなりの身分にあるものらしい。かすかに頷き、片手を彼の手に預けたまま玄関に向かう。

磨きこまれた石段をいくつか上がると、大きな扉が開かれたままになっており、そこから灯りが漏れている。その明るさに目を細める。足がもつれそうになったが、相手に悟られずにすんだようだった。

天井からは無数の蠟燭に火が灯されている。その明りの下、ずらりと並ぶ人々は皆服喪の証に身を包んでいる。

それまで預けていた手が恭しく下ろされ、ここまで導いてくれた男が改めて青蘭の前で膝をつく。他の者たちも一斉にそれに倣う。その中には袁楊の姿もあった。

「ようこそお越し下さいました。私は寄州公きよつう寄葉里桂りけいと申します」  
その男こそが寄州公その人だった。

里桂は歓迎の宴を開くこともできない非礼を詫びた。実際はそんなことをして蒼杞方の目を引くわけにはいかない。形だけの謝罪だと承知している青蘭は、小さく頷いてみせる。通常、王女自ら口を開くことはしない。袁楊は立ち上がると青蘭に断りを入れるように浅く頭を下げ、控えるように彼女の斜め前に立った。

青蘭の代わりに袁楊が寄葉家の人々に立つように促し、里桂とやりとりをする。それを青蘭は紗の被きごしに見つめていた。

青蘭を迎えたのは男性ばかりだった。女性が表立たないのは王統家でも同じらしい。部屋の後方の片隅に若い娘が数人控えている。年の頃からして行儀見習いにこの城に上がっている中下級貴族の娘たちだろ。もっと身分の低い者がここに居合わせることはできない。

奥の宮から出たことのなかった青蘭は、寄州公の顔を知らなかった。武人よりは文人らしい佇まいだが、気骨があると袁楊が評していたように柔弱なわけでもなさそうだった。

やがて短い応酬が終わると、里桂はあらためて青蘭に向かって恭しく立礼し、今夜はゆっくり休むよう勧めた。青蘭はうなずく他に術はない。

里桂に呼ばれて一人の少女が進みでてきた。

「この者が案内致します。なんなりとお申し付けください」

少女は深々と頭を下げ、先に立って歩き出す。

ちらりと袁楊をみれば、察していたように目があった。被き越しのため袁楊の方から青蘭の表情は分からないはずだが、まるで承知しているように微笑んで頷いてみせる。

青蘭は小さく息をついて、案内人のあとについていくことにした。

案内されたのは泉水のある庭に面した一角だった。一目で貴賓室と知れる。岑家の邸とは内装も家具も格が違う。

最初に通された部屋には背の低い長椅子や卓子の他に、食事や書きものに適した小ぶりの円卓と椅子、装飾性の高い家具がいくつも並べられている。もっぱら居間としてくつろぐためのものらしい。その奥にさらに扉があり、案内役の少女がそれを開いて「こちらが寝室になります」と云い添える。

彼女も黒地に白をあしらった簡素な喪の装いをしていた。年のころは青蘭よりいくつか下だろう。そろそろ縁談が舞い込みはじめているのかもしれない。

「お食事もじきにお持ちいたします」

青蘭が誰なのか云いきかされているのだろう。仕草や言葉の端々に緊張のいろが滲む。だが根は気丈なのか、臆した様子は見せなかつた。

「ええ、分かりました」

青蘭はほっと小さく息をつき、被きを外しかけた。

それに気づいた少女が慌てて近寄ってくる。

「気が回らず申し訳ありません」

「いいのよ、これくらいは自分で」

気安く自分でできると云いかけて、青蘭はやめた。かえって彼女を困らせてしまいかねないことに気づく。

「ではお願い」

脚の短い長椅子に腰かけて少女に委ねる。

「被きだけでよろしいですか？」

「そうね、髪を下ろすのは食後にしましょう。それからまだ旅装を  
といていなかったわ」

「申し訳」

「いいのよ、私が先に被きをと云ったのだから」

謝罪を封じて青蘭はゆつたりと笑いながら立ち上がる。少女の方

がいくらか背が低い。やわらかく微笑んでみせると、彼女は眼をきらめかせてかいがいしく世話を焼きはじめた。

ようやく部屋着に着替えてくつろいだところを見計らったように食事が届けられた。

給仕にあたるのは全員女性だった。案内役を務めた少女と同じ上等な生地のお仕着せを少女たちも混じっている。その最後に現れた20代半ば位の女性だけが部屋に残った。その女性は自ら手を動かすことはなかったが、采配は無難なものだった。

少女たちよりもさらに上質な喪服に身を包んだ女性がただの給仕役とは思えず、青蘭は食事に手をつける前に彼女の言葉を待った。

「お口にあいませんでしたでしょうか？ それとも食欲が……」

「どちらでもありません」

「では」

「あなたの名前を 袁楊殿の妹御ではありませんか？」

彼女は青蘭の問いかけにわずかに目を見張り、慌てて頭を垂れた。

「はい、祥香しょうかと申します。大変な失礼をいたしました」

「給仕の者が名乗るしきたりはありません。顔をあげてください。」

なんととはなしに袁楊殿と似ておられるような気がしたものだから

青蘭の言葉に祥香はおずおずと顔を上げる。青蘭が小首を傾げるようにして微笑んでみせると、安堵の色が浮かぶ。

降嫁か出家以外のことで奥の宮から出ることのない王女が、王族に準じる王統家とはいえ宿泊した例ためしなどないのだから、もてなす方も戸惑っているのだろう。その上、表向きにはできないためあくまでひっそりと慎ましかに、けれど礼を失することのないようになければならない。

「はい、袁楊は私の兄にございます」

「だから寄州公はあなたを寄こして下さったわけですね」

「はい」

青蘭はいくらかくつろいだ様子をみせて、冷めないうちにと勧められる前に食事に取りかかった。



食後のお茶の相手をしてくれないかと青蘭は祥香に頼んだ。祥香は了承すると、青蘭の案内を務めた娘に茶の支度を命じた。

青蘭に促されるまま長椅子の青蘭の隣に腰かけ、やや落ち着かない様子で運ばれてきた茶器に茶を注ぎ、青蘭の前に置いた。それから自分の分をいれている手際を見て、青蘭は寄州公弟の人なりを理解できそうな気がした。

ひどく緊張しているのか、危なっかしいというほどではないが、心配で目が離せないような心地にさせられる。

同じようなことを綾羅あやろから自分も云われたことを思い出し、おかしさと同時にやりきれなさがこみあげてくる。茶器を手にして一口含み、感傷を払った。

「美味しい」

世辞ではなかった。驚いたように目を睜ひらった王女に、祥香は嬉しそうに微笑む。

「寄州は良質の茶葉が自慢なのです」

「奥の宮で飲んでいたのはこの寄州のものだったのね」

「最高のものが献上されている筈ですわ」

「けれどこれほど美味しいものは初めてよ　あなたは茶を入れるのが上手なのですわ」

「……夫もそれを最初に褒めてくださいました」

はにかんで笑うその顔は、青蘭とあまりと年が変わらないようにも見えた。

「褒めて下さったのはそれだけではないのでしょうか？」

「え？」

「たつてと望まれての縁だったと聞いています」

にこりと笑ってみせれば、祥香はみるみるうちに耳まで赤くなる。「だ、誰がそのようなことを……」

「袁楊殿です」

「兄上つたら……あ、失礼いたしました、取り乱してしまい……」

赤面したままうるたえる様子を、青蘭は楽しそうに見つめる、

「いいえ、気にしないで 兄妹とはいえ仲がよろしいですね」

「はい 岑家とはいえ分家筋ですので、それほど堅苦しい家風ではありませんでした」

「王統家に嫁ぐには大変ではありませんでしたか？」

王統家のなかでも高い家格を誇る寄葉家。夫は公弟に過ぎないとはいえ、生家のようにはいかないだろう。

祥香は恥ずかしそうに「はい」と小さく呟きながら頷いた。

「けれど、夫が力を貸してくださいました。王統家の嫁としてはまだまだですが、なんとかやってこられました」

「それは素敵ね」

どうしても碧椋のことが思い出され、青蘭は視線を落とす。力と  
なってくれる人が傍にいてくれるだけでどれほど心強いことか。

一人では成しえないこととは分かっているからこそ、こうして寄  
州まで足を運びもしている。それでも、この人という特別な支えの  
有無の大きさをしみじみ痛感する。

足が萎えそうになるときにはそっと肩に手を置き、持ちこたえた  
時には子供にするように頭を撫でてくれる人。

二人で逃げ延びた日々は思い返せば長いものではなかったが、雪  
蘭以外の人間にこれほど心を預けられるようになるとは思ってもしな  
かった。

「失礼ですが、殿下がお尋ねになりたいことは寄州公のことで  
はありませんか？」

「え？」

「義兄あにから私なりに包み隠さずお答えするように申しつかつており  
ます」

青蘭はひそかに動揺しながらも、できるだけ笑んだまま小首をか

しげてみせた。

「……寄州公がそのように?」

「はい。きつと殿下は私を呼びとめになられて、義兄のことをお聞きになられるだろうからよくお答えするよつにと」

「寄州公という方は食えないお方のようですね」

苦笑する青蘭に、祥香は「はい」と微笑んだ。

池の中ほどに設けられた四阿あやまやには、畔あなの緑陰を過ぎ水面みなもを渡った涼風が吹き抜ける。

四阿の中央には大理石の円卓が置かれ、下座にはすでに一人の男の姿がある。視界を遮るものない四阿と畔あなを繋ぐすのは一本の透き廊のみ。

他者の耳を憚る必要はなく、警護もしやすい。なおかつ池を隠すように茂る木々が外からの視線を遮る。

青蘭は城と四阿をつなぐ細い透き廊を案内されながら、これほど適した場所はないだろうと全体の様子を眺めていた。四阿が近付くにつれ、椅子にかけた男が欠伸をしていることに気づく。先触れを知らせる銅鑼はすでに鳴らされている。さてさてと、青蘭は口の端を持ち上げた。

先導役は昨日の少女だった。

優雅に衣の裾を引く足の運びは堂に入っている。行儀見習いにかつてからそこそこ経っているのだろう。

少女は透き廊を渡りきると、恭しく王女の到着を告げる。

奇州公きしゅうこうは立ち上がって青蘭を迎え、上座の席につくよう促し少女を下がらせた。

ゆつたりと向き合うと、里桂りけいは不躑な視線を誤魔化そうともせず  
に抜け抜けと云い放った。

「これはこれは 麗しいご尊顔を拝せるとは思ってもおりませんでした」

青蘭は被かすきを取り払っていた。髻かみじを用いて髪を高雅に結びあげ、  
宝玉を一切用いない代わりに細工の見事な歩揺を挿す。微かに身じろぎするだけで、歩揺が音もなく揺れる。

「王女おんむすめが面おもてをさらしてはならないという例ためしはありません」

黙していれば彫像の如き白いおもてに笑みが浮かぶと、清婉にし

て典雅な王女の顔になる。

里桂はわずかに眉を上げただけで薄く笑い、もつともらしく頷いてみせる。

「いかにも仰せの通りにございます」

そしてまた青蘭の顔をしげしげと無遠慮に眺め、口の端を歪めた。「さすがあの端麗な東宮の妹君であらせられる。葉で最も貴き姫は国一番の美姫でもあられるらしい」

いかにも感嘆したような口ぶりの裏にこめられたものに、青蘭は顔色一つ変えない。

「この身に流れる血の外にも価値があるならそれは重畳。私の価値はその2点のみですか」

「今のところは。しかし私がその三つ目となりましょう」

女王の盾として選ばれることを既に前提としたような言葉にも、青蘭は眉一つ動かさなかつた。

「盾の候補に名乗りを上げるのはあなたの権利です。ですが、選ぶのは私の権利です。今はその心意気のみ買っておきましょう」

「ならば私にも名乗りを上げない権利もあります。となれば、王統家八門の支持を集めることは難しくなりましょうな」

あからさまな言葉に、青蘭は動じない。笑みを深め、なにかを堪えるように唇を引き結ぶ。

「東宮があのような仕儀であり、もう一人の王女がその妻である限り、西葉にはもう私しか選択肢はありません。あなたが私を支持せずとも、他の者までそうとは限りません。それとも、東葉の“青蘭姫”をお招きしますか？」

東葉に下るといふ選択肢もないわけではない。だが、徒に矜持だけは高い西葉貴族がそれを容易く受け入れられるはずもない。

「それも一手でしょう。あいにく、私は八公であることに価値は感じていない。それは王家の血筋においても同じこと。そもそもあなたは本当に“青蘭姫”でいらっしゃるのですかな？」

里桂は肘掛に凭れかかるようにして、斜めから青蘭を見据えて唇

を歪める。

青蘭は困りましたねと微笑する。

「私は青蘭以外の何者でもありません」

「その証拠は？」

「私自身です。では訊ねますが、あなたには自身以外に寄葉里桂だという証がありますか？」

「ありませんね。だが、他の者たちは私を寄葉里桂だと見なししている」

「私とてそれと同じことです。けれども一つ、私だけに身の証をたてる手立てがあります」

里桂は「ほう」と小さく嗤う。

「お聞かせいただけましょうか？」

「私ならばたとえ東葉王子を夫に迎えて姫を成せます」

「東葉にはすでに何人も直系の姫が落ち延びておられるが、姫が生まれた例はないはずですよ」

「私は東葉に落ち延びるではありません。たとえ夫が男子しか生まれないはずの東葉王子であっても、姫を生むことができると思っています。それは私が“葉”の王女であり、女王となる者だからです。御祖たる女神が真実その裔の娘として私を認めてくださるなら、それ以上の証はないでしょう」

不思議なほどの確信満ちた言葉だった。根拠はない。だが、碧椋との間に生まれる最初の子供は必ず娘のはずだ。不安も迷いもなかった。

沈黙が落ちる。二人の間を風が吹き抜け、池の面を埋める蓮の葉と花を揺らす。心地よい風に、自然と目を細める。

そんなゆつたりとした青蘭の姿に、いつしか里桂の顔から笑みが消えていた。

「東葉の王子を盾となされば、彼の国をも治めることができましょうな」

「私は“葉”の女王となるのです」

本当に自分の口から紡がれている言葉なのだろうか。他人事のよ  
うにそんなことを思いながらも、躊躇いも戸惑いもない。不思議な  
心地だった。

里桂はゆっくりと姿勢を正す間も青蘭から目を放せなかった。

里桂を映す瞳はまっすぐで淀みなく、それでいて彼自身を透かし  
て遙か遠くを見つめているようでもあった。

「それが“あなた”の“意志”ですか？」

「意志ではありません。あるべき姿です」

そう云って微笑んだのは、確かに青蘭の意志だった。

里桂はしばらく黙したまま王女を見つめていたが、やがてゆっく  
りと立ち上がり、その傍らに膝をついた。

「奇葉里桂、宝印をあなたに捧げましょう。しかし、お忘れなき  
よう。それはあなたが蒼杞そうつせよりはマシだろうというだけのことです。  
あなたにそれ以外の価値はない。今はまだ」

「心得ました」

青蘭は静かに頷き、差し出されたそれを受け取る。

表には神をあらわす金の印字に銀の書がしたためられ、その裏に  
は里桂の名が記されている。

彼女はしばらくそれを見つめたのち、丁寧に畳んで懐中した。そ  
れを見届けた里桂は席に戻る。

「昨夜、祥香に粗相はありませんでしたか？」

「いいえ。気持ちの良い方です。心ゆくまで話すことができました  
あなたのことも」

穏やかな王女の顔には、あどけないような笑みが浮かんでいた。

「あれは腹藏なく話すことのできる者です。弟は良い嫁を選んだも  
のです」

「里桂殿の夫人はどのような方なのですか？」

「いい女です、私にとってあれ以上の女はいない」

にやりと口の端を歪めた里桂に、青蘭は笑いだす。

「本当にあなたは食えない人ですね」

「それだけが取り柄です」

里桂はわざとらしいほど恭しく頭を垂れてみせる。

青蘭は小さく笑いつづけながら、ようやく椅子の背にほっと身を預けることができた。

そこへ、祥香が姿をみせた。彼女がもたらしたのは、岑州からの急使の到着の報せだった。



祥香はまず上座の青蘭に正式な立礼で頭を垂れ、それからあらためて義兄に向き直った。

彼女が昨日に引き続き饗応の責任者として透き廊に控えていたのは青蘭も知っていた。正式な賓客の持て成しは州公の正室が担うものだが、青蘭の来訪はあくまで非公式なものだから公弟の妻が務めるのは筋としても通っている。

「岑家当主袁柳さまよりの急使がつい先ほど到着されました」  
里桂は眉を動かし、ちらりと青蘭を一瞥した。

岑州からの急使と知ったとたん、彼女の顔がさつと青ざめたのを見逃さなかった。

先ほどまでの余裕はどこへやら、顔を強張らせ切迫した眼差しで祥香を見つめている。明らかに心当たりがあり、同時にそれをひどく恐れていたような様子だった。

「それは私にか、それとも？」  
思わせぶりな里桂の視線の移動に、祥香もつられて青蘭を見る。

二人から注目されても、青蘭には取り繕えるだけの余裕はなかった。祥香は王女の狼狽ぶりにその傍に近寄り、細い肩にそつと触れた。

「姫さま、如何なさいました？」

「大丈夫です……それより、急使の目的は？」

祥香のおかげでやや落ち着きを取り戻し、先を促す。その声は上擦りかすかにかすれていた。

「お二人と袁楊殿にお伝えしたいと」

「ではここへ袁楊殿にも来ていただきなさい　　姫、使者との接見に私も居合わせてもよろしいですか？」

「ええ」

使者の目的が3人に知らせをもたらすことだったと分かった時点で、青蘭はいくらか自失から回復していた。

「ここへ袁楊殿と使者を通してください」

「承りました」

祥香はまだ青蘭を案じる気振りを残しながらも、首肯して下がった。

その後ろ姿を見送る青蘭の顔には、まだ不安と恐れが拭いきれずに残っている。里桂はそれをなにも云わずに興味深げに眺めていた。

水面<sup>みなも</sup>を埋める蓮の葉や花卉に宿る露玉をきらめかせていた陽射しは少しづつ薄れつつあった。

じわじわと蝕むような暑気を払ってくれていた微風が、触れていく頬を意識するほどに強さを増す。

「荒れてきそうですね」

青蘭はほつれた一筋の髪を指に絡める。その指先を見つめながら、里桂がふと呟いた。

短い言葉が不吉に聞こえたのか、青蘭はぴくりと肩を震わせて顔を上げる。

唇は動いたが、言葉にはならなかった。白皙の面はまだ青ざめている。

里桂は青蘭がいかにして東葉王都翠華<sup>すいか</sup>から落ち延びたのか、その詳しい経緯を知らない。廃太子紅桂<sup>こうけい</sup>の遺児である雪蘭<sup>せつらん</sup>が岑家の養女となり、奥の宮に上がって青蘭に仕えていたことも掴んでいなかった。

だが、従姉妹同士でもある二人が入れ替わり、脱出に成功した青蘭姫が岑家の庇護のもと岑州まで逃れてきたと聞いても意外には思わなかった。

紅桂が死去して既に10年ほどになるが、彼がどのような置き土産を残していったとしても驚くことはない。

凡愚で怠惰だった亡き先王は紅桂の同母弟だった。紅桂はそんな弟とは比べものにならない。はっきり言ってしまうえば、傀儡に相応しい暗愚な王ばかり輩出してきた西葉王家のなかでは出色ともいえる逸材だったはずだ。

そんな彼が突然王城で死んだと聞いた時、その真相を疑わなかったものが一人でもいるだろうか。その死が突然なものであった分、落胆とひそかな希望を生んだ。

あの彼が、なにも残さずに死んだはずがない。根拠のない、妄想にも似たそんなくだらない想いを里桂は捨てきれずにいた。

今回の蒼杞の暴走は里桂の予想外のことだった。事態を知ったのち、王都を脱出するのがせいっぱいだった。東葉に嫁ぐ青蘭姫を言祝ぎ見送るために、六華ろっかには主だった貴族の当主達が集められていた。

その後の貴族たちの動揺を見越したように、蒼杞は事前からすでに手を回していたらしい。蒼杞の動きがはっきりした後も、ほとんどの貴族たちは事態の推移を見守るために王都に残っていたが、その実態は兵の監視下に置かれ動けなかったというのが近い。

敗戦後、東葉の指示の下に貴族が各自で持っていた軍もほぼ解体されていた。それは王家とて同じだったはずなのに、蒼杞には両国の王都を抑えられるだけの兵力が残されていた。武装を解かれていた貴族には、蒼杞の軍に対抗する力はもはや残されていなかった。

蒼杞率いる西葉軍の東葉における肅清は狂気じみていた。さらにその有様が“公式”に発表されるに至って、里桂は六華から脱出することに決めた。同時に東葉王子明柊が巻き返しに転じたらしいという報せも掴んでいた。蒼杞が帰国すれば、どのような事態が起こるか想像もつかない。首をすくめて嵐をやり過ごすには、六華は台風の目に近すぎる。

ほぼ同じころに岑家の先代当主達も息子たちを密かに地元へ帰し

ていたらしい。その後の肅清を思えば、英断だつたに違いない。

明柊に敗れた蒼杞はあつさり帰国した。もう少しねばつて戦力を消耗して欲しかった里桂としては残念極まりないが、常識的に見れば賢い判断ともいえる。

蒼杞は今のところ狂つてはいない。狂気じみた振舞いではあるが、残虐なりに正常だつた。だからこそ、たちが悪い。しかも、決して暗愚なわけでもない。諸侯を出し抜くだけの狡猾さも併せ持っている。

両国を揺るがしている騒乱が、まさか蒼杞と明柊の結託によるものだとは思ひもしなかつた。岑家から真相を知らされた里桂は、これまで用心深いつもりでいた己がまだまだ甘かつたことを痛感していた。

帰国した蒼杞はまだ王都にとどまっている。その前に国元にかえつた貴族はそう多くはない。謀反として討伐に出る動きに出ないのは、東葉の出方を見ているためなのか、それとも他に考えのあつたことなのか。

どちらにしても貴族方の兵力は脆弱で、立て直すにはさらに時間を要する。派手に動けば蒼杞に狙い撃ちにされる危険もある。脱出に成功し、なおかつ協同步調をとれる勢力はさほど多くない。それでも何もせずに事態の経緯を見守つてばかりいるわけにもいかない。そこへもたらされたのが、青蘭姫が実は無事に西葉に帰国していたという報せだ。それに紅桂の遺児が噛んでいたと聞けば、意外でもなんでもなかつた。

王女と雪蘭はよく似ているのだとも聞いた。

表情を殺し黙していれば彫像のような容貌は、神殿に納められた神像が動き出したと云つてもおかしくないほどに整っている。女王然とした風格を感じさせるかと思えば、微笑むと年の頃よりもあどけなく見えるほど邪気がない。

彼女と入れ替わり、東葉に残っているというもう一人の娘はどのような表情をみせるのか。

「暗雲を吹き散らす風を起こすのは、姫、あなたなのですよ」

にやりと口の端を歪めてみせれば、青蘭はかすかに目を瞠り、それから風の吹いている方を向いて微笑んだ。

「風を起こすには鞆ふいしが要ります」

「姫のためならばいくらでも踏ませていただきますよ」

「ええ、お願いするわ」

調子づく里桂に、青蘭は目を細める。

愛妻家の標榜に偽りはないつもりの里桂だが、その笑顔には悪気が気がしないのは男としてのさかなのかどうかのか。

どちらにせよ、彼女が持つ武器は二つ。その血筋と美貌。それを活かさない手はない。

四阿あずまやに先にやってきたのは袁楊えんようだった。

まずは青蘭に立礼し、次いで里桂りけいにも会釈する。里桂もそれに目礼で応じ、隣の椅子をすすめた。

青蘭が袁楊と顔を合わすのは、昨夜ここに到着してから初めてのことだった。見知った顔に安堵する半面、気が緩んだ分だけ不安が戻ってきてしまう。

「いったい何事だろうな」

青蘭の心情をまるで代弁するように、里桂が袁楊に話を振る。その口ぶりはこれまでとは違いいくらかくだけており、二人の間柄を示すようでもあった。

「まずは聞いてみないことにはわかりませんね」

袁楊は鷹揚に寄州公に微笑みかける。

年齢は袁楊のほうがいくつか上だが、貴族としての格は里桂のほうがはるかに高い。袁楊の口ぶりは里桂ほどくだけてはいないが、親交が窺われる程度には和やかだった。

「そんなことは承知している。継ぎ穂が分からんか」

「おや、珍しいこともあるものですね。気をつかって下さったのですか」

人の悪い笑みを浮かべる袁楊に、里桂は苦虫を噛み潰したような渋面をつくる。

「誰がそなたに」

「分かっていますよ。青蘭さまに、でしょう。あなたはそう見えても女性には気配りを忘れませんかからね」

「袁楊殿」

「褒めてさしあげているのですよ。妹も義兄あにであるあなたのお氣遣いには感謝のしようがないとよく申しておりますしね」

軍配がどちらに上がるかは明白だった。

口を開いても口クなことにならないと思ったのか、里桂は険しい顔で口を噤んでしまう。それを気にもとめず、袁楊がいかに妹である祥香が義兄に感謝しているかを話し続けるものだから、青蘭はたまりかねて笑い出してしまった。

「本当に人が悪いというのは、こういう人間のことを言うのですよ、姫」

「その年になつても褒め言葉を素直に受け取れないとは、相変わらず可愛らしいところがおありですね」

「そなたのそれは褒めているとは言わぬ」

「ではなんだというのですか？」

「」

里桂は反論しようとして口を開いたらしいが、結局言葉が出てこずまた黙りこんでしまう。

袁楊は涼しい顔で睨み殺すような視線を受け流し、青蘭に微笑みかける。青蘭もそれに応じながら、いつまでも笑いつづけるのも悪いと思うのだが、なかなか治めることができなかった。

「袁楊殿の云う通りでした」

「それはよろしゅうございました」

「 どういうことだ、袁楊殿」

「里桂殿は信用できる方だと申し上げただけです」

にこりと返されて、里桂はついに口も開けなくなった。

青蘭は笑いを押し殺しつつ、気を逸らそうと透き廊の方を見た。

ちょうど祥香が誰かを案内して渡ってくるころだった。彼女の後に続くのが急使なのだろう。

急使と聞いて碧柩のことを真っ先に思い出してしまったが、他にも気になることは山ほどある。蓮霞と袁柳に彼のことは託してきたのだから、今はこの先のことに意識を集中しなければいけないはずだった。

「お越しのようだ」

気を紛らわせるような里桂の言葉に袁楊もそちらを見、動かなくなつた。次第に訝しそうに眉がひそめられていく。

日差しはすでに雲に隠され、水面を埋める青々とした葉が風にさざめき、花が揺れる。池のほとりを囲む木々もうなりはじめていた。祥香の足取りは青蘭を案内してきたと変わらなかつた。早くもなぐ遅くもない。それなのに焦れるような想いが何故こみあげてくるのか、その理由が混乱しているせいか青蘭には見いだせなかつた。ようやく祥香と使者が四阿にたどりついた。祥香は浅く頭を垂れて退き、後には使者だけが残される。

岑家からの正式な使者に相応しく、身綺麗な服装の若者だつた。よく日に焼けた精悍な顔に、思慮深げな面差し。

彼はまずは青蘭に恭しく立礼し、次いで寄州公と袁楊に会釈した。袁楊も目礼を返しながら、ちらりと青蘭を一瞥する。青蘭は呆然自失の態でいる。口を半ば開けたままぽかんと使者の顔に見入っている。

一方の里桂はそんな王女の姿に気付いていないようだつた。もたらされた報せに気がはやっていているらしい。

使者は持参した書簡を里桂に渡した。王女である青蘭にじかに手渡すのは礼儀にかなわず、袁楊より里桂の方が身分は高い。妥当な選択だつた。

里桂はそれを受け取ると青蘭に断りを入れるように会釈してみせ、いそいそと封を開ける。その際にも青蘭の異変には気付かないようだつた。

使者は尋ねられない限り自分から名乗りはしない。故に袁楊も黙っているが、王女の様子を見ればわざわざ確認するまでもないらしい。

むしろ彼が気にかかるのは彼女のその動揺ぶりだつた。それに、もたらされた報せそのものも無視できない。まずはそれが優先されるべきである。

「里桂殿、なんと？」



「ああ」

書簡を読み終えた里桂は難しい顔でそれを袁楊に手渡す。受け取った袁楊は青蘭に目礼で断りを入れる。王女はそれどころではないようだったが。

文面は長いものではなかった。

2、3度繰り返し文面を追い、袁楊は顔を上げた。青蘭は相変わらず言葉を失っている。里桂は難しい顔で考えこみ、彼は口元に笑みを浮かべて彼女を見つめていた。

ああ、やはりそういうことか。

袁楊は事態とは全く離れたところでそう納得し、書簡を王女に渡すことを諦めた。

「青蘭さま　青蘭さま」

二度、強い口調で呼びかけるとようやく彼女は我にかえった。

自分と呼ぶ袁楊を驚いたように見つめる。現状への認識はまだ戻っていないらしい。

「岑家からの報せです　気を鎮めてお聞きください」

「……ええ」

青蘭はそれでもまだ彼のほうへ視線を走らせる。袁楊はそれを窺めるように眼を眇めた。気付いた青蘭はびくりと肩を震わせる。

「きかせてください」

「では　東葉の岑公は“青蘭姫”を女王として推戴し、自身はその夫となるうとしてしていることまでは姫もご存知でしたね。彼は東葉の国内情勢を收拾し次第、“葉”の統一をはかると　西葉へ再び軍を向ける意向を明らかにしたようです」

青蘭は再び自失したように眼を瞠った。瞬きを数度繰り返し、ようやく腑に落ちたように表情を取り戻す。

「雪蘭を担ぎあげて、ということですね」

明柎がやるうとしていることは鏡映しのように自分たちと同じだった。今さら驚くことではない。だが、青蘭の心が受け止めきれなかった。

ふわりとその体が傾ぐ。

「青蘭さま」

「姫」

慌てる里桂と袁楊をよそに、控えていた使者である彼がその体を抱きとめる。

椅子から崩れ落ちそうになった体の肩を支え、ごく自然に抱き寄せる。ぐったりと寄り掛かる体からは力が抜けてしまっていた。

「気を失われたようです」

そう短く云って、両腕で抱き上げる。その一つ一つの仕草は壊れものを扱うように丁寧だが、尊い体に触れているという畏れはまったく感じられない。

二人ともにそんな彼の行動を咎めることができなかった。

あまりにも自然で、いかにも当然の自分の権利だともいうように彼は振舞っていた。

「どちらへお運びすればよろしいか？」

冷やかな一瞥を受けて、里桂はようやく我に返ったように椅子を立った。

「こちらへ」

と先に立ち、案内する。そのあとに彼は堂々といっていく。

四阿に残りそんな後ろ姿を見送った袁楊は、名乗るまでもなくその存在感だけで人を従わせる力を持つ彼という人をはじめて知ったのだった。

目を覚ますと、薄暗い寝台の天蓋が目に入った。寝台の傍らの小卓に置かれた燭台の灯りがゆらゆらと揺れている。

青蘭がゆっくり身を起こすと、部屋の隅に控えていたあの少女が急いで寄ってきた。

「ご気分はいかがですか？」

「えっ」

青蘭は戸惑う。彼女が自分を案じてくれていることはわかるが、その理由に見当がつかなかった。

「私は何故ここに……確か、四阿にいて」

「お倒れになられたそうです　どうかこのままです。祥香さまをお呼びしてきます」

青蘭が首肯するのを確認して、少女は退出し、入替るように祥香が入ってくる。祥香は青蘭の顔をそっとうかがい、血色が戻っていることにほっとしたようだった。

「今、温かいお飲み物をお持ち致しますので」

「祥香殿、私はいっただい？」

「四阿でお倒れになられたのです、岑家からの急使とお会いになられた際に」

「　ああ……」

ようやく思い出す。使いが来て、報せがもたらされた。

祥香はその内容を知らされてはいないようだが、倒れてしまうほど衝撃的な内容だったのかと案じてくれているらしい。遠慮がちに青蘭の顔をうかがう眼差しには労りがにじんでいる。

雪蘭のことでも動揺してしまったが、覚悟をしていた事態でもある。それをもたらしたのが彼でなければ卒倒したりしなかっただろう。

「もう大丈夫です」

「なればよろしいのですが」

それでも気がかりは晴れないらしく、祥香の表情を曇らせたままだった。

そこへあの少女が盆を手にして戻ってきた。湯気とともにたつ香氣が、すばやく室内にも広がる。

「良い香りですね」

「香草茶です。お体が温まります」

差し出された茶器を受け取り、青蘭はそつと一口口に含んだ。焼けるほど熱くはないが、温くもない。絶妙な熱さにそつと二人に微笑んでみせた。

ゆつくりと飲み干す頃には、これまで冷え切っていたことを改めて思い出すように温もりが巡り、気分もほぐれる。

表情が和らいだのを見計らって、祥香が囁いた。

「急使の方がずっとお待ちです。お会いになれますか？」

いつかあの使いが位のある女性に直接会うなど異例なことだが、事態が事態だけになにか特別な目的があるのだろう。二人はそう解しているのか、怪訝な顔はみせない。

「ええ、そうね。居間へ通して……私も着替えなくては」

さすがに夜着で会うわけにはいかない。もしそんなことをすれば、身の危険を覚えずには済まないだろう。

室内着に着替え髪を整えてようやく支度が整う頃には、とつくに“彼”は居間へ案内されていた。

長椅子におちついた“彼”は優雅に茶器を手にしている。出で立ちが昼に会った時のままで、未だにその正体を知るのは青蘭と袁楊だけらしい。

居間の片隅にはあの少女が控えているが、その客人が気になるら

しく、ちらちらと目をやらずにはいられないようだった。彼はそれに気付いているのかどうなのか、一顧だにしなかった。

青蘭が寢室から出てくると、彼は音もなく立ち上がって恭しく立礼してみせた。青蘭はどう返せばいいか分からず、とりあえず人払いをと祥香と少女を下がらせた。

「あの……」

二人きりにはなったものの、どういうわけか青蘭は体を動かさない。困り果てて立ち尽くしていると、“彼”がくすりと笑った。

「掛けぬか？」

「ええ」

戸惑いを引きずったまま、彼の向かいの椅子に腰かける。

失神したあと半日近く眠っていたらしいので、実質的には寝起きに近い。それでも見苦しくない程度には身繕いをしたはずだ。それでも何故か髪や服が気になって、まともに顔を上げられない。

こつりと硬質な音がして、青蘭はつられて顔を上げた。“彼”が青蘭の分の茶器を卓上に置いた音だった。

「……ありがとうございます」

とりあえず礼を述べ、茶器に手を伸ばす。器に指が触れる寸前に、すかさず彼に手首を押さえられてしまった。

「なにを」

意図が読めずに視線を上げれば、予想以上に間近で険しい眼差しとぶつかつた。反射的に体を引こうとしたが、彼は許してくれない。「存外あなたは冷たいのだな」

怖くなるほど冷やかな光を帯びた目だった。その言葉も皮肉っているわけではない。無言で問い質すような剣呑な顔つきだった。

「え？」

手首を握る力は驚くほど強い。身の危険を感じて手を振りほどこうとしたが、痛みが増しただけだった。

「もっと嬉しそうな顔を見せてくれるかと思っていたが、吾の思い違いだったらしい」

「そんなわけ」

「もう寄州公に心を移したか？」

「なっ……」

あまりの言葉に青蘭は絶句した。言下に否定しようとしたが、言葉が出てこない。まさか初っ端からそんな疑いを向けられるとは思ってもいなかった。

そんな彼女の様子をどう受け取ったのか、彼の目つきはますます物騒なものとなる。

「そのようなことは許さぬ」

彼の誤解がずいぶんと飛躍していることだけは確からしい。おそらく寄州公が盾として名乗りを上げること希望していると聞いてやってきたのだろう。

四阿やこの居間での様子、その上青蘭の動きを封じる力強さから推すに、結果的に案じたような後遺症などはなさそうだが、それでも無理を押しつけてくれたに違いない。

それはそれで嬉しいことだが、感情的に激した彼がしばしば暴走することを知る青蘭にとってこの状況は非常にまずい。その被害を受けるのは自分しかない。

縁談が持ち上がった時の彼の評判は温厚な人柄だというものだった。部下に接する様子からしても、感情的になるようなことは滅多とないのだろう。なのに、青蘭が絡むとそれも怪しくなる。もしかすると彼自身、そんな自分に戸惑っているのかもしれない。

苛立ちに端正な顔が歪む。青蘭が身動きできずにいると、もう一方の手が肩に置かれる。不自然な姿勢で抱き寄せられる形になり、青蘭は片手を卓についた。

「何故なにも云わぬ」

云ったところで届くだろうか。どう見ても彼は静かに怒り狂っている。人の言葉に耳を貸さない人間ではないが、この状況ではどんな言葉も弁解としてしか受け取ってくれないような気もする。

目を逸らせば負けてしまいそうだが、そうしないでいようとする

と嫌でも睨みあうようになってしまふ。こんな状態で彼を宥めようとしても無理に近い。

「!?!」

青蘭は自分から唇を重ねていた。彼の顔は目の前にあつたし、逃げられないなら他に手はない。幸い自分からこんなことをするのは2度目だったので、最初の時ほど躊躇うこともなかった。

手首を握る力が少しずつ緩み、かわりに肩に置かれた腕が背に回される。そつと顔を離そうとすると、逆に唇を押しつけられ、さらに深く重ねられた。

抱きすくめるように両腕が回されると、その拍子にかちやりと茶器が音をたてた。手に濡れたものがかかる。

「っ」

見れば、茶器がひっくり返り中身が青蘭の指先にかかっていた。

「火傷したか？」

自分で確かめるより先に、彼にその手を取られる。もともと温めに淹れられていた茶はすつかり冷めていた。

「大丈夫　もう冷めています」

「そのようだな」

かまわずに濡れた指先を舌で拭われて、青蘭は耳まで真っ赤になる。手を引きたくてもしつかり手首を握りこまれている上、青蘭自身の力もさほど入れられなかった。

彼は最後の一滴までしつかり舐めとると、二人の間を阻む卓子を一瞥した。

「邪魔だな」

「……そうですね　え？」

彼は青蘭の両脇に腕を回すとひょいと抱きあげる。そのまま軽々と卓子を越させると、長椅子では自分の膝の上に座らせた。

体ごと抱きすくめられそうになり、青蘭は慌てて押しやるつもり。そもそも座っているのが彼の膝の上だから、それにも限界があった。

「ちよつと……」

「なにか不都合なことでもあるのか？」

からかうような彼の目に、さきほどまでの怒りや苛立ちの影はない。それでも怖いほどだった彼の様子の記憶の新しい青蘭は、その問いに抗うのをやめた。

「別になにも」

「寄州公のことも？」

わずかに抱き寄せる力が増す。青蘭は慌てて首を振った。

「当然でしょう。それにあの人には正室がおられます」

「離婚すればすむ」

「里桂殿はご婦人に、その、惚れこんでおられます 私ものろけられましたもの」

「恋愛と結婚は別だ ましてや、今回のことはことがだけに、な恋愛と結婚は別。そんなことは青蘭も分かっている。分かっているが、それを彼の口からは聞きたくなかった。胸が痛み、つい眼を逸らせば、強引に唇を奪われる。それに抗おうとすると、乱暴に顎を掴まれた。

「それに、里桂殿、だと？ たった1日で随分と親しくなられたようだな」

「下種の勘ぐりはやめて」

「下種だと？」

「そうよ」

結局また睨みあうこととなってしまふ。今度は至近距離なだけに剣呑な空気を誤魔化すこともできず、青蘭は怒りと情けなさで悲しくなってきた。

「だいたい、何故そんなことをあなたが云うのですか。私はあなたを盾に選ぶと決めたことを撤回したりしません。寄州公だけでなく他に名乗りを上げる人がいたとしてもです。あなたにはそれで十分でしょう」

「なにが十分なのだ？」



まっすぐに見つめてくる彼の眼は真剣だった。怒りもあるが、それ以上になにかを探し求めるような気色がある。ただそれがなにか見当もつかない。

「なにがって……」

口ごもる。答えようとすれば、自分の想いまで明かしてしまいかねない。それだけは避けたい青蘭は、唇を噛んで俯く。

彼の膝の上に座らされているので、どうしても青蘭の顔の方が上にくる。その分、下から顔をのぞきこまれるのを避けきれない。案の定、彼はそつと青蘭の顔を両手で包み込むようにして、唇を啄ばんだ。おとなしく受け入れれば、さらに何度も繰り返される。その仕草はひどく優しく、甘いような勘違いさえしてしまいそうだった。

ようやく唇がはなされてこわごわと目を開くと、間近にのぞきこむ瞳があった。他人の眸に自分の姿がうつりこんでいるところなど見たことなかった青蘭は、それだけでうるたえる。赤くなってしまったような顔は、ひどく惨めだった。

「蓮霞殿から聞いた」

「なにを」

「あなたが吾の枕元で泣いていたと」

それが何のことか分からない青蘭ではない。ましてや彼の声はいやに甘やかに響く。思わず身を固くすると、頬に唇を寄せられる。

「吾の意識が戻りそうになかったからと、まさかその心が変わったりはしなかっただろうかとつい疑った。すまなかった」

唇を寄せたまま話すので、くすぐったくて大きな体を押しやる。

彼はおとなしく身を引くかわりに、青蘭の顔を真正面からのぞきこむ。

「別に詫びられるようなことでは……」

「下種の勘ぐりだと詰ったではないか」

「だって、そうでしょう」

事情がどうであれ、あれはそうとしか評しようがない。それを彼

も承知しているらしく、ばつの悪そうに苦笑する。

「だから詫びたのだ　許してくれぬのか？」

「別に許すも許さないも」

そんな権限は自分にはない。それを承知で許しを乞うのは悪趣味ではないか。そんな非難を感じてか、彼はなにやら困り果てたような顔をする。

「やはりそうなのだ……呆れるべきか嘆くべきか微妙なところだな」

「なにが……」

「吾にあれだけされておいて、まだ片思いなど思っていたなど、な」

「べ、別に私が一人でどう考えようと私の自由でしょう」

呆れ果てたような言葉に、青蘭はやけになる。想いを寄せたからと云って、今のところは彼の不利益にはなっていないはずだった。そうでない以上、非難される覚えはない。

「それはそうだが、思い違いは困る。それはあなただけの問題ではすまぬからな」

「思い違いって……」

「まだ分からぬと？」

青蘭を見つめる瞳には呆れつつも面白がるような光があった。

「やれやれ、まだ足りぬということか」

溜息まじりに囁きつつ、吐息が頬に触れ、耳にかかる。温かく柔らかな感触が耳朶を探る。その感触に青蘭は身をすくめて顔を背けようとしたがかなわなかった。

「た、足りないのは言葉でしょう　あなたがなにを云おうとなさっているのか分かりませんもの」

思いきって云うと、拘束がゆるんだ。ほっとする顔を彼がのぞきこむ。

「まったく？」

「私をからかっていることくらいは分かります」

「……そういえば、そういうことには聡かったな」

「悪うございましたね」

「いや、それはそれでいい。からかいがある」

「」

「怒るな、今はそういう話ではない」

納得いかなげに、それでも青蘭はしぶしぶ頷いた。その頬にまた口づけされる。

「何故、吾がこのように振舞うと思う？」

「私が婚約者だからでしょう」

事態がこうなってもその婚約がまだ有効なのかどうか、青蘭にも分からない。ただ、盾に彼を選ぶと約束した以上、婚約しているのと変わりはない。

「それはそうだが」

質問しておいて、彼の方が困惑している。どうやら導き出したい答えとは遠いらしい。だが、遠まわしに問われて困っているのは青蘭も同じだ。

「それと、あなたが男性だから？ その……」

顔を赤らめて口ごもるが、その理由はただ単に恥じらいからだ。花嫁教育の一環として閨房のことも含まれる。男性特有の欲望というものについての知識もある。ただ、それを口にするのはさすがに憚られる。

「いい、云ってくれるな」

「そうですね　でも、そういうことも、婚約している私なら許されるからでは？」

「それではまるで吾があなたを捌け口に行っているようではないか　頼むから人聞きの悪いことは申してくれるな……それよりも、本気でそのように思っているのか？」

根本的な問題に気づいたように、彼は深刻な顔をした。

「違うのですか？」

「違う」

言下に強い口調で否定されて、青蘭は怯んだ。どうやら今の答えはいたく彼の気に障ったらしい。鼻白んだ青蘭の顔を見て、彼は深々と溜息をつく。それがまた彼女の歪な緊張につながることに彼は気づいていない。

「では逆に問うが、あなたは吾以外の人間にこのようなことをされたら如何する？」

「それは……」

「平気か？」

「まさか」

「嫌か？」

唇が触れあいそうなほど間近で眸をのぞきこまれ、青蘭は小さく頷くしかなかった。息苦しいような得体の知れない感情が渦巻く。

「でも、あなたがあのまま目覚めなかつたら、他の人を選ぶしかありませんでした」

「それは仕方ないことだ。あなたは王女故、結婚する義務がある」

静かな言葉に青蘭はまた首を振った。

「……せめて、あなたとの約束は果たしたいと思ったからです。この事態を治めて、平穩を……」

はじめて涙が頬を伝った。それをすくいとつてくれるのも、熱い唇だった

青蘭はそつと身をよじり、彼の体から離れようとする。その仕草に気づいた彼はそれを封じようとしたが、その前に逆に封じられてしまった。少しだけ自由を取り戻すと、その細い腕を彼の首にまわす。逞しい肩に顔を埋めるとわずかに汗の匂いがした。絶対に離れないというように渾身の力でしがみつく。

ようやく彼がここにいるという実感を噛みしめる。

「良かった、ご無事で すき……好きです、だから……」

嗚咽がこみあげてきて、後は言葉にならなかった。肩から引きはがされそうになって、必死にしがみつく。煩わしいと思われるかも

しれないという恐れはどこかへ行ってしまっていた。ともかく今だけは離れたくなかった。それでも彼は引きはがそうとする。

「やっ  
」

力で勝てるはずはなかった。あっさりと引き離され、絶望的な想いで呆然としたそこへ、荒々しく唇が重ねられた。

ようやく想いを告げることができたと思う間もなく荒々しく唇を奪われた青蘭は、最初わけがわからず身をかたくしていた。そんな彼のやり方ははじめてではなかったけれど、その後には口づけは彼女を狼狽させた。

熱病に侵されたような激しさにさらされ身をすくめていっていると、やがて嵐は去り風が凧ぐように優しい仕草へと変わっていった。ほっとして力を抜けば、かわりに深く貪るように探られる。驚いてまた体を強張らせれば、柔らかく指先で髪を梳く。唇を重ねたまま、まるで宥めるように幾度も髪を梳かれていると、次第に緊張がとけていく。

薄く眼を開けると、まるでそれを察知していたような深く優しい眼差しが青蘭をとらえる。瞬きした拍子に涙が一筋こぼれるのを、細めた眼が追う。彼はいったん唇を離すと、かわりにその痕をそつとなぞった。耳まで続くそれを舌先ですくい取り、そのまま頬を寄せる。

「青蘭」

彼は青蘭の耳朶を甘噛みしながら、何度も彼女の名を囁く。青蘭は耳にかかるその甘い響きとかすかな息に身をよじり、深く息をもらす。

飽きもせずにははその仕草を繰り返しつつ、華奢な体を閉じ込めるように片腕でさらに強く引きよせた。空いた方の手は簡単に結った髪をほどき、滑らかな感触を楽しむように何度も指を梳き入れる。陶然と何度か息を吐いたところで、また見つめられる。彼は青蘭の前髪を掻きあげると額に額を寄せ、幾度もかすめるような口づけを繰り返した。

「碧柊殿」

切なく名を呼ぶと、束の間唇を重ねられる。

「もつと？」

焦らすような囁きに、今更ながら熱が頬を走る。答えられずに視線を落とせば、白い頬を武骨な指先がなぞる。

「好きだと云ったのは、吾のことか？」

この状況で他に誰がいるというのか。けれど青蘭は云い返すこともできず、こくりと小さく頷く。それがせいっぱいだっただ。

「聞こえぬ」

指が青蘭の柔らかな唇をなぞる。からかわれているのは確かだが、何故か抗えない。

体が熱いのは、抱き寄せられる彼の熱か、それとも己のものか。

おずおすと目を上げれば、また眼差しにとらわれる。熱を帯びた瞳に映る青蘭は、彼とおなじ顔をしていた。

「……好き、です」

躊躇いをとかさされ、けれど恥じらいながら呟けば、ご褒美だとも云うように口づけられる。おずおすと彼の首に腕を回すと、また僅かばかり離される。

優しげに細められた目は青蘭だけを見つめている。

「吾もだ」

「……」

わずかに目を睽った青蘭に、彼は眉をひそめる。

「本当に気付いていなかったのか？」

「……それがどういふことなのか　よく分からなかったのだ」

「ということとは、もう分かったのだな？」

確認を求められて、青蘭は曖昧に微笑む。

そうは云われても彼のそれはたいい衝動的で、その原因は青蘭への怒りや苛立ちのようにしか感じられなかった。負の感情に敏感な青蘭には、それを良いように解釈できなかった。

そもそも女ばかりの隔離された環境で育った青蘭にとって、結婚は義務に過ぎず、男女の間にまつわる感情的なあれこれも無縁なことだった。

「……私は奥の宮では疎まれて育ちました。そんな中で私に好意を向けてくれたのは雪蘭だけだったので　その……多分、あまりよく分からないのです、そういうことが」

俯いて自嘲気味に呟くと、そつと頤に指をかけられ上向かせられる。

「そうでもなかるう。少なくともあなたが雪蘭殿をいかに好いているかは明白だったぞ、吾が嫉妬するほどにな」

悪戯っぽく囁かれ、青蘭は顔を赤らめる。

「嫉妬つて……雪蘭は女性ですよ」

「こついつ場合は関係ないらしい。あなたにとって己より他の人間の方が重きを占めているかと思うと苛立つ」

そう云いながらも表情はひどく穏やかだった。その落差に青蘭は戸惑う。

「けれど、それは」

「分かっておる、それが当然だということもな。それでも感情を制することは難しい。だから苛立つ　これまで吾はそういうことは滅多となかったのだがな、どうもあなたが絡むと調子が狂う」

「私が……」

青蘭は自分が悪いのかと表情を曇らせる。それを見越していたように、碧柊はからりと笑う。

「色恋沙汰がからむと人の変わることがあるというが、吾もそうらしい。吾もただの人の子だということだ」

「……」

戸惑い顔の頬に口づける。

「あなたのせいかといえば、そうかもしれないな　それだけ吾を惚れさせたのだからな」

「つ　」

顔をのぞきこめば、青蘭は耳まで赤くしてその視線を避けようとする。

「責任は取ってもらわねばな」



「せ、責任って……」

「盾は吾だ。よいな」

静かだが、強い言葉で念を押す。青蘭はこくりと小さく頷いた。それを確かめると碧柊は軽く唇を重ね、細い体を抱きすくめる。

青蘭は素直に身を委ね、ようやく気がかりだった体の具合を確かめることができた。

意識が戻ったのは二日前。なかなか意識が戻らなかったのは、頭部への負傷だけが原因ではなく積み重なった疲労のせいもあったかもしれないという医者判断だった。

同じ日に雪蘭からの報告が届いた。それを青蘭に知らせるために寄州へ急使が発つと聞き、強引に便乗してきたのだと碧柊は笑った。「そんな無理をなさって」

腕のなかで青蘭が抗議すると、碧柊はその頭に口づける。

「岑家で待っていても埒が明かなかった故な」

「寄州公のことをお聞きになったからではないのですか？」  
小さな囁きに、髪を撫でていた手が止まる。胸に伏せていた顔を上げそつと窺うと、苦笑する彼と目が合う。

「……今さら抗弁する気はない」

青蘭は小さく微笑んだが、ふと表情を曇らせた。

「明柊殿も考えることは同じでしたね」

「吾が考えつく程度のことなら尚更だな」

溜息まじりの呟きは自嘲気味に響く。

「だが、こちらには打てる手がある」

青蘭は広い胸に身を委ねるようにして顔を伏せる。その体を抱き寄せる力がわずかに増した。

「東葉国内の足取りを揃えさせるわけにはいきませんね」

「ああ 最も有効な手段はあなたの即位と同時に、二人の結託の事実を公表し、吾の無事と無実を明らかにすることだ。東葉でも蒼杞殿の禍をうけ当主を失った貴族は多い。それでもなお明柊につくものは限られてくるだろう」

それは同時に雪蘭の正体が明らかになることでもある。

「雪蘭はどう動く？」

青蘭は未だ書簡を目にしていない。伝え聞いたに過ぎない。

「そこまではまだだ　だが、もうそれなりに算段は付けておられような」

「……彼女は昔から用意周到でしたから」

「誰よりもあなたが感傷に溺れてはならぬぞ」

厳しい言葉に、青蘭は彼の背にまわした腕に力を込め、小さく頷く。

「覚悟しています」

「だが、吾の前でだけは涙をこらえる必要もない」

青蘭は優しく髪を撫でられてこみあげてくるものを必死でこらえる。

「　いいえ、泣きません。雪蘭は一人であちらにいるのに、私が泣くわけにはいきません」

震える体をいっそう強く抱きしめ、ようやく碧柊は彼女を解放した。

「寄州公はあなたに宝印を捧げたそうだな」

「ええ」

「では、明日、吾のことも彼に話そう。見たところ、下手に隠したてはせぬ方がよさそうだ」

「私も寄州公は利用するより信頼を得た方がいいと思います」

落ち着いた様子でそう話す姿に、碧柊は安堵の笑みを浮かべた。

「その様子なら今宵は一人でも大丈夫だな？」

「　　どういうおつもりです？」

「一人で眠れそうにないなら、あとでこっさり忍んできてやっても良いぞ」

「御遠慮します　盾の選定が終わるまでは不埒な真似は許しませんから」

「不埒、な　あなたの云うそれは、どの程度のことかな？」

にやりと口の端を歪める彼を、青蘭は真つ赤になつて睨みつけた。

翌朝は夜明け前から細雨が降り続いていった。

強い風は吹かない。朝からのむっと籠るような暑さに、青蘭は略装の薄物を羽織っていた。

昨日と同じ四阿には、面子が二つ増えている。

青蘭が倒れてしまったため中断した密談を続けるため、4人は集っていた。

里桂は4人目の“彼”を黙って注視していた。

“彼”の出で立ちはず日は昨日とは大きく異なっている。略装とはいえその格式は袁楊より上、寄州公である里桂とほぼ同格だった。

明らかにその理由を知らないのは里桂だけのようだったが、それでも袁楊に一瞥も寄こさなかつた。

「同席なさるお方のご紹介からお願ひできましような」

里桂の視線はまっすぐに“彼”に向けられる。昨日、青蘭が失神した時に見せたあたりを払うような態度から、ただの急使でないことは明白だった。

「彼は葉 碧柎殿です」

青蘭自らが口を開いた。

その事実とその名に、里桂の面が不可解に歪む。“葉”を名乗れるのは王族に限られる。そして西葉にその名を持つ王族はいないはずだった。

「東葉東宮と名乗った方が良からう」

碧柎自らが口をはさんだ。

里桂が目を瞪る。その言葉に疑う余地のことを知りながらも、信じられずにいるのも仕方ないことだった。東葉王殺害の罪のもと、彼が追われていることは西葉にも伝わっている。ただ、それは直接里桂の関わることもないはずだった。

「私を翠華より助け出し、西葉まで送り届けてくださったのは他ならぬ碧柊殿なのです」

「実態は従兄の苓公明柊にまんまとはめられ、徒に近衛を失い国を追われることとなった間抜けだかな」

自嘲気味に嗤う碧柊に、里桂は毒気を抜かれたように己を取り戻す。

「東葉王位を取り戻すため、我等に助力を乞われるおつもりですかな？」

明らかに軽んじるような口ぶりに、青蘭は苦笑してしまう。最初に相手の神経を逆なでしてみせるのが彼のやり方らしい。

ちらりと碧柊を見れば、彼は涼しい顔で表情一つ変えない。

「いや、吾は東葉王位を望むつもりはない。吾がここにこうして在るのは“葉”の女王にお仕えするため。今は手勢の一人もないが、ゆくゆくは東葉勢をまとめる際にいささかなりともお力になれよう」

「なるほど、昨日、姫が仰ったことは単なる例えではなかったのですな。女王の盾はすでに定めておられるわけだ」

「里桂殿、盾の候補として名乗りを上げるのはそれぞれの権利、そしてそれを選ぶのは私の権利だと申したはずです。私は最もふさわしいと思つ盾を選ぶだけのこと。それは私の意志であり、女神の意志でもある」

薄く微笑して泰然と話す青蘭には、風格すらあった。それに碧柊はわずかに目を細める。

里桂は口の端を歪め、値踏みするように東葉の東宮を眺める。

「両国の統一が可能だなどと本気で考えておられるのか？」

「考えるのではない。成すか成さぬか、それだけだ。そしてそれを成すのが陛下の意志ならば、臣下はそのために力を尽くすだけのこと。貴公こそもうすでに宝印を捧げたというのに、まだそのようなところで迷っておられるのか？」

碧柊の言葉に棘はないが、逆に里桂の姿勢を質す響きはあった。

里桂は面白がるように口の端を歪めた。

「いくら陛下のご希望でも、空の星を射落とすような真似はできません。現実的な助言をするのも臣下の務めでは？」

「可能かどうかをまず諮る必要がある。吾はそれが可能だと考えたからこそ、姫のお力になると決めたのだ」

「“葉”の統一のためにお任せすると？」

「そうだ。翼波は年々力をつけてきておる。もとは一つであった国の内側でもめている場合ではない。いつまでもこんなことを続けておれば、近いうちに必ず翼波がこの西の沃野をも我が物とするだろう。それを防ぐのが王族の務めだ。東葉の王位などその妨げにしかならぬ」

淡々と紡がれる言葉に力みはない。だが、徒に流れていくわけではない。

里桂はじつと年下の青年を見つめる。碧柊は薄く笑んでそれを受け止める。

「そのためには、二つの王家が一つになることが最善の選択でしょうな」

「それは姫が選択なさることです」

碧柊の視線を受けて、青蘭は小さく頷く。そのやりとりに里桂ははじめて笑みを浮かべた。

「盾の候補には我が息子に名乗りを上げさせるつもりです。しかしあれはまだ12になったばかり。姫をお支えするには頼りないいささか不利ですな」

王統家筆頭である奇州公家が盾として名乗りを上げるとは、青蘭支持の意志表明に他ならない。実際に盾として選ぶかどうかということとは別に、重要なこともある。

12歳の少年では力不足は否めない。碧柊に譲るという配慮に他ならない。

碧柊は黙って頭を垂れた。

神殿の総本山をも擁する聖地は、州都から軒車けんぐるまで二日のところにあつた。

山の背の裾には、いくつもの巒を折りたたんだように溪谷が続いている。そこに源を発する流れは西へ向かい、大地を潤し沃野となしてきた。

その麓にはいくつもの湖も点在する。そのうちでも最大のものを瑳衣湖さゐこという。

山巒のいつそう深い懷に抱かれ、瑳衣湖に守られる地。それが聖地だつた。

山側から侵入は険峻な崖に阻まれるためほぼ不可能に近く、湖は橋をかけられるような広さではない。聖地と外界を繋ぐのは船だけであつた。

碧柊へきしゅうが里桂りけいに身元を明かした日の午後、一行は慌ただしく寄州きしゅうの州都を発つた。先に神殿へ面会を申し込む急使を發たせての出發だつた。慌ただしいが、一刻を争う折でもある。

そうして二日。強行軍だつたおかげで、日の出の頃に聖地の対岸の港に到着した。

軒車から降りる青蘭せいらんの手をとつたのは碧柊だつた。

二十日にわたる逃避行を共にしたことを聞いた里桂は、二人の關係を今さら問いただしはしなかつた。青蘭に介助が必要になる度に、碧柊にお鉢おつえいが回ってくるのは彼なりの配慮に違いない。

汪永わうえいなどから、いかに碧柊が青蘭を大切にしているかは傍目にも

明らかだと云われたことを思い出せば、今更ながら顔が赤らむ。自分でも彼の過保護さには苦笑してしまうほどだったのに、肝心の彼の気持にはまったく気づいていなかったというのだから。

もう少したてば笑い話にもできるのだろうが、まだ今は碧柎に対しても申し訳なさの方が先に立つ。青蘭さえ分かっていたれば避けられた諍いはいくつもあつた。

自分が雪蘭ではなく青蘭だと告げた時の誤解も明かした。彼はもつと単純に惚れたと云っておけばよかったのだなと詫びてくれたが、果してその時そう云ってもらえたとしても、それを自分が素直に受け取れたかどうかはあやしい。

彼への想いを自覚したうえで、彼がもう二度と目覚めないかもしれないと思ひ詰めたからこそ、自分に対しても彼に対しても素直になれたような気がしていた。

軒車の窓越しにも湖の広大さは分かっていたが、こうして降りたつて遮るものなしに目の当たりにすると圧倒される。

「対岸があればほどに遠いなんて」

「ほとんど見えぬな」

碧柎は青蘭の手をとつたまま、その足元に注意を払いつつ水際まで案内してくれた。

そこは聖地と対岸の港をつなぐ船着き場だ。石を積んだ岸壁が遠くまで続き、いくつもの棧橋が湖中に伸び、多くの舟が係留されている。

大型船は見かけない。岸壁から見下ろす分には水深が浅いわけではなさそうだ。それなのに最も大きなものでも、せいぜい10人くらいしか乗れそうにない。多くは数人乗りの小さな舟ばかりだ。

巡礼の貴族を装っている青蘭は、上品な仕立てだが地味ななりをしている。被かききなど用いれば王族だと標榜しているようなもので、顔もさらしている。そうして過ごす時間の方が長くなってくると、顔を隠して過ごす元の生活を想うだけで苦痛だった。

湖面を渡ってくる風は涼しい。

山の背から流れ込む溪流は雪どけ水のため、盛夏でも水温は低いらしい。そのせいか湖に棲息する魚の種類は少なく、小型のものが多くという話だった。

短い髪を強引に結び上げているため、どうしても時間がたつとほつれ落ちてくる。顔にかかる髪にわずかに眉をひそめ、指先ですくい取るうとする前に彼の指が除いてくれる。

「……ありがとうございます」

何故かどきまぎしながら礼を述べると、彼は薄く笑った。

碧柊は青蘭がひそかに恐れていたほど人前で親しげに振舞うことはなかった。あくまで恭しく傳く範囲を超える真似はしない。だが、人目がなくなつたとたんに過剰に接触してくる。青蘭などはそれでようやく二人きりだと気づくほどの目ざとさで、どうにも防ぎようがなかった。

「聖地を訪れる日がこれほど早くに来ようとは思わなかったな」

「え？」

彼は青蘭の手をとつたまま、見晴かすように目を細めて湖を見つめていた。

「この100年、我が祖は誰一人として聖地の地を踏んでおらぬ」

「もつと先になると思っておられました？」

「ああ、当初の予定では　だが、しよせん予定は未定だ。どちらにせよ傍らにいらるのがあなたなら、それでいい」

さり気なく指に指をからめられ、青蘭は顔を赤らめる。こうなつてくるともう条件反射に近い。そんな様子を見られるのが恥ずかしくて顔をそむけるのだが、彼にはそれすら楽しいらしい。

「やはり打ち所が悪かったのではありませんか？」

「何故だ？」

「寄州に来てから人を惑わすようなことばかり仰るから」

「学習したと解していただきたくないな。どうやらあなたの誤解は吾の言葉足らずが原因のようだった故な、言葉を惜しむまいとこれでも努力しておるのだが」



「……………」  
髪についた塵をとるふりをして、そつと指の背で青蘭の頬を撫でる。

青蘭は顔を上げていられなくなる。耳まで赤くなった姿に、碧柊は目を細める。

「東葉からの巡礼も少くないそうだな」

滑り出した小舟には、4人の巡礼と水夫かこの姿があった。舳先から生じる漣が、岸壁までゆつくりと押し寄せる。

「王家の争いなど関係ないのでしょね」

「そういつことだな　だが、今はそれも難しくなっておる」

「……………統一がなった暁には、あの峠もきちんと整備せねばなりませんわね。滑落の心配のないように」

「あれを広げるのは難しそうだが、東葉の技術があれば可能であろう」

どちらからともなく強く手を握りあつたところへ、袁楊えんようが近付いてきた。

「お邪魔するようで申し訳ないのですが、船の支度が整いました」

言葉とは裏腹に、悪びれる様子もなく袁楊は微笑んでいる。

さつと手をはなして顔を赤らめた青蘭とは異なり、碧柊は涼しい顔で頷き、来た時と同じように恭しく華奢な手をとつた。

青蘭は蒼い顔で寝台に沈み込んでいた。

昼前には対岸である聖地の港につき、そのまま宿に直行したがその間の記憶は曖昧だ。

苦い薬を云われるままに飲み干し、うとうととまどろんだ末に目を覚ました時にはすでに日は暮れようとしていた。

ゆつくりと起き上がると、寝台の足元で椅子にかけていた侍女が立ち上がる。

「ご気分はいかがですか？」

差し出された杯には冷たい泉水が満たされていた。一口口に含めば、甘酸っぱい香りが広がる。清涼感にすっと体が軽くなるようだった。

「もう大丈夫よ」

微笑むと、侍女も安堵したように頷いて空になった杯を受け取る。

「お目覚めになられたらお目にかかりたいと」

「誰かしら あの岑家の使いの方？」

「はい」

「お通して」

青蘭の言葉を受け、侍女は下がった。

部屋は広がったが細長い作りになっていた。開け放たれた窓の向こうにはすぐそこに岩壁が迫り、その谷底に川が流れているのか水音が聞こえる。

微風が吹きこんでくる。少し湿った涼しい風に、転寝の気だるさが浄化されていく。傾いだ日差しは斜めに差し込み、矩形の影をおとす。岩壁に切り取られた茜に染まる高い空を見上げていると、何故か懐かしい心地がした。

ぎしつと寝台がきしみ、青蘭はようやくそちらを向いた。

碧柊が寝台に腰かけていた。掛け布団の上にのせていた手に手を重ねられる。

「落ち着いたようだな、顔色も随分ましだ」

「はい」

「今日はまったくの風だったらしい。あのくらいで酔うとはと水夫も珍しがっておったぞ」

「……ごめんなさい」

しおと肩を落とす青蘭に、碧柊は慌てて手を握る。

「責めたわけではない、偶々あなたも体調が悪かったのだらう。ここまで強行軍で急いだ故、疲れてもおっただらう。誰しも弱点はある。多少人より船酔いしやすいだけということだ」

「 窘めないのですね」

「 ……なんのことだ？」

「このくらいのことを一々気にするなと云われると思いました」

「云うてもあなたは気にしよう」

「 ……いいえ、だって仕方ありませんもの」

にこりと笑ってみせると、碧柊はわずかに目を睨り、ついで溜息をついた。

「 謀ったな」

さあどうでしょうというように曖昧に微笑んで首をかしげてみせると、碧柊はむっとした顔をしたが、じきに苦笑してゆつくりと抱き寄せる。青蘭もそれに素直に身を任せる。そんな風に自然に振舞える自分が、何故か嬉しかった。

碧柊はやわらかく抱きしめたまま、柔らかな髪を何度も撫でていた。やがて腕をほどき、かわりにそっと口づける。

「日が暮れる前に外へ出ぬか？」

「外へ？」

「ああ、こうしていると不埒な真似をせずにすみそうにない」

熱っぽく囁き、もう一度唇を重ねる。青蘭は枕を手繰り寄せ、それを碧柊に叩きつけた。

父が亡くなったという報せに、母は涙を見せなかった。

王都からの急使のもたらした凶報にわずかに目を瞠り、やがて小さく頷いただけだったという。

当時8歳だった雪蘭せつらんには、父の死がどういふことかすでに理解できた。

喪が明けるとじきに、母は雪蘭に六華ろっかへ向かい奥の宮に入るよう言い渡した。

幼い少女はしばらく黙って母の顔を見つめていたが、やがてこくりと頷く。

「参ります」

澄んだ声が凜と響いた。

父の訃報には娘も涙をこぼさなかった。そして、今も動揺することもなく立ち尽くしている。

蓮霞れんかは娘のそばに膝をつき、そつとその白くふくよかな頬に触れた。

大きな目は黒目がちで、鏡のような瞳には目を潤ませた母の顔がうつっている。

「もう二度と母とも会えないかもしれないのですよ」

「はい」

しっかりとした応えに、蓮霞はびくりと肩を震わせた。一筋、頬を伝う滴の行方を雪蘭は追う。

「父上との約束です。私が青蘭姫せいらんをお守りすると。父上は叔父上をお守りできなかつた。だから、かわりに私が青蘭姫をお守りしなければならぬのでしよう、母上？」

美しい母の顔が醜く歪んだ。

「 姫さま……姫さま? 」

そつと腕に触れる手に、はつとする。椅子にかけたままうとうとしていたらしい。滅多と人前でそんな姿をさらすことのない彼女を案じるように、香露かろうが遠慮がちにのぞきこんでいた。

「ご気分が優れませんか? 」

「いいえ、大丈夫」

うつすらと笑ってみせると、香露も小さく頷いた。

「なにかお飲みになられますか? 」

「ええ、お願い」

香露かろうの指示に、狭霰さえいが肯いた。小さく磁器の触れあう高い音が響く。

雪蘭は眠気を払うように小さく息をつき、窓の外を見つめる。明柝の指示で窓の覆いは外されていた。遠くまで見晴かす彼方に、おぼろげに山影さんえいが見える。山の背の影だった。あの向こうに青蘭がいるはずだ。そして母も。

母の顔を醜いと思ったのは、後にも先にもあの時1度だけだった。雪蘭の母、蓮霞は美しい人だった。

その美だけを取り沙汰するなら、青蘭に勝るとも劣らない。その上、出自からくるものなのか、独特の影をまとうていた。今にも消え失せそうな陽炎を思わせる儚さ。

月夜の窓辺に座る母は、透けるような青い光に包まれそのまま溶けてしまいそうだった。そんな不安を幼い娘にも感じさせるほど、母の姿には妖しさがあった。

父はそんな母に惑わされたのだろうか。

それも仕方ないと思わせるほどに、母という人はどんな時も美しい人だった。

父が何故、王太子の地位を捨てたのか。それがどういうことか、父が理解していなかったはずはない。

幼いなりに父の行動に疑問に感じはじめていた矢先の訃報だった。父は確かに雪蘭に青蘭を守るように幼いころから囁きつづけてきた。それは雪蘭に自分の願いを託すのではなく、それこそが雪蘭の生まれてきた意味であり意義であるかのような言葉だった。

六華へ発つ前にも、彼は母ではなく青蘭のことを託していった。だから、喪が明けると同時に王城へやられると聞かされても驚きも不満もなかった。

奥の宮へ上がるよう娘に告げた母は相変わらず美しかった。

素直に肯けば、母は娘の傍らに膝をつき、白く華奢な手で小さな顔を包み込んだ。

雪蘭は同じ高さの眼差しに、縊るような光を見つけた。

もう二度と会えないかもしれないと告げた母の眦から、一筋涙がこぼれた。

午後の光を受けるそれは、それだけであれば美しかった。けれど母の白い頬を伝うそれを美しいとは思えなかった。

何故、あんなことを云ってしまったのか。

そして、醜く歪んだ母の顔を見て、雪蘭はひどく満足していた、我がことながら、わざわざ母を傷つけるようなことを口走ってしまったその理由はずっとわからなかった。考えないようにしていたせいもある。

奥の宮に上がってからは、青蘭のこと、彼女を取り巻く環境のこと、そして父から託されたことを果たすことと忙しかった。

相談相手は専ら岑家当主である養父だった。母はあてにはならなかった。

自分にできること、できないことを見極め、自分なりに最善を尽くしてきたつもりだった。

現在の事態を許した自分の甘さへの反省はあるが、後悔はない。雪蘭一人で防ぎきれたことではない。他にも気付かなければならぬ人間がいたはずだった。

父も過去を悔いるようなことは一度として口にしなかった。

ただ母だけが過去を語った。それは感傷に満ちた美しいものであり、そこには自己陶醉に浸る彼女がいた。

雪蘭は母のことも父と同等に愛していた。今もそれは変わらない。その一方で父への敬愛が深まるにつれ、母を軽侮する気持ちも少しずつ深まっていった。

父は決して自分の責任を雪蘭に押し付けたわけではない。それを分かっていない母に苛立っていたのだろうか。父を愛していると云いながら、理解しようとしないう母と云う女性への嫌悪。

雪蘭は父の遺志を理解していた。

それをあえてあんな風に歪めて母に告げたのだった。もし母が父を理解していたなら、あんな風に醜く顔を歪めることはしなかっただろう。それとも、幼い娘に自己欺瞞を見破られてあんな顔をしたのだろうか。

また一つ息をつく。

答えを求めることは愚かなことではない。けれど、たった一つのそれを導こうすればたいがい徒労に終わる。理由が一つしかないことの方が稀なことを雪蘭は知っていた。

「姫さま」

遠慮がちに声をかけられ、雪蘭ははつと我にかえる。またも香露がそつとうかがっている。傍らの小さな円卓の上の茶器はすでに冷めていた。

苦笑しつつ目で応じると、香露はかすかに頭を下げた。

「苓公れいこうがお目通りをご希望です。お会いになられますか？」

一気に現実に引き戻される。小さく息を吐いて頭を切り替え、「お通して」と云い添えた。

明柊は屋外での目通りを希望した。断る理由のない雪蘭は了解する。

花柱の塔の入口まで彼女を迎えにきた明柊に恭しく案内された先は、これまでになく遠いところにあった。

王城内を区画する塀に設けられた門をいくつも潜り、複雑に分岐し折れ曲がる回廊をただひたすら歩む。気の焦るようなゆっくりとした歩みでも、夏の午後のいささか長すぎる散歩では汗ばみもするし、疲れも覚える。唯一の慰めは、珍しく彼が無口だったことくらいのものであった。

疲労と暑さでやや虚ろな眼差しで足元を見つめる頃、ようやく明柊は足を止めた。

そこは小さな泉と涼しげな緑陰のあるささやかな庭だった。片隅に風通しのよさそうなこぢんまりとした四阿がある。泉は森の奥深く人知れず湧きいずる様な風情で、人工的なものとは思えないほど素朴な趣だった。

「東宮の裏庭ですよ」

雪蘭ははつとして明柊を見た。彼は曖昧に微笑んでいる。真意は読み取れない。

基本的に妻妾は奥の宮に押し込められるものだが、東宮妃に限りその例外がありえた。夫である東宮が望めば、共住みという形で東宮にうつることもある。

だが彼はこれまで形式でしかなかった“女王即位”を公的に前面に押し出し、自分は王配としておさまり、“王”を名乗らないと告げた。そうであればこの東宮と云う場所は“青蘭姫”には無縁な場所のはずだった。

「ずいぶんと歩かせてしまった。お疲れでしょう。まずは四阿で休みましょう」

恭しく手を取り直し、そちらへ導く。緑陰を渡る風は涼しかった。東屋には大理石の円卓と椅子が設えられていた。人影はなかったが、卓上には水滴のついた硝子の杯が二つ並べられていた。琥珀色の液体に、氷が浮かんでいる。

その手触りも、喉越しも、この季節では贅沢極まりないことだっ



た。

「東宮には氷室があるのです」

それは西葉でも珍しくはない。特に自慢しているわけでもなさそうで、雪蘭は「そうですか」としか応じようがなかった。

「幼い頃はよく碧柊と二人して氷室に忍び込んで怒られたものです」

懐かしそうに楽しげに思い出を騙る彼に、雪蘭は黙って首を傾げるしかなかった。

暑さも手伝ってじきに硝子の杯は空になった。涼しげな氷が空底を滑る音に、茂みの影から人影が滑り出て、静かな動きで杯を満たすとまた姿を消した。

まったくの無人と云うわけではないらしい。

さり気なく周囲へ視線を巡らせるのを中断させるように、明柊が本題を切り出した。それは“青蘭姫”即位の件だった。

「あなたがこのような提案を素直に受け入れてくださるとは。実は少々意外に思っているのですよ」

「何故そのようなことを？ 王家の女性は恭順が美德でございますよう？」

わざとらしいほどあからさまに探る視線を向けてくる彼に、雪蘭は涼やかな笑みで応じる。

「ほら、そんな風に仰るからですよ。本当に恭順な女性はそんなこととは思いつきもしない。心の底からそうであるからこそ、美德と云うのではありませんか？ そういう意味では、あなたの従姉殿のほうがよく心得ていらっしやるようだ」

嫌味な言葉に、雪蘭は楽しげに首をかしげる。

「けれど、そういう女性はあなたのお好みではないのではありませんか？」

「いいえ、俺は心が広いのですよ。素直な女性も、そうでないあなたのような女性も等しく愛おしい。俺はどのような人間も愛おしめるのです。それぞれに違った良さがありますからね。唯一我慢なら

ないのは、愚か者のみ」

さも我慢ならないと首を振ってみせる彼に、彼女は改まった顔で問いかける。

「愚かでない人などおりましようか？」

「本当の愚かものはそんな風には云わないものですよ。愚かものは俺一人で十分です」

「あなたが愚か者？」

「そうです、恋に惑う愚か者。俺は惑わされてばかりの愚かな人間です」

深刻ぶった顔で深々と溜息をつき、芝居がかった仕草でこめかみに指先を押しあてる。その姿に呆れつつも彼女は感心したように微笑む。

「お幸せですね」

「ええ、幸福ですよ、これ以上なく、ね　それにしてもあなたは得難いお方だ。私がこれほど心を明かすことができる方は、そうはいない」

「他には？」

「わが愛しの従弟、碧柊殿くらいのもんです」  
いかにも秘め事を雪蘭にだけ明かすのだと言いたげに重々しく囁く。

「……よく仰るわ。追い落としておいて。それに、あなたのどこが心を明かしておられるというのか、それこそ明かしていただきたいものですわ」

「それすらあなたは分かっただけの筈ですよ。愛しい青蘭殿」

そう云って、明柊は雪蘭の白い手に口づけた。

「いいえ、私にはわかりかねます。そういうことははっきり言葉にしていただかないと、特に女と云うものは確かな証を欲しがるもの。賢明な明柊殿ならご存知でしょう？」

「困りましたね、愛に明確な形を与えることは難しい。それこそあなたなら分かっただけのさうしやるだろくに　それとも、私の愛を試

していらつしやるのですか？ それもまた女心というものでしょうか」

諭しを求めるように、押し戴いた雪蘭の手の甲をそつとなでる。彼女はそれを振りほどきはしなかったが、もう一方の手で彼の手をそつと払いのけた。

「女は常に不安を抱えているものです。それを安らげて下さるのも殿方のお務めでは？」

「困った方ですね。では、一つ証としてこんなお話はいかがでしょう。私と碧柊が従兄弟同志ではなく、兄弟ではないかと云う風評はご存知ですね」

「ええ。口さがない人はどこにでもいるものですから。今更知らぬふりをする必要のない話だった。

「それはそれでよろしい。人の口にも使い道がある。では、本題ですが。そのようなことはありえないのですよ」

「結婚前のことはともかく、碧柊の両親は子供の目に仲睦まじかった。噂を流したのは俺の母なのですよ」

「……何故そのようなことを」  
貞操を疑われることは、女として最大の恥辱と云われる。疑われただけで自害をする女性も珍しくはない。さすがに雪蘭にも理解しがたいことだった。

「未練ですよ、単なるね。前王は確かに一時期我が母と親しかったが、長続きしなかった。それが何故なのかは一目瞭然でしょう、彼女のしたことを思えばね。美しいが愚かな方です。俺などはそこが可愛らしいところだと思うのですが、伯父上にとってはそうではなかった。ただ、それだけのことです」

彼は母を軽蔑しているのではなく、憐れんでいるようだった。雪蘭は返す言葉に詰まる。彼は答えを求めているわけではない。

「……それを明かすのは私にだけだと仰るのですか？」

「そうですね、碧柊にも云いません。あれも風聞を知っているが、

それ以上に両親を敬愛している。明かすまでもないのです」

確信に満ちた言葉だった。まるでよく親しんで知った人を語るように。

「……それだけお聞きしていると、まるで碧柙殿を好いておられるようですね」

「何度も申し上げているではありませんか、俺はあれを愛している、と。なかなか信じて下さらないのですね」

「あなたの言葉は信じられないのではなく、それ以前の問題でしょう。私程度の人間には、見極めがつきません」

「それだけで光栄ですよ。たいていの人こそそれすら放棄なさいますからね」

「そのようにあなたが仕向けておられるのでしょうか」

「やれやれ、本当に侮れぬお方ですね。本当に惚れてしまいそうですよ」

彼は艶然と微笑み、眉をひそめる秀麗な顔にそつと触れた。

それは見事な紗だった。3重に重ねてもまだ向こうを透かして見られるほどに。さらにごくごく細い銀糸で草花文様の刺繍が施され、盛夏の午後の陽ざしに煌めく。

「美しいものでございますね」

「そうね。西葉では模様を織り込んでしまっけれど、こちらではさらにひと手間かけるようね」

それは婚儀の際に雪蘭が用いる被布かづきのために調えられたものだった。婚儀はしきたりどおり行われるが、それを途中でいくつか変更する予定だと明柊は話していた。雪蘭にとってはどうでもいいことだった。肝心なのは彼に疑念を抱かせず、出来るだけ早く婚儀をあげてしまうこと。

「あの方はそろそろ西葉にお入りになられたでしょうか」  
「何事もなければ」

膝の上には何枚もの絹や錦の織物が置かれている。すべて婚儀に備えて誂えられ、さきほど届けられたものばかりだった。

贅をつくした品々に感心はするが、それ以上の感慨はない。夫となる人の顔を立てるために一通り手にはしてみたが、さほど興味は惹かれなかった。

明柊という人物が夫としてどうかはまだ分からないが、わざわざ喜んでみせる必要のないことは楽な点だ。

本来、“青蘭姫”は入城した翌日には婚儀を上げることになっていた。その支度の一切を手配したのは碧柊だが、明柊はそれを流用するような真似はしなかった。

改めて彼の指示のもとにすべてが新調されつつある。そのため婚儀はずれこんでいた。雪蘭にしてみればそのようなことはどうでもよいから、一日も早く婚儀を上げてしまいたいところだが、これば

かりは口に出すわけにはいかなかった。

わざわざ新調された調度の礼をさも嬉しげに述べたが、明柊はにこやかに笑った。

「心にもないことはけっこうですよ」

「それでは、同じ言葉をお返ししなければなりませんわ」

「心外なことをおっしゃいますね。俺は常に愛を言葉にしなければ、想いが溢れて死んでしまいそうになるんですよ。俺を助けると思っ

て耳を傾けて下さらなければ」

「聞き流してもよろしければ」

「本当につれない方だ」  
本気で嘆いているように聞こえるのに、どうしてもふざけている  
としか思わせない彼と云う人に、改めて感心したというような経緯  
もあつた。

明柊がなにも知らないまま身分を偽つた雪蘭と結婚したとしても、  
いつでも離婚できる。雪蘭のつとめはあくまで時間稼ぎにすぎない。  
どのくらい明柊を謀ることができ、そしていかに機を逃さずすべ  
てを暴露するかと云う2点に尽きる。

青蘭が無事に西葉にたどりつき、全ての準備を整えるだけの時間  
が確保できれば上々だ。その間、明柊に疑いを抱かせずにすめばそ  
れでいい。

「峠には関がある。無事に通過できていれば、そろそろ岑家の邸に  
ついている頃か」

青蘭が無事だったという報せは、岑家を通して雪蘭にも伝えられ  
た。彼女を保護したという岑家の手のものによる報告は、いったん  
岑家に寄せられ、それから雪蘭に伝えられるためどうしても数日の  
時差が生じてしまう。

無事の報に続くものはまだもたらされていない。

「……それにしても本当に驚きましたね」

香露は雪蘭の膝の上の織物を引き取っては畳みながら、微笑みか  
ける。

「偶然なのだろうが、ただの偶然でもないのだろう」

てきばきと無駄のない香露の手元を見つめながら、雪蘭は呟いた。切望していた青蘭無事の報と共にもたらされた内容に、さしもの雪蘭も少なからず驚かされた。青蘭と共に東葉の王太子である碧柊と一緒にいたという。詳しい経緯は分からないままだが、彼がずっと彼女を助けてきたらしい。そして青蘭は彼を盾に選び、名実ともに女王として即位する心積もりだという。

それは香露も知っている。

彼女の云う驚きには、二人が一緒だったということに加えて、青蘭がその決意をしたということも含まれているのだろう。

雪蘭も少なからず驚いていた。

碧柊と云う人物については風評以上のことは分からない。青蘭の相手としてさほど危惧を抱く必要のない人物だと踏んで、気乗りしない様子の彼女に大丈夫だと太鼓判を押してみせたが、実際のところ根拠があつたわけではなかった。

青蘭には自己卑下の癖があり、どちらかといえば基本的に消極的だった。その彼女が即位を決意するとは、おそらく青蘭一人の考えではないだろう。少なからず彼が囁んでいるに違いない。それでも東西の葉まとめて即位するのは青蘭自身なのだ。彼女が納得し決心を固めなければ、その選択はありえない。

雪蘭の背中に隠れるように育ってきた青蘭に、表に立つ決心をさせたのは碧柊と云う人なのだろうか。それとも、あの夜からはじまった逃亡劇が彼女の何かを変えたのだろうか。

おそらくは両方なのだろう。青蘭は他者の影響を受けやすいようであり、自身で納得しなければ受け入れない頑固さも備えている。

「私は彼女に対して過保護過ぎたのか」

「そうでしょうか？」

確かに雪蘭は青蘭中心に動いてきた。自分のことは常に二の次だった。だからと云ってそれが即ち過保護だということにはなるまい。「私はあの子から自分で考え決断する機会を奪ってきたのかもしれ

ない」

兄から命を狙われ、父に顧みられることない王女。奪われるばかりで与えられることのなかった彼女に、雪蘭は自分の持てるものすべてを注ぎ込んできたつもりだ。

青蘭は素直にそれらを受け入れてくれたが、その分、自分からなにかを欲することはほとんどなかった。それは幼いころからの習性であり、長じてからが欲する前に雪蘭が与えてくれるからその必要がなかったともいえる。

青蘭のためというお題目を唱えながら、結局は己の考えを押し付けていただけではなかったかと云う疑念も拭いきれない。

事実、雪蘭の保護下を脱した彼女は驚くような決断を下している。それは本来彼女がそれだけの力を持っていたことの証でもある。

碧柊と云う人はそれをやってのけ、さらに王位への執着を捨てたということになる。

「私とあの子が引き離されたことは、かえって良かったのかもしれない」

「……それでも雪蘭さまは青蘭さまのためだけに動いておられる…

…」

「それは当然のこと」

即答した雪蘭に、香露は眉をひそめる。

「そのために苓公との婚儀を承諾され、命までお賭けになるのですね」

「あの子だつて命がけのはず。私だけではない」

「けれど、それでは雪蘭さまの幸福はどこにあるのでしょうか」

香露は目を細め、遠慮がちに雪蘭の手に触れる。

「あの子の幸福が私の幸福。それ以外はあり得ない」

「そのためにお命を落とすことになってもかまわないとおっしゃるのですか？」

「そのとおり」

躊躇いもなく頷いた主に、香露は痛ましそうに眉をひそめる。



「それは何故ですか？いくら姉妹同然にお育ちになつたとはいえ、あの方に比して雪蘭さまのお命が軽いということにはなりません」「軽い重いの問題ではない。あの子はその役割を果たすために私が果たすべきことがあるというだけのこと」

「ですから、それはいったい何のためだとおっしゃるのですか？」

「あの子と国のため。それ以外に何かがある？」

香露が問いたいのはそういうことではない。だが、雪蘭にはその想いそのものが通じないようだった。

山の端が白々と浮かび上がる。珍しく雲一つない天は東から明け果てていく。

聖地の朝は遅い。山の背の懐深く抱かれたその地では、太陽が中天近くまで昇るまで陽射しを拝むことはできない。

対岸が見えないほど遠くにある湖面も暗いが、それでも漁師たちは舟を出す。

葉の各地からやってきた人々は暗いうちから宿を出て神殿の前に集まる。聖地の決まりとして日帰りでの参詣は禁じられている。舟は朝から昼前までの決まった時間しか運航されず、宿の決まっていない者が聖地を踏むことは禁じられていた。

谷あいの土地は狭い。神殿まで続く参道の両脇には宿だけでなく土産物や食堂も軒を連ね、石畳の道には人が溢れかえっている。

王統家や上級貴族などはそれぞれに館を構えているが、そもそも狭隘な土地のため広い敷地を有することはできない。小さな館をかまえるのがせいぜいだった。

寄葉家も館を有しているが表だって利用するわけにいかず、青蘭達は巡礼の宿を利用していた。館を持たない貴族の利用する格の高い宿だった。

宿からは参道を見下ろせた。斜面を広く削った敷地に建てられたもので、廊下の窓には崖が迫っている。

朝早く目覚めた青蘭は、窓辺に椅子をよせ眼下の参道の賑わいを見つめていた。

「ずいぶんと人が多いのね。昨日の夕方も賑やかだったけれど、これほど多くはなかったわ」

参道は人々の頭でほぼ埋め尽くされている。それも一様に神殿へ向かっているため、その流れはしばしば停滞する。

「人生で一度は聖地を訪れるべきだと云われておりますから」  
侍女は寄州公の城から伴われてきた。生まれも育ちも寄州だとい  
う。

目覚ましの香草茶が目の前に置かれる。茶器を手にした青蘭は湯  
気とともに立つ香りを深々と吸い込み、「いい香りだわ」と目を細  
めた。それに侍女は嬉しげに頭を垂れる。

「あなたもはじめてなの？」

「今回がはじめてです　それが姫さまのお付きで叶うなど、夢の  
ようです」

侍女は青蘭よりいくつか年下のようだった。はにかむ顔はあどけ  
ない。

「それでこれほどの人がいるのね。けれど随分と狭いところだから、  
一日の参詣人には限界がありそうね」

「たいていは対岸の港町で順番が回ってくるまで数日宿泊します」  
「やはりそうなのるのね」

青蘭は少女に浅く首肯し、また窓の外へ視線を向ける。

女神の末であるはずの王族は聖地に参ることはない。王城にはい  
くつか社やしろがあり、すべての祭礼はそこで行われる。聖地へ使者を遣  
わしたり、逆に神官が出向いて来たりすることはあるが、王族が自  
ら赴くことはない。

聖地には女神が眠る。

この地での神は亡くなったという。命を落とし、神となった。  
それなのに何故末裔である王族はこの地を訪れないのか。そんなこ  
とは考えたこともなかった。

ふとした思いつきだったが、その疑問はなかなか消えなかった。

神殿に詣でるには身分にかかわらず規則があるという。

衣は麻。男女ともにできるだけ肌の露出は避けるが、頭を覆った

り顔を隠したりしてはいけない。武器の携行も基本的には禁じられている。

王城の社ではそのような決まりはない。だが、神事の際は必ず真新しい白絹の祭服を着用する。

基本的な考えは同じなのかもしれない。

同時に、聖地からの遣いである神官は世俗の富裕層も顔負けの豪華な衣装に身を包んでいたことを青蘭は思いだす。祭りでもない平時にこれだけの参詣者があるということは、神殿に落ちる喜捨は相当な額になるのだろう。

巡礼らしく慎ましい身なりで部屋を出ると、すでに人待ち顔の碧柊が廊下の壁にもたれかかっていた。

扉が開く気配を目ざとく察し、青蘭が気付く頃には目の前にいる。不意打ちにも似た接近に呆気にとられているうちにさっと手をとられる。

「身をやつしていても愛らしいな」

耳打ちされて赤くなる。それを面白そうに眺められ、むっとしつつも愛らしく笑ってみせる。

「少々言動が明柊殿に似てくれたのではありませんか？ さすが従兄弟でいらっしやいますね」

この言葉はてきめんに効果を表した。

碧柊はさも嫌そうに顔をしかめる。青蘭はせいせいした気分で彼を促し、階下に向かう。階段を降りる間も碧柊は黙って彼女の手をとっていたが、階下につくと大真面目に青蘭に尋ねた。

「まことにそのように思うか？」

その口ぶりの切実さに青蘭は思わずふきだしてしまった。

「冗談です、あんまり楽しそうに私をからかわれるから 心にもないことを無理に云っていたただかなくてもけっこうです。そういうことは碧柊殿には似合いません。だから、明柊殿の真似はあなたには無理です」

「云っておくが、吾は心にもないことなど口にはせぬぞ」

きつぱりと言い切られ、青蘭は一瞬ぽかんとしたが、じきに先ほどよりもさらに赤くなる。

「と、ともかく、明柊殿のようなことは仰っていたただかなくてもけっこうです」

「だが、それではまたあなたがどんな誤解をするか分からぬだろう」「もう誤解なんてしません」

「そうはいかぬから問題なのだろう。だいたい誤解はするしないと言いつける類のことではない。それが防げるならそれに越したことはない」

言動を控える気はないということらしい。

青蘭は断固やめてもらうべくさらに云い募ろうとしたが、袁楊えんように気づいて口をつぐむ。彼は二人を遠巻きにしていたのだが、話にけりがつきそうにないことを悟り、腰を折ることにしたらしい。

「お話し中申し訳ありませんが、里桂殿りけいがお待ちです。そろそろ参りましょう」

彼の言葉に青蘭はばつの悪い思いだったが、碧柊はまったく気にもしていない。

彼は青蘭のことを鈍いだの誤解しやすいだのというが、自分だつて人のことを云えた義理ではない。だが、それもおそらくいくら言葉尽くして説明しても通じないだろう。彼は鈍いとなることとことん鈍くなる。

その点、正せる自分のほうがまだまじだと思つ。それと同時に五十歩百歩という言葉が思い浮かび、青蘭はひそかに溜息をついた。

「では参ろう」

碧柊が重々しく云つと、袁楊は首肯して宿の扉を開く。

扉の向こうには、柱廊玄関の柱に退屈し切った様子で凭れかかった里桂の姿があった。彼は青蘭の姿を目にするとじきに姿勢を正して立礼する。

「おはようございます、姫」

碧柊を無視しての恭しい挨拶に青蘭は朝の言葉を返す。

「しかし朝からずいぶん待たされたものだ」

里桂が袁楊に愚痴をこぼすと、袁楊はちらりと二人の王族を一瞥し、曖昧に微笑した。その仕草に里桂も納得したようで、諦めまじりのにやついた笑みを浮かべる。

青蘭はまた赤面して視線をそらしたが、碧柊はまったく気づいてもないようだった。

宿から続く細い石段の両脇には、似たような作りの格式の高い宿や貴族の館が並んでいた。

いったん参道に出て人ごみに飲まれてしまうと、もう身分など関係ない。

押し合いへしあいする人々の毒づく声や小さな苦痛や悲鳴はあちこちから聞こえてくる。

青蘭と碧柊を中心に守るように、寄州公に仕える武人が警護にっているのだが、ほとんどその意味をなさないような混雑ぶりだった。

「ともかく吾の手を放さぬように」

碧柊はたとえどれほどの混雑だろうと他人に触れさせる気はないと宣言するように、華奢な体に腕を回している。

なかば背後から抱きすくめられるような形なのだが、立錐の余地もない混雑ぶりにそれも仕方ないと青蘭は観念していた。と云うのも、四方から聞こえてくる悲鳴のなかに、どさくさまぎれの痴漢を罵倒するものも少なからず含まれているからだだった。

たとえ周囲を厚く守られているとはいえ、どんな隙に付け込まれるか分かったものではない。油断も隙もないという意味では碧柊も似たようなものだが、一応彼のことは憎からず思っているわけで、全くの他人に付け込まれるよりはましだった。

参道は向かい合う軒と軒が接するほどに狭い。

昨日の夕刻もすれ違うのが難しいほど混みあっていたが、物珍しげに店々をひやかしてまわれる余裕はあった。むしろその賑わいが気分を弾ませるほどで、青蘭は珍しく少々はしゃいでしまった。酔ったわけでもない珍しいなと碧柊は笑ったが、彼も同様に楽しそうだった。

だが、今はそんな余裕はまったくない。神殿側が一日の参拝者を限る理由を身を持って知る羽目になった。この上に日帰りの参拝者まで受け入れることはそうとう難しいだろうし、こんな状態では一生に一度といわれる参詣のありがたみもあつたものではない。

間もなく人の波はまったく停滞してしまった。

そこからは神殿の屋根すら見えない。人々の動きがとまると、次第に人々のざわめきも静まっていくな。不思議な静謐に、唾を飲み込むことさえためらわれるほどだった。

青蘭はそんな人々を見渡し、次になにが起こるのか静かに待った。落ち着いてみれば、昨日ひやかしてまわつた店はすべて閉まつている。朝のこの人出を考えれば当然だ。

「これでは会見がいつになるか分からぬな」

耳元で碧椋が囁いた。彼はいささか委屈顔で、それでも青蘭を防御する姿勢だけは頑として崩さないつもりらしい。

「そうですね　あくまで里桂殿の名前しか出していないし、それに、参詣時には身分による優遇はないとも聞きました。順番が回ってくるのを待つしかないでしょう」

「それしかあるまいな　この会見が無事にすめば、いよいよ階きざしを一段上がることとなる。少しは緊張なさっているか？」

青蘭は我慢しきれず、さり気なく顔をそむけた。体が密着しているので彼の言葉と共にその吐息が耳朶にかかるのだ。彼に他意がないとわかっている分、それを訴えるのも気恥ずかしい。

大神官は今年に入ってから急に代替わりした。大神官の代替わりはその死をもつてしか行われぬ。聖地を直接押さえている寄州公里桂のもとには、先代の死因は老衰だと伝えられたという。新たに大神官の地位を襲つたのは50代の神官で、歴代のなかでも異例の若らしい。

前の冬は春先に戦火を交えた東葉との戦いに備えて、どの貴族も準備に追われていた。里桂もその一人で就任式には寄州を留守にしていたため、未だに大神官と顔を合わせたことはないという。



大神官には次席の神官が繰り上がったのではなく、もっと下位の者が抜擢されたい。年功序列が原則にもかかわらず登用されたということは、切れ者であることは間違ないだろうという、これも憶測に過ぎないあてにならない情報しか得られていない。

なにもわかっていないだけに、青蘭も昨夜は緊張して眠りは浅かった。だが、この状況でそれもいつの間にか治まっていた。

「今はまだ大丈夫です。この状態では緊張も続きません。でも、いざ直前になればきつと」

「なに、大丈夫だ。吾が傍にいる故な」

「けれど交渉するのは私です。しっかりと気合いを入れて下さらなければ 碧柊殿は私に甘すぎます」

苦笑まじりにたしなめると、まわされた腕に力がこもる。抱きすくめられるような体勢に、青蘭はその腕を軽く叩いて抗議した。

「碧柊殿」

「確かに吾は甘い。だがな、それでも云わねばそなたは弱音を吐かぬだろう?」

「そんなことは」

「この先、そなたは一人ですべてを背負わねばならぬ。失敗は許されぬ。当然周囲からの評価も辛くなる。要求されることも多くなり、それも高くなる。不安でも自信がなくなるとも、たとえ死地に臨んでも、そなたは悠然と笑っていなければならぬ。だからこそ、吾くらいは甘くてちょうどよい」

「……」

青蘭はうつむいて碧柊の腕を強くつかむ。

「手放して甘やかすわけではないぞ。ときには誰よりもきつい諫言もしよう。ただ、一人でなにもかも抱え込まずとも良いということだ」

腕を掴む手にそつと手を重ねられ、青蘭はしばらくじつとしていた。

その言葉には王太子という立場に長年あった実感が込められてい

る。

人の上に立つということがどうということなのか、はっきりいつて青蘭はまだ実感できていない。それでもその台詞を裏付けるだけの彼の実感はうかがい知れる。女王として立つつもりなら、それだけの覚悟をしなければならぬということだった。

軽い気持ちで即位を決意したわけではないが、当初の覚悟以上の厳しい覚悟の必要性を実感する。

それでももう今となってはたとえ碧柊が相手であっても、自分に出来るでしょうかなどと云う言葉は吐けない。

一人ではないけれど、一人である覚悟と責任も必要とされる。もし今、即位するか否かを尋ねられれば断るかもしれない。もはやそんな選択肢はありえない。

「……傍にいて、私を支えて下さい」

「とつくに承知しておる」

当然だという気楽な口ぶりに、青蘭も沈鬱な思いから抜け出せた。

「とりあえず、当たって砕ける、ですね」

「 当たるのはいいが、砕けるのはまずいぞ」

言葉のあやを解さない生真面目な言葉に、青蘭は思わず小さく笑ってしまふ。

いくらか気が軽くなったそこへ、神殿の開門を知らせる鐘が高らかに響いた。

鐘が打ち鳴らされると、あたりにはようやくこの窮屈な状態から解放される安堵とも、待ちに待った聖地のその中心で神への祈りを捧げられる期待ともつかない呻きにも似た吐息が重なり合った。

青蘭もほつとしつつも緊張を新たにする。

はるかな古は知らぬが、少なくともこの数百年間、大神官と王族がじかに対面した例はない。

どういう理由でかはもはや分からぬが、建国のはじめより都は聖地から遠く離れた翠華と定められた。それ以降、王族は母でもある女神の墓所ともいえる聖地を訪ねたことはなく、その女神を崇める総本山の大神官は、翠華で行われる国事でもある祭事には一切関与しない。

神殿は母である女神には仕えるが、その末裔である王家とは一定の距離を置きつづけてきた。だからといって、彼等が国政にまったく関わってこなかったわけではない。

歴代の王の選定には息のかかった貴族を関わらせ、時にはそれが因となって国は乱れた。

百年前の東葉建国のきっかけとなった、双子の女王とその王弟の争いにも彼等が噛んでいたという。

その後も小規模ながら内紛は続き、何人も王族が東葉へ逃れた。そのすべてが神殿のせいではないが、常に少なからず絡んでいることは、西葉貴族の間では憶測ではなく当然のことと認識されている。

こんな風に王女自らが慣例を破って聖地を踏み、大神官にその支持を求めるなど、はじめから付け込んでくれと云っているようなもので、それは青蘭も分かっている。

だが、兵力もなく味方も少ないこの状況で、素早く東葉まで巻き込む力を得るには王統家と神殿の支持は欠かせない。蒼杞との対決に片がつき、あらためて明柊率いる東葉とことを構えるには絶望的な兵力差がある。

特に東葉においては、葉王家直系の王女である青蘭に加えて神殿の威光までちらつかせれば、かなり有利になる。権力と金に群がる神官の実態を目の当たりにすることのない東葉の人々は、貴族であってもまだ神殿への敬虔な姿勢が残っている。

停滞していた人々の列がようやく動きはじめた。

沈思していた青蘭は、碧柊に腕を解かれて我にかえった。

「やつとですね」

やれやれとでも云いたげにわざと明るくぼやく。

「ああ、ようやくだ　もし、一対一での会見になっても大丈夫だな？」

青蘭はそつと振り返る。そう問いかける彼は、独り立ちする元小姓の少年を案じるような、保護者の表情かおをしている。力量不足を危ぶんだりするような明確な理由のある心配ではなく、ただひたすら親が子を案じざるを得ないような。

青蘭は綾罌が云つていたことを想起し、思わず笑ってしまう。綾罌は、共に育った乳兄弟であり主でもある彼のことを、案外世話好きだと評していた。

「何故なにゆえ、笑う」

「いえ　あなたは心配性な父親になりそうですね」

思わず口をついて出そうになった綾罌の名前を飲み込んで、その分、青蘭は無邪気に笑ってみせる。

碧柊はわずかに眉をひそめた後で、あっさりと首肯した。

「おそらく、そうなるうな　そのためにはまずはあなたに吾の子を産んでいただかねば」

にやりと口を端を歪める。すぐにそういう話題にすり替えて、青蘭の動揺を誘おうとする手口にもそろそろ慣れてきた。

「そうですね。そのためにも一人でもなんとか善処いたしますから、御安心ください」

艶やかに笑う頬にこぼれ髪がかかる。

男装のために思い切りよく切ってしまった髪は、髻かまちを使わなければ少年のように短い。少なくとも女性の長さではない。神殿参詣のためにそれすら不要と、自前の髪だけを束ねている。その短さは人をぎよつとさせるには十分だった。

おくれ毛をすくって耳にかけてやりながら、碧柊は惜しむように見事な髪を見つめる。

「元のように伸びるにはずいぶんとかかるうな」

「じきにのびます、すべてが治まる頃には」

いったいどれほどかかるのか。本当にそんな日が来るのか。それは誰にも分からない。けれど青蘭は確定の未来を語るように静かに言い切った。

碧柊は黙って細い肩を軽く叩いた。

ゆるゆるとした人の流れに任せるままに神殿の門をくぐる。その頃には先に参拝をすませた者が門の脇から同じ参道に出てくるため、混み具合はほとんど変わらない。

門は白い石柱だった。振り仰ぐほどに高く、その奥に聳える神殿はさらに壮大だった。一階部分は優美な円柱の列柱玄関が儼かな美しさで人々を圧倒し、さらにその上には流麗な弧を描く屋根が幾重にもかぶさりあっている。実際に何階建てなのか見当もつかない。「かのような所まで、よくぞこれだけの石材を運ぶことができたものだ」

碧柊が感心したように呟く。青蘭も同じように当たりを見まわしながら小さく首を振った。

「これは岩場を削りだして造られたものです。その際に出た石材で

参道や建物などが整備されたそうです」

「これが削り出されたものとは……」

その規模に碧柊も呆気にとられたようだった。

「これが神殿の総本山です」

青蘭の平板な声音に、碧柊は表情を引き締める。神殿は国から一切の援助受けていない。それでもこれだけのものを築くことができる。

東葉では神殿の勢力が問題となるほど大きなものとはならなかった。それだけに碧柊には、青蘭や里桂たちから聞かされた神殿の持つ力の大きさやそれ故の問題に実感が伴わなかった。だが、それもこうして視覚に訴えられるとこれ以上の証はない。

碧柊はあらためて隣に立つ青蘭を見つめる。彼女は冷静な眼差しで人々の様子を観察している。

こういうときは東西の葉のそれぞれの国内事情の違いを思い知らされる。それぞれに問題を抱えているが、生まれ育ったものでなければ理解しづらいこともある。その逆に外から見るとこそ分かることもある。

思えば東と西の王家のそれぞれに年頃の直系の王族がいたことは幸いだった。大きな年の差があってもおかしくはなかった。数少ない直系の王女に釣り合う年齢の碧柊がいて、心を通わせるだけでなく目的を共用することもできた。このめぐり合わせに意図的なものを感じるのは、感傷が過ぎるだろう。

そこへ、神官と話しこんでいた里桂が戻ってきた。

「我々はこちらへ」

まっすぐに進めば拝殿がある。里桂と話していた神官は列柱玄関を脇へ逸れて案内してくれるようだった。

「まずは参拝せずとも良いのか？」

誰も異議を唱えずについていくため、碧柊は声を押さえてこっそり青蘭に尋ねた。

「王族は神殿には詣でません　東葉では違うのですか？」

「いや、東葉でもそういう習慣はない。しかし祭祀の詳細は神殿と傍系王族の女性祭主に任せておった」

100年前、西葉から追い出された東葉王家の主は祭祀権を得ることはできなかった。その後も直系の王女が産まれなかったこともあり、王家が行う国事である祭事について詳しいことは伝わらないままだった。

「そういえば、王家の祭祀は女が司るが、神殿は男なのだな」

「……元々は神殿も巫女が中心だったのですよ」

連綿と女系相続で受け継がれてきたの王家以外では、徐々に何事も男性中心の社会へと変じていった。それは次第に神殿にも及んでいった。

「吾も知らぬことが存外多いようだな」

「東と西では仕方のないことです。ですから、神殿のことは私にお任せください。碧柊殿がこの問題を理解なさるには、今は時間が無さすぎます」

どのような交渉になるか見当もつかないが、それでもいくつかの場合に応じて里桂・袁楊・青蘭の話し合いで留意すべき点は明らかにされていた。それに碧柊も臨席していたが、理解しがたい部分はいくつかあった。

「ああ、承知している。いずれあなたにゆっくり教示していただく」

「私も東葉のことは知らないことばかりですから」

「お互い様だ」

青蘭は碧柊と目を合わせると嬉しげに口元をほころばせ、じきに表情を改める。表情を消し、静かな眼差しでさりげなくあたりへ注意を払う姿は王女のものだった。

柱廊玄関の角を折れると、そのまま真っすぐにのびる回廊となっていた。片側は壁、もう一方は手すりのついた吹き抜け。盛んに轟くような水音が届く。深い谷底を流れる溪流の逆巻くさまを思わせる。

未だに陽の射さない谷あいの聖地は、曇天のように薄暗い。しかし白々とした岩盤を削り出した神殿のなかには静かな明るさが満ちている。

しばらくひたすら歩き続ける。その距離が神殿の奥行きともなるため、その広さに青蘭は目を瞠る思いだった。

狭い参道沿いにひしめき合う建物越しに、神殿の全容を目にすることはできなかった。門をくぐっての神殿前の広場もさほど広がったわけではない。何階建てか分からぬほどの高さを、天を仰ぐような心地で実感したが、この奥行も驚くに値する。

総本山は、神官を養成する学問所や、それとは別に選抜された者に建築や医術に土木技術を教える教育機関、病篤い者のための病院、大規模な写本室、その他様々な施設を擁し、もちろんここで起居する神官たちの居住空間も含まれる。

一つの街とも都市とも言い得る規模を誇る。そのなかに門前の町は含まれない。

都市機能としては王都すら凌ぐかもしれない。

それらはすべて雪蘭を介して知ったことだった。彼女を経由して伝えられたことは、今思えば客観的だった。属する勢力の面子に遠慮することなく、優劣、長所短所も伝えられた。

“外”を知らない青蘭は、それを数値としてしか把握できなかった。百聞は一見に如かずと云ったのも雪蘭だった。それを実感する日々は未だに続いている。



突き当たりに階段があった。幅の広いゆったりしたつくりで、手すりには精緻な彫刻が刻まれている。

案内役の神官は、引きずるほど長い神官服の裾を踏むこともなく階を昇っていく。服そのものは簡素ながら、その生地は青蘭達の出で立ちとは正反対のものだった。

だが、青蘭も日頃は彼と同じかそれ以上に贅沢な暮しをしている。立っている場所は同じと云うことだ。

いくつもの階段を昇り、長い回廊の角を何度も曲がった末に、ようやく一行は重厚な扉の前で足を止めることができた。案内なしに来た道を戻れと云われても確実に迷いそうだった。

「こちらでございます」

神官は恭しく頭を垂れ、控えめの扉を叩く。特に応えは聞こえなかったが、かまわずに彼は扉を開いた。

まずは里桂から入室する。袁楊、碧柊と続いた最後に、青蘭は踏み込んだ。

部屋は拍子抜けするほど狭かった。部屋の中央に円卓と数脚の椅子のみで、他に部屋の主の姿はない。壁には絵画が一枚かけられているに過ぎない。

「こちらが控えの間となります。非公式にというお申し入れでしたので、謁見の間ではなくこちらでお会いになられます」

絵と反対側の壁には入口と同じ作りの扉がもう一枚あった。その向こうが主室らしい。

「お入りになるのは寄州公のみとさせていただきます。お連れの方はこの部屋でお待ちください」

里桂は重々しく首肯し、3人を一瞥しただけでさらに奥の部屋へ姿を消した。案内の神官も彼に同行したため、控えの間には3人だけとなる。

まずはかけましようかと促され、青蘭がかけようすると素早く碧柊が椅子を引く。当然のようにその行為を受け入れながらも、青蘭は内心戸惑いを感じずにはいられない。

本来、碧柊は青蘭にそのようなことをする必要はない。青蘭に仕えると言った通り、すでにそのつもりで動いているのだろう。

生まれて以来ずっと仕えられる立場にあった彼には、この年齢になつてから他者に仕える事に対する抵抗は感じていないように見える。だが、その内心はどうだろう。問うてみたところで、青蘭だけは別だとか何とか云つてはぐらかされてしまふのがおちだろう。

「ご気分は如何ですか？」

袁楊がゆつたりとした笑みを浮かべて問いかける。

「ええ、大丈夫よ。今さらあれこれ考えてみても緊張するだけでしょうから」

「ああ、下手に自分を追い込まぬ方がよい。いざとなれば自分でも驚くほどこころが働くものだ」

碧柊はにやりと笑つて自分の口元を指さす。

「そうやってこれまでやってこられたのですか？」

袁楊が小さく笑つた。

「はったりと出まかせに関しては先達がおつたのでな」

「それは心強い」

碧柊は笑っているが、青蘭は顔がこわばりそうだった。明柊のことに違いない。碧柊はなんでもないことのように語るが、本当は従兄のことをどう思っているのだろうか。それを訊いてみたことはなかった。

「如何した？」

険しい表情に気づいて、碧柊が眉をひそめる。青蘭は「いいえ」と呟いて笑つてみせた。明らかになにかを誤魔化しているものだったが、そこへ再び扉が開き、あの案内役の神官が姿を現したため追及を受けずにすんだ。

案内役の神官の背後には奇州公が立っていた。隣りの部屋はずい

ぶん広いらしく、大神官らしい姿は見えない。

「袁楊殿はここで待たれよ。お二人はこちらへ」

里桂に促された瞬間、青蘭の顔がさつと強張った。

にわかに緊張が増したらしい。里桂との会見時は碧柊もいなくて一人だったが、これほど緊張はしなかった。それが今更これほど緊張してしまうのは、彼がいるということに甘えているのだろうか。

動悸が増す一方で、心のどこかで冷静にそんな風に思う自分がいる。少し前までは雪蘭に頼ってばかりだったが、次は彼にそうしようとしているのか。

なかなか動けずにいるその肩に、軽く触れる手があった。

「如何した。まさか急に怖気づかれたか？ 吾には任せると笑っておられたが、やはり空元気だったか？」

明らかに緊張しているにも関わらずからかうような口ぶりに、青蘭はむっつとしてその手を払いのける。彼が笑って椅子を引いてくれるのにも礼も云わず、すつくと立ち上がった。

「その意気だ」

小さく囁かれ、青蘭ははっとした。

「……どういたしました」

してやられてはつの悪いような想いと、感謝が入り混じって素直に口にできなかった。それすら見越したように彼はすました顔で口の端だけ歪めた。

真つ先に視界に飛び込んでくるのは窓の向こうに広がる風景だった。

あれほど遠かった対岸がわずかではあるが見え、遅い日の出に湖面もわずかに煌めいている。今日は天気良さそうだと侍女が話していたが、確かに真夏らしい快晴となりそうだった。

その眺めを遮らないように気遣うかのように、一人の男が壁際に椅子を寄せて座っていた。窓に背を向けるでなし、客人に正面から向き合うでなし。入り口に対して斜めに座り、外の風景を楽しむことも客人の相手もできる配置だった。

寄州公が再び入室してきたことに気づくと、さつと素早く立ち上がる。その無駄のない動きは誘導してきた神官より、むしろ碧柎のような戦場いくさばに立つ者に近かった。

彼は新たに入室した二人に向け、恭しく立礼した。それは正式なもので、彼が二人のことを承知しているという証でもあった。

青蘭と碧柎も扉の前に並び、礼を返す。

二人に向けられていた視線が一瞬ちらりと横に控えていた神官に滑ると、案内役は浅く礼をして退室した。

「私が大神官を務める成昊せいこうです」

里桂が二人を紹介するよりも先に彼が自己紹介をした。神殿に入ると姓を捨てるため、その出自を知る術はない。

「青蘭殿下と碧柎殿下でいらっしやいますね」

すでに里桂が知らせていたのだろう。青蘭は首肯しかけたが、思い直して毅然と顔を上げた。

「そうです」

凜と響いた声は、震えてはいなかった。碧柎はちらりと青蘭を一瞥し、こちらは黙って首肯する。最初から主導権がどちらにあるの

か、明確にしておく必要があった。

「まずはおかけください」

その言葉に応じつつ、青蘭はやや意外な思いで大神官を見た。それほど多くの神官を見知っているわけではないが、彼等はいいていほつそりしており、文人に近い。その頂点に立つ男も似たりよつたりだろうと勝手に想像していたが、その正反対に近かった。

中肉中背の範疇ではあるが、その肩は広く体つきもがっしりしている。飽食に肥満している気配は微塵もない。書物や聖具よりも剣を持たせた方が似合いそうだった。

「まずは両王陛下の御逝去、お悔やみ申し上げます」

成昊の言葉は明確だった。

これまで神殿は東葉の存在に言及したことは一度もない。否定もしないが認めもしない。けれど、“東”からやってくる信徒からもえるものはしっかりいたただく。東葉王家に絡んでこなかったのは、その王城が遠すぎ、西葉王家の手前大手を振ってその国内で神殿を増やすわけにはいかなかったという2点につきる。

女神への冒瀆を口実に貴族にもうるさくまとわりつくわりに、東葉が絡むと政治の如く俗世のまつりごとには関与しないとそつぽを向く。むしろ争い事が多い方がつけ入るネタが増えるため、和平をもたらすような政策や動きには難色を示すことすらあった。

その神殿を代表する大神官が、公的ではないにしろ東葉の王を認めたとすることは、ひいては東葉と云う国をも肯定したことになる。青蘭はこの会見を、どのような形であれ、真意を隠して言葉尻をあげつらいあい、腹の探り合いになるだろうと覚悟していた。それを最初からこのような形で裏切られ、面食らう。

ともかく言質をとられないように注意しなければならないと、里桂は何度も念を押しした。聖地を押さえる寄州では、代々大神官との折衝に苦労してきた歴史がある。それだけに彼の言葉は重かったのだが。

ちらりと里桂に目をやれば、彼もかすかに眉をひそめている。表

情は巧みに隠しているが、困惑は伝わってくる。少なくとも先年亡くなったという前任の大神官とはそうだったのだろう。

「いたみいます」

青蘭はとりあえず素直に礼を述べた。

「私はあなたとお話しすればよろしいのでしょうか、青蘭殿下」

「はい」

癖はないが強そうな髪は首の後ろで一纏めにされ、顔の半ばを覆い長く垂れる髭はずいぶんと立派なものだった。その両方とも半ば白くなり、50代と云う若さで就任したという彼に貫禄を与えている。

だが、そもそも彼にはそんなものは不要にも見える。声には深みがあり、黒々とした目には静謐があり、そのどちらからも内心を探ることは難しそうに見えた。

青蘭はその眼を見て下手な抗いを諦めた。奥の宮で育ち、そこですら雪蘭の陰に隠れ、世慣れない自分に、この初老の男の相手をまともにできるはずがない。

幸い二人きりではない。里桂は少なくとも先代と対峙した経験があり、碧柊は王太子として育ってきた。いざとなれば助言を請えばいい。みつともないかもしれないが、それが己の実態なのだから仕方がない。つまらない見栄を張って道を誤ることの方が恐ろしい。

「いったいなにを私に、いや、神殿にお求めになられますか？」

駆け引きも何もあつたものではない。それともこれが駆け引きのはじまりなのか。青蘭には見当がつかなかった。

大神官の目は昨日の夕刻に見た湖面のように静かだった。

碧柊や里桂の様子を見ることも忘れ、青蘭は彼の口ぶりをまねることにした。

「私を王女であると認め、正統な女王として支持することを求めます」

っと小さく息をついたのは里桂だった。最終的に大神官の口から出るように誘導するよう助言した言葉を、青蘭が自分から切り出し

てしまった。駆け引きのかの字もあつたものではない。

里桂が苦い想いで彼と王女の間座る碧柎を見れば、東葉の王子は面白そうに恋人を眺めている。この状況を楽しめるのは、やはり西葉の国内事情を肌で知らない故か、それとも大物なのか。

「神殿が王家の問題にかかわってこなかったことをご存知ないのですか？」

「知っています」

あつさりと肯定した青蘭に、成昊は膝の上で重ねていた手を肘掛に移動させた。表情はまったく変わらない。

「それを御承知の上でお求めになられると仰せになる。それは命令ですか？ それともあくまで協力を求めておられると解してもよろしいのですか？」

「私にはまだ神殿に命じる権限はありません」

「その通りです。神殿に命じることができるのは女王陛下のみ

しかし、その根拠も実に曖昧なことをご存知ですか？」

「知っています」

彼の持ち出そうとしているものは、寄州公や袁楊が最も可能性が高いと話していたことのようなだった。それに合わせるように里桂が足を組み替えた。打ち合わせ通りの合図で、どうやら当たっているらしい。

「どのようにご理解いただいているのでしょうか」

それを王女の口から云わせようとするだろう。それも見解は一致していた。それを彼女の口から明らかにしない限り、話は進まないだろうとも。

「神殿が仕えるのは女神。そして女王はその娘。女王は女神ではない。女神ではない女王に神殿に命じる権限があるのか否か」

これは雪蘭からも聞いたことがあつた。重要なことだからきちんと理解しておくようにと。同時に神殿がその問題になんとか片を付きたいと考えていることも。彼等の権力への介入の目的の一つでもあるという。

「そのとおりです。では、青蘭殿下はそれに関してどのようなお考えをお持ちでいらっしゃるのでしょうか？」

理解しているのなら、神殿側の要求も承知しているだろう。返答はおのずと決まってくる。

「ええ、分かっています。ですが、その前に一つ、こちらからも話があります」

「話には順番があります。一つずつ片付けましょう、殿下」

「わが兄蒼杞が王都で何をしているのか。女神を貶めるものとして神官たちを粛清しています。やがてはここにまで手を伸ばしてくるでしょう。兄は何事も徹底して行います。それはあなたも知っているはずですよ」

かまわずに言い切った青蘭を、大神官はまっすぐに見つめる。

「どうせよと？」

「それは自ずと明らかでしょう」

青蘭ははじめて笑みを浮かべてみせた。

蒼杞は神殿に敵意をむき出しにしている。もはや神殿側に味方に引き込むべき王族は青蘭しかいない。青蘭側も神殿を味方につけたいわけで、互いに要求は一致している。

だが、青蘭側はどうしても神殿を味方につけなければならぬわけではない。もともと王家は神殿とほとんど関わってこなかった。総本山が味方に付かずとも、なんとかできる。蒼杞が勝者となれば神殿をどう扱うかすではっきりしている。神殿としてはどうしても青蘭に勝ってもらわなければならない。それにここで協力を拒めば最終的に青蘭が勝者となった場合、神殿に有利な政策はとらないだろう。

大神官は右の指先でひじ掛けを一度だけつついた。

「その見返りは？」

「先ほどの答えの続きを。おそらく、私の考えはあなた方の見解と一致しているでしょう」

艶然と微笑んだ王女に、大神官は小さく息をついた。



「分かりました。あなたを青蘭王女殿下だと認め、正統な王継承者として支持しましょう。しかし、分かっておられますか。これで神殿が正式に王位継承に関与した例となることを」

「ええ、分かっています。そして、私も答えましょう。女王は女神ではない。故に女王に神殿に命じる権限はありません」

これで王家は神殿の完全な独立を認めた上に、王位継承に介入する機会まで与えてしまったことにもなる。長い目で見れば、王家には不利なことばかりだともいえる。

それでも青蘭は微笑み、他の2人も悠然としている。目論見通りだということの証でもある。

成昊はふたたび膝の上で指を組み、薄い笑みを浮かべて王女を見つめる。

「なにをたくらんでおいでですか？」

「なにも。ただ、権利を得るということは義務と責任も生じるということもお忘れなきように。それだけのことです」

「肝に銘じておきましょう」

大神官は重々しく頷いてみせた。

宿に戻ったのは夕刻近くになつてからだつた。

あの後、袁楊もまじえて改めて場が設けられた。神殿側では大神官がすべての決定権を持つが、補佐として権大神官ごんのだいしんかん2名が加わつた。主に口を開いたのは権大神官たちと袁楊・里桂の4人で、後の3人は黙つてそのやりとりに耳を傾けていた。

それにもようやく片がつき、神殿を辞す頃には朝の人の海は嘘のように引いていた。朝、参拝を済ませた者はその足で帰途につく。それと入れ替わりに、また新たな参拝者が聖地を踏む。

依然、参道は混みあつているが朝のそれとは比較にならない。一行はそぞろ歩く人々の間を疲れた足取りで宿へ向かつた。前日の同じ時刻には、あれほどひやかすのが楽しかつた店先も、のぞいてみる気も起きなかつた。

青蘭はあてがわれた部屋に引き揚げると、長椅子に身を横たえた。夕食間近だが、食欲も気力もない。

蒼い顔で言葉少なにぐったりしているのを見かねたように、侍女が淹れたての香草茶をさしだしてくる。茶器を受け取れば、やわらかな香りに包まれた。それを深々と吸い込むと、ようやくぴりぴりと張りつめていたものが緩んでいくようだった。

ほっと息をついて椅子の背に凭れかかる。

「ずいぶん人の数でしたから、お疲れになられるのも無理ないことでございますよ」

侍女には本当の目的は伝えていない。

いくら混んでいると云つても、普通の参拝は昼過ぎには終わる。それが長引いたのは、ひとえに青蘭達の身分が高い故だと彼女は思っているようだった。

「ええ、本当に多かつたわね　あなたは心行くまで祈ることができて？」

微笑みかけると、侍女は心の底から嬉しそうに「はい」と大きく肯く。青蘭達が神殿へ出向いている間、供の者たちにも参拝が許された。

彼等の信仰の篤さに、青蘭はひそかに驚いていた。

このような時世だというのに、聖地を訪れる人々の数に特に変化はないという。王家や貴族たちの混乱は、まだ彼等の生活を大きく左右するほどではないらしい。ある種の膠着状態にあり、誰もが蒼杞の出方をうかがって動きようがないともいえる。だが、いざ漣一つたてば、それは大規模な内乱に発展する可能性を秘めている。そうしなければ無関係でいられる者などいなくなるだろう。

彼等は王女の東葉への嫁入りからはじまった一連の争乱をほとんど知らない。国境近くの住人たちですら、縁談が調ったはずなのにまた両国間でいざこざがあったらしい位にしか認識していない。

それは蒼杞が侵略行為に及んだのが専ら東葉王都周辺に限られ、その後も形式的に明終と戦火を交えただけで早々に撤退したせいもあつた。

青蘭王女の“降嫁”に関連して前王が息子に処刑され、現在王位が空席となっていることも王都の周辺にしか伝わっていない。

彼等にも実害をもたらす人間が王位に就かない限り、彼等にとつて上に座る者が誰であろうと大差はない。

女王は彼等が崇める女神の直系の娘であり、その夫となる者もその血縁と決まっている。尊い血をひく女王をいただく限り、それがどれほどめまぐるしく交代しようと思等には関係ない。問題なのはそれともない国内が揺れ、時に内紛へと発展して自分たちも巻き込まれるような事態に限られた。

王都では蒼杞による神官の粛清がはじまっている。それは父である前王の処刑の直後から開始された。敬愛する神官の首が次々と曝され、王都の住人達は震え上がっていることだろう。

権力と金への執着に蝕まれ、その腐敗ぶりが問題となっているのは一部の高位の神職たちで、日頃庶民と親しく接しているような末端の神官の多くは善良で親切だった。しかし、蒼杞はそんなことなどおかまいなしに、神官と云うだけでひとくくりに行っている。

女神の血縁がその神官を狩る。その事実を人々はどんな風に受け止めているのだろうか。

女神の血をひくとされる自分がどの程度の人間なのか承知している青蘭は、女神を信じていない。もし、本当に存在するのなら、その子孫の繰り返す愚拳をいつまでも傍観してないだろう。

それとも、建国のはじめ、国を平らかにするために自ら力をふるったとされる女神のように、その子孫にもおのが力でたちむかえとこののだろうか。それならば納得もできるのだが。

茶器が空になる頃には、あれほど重かった疲労感も薄らいでいた。緊張に伴う気疲れを原因だったらしい。気がつけば、窓の外に夕闇が迫っている。

窓際に立って参道を見下ろせば、どこよりも一足早く訪れる夜に備えて既に灯りが点されている。

「姫さま、里桂さまよりお越し願えますかとの伝言です」

沈思しているところに、遠慮がちに声をかけられる。

話はまだ終わったわけではなかったことをようやく思い出し、青蘭は小さく頷いた。よほど疲れた顔をしてしまっていたのだろう。

青蘭が一息ついて気力を取り戻すまで待っていてくれたに違いなかった。

食堂に降りると、そこにはすでに碧柊たちが顔をそろえていた。

神殿からの短い帰途、碧柊は青蘭の肩を軽く叩いて微笑んでみせた。ただで、なにも云わなかった。あえて茶化してみせたかと思えば、話す気力もないときはそれも察してくれる。臨機応変な彼の気遣い

は、ありがたかった。

挨拶もそこそこに、青蘭が席に着くと袁楊が切り出した。

「岑州より新たな報せです。いよいよ岑公の婚儀の日取りが決まり、蒼杞殿も即位の段取りをはじめたようです」

正確には即位するのは蒼杞の妻であり、青蘭の従妹でも王女である。蒼杞はこれまで歴代の王と同じく、女王の夫である“王”として国権を手にするつもりでいることは明白だった。

「そうですか」

青蘭はさつと顔を強張らせつつも、平静な声で頷いた。

「即位にまつわる表立った動きは、岑公の婚儀が終わるまでお待ちいただく。蒼杞殿の即位に関し考慮する必要はないでしょう。なにより尊い直系の王女は間違いなく青蘭姫であり、われら王統家8門中5家の同意がとりつけられれば総意とみなされる。これに基づきどなたが正統な王であるかを宣言し、加えて大神官の支持が明示されれば、偽物が誰であるかは明らかにする。偽王は討伐のちようどよい旗頭ともなりましょう」

里桂の言葉にいちいち頷きながらも、青蘭は浮かない顔だった。

「その5家、いえ残り4家の同意は得られそうなのですか？」

「……王都ではとらわれた6公の首すべてがさらされたそうです」  
逃げ延びたのは里桂と、彼と親しかった李州公のみだという。李州公も里桂と共に蒼杞の帰国前に王都から落ち延びている。処刑された6公にはそれぞれ後継者がある。彼等が蒼杞を支持することはないだろう。

青蘭は総毛立つのをなんとも堪えようがなかった。兄がいったいなにをしようとしているのか皆目見当もつかない。

「その理由は？」

「罪状は反逆と洩神」

論拠は前王の処刑と同じものなのだろう。それでも青蘭は問わずにいられなかった。

「誰への反逆だと？」

「神への、だそうです」

「……なにを　誰をもつて神を騙ると……紅蘭殿くわんしかありませんね」

それは従妹の王女の名だった。

青蘭と紅蘭、直系とみなされる王女は二人しかいない。その中でも前の“女王”と“王”を両親とする青蘭の方がより正統とされるが、青蘭の身になにかあれば彼女がその代わりを務めることになる。その彼女こそが蒼杞の妻だった。

「紅蘭姫はすでに一女がおりだ」

「私に娘ができなければ、その姫が後継となるでしょう」

「できることなら無事に身柄を保護すべきでしょう」

里桂の言葉に青蘭も同意する。直系の王女の血統が絶えるような事態だけは避けなければならぬ。

「しかし、あくまでできれば、です。今はまず、青蘭さまの御即位の段取りをつけねばなりません」

忙しくなりますよ、と袁楊が微笑む。

鬱々とした様子で唇を噛んでいた青蘭は、その言葉にまた悪い癖を繰り返していることにはっとした。同時に碧柊と目が合う。慌てて口元を押さえると、彼はからかうように口の端を歪めた。

「そういうことだ、悪い癖を繰り返している暇もなくなる」

「それは碧柊殿下も同じ。おちおちしてはおられませぬ」

里桂の茶々に、碧柊は気が重いとでも言いたげに溜息をつく。

「盾の選定を二度も行つ羽目になろうとはな」

「その二度共に選ばれば、誰も殿下が盾であることに異論は唱えられなくなりましょう。一石二鳥ではありませんか」

「他人事だと思つて軽々と云つてのけてくれる」

「他人事ですから」

嘆く碧柊に、袁楊はにこやかに笑う。

それは神殿への譲歩からはじまったことだった。

神殿が王位継承に絡む前例を作ることになってしまったため、そ

の影響力を最小限に抑えることが必要になる。その抑止策として、次の王位を定める決定権を3分割することを里桂たちは提案した。

一つは前代の王による指名、もう一つは王統家の支持、そして神殿の支持。この三つが揃わなければ正式な王と承認されない。

まだ骨格だけの素案に過ぎないが、大神官も概ねそれで承知した。苓公の結婚と蒼杞による紅蘭の即位後を狙ったの青蘭の即位には、西葉の王統家しか関わることができない。そのため青蘭の最初の即位はあくまで仮とし、最終的に東西の統一が成った後、東葉の王統家もまじえた上で正式に即位式が行われることが提案されている。それはすなわち盾の選定が2度行われることでもあり、2度目の選定こそが正式な指名となる。

碧柊はその2度共に選ばれなければならなくなってしまったのだ。つた。

即位と盾の選定の日取りが決まったことを、雪蘭は事前に知っていた。

息のかかった覗見かきまみはすでに城中に幾人も放たれている。今、どのような問題が持ち上がりいかように対策が練られ、次にどんな手が打たれるのか、ほぼ時間差なく知ることができる。

それでも分からないこともある。その最たるものは城の主であり、東葉の頂点に立とうしている明柊だった。

「あなたはご自分の即位式だというのに、眉一つ動かさないのですね」

指先が白い頬をなぞる。爪の甲だったため、かたい感触があとに残った。

貴公子然とした優雅な容姿だが、その腕は意外なほど逞しく、指も武骨に節くれだった武人のものだ。太刀を握る手の爪は、意外なほど綺麗だった。手入れしているのだろうか。彼ならやりそうだが、武人の手に光る爪はなんとも釣り合いが悪いように思われた。

「なにを考えていらっしゃる？」

間近に瞳をのぞきこまれても、雪蘭は身じろぎ一つしない。

爪のことをと答えてもかまわなかったが、口癖のようにまた「別段なにも」と応じていた。

切れ長の目と形の良い眉。至近距離で見てもその男は整った顔をしている。従兄ていけいである蒼杞そうきも負けず劣らずだが、華やかさでいえばこの男にはかなわないだろう。

武人の手より詩人か楽人のそのの方が似合いそうだが、彼が優れた軍人であることもまた間違いない。

「私が気に入らないからと云って、他の男を盾に選ぶような真似はしないでいただきたい。死人が増えるだけです」

楽しそうに囁いて、彼は身を引いた。



そこはまた東宮の庭の四阿だった。陽が傾きつつあるため、風は昼間と比べればわずかに涼しい。玻璃の茶器にはいつものように氷が浮かんでいる。

一度ここへ雪蘭を誘こゝろつて以来、明柊はなにかといえれば後宮から遠く離れたこの庭へ連れ出す。歩くことは苦にならないが、盛夏の昼下がりにはありがたいとはいえない。それをいつも詫びるにも関わらず、次に案内されるのも同じ四阿なのだった。

盾の選定はとくに形骸化し、婚礼の儀式でも形式的行われるだけとなっていた。選定と称しながらも候補は夫となる男性一人だけで、他に選ぶ余地などないのが通例となっていた。

文字通り有名無実化していたその儀式を、明柊は本来の形で再現するため自分以外の候補も用意しているらしい。

「ならば常のように他の候補など置かねばよいではありませんか」  
雪蘭は薄く冷笑する。

「それでは意味がない。あなたは“王妃”になるのではなく、“王”となられるのです。“王の盾”は選り抜かれたものでなければ意味がない。それをご存知のくせに意地の悪いことを仰せになるものだ。それほどに私がお嫌いですか」

大仰に嘆いてみせる姿に、雪蘭は小さく息をつく。もう呆れる気も起こらない。

「私に明柊殿を選ぶように脅しをかけておいて、選り抜くもなにもあったものではありませんわね」

「どのような方法であれ、自分を選ばせることができるのも実力のうちです」

悪びれることもなく、むしろ得意げに微笑む。

雪蘭は莫迦らしさにまともにも応酬する気も起きず、その笑顔を見無視して茶器に手をのばした。

「私は無駄なことが嫌いですから、分かりきった茶番を長引かせるつもりはありません」

冷淡に切り捨てると、彼は嬉しげにまた身を乗り出してくる。

「俺はあなたのような聡明な女性も大好きですよ」

「熱っぽい囁きに、雪蘭は膝の上ののせていた扇を手に取り、うるさい虫でも追い払うように彼の眼前で振り仰いだ。

文字通り追い払われた明柊は、切なげに胸に手を押し当て苦悶の表情を浮かべる。

「本当につれない方だ……だが、それがまた良い。これ以上俺を惑わせて、いったいどうなさるおつもりですか？」

「そのまま道に迷って戻ってこられなくともよろしいですわ」「ご心配は無用です。俺は生れながらのさすらい人です。あなたにお会いするためにこれまでずっと彷徨ってきたのです。どのような困難があっても、必ずやまたあなたのもとにたどりつくでしょう」

「……」  
心底うんざりした雪蘭は眉をひそめ、答えるかわりに茶と一緒に口内に流れ込んだ氷の欠片を思い切りよく噛み砕いた。小気味よい音が響き、明柊は驚いたように目を睜ったのち、たまりかねて笑いだす。

「あなたでもそのような真似をなさりますか」

「私はただの小娘に過ぎません」

涼しい顔で云つてのけたが、雪蘭は内心ではひどく動揺していた。

彼の言動に苛立っていたのは、おそらく伝わっていただろう。隠すつもりもなかったのだから。だが、それを先ほどのような形であらわしてしまったのは、雪蘭にしては珍しい失態だった。苛立ちも厭味も計算ずくでなければならぬ。にもかかわらず、感情任せに氷を噛み砕いてしまうとは。

たまたま、氷が解け残っていた。それが偶然、雪蘭の口内に滑り込んだ。氷の切片を意識したことも覚えている。その硬い歯触りを砕いたのは、衝動的だった。それは偶然ではない。

雪蘭は子供の頃から感情を制御してきた。感情的に振舞うことが

あつても、それはあくまで計算した上でより効果的だと判断した時に限られた。言動も振舞いも制御することに慣れた彼女にとって、感情の赴くままに行動することは恥辱以外の何物でもない。

先ほどの行動は正しくそれだった。

自分を律することに慣れた彼女としては、不覚にもなかったことにしてしまいたいことだった。しかしそれではみつともないにもほどがある。失態よりも見苦しさを恐れる雪蘭は、自分のことを小娘と評して己の愚かしさも弁えているふりをするほかなかった。

「あなたは思いのほか愛らしくいらっしやる」

ふざけた口ぶりで耳元で囁かれ、羞恥にさつと頬を染めたのを、

明柊は見逃さなかった。

夕暮れが迫っていた。港に人影はほとんどない。繫留された舟が穏やかな波に小さく揺れている。わたつてくる風は涼しい。

青蘭が西葉を発つたのは春の終わりと夏のはじまりの間の<sup>あわい</sup>のような季節だった。そして夏は次第に深まり、すでに晩夏。春の終わりの西葉の敗戦からは半年近く経つ。

二つの国がこのような状況で秋を迎えようとは、誰に想像できただろう。一人だけは予測可能だったかもしれない。騒乱をしかけたのは蒼杞に違いないが、真の張本人は東葉を救った王子として、すました顔で王権につながる婚姻を結ぼうとしている。偽りの花嫁とも知らず。

すべてが明かされたあと、彼は彼女をどう遇するだろう。それを考えると胸がつまり、思考することすら放棄したくなる。

とつくに覚悟したはずだった。犠牲なしに何事もなりたたない。このまま兄を放置すれば被害者は増えるばかり。

青蘭には妹として、正統な王位継承者として、この事態を糾す責任がある。

戦いは避けられない。決して有利な状況ではない。蒼杞を除くことができたとしても、その後には明柊との戦いも控えている。明柊は碧柊よりも優れた軍事的才能があるという。その上、西葉の各軍は解体されている。それを采配したのは明柊だという。西葉の軍事的能力は把握されていると考えた方がいい。

「如何した、さように暗い面<sup>おもて</sup>をして」

「碧柊殿」

ここまで1人で来たわけではない。傍らには常に碧柊がいるし、警護の者もさりげなく二人を遠巻きにしている。

青蘭は衣の裾が地面につかないように気遣いながらしゃがんでいた。簡単にまとめただけ髪を肩から前に流す。こぼれた髪が風にな

びく。

白い首筋にとどまる視線に、青蘭は気付かない。華奢な体はなにもかも細いが、その首も同様だ。逃亡中に碧柊も痩せたが、彼女も同じだった。行き違いは何度もあり、その度に喧嘩にもなった。だが、その原因が彼女の我儘だったことはない。疲労にも飢えにも痛みにも、彼女は不満を口にしなかった。

傍らに立つ碧柊を見上げる顔は張りつめ、ひどく青ざめている。何を考えていたのか問うまでもない。

彼女はもつと早くに自分の身分を碧柊に明かすべきだった。それで今さら何が変わるわけではないし、あの過程で早い段階で打ち明けられていたとしても同じことだっただろう。早すぎてままずかったのだ。苓南の皆で周囲にまで発覚していれば明柊が彼女を逃すはずはなく、今と比べものにならないほど碧柊にとっては不利な事態となっていたに違いない。

その後、森を抜けた時点で苓家の意向を受けていた汪永と出会ったが、青蘭の正体には彼の方が先に気づいていたらしい。結局、汪永はそれを肯定しなかったが、明白だった。

それもこれもあの峠の夜に泣いていたように、雪蘭の身を案じる故だった。いよいよ事態が逼迫してくれば、それが再び首をもたげてくるのも仕方がない。

青蘭は自分自身よりも従姉の方が大切だと、価値のある人間だと考えている。それはおそらく刷り込みに近いもので、そう簡単に拭い去ることはできないだろう。その当人との絶対の約束がなければ、彼女は未だに口を閉ざしていたかもしれない。顔の見えぬ人々の平穩よりも命より大切な従姉を優先したい気持ちを咎めることは、碧柊にはできない。

それでも碧柊はわざわざその心情を汲み取るような真似はしない。青蘭が自分で泣かないと決めたのだ。

「そなたがかような顔で考え沈んでもどうともなるまい。それとも慰めて欲しいか？ ならばいくらでも甘やかしてやるぞ」

肩に触れようとする手をそつと拒み、青蘭は立ち上がった。優雅に裾を払い、苦笑しつつ夫となる青年を見上げる。

「すぐに意地の悪いことを仰るのですから」

「吾がそなたに甘すぎると評したのは、他ならぬあなただろつ」

「そうでしたね。すべきこと、可能なこと、不可能なこと、その三つを定めて納得したはずなのに、結局はなかなか思い切れずについてまでも鬱々と物思いに耽ってしまつて……」

誰しも割り切れないものを抱え込んでいる。けれどそれを顔には出さない。碧柊も例外ではない。

青蘭は女性だからと大目に見てもらえることを密かに望んでいる自分に気付いている。だからこそ厳しく己を律しなればならない。それを承知している碧柊はわざとからかうような苦い物言いをする。青蘭も分かっているから一々腹をたてたりはしない。

「無理に割り切る必要はない。吾とてそれは無理だ。それはそれとして置いておくしかあるまい」

「悩んだり苦しんだりすることは構わぬと？」

「それが人の情と云うものだ。自然なことだろつ。情を殺す必要も、凍らせることも不要。それを失ってしまうことの方を恐れるべきだと吾は思う。だからといって情に振り回されて良いとは云わぬ。時と場と状況を弁える。迷いの涙は人前で流すべきでない。人目のないところだ。吾の前はかまわぬがな」

「上に立つつもりなら、いついかなる時も微笑んでいなければなりませんね」

「そなたは無表情が得手ではなかるろつ。では、作り笑いで良いから笑顔の方が誤魔化しもきこつ」

青蘭はかすかに首をかしげて微笑んでみせる。

「お言葉ですが、私は雪蘭と頻繁に入れ替わつて王女と女官を演じ分けていたのですよ。それらしく表情を制御することにも慣れております」

「ならば心強いものだが 吾と争いすると靦顔に出ておられる

ようだが」

「……それはあなたがからかうから」

「愛情が絡むとまた勝手が異なるう」

にやりと口の端を歪められ、青蘭はすかさず赤くなる。

「今はあなたのことを考えていたわけではありませんが」

ふいとそっぽを向く。肩にそつと手が置かれた。

「肉親への想いも愛情の一つだ。完全に制御できるはずもなし、する必要もない」

耳元でささやかれたわけではない。肩に温もりと重みを感じたのも一瞬だった。

青蘭は俄かに生じた眦の熱を冷ますように大きく瞬きし、宿に戻りましょうと碧柊を促した。

食事中であれ睡眠中であれ、報せがもたらされるとじきに届けられた。

目下問題は山積しているが、とりわけ深刻なのは圧倒的な軍事力不足につきる。おそらく先に蒼杞と当たることになるだろうが、そもそもそれに対抗できる状態ではない。春先に東葉により王家直属だけでなく各貴族にいたるまで軍を解体された影響は大きすぎた。

責任を問われて処刑された者はいるが、それは片手で足りる程度だった。明柊はもつと徹底的な処断を求めた。西葉を併合するのではなく東葉と名実ともに同じ一つの国としてまとめかけた碧柊は、これ以上互いに怨恨を募らせる事態は避けるべきだとして、その意見を容れなかった。

そのため兵力となる人そのものは、温存されている。もともと東葉と比べて練兵も徹底されていなかったため、同数であっても力としては歴然とした差が生じるだろうが。

不足しているのは、武器防具だった。良馬も東葉へ多く連れていかれたが、全てではない。

蒼杞は明柊と手を結んでいたため、そのほとんどを傷つけることなく手にしている。東葉侵略時の3万と云う数に大きな変動はないだろう。撤退時に表向き明柊と戦火を交えてはいるが、本格的なものではなかった。

それに対し、連合すれば王家に十分対抗可能だった王統家にすらろくな武器は残されていないはずだった。表向きは。

しかし寄州公と李州公はともにはかつて巧妙にくらは温存してあるという。武器や防具は錆潰された。それは東葉方の主導で行われ、常に監査官が立ち会ったはずだが、そもその元となる数などその気になれば多少誤魔化せし、相手にはよっては懐に何かし



ら忍び込ませれば目こぼしも可能だった。しかしそんな機転をきかせることのできなかつたり、家の取りつぶしを恐れて馬鹿正直にすべて処分してしまったりしたのも少なくない。寄州公や李州公にしたところで、すべてをそうせずにすんだわけではない。

「それでも半分は残せたな」

と寄州公は自慢げに笑い、碧柊は曖昧な笑みで応じた。

李州公も3分の1はなんとか死守することに成功していたらしい。岑家も同程度温存してあるという。

寄州公里桂のひそかな呼びかけに応じる王統家や貴族たちから寄せられる返書には、動かせる兵力もおおまかに記されている。

それらは碧柊の前にも提示され、彼は眉一つ動かすことなく冷静に分析しているように見えた。だが、あとで青蘭にだけこっそりこぼしたものだっただけだ。

「西葉との交渉に当たった者が、のらりくらりとかわされるばかりで一向に進まぬと嘆いておったが」

そのしたたかさにはかなわぬと苦笑する青年に、王女はすました顔で肩をすくめた。

「それでも見事に要求のほとんどを通されたはずですか？」

事実上次期王位を握る青蘭まで花嫁として差し出させたのだ。

「云つてきかせても聞き入れぬものに対する手立ては一つしかないが、あいにくそれが東葉の得手とするところでもあった故な、仕方あるまい」

「ずいぶんと手荒なこと」

青蘭は手にした扇で口元を隠し、おお怖いことと身を震わせてみせる。

「それにしてはずいぶんと抜け目のない連中も多かったようだ」

「いくら東葉が武力で勝つても、謀でかなうはずはありません。西葉は蟻の巣地獄のようなところですから、言葉と行動は真逆と考えおかれてちょうどいいくらいです」

「そのわりに今のところ、明柊にしてやられておるようだ」

「……」

うつと言葉に詰まった青蘭に、碧柊は小さく笑う。

「あれが西葉に生まれておればどうであつたらうな。東葉は果たして互角に渡り合えたか いや、負けておつたかもしれぬな」

明柊のやり方は西葉らしい狡猾さともいえる。だが、彼はれつきとした東葉の軍人らしい武人でもあつた。

青蘭は薄く笑んで沈思する青年の穏やかな様子を無言で見つめる。憧れながらも一方で劣等感を募らせてきた従姉。自慢であり、妬ましくもあつた雪蘭。彼女は青蘭にないものをたくさん持っていた。それと同じものが欲しかつたのかどうか、今でも分からない。ともかく眩しくて仕方のない想いで、ずっと傍らの彼女だけを見つめてきた。

碧柊はどんな風に従兄を見てきたのだろう。あの一方的に愛を囁く悪癖にはうんざりしすぎて憎しみすら抱いているようだが、こういう事態に至つても彼はおそらく従兄を嫌つても憎んでもいない。その計略で父を失い、部下を失い、国を追われ、罪を着せられてもそれは、何故なのか。

肉親の情は愛情の一つに違いない、と彼は囁いた。それを消す必要も殺すこともないと。それができなかったのは、彼も同様だったからなのだろうか。

「そのようなことは誰にも分かりません。勝敗は時の運でもありません」

そつと袖をひいて首を振つた少女に、碧柊はそうだなと呟く。

「負けても勝つても、あれは結局笑つような気もするのだが……」  
推測でありながら、確信に満ちた言葉。青蘭と雪蘭の間に誰も入つてこられぬように、彼等の間にも余人を許さぬつながりがあるの  
だろう。

青蘭はそれを思うと微笑ましくもあり、辛くもあつた。

青蘭が雪蘭を裏切ることはない。その逆も然り。それは信じる信じないという以前の問題で、絶対だった。

明柊は従弟を裏切った。それはもはや動かしようのない事実。では、碧柊は彼に裏切られたと考えているのか。それもおそらく事実。しかし、彼は従兄を憎んではない。推測だが、それもおそらく事実。裏切られたから憎むわけではない。では、憎んでいるから裏切るわけでもない、と云えるのだろうか。

青蘭はある可能性を思いつき、無意識に胸に押さえていた。そろそろと端正な横顔に眼にやる。同じことを彼が考え至っていないと云えるだろうか。ましてや彼の方が相手をより深く知っているのだ。青蘭はそれが当たっていないことを祈った。

蒼杞に動きは見られない。

いつまでも恐れてばかりもいられないと、青蘭を支持して立つことを決めた者たちはひそかに武器の鑄造を再開した。

その動きがいつ蒼杞側に伝わり、まずどこが最初に狙われるか。それはまだ分からない。いくつかの状況を予測してはいるが、あくまでその範囲を超えるものではない。

そして、いつ青蘭が国内に戻っていることが漏れるかも分からない。支持を集める代わりに情報も回っている。どこからそれが露見するか。あらかじめ予測しておくべきであった。

そのため、青蘭達は聖地にとどまり続けている。

瑳衣湖さいこに守られた聖地は要害の地でもある。湖の大きさ、聖地の流入する人々の数。それに対して大型船がないのは、湖が浅いためではない。建造を神殿が許可してはいないためだった。それはあくまで防衛のため。かわりに多くの小舟で物資も人も運搬される。その船すら、主に係留されるのは聖地側の湊と決まっている。対岸に係留されるのは特別に許可を受けた地元じゆんの漁師たちの舟に限られ、それにすら制限がある。

舟さえ抑えられることがなければ、この聖地が大攻勢を受ける可

能性は極めて低い。

食糧の問題はあるが、立て籠もるにはもってこいの場所である。神殿側は王女の逗留を公式に認めているわけではない。あくまで王女は現在東葉におり、婚礼を間近に控えている。聖地にいるのは王女の従妹である雪蘭だということになっている。

武器の調達には、西葉南部の港を通じて東葉から輸入することも検討されている。交易の要衝は王統家が押さえているため、その港も李州公の支配下にある。

では、東葉の誰と交渉するのかという問題がある。

現在、東葉では蒼杞を追いだした功績で明柊の名は高まっている。反面、罪に問われている碧柊の呼びかけに誰が応じるだろうか。国内で身の潔白を明かす機会のない碧柊にとって、ことは不利だった。それでも碧柊は用心深く配下の者を使った。明柊に手の内を読まれている可能性が大きいため、慎重に慎重を要し、なかなか効率の良い動きはとれずにいたが。

そんな矢先、東葉から一つの報せが碧柊のもとへじかにもたらされた。それに彼は目を輝かせた。

冴えた月明かりが世界を満たしていた。

蒼い夜の底に、王城が沈んでいる。塔の高層にあるその窓にも、婚礼前夜のざわめきが伝わってくる。

婚礼の主人公は雪蘭でもあるが、身分の高い女性ほど表に出る習慣はないため、こうしてまるで他人事のように眺めていることができる。

“青蘭姫”である雪蘭を古の例ためしにならって女王として担ぎだそうとしている明柊は、旧弊を破るように何事につけ雪蘭を表に出そうとする。たいていは云われるままにおとなしく従ってきたが、前夜だけは疲労と体調不良を口実に臨席しなかった。

実際、あまり体調は良くなかった。夏風邪程度のもので、気にとめるほどではない。知らず知らず疲労が募っていたのだろう。気を張っているつもりはなかったが、無意識のうちに緊張していたのかもしれない。

しょせん偽りの花嫁であるためか、雪蘭に明日婚礼に臨むという感慨はない。あるのはいかにそつなく式を終えるかと云うことだけだった。

王城はいつになく煌びやかな光に包まれている。夏のはじめ、青蘭と共に入城した夕べに負けずとも劣らない焰が掲げられている。

もし、あの夕べに何事も起こらなければ、雪蘭は花嫁となる青蘭の不安を和らげるべくいかに言葉を尽くすかに腐心していただろう。二人で肩を揃えてこの灯りを見つめたかもしれない。

雪蘭はほつと息をつく。

それを見越したように、傍らの小卓に茶器が静かに置かれた。

「いかがですか？」

香露こうろうが微笑ほくそんでいた。

促されるままに茶器を手にすると、ふわりとやわらかな香りに包まれた。気分を安らげ催眠効果もある甘い香気だった。

「まだ夏とはいえ、夜は温かい飲み物の方が良い」

「夜風も涼しくなつてまいりましたから」

窓際に椅子を寄せ風に身をさらしていた雪蘭の肩に、香露は薄物をはおらせる。

雪蘭は謝意を示すように浅く首肯し、香草茶を口元へ運ぶ。

この夜。従妹も明日の婚儀を思つて眠れずにいるのだろうか。

雪蘭が知り得たことはすべて従妹の王女に伝えられている。明日が婚礼だということも知っているだろう。

岑家を通しての情報やりとりはひそかに続けられている。そのなかには青蘭の動向も含まれている。寄州公と会い、聖地で大神官との会見も終わらせ無事に支持を取り付けたという。その内容に雪蘭はわずかに眉をひそめたが、まずは上々と云うよりほかはない。

東葉の国内状況を鑑みれば、いたずらに時間を費やしている猶予はない。

神殿側の王位継承への介入を許したことが、今後にどのような影響を与えるか。それを考えるのは雪蘭の役目ではない。後のことは青蘭に託せばいい。最初から青蘭のためなら捨て石になるのも覚悟して奥の宮に入ったのだ。

ただ、今、この夜に青蘭が泣いていなければいいと思う。雪蘭が願うのはそれだけだった。

「香露ももう下がらなさい。私は休みます」

空になった茶器を手渡し、雪蘭は髪をとく。今日洗ったばかりの髪が肩を流れる。腰まで届くような長く艶やかな髪だった。

盆を手に一礼して部屋を辞す香露の後ろ姿を見届けると、雪蘭はようやく寝台に横になった。

「……父上、私はうまくやれておりますか？」

呟きは夜の静寂しじまにとけ、応えはない。

このために何事も整えてきたのだ。

見届けて欲しかった人はすでに冷たい石の下で長い眠りについている。やりとげたところで褒めてもらえるわけでもなく、そもそも認めてもらいたかったわけでもない。

今となつては動機などどうでもいいことなのかもしれない

おそらく安眠できるはずもないであろう従妹を想う。碧柊との仲は意外なほど睦まじいと聞く。彼女の嘆きを彼ならば癒してくれるかもしれないが、青蘭がそれを良しとしないだろう。

自分の代わりに、そしてこの事態を動かす贄となるために婚礼に臨む雪蘭のために、青蘭は恋人に頼ったりはしないだろう。泣くならば一人で涙をこぼすだろうし、そういう時傍にいられるのは雪蘭だけだ。それももうそろそろおしまいかもしれないが。

泣かないでと囁きながら、泣いていてほしいとも思う。

この先、二度と大切な従妹と会うことはないだろう。だからこそ、決して彼女が自分のことを忘れられないように、癒えることのない傷として心に深く刻まれればいい。

そのために青蘭に自分の以外の誰も近づけさせなかったのだ。一人でいることに慣れ、孤独の痛みを知らなかった青蘭に、他人の温もりを教えたのは雪蘭だった。一つ年上の従姉に青蘭がべつたりと頼りきりになるにまかせた。他のことは注意し改めさせたが、雪蘭への依存だけは気付きつつも放置した。良くない傾向だとわかってはいたが、青蘭が自分で気付かないのならそれはそれでいいと思っていた。一生、そばにいられると思っていたのだ。彼女が嫁ぐにせよ、婿を迎えるにせよ、雪蘭はずっと従妹の傍らにいられるはずだった。だから、それでかまわないと自分に言い聞かせてきた。

「こんなことになると分かっていれば……」

呟いてみたものの、嗤笑が浮かぶ。分かつていたとしても、きっとそうはしなかっただろう。

「やはりこちらでしたか」

屋根と瀟洒な支柱だけの四阿にも、冷涼とした月明かりが満ちていた。

石畳に影を落としながら、一人盃を傾ける男に声をかける。

「ちょうど良い所へ来たな。空になったところだ」

最後の一滴を盃に落とすと、返す手で酒瓶を投げてよこす。苦笑しつつそれを受け取った男の乳母子は、背後から差し出された手に酒瓶をまかせ、四阿に立ち入った。

「初夜に備えてお休みになられる筈だったのでは？」

「独身最後の夜だからな、月に愛しい人を想いながら一人で吞んでいた」

「ここで？」

「ここより他に相應しい場所があるか？」

そこは雪蘭も何度か案内された東宮の四阿だった。

男は軽く笑って盃を一息で干す。

新たな酒瓶と共に盃も一つ追加される。それを受け取った乳母子は、まずは乳兄弟の盃を満たしそれから自分の盃にも注ごうとしたが、その寸前で酒瓶を横から奪われる。

「俺に注がせる」

「では」

抗わずに恭しく両手で盃に受ける。男はぎりぎりで手を止めると、自分の盃を手にして共に月に捧げるようにそれを掲げる。

「で、誰を想っておられたのですか？」

「一人しかおらんだらう 愛しの我が従弟殿しか」

「その妻となるはずだった方を奪っておいてよく仰いますね」

乳母子は一口盃に口をつけると、「旨い」と呟いた。

「旨いだらう。翼波よくはから仕入れたものだ」

「やはりそうなさるおつもりですか」

「他に手が無い。じきに俺の方が不利になる」



苦境を見越しての言葉は飄々と響く。

「その結果、国内がどうなるかは承知しておられるのでしょうかね」

「そこまでは俺の与り知ったことではない」

主の無責任な言葉に、彼は深々と溜息をついてみせる。だ、そんなことに痛痒を感じるような主ではないことを、もっとも熟知しているのも彼である。

「愛の試練にしてはいささか厳しすぎるのでは？」

「何事も愛ゆえだ」

「殿下の愛はいささか分かりづらいように思われますが？」

「面と向かって囁いている、そのどこが分かり辛いと？」

不本意極まりないと口の端を歪めるその顔は、そのくせひどく楽しげでもある。

「時には恥じらいも必要です」

「なるほどな、参考にしよう」

「なさる気などさらさらお持ちでないでしょうに」

主の盃が空になっているのを無視して、己の盃を満たす。それで酒瓶はまた空になってしまった。

悪びれもせず、空瓶を押しつける。

「空になってしまいました」

「追加を」

控えていた男に自ら云いつけ、厭味のように溜息をつく。そんな主におかまいなしに盃を干す男の名は、苓秦旗れいしんきという。苓家れいけの主にして、明柊の乳母子だった。

支度は夜明け前からはじまった。

あれからしばらくうとうとと横になっただけで、準備にかからなければならぬ時間になってしまった。遠慮がちに香露が寢室の扉を叩いた時には、すでに雪蘭は起きだしていた。

寢室につながるもう一方の扉の向こうで、もっと早いうちから女官たちが立ち働く気配は伝わってきていた。彼女らのたてる物音が大きかったわけではない。あのくらいで目を覚ますものはほとんどいないだろう。ただ、雪蘭はあたりの空気に気を配り、常に慎重であることが長く身につきすぎた。誰のせいでもない。

返答を待たずに間をおいて入室した香露は、寢台に腰かけまだ薄暗い外を見つめる主の姿を見つけた。しゃんとのばされた背筋、寝乱れた様子もない後ろ姿、背を蔽い隠す髪は薄暗い室内にもかかわらずその見事さを見てとれる。

静かに歩み寄り、恭しく朝の一礼をすると応じるようにかすかに頭が動く。

「お休みになれましたか？」

すでに白い素足が寢台から降ろされていた。香露は膝を折り、それに室内履きを履かせながら、さりげなく顔色をうかがい見る。

昨夜はどことなく物憂げな雰囲気を漂わせていた。白くくすみのない面には短い睡眠の疲労の名残もなく、穏やかさに満ちている。

“青蘭姫”が自ら望んだ婚礼ではない。そのため準備の間も雪蘭は花嫁らしい態度を一つも見せなかった。ただ唯々諾々と従い、乗り気でもなければ反発してみせるわけでもなく。云われるままに動く人形と変わりなかった。

自分でもおかしいと思うのは、王女の正体を知る香露たちをのぞけば、その仮面が剥がれるのが夫となる明柊の前だけだということだった。彼はそんな雪蘭に気を悪くするどころか、むしろ気に入っ

ているらしい。彼の気を引いておくにこしたことはない。

これまでも男の気を引く必要性を考慮しなかったわけではない。だが、奥の宮に青蘭付きの女官としてこもっている限りは実践の機会はなかった。

正直に言えば、明柊に關してもうまくいっているとは言いがたい。

それと同時に、彼に並みの手練手管が通用するののかという疑念もある。異性と云えば親しい肉親と覗見かきまみしか知らない雪蘭は、特にこのことに関しては自信が持てずにいた。

「ええ」

香露の問いに短く応じ、うつすらと微笑む。

狭霰をのぞけば、他の女官たちはここにいる王女が本物だと思いきんでいる。日頃から顔を隠し香露と狭霰以外のものを遠ざけてきた結果だ。

輿入れの際、青蘭と雪蘭は諮って女官をほぼ入れ替えた。古参の者は香露と狭霰のみ。

念には念を入れての処置だったが、輿入れの旅の途中にも二人は何度か入れ替わっている。だが疑念を抱いたものは一人もないようだった。双生児でもないのにそれほど自分たちは似ているのだろうかと思えば、おかしくなってくる。問題は相似性よりむしろさだと承知しているが、やはり不可解な気はするのだった。

香水をたらしただ水で洗顔をすませると、本格的に支度がはじまる。雪蘭のすることはただなされるままに座っていることだが、姿勢を崩すわけにもいかず、これはこれで気の疲れるものだった。

香露は女官長として全体の進行具合を管理しながら、雪蘭への気配りも忘れなかった。朝食を摂る暇のなかった花嫁のために、一口ですませられる軽食を合間に勧める。気分を安らげる香草茶も常に用意されている。

およそ百年が経過した結果、両国の間では儀式における手順や礼法に瑣末な違いが生じていた。女官と儀礼官との間でひと悶着の末に軋轢を生じたが、明柊は西葉のやり方を古来のものとして優先さ

せた。

旧弊を嫌うくせに一方で伝統を重んじるそのやり方を、雪蘭は口こそはさまなかつたが面白いと思っていた。

軍事的敗北の末、その代償として差し出された王女は戦争奴隷と変わりはない。そんな境遇の姫に仕える女官たちのささやかな矜持は、西葉こそが葉の本国であり正統であると云うことに尽きる。

本来的にそれは正しいことでもあるため、東葉側も強く否定はできない。

感情をむき出しにして正統性と伝統を固持しようとする西葉出身の女官たちと、戦場以外での争いには及び腰な東葉の文官との口論で、東葉に勝ち目があるはずもない。

もぎとつたところで大して意味のない勝利など、気前よく女に譲ればよい。それで双方共に丸くおさまり、なおかつ女官たちのささやかな自尊心が満足させられるのならば、それこそ意味のある敗北ともいえる。

彼があえて折れてみせた理由は、そんなところではないだろうか。東葉と西葉の違いとは言っても、肝心な場面で左を向くか右を向くかと云うようなものではなく、儀式の折々に右足で立つか左足で立つかと云う程度のものでしかない。

雪蘭自身も意味のないことだと思いながら、東葉の田舎ぶり野蛮さを口汚く罵る女官たちを曖昧な微笑で見守っていた。

細かな礼法の違いまで言い立てていけば、本当に正しい方法など実際はかなり微妙なものだ。

ある家のしきたりが、そのまま他家でも通用するというものではない。貴族たちはそれぞれにそれなりの歴史を誇る。それに基づき作法にも違いがある。就寝時には左を向くか右を向くかで口論になったことさえある。西葉貴族出身の女官同志の間でのことである。

いざ、夫婦の間で生活における違いが生じれば、結局は女の方が折れることになる。その方が結局は話も早い。折れたからと云ってそのまま言いなりになるわけではない。表向きは夫の言うことにな

んうんと頷いておいて、実際には自分のやり方を定着させてしまえばいい。しょせん、家庭を仕切るのは女なのだから。

それが分からない彼女たちではないだろうが、それでも瑣末なことで騒ぐのは、そこが結局はよりどころだからなのだろう。東葉くんだりまで都落ちしてしまっただという感覚があるらしい。

無論、無理矢理連れてこられたわけではない。輿入れに従い新たに募った話に自ら応じてきた者ばかりだ。希望すれば誰でも採用されたわけではない。香露や後宮の長たちの面接も通過したものばかりで、それぞれに礼儀作法や教養には自身のある者ばかり。王女の東葉入りがやがては葉の統一につながることを見越したうえで、各々いいつかっている役割もあるだろう。

不本意ながらの都落ちではなくとも、不満はたまる。そのはけ口としてこんな地の果てまでやってこらざるを得なかった王女への同情は強まる。味方であるはずの女官たちの目まで欺かなくてはならない雪蘭にとつて、悪い風向きではなかった。むしろ好都合に違いない。

「青蘭さま、お支度がほぼ整いました」

まっすぐに鏡にうつる自分を見つめていた雪蘭に、香露がそつと耳打ちする。油断なく身支度の様子を見守っていたようであり、その実物思いに耽っていたことを見抜くあたりはさすが女官長ともいえる。

雪蘭は慌てる様子もなく微笑みを浮かべ、「そのようね」と囁き返した。

王城の一角には社がある。鬱蒼と茂る木々の影に抱かれるようにして社殿はあつた。

聖地のそれとは比較にならないほど小さな石造りの社に神官はいない。王族自らが神事を司るため、神官はその補佐でしかない。葉王家の王子を始祖とする東葉には、神事の詳細な内容は伝わらなかつたらしい。

西葉での青蘭の役割に神事の代行があつた。

本来は女王である“王妃”の役目だが、青連せいれんは青蘭を出産したさいの産褥がもとで亡くなつた。それで降しばらくは彼女の妹であり青蘭の叔母にあたる王女が代行していた。その叔母の娘が蒼杞の妻となつている紅蘭くわんである。青蘭が7歳になつた年、その役割は正當な直系である青蘭に受け継がれた。

祭事にたずさわる時に入れ替わつたことはない。

社殿には入れるのは王族と補佐に当たる神官だけと限られているため、雪蘭はその入り口の前までしかついて行つたことがない。

東葉の王城の社は、西葉のそれとよく似ていた。そのまま移築したと云われても納得してしまえそうなほど、細部に至るまで同じ造りをしている。

長く裳裾を引く婚礼衣裳。紗の被りもので顔を覆い、俯き加減にゆっくりと歩む。その歩調もしきたりとして定められているものだった。

香露が織手をとつて一步先を進み、狭霰ともう一人の女官が衣裳の裾を地面からわずかに浮かせるように持ち上げてあとに続く。

社の前には3人の男がいた。それぞれに光沢や質感の異なる白の衣を幾枚も重ね、頭には武官の冠。国事にあたる祭礼時の斎服にもあたる。

彼等が“女神の盾”の候補だった。盾の名乗りを上げるため、服装は武人のものと定められている。

膝をつき、恭しく頭を垂れているため顔は見えない。体つきや髪の質感から、左端の男が明柊だと分かった。あとの二人に見覚えはない。

雪蘭は無言のまま3人を見比べた。上からそうして見比べる限り、体格に大きな違いはない。明柊は一見すらりとしているが、よく見れば武人らしく無駄のない体つきをしている。他の2人も見比べて遜色はない。

いつからそこにいたのか、雪蘭の斜め前に白い祭服の神官が進み出た。その手には一枚の盾がある。

装飾性をいっさい欠いた武骨とも、機能美の極みともいる銀色の曲線。青蘭がそれを見れば驚いたに違いない西葉の宝物庫に厳重にしまいこまれている“女神の盾”と寸分違わない代物だった。

盾がどのようなものであるかは、雪蘭も青蘭から聞き知っている。だが、百聞は一見にしかず。話に聞いた印象とよく似ているとは思ったが、まさかここまで瓜二つだと考えていなかった。

神官は盾を携えたまま雪蘭に一礼すると、右から一人ずつ紹介していった。

一人は明柊と同じく王族、もう一人は東葉の王統家の青年だった。東葉は西葉の体制を真似、王領に傍系王家である王統家を配置し統治を委ねている。西葉と異なり王統家は4家に絞られている。そのかわり重要な立地条件や鉱山を抱える王領は、王家の直轄領として王族がそれぞれに支配している。

最後の一人はやはり明柊だった。

雪蘭はただ黙ってこのうちの一人を指し示せばいいだけのことだった。

雪蘭はゆっくりと3人を見比べる。結論は最初から出ている。この儀式としてしょせんは茶番に過ぎない。さつさと彼を指させば儀式は進行する。偽りの婚礼など一刻も早く終わらせてしまいたい。煩

わしいばかりだった。

これさえ終われば、青蘭の足枷も一つ減る。明柊が油断しているうちに青蘭を支える陣営に力を蓄えてもらわなければならない。

雪蘭の役割はそこまでだった。それ以上はむしろ足手まといになる。

そのときが恐ろしいわけではない。

夏のはじめのあの夕刻、蒼杞のたくらみに気づいて青蘭を逃した時から覚悟は決めていた。

奥の宮に上がる前、父が亡くなった時にすでに覚悟はできていたともいえる。

今さら何を躊躇うことがあるのか。

雪蘭は物思いを振り払い、優雅な動きで明柊を指さした。

神官がゆつくりと動き、盾が彼の前に置かれる。木漏れ日が差し込み、その面が鈍く光る。その煌めきに誘われるように明柊が面を上げ、恭しく盾を両手で受け取った。

明柊は滑らかな動きで立ちあがり、盾を片手に雪蘭の前に進み出る。腰に佩いた太刀の飾り鞘に象嵌された金の鳥の翼が光を放つ。

盾を構えたまま再び雪蘭の前で膝を折り、深々と頭を垂れる。

その一瞬に、彼はまっすぐに雪蘭を見据えた。

薄い笑みをたたえたからかうような眼差し。すべてを見抜かれているのではないか。

雪蘭はその不安を最初から拭い去ることができなかった。

その後も儀式はつつがなく終わった。

複雑だが決まりきった手順で事前に定められたとおりに進む。

雪蘭は一言も発することなくそつなくこなしていった。

西葉で祭事に関わったことはなくとも、念のため詳細な話は青蘭から聞いている。婚礼は国事とは異なりただ一度の儀式であるため、



あらかじめ知っておく必要はなかった。

代々伝えられてきた文書と神官の助言を参考に打ち合わせを繰り返した上で本番に臨む。それは明柊も一緒だった。最終的には神官と明柊の3人で話を詰めた。

社での儀式は主に王位の交代を女神に伝えることが中心となる。

女神の許しを得るのではなく、代替わりを報告するという形に雪蘭は意外な想いを抱いていた。

あくまで人の世のことは人が決めるといふことらしい。解釈の分かれるところではあるが、女神の娘である女王その人を女神と同一視する見解も存在する。その視点が考えれば、王家の決定はひいては女神の意志と云うこともできる。

それに王家では直系にしか王女が生まれないという事実には意図的な介入を感じる。どう考えても不自然であり、だからこそ王家の権威が保たれてきたともいえる。

雪蘭はこのことに関して意見は持たない。事實は事実、それだけだ。

儀式の間、明柊も言葉を発することはなかった。

緊張したそぶりも見せず淡々と儀式をこなしていく雪蘭を、彼は一貫して薄い笑みを浮かべて見守っていた。

雪蘭はつとめてその視線の意味を考えないようにしていた。

儀式は夕刻には終了した。

そのご祝いの宴席が設けられた。通常、そういう表立った席には花嫁であろうと顔を出すことはない。宴に顔を並べるのは男性ばかりであり、女は給仕に当たる身分の低いものしかない。彼女たちはいないものとして見なされていた。

だが、明柊はそこに雪蘭の席を設けていた。あらたな東葉の女王の即位を祝うため、貴族たちは王都に集まっていた。蒼杞に前当主を殺害された家が多く、仮の当主の方が多いような顔ぶれだった。

王都まで妻を伴ってきた者は、宴に夫婦で出席するよう言い渡されていた。

前代未聞の宴のぎこちない空気は最後まで続いたが、花婿である  
明柊はまったく気にしていないようだった。  
そしていよいよ夜が深まり、雪蘭は湯浴みをすませ閨に向かった。

新しい寢所は新たに用意されていた。

後宮は実質的に王権を継承する女王を閉じ込める籠でもある。明珠はそのようなところは相応しくないとして、王城内の歴代の“王”が使用してきた居住区域を急遽改装させた。

ここまで雪蘭の手をとり導いたのは香露だった。雪蘭の細い手をただその掌に受けるだけだったが、最後のその手を強く握った。雪蘭が応じる前に手を放し、恭しく一礼する。そして顔を上げるとまっすぐに雪蘭と見つめ合った。

気色をうかがうような心配顔に、雪蘭は薄く微笑む。

閨房のことは青蘭と共に一通り心得ている。経験はないため緊張はしているが、不安なわけではない。覚悟はとうに決まっている。

香露はただ臉を伏せ、次に彼女のために静かにその扉を開けた。

雪蘭は躊躇うことなく扉を潜る。その背後で音もなく扉が閉ざされる。

寝室には嗅いだ覚えのある香が焚かれている。緊張をとく効果のあるそれは直接眠気をもたらすものではない。

雪蘭はそれを深々と吸い込んだ。

寝台は衝立の奥にある。部屋の四隅に玻璃の火屋をかぶせられた灯りが揺れている。かすかに揺れる燈火に落ちる影も震える。

雪蘭は落ち着いた足取りで衝立の脇から部屋の中央へ歩み寄る。

紗の蔽いのかかった寝台は、後宮の塔にあつたものよりも大きい。

あたたかな光を受ける寢所のどこにも人影はなかった。

雪蘭はそこで足を止め、思わずほっと息をつく。次いでそんな自分に今さらながら気づいて苦笑した。

宴を一緒に退出したわけではない。雪蘭の方が先だった。支度に時間がかかったためつきり先に花婿が閨入りしていると思っていたが、彼は彼で色々あるのだろう。

雪蘭は羽織っていた薄物を肩から落とし、手近にあった椅子の背にかける。開放感はないが風通しはいいらしい。未だに昼間の熱の名残はあるが、汗ばむほどではない。心地よい風が時折わたっていく。

雪蘭は先に寝台に横になった。

胸元まで寝具で覆い、様々な紋様で彩られた寝台の天蓋を見つめる。子孫繁栄を願う縁起をかついだそれらに、皮肉な笑みが浮かぶ。雪蘭がもし身ごもることがあったとしても、その子は決して王族ではない。それを明柊が知ったときにどう出るか。そもそもそこで自分が無事でいられる保証はない。

目を閉ざし、息を吐く。

あとは青蘭側の態勢が整うを待つのみ。青蘭の即位にも婚儀にも立ち会えないのは残念だが、その力になれるのだからそれはそれで良いとする。

花婿はいつこうに姿を現さない。

乳母子や部下たちにつかまっているのかもしれない。覗見の報告では彼は配下から信頼され人望も厚いという。彼等は事の真相を知らないのだろうか。少なくとも乳母子の苓秦旗れいしんきは知っているだろう。ことが露見した時、彼等はどうするのだろうか。それでも彼に従うだろうか。

雪蘭は横を向き、再び息を吐く。

横で誰かが眠るとき、それは必ず青蘭だった。幼い頃は頻繁にどちらの寝台に潜り込んだものだった。長じてからも時々お喋りが過ぎて夜が更けてしまえば共に眠ることもあった。

最後のそれは王都六華ろっかの王城を出る前夜だった。語り明かそうと誘ったのは雪蘭だった。青蘭も笑顔で肯いたが、結局ぼつりぼつりとしか話せなかった。それでも夜明け近くまで続き。ついに雪蘭は聞き慣れた従妹の寝息を耳にすることはなかった。

これから先は隣に眠るのは明柊であるはずだ。それは幾晩続くこととなるのだろうか。

閨房の心得は青蘭と共に一通り教示を受けているため心配はない。婚儀が決まった時点で初夜の覚悟もできている。

雪蘭が恐れているのはそういうことではなかった。

これから毎夜閨を共にするということは、あの眼差しをこれまでになく長時間意識しなければならぬということだ。まるで見透かされたような心地になってしまふあの眼差しに。

偽っていることに罪悪感はない。それでも青蘭本人ではない以上、偽りの王女であることを意識しないではいられない。

本当に彼は気付いていないのだろうか。

もし、そうであれば雪蘭が今ここでこうしていられるわけがない。それが分かっているながらも、その不安はぬぐいきれない。

それとも、薄々気づいているだけなのか。

それとも、何かしら意図があつてあえて泳がせているのだろうか。それとも、本当に勘付いてもいないのだろうか。

眠気はいっこうに忍び寄ってこない。雪蘭は三度小さく息を吐いた。

「おやおや、花嫁が初夜の床で溜息ですか」

突然背後から囁かれ、雪蘭はびくりと体を大きく震わせた。

「め、明棧殿……」

驚きのあまり息をつめ、肩越しに振り返る。すぐそこに端正な顔があつた。息がかかるほどの距離。ほのかな灯りに探るような眼差しで楽しげに花嫁を見つめる花婿の姿が明らかにになる。

「あなたでも驚いた時はそれらしい顔をなさるらしい」

「と、当然でしょう。足音を忍ばせて近付くなど、趣味が悪いにもほどがあります」

「おや、心外な云われようですね。これでもてつきり花嫁が眠っておられるのだと思つてご遠慮申し上げたのですが」

いかにも哀しげに語るのだが、どうしても嘘くさく聞こえるのは彼の演技力不足なのか、それとも人徳のなせるわざか。

雪蘭は冷ややかに微笑み、そつと近すぎる体を押しつけようとし

た。

「それはありがとございます。けれど眠っておりませんでしたから」

「そのようですね　手間が省けました」

一転して華やかな笑みを浮かべると、自分を押しやろうと肩にかけられた細い手首をつかんだ。

ほぼ同時にもう一方の手もつかみ、寝台に縫いつけるように押しつける。乱暴ともいえる仕草だった。雪蘭はとっさに驚いたが、じきに気持ちを立て直した。とうに覚悟していたことだった。

のしかかるように上体にかぶさってきた明柊は、眼を大きく見開きたじろぐ様子もない花嫁に唇を歪める。

「そのように睨み殺すように眼を開いているものではありませんよ」「睨みつけてなどおりませんが」

「それでは緊張なさっておられるのですね　可愛らしいお方だ」「小さく笑い、そつと耳元に唇を寄せる。

耳朶に息がかかり、雪蘭はぎゅっと目をつぶって顔をそむけた。まだなにもはじまってもいないというのに体がこわばる。

生温かく湿った感触が耳朶を執拗に這い、やがて首筋へとうつつていく。思わずのしかかってくる体をおしやりたくなるが、手首は両方とも掴まれたままだった。

「雪蘭は唇を引き結び、不愉快な感触にひらすら耐えていた。じきにふつとその感触が消失し、ほぼ同時に体も解放される。

怪訝に思いながらゆっくりと目を開けば、ゆったりと皮肉な笑みを浮かべた男と目があった。

「肌が粟だっていますよ。俺はそうとう嫌われているらしい。身の毛もよだつという顔の女性を無理にどうこうする趣味はないでね、今夜はこのくらいにしておきましょう」

「……けれど」

身を起し異議を唱えようとした唇を指先が押さえる。

「ひどくほつとした顔をしておいでだ。嘘を吐くならもつとそれらしい顔をなさるべきだ」

雪蘭はさつと顔を赤らめて恥じ入った。

明柊はそんな彼女にかまわずさつさと反対側にまわると寝台に上がり横になった。寝具を引き上げるとくるりと花嫁に背を向けてしまふ。

置いていかれた雪蘭は、身を起こしたまま戸惑い顔で後姿を見つめる。広い寝台でその背中は何となく遠かった。

「早くお休みなさい。明日も予定が詰まっておりますからね」

「はい」

おとなしく頷くほかなかった。

夜更け近くに扉が叩かれた。

ごく控えめなそれは、熟睡しておれば気付くのが難しいほど遠慮がちだった。だが、しばしの間をおいて扉の向こうから応えがあった。

「どなた？」

侍女はすでに下がらせてあるのだろう。直接本人が対応に出た。

「吾だ」

落ち着いた声で返すと、じきに鍵をあける音がして扉が細く開かれた。

「なにようですか？」

低い響きに不機嫌を感じとり、碧柊は細い隙間に指をかけ閉められないようにする。

声ははつきりと響いた。眠っていたところを起こされたわけではないらしい。夕食後ひととき語らった後に寝室に引き上げる際には、普段通りの落ち着いた様子だった。

それからすでに数刻はたっている。まんじりともせず眠れずにいたのだろう。

「やはり寝つけなかったようだな」

「……それがなにか？」

冷やかな物言いは刺々しい。碧柊はその響きを懐かしく感じる自分をおかしく思いつつ、つられたりはしなかった。

扉の向こう側は暗い。碧柊の手元の角灯の明りに白い夜着の足元だけが浮かび上がる。

「眠れぬなら付き合わぬか？」

扉を抑える腕の脇に小振りの瓶が挟まれていた。光源の乏しい視界にも揺れる液体が何であるかは一目で知れる。



「……ご遠慮申し上げておきます。私、弱いようですから」

「無理にこれを呑む必要はない。ただ吾が一人で呑んでいてもつまらぬのでな、あなたはもつと口当たりよくさほど強くない果実酒か、茶でも付き合っていただけぬかな？」

顔や仕草は見えなくても躊躇っている気配は伝わってくる。

今日は東葉で明柊と雪蘭の婚儀が行われた。この時刻であれば床入りはとうに終わっているだろう。自分の代わりに敵の手中に残った雪蘭がやがてこの夜を迎えると分かっているにも、いざその当夜となれば心安く眠れるはずもないだろう。

「今夜は一人で過ごします　お相手は明晩にでも」

「吾は今つきあっていただきたいのだが」

「けれど」

云い募るのにかまわず強引に扉を開けば、把手とってを握って抗おうとしていた部屋の主が勢い余って転がり出てくる。

その体を受け止めたついでに抱きしめれば、渾身の力で抗われた。あっさり解放してやれば拍子抜けしたような顔で碧柊を見上げた。

「嫌だと云いながら積極的だな」

口の端を歪めると、それまで精彩を欠いていた青蘭の顔が赤く染まる。

「……碧柊殿」

名を呼ぶ声は怒りで低く響く。詰りたい衝動を堪えているのだろう。その分の怒りにこもった眼で睨みつけられ、碧柊は微笑む。

「どうせ眠れぬのだろう。ならば付き合え」

「けれど」

「その方が泣かずにすむのではないか。吾は泣いて良いとは云わぬ。鋭く見据える瞳は赤く充血しているが、腫れてはいない。一人でじつと涙をこらえていたのだろう。その目元を乱暴に拭ってやれば、青蘭は困ったように眉をひそめてその手を払いのけた。

「……承知しました　けれど私の部屋は駄目です」

「ならば吾の寢所にくるか？　歓迎するぞ」

「ご遠慮申し上げます　宿の食堂に致しましょう」

衣を整えますと云っていったん部屋に下がろうとする。その腕を咄嗟に捕えて碧柎は囁いた。

「何を今さら。すでに幾晩を共に一つ部屋で過ごしたと」

からかうような笑みを浮かべて艶っぽい声で耳打ちしていたが、じきに顔をしかめた。

「けじめはつけますと申し上げたはずです」

青蘭はありったけの力で性質たちの悪い男の足を踏みつけ、次いでその鼻先に扉を叩きつけた。

乱暴に閉ざされた扉に碧柎は肩をすくめて苦笑する。しばし笑った後で扉の脇の壁にもたれかかり、小さく息を吐いた。

ここでまだ怒ることができるということは、そこまで追い詰められたはいないのだろう。

宿は貴族向けに作られているため、逃亡中に利用したものとは比べものにならないほど豪華な設えになっている。

食堂の続きの間は宿泊者共通の居間になっている。今、この宿は里桂が借り上げているため他に宿泊客はいない。宿の者たちは青蘭達の本当の身分を知らないが、彼等は職域を守り無用な関心は示さない。

やわらかな長椅子に並んで腰かけたが、青蘭は碧柎と少し距離をあけた。その意識的な距離を彼も感じとったが、そのままにしておいた。

二人が階下に姿を現して間もなくして、用向きを問われることなく卓の上に二人分の杯と玻璃の瓶が運ばれてきた。碧柎があらかじめ云いつけておいたものだった。それを悟った青蘭が苦笑を浮かべる。最初から彼は彼女をここへ連れてくる心づもりだったのだ。

碧柎は自分が持っていた瓶をいったんおくと、まずは先に青蘭の

杯を満たした。そのまま無造作に自分の分にはここまで携えてきたものを注ぐ。

つんと鼻につく香りからして、その酒精の強さの違いは明らかだった。

「酒とは云えぬ、ほぼ果汁だ」

「……ご配慮ありがとうございます」

「また二日酔いで八つ当たりされてはかなわぬからな」

「……」

青蘭はむっと眉をひそめたが、前科があるので反論できなかった。二日酔いの記憶はまだ生々しい。またあんな目に遭うのは避けたい。

「二日酔いになるのはごめんです　ですから、もうそのようなことはいたしません」

ばつの悪さに少々を頬を赤らめながら呟く。

光源は卓の端に置かれた角灯のみ。窓掛けは開けられており、その向こうには狭い谷間に伸びる門前の町並みを見下ろせる。聖地の朝は早いため、多くの人々はすでに横になっているだろう。闇に沈む家並みに点る灯りは疎らだった。

実感のこもった彼女の呟きに、碧柊は小さく笑った。青蘭もはにかんだ笑みを浮かべ、そっと杯に口をつけた。

二人はしばらく無言で杯を傾けた。

云われなければ分からぬほどの酒精がまわり、体がほのかに温まる。青蘭はようやく肩の力を抜くことができた。

「碧柊殿」

「ん？」

「あなたにとって明柊殿とは……どういう方だったのですか？」

考え深い眼をして、青蘭は静かに問いかけた。

まっすぐに見つめてくる瞳を穏やかに見つめ返し、碧柊は酒を一口含む。さて、と考えこむような仕草をし、やがて苦笑った。

「はた迷惑な従兄殿だ」

「……真面目にお訊ねしているのですけれど」

青蘭は彼の真意をはかり損ねたように首をかしげる。言葉に困惑を感じとり、碧柊は笑みを深め遠い眼をした。

「……真面目に答えておる」

声は低く静かに響き、その面は穏やかだった。

青蘭はしばらくじっと彼の横顔を見つめていたが、その静かな笑みから真意を読み取ることは難かった。

碧柘は居間の長椅子に腰かけ書簡に目を通していた。

中天からの陽ざしに窓際の席は明るく照らされる。開け放たれた窓から吹き込む風は心地よい。

そろそろ昼食の時刻だ。

神殿へ出向いていたはずの青蘭が、いつ戻ったものか姿を現した。  
綾萩殿りょうしんからですか？」

背後からのぞきこむような真似こそしないが、興味津々なようすで長椅子のかたわらで足を止める。

無表情で読みふけていた碧柘は、一瞬反応が遅れる。人の気配には気付いていたが、それが誰なのかまでは注意を払っていなかった。

無愛想なようすで振りむきもせず横目で一瞥したが、それが誰であるか分かるととたんに口の端に笑みを浮かべた。

「いつ戻られた？」

問いかけながら隣に座るよう促す。青蘭は素直に応じる。

「つい先ほど。部屋で衣をあらためてきたところですよ」

碧柘は云われてようやく気付く。彼女の出で立ちは参拝者のものではなかった。上質だが地味な色合いの繻子の室内着だった。

「お読みになるか？」

「いいのですか？」

目線を上げて反問する彼女の膝の上に書簡が置かれる。青蘭はそれを手にとると、じきに唇を引き結んで読むことに集中した。

東葉で婚礼が行われる数日前、碧柘のもとにもたらされた報せは綾萩自身からのものだった。あの状況でどうやって助かったのか。短い文面にはそれに触れる文章はなかった。ただ綾萩自身の無事と今後の指示を仰ぐ内容だった。

東葉東宮に仕える覗見かきまみは、碧柘自身が統括する諜報活動組織であ

る。

苓州の森を抜けた直後に立ち寄った宿場町で、碧柎はなんとか彼らとの接触をはかっていた。すでに明柎に干渉されている恐れもあったが、正式に廃位されない限り彼等は東宮に忠実に仕える。

宿場町では痕跡を残すにとどまったが、その手がかりと峠の関での騒動をたどって彼等は岑家で療養していた主にたどりついた。碧柎が意識を回復してからは、岑家の組織網と連携するようになったため精度も上がった。

綾霖の書簡をもたらした覗見によると、彼は蕪州さんに戻っているという。

碧柎に連座する形で蕪家は処罰を受けることになったが、国内の混乱の収集と対西葉戦の準備のためまだ保留されているという。

当主であった綾霖の父は蒼杞に処刑された。それに続き綾霖まで一時行方不明となり、さらに一族そのものが処罰されるためその血に連なる者は拘束されているらしい。

それでもその身柄は未だに蕪州内にあり、長くその地で根を張ってきた一族でもあるため、領民とのつながりは深い。綾霖が姿を隠すことは容易だった。

一族の肅清が決まればすぐに反撃に出られるように準備は整っているという。

一連の争乱の真相が明らかになれば、東葉内部から揺さぶりをかけることは容易だろう。綾霖は国内にとどまってそのための工作に尽力することになった。

さきほど碧柎が読んでいたそれは、その経過を報告し同時に次の指示を仰ぐものだった。

東葉の国内事情に暗い青蘭にはその半分も理解できなかったが、彼のようすから察するに何とかことは運びつつあるのだろう。

「ひとまず順調なのですね？」

確認するように問われ、碧柎は小さく頷いた。青蘭はほっと息を吐く。こういうことは得手ではない。彼が首肯するのであればそう

いうことなのだろうと思うほかない。

書簡を返すとやわらかな長椅子に身を預ける。高い窓の向こうに山壁に切り取られた青空が見えた。

「そういえば、今さらなのですが」

「ん？」

急に眉をひそめた王女に、碧柊は書簡を置む手を止める。

「あの峠の関でのこと、あれで明柊殿が私たちが西葉に逃れたと気づく恐れは」

「ああ、とづくに承知しておろうな」

あつさり肯定され、青蘭は顔をしかめる。碧柊はまったく気にもしていないようだった。

「呑気にしておられる場合ですか」

「呑気になどしておらぬ。ちゃんと手は打っておる。あれの当面の敵は隣国翼波と蒼杞殿だ。この争乱に乗りようとしておるのだから、翼波の動きが活発化しているという報告もある。明柊もとうにそんなことは掴んでおろう。その前に蒼杞殿を討つつもりなのだろう。

状況は蒼杞殿に不利であろうな。それと比しても吾は身一つで西葉に逃げ込んだ逃亡者に過ぎぬ。率いる手勢もない。吾に手を貸したのが“雪蘭殿”だということもわかっておろうが、あなたがあくまで“雪蘭殿”である限りは問題にならぬ。今のところは放っておいてもかわないと考えておるのだろうか」

西葉国内の反蒼杞の動きは明柊をますます有利にする。寄州公理きしゅうこうり桂と李州公桂りしゅうこうけい貴を中心とする反蒼杞勢の動向もすでに掴んでいるかもしれないが、それを妨害する意味もまたない。

問題はここにいるのが本物の青蘭姫だと明らかになった後だ。

今は無力な碧柊を泳がせているだろうが、すべてを明らかにしたのは命もねらってくる可能性もある。青蘭との間に王女が生まれれば、その子こそが名実ともに正統な“葉”の後継者となる。

碧柊は自分が聖地にいることもすでに知られているものと考えている。居場所さえ分かっていたら命はいつでも狙える。すでに嚴重

な警戒態勢がととのっているが、青蘭は気付いていない。

「呑気なのはあなたであろう、今頃なにをおっしゃるやら」

感心したように云われて、青蘭は赤面して反論しようとしたが結局口をつぐむこととなった。



“葉”の東西である噂が広まりつつあった。それはこの争乱の真の首謀者が誰であるかと云うものだった。

元々、王家や貴族たちの争いは人々の生活を脅かさない限り関心を引くことはない。それでも流通や商工業には靦面に影響が出るため、特に商人や金融に携わるものたちは敏感だ。

噂は彼らを中心として波状的に広まっていった。それも発信地を特定できるものではない。噂はほぼ同時期に東葉と西葉の各地からまるで申し合わせたように発生した。

曰く、真の首謀者は西葉東宮葉蒼杞と東葉東宮の従兄である苓公葉明柸らしいというもの。

日頃、市井の人々にとつて、権力者の交代は直接影響することではなく、また知る機会もあまりないため関心をほとんど引くことはない。

女神への信仰と連動して王家への敬慕は篤い。王や王族の訃報を耳にすればその冥福を祈る人々も少なくない。新たな王が登極すれば素直に祝杯をあげる。

ただ、それが誰であっても彼等には関係のないことだった。王族であれば確実に女神の血をひいており、その血筋で連なる人間であれば敬うに値する。それだけのことに過ぎない。

東葉でも西葉でも肅清により各貴族の当主が交代するという異常事態が続いている。

領主の交代は支配される側にも多少なりとも影響が及ぶ。しかもそれが両国をゆるがす陰謀からはじまったものだという事、人々の関心を引いた。

そもそも一連の争乱の顛末からして、両国の王都周辺と国境付近でしか知られていなかった。

王都から遠く離れた地方に暮らす人々には、なにやら領主をはじめとする支配層がごたごたしているらしいという空気が伝わっているに過ぎなかった。じきにそれまで治めていた領主が亡くなり、その血縁者が後を継ぐという事態がおこる。それは自分たちの国元だけでなく、隣や近辺の領地でも同じようなことが起こっているらしいと知る。いつせいに各貴族の当主が交代するなどということは、伝染病が大流行したのでもなければありえない。

異常事態を悟りつつあった人々の間に、さらにその真相は両国の王族によるものらしいという噂が広まった。

そこではじめて人々は両王家にそれぞれ内部対立があったことを知り、それまで特に関心を引くこともなかった王族個人の名が記憶されることとなった。

同時に両国の現状を知ることとなった人々は戸惑うことになる。

正統な西葉の王位継承者である王女は依然、東葉の王都にいる。

彼女の夫となったのは争乱の張本人である明柊だという。しかも彼女は真の“葉”の女王として両国をまとめるために即位したという。正統な“女神の娘”が王位についたのならば、その夫は王族さえあれば誰であろうとかまいはしない。

もともと内部で権力争いを繰り返してきた王家であり、その結果として今のように国が二つに分かれてしまったのだ。

この一連の争乱とて、東宮とその従兄が争い、従兄が勝利を得たというだけのことではないか。それに貴族が巻き込まれるのは今に始まったことではない。

ましてや建国以来、真に“正統な”王をいただくことができなかった東葉の民にしてみれば、ようやく真の王を得た上、自国が中心となって祖国を一つにまとめられるのであれば、争乱の責任を誰に問うかと云うことなど二の次でもあった。

前東葉王は明柊には伯父にあたる。もっとも忌むべき尊属殺人をおかしたことになるが、実際に手を下したのは蒼杞である。問題をすり替えることはいくらでも可能だった。

西葉には西葉の事情がある。

蒼杞もまた明柊と同じような手段をとっていた。

妹青蘭に次ぐ“葉”の王位継承権を持つ妻紅蘭くわんを即位させた。そして、明柊とは異なり、夫である蒼杞自身が“王”として国権を手にした。

東葉で青蘭が健在である以上、紅蘭が王位に就くことはできないはずなのだが、異議を唱えることができるものはもはや存在しない。最初に蒼杞を諫めた岑家の当主達が処刑され、次いで紅蘭の登極に異議を唱えた王統家の当主たちが極刑に処せられた。

特に王統家の諸侯に対し行われたものは残酷だった。

身の毛もよだつ方法で施行された処刑は公開され、王都から逃れられなかった貴族たちは強制的に立ちあわせせられた。

興味本位に見物した王都の市民たちも最初の処刑で言葉を失ったが、途中で抜け出すことは許されなかった。失神するものや嘔吐するものが相次ぎ、人々は恐怖に支配され、水を打ったような静けさが処刑場を満たした。

すべての処刑が終わる頃には日は傾き、燃え上がるような夕日があたりを染め上げ、まるで立ち会ったすべての人々がその返り血をあびたような凄惨な光景となった。

これによつて長年隠されてきた蒼杞の狂気じみた残虐性が明らかになり、人々から反旗をひるがえす気力を奪った。

西葉王都・六華ろっかは、夏の盛りに東葉王都・翠華すいかを席卷した暴力の嵐に見舞われることとなる。

翠華の人々が見た悪夢に終わりはあるが、六華はその当人のお膝元である。血生臭い悪夢が果てる気配はなく、そこへ今回の争乱の首謀者に関する噂が伝わったとしても、今さら取り沙汰すほどのものではなかった。

婚儀から数日たったが、明柊は雪蘭と床を共にしつつも触れようとはしなかった。

青蘭が嫁ぐ前に東葉の事情を調査させた際、明柊の身边も一通りさらってあった。彼は側室を持たず子こそ成していないが、愛人と噂される女性は複数存在していた。

彼女らはそろって年上の寡婦だった。

“葉”では夫と死別した後の女性の再婚はあまり歓迎されない。子を成し、血を伝えることを優先する王家は別である。それ以外の再婚は、亡くなった夫との間に跡継ぎを得られなかった場合に限られる。跡継ぎが得られずとも、弟妹の子供など係累に後継者とみならず子供がおれば養子縁組も可能。一般的にも再婚よりも養子縁組の方が多い。

再婚する必要のない寡婦は家を守るか、そうでなければ主家筋の格上の家に勤めにあがる。王城にはそうした女性が女官として勤めており、特に名家出身のものは上級女官として遇される。

明柊の相手はたいいていそういう女性たちであった。彼女らであれば再婚が認められていないため側室とすることもできない。

雪蘭はそこに姑息さを感じたが、同時に弁えている男だという印象も抱いた。

何人側室を置こうが、その腹から幾人子供が生まれようが、母親が王族でない以上はものの数には入らない。しかし母親の身分によつては解釈次第で厄介な位置につくこともできる。その点、側室となれない女性との間に子供ができて、その子はあくまで彼女の私生児に過ぎない。父親が誰であろうと、父親はいないのと同然とみなされる。

同性との噂もないではなかった。

葉では義務さえ果たせば、つまり、後継者となる子供さえ得てい

れば同性とのあれこれをとやかくいわれることはない。もちろん義務を果たしていない場合は別である。

これが女性同士となると認められているわけではないが、寡婦が私生児を産むことは家名を汚す不名誉なこととされているため、それよりは……と大目にみられていく風潮だった。

相変わらず甘いことを囁きながら、いっこうに自分を抱こうとしない明柊に、雪蘭は戸惑っていた。

「未亡人ばかりと浮名を流すは保身のためと考えていたが、実は単にそういう趣味だったのか？」

香露相手に首をかしげるが、答えを見いだせるわけもない。女官長は曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

雪蘭も答えを求めているわけではない。

自分の任務はもう終わっている。彼が自分に手をつけようがつかまいが、大局に障りはない。ましてや彼の子供を産むわけにはいかない。その意思がないのであればそれはそれでかまいはしないのだが、それでも心づもりと云うものがある。その気がないのであればその意志を明らかにしてもらった方が安心できるが、まさかそれを面と向かって問うわけにもいかない。

一方で、初夜に彼女を抱こうとしたのも事実だった。それともあれは彼ならではの悪ふざけだったのか。

疑問は解けぬまま夜となり、また彼は雪蘭と枕を並べる。

婚儀の翌日から雪蘭は政務に臨席させられている。あくまで王権は“女王”のものだと明らかにするためだが、経験のない彼女に果たせるものではない。明柊に指示されるままに肯き、署名するだけのものだった。

そんな政務の合間に二人きりで話す機会はあまりない。

明柊の心づもりを少しでも知りたい雪蘭としては閨の物語を大いに活かしたいところなのだが、明柊はいつものように本気とも冗談ともつかない甘い言葉だけを囁くと、さっさと背中を向けてしまうのだった。

だが、その夜は少しばかり様子が違った。

明柊はいつものように雪蘭よりあとに寢室に姿を現した。ごろりと横になると、雪蘭の方を向いて片肘をつき薄い笑みを浮かべる。

「さして意外な話ではないが、俺と蒼杞殿が首謀者だと云う噂が広まっているらしい　すでにご存知でしたかな？」

「いいえ」

すでにうとうとしかけていた雪蘭だが、眠気はどこかに飛んでしまった。眠たげな顔にやわらかな笑みを浮かべて小さく首を振る。

もちろん、知っている。その流言を広めた一派に組みしているのだから。

そのことが彼の口から出たのも計算のうちだった。予想より遅いくらいだが、それが即ち彼が知った時期であるとは限らない。問題は何故、今になって口にするのかと云うことだった。

昨日今日、彼の耳に入ったというのなら大して問題はない。それより以前に知っていて、にもかかわらず今夜話すというのなら、なにかしら意図があつてのことかもしれない。

まずはそれを見極めるのが重要だが、彼がそう易々と悟らせるとも思わない。

「このことを知るはもちろん首謀者である俺たちと、碧柊　そして陛下、あなただ。それから、あなたの従姉の君」

もったいぶつた口ぶりで一つ一つ名前を上げ、最後にうつとりと顔を寄せて囁く。咄嗟に雪蘭は横へいざって距離をあげ、訝しげに眉をひそめた。

「雪蘭が？　何故ですか？」

苓南の皆でのことだろう。察しはつくが、それを明らかにするにはまずい。雪蘭は無邪気に首をかしげてみせる。

明柊は含みのある笑みをみせ、腹ばいになると手近な枕を抱きこむ。

枕を体の下に押し込み、顎をのせる。そのままの姿勢でやや顔を傾げるようにして横目で雪蘭を眺める。ゆるくまとめられた髪が肩

から滑り、顔を縁取る。細められた目が何故か艶っぽく、雪蘭はそっと目をそらした。

「お話しませんでしたかな？」

「聞いた覚えはありませんわ」

雪蘭の答えに彼は小さな笑いをもらす。不審を買っようなおかしなことを口走った覚えはないが、まるで見透かされたようでどきりとする。

「苓南の皆でお会いしたのですよ。少年のなりをして碧柝の従者のふりをしておいでだったが、思い出すほどにまことにお二人はよく似ておいでだ。まるで双子のように」

「そうでしょうか？」

「ええ、そうですよ。それはご自分でも御承知でしょうに」

からかうような言葉と共に目が細められる。雪蘭は肯定しなかったことを後悔しながら困惑した笑みを浮かべる。

「わざわざ二人して鏡の前に並んだりはしませんから……確かにまわりの者にはそう云われておりましたが」

言葉を重ねるほどに不安が増す。不安が増せば云い繕うような言葉が滑りでる。悪循環だった。

嫌な汗を背中に感じつつ、顔を背けるわけにもいかない。

顔を強張らせる雪蘭をひとしきり横目で検分した後、明柝はにやりと口の端を歪めた。

「よく似ておられるが、まるで似ておられない。雪蘭殿のほうがより愛らしいが、俺には可愛いだけの方では物足りない」

茶化しているようにしか聞こえないが、雪蘭を見つめる目にはこれまでに見覚えのない光があった。

雪蘭はいつの間にか掛物をきつく握りしめていた。いやに口内が乾くが、成す術がない。

逃げ出したい衝動を堪えた末、ようやく逃げ道を見出した。

「それで雪蘭が知っていたとして、どうだとおっしゃるのです」  
できるだけ冷静に、そして乾いた声で話を本筋に戻す。雪蘭の考

えが当たっていれば、こちらの方がよほど危険は少ない話題のはずだった。

明らかに意図的な話題転換に、明柊は低く笑った。楽しげですらあり、それまでの空気はあっさり払拭されてしまった。

「ご存知かどうかは問うまい　雪蘭殿は碧柊と共に砦から逃げ延びた。どうやら彼等は西葉へ逃れたようです。岑州へ続く峠を越えてね」

「……そうですか」

雪蘭は無表情で呟いた。問われるまでもない。もちろん承知している。

ただ、これほどあっさり明柊が彼女にそのことを明かすとは思っていなかった。これまでいくらか問うても青蘭が絡むこととなると、彼は言を左右してはぐらかすばかりだった。

どんな意図があるのか。知らず身構えそうになり、そんな自分をなんとか堪える。

「雪蘭殿の養家は岑家でしたね」

「ええ」

隠すまでもないことに、雪蘭は小さく頷く。

彼はなにを話そうとしているのか。明柊であれば岑家の持つ力もある程度は把握しているだろう。

噂の出どころがどこか。考えるまでもない。そしてそれを知らせたのは誰なのか。

明柊は肘をつけて体を起こすと、そのまま雪蘭の方へ身を寄せた。雪蘭はとっさに逃げ出しそうになったが、辛うじて踏みとどまる。

掛け布を握りしめる手に力がこもる。細かな震えを抑えきれない。初夜に彼を間近に感じた時よりも、その恐れはさらに強くなっていた。

夜着に包まれた彼の体はゆったりと寝そべっていても、雪蘭よりはるかに大きく逞しい。



彼が近寄る度に寝台が揺れる。透かし窓から忍び込む初秋の風に焰が揺れ、陰影までが震える。

照らし出されるのは室内だけではない。凍りついたように無表情で夫となったはずの青年を見つめる雪蘭と、その顔をのぞきこむように身を寄せる明柊の姿も明らかになる。

灯火の揺らめきと共に整った彼の顔にさす陰影も微妙に揺らめく。彼もまた無表情だった。

抱きすくめることができるほどそばまで寄ると、そっと片方の手でかたく握りしめた拳を包み、もう一方の手でゆるく結わえられた髪をほどく。

雪蘭の頭の下に手をさしいれ、指先で髪を梳くように敷布の上にゆっくりと広げていく。艶やかなしなやかな黒髪が白い顔を綺麗に縁取ると、一筋の髪をすくい取り、まるで口づけるように唇を寄せた。

「 出所は碧柊でしょう。けれど、噂には彼では知りえないことも混じっている。ではいったいどなたの口からもれたのでしょうかね」  
包み込むような優しいげな笑みを浮かべて囁くと、その髪に口づける。

武骨な手に包まれた雪蘭の手がびくりと震える。それを確かめた彼は得たりと微笑むと顔を強張らせる雪蘭の額に唇を落とし、そのまま身を引いた。

「 良い夢を、わが君」

やわらかく細められた目に、雪蘭は言葉を返すことができなかつた。

翠華<sup>すいか</sup>周辺には徐々に軍が参集しつつあった。

碧柸<sup>へきしゆ</sup>と結託して東葉を蹂躪した西葉と、今や西葉王を標榜<sup>ひょうぼう</sup>する蒼<sup>そ</sup>杞<sup>き</sup>を討つという明柸の呼びかけに応じるべく諸侯が集まりつつある。同時に広まりつつある噂もまた貴族達の耳に届いているが、噂は噂に過ぎない。

現在東葉の主は“青蘭女王”であり、実権を握っているのはその夫である明柸でもある。建国100年にしてようやく王位に迎えた青蘭女王は真実“葉”の王であり、その権威の前に噂など取るに足らない。

東葉の貴族たちにとって、真の王をいただき、その指揮のもと西葉に復讐戦を挑むことはこの上もなく意気の高揚することだった。戦意は高まる一方で衰えることを知らない。噂のことなど気にかけている者がどれほどいるのか。

貴族のほとんどが世代交代したばかりだった。

兵を率いて王都にのぼってきた貴族たちは次々と登城し、当主就任の挨拶も兼ねて拜謁を願い出た。

雪蘭は名前を覚える暇もないほどひっきりなしに引見をこなしながら、噂が真実であると彼等が知ったとき、果してどんな事態となるのだろうと他人事のように考えていた。

謁見の間の玉座には雪蘭が座り、その横に明柸が控えている。

姿を隠すことなく接見する女王に、誰もが多少なりとも驚いたようすをみせ、口々に褒めそやした。そして、一様に西葉と蒼杞への憎しみを口にする。

彼等にとって先代の当主達は敬愛するに値する者もあれば、目の上の瘤をとりのぞかれたように内心喜ぶほかない者もあるだろう。内情はどうであれ、新たな当主達にとって先代当主はたいはい何ら

かの形で縁者であり、血縁の恨みは晴らすものと決まっている。

雪蘭が直接応えることはなく、明柊がその任に当たる。雪蘭のやるべきことは、ただそこで清婉な微笑を浮かべ、時として哀しげな表情も垣間見せながら、いかにも耳を傾けているように肯いてみせることだけだった。

いよいよ諸侯が動きはじめたことは西葉の岑家へ伝えてある。聖地にいる青蘭のもとへそれが届くまで数日かかる。山の背を鳥が越すのはその天候次第であり、山の背を避ける形での経路では順調にいつても5日はかかる。

蕪綾霖の無事は雪蘭にも知らされている。東葉国内にとどまって工作にあたっている彼とも直接連携をとれるように取りはからっているところだった。

すべてを明かすならば、西葉戦に加わる貴族ができるだけ多く集まっただけの方が良い。

それと前後するように青蘭が即位すれば効果はさらに上がる。

「今、なにを考えていらっしやいますか？」

引見の合間に疲れた顔をみせた雪蘭のため、明柊はいったん人の出入りを止めた。

気分を変える効果のある香草茶を手ずから渡しながら、押さえた声でそう囁く。

気分を引き立てようとするよりもむしろ苛むような響きに、雪蘭は含みのある笑みのみで応じ、無言のまま茶器を受け取った。

「陛下のおかげで皆ますます奮い立っているようですね」

「そうですね」

性懲りもなくにこやかに囁く明柊に、雪蘭は肯定とも疑問ともつかない口ぶりで返す。

「まるで他人事ですな。皆、陛下のために働こうと意気込んでおりますのに」

「冷静に事態を見極め、若さのみで血気にはやる者たちを諫めることのできる者がもうおりませんから　それでも、あなたが私の代

弁者ではないことだけは理解しているようですね」

良く云えば慎重、悪く云えば腰の引けた老臣の姿はほとんどない。事態を再度諮ってみようとする者すらいない。

この事態もまた彼の狙いだったのか、それともただの副産物なのか。そんなことはもはやどうでもいい。

感情を優先し、血気にはやって暴走する若き当主達は雪蘭にとつても利用しやすいと云える。

いかに効果的に明柊の罪を暴き、青蘭が“葉”を救おうとしているかを彼等に訴えるか。今、一番考えるべきことはそれだった。そのためにもこの馬鹿げた引見にも意味はある。

雪蘭の容赦のない皮肉に、明柊は悲しげに眼を細める。そのくせ、返す言葉を紡ぐ声は嬉しげにも聞こえる。

「陛下は真に思慮深く、お優しい。若き彼等の経験と思慮の不足までご案じ下さるとは」

彼等と一緒に自分まで馬鹿にされているような気がして、雪蘭は思わず苦笑する。

「案じてなどおりません。そこへ付け込んでいる人間に感心しているだけです」

「付け込まれる方が悪いのですよ。若さで云うなら私も似たようなものです」

明柊は悪びれもせずあっさり認める。

謁見の間には警備に当たるもの、取次のために忙しく出入りする者等、常に人の姿があるが、玉座の近くには皆遠慮して近づかない。

玉座を占める若き美貌の女王陛下と救国の王配殿下と云う若い夫婦の姿は、遠巻きには仲睦まじく映っている。そう見せるように共に気を遣っているわけだが、同時に雪蘭にはそれがひどく馬鹿げて思えた。

「けれど、翼波も動きを活発化させているというのに、まるで誰も気にとめていないようですね。ここであなたが止めなければ、誰も思い出そうとしないのではありませんか」

謁見は個別に行われるが、すでに有力貴族や上級軍人を集めて会議は行われている。そこで翼波の動きも報告されているが、さして誰も気にとめていないらしい。

「翼波にはさんざん煮え湯を飲まされているはずなのですがね、喉元過ぎればなんとやらというのでしよう」

明柊は困り顔で苦笑し、冷めかけた香草茶を口にする。

東葉軍は西葉との戦いよりむしろ翼波との戦争で鍛えられてきたといってもいい。ほぼ毎年繰り返されてきた戦いだ。従軍経験のある者なら、西葉とは比べものにならない翼波の手強さを忘れられないだろうし、忘れていいはずがない。

「分かっていて、何故……」

「何故、俺がそれを正してやらねばなりません？ それは俺の務めではない」

明柊はにこやかに断言する。

雪蘭は小さく息を吐き、玉座の背にもたれかかる。

「では誰の務めだというのですか 私の務めでもないようですね」

女王として振舞うならば、たとえ分かっても口にすべきことではなかった。だが、そんな言葉に明柊は耳を貸しはしないだろう。投げやりな呟きに、王配殿下は楽しげに未だ名目だけの妻の横顔を一瞥した。

「しょせん人と云うのは痛い目に遭わねば理解できないものなのですよ」

「その結果、最悪沈んでしまってもかまわないと？」

「ええそうです」

名前だけの夫のにこやかな言葉に、妻はもう一つ小さく息を吐く。そして空になった茶器を彼に手渡し、引見の再開を命じた。

雪蘭と紅蘭くわんがそれぞれ東と西で即位したこともあり、青蘭の周囲もいつそう慌ただしくなってきた。

明柊が西葉を攻める準備を始めたことは、雪蘭からあらかじめ知らされている。

蒼杞そうき側もその意図まではつかめずとも、東葉が動き出したことを掴んでいるようだった。

翼波よくはの動きが活発化していることも西葉まで伝わっている。どうやら翼波の方からわざわざ蒼杞方に知らせてきたらしい。

翼波人を蛮族と蔑んで隠そうともしない蒼杞に、彼等は挟み撃ちを持ちかけてきたわけではないらしい。同じ人間だと認められない相手からの提案を、彼がまともに取り合うはずがない。そこまで見越してか、あくまで彼の国は東葉にちよっかいを出す心づもりがあると知らせるにとどめたらしい。

それを知った碧柊と青蘭、それに袁楊えんようは顔を見合わせた。

翼波に王はいない。各部族の長達がゆるい連合を結んで国としての意志を統一している。それでなくとも常に貧困と飢えと隣り合わせの彼等の闘争心は強く、各部族間での小競り合いは日常的らしい。彼等が自国民を傭兵にしたてあげ生きた商品として各国へ輸出し、常に他国を攻める機会をうかがっているのは、そんな国内の不満と鬱屈した力を外へ吐き出す狙いもあった。そうでなければ部族間抗争が激化し、国として内側から崩壊する危険性を常に秘めている。

古い歴史と伝統に胡坐をかき、その実国力は衰える一方の西葉を彼等も蔑んでいる違いない。けれどそれをおくびにも出さず、なおかつ蒼杞という人間を見極めたような外交手段までみせたのである。侮りがたい敵に違いない。

「問題は明柊殿ですね」

袁楊の言葉に碧柎は無言で肯く。その意味は青蘭も理解していた。雪蘭も指摘していたが、明柎にはあえて東葉の貴族や軍に翼波の脅威を意識させまいとしている節がある。

それは翼波・西葉の油断を招くためにあえてそうしているのか、それとも他に狙いにあるのか。碧柎にも読み切れない。

明確なのはただ一つ。明柎がその危険性を見落とすはずがないだろうということだけだった。

判断材料は伝聞のものしかない。

これ以上3人で顔を突き合わせていても埒は明かない。

無言のまま、答えの出しようがないということで見解の一致をみると、袁楊は自分の任務に戻っていった。

里桂りけいは奇州州都の城に戻っており、袁楊がさまざまな折衝にあたりつつある。聖地外部との連絡も彼が担当している。

碧柎も頻繁に袁楊となにやら諮っており、青蘭はただそれらの結果を聞き、稀に意見を求められるだけだった。彼女に今できることはそのくらいのこと、他にやれることはない。自分の力の無さを嘆きたくとも表には出せなかった。

今、宿の居間には二人の姿しかない。

袁楊が姿を消すと、碧柎は長椅子の背にだらしなくもたれかかり、腕を組んだまま無表情で宙を見つめている。

青蘭は同じ長椅子の端にそっと移動したが、彼はそれにも気付かない。

小さく息をついて窓の外を見れば、参道へ続く階段を下りていく袁楊の背中が見えた。特に長身でも大柄でもないが、悠々とした動きは彼と云う人柄をよくあらわしている。

その姿が家並みの間に飲まれると、青蘭は再び盾の候補者に注意を戻す。彼はまだ宙を見据えたままだった。

「明柎殿のことをお考えですか？」

「ん？」

碧柎はそこでようやく膝の上に細い指が置かれていることに気づ

く。薄く笑んでその上に己の手を重ねながら、「すまぬが、なんだ？」と問い返した。青蘭の言葉は耳に入っていなかったらしい。

青蘭はわずかに苦笑した。

「明柎殿のことをお考えでしたか？」

「ああ」

「翼波のことですか？」

「ああ」

肯定はするが、それ以上の言葉は返ってこない。

青蘭は焦れる想いを堪えつつ、膝を掴む指先にわずかに力をこめる。

「明柎殿の考えに心当たりでも？」

「いや、違う　しかし、違うとも言い切れぬか」

齒切れの悪さに青蘭はじっと待つ。

碧柎は答えるかわりに膝を掴むその手を自分の両手で包みこむようにして弄ぶ。

明らかに迷っているらしいが、その理由を考えあぐねてもいるように、青蘭は彼のしたいように任せる。

静かに見つめる彼の横顔には逃亡中の驚れや疲労の影はすでになく、はじめて会った初夏の夕暮れの青年のそれに戻っている。けれどそこに浮かぶ表情や青蘭に向けられる眼差しには、その時になかったものが今は確かに含まれている。

「これはあくまで推測だが、あなたには話しておいた方が良いでしょう　いや、これは吾の願望かも知れぬ。事情はどうであれ、現実には変わらぬのだからな。それでも誰かにその可能性を知っておいてもらいたいというのか……要らぬ感傷だ」

「現実がどうだからといって、感傷を捨てる必要はないと思います　それに惑わされてはいけません、碧柎殿はその割り切りのできるお方でしょう？」

静かな言葉に碧柎は薄く苦笑した。

これまでは思い悩むのはたいてい青蘭で、それを聞くのが碧柎だ



った。たまにはそれが逆転することもあるらしい。

「では、信頼に応えねばな」

微苦笑を浮かべて青蘭を見つめる眼差しに、彼女は目を細めて小さく頷く。

碧柊は捕えていた彼女の手の甲にそつと口づけると、再び口を開いた。

「あれは、明柊は、吾を諫めようとしているのやも知れぬ」

「諫める？」

なにを、どうやって、と疑問が続きそうになったが、辛うじて堪えた。碧柊は結論を見出しているが、その過程がまだ曖昧なのだろう。言葉に置き換えることで明確に浮かび上がってくるものもある。

「明柊は西葉に対する吾の戦後処理を甘いと再三指摘しておった。吾は長きにわたった積年の禍根をこれ以上深いものにしたくなかったのだが、あれは今さらそれが少々広がったとしてもたいして変わりはしないと申してな　西葉王と蒼杞殿の処刑および王統家や貴族の粛清を提案していた」

碧柊は最後のくだりをやや云いにくそうに口にした。青蘭はそれにかまわず小さく頷き、先を促す。

「あの戦勝を機に両国をまとめる。その結論は吾も明柊も一致していた。だが吾はできるだけ穏便にすませようとし、あれはその真逆を主張した。明らかに後年問題となる種はのぞくべきだとな。蒼杞殿の暗い噂は東葉にも伝わっておった。少し調べればわかることだ

雪蘭殿の父上のことも含めてな」

はじめて会ったとき、青蘭は自分を雪蘭だと偽った。その際、雪蘭の父が紅桂だと知った時の彼の様子を思い出す。あの時、碧柊は紅桂に娘がいたことまでは知らないようだった。

「この機会を活かして膿は出し切るべきだとあれは主張した。膿んだ傷を切開することは、さらに傷を大きくすることになるが、そうすることで治りは早くなる。逆にそうしなければ傷は腐り、命にかかわることすらある。それは人の体に限ったことではないとな」

国を指して国体ともいう。

明柊が云わんとするところは青蘭にも分かる。

両国はそれぞれに矛盾や問題を抱えている。それは今すぐなんとかしなければならぬものから、今はまださほど深刻ではないが将来的には国の行く末を左右しかねないものまで様々だ。

いざ改革に乗り出そうとしても、旧来の環境では猛反発に遭いかねない微妙な問題もある。それらの問題も、国の根底から揺らいでいるこの時期に乗じて荒療治をすませてしまおうという手もある。一時的に痛手は大きくても、後々に大きな問題となるよりはましなものもあるだろう。

それは碧柊も理解していたのだろう。回顧する言葉の端々や眼差しに悔悟の念がにじむ。

だが、それには碧柊がためらったように人々の痛みと恨みを伴う。両国民の間の溝がそれ以上深まることを避けようとした彼にも一理ある。

「吾が取り合わないにもかかわらず、あれは何度も吾にそう申してきた。その時もあれにしては珍しいことだと思つたが、それだけことが大きいせいだと考えておつた。だが、今にして思えばあれはそのようなことに左右される奴ではない。吾はあの時もっと腹を割つて明柊と話し合うべきだったのだ」

碧柊の言葉の端々ににじむ慙愧の念は、自分の選択を悔いてのことではなく、明柊と相談しなかつたことに由来しているようだった。「……だから、碧柊殿を諫めるためにあえて裏切つたと？」

「吾はそうではないかと思つておる」  
溜息まじりの言葉に、青蘭は目を瞠る。諫めるための行動にしては常軌を逸している。碧柊の考えすぎではないかと思つたが、青蘭は彼ほどに明柊を知らない。

「明柊殿はそれほど厳しい方なのですか？」

嫌がる碧柊をからかい、その延長のように青蘭にまでふざけかかつてきた印象しかない。

争乱の真相を知るいたって彼が曲者だということをやと云うほど思い知らされたが、それでもあの苓南れいなんの皆で刻まれた記憶はなかなか修正できない。

そんな想いが顔にありありと表れていたのだろう。碧柊は青蘭の顔を見てわずかに微笑した。

「厳しいというのもちと違うような気がするがな」

「どう違うのですか？」

「実践主義とでもいうべきか　たとえば幼き頃、池の畔で遊んでおれば乳母や守人たちは落ちては危ないからと近づかぬよう口やかましく注意するであろう。だが、幼児に水に落ちることがどのように危険なのか想像で理解することは難しい。そこを明柊ならばわざと池の畔で追いかけてこに誘うのだ。誘っておいてきわどいところで身をおかし、こちらは勢い余って池に落ちる、と、どうなる？」

「溺れます」

「あれは一事が万事そういう次第なのだ」

碧柊はそつと青蘭の手を放すと腕を組み、苦笑った。青蘭はその言葉に驚いてしばし言葉を失う。

「けれど、それでは最悪の場合、死んでしまうかもしれませんが、そうだ。だが、それは危険だと注意されたことを守らなかった方が悪かったともいえよう。あれは警告なしにいきなり危険な目に遭わせたりはしなかった」

「……自業自得だと？」

「そういうことだ、な」

そんな明柊を理解していながら、碧柊は従兄とことさら話し合う時間を持つとはしなかった。今更悔いてもなにも取り戻せはしない。それでも悔悟の念を拭い去ることはできない。

「……だから、この争乱もそれと同じことだと？」

「そうではないかと考えておる。だが、吾がいくらそう考えたところでこの事態はなにも変わらぬ。故につまらぬ感傷にすぎぬ」

青蘭にはとても理解できなかった。

だが、事実として碧柙はその可能性を考えており、それをさせるだけの積み重ねが彼等の間にあつたということになる。他者が口を挟めることではなかった。

深更ともなると、多くの人々が暮らす神殿は、水底に沈んだような静寂に支配されていた。

「いよいよ明日となったな」

衣擦れの音と静かな声が重なり、回廊に低く響いた。

声をかけられた青蘭は、回廊の角からひとときわ奥まったところにある窓辺に腰かけていた。寝衣の上に薄い夜着を重ねただけの姿で、雪蘭がいれば眉をひそめたことだろう。

奥まった一角の手前には神兵が二人控えていて、彼女がこっそり寢室を抜け出してきたわけではない証だった。

声の主も王女と似たような軽装で、それでも腰には帯刀している。なんの飾りも彩りもない出で立ちなだけに、太刀の装飾がひととき目を引く。

それは彼が東葉から唯一携えてきたものだった。

回廊には等間隔に灯火が点され、深更であつても灯りを持ち歩く必要はない。

朧げな灯明の輪を受け、青蘭は薄く笑んでかすかに頷いただけだった。

「眠れぬか？」

彼はそう問いかけながら、窓際の壁にもたれかかる。

囁くには遠く、けれど潜めた声も届く距離だった。

二人の間の距離をそんな風にあらためて認識し、青蘭はひっそり笑う。西葉に入ってからこちら、彼は以前ほど親しげには振舞わない。

お互いに想いの通じた安堵感もあるのだろうか、青蘭の即位と盾の選定を前に体面を慮っているのだろう。

気安く触れてほしい時もあるのだが、互いに身分に相応しい振舞いを心がける義務もある。

門前の参道を往来する参詣者のなかには仲睦まじい夫婦もいて、羨ましいような想いで見ることもあるが、それと同じように振舞うことはやはり躊躇われるしできようもない。

彼にしてみたところでただの逃亡者ではなく、東葉の王子と云う身分に戻ってみれば、やはりそれに相応しい行動をとっている。

肌身にしみ込んだ習性はそうそう抜けるものではない。

「ええ」

青蘭は短く答えてほつと息を吐いた。

離れて警護にあたる神兵たちも二人の身分を心得ている。明日の即位にあたり碧柊が盾として選ばれることは、ほぼ確定している上、周知の事実でもある。

それでも今夜はまだ他人同士であり、それは心得ておかなければならない。故に彼等の耳にもその気配くらいは届いている方が無難だった。

明柊がいよいよその動きを明らかにしたため、青蘭たちも行動を急ぐ必要に迫られていた。

寄州公きしゅうこうと李州公りしゅうこうの呼びかけに応じる者は日に日に増えてきているが、同時に蒼杞方そうきかたや東葉との戦いも迫っている。

諸侯は水面下での速やかにして密やかな軍備に追われ、正統な女王の即位式にまで参じられるような状況ではない。

青蘭の即位式はもっとも効果のある時機を図らねばならず、もはや悠長に構えていられる状況ではない。

いずれ“葉”の統一がなされた暁には改めて即位式が行われるため、この度の式は仮初に過ぎない。故に明日、神殿に姿をあらわす者はごくごく限られている。

盾の候補は3人。

以前に里桂しけいが云つたように彼の継子である13歳の少年・寄葉きようさ哉い杞。

寄州に比較的近い王領・孜州ししゅうの王統家の孜葉ししゅう桂い琉。

そして、東葉王太子・葉 碧柎。

哉杞は数日前から聖地の寄葉家の屋敷に滞在しており、日に一度は青蘭の前に顔を出す。

青蘭は即位式が正式に決まってから賓客として神殿に滞在している。碧柎も同様だった。どちらも公にはされていないが、こうした扱いになった以上は公的な決定と同じだった。

哉杞は里桂の子にしては素直で可愛げのある少年かと思われたが、碧柎に当日まで油断しないように悪戯いたづらつぽく囁ささやき、父親が誰であるかを明らかにした。

それ以来、碧柎は哉杞に閉口させられることが度々あるのだが、口先で云うほどに彼を嫌っているわけではないらしい。憎まれ口を叩たたきながらも天性の愛嬌故に可愛がられる少年は、誰かを連想させる。

桂琉は昨日、ようやく聖地に到着した。

彼は王城に滞在していたばかりに父の処刑に立ち会わされ、罪人として曝さらされたその首を抱えて王都を脱出したという。父の跡を襲い孜州公となつたばかりの彼は、怒りを隠そうともせず復讐の念に燃えている。里桂曰く直情径行の単純な思考の持ち主であるが、その分義に篤く信頼に値するという。桂琉は長年の敵であった東葉王太子の碧柎に警戒と敵愾心を隠そうともしないが、礼儀は守つた。碧柎はそれで満足していた。状況を見誤らないだけの良識と自制心を彼が持ち合わせているのであれば、今はそれで十分だ。彼の理解と支持をそう易々と得られるはずがない。あまりに容易く心を開かれてもかえって困る。安い忠義は不要だ。

桂琉は、青蘭の前ではごく当然のように膝をつき、頭を垂れた。飾らない言葉で王女がこれまでになめた艱難辛苦を慰撫し、その志を褒め称えた。彼女の美貌については一言も触れなかったが、見上

げる眼差しには称賛が満ちていた。

桂琉の人となりと、言葉にすることすらできないほどの想いの熱さを思えば、むしろこちらの方が年端の行かない少年より油断ならない好敵手である。

碧柊は引見ののち、青蘭に桂琉の実直そうな人柄を褒めたが、それ以上のことは語らなかつた。要らぬ妬心をみせれば、彼女がどんな曲解をするか知れたものではない。

「お眼鏡にかなう盾の候補はおりますかな？」

碧柊は物憂げな青蘭の横顔に問いかける。気安い口ぶりに青蘭は口元をほころばせ、「さあどうでしょう」と曖昧に微笑んだ。

「はてさてまた、つれないことを仰せになる。吾しかおらぬとは言つて下さらぬのか」

「あなたしかおられないのならそうとしか申し上げようがありませんが、他にもご立派な殿方がお2人もおられるのですから、明日までゆっくり迷わせていただきます」

つんと肩をそびやかせて冷たく言い返せば、低い笑いが響く。

「まだまだ愛らしい若君と、頑固そうだが信頼に値する男と」

「一言も二言も多い殿方と。さて、どなたが良い夫君におなりでしょうか」

青蘭は難しい顔でわざとらしいほど首をかしげてみせる。

その一言に彼は思わず苦笑いし、反論の言葉を探すように視線を巡らせる。青蘭はその困り顔がおかしくて小さく笑いつづけているうちに、気がつくとその気配が間近にあった。

膝の上の手に手が重ねられ、もう一方の手がそつと顔の輪郭をたどる。太刀を握る指は太く武骨でかたい。その指先が頬をなぞりそつと顎を捕える。その仕草はひどく優しかった。

「誰よりも良い夫になる自信はある」

恥じらって逃げる眼差しを追うようにのぞきこんでくる瞳は優し



く、囁く声は力に満ちていた。青蘭は頤を捕えられたまま顔を背けることもできず、けれど熱のこもった視線に応じることができず、耳まで赤くして伏し目がちにそつとその逞しい体を押しやる。

「その根拠は？」

「根拠か　その根拠は……」

言葉の代わりに熱を直接唇にのせられた。

反射的に抗うような動きをみせた手を封じられ、逃れられないように後頭部を固定される。がっちりと押さえこまれながらも、寄せられる唇は壊れものに触れるような優しいものだった。

重ねるだけの口づけの後に、ほんのわずか離される。伏し目がちな瞼に唇を落とされて、青蘭はそつと恐る恐る眼を上げる。自分を見つめる彼の眼差しに答えを見出し、言葉で返すかわりにおずおずと首に腕を回せば、強い力で抱き寄せられる。怯みそうになる心を堪えて身を預ければ、再び唇を重ねられる。それはこれまでになく深く長いものだった。

できるだけ音をたてないようにそつと扉を閉めたのだが、円卓に伏せていた祥香は顔を上げた。

「お戻りでしたか」

「ごめんなさい、起こしてしまいましたね」

「いいえ、うとうとしていただけですから」

立ち上がった祥香は滑るような足取りで青蘭に歩み寄り、微笑を浮かべたまま首を振った。ゆるくまとめただけの髪が、その動きに合わせてゆっくりとうねる。

青蘭はその顔を申し訳ない想いで見つめる。穏やかな表情の祥香だが、その顔に刻まれた疲労の色は濃い。

聖地での即位が決まっつてすぐに、里桂が義妹である祥香を呼び寄せてくれた。

即位の支度は内々に進めなければならぬため、寄州公夫人である里桂の妻を動かすわけにはいかない。その点、彼の弟の妻である祥香なら身分の重さのわりに動かしやすく、青蘭のことも知っている。事に当たらせるには打つつけの人物だった。

青蘭の知る限り、ということとは、残存している記録をたどれる限り、王城以外の地で即位した王の記録はない。東葉の存在はまた別の問題である。聖地はあくまで女神の眠る地であり、王の即位とは無縁の土地だった。

それを今回はあえて聖地の、しかも神殿の総本山で即位式を執り行う。これまでは女神と王家の関わり of 深さを印象付けるものであり、その権威を神殿が裏付けることにもなる。

さらにこれまでは王の交代に比較的無関心だった庶民層へも広く知らしめる目的もある。

王都六華にいる女王・紅蘭は偽王であり、聖地の神殿で即位する青蘭こそが正当な女神の娘だと喧伝する必要があった。総本山の大

神官が偽王を支持するはずがない。

後の代のためにも王位継承に神殿の絡む要素はできるだけ小さいものにしたかったが、こういう事態に至っては避けられない選択だった。

青蘭こそが正当な女王となる資格を持っていることに間違いはないが、即位式の正式な手続きとなると別だった。

即位式には神器が必要であり、それはもちろん王城の宝物庫にしまいこまれている。儀典に精通している儀典官も王都にしかない。青蘭の手元には女神より授けられたとされる数々の神器もなければ、儀典指導に当たることのできるものもない。

故に仮の即位式でもあるのだが、だからといって疎かにできるはずもない。この状況でできるだけすべてを整える必要はあった。その段取りの責任を負うことになったのが、袁楊と祥香だったのである。

ただのんびりと式の日を待っていた青蘭とは違う。

式の当日は早朝から青蘭の支度を整える必要があるため、祥香は寄葉家の別邸には戻らず、神殿にとどまっていた。

青蘭にあてがわれた貴賓室には近侍の控えの間もあり、そこで彼女は休んでいるはずだったが、またなにかを思い出して居間の方へ出てきていたのだろう。

彼女に負わされた重責を思うと、青蘭は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。だからといって、自分にできることは高が知れている。「もう休まなくては　この時刻では十分と云うわけにはいかないのでしょうけれど」

労わるように声をかければ、祥香は小さく礼を述べて微笑む。

「それは姫さまも同じことです。明日の主役は他ならぬあなたさまなのですから　けれど、気が高ぶっておられるのも仕方のないことです。香草茶を用意しますから、寝室の方でお待ちいただけますか？」

そつと急かすように青蘭の肩を押し、居間の奥に続く寝室へと導

いていく。素直にそれに従いながらも、それでは、と切り返す。

「それでは祥香殿、あなたの分も用意して。一緒にいただきましょ。確かに明日の主役は私ですが、あなたの協力がなくてはとうてい果たせないのですから、休む必要があるのは同じことです」

「……お言葉に甘えさせていただきます」

祥香はさすがに疲れを隠しきれないように頷き、青蘭を寝台まで案内すると「お待ちください」と云いおいて居間に戻っていった。

青蘭は寝台ではなく窓際に置かれた椅子にかけて待っていた。小さな円卓をはさんで向かい側にももう一脚の椅子がある。

円卓や椅子の足は優美な曲線を描いている。それはどこか異国風で、南部の港から輸入されたものなのだろう。

神殿の内部はどこもかしこも綺麗に掃き清められ、手入れが生き届いている。設えられた家具や調度類は一見する限りは目を引かないが、注視すれば高価なものだと知れる。王城でつかわれているものと変わらない。

神殿の持つ力は青蘭の予想以上だった。

まもなく祥香が戻ってきた。盆にのせられた茶器には既に香草茶が注がれ、甘い香りを漂わせている。

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます」

まずは青蘭の前に、それから向かい側に茶器が置かれる。

失礼いたします、と断ってから祥香は空いた椅子に腰かけた。

青蘭は茶器を手にとると、まずはその香りをしみじみと味わった。聖地の季節は一月早いと云う。夜も冷涼とした風が吹く。

薄い磁器から伝わる熱は心地よい。

「碧柊殿下とお話になられましたか？」

「ええ」

小さく頷きながら、頬に熱を感じる。碧柊との仲は半ば周知の事

実なのだから今さら恥ずかしながらする必要もないのだが、反射的につい先ほどのことを思い出してしまう。

東葉王子の名を聞いた途端に目を伏せて落ち着きをなくすその様子に、祥香は思わず微笑する。

春先の敗戦以降、西葉国内には試練ともいえることが続いている。とりわけ青蘭が西葉を発つてからの短い時期に血生臭い報せが絶えることはない。

そんな中で政略結婚にも関らず、こんな風に頬を染める少女と接していると心が温まるようだった。

「心ゆくまで、とはゆきませんでしたか？」

「ええ……明日に儀式を控えているのは碧柊殿も同じ。それに、明後日にはここをお発ちになるのですから、今宵は少しでも休んでいただかないと」

即位の儀の翌日、碧柊は聖地を発つ。

戦端がどこでひらかれることになるかまだ定かではないが、それにそなえて寄州州都にうつる。

そして、東葉で明柊が兵を動かすのも明後日に迫っていた。

遠慮がちにゆり起され、しびしび眼をひらいた視界はまだ夜の余韻に満ちていた。

ほのかな明かりを投げかける燭台を片手に、祥香が掛物に埋もれた青蘭の顔をのぞきこんでいた。

昨夜よりはいくらか顔色はましになっている。香草茶が効いたのか、あれから短い時間でも体を休めることができたのだろう。

それは青蘭も同じだった。短く語らいの後、寝台に潜り込むとあつけなく眠ってしまったらしい。即位式を間近に控えた緊張と、碧柅から受けた甘やかな時間の名残りで寝付けないのではないかと思っていたが、結局杞憂に終わった。

「お目覚めになれますか？」

「……ええ、もうそんな時間なのね？」

「はい。そろそろ空も白んでまいりました」

いかにもまだ眠そうなくもった声で答えながら、目をこする。

祥香は王女がもそもそと身動きしはじめたのを確かめると、窓辺に近づき窓を開け放った。

とたんに肌が泡立つような冷気と共に澄んだ空気が流れ込んできた。空は晴れているが、湖面を渡ってくる風はいつも湿り気を帯びている。

“山の背”の山影に位置する聖地の遅い朝がようやく来つつあった。高層に位置する貴賓室の窓にも、神殿の前の参道に押し寄せる参拝者たちの静かなどよめきが伝わってくる。

まだ青蘭の即位の報はどこにも伝えられていない。今日と云う日に神殿を訪れた人々は、本当に偶然に“葉の女王”の即位に立ち会うことになる。

どのような騒ぎになるのかと想像するだけで怖くなるが、もうここまでくれば腹を括るしかない。

すべては青蘭の手から離れたところで進められてきた。

女王となるのは青蘭自身なのに、その経緯の仔細を知らないことがおかしくも思われる。青蘭はこれまで自分の意志とは関係なく、他者に決められるままに流されてきた。

だが、今回のことは青蘭自身が決意したことで、それは自分一人で成せることではとうていなかった。

これから儀式にのぞむために整える衣装にしてもそうだ。仮の儀式とはいえ、それにふさわしいように準備を整えてくれたのは祥香と袁楊をはじめとする人々だった。用意された衣装を一人で身につけることもできない。

青蘭のしようとしていることは、すべて誰かの手を借りずに出来ることではない。

云われるままに寝台から降りると洗面をすませ、手渡された布で水気を拭う。それから等身大の鏡の前に立ち、たっぷりと時間をかけて衣装を着せかけられる。

微妙に織りや色合いの異なる衣を何枚も重ねる。その度にわずかずつ重さが増していく。それらをまとめるために時折きつく締めつけられ、青蘭は顔を歪ませないようにするのがせいっぱいだった。

着付けが終われば、次は髪を結び、同時に化粧が施される。入念な仕上げには着付け以上の時間が費やされた。鏡の前に腰かけた青蘭は、もともと着飾ることにあまり興味が無い。だからこうして飾り立てられることはむしろ苦痛に近いので、ただひたすら無表情で耐え忍ぶ他なかった。

そうしながら、同じように支度を整えているのであろう碧柊のことを思う。

誰も青蘭の前ではそのことに触れないが、碧柊は東葉の王太子であることに変わりはない。この春まで何度となく戦火を交わしてきた敵国の王族であり、とりわけここ数年は彼が陣頭に立つことが多かった。

彼に対する反感を明らかにしたのは桂琉のみだが、他の誰しも内

心では複雑な想いを抱えているのだろう。

東葉との戦いで実際に身近なものを亡くしたわけではない青蘭は、東葉をはじめ碧柊に対しても敵愾心のようなものはもともと薄かった。

客観的に見れば努力を怠り驕った西葉が負けるのは当然であり、敗戦の贖いで戦利品として東葉に嫁ぐのであっても、その結果両国が統一されるのであれば屈辱とも思わなかった。

けれど、他の者たちは実際に東葉と何度も戦い、自ら傷ついたものもあれば、大切な者を失った者もいるだろう。

それらはすべて戦争に伴う現実であり、碧柊の非ではない。同じく東葉でも負傷したのもあれば落命したのもあり、その者たちには家族があつたはずだった。

そうやって100年にわたり、断続的に両国は血を流し続けてきた。どのような形であれ、それに終止符を打つことができるのであれば、それだけで青蘭にとっては本望だった。

青蘭に伴われ、単身敵国であつた西葉に落ち延び、配下の近衛一人従えることのできない碧柊にとって、今の立場は決して居心地の良いものではないだろう。

いつそ桂疏のように反感を露わにしてくれる者の方が、付き合ひやすいのかもしれない。

それでも彼は一言もそれについて口にすることはなかった。

敵国にあつても碧柊は東葉の王太子であり、両国が手を携えて明柊と蒼杞に当たるには自分がいなければ事態の動かないことを熟知している。だからこそ、青蘭が彼を盾に選ぶであろうことに誰も異議を唱えられない。

碧柊は国を身一つで追われたことで自分を卑下しなければ、切り札を持っていることをちらつかせるわけでもない。己の部をわきまえ、悠然としている。

それを青蘭は頼もしくも思い、羨ましくも感じている。

碧柊の態度を裏打ちしているのは、王太子として重ねてきた実績



の数々なのだろう。その中には彼も云つたように失態も含まれる。失態は失態として、彼は受けとめてきた。だからこそこういう事態に至つてもいたずらに焦ることもなければ取り乱すこともなく、悠然としていられるのだろう。

何事も雪蘭にまかせてきた青蘭には実績と呼べるものは何一つない。だからこそ不安になればきりがない。けれど一人で即位するわけではない。

碧柊は敬愛し、信頼できる配偶者となるだろう。

それを見越しているからこそ、里桂や袁柳達は彼を盾の候補に加えることを、ひいては青蘭が彼を選ぶことを許したのだろう。

東葉も西葉もともに血を流しすぎた。今、手を携えることができなければ、そう遠くない未来に翼波の前に膝を屈することになるかもしれない。

今こそが正念場だった。

ようやく支度が整う頃にはとつくに夜は明けていた。

人々の拝殿での参拝はまだ続いている。即位の儀は普段は神官しか入ることの許されない本殿で行われる。神殿の主人の末裔である王族とはいえ、神官以外の人間が本殿にあがった例は<sup>ためし</sup>ない。

あとは先導にあたる権大神官が部屋まで呼びにくるのを待つだけだった。

大仕事を終えた祥香は、精根尽き果てたようすで椅子にへたりこんでいる。王城での即位には女官長が城内の社殿まで付き添うが、本殿に立ち入るのは青蘭と盾の候補のみにとどめて欲しいという神殿側の要望で、祥香は大役から解放された。

彼女に伴われ助っ人として神殿にやってきたのは、寄葉家に奉公に上がっている貴族の娘たちだった。

彼女らはただの聖地詣でのお供のつもりでついてきていたので、神殿に入ってから本当の目的を知らされた。最初はかなり戸惑っていたようだが、蒼杞の所業は既に彼女らの耳にも届いており、正統な女王の即位に立ち合えることを素直に誉れとすら感じているようだった。

決して人前に姿をさらすことのなかった王女に、間近に接することができるとにも感銘を受けているらしい。

貴族ではあつても家格によつては王城に上がることさえ許されない。主家筋に娘を見習い奉公に上げるのは、主にそういう低い家格の貴族だった。中途半端な身分ゆえに、庶民よりも王家に対する想いや憧れは強い。有力貴族よりも王統家に奉公に上がれることを名譽だと考えるため、王統家に伝手のある者は領地から多少遠くても、危険を冒して旅をさせてでも、仕えに出すこともめずらしくない。

そんな彼女らにとって青蘭は雲上人に等しい。

もとより人並み以上の容色の青蘭が、身分にふさわしいみなりを

整えれば彼女等の期待に十分応えられるものだった。憧れ混じりに遠巻きにされ、理解できないままでも祥香に促されてにおつとりと微笑んでみせれば効果は十分だった。

やがて扉が叩かれ、正装した権大神官が姿をあらわした。

青蘭は無言で立ち上がり、彼女以上に緊張した面持ちの祥香や少女たちに感謝をこめた微笑を浮かべて静かに皆の顔を見渡し、最後に優雅な一礼をしてみせた。

すかさず祥香が膝を折って深々と頭を垂れると、少女たちは次々とそれに倣う。

期待と励ましに満ちた空気に押されるように、青蘭は一步踏み出した。

先頭を歩く神兵たちも女神の命日とされる日や新年、夏至や冬至など特別な大祭のおりにしか着用しない、朱の正装に身を包んでいる。

血を連想させる装いが正装であることを、青蘭は不可解な想いで見つめる。

そんな青蘭の疑問に大神官は、人の生とは血潮の洗礼を受けてはじまるからだと説明した。確かに出産時の出血は避けられないものである。しかし自分の出生と同時に母を亡くした青蘭にとって、その血の色は生よりも死を連想させる。

神兵が朱であれば、彼らより高位の権大神官の衣装は紅に近い。

これが大神官ともなれば真紅となるのだろう。

対する青蘭はひたすらに白を重ねた装いだった。柔らかな白から硬質な色合いまで。くすんだ色を一番下にし、次第に明度があがっていく。最後にまとう白は白鳥の羽毛の如く、あるいは新雪のような白だった。

小規模な都市にも匹敵する機能を持つ神殿は広く、複雑に入り組んでいる。本殿は最も奥にあり、そこへいたる道筋は高位の神官し

か知らないと言う。

途中にあつた大きな石の扉の前で護衛の神兵たちと別れたのちは、権大神官と二人きりで進む。大神官よりも年かさの彼はすでに老境に入っているが、その足取りはしつかりとしたものだった。

石扉から先はまるで迷路のようだった。道を覚えようとしてみたが、じきに放棄する。それほどまでに複雑に入り組み、また頻繁に分岐を繰り返していた。

権大神官は確信に満ちたようすで道を選んでいく。その歩みは早く、青蘭はあとをついていくのがやっとだった。

ようやく磨きこまれた鉄扉の前にたどりつく頃には息が上がっていた。肩で息をしている王女に、彼は声こそかけなかったが息が整うまでその場で待ってくれた。

額をつたう汗を、化粧を崩さないように気遣いながら押さえつつ、深く呼吸を繰り返す。ようやく乱れた息が整い、熱が治まると、青蘭はおまけのようにさらに一つ大きく深呼吸した。

それが合図だったわけではないが、権大神官が扉を押し開いた。

そこは暗く湿った空間だった。

神殿の大半は峡谷の岩盤を掘削してつくられている。建造されたというよりも、彫刻のように削り出されたという表現の方がより当てはまる。

最奥に位置する本殿は、神殿が築かれる前の原初の姿をそのまま伝えていたようだった。

あちこちに篝火が焚かれ、暗闇を照らしている。炎が揺れるということは、空気の流れがあるのだろう。耳を澄ませばかすかに水音も聞こえる。そして、ほぼ定期的に響く雫の垂れる音。

やわらかな焔に照らし出される天井は陰影に富み、それを生み出しているのは無数の鍾乳石だった。

本殿は鍾乳洞の大きな空洞をそのまま姿で用いていた。

不定形だが円形に近く、あちこちに常闇へと続く口がひらいている。まだ奥へと続いているのだろう。川の流れのような水音は、そのどれかから響いてくるようだった。

空洞の中央には太い石柱がそびえ、天井と床をつないでいる。表面の濡れたような光沢は、かつては石筍だったものが気の遠くなるような時間の末に垂れ下がる鍾乳石とつながり柱と化したものだった。

緩やかな壁は棚田のように水をたたえ、水滴が垂れるたびに漣が光をはじく。

暗く冷たいが、どこか懐かしさも感じる別世界だった。

青蘭は目を奪われてそこから動けなくなった。はじめて目にする光景に呼吸も忘れて見入る。その間、誰も彼女を急かしはしなかった。

やがて石柱の前に泉が沸き、そのほとりに見覚えのある姿があることに気づく。片膝を付き、反対側の手を地面について頭を垂れているのは3人。

菘葉桂琉、寄葉哉杞、そして葉碧柊の3人だった。

その傍らに大神官・成昊の姿があり、その背後にもう一人の権大神官が控えている。彼の手には一振りの抜き身の太刀があった。

泉のほとりまでは階段が続いている。それだけがこの空間で目にする人の手によるものだった。

岩床も濡れている。裳裾を引きながら濡れた階段を降りるのは一苦労だった。

導かれるままに泉のほとり、3人の候補者たちと大神官たちの対岸にたどりつく。

歩きたびに髪にさした歩揺が涼やかな音を立て、衣擦れがやけに大きく響く。

しずしずと歩み、ようやく泉のほとりの水際に立つ。なにげなく目線を落とし、その泉が赤い水で満たされていることに気づき、息を呑んだ。

泉のほぼ中央あたりから常に波紋が生じている。地下よりこんこんと水が湧き出している証に他ならない。にもかかわらず、その水は赤い。灯りはその畔にもいくつも点されている。水面は暗いわけではない。泉の水は血を思わせる色合いだった。

またしても目を奪われ動けなくなつた青蘭を、今度は澄んだ音が引き戻した。

大神官成昊が手にした錫杖をひと振りした。その頭部の大きな鈴が空間を震わせる。

それを合図に3人が顔を上げた。泉の向こうに立つ青蘭を見つめるそれぞれの顔に讚嘆のいろが浮かぶ。哉杞はぼかんと口をあけ、桂琉は呆気にとられたように眼を瞠っている。

白い衣を幾重にも重ね、結いあげた髪に白珠や水晶の步揺をいくつも挿した青蘭の姿は、泉の波紋の照り返しと焰を受けて暗闇に浮かびあがり、たつた今泉から生まれ出たばかりの女神その人のように神々しかった。

碧柸もとつさに目を奪われたようだが、じきに冷静さを取り戻す。賞賛のいろをまじえながらも、彼女が間違いなく自分を選ぶことを確認するようにまつすぐに見据える。その眼差しが青蘭を現実に取り戻した。

大神官は予想していたように真紅の衣に身を包んでいた。泉の水から染め上げたような色だった。その袖がゆらりと動くと、それが合図であつたように太刀を捧げ持つ権大神官が歩き出す。再び3人が頭を垂れる。

太刀をもつた権大神官は泉のほとりを大きく迂回して、青蘭の前で両膝をついた。太刀を持つ腕をさらに高く掲げる。

盾の代わりに太刀を用いるということは事前に聞かされていたが、それは手に取ることを躊躇わせるような太刀だった。

神器だけあつて拵えは見事なものだった。太刀とはいうが、刃は直刃であり正式には大刀と書いて「たち」と呼ぶ。古い形であり、日ごろ目にする形状ではない。手に取るのを躊躇わせるのはその外

形ではない。

闇を一閃するような白刃は、半ばまで血に染まっていた。まるでつい先ほど人を斬ったかのようなぬめぬめとした血は、未だ乾ききっていない。いったい誰のものだということか。

青蘭はもう一度この場に居合わせる全員を見渡す。誰一人として負傷している者はいない。

では、この刃を汚す血は誰のものなのか。

大刀を目にしても一切の発言を慎むようにと大神官は云っていた。この本殿では言葉そのものが禁じられているという。そこに意図的なものを感じつつも、仕方なく大刀を受け取る。

両手で柄を握ったが、ずしりと重い。全体の長さは青蘭が碧柊から譲られた小太刀に近く、男性よりは女性向きの小振りなものだった。その外観に相応しい重さではない。

今にも切っ先から滴り落ちそうな血糊からは目を背け、その切っ先を水面と並行に保つ。あとは3人のうちの一人を指し示せば、それで>盾<の選定は終了する。

青蘭は迷うことなく彼に大刀を向けた。

昼近くになっても拝殿には人々が静かに詰め寄せていた。

早くに参拝を済ませた者のなかにはすでに聖地を後にした者もいるが、未だ大半のものが神殿や参道にとどまっている。

そこへなんの前触れもなく鐘が高らかにならされた。それは主に朝の開門と夕の閉門を知らせるためのものである。

それ以外の鐘は変事を告げるものだった。

うつすらと目を開ければ、視界はまだ薄暗い。半ば寝ぼけた頭でまだ夜が明けていないわけではなく、この地の朝の到来の遅いことを思いだす。

いつもどおりの目覚めならば、もう朝とっていい時間帯のはず。青蘭は眠気の宿る眼をこすりながら二度寝の誘惑と戦うように寝返りをうち、そこに自分とは別の温もりを感じた。

「……せつ、らん？」

いつの間に彼女が聖地にやってきたのだろう。それとも長い夢を見ていたのだろうか。記憶はないが、いつのまにか雪蘭が寝台に潜り込んでいたのか、それとも青蘭の方からおしかけたのか。

探るように伸ばした手が優しく包み込まれる。細い指先を絡みとる指は雪蘭のものにしては太く節くれだっている。笑いを押し殺すような気配も伝わってくる。その指の感触といい、低い忍び笑いといい、雪蘭のものではない。

青蘭は不可解に思いながら顔を上げ、かたまった。

「残念ながら雪蘭殿ではない」

わずかに申し訳なさそうに応え、きょとんと彼を見上げている妻となった娘の髪をそつと梳く。

髪かもしを外した髪は未だに短い。痛々しいほどだが、幼い子供の髪を思わせるその長さは、あどけない表情を愛らしくも見せる。

滑らかな髪を一房手にとり口づける。それから指と指をからめた方の彼女の手の甲にも。

髪をからめとる方の彼の腕を枕にしていたことに、青蘭はようやく気付く。同じ一室で夜を過ごしたことはあるが、こんな風に朝を迎えたのはもちろん初めてだった。

同時に昨日の即位の儀から続いたあれこれが瞬時に蘇る。とっさに耳まで赤くして顔を伏せた。



その仕草によく彼女が事態を思いだしたらしいと察した碧柊は、そつと細い体を抱きよせその額に唇を寄せる。

「よく休めたか？」

「……はい」

広い裸の胸に抱き寄せられたまま、青蘭は小さく縮こまってぎこちなく頷いた。

昨日の即位の儀でく盾を、すなわち自分の夫となる者を選んだのは青蘭自身だ。即位の儀が同時に婚儀も兼ねていることは分かっていたし、その夜になにが営まれるかも承知はしていた、が。

実際に夫婦になってみると、気恥ずかしくてまともに顔を見ることもできない。今更ながら、あの苓南の咎で彼が自分を子供だと評した意味を情けなく噛みしめる。

花嫁の恥じらいか、それとも情事のあとの羞恥か。碧柊はなかなか顔を上げられないでいる妻の耳に唇を寄せる。

「起床にはまだ少々早い。もう一眠りなさるか、それとも  
熱い吐息を耳に感じながら、さらに体ごと抱きすくめられる。」

胸が早鐘を打ち、こめかみが脈動してなにも考えられなくなる。甘い熱に流されそうになったその時、体の芯が鈍く疼いた。

思わず痛み在眉をひそめ、何故か同時に昨日からひきずっていた疑問が口をついてでた。

「昨日の……」

「ん？」

不穏な動きをみせていた手が止まる。

「昨日の、あの、儀式のありのあの大刀を、ご覧になりました？」

「ああ、見た」

それがどうした、とは問われなかった。青蘭の気がかりがなになのか、彼にも見当がついたのだろう。

「あれは……あの血は新しいもののようにでした　けれど、誰も怪我など負っていなかった。あれは、いったいどなたのものだったのでしょうか」

「六華の王城の宝物庫には盾があるのだな？」

「ええ」

それは本来ならば即位式で用いられる神器だ。

「盾と太刀は一揃えだ。では、六華に神器の太刀はあるか？」

その問いに、青蘭はそれまでの気恥ずかしさも忘れて顔を上げた。云われてみればそうなのだが、これまで何故か思いつきもしなかった。

「宝物庫にはありませんでした」

「盾は女神の夫をあらわす。では、太刀は？」

青蘭を見つめる碧柊の目にも熱の名残はない。

「太刀は女神の象徴　では、あれは神が自らふるわれたものだと？」

神器を伝えてきたのが王家だけとは限らない。神殿の太刀が神器だということは事前に知らされていたが、その由来までは聞いていなかった。女神に由来するものであることは確実に、それが神のふるった得物である可能性は十分ある。

しかし、問題はそういうことではない。あの血が誰のものかということだ。そして、あの泉の色は

「女神はこの地で亡くなられたのだったな」

「ええ……けれど、どのように亡くなられたのかまでは伝わっていない……」

「太刀が女神の象徴だからといって、あの大刀が即ち神のものとは限らぬ。盾と太刀は一揃えで持つもの。持ち主が同じ人物である可能性は高い。盾を持つ者が女神の夫その人であれば、太刀もまた彼の人のものである可能性もあろう」

「では、あの血は？」

刃をふるうものがあれば、それをふるわれるものもいる。

ましてやあの刀身を汚す鮮血が神のものであれば、いつまでも新しく見えてもおかしくはない。

青蘭は不吉な考えに顔を強張らせる。碧柊はそのこわばりをとく

ように頬に唇を滑らせ、そつと離れた。だが、彼女は依然話題の方に気をとられているらしい。

「あの泉のものだろう。われら3人が本殿についた時、すでに大神官が太刀を手にあそこにいた」

顔にかかる髪を指先ですくって払ってやる。青蘭はそれにすら意識を払わない。

納得できない顔で碧柊を見据える。彼を睨みつけたところで謎が解明されるわけではないが、ほかに気持ちのやり場がなかった。

「あれが泉の水だなどと、本気で考えておられるのですか？ それに、あの泉の色だって」

言い募ろうとする唇を塞がれる。啄ばむような口づけだけで顔を遠ざけると、碧柊は苦笑しながら溜息をついた。

「あなたは知らぬかもしれぬが、地中の鉱物の影響でああいう色合いになることはある。それでも納得できぬというなら、吾が生きて戻ってからいくらでもこの疑問に付き合おう」

さり気なく付け加えられた、生きて戻ってからという件に、青蘭の顔がさつと翳る。

完全に朝が来れば、あとはしばしの別離がまっている。しばしとはいえ、実際にはどれほどになるか誰にも分からない。そして、再会がかなうかどうかさえも。

じきに眦が熱くなる。溢れそうになるものを感じ、青蘭は顔を伏せた。これまでずっと考えないようにしていた不安や恐れといった負の感情が一気にこみあげる。堪えようとしても温かなものがとめどなく頬を濡らす。

そつと仰向けさせられ、頬に温もりを感じる。何度も口づけを落とされて、青蘭はますます涙を堪えるのが難しくなる。しまいには小さくしゃくりあげはじめた。

それに碧柊は愛しむような笑みを浮かべ、耳朶に唇を寄せる。

「大神官が云っていたろう。人の生は血潮の洗礼を受けてはじまると。ということは、母親は必ず血を流すということだ。そうし

て流される血は尊い。だからこそ神官の正装は赤が選ばれる。そして、昨夜はあなたも血を流した」

「……！」

その囁きの意味を解すや、青蘭は耳まで赤くして碧柊の胸を叩いた。抗議するように何度も叩きながらも、ついに顔を上げることはできなかった。

「残された時間は短い。如何なさる？」

その囁きに甘さよりも切実さを感じとった青蘭は、おずおずと自分から彼の背に腕をまわした。

東葉王都翠華には続々と兵が集まりつつある。

西葉・東葉共に王都は国の北部に位置する。

遠い南部には直接目が行き届きにくいため、王領がいくつも置かれ、そこを治める王統家には近隣の貴族たちの動向を監視する役割もあつた。

明柊の呼びかけに応じる者は王都に近い貴族ほど多く、南部から従う者は少ないようだった。蒼杞の惨禍による当主交代などの混乱の影響も大きいのだろうし、現実に距離の問題もある。

応じる気があつても王都に至るまでには、いくつもの他の貴族の領地を抜けねばならず、実際領地が遠ければ遠いほど間に合うはずがなかった。

西葉は先の敗戦を受けて大きく兵力を削られており、実質的に敵となるのは蒼杞に従う西葉王家の直属軍のみ。それにあたるには東葉王家の軍と北部貴族たちの兵力だけで十分だった。

雪蘭は明柊に乞われるままに、何度も貴族たちの前に姿をさらした。直接言葉を発することはなくとも、それだけで効果は十分だった。

そして、いよいよ明日は出陣という前日。

雪蘭はこの日の来るのを首を長くして待っていた。

西葉の国内情勢は混沌としており、いつ内乱が起こってもおかしくはない。渡る術が小舟に限られ、その監視も厳しい聖地であれば他にいるよりは安全とはいえ、青蘭の身にいつなにが起こるか分からない。

もし青蘭の身になにか起こったとしても、その報せが雪蘭のもとに届くのは数日後のことになってしまふ。合理的な考えの持ち主である彼女だが、青蘭の身になにかあればその瞬間にきつと自分にもわかるはずだという理不尽な確信があった。

恐れているのは虫の知らせというべき、嫌な感じがすることだった。だが、それを感じることもなく青蘭が即位する日を迎えた。

あとはつつがなく式が終われば、雪蘭の役割も終わる。

夜になれば明柊が当然のように寢所にやってくる。

彼は結局一度も雪蘭に触れていない。それが半ば当たり前のようになっていたため油断していたわけではないが、不意に組み敷かれて雪蘭は思わず身をかくした。

「なにやら今宵はご機嫌がよろしいようですね」

艶然と微笑み、優しく囁きかける。抵抗したわけでもないのに手首をつかまれ床に縫いつけられる。決して乱暴ではないが、優しい仕草でもなかった。

「気のせいでしょう」

「そうは思えない。理由をお聞かせいただけますか？」

顔が近づく。のしかかる体も重い。その声音は限りなく優しく、見つめる眼差しは甘くすらある。にもかかわらず、雪蘭はいたづられているような気がした。

雪蘭は臆することなく無表情に彼を見つめかえす。

「あなたの気のせいです」

静かに断言すれば、彼は何故か嬉しそうに微笑んだ。

「機嫌がいいのはむしろあなたの方でしょう」

実際に彼の機嫌の善し悪しを見極めるのは難しい。一瞬で悟ることがができるのは、乳母子の苳秦旗れいしんきくらいのもだろう。それでも雪蘭にも少しずつではあるが、なんとなくわかるようになっていた。

その言葉に、明柊は笑みを深くする。

「御明察です。さすがは青蘭殿だ。聡くていらっしやる」

「なにか良いことでも？」

「そうですね。それがなにかは、あなたなら分かっておられるのでありませんか、聡明な青蘭殿？」

耳朶に吐息がかかる。雪蘭は無意識に身じろぎする。

明柊はその仕草に口の端を歪める。ほとんど唇が重なりそうなほど顔を近づけても、雪蘭はたじろがない。つい先ごろまでは押し返す力を失っていたが、どうやら本来を取り戻しつつあるらしい。

「人の心の内など分かるはずありません」

静かに否定する。明柊は小さく笑いながら雪蘭の額に口づけ、ころりとその隣に転がった。

雪蘭はようやく解放され、思わず深々と息を吐く。

「良い夢を」

ほっとした様子の娘をからかうような笑みを浮かべてそう囁くと、明柊は背を向けてしまった。

翌日。

朝早くから翠華の王城には主だった貴族たちが集っていた。

それぞれに華美をつくした家紋入りの鎧に身を固め、これまた思い通りに意匠をこらした兜を手に行っている。

腰に佩いた太刀も儀礼用ほどではないが、贅をつくしたものだだった。

女王の正装をまとった雪蘭が壇上に姿を現すと、静かなどよめきが生じる。

今日という日を特別な日として、普段であれば城へ上がることも

許されない下級貴族も登城を許されている。広間には豪華な鎧兜姿のものから、質素というべきか質実剛健というべきか微妙な身ごしらえの者まで様々だった。

まるで物見遊山にでも行くようだ、雪蘭は皮肉な想いで彼等を見つめる。

出陣を前に、貴族たちに言葉を賜るのが役割だった。もちろん、直接口を開くことはない。すべて明柊の下書き通り、“青蘭女王”の言葉として伝えられる。そのはずだった。

女王の登場に伴い、貴族たちは膝を折り、こうべを垂れる。

優雅な足取りで彼等の前の横切り、玉座につくとその傍らに明柊が立つ。

夫であり、実質的に東葉を治める彼が口を開く前に、雪蘭の澄んだ声が広間に響いた。

「この争乱は西葉の蒼杞と明柊が結託した結果です。そしてここにいる私は青蘭ではありません。私は偽物です。あなたがたの真の女王は昨日、聖地において即位なさいました。盾であり夫となったのは碧柊王太子です」

静寂が、その場を支配した。

## 終章 1 (前書き)

現在、修正中につき目次が見苦しいことになっており申し訳ありません。

ここから終章に入ります。もうしばらくお付き合いいただけると幸いです。



## 終章 1

雪蘭は再び鳥かごに戻されていた。代々後宮としてつかわれてきたあの塔である。部屋も同じものだった。

王女に相応しい贅をつくした豪華な部屋。設えは西葉のものに比べるとやや品が悪い。成金的な要素を感じてしまうのは、急速に成りあがったこの国の成長ぶりを思えば、この部屋の趣味もその一端ともいえるのかもしれない。

あの場での雪蘭の突然の問題発言に、明柊はまったく慌てたようすも見せなかった。まるで予想していたように落ち着きを払っていた。

広間に会した貴族たちは、雪蘭の言葉の真偽どころか意味すらはかりかねて沈黙していた。

さらに雪蘭が言葉を重ねようとしたところで、明柊が静かに歩み寄ってきた。逃れられるとは思っていなかった雪蘭は、じっと彼を見据えた。彼はいかにも案じているような表情を浮かべてそばまで来ると、まるで雪蘭の身を労わるようかのよう腕を回してきた。

そこで記憶は途切れている。

失神してしまい、次に目覚めた時にはもうこの部屋に移されていた。

あのととき、彼は実に見事な手並みで雪蘭の頸動脈を強く抑えて彼女を失神させたのだ。傍目には異変を察した明柊の腕のなかに、ちようど彼女が倒れこんだように見えただろう。

明柊は意識を失った雪蘭を抱いたまま、ここ数日女王は連日の慣れぬ政務や戦の支度で疲労が募り、気が弱っていた。おそらくそのために気が迷ったのだらうと、言葉巧みにその場を治めてしまったらしい。

その後も女王は衰弱が甚だしく、休養を要するため、しばらく表には出られないということになっているらしい。

かわりに明柊がすべてを取り仕切っているが、それはその場に“女王”の姿がないというだけのこと、これまで通りといってもいい。

これらはすべて明柊の口から聞かされた。

彼は雪蘭を責めたり問い詰めたりということ、一切しなかった。ただ楽しそうに彼女を見つめる。

「あなたと、俺が出会った“雪蘭”殿。そのどちらが本物か、などということはどうでもいいことなのです。実際にあなた方はよく似ている。正確に区別できる者はごく一部なのでしょう。肝心なのは、それぞれに“女王”をいただいた、俺とわが従弟殿のどちらが最終的な勝者となるかということ。勝利した方の“女王”こそが、真の女王ということになる。あなたが本物であろうが偽物であろうが、どちらでもかまわないのですよ」

「そんな道理が通じるわけはありません」

「通じる通じないではありません。通じさせるから道理なのです」  
雪蘭は窓際の椅子に腰かけていた。明柊は寝台の足元側の柱にもたれかかるようにして彼女に向き合っていた。

だが彼女がどんな話にも眉一つ動かさないと、それを眺めているのにも飽いたのか、つかつかと傍まで歩み寄ってきた。

「勝ったものこそが正義なのですよ、などとこんな馬鹿げたことを俺に云わせて楽しいですか？ 聡明なあなたなら説明するまでもないでしょうに」

そして「あいかわらず意地の悪いお方だ」と囁き、低く笑う。

生暖かく湿った息が耳朶にかかるが、雪蘭は身をよじって避ける代わりに、すぐそばにある端正な男の顔を真直ぐに見据えた。

「あなたには本当に勝つ気があるのですか？」

明柊はわずかに目を細める。眸の奥に愉快そうな光が閃いた。

「何故そのようなことを？」

「あなたにしてはなさることの詰めが甘い」

「たとえばどうように？」

「それこそ説明する必要はないでしょう。それを一番よく承知しているのはあなたのはずです」

明柊は喉の奥で低く笑った。細めたままの眸は心底楽しげだ。彼はわずかに視線を落とすと、雪蘭の手をとった。

恭しく捧げるように持ち上げられたその手は、白い薄絹の手袋に包まれている。細かな刺繍が白絹に銀を織り交ぜた糸で手背に施され、かすかに煌めいている。

明柊はその文様を指先でゆっくりとなぞる。

「それはあなたも同じことでしょう。一石投じただけで終わりとは、いささか呆気なさすぎるとはしませんか？」

「どう思われようとあなたの勝手です」

雪蘭はそつととられた手を引っ込めようとしたが、かなわなかった。その手はしっかりと握られていた。

「そうですね、たしかに、そうだ。そして、あなたの役目はこれで終わったわけでしょう？ それではこれから、俺のために役に立っていただきましょう。なに、しばらくの間のご辛抱です」

彼はやわらかく微笑し、その華奢な手に口づけた。

雪蘭はそんな彼をじつと見つめながら、ぽつりと呟く。

「本当にそれでよろしいのですか？」

「いいのですよ。あなたにはご迷惑かもしれないが、結果的に目的は一致するでしょう」

雪蘭は目をわずかに伏せて小さくため息をついたが、結局なにもいえなかった。

“女王の混乱”によって東葉の出陣は二日遅れた。

すでに西葉側にも東葉軍の動きに関する情報が伝わっているため、その遅れは不利にしかならない。だが、それでもなお東葉の方が有利だろうというのが大方の見解だった。

女王が体調を崩したところで、実質的に指揮をとるのは明柊であ

るため、二日も遅らせる必要はなかったのだが。

女王には休息が必要としながらも、急遽、女王が軍を率いることとなった。二日という期間は女王の休養とその出陣の準備のために費やされた。

「私などが陣頭に立ったところで、役にも立ちませんのに」

役に立たないことはない。むしろ大いに士気を高めるだろう。それを承知で雪蘭は異議を唱えてみせた。

彼が自分のために役に立てと云ったのは、こういうことだったのか。見当はついていたが。

「わざと物分かりの悪いふりをなさるのは、いちいち億劫でしょう。俺の前ではそのように装わなくてもよろしいですよ」

そんな彼の言葉も予想できたことだ。確かに装う必要はないのだろう。分かっているてもなおそのように振舞ってしまうのは、身にしみついた性か、それとも天の邪鬼な想い故なのか。

雪蘭には自分でも分からなかった。

彼はあいかかわらず艶やか笑みを浮かべて、雪蘭を見つめる。からかっているのか、それともどこまでかは本気なのか見当もつかない。胡乱な態度に、雪蘭も曖昧な笑みを浮かべるのみ。

「それに、俺は“雪蘭”殿との約束がありますからね」

雪蘭はびくりとふるえそうになる衝動をなんとか堪え、怪訝な想いはそのままに首をかしげた。彼のいう“雪蘭”が誰なのか、どういう意図に基づくものか。下手に反応するわけにはいかない。

「約束？」

「そう、苓南の砦で。俺は“雪蘭”殿からあなたへの伝言を言付かった」

彼はそう囁き、覚えていきますかと問うように雪蘭を見つめる。

忘れてはいるはずがない。必ず再会するという従妹からの伝言だった。

「その約束は、言伝を私に伝えた時点で果たされたはずでは？」

「確かにそうですが、それだけでは男として甲斐性がなさすぎるで

しょう」

「 いったい？」

「伝えるだけなら子供でもできる。愛しい女性のためならば、そのお手伝いに手を尽くさないのは男ではないでしょう」

その愛しい女性とは誰なのか。雪蘭は問う気になれない。

押し黙る態度をどう解したのか、彼は依然として微笑んでいる。

「大切ないとこ殿にお会いになりたいでしょう？」

「

雪蘭は無表情のまま、じつと明柊を見つめる。無機質な視線を受けて、彼はいかにも優しげに眼を細める。

「会わせてさしあげますよ」

その言葉が本気だということだけは確かだが、いったいどういうつもりなのか。その内心をうかがうことはついにできなかった。

## 終章 2

即位の報は事前の打ち合わせ通り、その日のうちに各地に知らされた。

とはいえ、表向き正式には青蘭姫は東葉にいたることになっており、碧柊は国を裏切ったとして追われる身でもある。

西葉においては、青蘭が聖地において正式に即位したこのみが知らされ、東葉王子がその夫として選ばれたことは公にはされなかった。

西葉の国権を握っているのは蒼杞だが、今やその力の及ぶ範囲は王都周辺に限られている。それも彼の常軌を逸したような数々の振舞いの結果、極度の緊張状態の下にあり、同時にそれが混乱を引き起こしてもいる。

それに乗じたのは、王統家八門を束ねる八公筆頭の寄葉里桂だった。彼は同じく王都六華から逃れた李葉家の桂貴とはかって、六華から逃れることのできた貴族や王統家に働きかけていた。

青蘭が即位する日は、あらかじめ知らされていた。即位の儀に立ち会う盾の候補の顔ぶれが公表されることはなかったため、その結果碧柊が選ばれたことを知っているのは、里桂らごく一部に限られている。

「後々、詐欺だと西葉貴族たちの怒りを買ってさうだな」

そういつて苦笑したのは、碧柊その人だった。

妻となった女王の身は安全な聖地にあり、夫である彼は寄州の寄葉家の城に滞在している。

寄州は西葉のほぼ中央に位置し、王都からは近いとも遠いとも言い難い距離にある。

妹である青蘭の即位と、彼女を奉じる貴族や王統家の蜂起は、蒼杞の知るところともなった。その動きを知った蒼杞が寄州を攻めるには、王都を空ける必要があり、その背後には東葉の明柊が迫って

いる。蒼杞は結果的に南と東側から別々の敵にはさまれ動けなくなるはずだ。

武力で劣る青蘭側がこの事態を有利にするには、東葉の反明柎派と共同歩調をとるほかない。碧柎と青蘭の婚姻は最上の手段であるが、長年の敵と手を結ぶことに難色を示す西葉貴族は少なくないだろう。

それもあつて里桂らはいえ、碧柎の存在を表立たせていない。

「殿下が戦功を一つ二つ立てて下されば、あとは私が黙らせてやりますよ。殿下は西葉を相手に負け知らずでいらっしゃったわけですから、それで十分でしょう」

碧柎は黙って苦笑する。

西葉との戦で勝利できたのは、明柎の力によるところが大きい。それを自覚している碧柎には勝算も自信もない。それは里桂も知るところで、承知の上でそう云つてのけるのだから人が悪い。

里桂の態度は、碧柎が東葉王太子であると知る前から一貫している。だからこそその言葉に、揶揄以上の悪意はない。

碧柎はただ自嘲気味に笑う。

城には州兵の司令部もあり、彼等がいるのはその一室だった。部屋の主は寄州公である里桂だが、彼は二人きりである時は上座を碧柎に譲るようにしている。王配の位は女王に次ぐ。

窓を背にした椅子に腰かけたまま、碧柎は考え深い眼差しで壁に張られた地図をじつと凝視している。

それは西葉と東葉の詳細な地図で、最優先の軍事機密でもある。

西葉の地図はもとよりここにあつたものだが、東葉の地図は碧柎の指示でもたらされたものだ。

「どちらにせよ、吾ひとりで成せることではない」

「無論です」

「吾もそなたと共に、真の女王陛下にお仕えする臣下であることに変わりはない。それは東葉、西葉の区別に左右されることではない」

碧柊は地図を見つめたまま静かに話す。

里桂は碧柊の下座に座り、年若い青年を冷めた目で一瞥する。

「本気でそのようにお考えですか？」

「表向きはそうでなければなるまい」

「表向き？」

「ああそうだ、表向きだ。東も西もない。二つの葉はもとは一つだったもの。分かれた国が一つに戻るだけだと、そういうことでなくてはな」

「実際はそうではないと？」

碧柊はちらりと里桂へ視線を滑らせ、口の端をかすかに歪めた。

「東葉はもとより国などではなかった。翼波と葉の緩衝帯だったところへわが祖先が入り込み、翼波の民を追いだし、葉からあぶれたならず者たちをまとめ上げただけのもの。東葉王家は“葉”王家が分裂した結果ではあるが、国そのものが二つに裂かれたわけではなかった」

それはそなたもわかってるだろう？ と逆に問うような眼差しに、里桂は眉一つ動かさない。

碧柊は応えのなかったことも気にとめず、すっかり冷めてしまった飲み物に手を伸ばす。香草茶に酒精を加えたもので、気分をほぐすより、むしろすつきりさせる効果がある。

「そもそも発端は兄弟喧嘩に過ぎぬ。姉に追いだされた弟が、姉に逆らい続けるためにはじめたこと。だがそれも百年も続けば立派な歴史。確かに吾も葉王家の血をひいており、またそうでなければ具合が悪い。なにせよ何事にも潮時というものがある。われらは互いに血を流しすぎた。皮肉なことだが、烏合の衆に過ぎなかった東葉の民にも、この百年の争いで“葉”の民だという意識が根付いた。二つの王家が統合される形で、新たな“葉”を成すのも可能だろう」

それが理想論に過ぎないことは、碧柊が一番よく承知している。それを察してか、里桂は黙って言葉の続きを待っているようだった。



「だが、これでどちらが正統な王家であつたのか証明されたよ  
うなものだ。この事態を治めることができれば、統一がなつた後に  
問題となるのは東西の対立であろう。西葉は東葉を下に見て、何か  
と侮ろうとする輩が出て来ようし、東葉にもそれを受け流すことが  
できぬ短慮なものは必ずいよう。その間に立てるのは吾しかおるま  
い」

気負つた風はないが、溜息まじりの最後の言葉に里桂は口の端を  
歪める。

「最終的に陛下とお立場が逆転したわけですね」

「……ああ、結果的にはそうなつた」

里桂の笑みは揶揄するものではなかつた。碧柊もそれに応じるよ  
うにわずかに薄い笑みを浮かべる。

「陛下も吾も元々上に立つことを望んでいたわけではない。陛下  
は即位を決意なさるまでにしばし時間を要されたが、それが本来の  
あるべき姿でもあつたわけではあるしな。こういうことはあるべき  
姿の方がやりやすかるう。吾も表に立つよりは裏からお支える方  
がなにかと動きやすい。共に望む結果が同じであれば、どちらが上  
に立とうと支障あるまい」

「しかし、王太子としてお育ちになり、西葉を下した後は両国  
をまとめるおつもりだつたのでしょう」

「それを云うならば、陛下はそもそも女王として立つべく育てられ  
たわけではない。吾は負うべき責任が軽くなり、彼女は思つてもみ  
なかつたほど重責を担うことになつた。どちらが容易いかは瞭然で  
あるう」

碧柊は立ち上がると窓際に寄り、そのはるか彼方にのぞむ山の背  
の山並みを見つめる。その懐に聖地は抱かれ、青蘭はそこにいるは  
ずだつた。

「それが殿下の偽りのない本音であると仰るのであれば、私は  
協力をおしみませんよ」

里桂がその後ろ姿に声をかけると、碧柊はゆっくりとふりむいた。

「では頼む」

短い応えに偽りはない。それを悟ると里桂も立ち上がり、碧椛に向けて頭を垂れた。

### 終章 3

雨が降っていた。

冷たい風を伴い、時に霧雨のように時に豪雨をと、不安定な空模様は本格的な秋の訪れを告げる序章だ。

これがおさまれば収穫の季節を迎える。

青蘭は神殿の高層階にある貴賓室の窓辺に腰かけ、荒れる空と湖を眺めていた。

窓越しに冷たい雨の気配が忍び込んでくる。そつと腕をさすってそれを払う。

西葉は穀倉地帯でもある。収穫されればそのまま兵糧ともなる。いよいよ戦となれば、耕作地にも火がはなたれるだろう。

それが戦法の一つでもあることは、青蘭も承知している。碧柊とて必要と判断すれば火を放つだろう。それは蒼杞や明柊も同様だ。

戦火が広がるほどに沃野も焼かれ、被害は拡大する。戦そのものは長引かずとも、影響は長く尾を引く。翌年に蒔くべき種が失われるどころか、餓死者を出すかもしれない。

百年の間断続的に戦は続いていたが、それは主に北の国境地帯でこのことで、戦場は限局されていた。

春先の戦いでは、惨敗し壊走した西葉勢を追ってきた東葉軍との戦いが王都近くでも行われたが、しょせん敗残兵狩りに過ぎなかった。

その後の軍の解体も予想以上にすみやかに行われ、たいした混乱もないままに西葉は東葉の支配下におかれた。

国境近くに住んでいるわけでもなく、戦に出たこともない一般の人々にとって、百年の争いは事実ではあるが現実味に欠けるところもある。

戦が近づけば税が上がり、時には臨時に徴収されることさえあったが、人々の生活を深刻に圧迫するほどではなかった。

しかし、今回の戦は西葉全土に戦火が広がるかもしれない。少なくとも東葉との国境地帯から王都にかけて、そして王都から碧柊たちが陣取る寄州までの間は確実に戦場となる。

国の中央部にもあたる寄州周辺は国内屈指の穀倉地帯であり、この一帯だけでも全土の収穫量の何割かを占める。

ここが焼き払われた場合、その被害の甚大さは想像もしたくないほどだ。

これまでどこか他人事だった多くの人々の上にも、今回こそは戦火は降りかかるだろう。

青蘭の即位は知らされたばかりであり、彼女を擁立して兵が集められつつあることは、まだ明らか動きにはなっていないはずだ。

これまで戦禍と無縁だった地域が戦場となるかもしれないことは、青蘭達のようなごく一部のものしか知らない。

それでも不穏な空気は、自然と広がっていくものなのか。国内ではもつとも安全であるはずの聖地においても、人々の顔は

晴れない。

うすうす不安を感じた人々が救いを求めているのか、聖地の対岸を訪れる参拝者の数が少しずつ増えているという。

門前の参道沿いを冷やかす参拝者のようすも、はじめて青蘭がこの地を踏んだ時のことを思えば、賑わいに欠けているようにも思える。

戦禍を憂いながら、それを引き起こそうとしているのも自分だ。

みすみす蒼杞に国権を渡すわけにはいかない。彼が本当にこの国を治めることになればどうなるか。未来が明るいものでないことだけは確かだ。

そんな蒼杞と組み、そもそもこの争乱の原因を作りだした明柊も認めるわけにはいかない。

いくら碧柊のいうように、彼の本音が那辺なへんにあるにせよ、現実は変わらない。どのような理由や原因があるのであれ、この事態は許されることではない。

青蘭はそれらを認めるわけにも、負けるわけにもいかない。

自分なら国をうまく治めていけると思っているわけではない。自分こそが女王に相応しく、正統な血筋に故に国権を手にして当然だなどと考えているわけではない。

そもそも国を治めることなど考えたこともなかったし、ましてや自信などあるはずがない。

その一方で、碧柊を想う気持ちに偽りはない。

身分など関係のない市井に生まれ、こんなことに思い悩むことなく、彼とごくありふれた夫婦として暮らせていけたらと、そんな夢想をすることもある。

けれど、彼女の想像はそこで止まってしまふ。

市井の暮らしなど知らない。ごくありふれた夫婦がどういうものなのか想像もつかない。

青蘭は葉の王女として生まれ、女神の血筋としてこの国を受け継いでいくために育てられた。いずれは相応しい夫を迎え、娘を生み、その子に王家と国を引き継がせるために。ただそれだけのための存在。

それは今も何ら変わりはない。

碧柊は夫に相応しい人物であり、やがては娘も生まれるだろう。ひよっとするともうすでに胎内に宿っている可能性もある。

青蘭はそつと下腹部に触れてみる。直系の王女は必ず娘を産む。

青蘭の母は生まれつき虚弱な人だったという。とてもお産に耐えられそうにないと思われていたが、王子を生み、そして娘である青蘭を産み落とし、それと引き換えるように息を引き取った。

どのような状態であれ、血脈だけは確実につながれてきた。

だから青蘭も娘を産むはずだ。それが第一子とは限らないが、青蘭の最初の子はきつと女の子だろう。根拠などないが、青蘭はそう確信している。

東葉の王子を夫に選んだのか、選ばされたのか。そもそも彼ははじめから青蘭の夫となるはずの人ではあったけれど、最終的にこの

ような状況でそうなるとは思ってもいなかった。

それがこの地に眠る、自分の祖先でもある女神の意志なのか。

青蘭にとつて、そんなことはどうでもいいことだった。

青蘭が正式に女王として立つ以外の道も、碧柊は示してくれた。

それでもあえてこのみちを選択したのは青蘭自身だ。

これは彼女の意志であり、結局、他の生き方などできるはずもない。

このために生み出され、そして自分の意志でそう生きると決めたのならば、進むしかない。

「青蘭さま、お寒いですか？」

いつのまにかすぐそばに祥香が立っていた。その腕にはすでに薄い毛織布が用意されている。

神殿は堅牢な建物であり、隙間風などほとんど感じられない。夜になると点される灯火が、わずかな風に揺らぐこともない。それでも、冷気は忍び寄ってくる。

尋ねるといふよりも、確認を求めるような祥香の口ぶりに、青蘭は素直に頷いた。

「そうね。まだ秋のはじめだというのに」

「この秋雨ですから、無理ありませんわ。それに聖地は山の麓ですし、山から吹き下ろす風は、夏でも冷たいものです。これをおつかいください」

祥香が丁寧な手つきでさつと布を広げる。青蘭がやや体をひねるようにして彼女に背を向けると、祥香はそつとその肩を抱くように毛織物を羽織らせた。薄い肩と細い腕が覆われると、常に感じていた悪寒も徐々にひいていった。

「ありがとうございます」

振り返り笑いで礼を云うと、祥香は遠慮がちにはにかんで首を振った。

「いいえ　それより、さきほどより思い沈んでおられるようすが……」

祥香は微笑みの奥に、気遣いを隠しきれないようすでいる。

おそらくひどく思いつめた顔で、外の景色を見つめていたのだろう。祥香はそんな青蘭に声をかけそびれていたのかもしれない。

青蘭はそんな自分に思い至り、小さく頷いた。

「ええ、色々」と

「ご心労の多い時ですから」

「そういうことではないの……」

次の言葉を探すような青蘭の表情に、祥香はじっと待つ。

青蘭は無意識に祥香が羽織らせてくれた肩かけに触れながら、視線を再び窓の向こうに彷徨わせる。

特に聞き手を欲しているわけではないが、言葉にしておきたい想いがあった。

「私は　私はずっと、雪蘭と自分を比べて力の無さや愚かさ、自分にならないものばかりを見つめて、いじけていた……雪蘭は完璧すぎて　完璧すぎるから……そもそも比べることが間違っていたのだけれど、彼女は私の憧れで　それは、今も変わらないけれど

それでも、いくら憧れても、私は雪蘭にはなれない……やっとそれに気付けたような気がするの

雪蘭にはなれない、いいえ、私は雪蘭ではない。雪蘭は私の大切な大切な人で、私はこんな人間だけれど、私でしかなく……私には私にしかできない生き方しかないのだわ」

「　青蘭さま……」

祥香は雪蘭と青蘭の間柄については従姉妹同士という以上のことは知らない。だから彼女の咳きの大半は分からなかったが、想いにまで見当がつかないわけではない。

誰しも抱えている思いや迷いはあるものだが、その一つに折り合いをつけることができたのだろう。

それを物語るように青蘭はどこかすっきりした顔をしている。

祥香はそれを見てほっと安堵した。

そこで扉が叩かれた。祥香が一言断って応対に出る。やりとりは

青蘭の耳まで届かなかった。やがて戻ってきた祥香の手には、小さな紙片が握られていた。どこからか知らせが届いたのだろう。

この時期にもたらされるものは、どんな報せであれ戦況に関わるものに違いない。青蘭は息をつめてそれを受け取り、できるだけ落ち着いて置まれたものをひらいた。

祥香は中身を見てしまわないように一歩下がり、即位したばかりの女王を見守る。

青蘭は真剣な顔で文面に目を通していった。じきに口をかたく引き結ぶ。かすかにその手が震えていた。

「雪蘭が明柊殿と共に出陣したそうよ　女王として」

「　な……」

祥香は返す言葉を失い、口ごもる。雪蘭の意志ではないことは確かだが、事実は変わらない。

青蘭はくしゃりとそれを握りつぶし、まっすぐに顔をあげて窓の外を見つめる。ちょうど風が激しさを増し、叩きつけるように雨粒がはじける。風景は滲んでしまい、湖すら見えない。

唇をかみしめることなく、けれど険しい顔でしばしそんな空模様を見据えた末に、青蘭は静かに立ち上がった。



## 終章 4

静かに立ち上がった青蘭は、羽織っていた毛織物を背後へ滑らせ、それを畳んで腕にかけていた。

結いあげるには長さの足りない髪は、植物性の油をなじませてよく梳かれている。癖一つない見事な黒髪が白い面輪を縁取り、昂然と顎をあげた顔に浮かぶ表情を冴え冴えと浮き上がらせる。

「せい……陛下、如何なさいました？」

突然席を立つた彼女の気色に気圧されたように、祥香はその名を呼ぶのを躊躇った。

「大神官のところへいきます。先触れを」

口調も表情も、ともに落ち着きを払っている。

雪蘭が女王として明椋に擁立され、その出陣に伴われているという。その報せを受けての行動なのだろうが、何故行先が大神官のものなのか。意図の読めないまま、祥香は小さく「はい」と応じ、控えの間に続く扉を開けて手近な者呼びよせた。

すでに至高の位にいた青蘭とはいえ、思いつくままに行動できるわけではない。大神官と面会するにも踏むべき手続きがある。聖地にあるこの総本山を治めているのは大神官であり、女王といえども賓客に過ぎない。

「陛下、いったい？」

青蘭のそばに戻ってきた祥香は、年若い娘の顔を遠慮がちにみつめる。青蘭はその眼差しに微笑で応じ、答えるかわりに「支度を」と促した。部屋着のまま大神官に会うわけにはいかない。

祥香はその指示を受け、ようやく着替えの準備に思い至る。

「すぐに準備いたします。それまでおかけになってお待ちください。慌てた様子でそれだけ云いおくと、再び隣の控えの間に向かう。」

自分の役目をすっかり失念していたことに動転したためか、足取りが乱れがちになる。

その後ろ姿を青蘭はかすかに口の端を上げて見送り、小さく息をつくと再び椅子に腰かけた。

窓の向こうで猛り狂う風は、まるで嵐のようだった。

白い簡素な衣装に着替え、肩を覆う短い髪を見苦しくない程度にまとめ上げた頃に、大神官から遣いが寄せられた。

祥香が至急と念を押させたおかげか、じきに面会できるという返答だった。

身分から云えば青蘭の方から面会に赴くのはおかしいのだが、総本山という場所柄と相手への敬意を示すためにそうする。

即位が公のものとなって以来、青蘭の行動はいちいち束縛されることが増えた。女王らしく振舞うためには必要なことであり、そうでなければ周囲のものが困るといふ事情もある。

例外的な場合を除いて、青蘭はおとなしく“女王らしい振舞い”のために周囲から云われるままに従っている。こうなってくるとどちらが主なのか分からないが、王女として育った奥の宮でも似たような状況だった。主には主の、仕える者には仕える者の、それらしい振舞いという規則がある。それに気づいたのも、雪蘭と入れ替わっていたおかげだ。

大神官からのつかいが、そのまま青蘭を先導してくれるという。祥香を供に、青蘭は貴賓室を後にした。

大神官の部屋へ至る経路はとうに覚えてしまったが、それでも女王が一人で歩き回ることなどできない。

“雪蘭”として振舞う時の身軽さを懐かしく思い出し、同時にもう二度とそんな時は持ち得ないのだと気付く。今さらながらではあったが、そう思うだけで雪蘭をひどく遠くに感じられて、胸が苦しくなった。

強風は回廊の窓も震わせている。崖に面した窓は、石くれの飛散から硝子を守るために板戸が閉ざされている。そのため昼間にもか

かわらず灯火が点されていた。ほのかなその燈心に宿る焰も、隙間から吹き込む風に頼りなく揺れている。

ゆらゆらと揺れる灯りのなかを進み、ようやく目当ての扉にたどりつく。

控えの間に祥香を残し、青蘭は一人で入室を促す声に応じた。

荒天であつても、大きな窓をそなたその部屋は十分に明るかった。晴れた日とは比べものにならないが、暗い廊下に慣れた目には優しい明るさだ。

その窓を背に、大神官は佇んでいた。

青蘭の背後で、祥香が外から静かに扉を閉めた。

それを確認してから、青蘭は落ち着いた足取りで部屋の中央に進む。

大神官は恭しく一礼すると、顔を上げ微笑した。

「いかがなされました」

彼は前口上を口にしない。青蘭はそこが気に入っている。

「わが従姉雪蘭が、葉の女王を僭称して兵をあげました」

これを口にするだけで心が痛んだ。雪蘭がそんなことを自ら望むわけがない。分かっているが、傍から見れば事実はそのうだ。雪蘭はそれも覚悟で翠華すいかに残ったはずだ。青蘭はそれを徹底的に利用するほかない。

大神官・成昊せいこうも大まかな経緯は知っている。

彼は穏やかな表情はそのままに、小さく頷いて先を促した。

「盾は王家の証。けれどそれは六華ろっかにあります。私は女神の娘である証が欲しいのです」

その言葉が何をさしているのか。大神官はすでに理解しているようだった。

わずかに眉をひそめる。

「あれを抜けば必ず人の血が流されましよう」

「すでに流されています」

「その刃が陛下ご自身に向く可能性もあります」

「それも女神のご意志でしょう」

「あなたご自身の手も汚れましょう」

青蘭は思わず固く手を握りしめた。

体はまだ覚えている。人の体を断った時の感触を。頬に感じた血潮の熱さを。そして断末魔の表情かおも。

「とうに汚れている」

太刀を拵んだ時の感触を思い返すように掌を見つめながら、青蘭は薄く微笑んだ。

その笑みを目にした大神官はしばらく黙っていたが、やがてゆっくりと歩み寄ってきた。

並び立つようにすれば、大神官の方がずいぶんと背は高い。青蘭は顔をあげて、初老の男のなにもかも洗い流されたような面を見つめた。

大神官もまた臆することないまっすぐな視線を受け止め、そこにゆるぎないものを認めると小さく頷いた。

「分かりました。お預けしましょう」

そして、その日の夕刻。

参拝を終えて聖地を去る人々をのせた小舟の群れの中に、一艘だけ異なる空気を漂わせた一行がまじっていた。

もたらされたその報せは、一瞬にして室内の空気を重いものに変えた。

「蒼杞殿が軍団を率いていて南下を開始した」

届けられたばかりの報告書を読み上げたのは、寄州公里桂だった。寄州城の一角の司令室を兼ねた広間には、様々な意匠の鎧に身を固めた男たちが思い思いにくつろいでいた。

その顔ぶれは平均的に若い。彼等は先代の家長であった父や兄などを亡くしたばかりで、急遽跡目を継ぐことになった青年貴族たちがほとんどだった。その原因もまた共通している。新たな西葉王を自称している蒼杞による、肅清という名の殺戮の餌食となったのだ。

「どうやら明柎殿は本隊をゆるゆると進めながら、自分は先に国境地帯へ入り蒼杞殿と接触を図っていたようだ。いったん蒼杞殿と対立する姿勢をみせておきながら、どのようにしてか蒼杞殿をいにくるめ、再び手を結ぶことに成功したようだ。後顧の憂いのなくなつた蒼杞殿は、そのまま南下を決めたらしい」 若い当主達は無言のまま顔を見合わせる。主に寄州の近くに領地を持つ貴族たちであり、青蘭登極の報と共に寄州城に集まってきた。身内を蒼杞に殺された彼等は、正統な継承権をもつ青蘭に喜んで宝印を捧げたが、未だ女王その人との目通りはかかっていない。

「筋書きとしては最悪のものとなりそうだ」

里桂はそう付け加えながら、報告書を丸めて傍らの椅子に腰かけた青年に手渡す。

無造作に受け取ったそれに目を通すのは碧柎だった。その面にはどのような感慨も読みとれない。冷淡ともいえるほど落ち着いた様子で目を通し、付け加えた。

「おそらくは対立したように見せかけていただけだろう。吾等の動きを誘うための陽動だったのかも知れぬ　明柊ならばやりそうなことだ」

こともなげに言つてのける碧柊に、無言の棘が集まる。里桂と岑家以外の者たちは、碧柊が青蘭の夫に選ばれたことを知らない。

碧柊は国を追われた亡命者としか思われていない上、長年敵対してきた国の王太子でもある。反感の混じった視線が集まるのも無理はない。

そんな碧柊が西葉貴族に混じつてここに居り、当然のように里桂の傍らにあるのも納得いかないのだろう。手勢もなくここに混じっていることが、そもそもありえないと考えている者もいる。

「だが、想定内のことでもある。うるたえるほどのことではなからう」

明柊と共に幾多の戦いを切り抜けてきた彼は、誰よりも明柊を知っているともいえる。その付き合ひの長さや深さ故に、従兄が何をしでかしたとしても多少のことでは驚かない。蒼杞と手を結んで叔父である碧柊の父を始末し、味方のふりをして碧柊に刃を向け、今は偽王を祭り上げて西葉に向かっている。これ以上驚くことは難しくもある。

明柊の手の内をもつともよく知ることが出来る立場にありながら、今回の反逆を防げなかった非難も少なからずまじっている。蒼杞一人で今回のことが成せたわけはなく、変わり身の早さや手口の鮮やかさから、自然と首謀者は明柊だとみなされるようになっていた。だからといって蒼杞の残虐な行いまで彼のせいではないが、こうなれば同罪とみなされても仕方がない。まんまと国を追われた碧柊が平然としていることに非難が集まるのも仕方ないことではあった。「打つべき手は打つてあるのであろう、今さら狼狽する必要はあるまい」

碧柊にしてみればこの程度のことでは騒めくほうが不思議だった。あらゆる事態を想定して備える。その上で裏をかかれたのであれば

急遽手を打つ必要もあるが、一々動揺していたのではきりが無い。奇襲を得意とする翼波相手にさんざん煮え湯を飲まされてきた碧柊にとつては、比較的冷静な里桂でさえ甘く見える。

「戦においては吾に分がある。連戦連敗のそなたたちだけでは心もとないのは、少々頭に血がのぼつておつても分かる。」

冷淡な声音に嘲りのいろはない。ただ冷静に事実を述べるからこそ、聞くものの怒りを刺激する。彼のいうことは正しく事実であり、ただの亡命者と侮るには確かな実力を示してきている。何度も敗れ、敗戦の苦さを噛み締めたのは他ならぬ彼らだった。

碧柊がわざと彼らを挑発していることは、里桂にはわかった。考えのあつてのことだろうとあえて口を挟まない里桂の心中を察したように、碧柊は悠然としている。

「いったいどのようなようにして助力してくださいと？」

皮肉な口ぶりで碧柊をねめつけたのは、家紋を銀で装飾しただけの地味な鎧に身を包んだ青年貴族だった。

「戦とは水もの。その時々状況に相応しい対処の仕方がある。それを一々説明せよと？ あいにく講座を設ける気はない。」

碧柊はちらりと青年貴族を一瞥しただけで、相手にする気もないという態度をあらわにした。青年貴族はぴくりと眉を動かすと、うつすらと笑みを浮かべた。

「それではそのお手並みを楽しみにさせていただきますましょう。」

彼がそれ以上食い下がることはなかった。これが東葉であれば、もつと感情をむき出しにして食い下がってくるだろう。老獪な西葉と、国として未だに若い東葉の違いを碧柊も感じていた。

蒼杞と明柊が睨み合いになり、動けなくなると予想はしていたが、だからと

いつて碧柊たちも事態を甘く見て手をこまねいていたわけではない。明柊と共に幾多の戦いを制してきた碧柊は、もつとも彼をよく知っているとも云える。最悪の事態を予測していたため、打てる手は打ってあった。

寄州に集められるだけの兵を集め、さらに西葉南部の貴族たちがひそかに隠していた武器で武装した一団を李州侯が率いて登つてきつつある。

西葉の王統家はすべて青蘭を支持している。貴族もほとんどいっていいほどの数が同じ姿勢を示している。

唯一東葉による武装解除を免れた王家直属軍に対し、王統家貴族連合は総数では勝っているが、まだ全勢力が結集したわけではない。いまだに不利には変わらない。

西葉王家直属軍に明柊率いる東葉軍が合流すれば、事態はかなり不利となる。東葉南部の蘄州に潜んでいた綾霖による働き掛けで、東葉軍の内部離反をどれだけ促されるかにすべてがかかっていると、言つてよかつた。

大儀は青蘭のもとにあるとはいえ、薄氷を踏むような危うさは変わらない。碧柊はそれを思うと肝が冷えるよりは、腹が座るようだった。

明柊は国を滅ぼしてもいいとすら考えているのかもしれない。もし最終的な勝者が明柊となれば、国内がすみやかに治まるとは考えられない。翼波は虎視眈々と隙をうかがっている。おそらくは好機を逃すまいと攻め込んでくるだろう。そうなった場合の勝算は、いくら戦上手の明柊とはいえ高いはずはない。

碧柊は青蘭と共に国が平らかに安んじることを望んでいる。勝算がどうであれ、勝つことへの執着は明柊に勝っているはずだ。

「李州侯の到着はいつ頃になりそうだ？」

「早くて明晩。精鋭隊を先に向かわせてくれているが、戦局を大きく好転させる材料とはならないでしょう」

碧柊の問いに答える里桂の声もかたい。

「蒼杞軍を内部から切り崩すことができれば違ってくるのだがな」

「明柊殿が雪蘭殿を堂々と女王として担ぎ出したために、青蘭様の登極を信じ切れずに戸惑っているものも多いでしょう」

それは実際本当のことだった。東葉に嫁ぐために青蘭が翠華に滞



在していたことまでは誰もが知るところである。

それが騒乱のどさくさに紛れて翠華の王城を脱出し、山の背を越えて突如聖地において即位したと聞かされても、その真偽を問わずにそのまま鵜呑みにする者はまずいないだろう。大神官がその即位を認め、女神の眠る本殿で即位の儀が執り行われたからこそ、辛うじて信憑性は増している。それがなければ空言にすぎない。

## 終章 6

穀倉地帯は稔りの季節を迎え、黄金の海原となっていた。秋の雨はまだ続いている。

軒車のなかから静かに降り続くさまを眺めながら、青蘭はやや安堵していた。

雨は足場を悪くするが、それは両軍に共通することだ。少なくともこの雨では、収穫を控えた沃野に火が放たれることはないだろう。青蘭が聖地をあとにした時点では、まだ蒼杞が南下を開始したという報せは届いていなかった。夕刻に湖を渡り、聖地の対岸についたところで西葉王家の軍が動き出したことと知らされた。

明柊もまた、東葉軍が国境を越えればそのまま六華ではなく、寄州を目指すだろう。そのまま蒼杞軍と合流することは明らかだ。誰もがそれを無言のまま思い至り、重い沈黙のまま顔を見合わせた。

一行のなかには祥香や袁楊の他に、大神官成昊の遣使として、権神官の姿もある。権大神官は常に二人おり、大神官の補佐に当たるそのうちの一人を遣わしたということは、神殿が青蘭を正式な女王として認めたという証に他ならない。

青蘭は険しい表情で沈思しがちだった。気がつけば指先が太刀の柄に触れている。長かったようで短かった、あの逃避行の間に身につけてしまった癖らしい。得物が手元にあると、とりあえず落ち着くことができた。

今、青蘭は髪を無造作に束ね、男物を身にまとっている。外套の頭巾を目深にかぶり、その腰には太刀の柄がのぞいている。俯きがちにして黙っていれば少年に見えなくもないが、毅然と顔を上げると若い女性に違いない。

祥香ははじめて会ったときと比べて、青蘭の印象が変わったことを感じていた。それが何故なのか、傍で彼女を見ていれば一目瞭然だ。正式に即位し、気持ちの通じ合った相手を夫と出来れば、どの

ような困難も乗り越えていけるだろう。

青蘭が外套の下に佩いている太刀は、神殿から預けられたものである。神殿の根幹にかかわるものであり、この国と王家のはじまりに深く根ざすもの。それは、青蘭が即位の儀で手にした神刀に他ならない。

儀式のときには血に濡れたように見えた刀身も、実際に受取り抜刀してみるとごく普通の太刀だった。刀身の長さや反り具合などが古めかしい以外、これといった特徴はない。千年を超える時を経ているというのに、その刀身には曇り一つない。青味がかって見えるほどに冴え冴えとした鋼の輝き。

一緒に渡された鞘も簡素なものだった。なにかの皮をなめしただけの、黒一色の拵え。とても儀典用とは思えない実際さであり、実用本位としか云いようがない。

この飾り気のない太刀を見て、誰が神刀だと思うだろうか。そして、西葉王都にある、女神の盾もこれとよく似た作りだった。

実際に手にしてみると、それは不思議なほど青蘭の手によくなじんだ。あまりにしっくりくるため、彼女はむしろ違和感を抱いた。

太刀の長さは青蘭にぴったりだった。青蘭は特に大柄なわけではないから、もともと女性用に鍛えられたものなのだろう。

はじめにこの太刀をふるったのは誰なのか。この刃を身に受けた者は誰なのか。あの血糊は人のものだったのだろうか。

つつい考えこみそうになり、即位の儀で抱いた印象を振り払う。考えてみたところで分かるはずもない。この神刀が本当に女神のものなのかどうか。その真偽を図ることなどできない。

意味があるのは神刀として、神殿の神体として、長きにわたり祀られてきたことにある。それを“正統な女神の娘”である青蘭が持つことに意味にある。

青蘭が目に見えない権威なら、神刀は目に見える権威ともなる。

この劣勢をひっくり返すには、それが最も大きな力となり得る。あとはそのふるい方だ。

兄が進軍を開始したという報せに、青蘭は動揺しなかった。

聖地を先に発った碧柊が、蒼杞や明柊の動きを予測した内容は厳しいものだった。現状はその予測が当たっただけだともいえる。

あらかじめそれを聞かされていた青蘭は、碧柊の事態を読む目の確かさを噛みしめていた。彼は本当の戦上手は明柊だと繰り返し口にしていたが、碧柊自身確固たる力を持っている。

碧柊に卑下する癖はないが、自分自身を含むあらゆることをやや冷静に判断しすぎているのかもしれない。明柊の案を採用するかどうかを決めていたのは碧柊だった。それは全体が見えていなければ出来ることではない。

冷静な青蘭を、居合わせた袁楊は頼もしく感じていた。

峠の落石で碧柊が意識を失っている間、青蘭は一人でも見事に立ち回っていた。だが、今思い返してみれば虚勢も見え隠れしていた。それが露呈したのは東葉の王太子が回復してからだ。

あからさまに甘えるわけではないが、彼がいると力みの抜けた表情を見せるようになった。理由は明白だった。その結果が事態の妨げとなるわけではないため、特に誰も異議をはさみはしなかったが。そして、今の彼女はごく自然に落ち着いているように見える。女王として即位したことで意識を新たにしたのか、それとも恋人との絆を確かなものにした故に安定しているのか。

ともかく、悪い傾向ではない。

寄州侯を中心とした青蘭方も、かねてからの予定どおりに兵を進めていた。

蒼杞方との衝突までに、西葉南部からのぼってくる、李州侯率いる南部勢の到着が間に合うかどうかは微妙。

最悪の事態を想定しての布陣は、先行している南部勢の精銳の到着や南部勢本体の到着も、有効に使えるようにも配慮されていた。

平原の真っ只中にある寄州城は、守るには向いていない。蒼杞勢の動きを悟ると同時に、碧柸たちは軍を山城にうつしていた。

山の背からのびる支脈の一つ。広大な西葉の平原を分断するように横切る山々の頂の一つに、その山城は築かれている。さほど高い山ではないが、傾斜がきつく起伏に富んでいる。

さらにその麓には深い森が広がっている。砦の在り処を知ることが難しく、兵を森が隠してくれる。雨の多いこの季節に、その森を焼き払うことは難しい。

守るには易く、攻めるには難い。

森のなかは湿度が高く空気が冷たいが、雨の中、遮るもののない平野に天幕を張るよりはいくらかましだった。

西葉と東葉の間の戦いは長く続いてきたが、国境地帯と王都周辺をのぞくほとんどの土地は長く争いとは無縁だった。そのため、この城も古い時代に築かれ長く放置されてきた。

この戦いをあらかじめ想定していた里桂の指示の下、ひそかに手を加えられいくらかましにはなっている。それでも東葉のそれと比べればお粗末といわざるを得ない。

東葉では、一度も戦地になつたことがない土地であっても、西葉や翼波との国境近くには必ず砦や要塞が築かれ、常に戦いに耐えられるように整備されている。

常に東葉は東西の隣国と臨戦状態にあつたせいもあるが、西葉と

てこの百年の間東葉と戦ってきたのだ。碧柊とすれば怠惰と断ぜざるを得ない。

山城に入った碧柊は、とりあえず目につく点をいくつか改善させた。東葉王太子の差し出口に異議を唱える者もあつたが、理路整然とその理由を述べられるとそれ以上反対できるものはいなかった。

黙つてその成り行きを見守つていた里桂は、碧柊と二人きりになると苦笑まじりに尋ねた。

「果たしてこれで持ち堪えられましょうか？」

「持ちこたえてもらわねばなるまい」

碧柊は感情のこもらない声でそう返し、壁にもたれかかる。

腕を組んで室内を見回す。薄暗いのは雨天のせいばかりではない。湿気まじりの風が吹き込み、着込んでいるにも関わらず肌を粟立たせる。

むき出しの石壁は寒々しく、窓をふさいでいたはずの鎧戸も片方が失われている。城攻めとなつた場合でも、最奥のここまで敵の矢が届く可能性は低いため、修繕は後回しにされていた。

「城のつくりそのものは悪くない。だが、後世に加えられた手の方がまずい。西葉では築城技術が落ちたのではないか」

「否めませんね」

里桂は同意せざるを得なかつた。寄州城にしても、新しい建物の方が先にがたが来るような現状にある。

「しかし今はこれで臨むしかない。籠城戦が長引き、この森を焼き払われてじかに攻められるような状況になれば致命的だ。そうならぬように努めるしかあるまい」

「蒼杞殿は到着次第攻めてまいりましょうな」

「南部勢が合流する前に少しでも叩いておきたいだろうからな」

「それに明柊殿が加われれば」

「不利だな」

わざわざ言葉にするまでもないことを並べる里桂に、碧柊は怪訝そうに眉根を寄せる。

「と、皆、考えておりましような」

「そうでなければ正気とは云えまい」

現状の厳しさは日の目を見る明らかだ。それを認識できていないようでは問題外だ。そんなことに念を押ししてみせる里桂に、碧柊は納得できない顔をみせた。

里桂はその咎めるわけではないが、厳しい眼差しにふつと口元をゆるめる。

「やはり殿下は東葉の王太子でいらっしやる」

「故に西葉式の迂遠な物言いは分かりかねる」

「これは失礼」

里桂はにやりと笑い、王配に向き直った。

「殿下もお察しの通り、未だに西葉の者たちの認識はこの状況を受け入れられていないのです」

「

碧柊もそれを承知しているのか、無言のままにいる。

その沈黙を肯定と受け取ったのか、里桂は言葉が続ける。

「常に翼波と我が国との戦いにさらされていた東葉と違い、西葉は国土のほとんどが戦地となることもなく、戦時であってもどこか他人事のようにして過ごしてきました。春先の敗戦でも、敗れはしたものの、結局のところ兵力を失っただけで、貴族とて領地を失ったわけではありません。下々の人々の生活はほとんど変わっていないような状況です」

それがどういふことか分かりますかと問うような眼差しに、碧柊は小さく息をついた。

「……相変わらず他人事のままということか」

「そういうことです」

痛いところをつかれたように青年はわずかに目を眇め、視線を壊れたままの窓へと流す。こぼれた呟きは独り言に近かった。

「戦後処理が甘かったか……」

「しかし、それは理由あつての処置だったのでは？」

「そうだ　だが、明柊は甘すぎると反対していた」  
里桂にとつては初耳だった。

その甘すぎる戦後処理を取り仕切ったのは、他ならぬ明柊本人だった。すでにその時点で蒼杞と結んでいたのだろう。

甘すぎると非難しておきながら、さらにそれを骨抜きにする。明柊の意図はいつたい那边にあつたというのか。

「……」

「ともかく、この現状は変わらぬ。たとえそうであっても、このまま戦いに臨むしかない」

碧柊は強い口調で断言したが、その表情は浮かない。良い材料は一つもないように思われた。

それを感じとつてか、里桂も小さく息をついた。

「　士気を上げるのは難しいでしょう」

旗頭となるべき青蘭は聖地にある。彼女あつての戦いだからこそ、その身をもつとも安全な地にとどめることを決めたのは、青蘭ではなく碧柊たちだった。

あらかじめ予測していたことではあつたが、やはり痛手にはちがいなかつた。



青蘭達は寄州城へ向かっていた。そこへ碧柎たちが山城にうつるため移動を開始したという報せがもたらされ、来た道に戻ることもなくなってしまった。

雨が降りやむ気配はなく、軒車の青蘭達や騎乗の兵士たちに等しく打ち付ける。

祥香は青蘭に倣って兵士を装って男装し、権大神官も他の兵士たちと同じ衣装に身を包んでいる。が、彼等は馬に乗ることができないため、足の遅い軒車を用いざるを得えなかった。

「寄州にも山城があったのね」

重くなりがちな車内の空気を変えるように、青蘭は乗り合わせた袁楊に問いかけた。

寄州州内のこととなると、寄州公の義理の妹である祥香に尋ねるべきかもしれないが、通常、女性はそういうことには詳しくないものだ。

「そのようですね。さすがに王領内のことまでは詳しく知る術はございませんが、岑州にもいくつかございます」

「籠城用のものでしょう。いったいどれほど古いものなのですか？」

「国内が乱れていたのは200〜300年も前のこととなります。おおよそはその頃に築かれたものでしょう。岑州のものもそうですが、我が州では万が一の東葉との戦いに備えて修繕がなされています。提案なさったのは紅桂殿下でした」

袁楊は亡き伯父より十ほど年下だが、面識があったのだろう。言葉の端ににじむ感慨のいろに、青蘭は小さく息をついた。

「伯父上はどのようなお方でしたか？」

若い女王の言葉は事務的に響いた。それはあまり彼女らしいこと

とも思われず、袁楊は静かに探るように端正な顔を見つめた。

青蘭は薄く微笑んでみせた。化粧気もなく男装した姿は、即位のときよりもりりしく見える。

「温厚で聡明な方でした。自然と目を引き寄せられるような、だからといって華やかなわけではなく、泰然自若となさっておられた」

「……わが父とはまるで正反対」

青蘭はまるで他人事のように、父と対面した時のことを思い出していた。

父は決して粗暴だったわけではないが、温厚とも言い難かった。荒廃した雰囲気をもとい、万事に興味を失い、ただ惰性で生きていくようにも見えた。

父が望んで王位についたのかどうかは知らない。本来は伯父が継ぐべきものだったはずだが、その場合、青蘭の母は父の妻ではなく、伯父の妻となっていただろう。

もしそうなっていたら青蘭も雪蘭も生まれず、西葉もこのような事態にはならずにすんだのかもしれない。

これは果たして誰の責任なのだろう。

無能だった父のせい、それとも弟の能力を知らながらもその位を譲った兄のせいなのか、それとも正統な王太子にその権利を捨てさせた雪蘭の母のせいなのか。

試しにそんなことを考えてみて、青蘭は内心で嗤った。

考えるまでもないことだ。

悪かったと云えば、全員にその責がある。そしてそれを問われるのはその3人だけではない。

現状は確かにその延長にもたらされた事態ではあるが、それを何とかしなければならぬのは青蘭達だ。父も伯父もすでに亡くなり、蓮霞は感傷に浸って泣くだけの人だった。

けれど雪蘭と自分はそうではない。そうであってはいけない。

そこまで考えて、青蘭ははっとした。伯父が雪蘭を六華に送り込

んだのは、そのためだったのかもしれない。自分たちの尻拭いをさせるためともとれるが、おそらくはそうではない。

親の因果が子に報うのは、どのような場合でもあり得ること。

親と認めたくないような親であっても、自分の意志とは関わりのないところで起こったことであっても、結局無関係ではいられない。理不尽ではあるが、それが現実だった。

だからこそ、紅桂は娘を後宮でわびしく育つ姪のもとへ送り込んだのかもしれない。

父から顧みられることなく、王女として生まれながらそれに相應しく育てられることのない青蘭のもとへ、その環境を整えることのできる雪蘭を。

それは二人を泣くしかない存在しなかったのか、それとも自分が放棄した責任の贖いだったのか。

どちらにせよ、伯父がいなければ現在の事態はなく、彼の配慮がなければ今の自分も雪蘭もいない。

それだけで十分ではないだろうか。

「雪蘭は伯父上と似ていましたか？」

沈黙の末の青蘭の問いかけに、袁楊は小さく首を振った。

「残念ながらお目に罹ったことは一度もないのです」

「雪蘭は幼い頃岑家で育つたと聞きましたが」

「紅桂殿下はご令嬢を表にお出しになられませんでしたので」

「……そう」

青蘭は小さく息をついて背もたれに凭れかけた。何故だか拍子抜けしたように力が抜けてしまった。

袁楊は岑家の人間であり、紅桂のとも面識がある。当然雪蘭のことも知っているものだと思っていた。だが、通常、家格の高い貴族ほど女子が表に出ることはない。袁楊が幼い雪蘭を知らなくて当然だった。

脱力したことで、心のどこかに雪蘭と比較されているのでは、という緊張が常にあったことに今さらながら気づいた。

何故か涙がにじみそうになり、青蘭は視線を窓の外へ向けて目を  
眇める。

雪蘭を慕い憧れながら、比較されることを恐れてきた。いったい、  
自分の心の本当はどこにあるのだろうか、分からなくなる。

焦燥感にも似て、早く会いたいと思う。けれど、それは戦場にお  
いてとなるだろう。

互いに望んだ結果ではない。雪蘭は一番の被害者でもある。

けれど、果してそれが第三者に通用するだろうか。

「雨脚がまた激しくなりましたね」

隣にかけている祥香がそっと囁いた。

青蘭は「そうね」と呟き、じっと天を見つめた。再び雷雲が迫っ

ているのか、雨天の空は更に暗くなりはじめていた。

軒車は森の入口でとまった。

遠くからはなだらかな斜面が続き、その小高いいただきに山城の城壁が垣間見えていた。それは山の背から続く支脈の先端で、山城の築かれた尾根はそのまま延々と天然の屏風となっている。

軒車から降りた青蘭は空を見上げたが、そこには木々の枝葉に縁取られた雨空があるばかりだった。

森の奥へ細い道が続いていた。獣道のような、草木を掻き分けてつけられたばかりの道のようにだった。

青蘭はふと夏の森の逃避行を思い出し、わずかに目を細めた。あの時も雨が降ったが、これほど冷たいものではなかった。

ぬかるんだ道を歩く。泥の水たまりや木の根に時々足をとられそうになる。そんな青蘭以上に難儀しているのは祥香だった。

名門貴族の一門に生まれ、王統家に嫁いだ彼女が、自分の足でこんな道を歩くことはおそらく生まれて初めてなのだろう。

青蘭同様に男装しているが、青蘭の後に続くはずの彼女の声や息遣いはしばしば遅れがちだった。道すがら何度か振り返ってみれば、幹に手をかけて息を整えていたり、足元をとられて危うく転倒しそうになったところを介添え役の兵士に助けられたりしていた。

それでも祥香は青蘭と目が合うと、ばつの悪そうに微笑んで見せるだけだった。弱音も愚痴もその口からこぼれることはない。

青蘭にとって、彼女が同行してくれたことはこれ以上なく心強いことだった。

森のなかにはいると、雨に打たれる代わりに不規則に落下してくる滴の餌食になる。目深におろした頭巾や外套にも撥水加工はなされてはいるが、次第に水を吸っていくのは防ぎようがない。

緩やかな傾斜はじきに険しくなり、むき出しの岩や地面に手をかけて登らなければならぬところもあった。

息が上がり、汗が頬を伝う。全身に汗を吸った衣がはりつき、動きを妨げる。

青蘭は不快感に無意識に眉をひそめながらも、気づかわしげに振り返った袁楊には薄く笑んで首を振ってみせた。

ようやく山城の門にたどりつくくと、先行した者が知らせたのか、人だかりができていた。

登ってきた一行のなかには、小柄な姿が二つばかり混じっている。そのどちらかが即位したばかりの彼等の女王に違いないため、自然と視線が集まる。

青蘭はようやく屋根の下にたどりつけたことでほっとして、無造作に頭巾を後ろへおろし、目に入る汗を袖で拭った。それからようやく衆目の的となっていてに気づいた。

「陛下、これをお使いください」

人だかりの前には、彼等を抑えるように里桂が立っていた。

青蘭が面をあらわにすると恭しく腰を折り、傍らの者が手にしていた手拭を受取り差し出す。青蘭は小さく頷いてそれを受け取り、人だかりをちらりと一瞥した。人垣の背後に苦い顔の夫を目ざとく見つけ、思わず苦笑してしまった。

一見無表情にも思えるが、目が笑っていない。青蘭に対して苛立ちを抱えているのは明白だった。

後でもめることになりそうだと、辛うじて溜息を押し殺し、目下のところ里桂に従う。

青蘭が手拭を受け取ると、里桂はあらためて膝を折り、頭を垂れた。一瞬遅れてその場に居合わせた者たちもそれに従う。碧柊もそれに倣った。

青蘭はそれに一瞬戸惑いをみせたが、じきに婉然と微笑んだ。

ゆつたりとした仕草で臣下である彼等を見渡し、それから腰に佩いた太刀を抜いた。

曇りの無い刀身が、雨模様の午後にあっても鈍く光る。

「これは我が祖、女神が自ら手にした刃。我等が母なる神の加護と

ご意志はここに明らかです。共に闘い、吾等が“葉”に平穩と秩序を取り戻しましょう」

雨の静寂しじまに澄んだ声が響いた。

女神の太刀を思わせる言葉に、つられるように顔があげる者たちが続く。青蘭は彼等に静かな眼差しで応じ、ゆっくりと手にした太刀を高く掲げた。

山を登ってきたせいで上気した頬は活き活きとし、冷静だが力強い眼差しで白刃をみつめる姿は清冽であり、凜々しくすらある。

彼等は沈黙を守ったまま、新たな主となると少女を見つめ、そして再び頭を垂れた。

女神の娘自らがその御祖みおやの太刀を手に、彼等と共に国を鎮めるべく立った瞬間だった。

山城に詰めているのはそれぞれに軍を率いてきた、主だった貴族や王統家の者たちが多かった。

正当な王位継承者である青蘭を支持した者たちに、彼女はあえて礼を述べたりはしなかった。彼等の選択は葉の者として当然の選択であり、褒めたり感謝したりするようなことではない。

そのかわりに青蘭は誰にも平等に穏やかに微笑みかけ、彼等の言葉を受けとり参戦をねぎらった。

それが一通り済む頃には夕刻となっていた。

戦力の大部分を占める兵士たちは、山の中腹や裾野、森の中、王都六華の方角をにらむ平野にそれぞれ幕舎をはっている。雨をしのぐ術を持たぬものも多い。

青蘭はひどい疲労を感じていたが、そのまま山を降り道すがら兵士たちをねぎらって回った。

直接の主である貴族や準王族すら、声をかけられたことのない者が多い。

青蘭は自ら進んで彼等の間に入っていき、親しげに声をかけていった。

あえて化粧はせず、短い髪と男装のままの青蘭は、その美貌と相まって中性的な魅力をまとうて見える。

その後につき従う祥香は成熟した女性の美しさと、慎ましいが温かな態度を通した。

女神その人もかくやという風情の青蘭と、若い女性の存在にその士気は一気に高まった。

果たすべき役割をようやく終えた青蘭が、ようやく一息つくことができたのは深更も近かった。

山城に到着してから飲み物すら口にしていなかった青蘭は、用意された香草茶を一息に飲み干した。準備してくれていたのは祥香で、喉の渴きを見越したように冷まされていた。

甘くさわやかな香りに包まれると同時に、どっと疲労感に襲われ、青蘭は一気に脱力しそうになった。それをなんとか堪え、礼を述べる。

里桂は粗末なものしか支度できませんがと、一言断って簡単な夜食を運ばせるとさっさと下がってしまった。

室内に残されたのは青蘭と、数日前に別れたばかりの夫である碧柊だった。

碧柊は地味な衣装を身にまとい、腕を組んで壁にもたれかかっている。

一瞥も寄こさない冷たい横顔に、青蘭は無言で肩をすくめた。

怒っている。それもそうとう深く。

結局、青蘭は涼しい顔で食事を摂ることにした。

青蘭が食事を終えるのを待って、低い声が詰った。

「そなたが来るなどと聞いていないぞ」

「云えばお止になったでしょう。だからお知らせしなかったのです。すべて私の独断です」

青蘭は満面の笑みでそう云ってのけた。





< 112 >

青蘭は居住まいをただして碧柊に向き直った。

彼の苦情を突っぱねるつもりはない。誰が一番自分の身を案じてくれているのか、わかっている。

そんな心中が伝わったのか、碧柊もそれ以上声をとがらせることはなかった。

「よくよく話し合った上で、決めたことだと思っておったがな」

厭味をまじえる彼に、青蘭は申し訳なく思いながらも、案の定な言葉に苦笑してしまう。碧柊は不愉快そうに眉をひそめる。

「笑い事ではなからう」

「ごめんなさい、つい。あなたが相変わらず過保護なものだから」

青蘭は笑みを浮かべたまま詫びる。同じ指摘を何度も、しかも本人だけで他に幾人もから受けている碧柊は、苦虫を噛み潰したような顔で青蘭を見据える。

「里桂や袁楊も同意の上で決めたこと。過保護ではない」

「確かにそうですけど、あなたの言葉をきいていると、私的な事情のほうが勝っているようにも聞こえるものですから」

青蘭は悪びれることもない。怒りよりもばつの悪さのほうを上回ってきた碧柊は、深々とため息を吐いた。

「それは仕方なからう 惚れた弱みというものだ」

碧柊が目を細めやさしい眼差しで見つめれば、今度は青蘭の方がどきまぎと視線をそらす。それを予想していた碧柊はにやりと笑うと、形勢逆転とばかりににじり寄った。

空になった食器の置かれた卓子に両手をつき、その腕の間に青蘭を閉じめてしまう。

抱きしめられたわけではない。どこも触れているところはない。ただ、両腕の間に挟まれるような形で動きを封じられ、吐息がかかるほど間近に端正な顔が迫っていた。

青蘭は卓子の端に背骨が食い込み、痛みを感じるほど後ずさり、できるだけ目を合わせないようにしながら、なんとか毅然としていようとした。

「な、なんですか？」

「つれぬことを仰るものだ。少々鈍感でいらっしやるあなたにもわかりやすい言葉にしたつもりだが？　まだ言葉が足らぬかな？」

半ば強引に顎をとらえて瞳をのぞきこめば、勝敗はあっさりつく。青蘭は耳まで赤くして狼狽する。こういう甘い成り行きにはなかなか免疫がつかないらしい。それがまた可愛くてしようのない碧柊は、凶にのる。

「あとはいかようにすれば、ご理解いただけるかな？」

嬉々として聞こえかねない声をわざと低く押さえて囁き、その不意をつくように軽く唇をついばむように重ねれば、青蘭は硬直してしまふ。

それをいいことに抱き寄せられ、また唇を重ねられそうになり、青蘭はようやく我に返った。このあたりの体勢の立て直しの速さは、免疫がついてきた証かもしれない。

「こういうことをしてる場合ではありませんでしょう」

もっともな台詞に碧柊はいかにもあての外れた顔でがっかりしてみせる。

それでも行き掛かりの駄賃のように強引にもう一度唇を奪うと、怒る青蘭をあっさり解放した。

「続きは後程に」

「」

青蘭はこれ以上ないほど顔を赤らめ、怒りを顕にしたが、そうしたところでますます相手を喜ばせるだけだと、結局のところ諦めた。せめても抵抗として、これみがよしの大きなため息を吐いてみせる。

部屋の一角には、角材を組んだだけの素朴な作りの長椅子があった。

碧柊は体をひいて立ち上がると、青蘭の腕をとらえて半ば強引にその長椅子まで連行した。自分の隣に座らせたが、それ以上の接触はしてこない。

先程までの甘い空気は綺麗に失せていた。青蘭は彼の切り替えのはやさに戸惑いながらも、なんとか自分を立て直す。

「戦場に出向いてきた一番の理由は雪蘭殿だな？」

青蘭は小さく頷いた。

「必ず会いに行くからと約束したのです」

「……明柊に言付けた件か？」

溜息まじりにつぶやき、碧柊は視線をどこか遠くに彷徨わせる。

青蘭はその眼差しの行方をたどるように目線を動かし、その視線が北に向けられていることを悟った。

「ええ 明柊殿は確かに約束を守ってくださいましたでしょうから」

「雪蘭殿の同行はそのためばかりではなからう」

「それはそうでございます。けれど理由の一つでもあると思います、あの方なら」

なんだかともなかつた苓南の誓のことを思いおこす。

普段の言動からしてでたらめな人物だったが、何故か約束を守るといった彼の言葉は信じていいような気がしていた。

「なんだ、あなたはあれの言葉をいやに信じるのだな 何故だ？」

碧柊が目を眇る。青蘭はひやりとした。そう言えば、碧柊は誓にいた時から似たような言動をしていなかったか。

「あの……妬いておられるの？」

彼の凜気は、即位の儀の盾の候補を巡って里桂との関係を邪推されたころからも明らかだった。が、よくよく考えてみれば、それより以前に遡れることに気づく。逃亡途中の道中に傍から離れようとしなかったのは、互いの安全のためだったとしても、はじめて会った時から、青蘭を他の者の手に預けようとはしなかった。

はじめて会ったとき、青蘭は侍女だと身分を偽った。いくら雪蘭が王女の従姉であるとしても、王太子自らがあれほどいつかいの侍女にかまうことの方がおかしくはなかっただろうか。

碧柊は無邪気な妻の言葉が気に障ったらしく、わずかだが眉宇をひそめた。

「ああそつだ」

明確な肯定に、青蘭はしどろもどろになりながらも言葉を紡ぐ。

何故か、聞いておきたかった。

「あの……いつから私のことを、その……想ってくださいっていったのかと思って……今はこんな話をしているときではないのでしょうけど、ふと気になって。いつから、などということは意味のない問いなのかもしれません。苓南の皆にいた頃からそうだったのかしらと……」

「そのようなことは考えたこともないな。確かに無意味な問いかもしれないが、思い返してみればそうかもしれないな。なるべく女人を近付けぬようしてきた故、強気にかえしてきたそなたの反応が愉快だった。はじめから気に入っていたのだろう」

碧柊は自分のことをまるで他人事のように客観的に述べ、さり気なく青蘭の手に自分の手を重ねた。

「あなたはいかがなのか、お聞かせいただけような？」

碧柊の囁きに、青蘭はまた真っ赤になってしまった。

赤面したきり沈黙してしまった青蘭の、細い手に手を重ねた碧柊は薄い笑みを浮かべて言葉を待つ。

戦いは明日にも起こるだろう。

できるだけの手は打ってあり、あとは順次もたらされる覗見からの知らせから戦況を読み判断していくしかない。

この先、二人きりの時間を持てるかどうかは難しいだろう。今、こうしている時間があるなら、青蘭を少しでも長く休ませ、自身もそうすべきなのかもしれない。しかし、今はそれよりも少しでも長くこうしていたかった。

最後の逢瀬になるかもしれないという想いを、消すことはできない。

そつと髪に触れる。しつとりとした手触りは湿気を含んで濡れたように重い。水にさらした絹糸はこのような光沢を帯びるのだろうか。

青蘭はいつの間にか束ねた髪をとかれ、梳くように指をからめられていることに気づき、狼狽したように眼を瞠った。碧柊はその反応にからかうように目を細めただけで、それ以上触れて来ようとはしない。

青蘭はわずかに口を尖らせて目を逸らし、やがてぽつりと口を開いた。

「私は、西葉に行く前から、あなたのことは多少なりとも耳にしておりました。肖像画も目にしていましたから、はじめてお会いした時も一目であなただとわかりました」

「それで、吾は想像していた通りだったか？」

青蘭はちらつと碧柊を一瞥すると、また黙りこんだ。

碧柊はそつと身を寄せると、さり気なく肩に腕をまわして抱き寄せる。青蘭はそれに気づいているのかいないのか、おとなしくされ

るままになっている。

小難しい顔でしばらく考えた末に、戸惑いがちに、しかし訥々と語りはじめた。

「ずっとこれまでのことを思い返していました　あなたのことを温厚な方だとうかがっていたのですけれど……　そうでもありませんでしたわよね？　一言二言余計でいらっしやるし……　その、なんだからずいぶん強引な所もありだし……　私、どうしてもあなたのことを、その　想うようになったのか自分でも不思議に思えてきて」  
嫌味だとかあてこすりではなく、本気でそう思案しているらしい様子に、碧柊は慌てた。

「今さらそれはなかるう」

ぐいと細い肩を掴んで自分の方を向かせ、動揺した顔で詰め寄る。青蘭は納得のいかない表情で、夫の顔を見つめる。

「もう私と結婚なさったのですから、それでいいのではないのですか？」

「なにを……」

「葉の統一がなった後の正式な即位の儀でも、盾にはあなたを選びます」

青蘭は生真面目にそう念を押す。

碧柊は頭痛のしそうな想いで溜息をつき、妻の目をのぞきこんだ。  
「それは是非ともそうしていただかねば困るが　確かに吾は東葉王子としてあなたと政略上結婚する必要がある。だが、それとは別に、葉碧柊としては惚れた女性を妻にできたとはかり思っておったが？」

「それはそうなのですけど」

碧柊の縋るような思いの言葉を、青蘭はあっさり流す。碧柊はいきなりとんでもないことを云いだした恋人に、さらに言葉を重ねて迫る。それをみっともないとは思わなかった。

「いまさら気の迷いだっただと、云い出すつもりではなかるうな」  
「気の迷いだとは思っていませんけれど、なんだか　」

「なんだかとはなんだ？」

「なんだか、納得がいかないというか……」

一度は碧柊の言葉や行いを受け入れてくれた青蘭だが、それははじめて互いに想いの通じた喜びに乗じたどさくさまぎれともいえた。冷静に考えてみれば、そうあっさりと認められない思いもあるのだろう。

碧柊は後悔と狼狽に曝されながらもなんとか持ちこたえ、率直に詫びた。

「確かにあなたには色々嫌な思いをさせ、辛い目にもあわせた。それは詫びる。だが、許してくださいだったのではなかったか？ それとも、まだ根に持っておられるのか？」

「別に根には持っていません。ただ、あの状況であなたに惹かれたのが不思議な気もして……」

許す許さないという問題でもないらしい。事実、青蘭の声に怒りはみじんも感じられない。本当にただ不思議がっているらしい。

碧柊はそれを確信すると、正攻法を捨てることにした。

「あなたがそのように己の心境変化を不思議に思われるのも無理もないかも知れぬ。それは認めよう。肝心なのは、いくら納得いかなかろうと、実際に吾のことをどう思っておられるかということだ」

碧柊は深刻な顔で問いたです。

青蘭はわずかに首をかしげつつ、あっさりと肯定した。

「だから、気の迷いだとは思っていません、と」

「それは吾を好きだということか？」

「だから、そうです、と。先ほどからなにもあなたを好きでなくなつたとは一言も申しておりませんけれど」

「確かにそうだが、紛らわしい」

碧柊は心底ほつとした顔をみせ、肩を掴んだ手を背に回し、力任せに抱き寄せた。青蘭は彼のその表情に申し訳なくなりながら、そっと応じるように広い背に腕を回す。

耳朶にあつい息がかかったと思うと、生温かく湿った感触が這う。



青蘭は思わず身をよじったが、痛いほど抱きしめられているため、それはかなわなかった。

力が抜けそうになるのを堪えながら、吐息を何度か漏らしているうちに、それもふさがれる息苦しいような深い口づけの後に、ようやく解放される。

額への口づけを、目を細めて受けながら、青蘭はふと小さく笑った  
「なんだ？」

「いえ 先に言うておきますけれど、根に持っているわけではありませんわよ」

「 ということは、吾のことが……」

「 ええ、まあ……はじめて、あなたから口づけられた時のことを思い出して」

碧柊はばつの悪そうに口元を歪めて苦笑し、もう一度額に唇を寄せる  
「 できるだけ優しく。」

「 あれは口付けというより、口封じだったな」

「 ええ あの時はずっと怖くて混乱して……こんなに……」

青蘭は言葉の続きのかわりに、視線を落として碧柊の肩に頬を寄せた。

「 こんなに？」

「 ……云いません」

小さい声ながらもきっぱりと断言し、ぎゅっと彼の衣を握る。碧柊は目を細めて溜息とも小さな笑いともつかないものを漏らし、すぐそこにある白く柔らかそうな耳朶に唇をよせ、そっと甘く噛んだ。腕のなかに閉じ込めた細い体がぴくりと反応する。それに満足げな笑みを浮かべると、ゆっくりと唇と舌でそれを嚙る。

やがてやわらかく脱力した肢体が身を預けてくると、ようやく満足したように唇を頬へ滑らせ、そこでふと動きを止めた。

「 ？」

甘い熱に侵されたような動きの変化を敏感に悟ったのか、青蘭がそっと顔を離そうとした。それを反射的に髪に梳き入れた指先で封

じ、碧柊は溜息まじりにつぶやいた。

「吾より先にあなたに口づけた奴がおったな」

「え？」

「苓南の皆でのことだ 違うか？」

「……そういえば、そのようなこともありましたわね」

確かに頬にかすめるように、唇を感じたことがあった。それは明柊が碧柊を挑発するためにやったことだった。

いきなりなにを言い出すのかと思いつつ、彼がどんな顔をしているのか見たくなり、青蘭は身を離そうとする。その意志を察したのか、逆に強く抱き寄せられてしまう。

「そのようなこと、か」

「だって、あれは明柊殿がふざけておられただけのことだ」

「ふざけてであるうがなんだろうが、気に食わぬ」

そのいかにもむっとしたような、面白くないといった口ぶりに、青蘭は悟られないように小さく笑う。

「嫉妬、ですか？」

「ああ、そうだ」

それは自棄で云っているわけでもないらしい。

青蘭はたまらずに笑いだした。

「笑いごとではないぞ。あなたに触れて良いのは吾だけだ」

抗議するようにさらに強く抱きしめられ、青蘭は小さな声で「痛いわ」と訴えた。わずかに力が緩み、ほっとしたのも束の間、再び深い口づけを受ける。青蘭は小さく身を震わせ、心のままに身を委ねた。

雪蘭は4頭立ての軒車のなかで、揺れに身を任せていた。

扉に設けられた窓には幾重にも薄物がかけられ、ほの暗い光を通しながらも外界の様子を覆い隠している。

一度、通ったことのある道だった。だが、その時も窓は同じように覆われていたため、見覚えのある景色があるはずもない。それは西葉から東葉へと続く道のりだった。今はそれを逆にたどっている。はじめてこの道を東へ向かったときは、連れがあつた。その連れこそが主客であり、雪蘭にとってもすべての中心である青蘭だった。その青蘭は先に西葉に戻り、雪蘭も生国に帰ろうとしている。

青蘭を逃した時点で、もう二度と生きて会うことはないだろうと覚悟していた。一度は断念した再会もかなえられようとしている。その場所はおそらく戦場。それも敵として従妹の前に現れなくてはならないとは。

そんなめぐり合わせを、雪蘭は嘆いたりしない

青蘭が即位した時点で、自分の役割は終わるものと思っていた。それを明柊が逆手にとって利用するというのなら、雪蘭もそれに便乗するしかない。利用されるくらいなら、利用した方がいい。

雪蘭が偽の女王として振舞うことは、結果的に青蘭の立場を強固なものにするだろう。

一時的にとはいえ、青蘭の敵となり、その行く手を阻むことは不本意極まりないが、そうするほかないのであれば、その結果が彼女のためとなるようにするしかない。

決めてしまえば、あとは明柊に協力するだけだった。なるべく青蘭達の不利とならないように気遣いながらではあるが。

軒車には香露と狭霰も同乗していた。明柊は二人を雪蘭の身边から遠ざけようとはしなかった。彼女たちが亡き父紅桂の意を受けて

いることを、明柊はおそらく承知しているだろう。それでも放置しているということは、かまわないと思っっているからなのか。彼女らを甘く見ているとはとうてい思えない。

やはり明柊という人間がなにを考えているのか、読むのは難しい。雪蘭はそういったん結論付ける。

行程は強行軍だった。明柊は雪蘭に体調を問うものの、最低限しか休もうとしない。それでも先に先遣隊を率いて西葉に入り、蒼杞側との交渉の席についたりしており、明柊自身も過酷な状況にある。夜になり、昼から重苦しいほどの曇天だった空から大粒の雫がふりはじめた。風は横殴り、雨粒が軒車だけでなく天幕や馬、あらゆるものを叩きつける音が風の唸り声にまじった。

嵐となりそうだった。行軍の足を止め、休憩をとることになった。雪蘭のために簡単な天幕が張られ、折りたたみ式の寝椅子が設えられる。ようやく足を伸ばせ、雪蘭も珍しくほっとした表情を浮かべた。

雨に混じり、明柊からの使いが香露に面会を求めた。雪蘭に断って天幕を出た香露は、その間際に少しでも休むよう促していった。戻ってきた香露は、わずかな間だったにも関わらずびしょ濡れになっていた。狭霰が黙って差し出した手拭を受け取り、横になった雪蘭の頭もとで膝を折った。

天幕の隙間から吹き込む風に、小さな円卓の上の蠟燭に点された焰が大きく踊る。

「苓公は正式に蒼杞殿と手を結ばれたそうです」

「正式に、ね」

皮肉な口調で繰り返し、雪蘭はゆっくりと身を起こした。それを香露はとどめようとしたが、雪蘭は目顔でそれを拒んだ。

「なにを今さら、というのも莫迦らしい」

表向き、蒼杞と組んでいたのは碧柊だということになっている。葉の慣習として大罪である親殺しを行い、東葉王位をねらったとされる碧柊。彼が西葉へ落ち延び、正式な女王を騙る偽の王族雪蘭

と結び、東と西の王位をあわせた“葉”の王位篡奪をはかっている  
とされている

それを阻止するという名目で、明柊は自分の正統性を主張している。そしてなおかつ、雪蘭を正統な女王である青蘭だとして推している。青蘭が碧柊との婚儀のために東葉に入ったことは公にされている。

突如、西葉・寄州の聖地に現れた“正統な女王”。翠華にいたはずの“青蘭王女”が何故、寄州にいるのか。それも父親殺しであり王位篡奪をねらった碧柊と共に。

それをどこまで東葉貴族たちは信じているのか。そして、国を裏切った碧柊と結んでいたはずの蒼杞と、今度は彼の罪を問うはずの明柊が提携することを、彼等は受けいれられるだろうか。

「貴族たちの反応を」

「今、調べさせております」

明柊は蒼杞との交渉を、彼等に知らせずに先に西葉に入っていた。

動揺が広がっているだろうという予想はつくが、弁の立つ明柊のこと。うまく丸めこんでしまうだろう。先にその話を切り出して、彼等の了解を得ていたのでは時間がかかる。事後の承諾を得る形にしたのは、考えた末のことだろう。

眉をひそめる雪蘭に、香露がさらに声を押さえて付け加える。

「連絡のつかぬ視見かきみがあります。翼波の動きを青蘭さまにお知らせする役目を負っておった者で、その報が届いていない恐れがあると、さつと雪蘭の面が曇った。それがもつとも気がかりなことであり、一刻も早く知らせておきたいことだった。それが届いていないとなると

「綾霖殿には？」

東葉で潜伏し、東葉南部の貴族をまとめなるべく動いている綾霖にも同じことを知らせてあったはずだった。

「それも、今、調べさせております」

香露の顔は晴れない。おそらく、そちらとも連絡がつかないのだらう。

「急ぎ、二人に連絡を」

「ご安心を。それが判明した時点で動いております」

雪蘭はこわばった表情のまま、小さく息をついた。

「おそらくは苓公の手によるもの」

「……否定はできません」

「油断していたのは私の方だった」

雪蘭は苦い想いでそう呟き、口をかたく引き結んだ。

風はいっそう猛々しく狂い、灯りが揺らぎ、影が歪んだ。

遠慮がちに雪蘭を揺り起したのは、香露だった。

熟睡できないままうとうととしていた雪蘭は、はっきりしない意識のまま眼をひらいた。間近にはほのかな蝋燭の灯りに照らされた香露の、遠慮がちな顔があった。

「如何した？」

ゆつくりと身を起こすと、それを傍らから香露が手を貸す。雪蘭はそれを拒むように手で押しとどめ、顔におちかかる髪をかきあげた。その物憂い仕草の裏には、疲労とはつきりとした覚醒がのぞく。主の熟睡していなかったことを悟り、香露はわずかに眉をひそめる。

この状況では熟睡などでできようはずもないが、雪蘭のそれはずっと続いているそれはあの夜、彼女が従妹だと偽ったときがはじまりだった。

もともと寝起きの悪さで、従者に手こずらせるような主ではない。寝つきの悪さでぐずることもなければ、いつまでも起きてこないということもない。一言でいえば手のかからない子供だった。それを香露は主の大人びて早熟な聡明さに由来しているものだと思っただけだが、実際はどうだったのだろうか。

香露や狭霰にはもちろん、母親にさえ甘える子供ではなかった。ただ一人を除いては。その人は彼女が幼いうちに世を去ってしまった。それ以来、彼女が誰かに甘えたことなどあったのだろうか。

従妹である青蘭王女も、感情を殺してじつと堪えるような子供だったが、その様子はある意味雪蘭とは逆だった。王女は甘えることを知らない子供であり、雪蘭は甘えようとはしない子供だった。

それを裏付けるように、王女は雪蘭と打ち解けるにつれて次第に子供らしさをみせるようになったが、雪蘭はそれを受け入れるだけ

で、香露や女官たちに見せる態度は少しも変わることはなかった。

雪蘭のみせる子供らしさといえ、青蘭と一緒にいるときはなにかとお姉さんぶってみせることくらいのもだった。そして、それは二人が別れることとなった日の、その別離の直前まで変わることはなかった。

時折、この従姉妹たちはどちらかの寝台に潜り込み、おしゃべりに花を咲かせた末に仲良く寝入ってしまうことがあった。そんな朝は二人ともになかなか起きださず、起こす役目の者だけが少女たちの安らかな寝顔を目にする事ができた。香露はそんな役得を長くひとり占めしてきた。

そんな想いが去来し反応の鈍った従者に、雪蘭はわずかに眉をひそめて同じ問いを繰り返す。

声に苛立ちはないが、訝しんでいるのは確かだった。

「失礼しました。もう出立するそうです。軒車にお移りください。少しでも休んでいただけるように支度も整えました」

「まだ深更か？」

「はい。夜明けまではまだしばしあります」

「そう」

雪蘭はふつと軽く息をつくと立ち上がり、そのまま天幕を出た。雨はまだ降り続けているが、その勢いは衰えている。天幕のなかにいれば分からなかった。

しつとりと肌にはりつくような小雨に目を細めて、雪蘭は立ち止まった。

この辺りはすでに国境地帯のはずだった。

天に光なく、地には影ばかりが落ちる。霧のような雨の中、揺らめく火影は軍のものばかり。遠くに街明かり一つ見えない。

元々、国境地帯は地味の豊かな牧草地帯だった。それが恒例行事のように繰り返される戦いのたび焼かれ、荒らされ、血が流され。もはや常に住みつこうとする者はいない。

国境沿いの町や村は高く厚い塀に囲われ、なにかあれば息を潜め



て嵐の過ぎるのを待つばかりの暮らしを余儀なくされてきた。

「雪蘭さま？」

濡れるにもかかわらず動こうとしない雪蘭に、香露がそつと声をかける。

「嵐は去った。そして、この時刻の出立　　戦場はいずこに？」

「おそらくは奇州となるでしょう」

「奇州　　青蘭もそこにいる」

やっと再会がかなう。喜びは微塵もなかった。

それからは休みといっても小休止のみで、強行軍が続いた。

さすがの雪蘭も疲労困憊し、がたがたとひどく揺れる軒車のなかで眠りについていた。

軍の大半はすでに奇州入りした明柎のあとを追い、雪蘭たちよりはるか先を進んでいるらしい。そのあとを追いかけるのは、“女王”を守る役目をおった一部隊だけだった。

女王の存在は軍の士気にかかわるため、遅れているとはいえ悠長にかまえているわけにもいかない。

守備隊を指揮しているのは、貴族の一人だった。彼がいかにも申し訳なさそうに強行軍を詫びるのを、雪蘭は軒車のなかで無言のまま聞いていた。かわりに香露が返事をすると、彼はかすかに失望したような表情をみせる。

直々に言葉をもらえはしないかと期待していたのだろう。

雨は依然降り続けている。

軒車の屋根や窓をたたく音に耳を傾け、目を閉ざし、眠っているのか定かでない雪蘭に、香露がそつと耳打ちする。

「好機ではございませんか？」

雨天の夕暮れ。紗の蔽いに外界と遮断された車内は暗い。

滑らかな天鵞絨の座席。振動による苦痛を最大限和らげるように

設計されてはいるが、その疲労を完全に防ぐことはできない。

雪蘭はいくつも積まれたクッションにもたれかかり、自分の腕を枕にして目を閉ざしている。

白い頬におちる疲労の影は濃い。静かな呼吸は、眠っているものかどうか見分けることは難しい。

香露はじつとその秀麗な青ざめた面をのぞきこんでいたが、睫毛一つ動くことはなかった、

やがて諦めたように彼女が自分の席に戻ると、雪蘭は小さく息を押しだした。

それから雨がやむことはなかった。

国境を越えると、一転進路を南に変えて山の背の麓沿いに寄州を目指す。

ようやく帰国した雪蘭にとって、悪天候の暗い風景は、懐かしさを感じられるものではない。

8歳で六華の王城に入るまで、雪蘭は山の背の麓の岑家の城で育った。

雪蘭自身は婢の母を持つため、卑腹の生まれとして王族でも貴族でもない。王族の父に庇護され、その手で養育されたため、高位の貴族の子弟と同じ環境を与えられたにすぎない。

岑家の奥庭からも、万年雪をいたたく白い頂が見えた。それが青い空に映える日もあれば、灰色の厚い雲に覆い隠され見えない日もあった。

そんな山々を仰いで暮した頃の記憶はすでにおぼろ。

王城・奥の宮から山は見えなかった。高い塀に閉ざされ、王都の様子すらほとんど見たことはない。

故国と聞いて思い出すのは、奥の宮の狭い庭園と、父と共にみた蘭の記憶。

そのくらいのものだ。

荒天に隠された尾根の姿を記憶のなかに求めながら、雪蘭はそんなことを思い出していた。

その道中にも、雪蘭のもとには密かに青蘭側の動きが知らされていた。

聖地にとどまるかと思われた青蘭が、ひそかに聖地を出たという報告に、雪蘭はかすかに眉をひらいた。

「やはり行先は……」

香露がわずかに顔を曇らせる。

「一つしかない」

言葉少なに断じた雪蘭の顔を、香露は案じるように見つめる。

「覚悟していたこと　それに、これは良い知らせでもある」

青ざめた唇が淡々と言葉を紡ぐ。

「良い、ですか？」

「そう、これは良い報告　私はあの子の力になれる」

雪蘭はまるで自分に言い聞かせるように呟いた。

香露が好機ではと囁いた時、それは雪蘭が一番よく分かっていた。

明柊のもとから逃げ出し、偽の女王としてではなく、雪蘭として

青蘭のもとへ駆けつけることもできた。

何故、それを選択しなかったのか。

あの時はそれが最善の策のはずだった。

戦場となるであろうその地に到着したのは、深更の頃のこと。

なだらかな平野をゆるやかに見下ろす高台に、陣は敷かれていた。その遠く向こう側には山の背の支脈が屏風のように伸び、その末端の山城に敵方はこもっているという。

雨はいっこうに降りやまず。やがては濃い霧まで伴い、その向こう側にあるという敵の陣地までは、夜の闇を透かし見ることは到底叶わなかった。

戦端はまだひらかれていなかった。開戦を控えた緊張感はびりびりとした空気となつて張り詰めている。

ようやく戦場に姿をあらわした“妹”に、蒼杞は休む暇も与えず呼び付けた。今や東葉の“女王”である彼女が“西葉王”である蒼杞を訪ねる事に、東葉貴族たちは騒然となった。

女系相統を続けてきた王家では、王よりも女王の方が高位とみなされる。それは女王から実権が奪われてからも変わることはなかった。

建国以来百年、東葉では東葉王家の非正統性を証明するかのよう  
に、一人として王女は誕生していない。政争に敗れた西葉王女や王  
統家の姫の血をとりこんでも、それは同じだった。

それだけに、東葉貴族の女王への憧憬は一方ならぬものがある。  
雪蘭の演じる青蘭王女は、彼等がもつとも望んだ葉王家の直系。

女神の娘、その人だった。

女王をいただくことは、国を挙げての宿願ともなっていた。

ようやく彼等の上に君臨するはずの“青蘭女王”が、兄とはいえ、西葉のたかが“王”に呼びつけられるなど。彼等とすれば言語道断ともいえる。

色めき立った彼等の反応は、明柊にも予想はついていた。

内心では東葉を一国としてすら見なしていないであろう蒼杞に、そんな事情が理解できるわけもない。たとえ説明を試みたところで、報われる筈もないだろう。

戦に敗れ、さらに明柊と結託して故国を裏切らなければ何も手に入らなかったはずの事実は、蒼杞のなかでは都合よく処理されてしまっており、そのままの現実をみることはそもそも不可能に近いともいえる。

それらも含め理解している明柊にとって、そんな事態も難局とはいわないのだろう。

彼はうまく蒼杞を言い包め、対等な東の女王と西の王としての対面をとりつけた。

両者の陣地の境に天幕が急遽用意され、互いにわずかばかりの従者をつけて対談する。それを両国の軍が遠巻きにする。王家の自軍しかもたない蒼杞に対し、東葉北部の貴族たちの支持をとりつけた明柊の軍のほうが多かった。

「よくぞ、戦場まで自らお越しくださった、東葉女王にしてわが妹よ」

戦局は有利とも云えるため、蒼杞には余裕もあり機嫌も良かった。王家伝来の鎧兜は、彼の優美な容姿をりりしく飾り立てる。

雪蘭は優雅な仕草で妹としての礼をとった。対等の王位に着くものとしてではなく、兄妹の礼節を優先したことに、蒼杞は明らかに気をよくしていた。

王家の伝統を守り沈黙する雪蘭に代わって、夫である明柊が言葉を返す。

儀礼的なやりとりも明柊が介入すると、それ以上に効果を発するらしい。

蒼杞をうまくあしらい、なおかつ親近感まで抱かせる彼の弁舌に、雪蘭は内心呆れながら耳を傾けていた。

開戦は曙光と同時に決まった。細かな手筈はすでに蒼杞と明柊の間で話し合いがついていたらしい。

李州公桂貴率いる西葉南部の貴族や王統家の軍が迫りつつあることは、蒼杞たちもつかんでいる。彼等が到着するまでに相手を叩く必要がある。

桂貴率いる軍はこの状況を逆転させるほどの大軍ではない。せいぜい、互角に持ち込めれば良いところだろう。

どちらにせよ、少しでも有利なうちに相手を叩く必要があることは、蒼杞にも分かっていた。

会見が終わると、夜明けまでの一時、偽の夫婦は二人きりの時間を持つことになった。

遮るものがない野外にはられた天幕をたたきつける、雨に容赦はない。激しい雨音に雪蘭はまるで何かを聞き分けようと耳をすましているようだった。

雪蘭は疲れた顔で息を吐いた。そつとけどられぬように押し出したそれを、明柊は耳ざとくききつける。

「一時とはいえ、体をお休みなさい、陛下」  
天幕の中には簡素な折畳みの椅子が、座り心地を配慮して置かれていた。

明柊はそつと諭すように雪蘭の肩に降れ、力加減はしながらも無理を言わず座らせる。雪蘭も逆らうことはせず、おとなしく従った。

「せつかくお膳立てさせていただいたのに、かいのない方ですね」

明柊は雪蘭の細い肩を抱くようにして身を屈め、笑みを含んだ声で耳打ちした。雪蘭は薄い笑みを浮かべて彼の手を払った。

「私がのるとは思っておられないでしょうに」

「男の心遣いをむげになさるものではありませんよ」

「あくまで心遣いとおっしゃるおつもりなら、そういうことにおきましよう」

「相変わらずつれないお方だ」

むしろ嬉しげにも聞こえるその響きに、雪蘭は半ば呆れたような曖昧な笑みを浮かべる。

強行軍や蒼杞との対面で、疲労の極みにあるといってもいい。明柊の戯言の相手をする気力はほとんど残っていない。

雪蘭の生気のなさを明柊はどうとらえているのか。苛むつもりか、それともいたわるつもりなのか。

いつもはある種の威厳と伶俐さを潜めている、雪蘭の漆黒の瞳が虚ろに己を映し出す。

力のないその双眸を見つめた末、明柊はその椅子の端に浅く腰掛け、華奢な肩をごく自然に抱き寄せた。

雪蘭は何故か抗う気になれず、おとなしく身をまかせた。

半端な座り方のせいだけでさえ身長差があるのに、さらに低いところに頭がくる。広い胸元にそっと頭をよりかからせるようにして、雪蘭はじっとしている。

その表情までは見えないが、体を強ばらせることもなくゆったりと身を任せている。明柊は抱き締めるわけでもなく、いつものようにぶざけた調子でそれ以上に触れてこようとはしなかった。

夜はいつまで続くのか、知れない。天幕を叩く甘音が止むことはなかった。

飽くことなく髪を撫で続ける武骨な指先。

ただ、そっと寄り掛かるだけのわずかな温もり。

他者の熱を腕に抱き、抱かれていれば、遠い記憶が呼び覚まされる。

遠い日。凍える夜。凍りつくような夜の庭に、従妹はいた。

あえかな星の瞬きさえも氷片となり、地上に降り注ぐような深更。薄くひらいた唇の隙間から、押し出される息は細く。震えの止まらない体は、果たして寒さのためだけだったのだろうか。

寒さのあまりかじかみ、自ら動くことさえままならなかった従妹をなんとか自室に引っぱりこみ、辛うじて温もりの残る寝台に引き上げた時には、すっかり息が上がっていた。

一つの年の差は、大きいようできて、それほど違うものではなかった。

もっと小さくて華奢だとばかり思っていた従妹が、実は自分と大差なく、しかしこれ以上はないというほどに震えている。

歯の根はあわず、目を合わせることもできない虚ろな眼差し、指先は腕も足も本当に氷のごとく冷え切っていた。

人は寒さで死ぬこともある。それは父から聞かされていた。

山の背を超える時、夏であつても油断したところを悪天候に見舞われれば、凍死することもあると。

このままでは従妹は死んでしまうのではないか。

大人を呼ぶという知恵も働かないまま、ただ不安と恐怖に耐えて凍りついた体を抱いて明かした。

氷を抱くようだったその冷たさが消え、温もりに知らず知らずまどろんでいた。その翌朝、同じ寝台に従妹の笑みを認めた時、雪蘭



はそれまで感じたことのない感情に包まれた。

父や母に感じる想いではなく、岑家の義理の両親や兄弟に感じるそれでもなく、もっと近しく血を分けあったような親近感。

一人っ子の雪蘭が、兄弟というものを本当の意味ではじめて感じた朝だった。岑家の養女となった雪蘭には義理の兄弟も数人あるが、主筋である彼女との間には常に遠慮が伴った。

父や養家に守られ、王城に入ってから香露たちに助けられてきた雪蘭は、誰かを守りたいという気持ちを抱いたことはなかった。守られるのを当然のこととしてきた少女が、はじめてそれを感じたのが従妹の青蘭だったのだ。

それ以来、雪蘭はその思いを守り続けてきた。

降りしきる雨の向こうに、その青蘭がいる。開戦を控えた緊張と悲壮感の漂うこのとき、彼女のそばには夫となった碧柊という人がいるのだろう。戦いの行く末いかによっては最後の契りともなる時を噛みしめているのかも知れない。

雪蘭は碧柊という人をそれでしか知らない。

春の木漏れ日のもとで、肩をよせあつてのぞきこんだ肖像の細密画。確かにいわれてみれば明柊の顔立ちは、擦れつつある彼の記憶の印象と重なるような気がする。しかしその印象は正反対と違っていいほどに異なっている。

どちらが大切な従妹の夫として相応しいか。

碧柊という人物は知らないが、明柊のことならば短い間ではあるが傍らでみてきた。分からないところの多い人物ではあるが、それでも青蘭の夫と仮に考えてみる。

これだけの事態を仕掛けたその才覚と手腕。軍事にかかわる才もあると聞く。その器だけをみれば、女王の夫に相応しいといえなくもない。だが、彼の性向を考えれば、裏で糸を引く策略家の方が向いているように思われる。

本音のしれない言葉と表情、人を食ったような態度。人を翻弄することに楽しみを見出すような男だ。

苓南の咎でのごとを、この男はほとんど語らない。ただ、思わせぶりなことを口走るのみ。それだけでも、ある意味純朴な青蘭が目を白黒させている様子が目に浮かぶようだった。

めったと動じることもなく、冷静沈着な自分を自覚している雪蘭とて、気がつけば振り回されていることすらある。

碧柊という人は、明柊という厄介な従兄をどう考えているのか。知りたい気がするが、果して彼の人と言葉を交わす機会などこの先あるのだろうか。

誰もがこの男に振り回され、迷惑していることだけは確かだった。こんな事態になってしまい、ついに碧柊という人を知らないままだが、それでも青蘭の相手が明柊でなくてよかったのだろう。

そして、青蘭のふりのしている自分の隣には明柊その人がいる。あの時、入れ替わらなければ彼の隣にいるのは青蘭本人だったはずだ。

皮肉な成り行きに、雪蘭は小さく嗤った。

雰囲気のささやかな変化に気づいたのか。髪を撫でる彼の手がふと止まった。雪蘭もそれに気づきながらも問いかけることはしなかった。

ひととき強い風が吹いたのか。

天幕が激しく波打つ。嵐のなかでの会戦は、いかなる結末にたどりつくのだろうか。

荒れ狂う風と雨に指一つ動かすこともなく。肩をわずかであろうとも震わせることもない。

そんな雪蘭に、明柊はその距離はそのままにゆつくりと口を開いた。

「どちらにとっても良い結果とはなりそうない天候です。それでもあなたはここにいらっしゃるおつもりか？」

「そのために来たのですから」

なにをいまさらと珍しく雪蘭の方から逆に揶揄する。

明柊の言葉に感傷はうかがえないが、ここへ来させようとせず、

またとどめようとしない言葉の繰り返しは、彼にしては珍しいように思われた。

「何故、そこまでいとこ殿のために体を張ることがおできになるのですかな。確かにあなたのだいとこ殿は愛らしい方でいらっしやうたが、まさか男女の情でもありますまい」

「そのお言葉はそのままあなたにお返ししますわ」

雪蘭はかすかに笑みを含んだ声でそう返した。

それは揶揄なのか、それとも別の感情か。雪蘭自身にも判然としなかった。

「おや、俺をあなたのお仲間に加えていただけののですか。それは光栄なことですが、残念ながら辞退させていただきますよ」

「あら、残念ですこと」

少しも残念そうに聞こえない声音に、明柊も低く笑う。

「このようなことをして、果てにあなたがなにを得るといいますか？」

「なにかを得るためではありません。が、強いて言うなら自己満足でしょう。しよせんは私が自分を満足させるためにしていること。それは明柊殿とて同じでは？」

「俺の場合は楽しむためですよ」

「どのように？」

「さあ……楽しみ方にはいろいろありますからね。それに俺はうまくやればすべてを手にすることができると。東と西の“葉”のすべてを」

「……それが本当にあなたの望みだと？」

平淡な呟きに、明柊は体を放して正面から雪蘭の顔をのぞきこんだ。

白い顔には疲れがにじんでいる。しかし、明晰さは失われていない。

秀麗な輪郭をそつと指先がたどっても、彼女は嫌がりはしなかった。苓南の砦で似た顔立ちに少女と出会った。くるくると表情を変

えていた彼女とは異なり、彼の“妻”はめったと感情をのぞかせることはない。その点、似たもの“夫婦”とも云えるのかもしれない。

「ずいぶんと俺のことを買い被ってくださってるようですね」

「そういうわけではありません。いい意味で云ったわけではありませんから」

「そうでしょうね。そうでなくては、あなたらしくない」

「私らしい？」

「そうでしょう。俺に情をうつすなど、あなたにはあってはならないことだ」

薄い笑みを浮かべて囁かれた言葉に、雪蘭はわずかに目を瞪る。

何度か言葉を紡ごうとかすかに唇をふるわせた末、ようやく押しだした声はかすれていた。

「……ばかなことを」

嘲笑したつもりだが、笑えていなかっただろう。

「そう、ばかなことだ」

明柊はそう繰り返し、わずかに目を細めた。これまでになく優しい表情に、雪蘭は言葉を失う。呆然とする雪蘭の頬を、柔らかく少しざらついた感触がかすめていった。

蓄積した疲労のためか、彼の唇はひどく荒れていた。

闇そのものが嵐であるかのようだった。鎧戸を叩く雨音は容赦なく、平原をざわめかす風は山城をゆるがせる。

青蘭は肩で息をしていた。体を支配する感覚は余韻を残し、薄れつつある。未だになじみのある感覚ではないが、自分でも戸惑うほどの速さで体はなじみつつあるらしい。

空気を取り込もうと上下しようとする胸と腹部を阻むのは、遅しく引きしまった体だった。鍛錬を欠かしたことのない武人の肢体が、そんなこととは無縁の華奢な体と同じか、それ以上に荒い息を吐いている。

うつすらと汗をかき、息を弾ませる体にのしかかる重さは重苦しいが愛おしくもある。さきほどまで固く絡ませあっていた指先が、限界の訪れと同時に力を失っている。

極限を超えてもなお、これ以上彼女の体に重みをかけないようという気遣いか、体を支えようとした遅しい片肘を汗が伝っている。それはつい先ほどまで、なにがあっても逃すものかときつく彼女の体を抱きしめていた腕だった。

荒波に翻弄されるような感覚にさらされ続け、すぎるように伸ばした細い腕はまだ彼の背にとどまっている。

二人分の汗を吸い、わずかに湿り気を帯びた寝具は生ぬるい。

細い体に覆いかぶさったままの青年もまた、胸を大きく上下させている。

空を見つめていた瞳がやがて焦点を結ぶ。ようやく青蘭はぼたぼたと頬を濡らす雫が、自分のものでないことに気づいた。

のしかかる遅しい肩。その筋肉の隆起をたどる汗。それが彼女の上気した白い頬に落ちかかっていた。彼は青蘭の肩口に顔を伏せるようにして、未だに荒い息をしている。少し首を動かせば、乱れた髪とうつすらと青い髭に覆われた頬が見える。

青蘭は背に回して腕をそつと下ろすと、その頬を伝う汗を拭うように指を滑らせた。

碧柊はそれに気づくと顔を上げ、間近にある青蘭にそつと微笑んだ。その息は未だに弾んでいる。熱の冷めつつある白い頬に軽く唇を寄せ、それからそつと彼女のその手を取り、手首の内側にも口づけた。

やや荒れた唇が手首を伝い、生温かいものが這う。そうする間、碧柊は目を細め熱のこもった眼差しを青蘭に注いだまま。いったん冷めかけていた熱を帯び戻すような、艶めいたいろに青蘭はたまらず目を逸らす。

碧柊はそんな彼女の心中を察したように唇を歪めると、からめていた指を離してかわりに顎をとらえ、唇を重ねた。さらに薄い背に両腕をまわして抱きしめる。それまで遠慮がちだった体の重みが一気にかかり、まだ息の整わない青蘭は唇を塞がれたまま苦し紛れに抗議するようにその腕を叩いた。彼は華奢な体を抱きしめたまま、くるりと体の位置を逆転させた。

思いがけないことに青蘭が唇の端から小さな声をもらすと、碧柊は唇を重ねたまま低く笑った。やや強引に音を立てて彼女の唇を吸い、音を立ててはなす。そのまま真上にある上気した秀麗な顔をのぞきこむ。

「重かったであろう?」

からかうように唇を歪めれば、艶っぽさとあどけなさの相まった表情が羞恥と困惑で一人の女のものとなる。

「……別にそのようなことは」

口ごもりながらの返事に、碧柊は意味ありげに口の端を上げただけで、それ以上の追及はしなかった。

そのかわり少し不満げに、けれどほつとした顔の青蘭の唇を再び塞ぐと、しばらくの間深く重ねて堪能した。上下は逆転したものの、しっかりと抱きしめられて逃れようもなく。青蘭は戸惑いつつもそれを受け入れ、ぎこちない動きで彼の首に腕をまわした。

それに気づいた碧柊は薄く眼を開き、頼りない蝋燭の灯りに照らされる妻の顔を確かめた。白い頬を上気させ、どこか陶然とした表情で目を閉じている。彼女なりに恥じらいつつも、この状況を受け入れているらしい。無理強いしているわけではないらしいことを確認すると、さらに強くしなやかな肢体を抱き寄せた。

やがてその拘束する力がゆるやかにとかれ、ゆつくりと唇がはなれる甘やかな余韻に浸りながら眼をひらいた青蘭のそれを、碧柊は未練がましく追いかけて軽く啄ばむ。その一瞬で余情から醒めてしまった青蘭は、思わず苦笑した。

「……きりがいな」

「ええ」

己の救いがたさに苦笑する彼に、青蘭も同じ思いをこめて微笑む。想いのたけの溢れる柔らかな表情に、碧柊は目を細める。再び口づけたい衝動を堪え、かわりに汗に濡れた髪に指先を滑らせた。寝具に散る髪の長さは、彼とほとんど変わらない。

愛おしそうに何度も髪を梳き、最後にその一房を手に取り口づけた。

「続きは戦の後だ」

「……続きって……」

青蘭がさつと頬を赤らめると、にやりと笑い囁いた。

「終わりなどないがな」

「」

返す言葉もなく、耳まで赤く染める。抗議するように恥ずかしそうに睨みつける眼尻に口づけを一つ落とし、ようやく彼女を開放した。

その後の身支度は碧柊の方が早かった。さつさと武具も身につけ、武装を整える。最後に腰に太刀を佩く。

その時点で、青蘭はまだ袖に腕を通してるところだった。雨と汗に湿ってしまった衣のかわりに、青蘭は男物を用意させた。陣頭に立つことはなくとも、戦に臨む想いは兵士たちと変わらないとい

う意志の表明だった。

碧柊は床に落ちていた帯を手にとると、彼女の前に膝をつき、帯を結んでやるうとした。

「自分でできますわ」

「よい。その間に髪でも結っておられよ」

とりあわずに手を青蘭の背後に回して帯を渡し、前で結びかけて、ふと手を止めた。

「如何なさいました？」

細い腰元をじつとみつめられ、青蘭は居心地悪そうに首を傾げた。

碧柊は答える代わりにそつと下腹部に触れた。

「すでにここにはわが娘が宿っているやもしれぬのだな」

感慨ぶかげな声に、青蘭も目を細める。

「姫と決まったわけではありませんわ」

「姫に決まっている。だいたいそなたがいったのだろう。次の女王の顔を早く見たいものだ」

「そのためにもお勝ちください」

「必ずや勝利する。愛しい人と娘のためだ。これ以上の心強い支えはない」

「……あなたはまた、そう云う事を……」

「想いは言葉にせねばな。特にあなたには伝わらぬようだしな」

頬を赤らめる娘に、上目づかいでにやりといやらしく笑う。青蘭は顔に熱を感じながら、口を尖らせて膝まずいたままの夫をねめつけた。

碧柊はそつと青蘭の胴衣の裾をまくりあげた。

「ちょ……」

慌てて裾をおさえようとするとその手を掴んで阻み、碧柊は生真面目な顔で白くまだ平らかな腹をそつと撫でた。

「わが姫に挨拶しておきたいだけだ」

「……気が早すぎます」

「そうとも限らぬ。ただの一度の契りで孕むこともあると聞く」



吾等の場合、一度だけというわけではなからう？」

にやつと口元を歪める。青蘭は首まで赤くして、憤然と手首をつかむ彼の手を振り払った。

その隙に碧柎は彼女の腹に軽く口づけた。それで気が済んだらしく、手早く帯を結んでやった。

そして衣の上からもう一度腹部を撫でてやる。そつと触れ、なぞるだけの優しい手つき。青蘭はそつとその手に自分のそれを重ねた。碧柎はちらりと笑みの交じった一瞥をかえし、白い手の甲に口付けをおとす。

青蘭は応じるように碧柎の手を包み、もう一方の手で彼の髪を撫でた。

「いつだったか、綾萩殿じょうしんがあなたのことを子煩悩な親におなりでしょうと……」

「……あれがそのようなことを云つておったか」「ええ」

碧柎は手を止めるとわずかに目を細めた。それ以上の感情はうかがえない。青蘭は無言で彼の髪を撫で続ける。

「……ただ無事とのみ？」  
「東葉南部の兵をひそかにまとめることはできている故に、身動きもできぬというわけでもないのだろう」

綾萩がどのようにしてあの苧南の砦を逃れ、その際にどれほどの傷を負っていたのか。その一切は碧柎にすら知らされていない。綾萩は彼の乳母子であり、その絆の深さは兄弟と云つてもいい。それでも碧柎はほとんどそのことに触れない。

彼は自らの父の死についてもついに語らなかつた。前東葉王の死を知らせた使者の死。その際に彼の拳が震えていたことを、青蘭は今も鮮明に覚えている。

「翼波の動きにも油断できぬ今、あれが東葉にあることはかえって都合がよい」

権力を握る冷徹な王族としての言葉。そこに感傷は含まれない。

青蘭はふつと顔を上げて閉ざされた窓の向こうを思った。雨は未だに降り続けている。

同じ嵐のなかに、雪蘭がいる。これほど長く彼女と離れていたことは一度もない。今、このとき、彼女はとうしているのだろう。

そう思えば胸が痛み、息が苦しくなる。けれど、それを口にすることはできなかった。

風が吹いていた。雨は相変わらず強く降り続けている。稲光までが天地のあわいを走り、嵐はおさまるところか、激しさを増しそうですらある。

奇州の山城を遠巻きにするのは、それぞれに異なる旗をたなびかせる二つの陣。前方が蒼杞率いる西葉王家の軍であり、後者は明柊の指揮する東葉軍だった。

一方、山城にこもる青蘭の軍は、数では蒼杞と明柊の連合軍には大きく劣っている。その不利を補うのが地の利であり、山城という砦の利用だった。

東葉軍の後方に軒車が一台停まり、嚴重に警護されている。戦場には不釣り合いな優美な細工の施されたものだ。あまりの雨風に幕舎が激しく揺さ振られるため、雪蘭は明柊のすすめに従い軒車に戻っていた。

軒車とはいえ、貴人にふさわしく内部にはゆとりがあり、狭苦しさはない。ゆつたりと腰を落ち着けた主の顔には疲労がにじんでいるが、いつものように冷徹に揺るぎなく見えた。

窓には視線を遮るために薄い紗の蔽いがかけられているそのため、荒天の朝の薄明は届かず薄暗かった。

その薄暗がりの中、雪蘭と明柊は向かい合っていた。

「なにやら仰りたいようですね」

「お察しなら余計な言葉は不要です。あなたの考えをお話下さい」  
厳しい言葉のわりに口調は平淡だった。表情にも感情をしのばせる手がかりはない。

明柊はその台詞に彼女らしさを感じとり、薄く笑んだ。

「この荒天は攻める側により不利に働くでしょう。ですが、嵐がおさまるのを待つ間に、李州侯率いる南部勢と合流してしまうよりはましといえる」

「そのようなお話は一度聞けば十分です」

短く言葉に苛立ちはなく遊んでいる場合ではないと、嗜めるような響きだった。明柊はその意を汲んだように苦笑してみせる。

「失礼いたしました　聡明なる陛下」

「余分な言葉はけっこうと云ったはずですが」

「やはりつれない方だ、愛しい方を讃えることができるのは、これが最後かもしれませんのに」

切なげな口振りなことさらに大げさに聞こえ、それは発した当人も承知しているらしい。

雪蘭はその真意を探るように、わずかに目を細めた。

「最後かもしれないではなく、最後なのではありませんか？」

「……冷たい方だ、戦う前から俺が負けると決めてかかれるとは、いかにもわざとらしい嘆きぶりに、雪蘭は小さく息を吐く。

「戦うつもりなどないのでしょう？」

「ほう、なぜ？」

「勝つつもりがあるなら、先攻を蒼杞殿にだけまかせるはずがありません。数では青蘭方に勝っているとはいえ、相手は皆にこもっています。李州侯達が合流する前に落としておかねばなりません。それには蒼杞殿の手勢だけでは足りないはずですよ」

「ふむ、さすが陛下、ご慧眼です」

「余計な……」

「言葉は不要でしたね。失礼いたしました。思わず本音が口をついて出てしまいました」

婉然と微笑むと雪蘭の手を取り、薄い絹の手袋に覆われたその甲にそっと口づける。恭しく両手でその手を押し包んだまま、笑みはそのままだに言葉を続ける。

雪蘭はその手を振り払おうとはしなかった。

「あなたのおっしゃるとおりです。ただしそれが必ず通用するとは限りません。特に相手が蒼杞殿ではね　だから、あえて俺は彼の望まぬであろう言葉は口にしなかつたんですよ。蒼杞殿は決して暗

愚なわけではない。だがそれ以上に愚か者でもある。攻めるなら協力すべき事態だと分かっている、王としての自尊心がそれを口にさせない。ましてや本来ならば、格下の、とりあう必要のないはずの東葉を相手にね。これまでの共闘は俺が下手に出て、すべてお膳立てしてさしあげたからこそ成り立っていたのです。だが自国の始末となると話は別です。俺がそこまでしてさしあげる必要はないでしょう、ましてや王を名乗るなら。それこそ蒼杞殿に失礼というもの」

「やはり本音はそこにあつたのですね」

予想どおりでしたと言いたげな風情で、雪蘭は小さく息をついた。明終はほっそりした女の手の細さを確かめるように、そっと手首から指先へと指を滑らせる。薄い笑みを浮かべたまま、けれどその眼差しは両手で包み込んだ雪蘭の手の甲に注がれている。

「国が傾くからこそ楽しいのですよ。西葉も沈めば俺の付け入る部分が大きくなる。俺が葉を統一するのも、また一興」

「それがあなたの真意だと？」

「さあ、如何でしょう。それはあなたがお考えになることだ。どれが真意であろうと、それは俺の考えであって、あなたの望むものである必要はなく。そして、俺の真意がどこにあると、それにあなたが煩わされる必要はない」

「煩わされてなど……」

思わず不愉快そうに眉をひそめ、わずかに声音も尖る。とたんに油断ならない眼差しが真正面から彼女を見据えた。

「では、何故、時折そのように俺の真意を探ろうとなさる？」

「それは……」

「俺の真意がどうであろうと、俺のしていることに、その結果に変わりはない。蒼杞と手を結んで西葉軍の侵入の手引をし、叔父である東葉王を殺し、従弟をはめて反逆者の汚名の着せ、その従兄の婚約者であるあなたを奪い、妻とし」

「私は偽者です」

「そんなことはどうでもいいと云ったでしょう。なかなか御理解いただけないようですな。それとも、理解したくないのですか？」  
真正面から顔をのぞきこまれる。雨天の暗い朝であっても、その眼差しにひそむなにかを読み取ることは容易だった。鋭さというよりも、真摯な光とでもいうべきか。いつも言葉や表情ではぐらかしてきた彼がのぞかせる、隙でもなく、手掛かりでもなく。自分の心中を隠さず、そのままに彼女の心の内をのぞきこむような、ならないろ。

雪蘭は言葉もなく、ただその視線を黙って受けとめた。

雪蘭自身、彼を、周囲を謀っている現状で、それが本意であろうがなかるうが、その事実にかわりはない。そんな彼女の紡ぐ言葉に、真実があると云えるのかどうか。

明柊自身もそうしてすべてを偽ってきた。

言葉ではなんとでもいえる。その言葉の真偽は本人にすら分からないかもしれない。

雪蘭は肯定も否定もしなかった。明柊もその以上の言質は求めなかった。

「蒼杞殿は敗れる。それもあなたの計画のうちですか？」

「どうでしょうね。自業自得ともいえますから」

明柊はそう云ってうつすらと微笑む。

「狙ったことは否定できないでしょう」

「ええ、しませんよ」

「そうして、どうするのです？ おそらく、蒼杞殿は敗れる。そして、真の女王が勝利し、その夫として碧柊殿がたてば、西葉ばかりでなく東葉も女王を中心にまとまることは避けられない」

「まだ、そうとは限りません」

明柊は楽しげに口元を歪めた。しかし、その目は笑っていない。

不穏なその落差に、雪蘭はわずかに気圧される。

「なにを？」

「さあ、なんでしょうね。とりあえず、ここで俺のやるべきこと

は、約束を果たすことです」

「約束……」

「愛しい女性との約束は必ず守ると誓ったでしょう　あなたの可愛いとこ殿にもね」

「私を置いていくのですか？」

するりとすべり出た言葉が、しばし沈黙をもたらした。

雪蘭は唇を押さえた衝動を必死に堪える。自分の言葉の意味が、自分でも咄嗟に理解できなかった。だが、その意味するところまでも分からないわけではなかった。

「置いていく、とおっしゃいますか」

「……」

「あなたの望みなら、俺は聞かねばならぬ　愛しい方の願いですからね。さあ、お望みを言葉になさってください」

「……それは……」

返せる言葉はない。あつたとしても、決して口にはできなかった。まだ言葉にできませんか」

明柊はわずかに目を細めると、ゆっくりと顔を近づけ、思わず身を固くした雪蘭の耳元に囁いた。

「では、また、後ほど伺いにまいりますよう」

暗い朝がくるころには布陣はすでに整えられていた。

その骨子を提案したのは碧柎だったが、彼はあくまで客将として寄州公の背後に控えている。旗頭は女王である青蘭であり、指揮をとるのはあくまで王統家八門筆頭の寄州公里桂だった。

中核ともいえる里桂の傍らに東葉王子のいることに異を唱えるものもあつたが、西葉貴族よりもはるかに多くの戦歴をもつ彼をのぞくことは不可能だった。

青蘭自身がこれは西葉一国の問題ではなく、両国に根深く関わる戦いであり、このまま『葉』の統一をめざすと断言した。

それに続き碧柎が、東葉王太子として青蘭が両国に君臨することを認め、心からの臣従を誓った。それを青蘭も快く受け入れた。これにより彼は西葉貴族と同等か、それ以上の王統家と同列の女王の臣下として正式に認められたも同然となった。

東葉南部勢をまとめつつある、碧柎の乳母子さんりょうごん斬綾罽の存在も大きい。

蒼杞だけでなく、東葉軍を率いる明柎をも敵にまわしている状況は、圧倒的に不利といえる。その上、西葉は全体的に軍備が不足している。李州侯率いる南部勢が合流を果たしても、劣勢は覆せない。そんな状態で頼みの綱となるのは、真相を明らかにし、東葉南部をまとめることを託された綾罽しかない。

王族にとつて乳母子は兄弟同然か、それ以上の存在である。その存在は軽視できるものではない。

いくら積年の恨み辛みと不満があつても、その感情のままに碧柎を排除することはできなかった。

李州侯率いる南部勢が近づきつつあることを、蒼杞も知っているものと推測できる。蒼杞方としてみれば、それまでに片をつけるか、少しでも有利な形勢に持ち込んでおきたいはずだ。



そのような状態で碧柊を排しても、彼等を喜ばすだけだろう。夜が白みはじめても、雨と共に霧がたちこめている。同士討ちの恐れがあるほどではないが、わずか先の視界もきかない。

それでも相手は攻撃をしかけてくるだろう。青蘭方もそう踏んで待ち構えている。

そしてその通りにことははじまった。

霧がいつそう濃くなったのを見計らうようにして、蒼杞方から攻撃をしかけてきた。

弓矢はつかいものにならないため、最初から白兵戦になった。

李州侯の到着まで持ちこたえればよい青蘭方は、あえて積極的に戦わず、できるだけ戦力の温存をはかった。

山を背に森に潜み身を隠すにはことかかない青蘭方に対し、蒼杞方は水捌けの悪い原野に陣をしいている。

原野には背の高い葦が生えていたが、それは事前に碧柊の命でかりとられていた。そのため彼らには盾の他に身を隠すすべはない。いくら霧が濃くとも、その隙をぬつての蒼杞軍の接近は難しく、霧の晴れ間には必ず矢が飛んできた。

白兵戦を挑んでも、青蘭方は挑発には乗らず、片がつくとさっと引いてしまう。そのあとを追おうとすれば、矢が飛んでくる。

森と原野の境界に戦線は固定し、一進一退を繰り返すだけだった。小競り合いの始まったことはすぐに砦に知らされた。後詰めのみ柊軍に動きが見られないこともあわせて報告される。

「同時に攻めてこないのは、なにかしかけてくるつもりがあつてのことなのかしら」

青蘭の傍らには碧柊と里桂が控えている。女王の婚姻の事実を知る里桂は事実上腹心同然だ。

小さな疑問の声に不安や怯えはない。それでも細かい指はかたく握りこまれている。

碧柊は緊張した様子の女王に、控えめに微笑みかけた。

「蒼杞殿が拒んだか、それを見越した明柊が後攻めを提案したのか

もしれぬ。窮地を救ったほうが恩を売れようし　ひよつとすると見限るつもりかもしれぬ。我々が共倒れとなれば、明柊の一人勝ちとなる故」

最後のそれが一番ありえそうなことだった。

碧柊は青蘭の表情に同意を讀取り、苦笑した。

「翼波が気になりますね」

「翼波だけでなく綾霖りょうりんの動きも明柊は察していよう　むしろ、吾の気懸かりはそちらのほうが大きい」

「翼波との国境は？」

「見張らせてあるが、何分手薄なことは否定できぬ」

「仕方ありません」

明柊は東葉の南部の貴族の大半を残したまま出陣した。

蒼杞に当主を処刑された東葉貴族のうち、生存者のほとんどが領地に逃げ帰った。そのうち北部の貴族で、明柊の呼びかけに間に合ったものだけが雪蘭演じる青蘭女王を奉じて西葉に侵入している。

南部の貴族たちは取り残されたが、それでも明柊のあとを追って東葉王都を目指すものもあった。

綾霖は彼等に使者を送り、可能なかぎり自ら面会を取り付けた。

そしてこの争乱の真相を明らかにし、青蘭こそが真の女王であり、碧柊がその夫として傍らにあること、真の敵は明柊であることを説いて回っている。

その結果は上々だった。彼等は蒼杞に当主を殺害されており、その恨みと怒りからられている。苓南れいなんの砦で明柊の裏切りの現場に立ち会った、綾霖自身の証言にも説得力があった。聖地の大神官の指示もまた、大きな理由となっている。

碧柊の代理人としての綾霖は、東葉内部のとりまとめるだけで手いっぱいだった。雪蘭からもたらされた翼波の不穏な動きについても青蘭経由で伝えられてはいるが、国境線を油断なく見張るだけの余力はない。

せいぜい、国境沿いに領地を持つ貴族や王統家に警戒を呼び掛け

るのが関の山だった。

風雨に交じって軒車の扉を叩く者があつた。香露がそつと窓のおおいをあけると、びしょ濡れになつた明柊の乳母子の姿があつた。

「苓さまです」

明柊は浅く首肯すると扉をあけて外へ出ていった。雨がすこしでも降り込まぬよう遠慮がちに開かれた扉の隙間からは、冷たく湿つた風と大粒の雨が入り込んだ。

「おさまりそうにありませんね」

その言葉に雪蘭は小さくうなずいただけだつた。

「苓公のお戯れなどお気になさいますな」

「そうね」

雪蘭はそう言つて無表情に受け流したが、香露は気掛かりな思わしげな眼差しで主人を見つめていた。

雪蘭は幼いころからあまり動じることのない、泰然とした子供だつた。六華の奥の宮に入つてからは、それにますます磨きがかつた。た。

そんな彼女が明柊の前では少なからず狼狽を見せる。確かに明柊の言葉は巧みに人を翻弄するが、雪蘭はそれにたやすくうじられるような柔な人格の持ち主ではない。

それでも多感な年ごろの娘でもある。明柊は見目がすぐれているだけでなく、弄弁にも長けている。甘い言葉で丸め込むばかりが、娘心を手玉にとるすべではない。

明柊はすぐに戻ってきた。わずかな間にすっかり濡れそぼつてしまつている。前髪の前からも雫がたれ、風に乱された髪が頬にはりついていてた。

「はじまつたようです」

そう言つた彼の口振りは事務的だつた。それだけの報告を受けるためだけに、この雨のなかをわざわざ出かけていったわけではない

だろう。なにかしらの意図があり、それを雪蘭に聞かれたくなかったのかもしれない。

すっかり濡れてしまっているためか、明柊は先ほどのように雪蘭のそば近くまで近づくことはしなかった。

雪蘭も彼に静かな一瞥をよこしただけで、気遣いをみせることもなく、戦況を問うた。

「状況は如何です？」

「なかなか苦戦しているようですよ。碧柊は自分に軍事的な才能を信用しきれていないようだが、俺はこれでも彼のことを買っているのですね」

「共に何度も戦ってこられたのでしたわね、西葉を、翼波を相手に」

「そうですね、だから俺達は互いのことがよくわかる」

「あなたの思惑もお見通しだと？」

「そうであつてもらいたいものですね。これほどまでに想っているのですから、愛に深さが以心伝心すればこれ以上の幸福はない」

久々に耳にするその大仰な軽口に、雪蘭は思わず失笑する。

「相変わらず矛盾なさつておられること」

「矛盾とるかどつかは受け取り方次第でしょう。愛故の試練もありますからね」

「愛故、ですか」

小さく息を吐いたのに、明柊はおやという顔をした。

「あなたの行動も愛故でしょう」

「さあ、どうなのでしょう」

「いとこ殿のためならば己の命が危つくなることすら厭わない。それが愛でなくてなんだというのです」

「私がいなければと想わせたのが、あの子だっただけのこと」

「まるで保護者ですね 母君のようだ。母親というものは子のためならば命を投げ出す人もあるそうですから」

「それは個人の資質でしょう。決してそういう人ばかりではありません

せん。逆をいえば、そういう父もいるでしょう」

「……あなたは母上より父上に想い入れがおありのようだ」

「さあ、どうでしょう。それこそどうでも良いことでは？」

皮肉な口調で彼の決まり文句を返され、明柊は苦笑した。

「あなたの言葉を信用するなら、あなたの父上は紅桂殿下ということになる。真に王にふさわしい器の持ち主だったという評価は、東葉にも届いておりましたよ。優れた父を持つたという評価は、尊敬できるものですからね。あれもそうだった。だが、そうではない親もいれば、子もいる」

それは青蘭も同じだった。彼女の口から父への想いが語られたことはない。青蘭は母を亡くしたときに、父を喪ったのも同然だった。青蘭にとって肉親として意識せざるをえなかったのは、兄だった。それも王権を巡る敵として。だが、同じく血の濃い従姉である雪蘭のことは素直に慕っている。血のつながりがそのまま警戒心や敵対につながるわけではないことを、青蘭は知っている。

「あなたと俺の立場は同じだが、同じではない」

「当然でしょう。私はあの子のためにこのようなばかげたことをするはずがありません」

「そう、ばかげている。だからこそ俺はしかけた」

「結果は予想通りだったのですか？」

「さあ、どうでしょうね。まだ、終わってはいませんし。だが、あれはまずまず頑張っていると認めますよ。どうやら伴侶の力が大きいようですが」

「まだ、終わっていないとはつきり仰いましたね。まだ何か企んでおられるのですね」

「終わってはいないでしょう。予想どおり蒼杞殿が倒れたとしても、次は俺がいる。俺はあれを愛していますが、だからといって手加減してやるつもりはない。いくらあなたが大切ないとこ殿のためにそうしてくれと云われても、そればかりはお聞き入れするわけにはいかない」

「私が尋ねているのはそういうことではありません」

分かつているでしょうと、雪蘭は言外にわずかに苛立ちをにじませる。このくらいのことでは感情を乱すのは、やはり彼女らしいとはいえない。香露葉心配そうに二人の様子を見守る。

「終わりではないことだけは確かですよ。俺はあれの敵であることを選んだ。その俺がなにも企んでいないと想いますか？ それこそあなたらしくない」

「愚問でした」

苦い顔で雪蘭が顔を背ける。それを明柊は静かな眼差しで見つめていたが、やがて膝の上でかたく握りしめられていた細く白い手をそっと包み込むように手を重ねた。

「そろそろいかねばなりません。戦に巻き込まれるようここを動かさないでください。あなたが今、なさるべきことはここを動かさず、迎えを待つことです」

「迎え？」

はっとして顔を上げた雪蘭に、明柊は華やかな笑みを向ける。

「約束は守ると云ったでしょう。あの約束も忘れてはいませんよ」  
低く柔らかな声でささやき、そっと雪蘭の手の甲に口づけを落とす。

「では、ご無事で。我が陛下」

明柊はさっと身を翻し、すばやく軒車からおりた。

雪蘭はとっさに立ち上がったが、じきに顔を青ざめさせた。まさか彼の後を追おうとしたというのか。自分でも自分の行動が信じられないように、顔を強ばらせている。そんな風に動揺を露わにすることは、香露でも何度も目にしたことはない。

香露はそんな少女の肩にそっと触れた。

「お役目が終わったのです」

雪蘭は異論を唱えるように承服できない顔をみせたが、痛ましそうな香露の顔を見て、その言葉を飲み込んだ。

「そついうことなのでしょう」

静かに同意する言葉に、窓をたたく風雨の囁きが重なる。諦めとは違う、だが静かで確かな気配に、香露は安堵していいものかどうか分からなくなった。

明椋が雪蘭の手に口づける前に囁いた言葉は、香露には届かなかった。

飯とはいえ短い間だが、夫婦だった二人。それが形ばかりだったことを香露も知っている。明椋は口づけ以上のことはしなかった。それも唇に唇を重ねることもしなかった。

それでも二人が夜、枕を並べている時、二人の間で交わされた言葉のすべてを知っているわけではない。

雪蘭は伶俐だが、冷淡ではない。情のあついところがある。情がうつったとしても、しかたないのかもしれない。その上、彼女の保護の対象であった青蘭は女王として彼女いないところで立ち上がるうとしている。雪蘭がもう以前のように必要とされることはないだろう。

それは雪蘭も分かっているだろう。

本来、雪蘭は嫁ぐ青蘭の傍らにあり続け、終生共にあるはずだった。それが本人たちの意志とは無関係に争乱が起こり、現在に至っている。

青蘭の身を守るためとはいえ、身分を詐称し、なおかつ偽の女王として担ぎ出されてしまった。

青蘭のもとに戻ったとしても、その罪を問われずにすむのか。

そんな不安を敏感に悟ったのか。雪蘭はふつと薄い笑みを浮かべた。

「大丈夫です。私はずっと青蘭の味方として動いてきた。それは青蘭も、岑家の義兄たちも分かってくださっている」

明椋の傍らにあつて、彼の動向を流してきたのは雪蘭だった。その動きに明椋が気づいていなかったとは、香露も思わない。あえてそれを許していたのか。それとも支障はないと見なしていたのか。それをたてに雪蘭を追いつめたり、不利な材料として手札にするこ



とはなかった。

香露にとつて明柊という人は、どう考えても不可解な人だ。雪蘭が彼のことをどう思っているのか。香露には伺い知るすべはない。雪蘭がその胸の内を他者にあかすことは滅多とない。

「どちらにせよ、まずはこの戦いに決着がつかねばならない。香露、青蘭に連絡は？」

「いつでも可能です」

「では、知らせを。明柊殿はおそらく蒼杞殿に手を貸さないでしょう。しかし、彼は私を惑わす為にそういっただけかもしれない。その恐れのあることも忘れないように付け加えて」

「はい」

香露が首肯すると、雪蘭は小さく息を吐き、一気に脱力したように背もたれによりかかった。

軒車の警護には、明柊の命を受けた兵士たちが当たっている。彼らの注意を引かぬように、いかにも所用があるふりで手のものを呼び寄せ、伝言をつたえる。

そうしながらも香露の注意は雪蘭に向けられたままだった。

ようやく手を打ち終えると、雪蘭のそばまで戻る。

「お疲れになりましたね」

「ええ」

雪蘭は目を閉じたまま、話すことさえ億劫そうだった。めったと機嫌や疲れに態度を左右させることのない雪蘭だけに、その無愛想ともとれる態度は疲弊ぶりの証でもある。

「ああ伝えるようには言ったが、おそらく明柊殿は蒼杞殿に手を貸すまい。私の役目もこれで終わる」

「雪蘭さま……」

「やっと青蘭に会える。それから私は……」

「雪蘭様？」

雪蘭は薄く目を開き、窓の方へ視線を滑らせた。

相変わらず風のうなり声は聞こえるが、先ほどまでの激しさは和

らいできている。

「まだ終わってはいない　先のこと、終わってから考えればいい」

まるで自分に言い聞かせるような言葉に、香露は応えることはできなかつた。

嵐はじよじよにおさまりつつあった。空が少しずつ明るくなりはじめ。

その報告をうけた青蘭は、静かに立ち上がった。

肩を短い髪がその動きにつられてゆらりと流れる。寄州の城から届けられたばかりの真新しい衣に身を包み、腰には大神官から預かった神刀をさす。

衣は染めも刺繍もなく、輝くような白絹から縫いあげられていた。装飾性のなさを補うために美しい襷がとられ、立ち上がれば肩から足首にかけて優美な曲線が流れる。それは華奢な女王の体をしなやかに繊細なものに見せる。丁寧に梳かれた黒髪の見事な艶と、彼女自身の美しさだけが装飾品だった。

それは聖地にある女神の神像を思わせる姿だった。あえて似せているのだから、それも当然だ。提案したのは里桂だった。碧柊は青蘭の美貌を売り物にするようなやり方に眉をひそめたが、本人がそれを拒まなかった。

「このような見目が効果を上げるのであれば、いくらでもそれらしく振る舞って見せましょう」

と、婉然と微笑んだものだから、碧柊の方が意外そうに眉を上げた。

「ずいぶんと大胆なことを仰るようになったものだ」

「仕方ありません。私の武器は血筋とこの外見だけでしょう。あなたのように戦に強かったり、雪蘭のように賢いわけでもない。他に取り柄ありませんから」

相変わらずといえは相変わらずの自己評価だが、そこには開き直ったような明るさを感じられた。だからからか、碧柊も眉をひそめはしなかった。それでも訂正することは忘れない。

「 血筋と容色だけということはなかるう」

「 そうですか？ 」

不思議そうに首をかしげた彼女に、彼は生真面目な態度でうなずく。

「 気が強いくせに気が小さく、妙に鋭いかと思えば鈍い 」

青蘭はこのような時にからかうつもりかと、抗議するつもりで碧柊をあらためて凝視した。しかし、彼は至ってまじめな顔をしている。だからといって、それで青蘭をけなしたりなじるわけでもない。……それは長所とは言いません」

対処に困り果てて、やつとの思いで言葉を返せば、碧柊はいやいやと否定するようにそつと青蘭の頬に触れ、真正面から顔をのぞきこんだ。

「 だが、吾にとつてはだからこそ可愛くて仕方ないがな 」

瞬時に耳まで真っ赤になった青蘭。その場に居合わせた里桂が笑いをこまかすようにわざとらしい咳をした。

「 ……他に人のいるところであまりそういうことは仰らないでください 」

「 里桂殿なら我らのことを承知だ。支障なかるう 」

「 そういうことではなくて……恥ずかしくないのですか？ 」 今度こそ抗議の必要性を感じて、青蘭は強い口調でなじった。

「 なにを恥じる必要がある？ 吾は明柊のように心にもないことを云つたりはせぬぞ 」

「 お世辞であるうが本音であるうが、そういう問題ではありません 」

「 なにが 「問題だ」？ 」

「 もういいです 」

「 よくはなかるう。そなたの嫌がることはせぬと誓ったのだ。問題は明らかにせねばならぬ 」

「 だから、そういうことが問題だと 」

「 問題を解決しようとするのがまずいというのか？ 」

「 そういうことではなく…… 」

青蘭はちらちらと里桂の方を見ては、困惑した顔をする。それが碧柊には気に入らぬらしく、彼らしくもむきになってしまいうらしい。青蘭からは救いを求められ、碧柊からは険しい眼差しで牽制され、里桂こそ困り果てているのだが、このようなときに夫婦漫才に興じてもらっているのは、皆だった。

仕方なく苦笑しながら碧柊の方へ近づく。女王に近寄れば、その夫君の眉がぴくりと動く。表立ってこそいないが、碧柊もそれなりに恠気を見せるらしい。

「なにが問題かは、この戦に片が付いた後で、私から殿下に申し上げましょう」

「そなたには彼女の云うところの問題が分かると申すのか」夫婦の問題に口を挟まれただけでも不本意なのに、さらにその“問題”を碧柊自身ではなく里桂が理解していることが不愉快らしく、碧柊は面白くなさそうに一瞥する。

雲行きの怪しさに青蘭はいつこうに気づく様子はなく、里桂の仲裁を素直に待っているらしい。

里桂はやはり途中で逃げれば良かったと後悔しつつ、「おそれながら」と碧柊に申し開きをする羽目に陥っていった。

と、そんな経緯もあり、犬も食わないなんとやらを痛感した里桂は、己を振り返って人のいないところで夫婦喧嘩はしようと決心していた。

戦いを直前に控えた緊迫したときに、そんな脱力するような微笑ましい一幕もあったが、女神を思わせる衣装をまとい立ち上がった青蘭はひたすら凜々しかった。

夜はとつとつに明けている。嵐がおさまり、空が晴れつつあれば、戦場の霧も次第に晴れていく。

そこへ雪蘭からの知らせがもたらされた。

まずは青蘭が目を通し、ついで里桂と碧柊が読む。それは碧柊の予想通り、明柊に蒼杞と共に戦う気はなさそうだというものだった。青蘭が二人に小さく肯きかけると、里桂はちらりと碧柊に同意を

求める。彼がそれに頷くと、里桂が知らせの内容を居合わせた諸侯に明らかにした。

それを裏付けるように、霧が晴れてきても明柊軍に動きはみられなかった。

「共倒れを狙うにしてもやりようがあるでしょうに」

あからさまなやり方に、青蘭は違和感を覚えたのか。小声で碧柊と里桂にだけ囁く。

「あからさますぎて、警戒すべきかどうかすらすら迷いますね」

里桂がそう受け合つと、碧柊が物思わしげに自分の耳朵にふれながら付け加える。

「なにか仕掛けてくるつもりなら、もう少し巧妙な方法を探ろうとは思つが」

それすら明柊のねらいかもしれないと、考えられないでもない。

明柊とともに戦ってきた碧柊だからこそその躊躇いもある。互いに相手の能力や発想の癖はある程度見当がつく。それだけにあえてそれを見越して、何かをたくらんでいることも否定できない。

「かえって面倒だな」

碧柊は自嘲気味に呟く。共に戦ってきたからこそ、互いの手の内がわかってしまう。それが今は負の作用をもたらしていた。

「明柊殿の性分を承知なさっておられるからこそ、裏を読むのはかえって難しゅうございましょうね」

そういう青蘭には、雪蘭の心づもりや覚悟が嫌というほど想像がついてしまう。共にあったからこそ、その関係がどのようなものであったにせよ、理解できてしまう部分もあり、だからこそ予想もつかない部分もある。

「それはお互いさまだろう」

碧柊はそういって、苦笑う。明柊はそういうことすら笑って楽しんでるかもしれない。それとも碧柊の出方を、笑みを浮かべて待ちかまえているのだろうか

青蘭はさつと衣の裾をさばくと、くるりと振り返った。珍しく迷

いをのぞかせる碧柊の顔を真正面から見つめる。それは逡巡を断ち切るような強い光を秘めていた。

「ここで考え込んでいても埒はあきません。嵐はおさまったのですから、予定通りに山を下りましょう。権大神官殿をここへ」

青蘭は最後に祥香をちらりと目配せした。青蘭の傍らに控えていた彼女は、その意を受けると恭しく一礼し、部屋を出ていった。

碧柊はその背中を見送り、それから青蘭に向かって無言のまま頭を下げる。里桂もそれに続く、他の貴族たちもはつとしたようにそれに倣った。

ほどなくして控えの間で休息していた権大神官が案内されてやってきた。

すでに衣装を整えていたのだろう。その権威を示す正装の浄衣に着替え、神殿の象徴である女神の楯と剣をあしらった意匠の錫杖を手にしている。錫杖は磨きあげた銀に真つ青な宝玉が輝いている。

「これから戦場に降ります。先導をお願いいたします」

「承りました」

権大神官は恭しく一礼した。白絹が衣擦れの音をたて錫杖がかすかに涼やかに鳴る。宝玉の下に鈴が仕込まれている。

青蘭は腰帯にはいた神刀に触れ、きつとまなじりを決するとしつかりとした足取りで歩きだした。

砦から山の裾野に続く道は、露を帯びた草や木の葉に覆われている。細い道は何度なく往復した数多くの兵士たちに踏みしめられ、すっかりぬかるんでいる。

足を滑らせないように気をつけながらも、青蘭はなるべく昂然と顎をあげるように心がけた。すっかり風は秋の気配を帯び、朝の空気は湿って冷たく感じられるほどだ。

足元の軍靴はぬかるみを踏んで、じわじわと湿気が忍び込んでく

る。衣の裾は草露に濡れていく。

原野では未だに戦闘が続けられていた。霧が晴れ、嵐がおさまったため、蒼杞方は今このときとばかりに攻勢を強めている。

青蘭方は未だに地の利を生かした戦いを続け、小競り合いの規模が大きくなつたに過ぎない。

青蘭たちが山道を降りてくると、静寂な動揺にも似た波がひろがっていった。

高らかに笛が吹き鳴らされた。怒号と喧噪と指示する大声、悲鳴に空気を裂くような矢の飛ぶ音が飛び交っていたその場に、その鼓膜を直接刺激するような高音ののびに、思わず動きを止める者が相次いだ。それにかまわず戦いを続けていた者も、一種異様な雰囲気、の静けさに飲まれたように手を止めた。

ゆつくりと潮の引くように戦闘がやんでいく。それと共に静けさが広がっていく。

その中心、波紋を投じたのは、浄衣の神官だった。彼の背後には笛を吹き鳴らした、次位の神官が控えている。

雨に濡れ、雑草を切り払われた原野には、屍が転がり大量の血潮があちこちに水たまりを作っている。

それらを気にとめることなく、彼らは静かに茂みから姿を現し、臆することもなく何事もなかったかのように歩みだした。

その神官の手に握られた錫杖の意味を知るのは、聖地を訪れたことのある者のみ。貴族はもちろん、熱心な信者である一部の兵士たちもそれを悟る。

ましてや寄州候に仕える兵士たちにはなじみの深いものだった。

聖地を訪れる信者たちの前で祭祀を司るのは、権大神官。さらにその上に大神官がいることを皆知っているが、なじみの深いのは直接関わる機会のある権大神官の方だった。

あわてて膝をつく寄州兵たち。一方、蒼杞率いる東葉王家軍のものたちも、女神の末裔である王家に仕えているという誇りがあるだけに、信仰心も深い。それだけに彼がただの神官ではないことに気



づく者は多かつた。

蒼杞方の中にも、膝を折る者が相次いだ。

急に戦鬪がやんだことに、その原因を知らない後方から訝しげなざわめきがかえってくる。

やがてその原因を知った蒼杞が姿を現したとき、彼の前には妹が静かに立ちはだかつた。

「お久しぶりにございます、兄上　いえ、蒼杞殿。あなたは尊属を殺害し、国を裏切った。その罪は重い。私はあなたを捕え、罪を明らかにし、償いを求めねばなりません」

彼女は静かな声で兄の罪を問うた。

「雨もやんだようでございます」

窓掛けの隙間から外をうかがっていた香露がそう囁いた。雪蘭は小さく息をつくとき、戦況はどうなっているのかと問いかけた。その問いは香露を通して覗見かきまみに伝えられる。

しばらく間をおいて、霧が晴れてきたせいもあってか、蒼杞勢が攻勢を強めているという報告がもたらされた。

それに雪蘭はわずかに眉をひそめる。

「明柎殿に動きは？」

明柎率いる東葉勢に動きはみられないとのことだった。

蒼杞方と青蘭方の間で形勢の優劣がはっきりするには、もうしばらく時間がかかるだろう。

雪蘭は無表情で窓を見つめていた。その向こうはすっかり明るくなっている。秋の朝の清々しい光が、嵐のあとの原野を照らしているだろう。

雪蘭は内心では考えあぐねていた。

明柎に動きがみられない以上、自分が次にどうすべきか判断がつかない。彼が雪蘭と青蘭を会わせるといふ約束を果たすつもりでいるらしいことは確かなようだが、それがどうやって成されるものなのか想像もつかない。

明柎がこの戦いに勝って青蘭を捕らえるつもりなら、もつと違う動きを見せるだろう。とてもこのまま勝てるとは、戦に疎い雪蘭でも考えられない。

嵐がおさまれば、当然北上しつつある西葉南部勢の到着ははやまるだろう。そうなれば蒼杞と明柎にとって、形勢は不利になる一方だ。

それを明柎ははじめから承知しているはずだろう。彼がそれを、ただ手をこまねいて待っているだけとは思えない

ここで偽の女王であると再び己の正体を明かすにも、戦ははじま  
ってしまっている。のこのことを現したところで、誰が耳を貸す  
というのか。それに先だつて雪蘭がそうしたおりには、明柊にもう  
まく言い繕われてしまった。同じことを繰り返し訴えたとしても、  
まっとうな主張として受けいれられるかどうかますます正気を疑わ  
れるだけかもしれない。

考え込む雪蘭の横顔は、珍しく険しい。それを香露が気がかりそ  
うに、けれどかける言葉もなく見つめる。

そこへ急にあたりが騒がしくなった。いったい何事かと軒車の窓  
から外をのぞいた露がことの次第を確認する前に、明柊が姿をあら  
わした。

「いったい何事です」

香露が毅然と問うと、彼は応えのかわりに悠然と微笑んだ。

無言で彼女を押し退け、軒車の扉を開け放つ。湿った風と淡い光  
が雪蘭の面にも届く。性急で乱暴ともいえる振舞いだったが、それ  
以上入ってこようとはしない。入り口から身を乗り出すようにして、  
顔をのぞかせただけだった。

彼はすっかり濡れそぼち、乱れた髪が頬にはりつき、扉を押しあ  
けた腕からも滴がしたたつている。

ずぶ濡れの黒衣の男は、いかにも不吉だった。

「青蘭女王陛下がただいま戦場のただ中に姿を現したそうですよ。  
聖地の権大神官を引き連れ、女神の太刀を手になさつてね。蒼杞殿  
の軍は戦意を喪失している。東葉にも信心深い者は多い、こちらま  
で巻き込まれる前に撤退いたします。翼波も無事に国境を越えたよ  
うですし」

その飄々とした口ぶりは、まるで世間話でもしているようだった。  
雪蘭はとっさに理解しかね、

青蘭のことはいい。すぐそこに彼女のいることはわかっていた。

どうやってその状況を演出したのかは気になるが、それは後回しで  
も十分だ。

だが、さらに問題となる言葉を、この男はなんでもないように口にしたのではなかったか。

「翼波が、なんと？」

腰を浮かしかけたが、かろうじてこらえる。だがもう動揺を隠しきることはできなかった。

明柊は額を伝う滴が目に入るのか、やや鬱陶しそくに目を眇め拳でそれを拭う。そのついでのように応じる容子は、あくまでいつも通りだった。

「無事に国境を越え、東葉に侵入したそうです」

「……無事に？」

それはその言葉の本来の意味とはまったく異なる、不穏な響きとなる。

「手引きしたのは俺ですから」

にこやかに告げた男に、香露だけでなく雪蘭も愕然とする。

蒼杞の行いも常軌を逸しているが、では、そんな彼と手を組んだこの男は果たして正気なのか。

「なにを言っているのか分かっていらっしゃるのですか？」

「分かっていますよ。俺はこの国の連中がどうなるうとかまいはしない」

「翼波が侵入すればどうなるか、分かっているのですか？」

「いいえ、分かりませんよ、誰にもね。なにせ前例がありませんから。彼らが良き支配者である証がないのと同様、悪しき者だと決まったわけでもない。なにごとくも試してみなければわからぬものです」

葉は他国の支配を受けたことがない。同様に他国を侵略したこともない。それは大陸の端に突き出た半島という地の利が大いに幸いている。

だからといって、他国と交流がないわけではない。

翼波は各部族の長たちによる、ゆるやかな連合でつながっているに過ぎず、葉とはまるで国の体制が異なる。勇猛だが、残酷な性質<sup>たち</sup>は周辺の国々に知れ渡っている。

彼らの支配が現王室を頂点とするものよりましなものになるとは、雪蘭にはとうてい考えられない。

「正気とは思えません」

「正気と狂気の境は曖昧なものでしょう。蒼杞殿がいい例だ。彼が愚か者なのか、狂人なのか、あなたにははっきりと区別できるとおっしゃるのですか？」

「そうということでは」

分別くさい顔でまるで諭すような口ぶりの彼の台詞は、はぐらかそうとしているのかどうかすら分からない。

雪蘭はそれに苛立つ。

「雪蘭殿」

かっとなつた彼女のその機先を制するように、明柊が強い口調で雪蘭の名を呼んだ。これまでにない険しい語気に、さすがの雪蘭も鼻白む。

「残念ながらこちらは一刻を争う事態です。あなたと言葉遊びをしている暇はない。いとこ同士の感動の再会に立ち会えないのは残念ですが、彼女にお伝えください。確かに約束は果たしましたよ」と明柊はそういつて晴れやかに笑う。その笑みに雪蘭は言葉を失う。その沈黙に付け入るように、明柊はさりげない様子で車内に乗り込んできた。それまでのあまりの成り行きに絶句していた香露も、咄嗟にそれを止められなかった。

貴賓のための軒車とはいえ、車内は狭い。しかし、彼はそこがまるで広間であるかのように優雅に膝をつく。呆氣にとられて身動き一つできない雪蘭の右手をとると、うやうやしく押し頂いてその甲に口づけを落とした。

雪蘭は混乱したままさつと顔を赤らめ、反射的に手を引いてしま

う。

彼はまるで少女のように頬を紅潮させた雪蘭の顔を見つめる。

縫いとめるような眼差しから、雪蘭も目をそらすことができなかつた。

どれほどの時が経過したのか。そんな気がするほどに張りつめ、凝縮した瞬間だった。

彼はくつと口の端を歪めて笑みを形作り、一礼する。そして颯爽と軒車から降りると、振り返りもせず去っていった。

言葉をかけることも、とっさに後を追うこともできなかった雪蘭は、ぎゅっと右手をかたく握りしめた。

青蘭の登場で、蒼杞方の西葉王家軍は戦意を喪失していった。投降するものも相次ぎ、蒼杞をかばうものもいなかった。

青蘭は女神の太刀を手にし、それが本物であることを証すために権大神官までが先導をつとめている。

青蘭が聖地において即位したことは、広く各地に報せがもたらされてきた。しかし、嫁ぐために東葉に入ったはずの青蘭王女が、突如奇州において即位したことに、その真偽を疑うものも少なくなかった。

蒼杞率いる西葉王家軍のなかにおいても、その知らせは密かに広まっていた。王家直属の軍に所属するということとは、軍人としてはこれ以上ない誉でもある。それ故に王家への思い入れの深い兵士たちは、正統な女王即位の報に戸惑いつつも蒼杞への恐れもあつてこれまで従ってきていた。

そこへ権大神官を伴った青蘭が現れ、その正当性が確かなものとなれば、彼らがそれ以上蒼杞に従う必要はない。彼らが仕えるべきは正当な女神の娘である真の女王であり、それは間違いなく青蘭だった。

蒼杞の妻である紅蘭王女も直系ではあるが、正当な第1位の王位継承者である青蘭を東葉にさしだし、紅蘭が西葉王位を継ぐことに不満を抱くものも多かった。

青蘭が女王として戻ることを歓迎するものは多くあれど、それを拒むのは蒼杞くらいものだ。

よく通る声で静かに兄の罪を問うた青蘭の姿は、毅然として威厳に満ちたものだった。

蒼杞に付き従っていた者たちは、その姿に圧倒されたように次々と膝を折っていく。

じきにぼつんと蒼杞だけが取り残され、彼は呆然と妹を見つめる。

「お前は明柊殿の妻として、東葉の女王となつたはず」

「それは私ではなく、私たちのいとしにして、あなたの手にかつた紅桂伯父上の娘、岑雪蘭です。彼女は私の意を受け、あなたと明柊殿をあざむくために王女を演じたのです。それにあなたが騙されただけのことです」

青蘭は冷ややかに応じた。

蒼杞は秀麗な顔を歪め、凜としたようすで対峙する妹をねめつけた。

「お前とあの娘はうり二つではないか。お前が雪蘭ではなく青蘭だという証拠がどこにある」

「私が青蘭だと言うことは、この太刀が証です。われらが遠つ御祖みおやである女神は、この太刀をふるつてこの葉の国に安らぎと繁栄をもたらされました。これを手にできるのは、女神の娘のみ。あなた方の手によりこの国が乱されたこのとき、この太刀を手に取ることが許されるのは、私のみです」

穏やかだが、揺るぎない自信に満ちた声だった。

青蘭はゆっくりとした仕草で太刀を抜いた。白刃がさしこみはじめた朝の光にきらめく。よくよく見ればただの古風な一振りの太刀に過ぎない。しかし日の光に輝くばかりの小振りの太刀をかざし、凜とたつ女神と同じ出で立ちの青蘭の姿は、神威をまとうているようにすら見えた。

その姿に気圧されたように、蒼杞は一、二歩後ずさる。よろめくような動きは、明らかに圧倒されているものだった。

碧柊は彼女の背後に控えていた。西葉貴族を代表する寄州候里桂がその傍らにある。

いつ蒼杞が妹に切りかかるかわからない。彼の腰元には華美なつくりの大太刀が下がっている。その柄にいつ手がかかっても対処できるよう、碧柊は彼女のすぐ後ろについていた。

その蒼杞の視野に嫌でも入るように、碧柊は青蘭の斜め前に進み出た。蒼杞にもそれが誰なのかはじきにわかったようだった。



「お前は……」

とつさに名前がでてこないのか。口ごもる。

碧柊はそんな蒼杞を一瞥もせず、ただ青蘭にむかって膝をつき、頭を垂れた。

「吾、葉碧柊は東葉と西葉を統べる葉の女王、青蘭陛下に臣従を誓う。誓紙を奉るにも手元がない故、そのかわりにこの言葉が確かなものとして、権大神官にも聞き届けただこう」

碧柊が顔を上げて権大神官を見上げると、彼は錫杖を静かに振り上げ地面に突き立てた。澄んだ音が響き、風にのる。

「確かに、我が耳をもつて女神にもお聞きとどけただいた」

厳かに碧柊の臣従の誓いを裏付け、青蘭に向かって頭を垂れる。

神官も王族も互いに頭を下げる必要はないが、このときばかりはそれが誰の目にも自然に映った。

青蘭は女神の末裔としてその神意を表すように争乱を終わらせ、同時に東西の対立の終焉も明言している。

これは一つの儀式でもあった。

青蘭は女神の依巫よりましとしてそこにあり、女神に仕える神官が彼女に頭を下げるのは理になつている。

じきに里桂が碧柊に続いた。同じ誓いをたて、神官がそれを聞き届ける。

その間、蒼杞はただ呆然と立ち尽くしたまま、その一幕を眺めているだけだった。

二人の後に続こうとした者が数名あったが、青蘭はそれを押しとどめた。かわりに碧柊と里桂に立ち上がるように促した。

「蒼杞殿の身柄を」

短い一言に、碧柊は無言でうなずく。太刀を抜くこともせず、手ぶらで歩み寄ってくる敵を、蒼杞は呆然と見つめている。

碧柊は父の敵であり、この事態をもたらした元凶の一人である男をしばらく無言で見つめていた。だが、結局は一言も発さず、険しいまなざしを向けることも、侮蔑の色を浮かべることさえせず、蒼

杞の得物を取り上げ、付き従ってきた里桂の配下の者たちにその身を拘束させた。

その一連の出来事は静けさのうちに成されたが、じきに大きな地響きがとどろいた。

「何事？」

それは西葉王家軍の後方から響いてくる。その背後に控えていた東葉軍が動いたものだった。

蒼杞の後方に明柊が控えていることは、青蘭たちもあらかじめ頭に入れていた。山を下りたところで東葉軍が動いたとしても、じきに天然の要塞である森へ逃げ込めるよう、その距離も計算されたものだった。

いよいよ東葉軍が動いたかと青蘭も顔をこわばらせ、いつでもきびすを返せるように身構えたところへ、直に報告がもたらされる。

「東葉軍が退却していきます」

その言葉に、青蘭をはじめ居合わせた者は皆啞然とした。ただ碧柊だけが、険しい顔で去っていく東葉軍をみつめていた。

「後を」

里桂があわてた様子でまず碧柊を見、それから青蘭を振り返った。青蘭はどうすべきか判断できず、碧柊をちらりと見る。まだ二人の関係は公にされていない。明らかに特定の誰かに頼っているという姿勢は見せるべきではない。こういう時であっても、青蘭は必死に衝動をこらえていた。

そんな青蘭の内心の動揺を見透かしたように、碧柊は里桂の傍らに近寄る。その動きはあくまで控えめであり、人の目を意識したものであった。

「まずは西葉の王家軍をとりまとめることが肝要。いたずらにはやめたところで、ろくなことにはならぬであろう。それこそ明柊のねらい通りになるやもしれぬ」

里桂にだけ聞こえる囁きだった。

里桂は頷くかわりに視線で応じ、青蘭に一礼してその提案を自分

の言葉として奏上した。

「わかりました。後の判断は任せます」

青蘭にこの事態をまとめる力はない。軍事的なことは、里桂を通して碧柊に一任することを明言し、青蘭はそつと碧柊を見つめる。

かすかに不安の揺れる眼差しに、彼はわざとらしく口の端を歪めてみせる。からかうようなそのいろに、青蘭は一瞬むっとしたが、じきに彼の意を悟って苦笑を浮かべた。こんなことで動揺してはいけない。

明柊が突然ここで背を向けたのは、ただの陽動とも思えない。共に長年戦ってきた碧柊が、そんな分かりやすい手に乗るとは、明柊も考えないのではないだろうか。碧柊は陽動かもしれないとは言っているが、本気でその心配をしているようではなさそうだった。

里桂率いる青蘭方の兵たちは山を下り、すでにその背後に整然と待機している。主を拘束された蒼柊方の西葉王家軍には、いったいなにが起こっているのか事情が伝わっていないようだった。しかし、まだ戦意を見せるものもある。それでもたいていのものは姿を現したのが本物の女王らしいと悟り、すっかり戦意を喪失していた。

里桂は蒼柊勢に向かって、正式に青蘭を女王にいただく王家軍への投降と、正当な女王に従うことを呼びかけるよう指示を出した。それでも逆らうものには容赦する必要もないと付け加えさせたのは、碧柊だった。青蘭は一瞬眉をひそめて碧柊を振り返ったが、厳しい眼差しを返されてわずかに怯んだ。

蒼柊方の処分を里桂に託した以上、その舌の根が乾かぬうちに異論を唱えたのでは、混乱をもたらすだけだ。それに軍の統率に関して青蘭には心得がない。感情だけで口を開くわけにはいかないことを、苦く実感する。

青蘭は小さく息を吐いて気分を落ち着け、碧柊に了解を示すようにならずき返した。

里桂の命令はすみやかに実行に移された。所々で小競り合いは起こったが、それはたいした騒ぎとはならなかった。

そんな最中、ある一報がもたらされた。それは明柁が突然去った真の目的についてであり、さらに青蘭を驚かせたのはその知らせの送り手の正体だった。

## 終章 23 (ひとまず完結)

ほどなくして、無事に保護された雪蘭が連れてこられた。

身分の高い女性がそうするように、彼女も被衣かつきで身を覆っていた。その足取りはしっかりしている。

案内をする青年は若い貴族。岑しん袁柳えんりゅう、雪蘭の義兄にあたり、岑本家の当主だった。彼もまたこの戦いに、はやくから参じていた。

ざわめきの中、まっすぐに青蘭のもとへ案内されるその女性が誰なのか。承知している者は数名だ。

青蘭は太刀の柄を握りしめ、緊張した面持ちでその人をひたすら見つめている。

しばらくはじっと耐え忍ぶように息をつめてそうしていたが、ついに我慢しきれなくなつたのか。四方にきらめく滴を蹴散らすようにして、一、二歩歩みだし、それすらもどかしげに駆け出した。

そのまままっすぐに駆け寄る。その先にいた袁柳が、行く手を遮らぬよう遠慮がちに体をどかす。

青蘭はそんな袁柳の配慮にすら、気付いていなかった。

ひたすらに雪蘭の顔があるであろう位置を見つめたまま、すぐりつくようにその両手に腕をかける。それに応じるように彼女の指が動くと、青蘭はひどくほっとしたのか、泣き出しそうな顔でかすかに笑う。

片方の手でその面を隠す布をそつとかきわけ、彼女の顔を確認する。

薄絹のかけではほほ笑む面は、間違いない大切な従姉のものだった。記憶にあるよりも窶れ、疲労の陰が濃い、鏡に映したような面差し。だが、誰ももうこの二人を間違えることはないかもしれない。

青蘭は一瞬息をのんだ。

言葉にならないのか、何度か口を動かしたが、結局食いしばるよ

うに唇を引き結ぶ。

その口元に、細い指先がそつと触れる。

「青蘭」

被衣の影でやわらかな声が優しく名を呼び、包み込むような笑みが広がる。青蘭は目をみはった。

かすかに口を動かしたが、やはり声にはならず。かわりに彼女の首に腕を回し、細い体を抱きしめていた。

言葉のかわりに涙が溢れる。渾身の力で従姉を抱きしめ、声もなく体をふるわせる青蘭を、雪蘭もそつと抱擁を返す。

すがりつくように抱きついた青蘭に対し、それを抱きとめ、傍目にも優しく抱きしめる雪蘭の様子は、まさしく姉と妹のようだった。

「良かったわ 元気そうで」

万感の想いを言葉にできない青蘭の心中を察したように、雪蘭がささやく。青蘭は従姉の肩に顔を埋めたまま、何度も小さく頷く。

もともと青蘭は、そう容易く涙を見せる方ではない。だが、雪蘭の前でだけは別だった。

そんな二人の様子を離れて見守っている碧椋に、里桂がそつと話しかける。

「ようございましたな」

「姉妹同然に育ったと話しておられた故、な」

そういつて、あらためて二人を見つめる元東葉王太子の眼差しはやわらかい。

しばらくの間、雪蘭はあやすように従妹の頭を撫で続けていた。

やがて体を拘束する力も緩んでくる。それを機に、そつと青蘭の肩を掴んで体を少し離し、その顔をあげさせた。

「青蘭、積もる話はあとでしましょう。それよりも今はやるべきことがあるでしょう あなたは女王なのだから」

諭すような言葉に、青蘭はようやくその腕をとく。こぼれる涙を指先で拭い、しゃくりあげる息を整えるように小さく息を吐いた。

雪蘭は青蘭にだけその顔が見えるように、そつと被衣を持ち上げ

てその影で微笑んだ。

「私は」

「あなたは私にとっては大切な妹。それは今でも同じこと。あなたが王女であるうと、女王となるうと」

「……私もよ」

青蘭はやつとの想いで、かすかに笑みを浮かべる。雪蘭は潤んだ眼尻にたまった涙を指先で拭ってやり、薄い背にそつと手を添わす。「明柊殿は翼波を葉に招き入れようとしているわ。それを明柊殿の率いる軍も知らされてはいない。早く手を打たないと、内乱どころではなくなるでしょう」

雪蘭はなるべく穏やかな口調でそう話す。

それはあらかじめ知らされていたものではあったが、青蘭はそれを未だに受け止め切れていなかった。

翼波の脅威は、西葉には詳しく伝わっていない。

だが、青蘭だけは碧柊の言葉を通して、それがどれほどの大きな危険となりうるかをおぼるげに理解しつつあった。

「その通りだわ」

青蘭は肩におかれた雪蘭の手をそつと握り返すと肩からおろし、小さく頷いた。そして、くると振り返る。

毅然と肩をそびやかし、まっすぐに前を見据える。その表情を目にした碧柊や里桂は、自然と頭を垂れていた。

踏み出す先には難題が山と待ちかまえており、青蘭一人で乗り越えていけるものではない。それは青蘭自身理解しており、支えてくれる人々がいることもわかっていた。

その後、国境を越えた翼波は東葉王都にまで迫った。

軍を率いて東葉に戻った明柊は、そのまま翼波と対峙すると見えた。しかし、その間際になって態度を豹変させた。

明柊の乳母子である苓秦れいしんき旗率いる苓家の軍が、突然同じ東葉軍に刃を向けた。

突然のことに東葉軍は一気に崩壊した。そこへ翼波も攻撃に加わったため、苓家軍に属するもの以外で、生き残ったものはごくわずかだった。

そのため、その報が西葉の青蘭たちや、東葉南部で動いていた蕞さん綾りょうりん縹りょうりんのもとへ届けられたのは、遅くなった。

その間に、明柊は翼波をさらに東葉国内深くまで侵入させた。

なんとか両国の軍を再編し、東葉南部をまとめる綾縹と連携をとり、翼波に対抗できるだけの態勢が整う頃には、東葉王都をどちらが押さえるかというまでに事態は悪化していた。

翼波兵は、優れた資質を持っているものが多い。その前に練兵の行き届いた東葉軍は苦戦し、西葉軍にいたっては軍そのものがそもそも脆弱だった。

両葉の軍は総数では翼波を上回ったが、翼波は精鋭ぞろい上に、葉の地理やさまざまな内部事情に精通した明柊までもが敵に回ったため、そう易々と片は付かなかった。

それどころか、連携のうまくとれない統一葉軍の隙をつかれる形で負けを喫した。勢いに乗った翼波はさらに西進し、一時的とはいえ、西葉にまで侵入を果たした。

いくつもの戦いが繰り返された結果、自然と全体の統率を碧柊が掌握するようになっていった。

西葉の貴族層出身の将たちは翼波との戦いの経験がなく、軍事的な才を持つものも少ない。有能な側近を持つものもわずかだった。そんな中で確実に戦いを有利なものとし、冷静に采配を振るう碧柊への信頼は、西葉内部においても着実に増していった。

東葉の兵はもとも王太子であった碧柊への信頼は厚い。このような形で祖国を裏切った明柊への恨みは深く、その分碧柊への敬愛にも似た想いは増していく。

明るさと親しみやすさで人望を集めていた明柊とは違い、物静か



で穏やかな碧柊は、側近のものをのぞけばどちらかといえば遠巻きにされてきていた。

そんな彼がいざ戦いとなれば冷静であり、時に勇猛果敢にして、鮮やかに采配を振るう。その姿は確実に尊崇の視線を集めていった。東葉南部と西葉の再編を終えると、次第に形勢は葉に有利なものへと変わっていった。

青蘭は正式に碧柊に軍の全権を預け、東葉から翼波を完全に排除するには2年近い月日を要した。

その間に青蘭は元東葉王太子である碧柊を夫として迎えることを明らかにした。

葉の統一を象徴するものとして、これ以上はない組み合わせであった。対翼波戦で積み上げた戦歴と、その立場をわきまえた言動で人望を厚くしつつあった碧柊が、王配となることに異議を唱えるものは少なかった。

ほどなくして二人の間には女兒が誕生し、次代の王位後期者として期待を集めることとなる。

同時に100年にわたり王女の誕生をみなかった東葉王家出身の碧柊を、夫として迎えることに異議を唱えていたものも、その婚姻を認めざるをなくなった。

青蘭が王女を生んだことこそが、その結婚が女神の意に叶っている証であるともいえた。

動乱の中で統一を果たした“葉”<sup>よつ</sup>は、そのもつとも多難な時期を乗り越え、新たな時代を築いていくこととなる。

< 完 >

終章 23 (ひとまず完結) (後書き)

このあとに、青蘭と雪蘭のエピソードが幕間として入ります。そちらをお読みになれるかどうかは、お任せいたします。

## 幕間（前書き）

青蘭と雪蘭のエピソードになります。

結末にかわりはありませんので、お読みになられなくても支障はありません。

## 幕間

青蘭との再会がかなってからほどなくして、雪蘭はひそかに聖地に逼塞した。

最も濃い王家の血を引きながらも、王家の所有する奴婢であった母を持つ雪蘭もまた、母と同じ身分とされる。しかし今は、岑家の養女であり、大貴族の姫である。

父の意向で生まれてすぐに岑家の養女となった雪蘭は、岑家の子供たちと共に育った。そんな経緯もあり、雪蘭は現在の岑家当主袁柳とも親しい。

にもかかわらず、彼女は岑州へ戻ることを望まなかった。

岑家の城には、今でも雪蘭の母蓮霞れんかが健在だ。蓮霞とも面識のある青蘭は、生母との再会を望まない素振りの雪蘭に、首をかしげた。青蘭の目からすれば、蓮霞は特に問題のある女性ではない。美しく穏やかで、未だに十分魅力的な女性でもある。

うまれてすぐに母を失った青蘭からすれば、自慢にはなっても、忌避する理由が見つからない。

納得できないでいる青蘭に、雪蘭はただ「お会いしない方がいいの」と答えるのみだった。

彼女が岑州へ戻らないこと理由は、もう一つある。

寄州の戦場での再会で、二人が従姉妹同士であり、女王である青蘭が雪蘭に深い信頼と愛情を寄せていることは周知の事実となってしまうた。

その上、二人は入れ替わることができるほどに、相似性の高い容姿をしているということも知れ渡ることとなった。

実際、雪蘭がどの程度女王と似ているのか。それを己の目で確かめたものはごくわずかだが、偽の女王として明柊を欺いたことは周

知の事実でもある。

その結果、雪蘭に興味を抱くものは多い。たいていは下世話な好奇心の域を出るものではないが、中にはその容貌や立場を利用しようとするものが現れてもおかしくはない。

それ故に、雪蘭の所在は秘した方が良い。それは雪蘭だけの意見ではなく、里桂や碧柊も同意した。

青蘭は再び雪蘭と離れることに難色を示したが、雪蘭自身に諭されて不承不承ながら彼女を見送った。

不安定になる一方の国内情勢の中、比較的事情が安定しているのは聖地だった。山の懷に抱かれ、正面に広大な湖を控えた聖地は、天然の要害の地でもある。

翼波の西葉への侵入が迫ったときには、一時的に青蘭もこの地に逃れた。

翼波が国内から一掃されるまでの2年間。翼波と戦うために不在がちな夫や側近たちの留守に、青蘭はひそかに不安を感じ続けた。

久しぶりに再会のかなった青蘭は、かつてのように雪蘭に傍らにいてほしいと望んだ。しかし、彼女はそれをやんわりと拒んだ。

「あなたはもう女王として即位したのよ。私の役目はもう終わったの。最初の予定通り、あなたが妃として東葉にあつたなら、私もただの女官としてそばにいられたでしょう。けれどあなたは、女王として即位することを選んだ。夫である碧柊殿と協力して新しい“葉”を治めていかなければならない。私はいつまでもあなたのそばにいるべきではないわ。確かにあなたは私にとって、大切に親しいかけがえのない人。けれど私は岑家の養女に過ぎず、あなたは女王。私たちが互いに互いに親密であっても、それは他者には関わりのないこと。私たちはそれを弁えておかなければならないわ。親交を断

つ必要までではなくても、距離をおいた方がいいでしょう　わかる  
でしょう?」

たとえば、これまでと同じように後宮にあつてごく控えめに青蘭を補佐しようとしたところで、二人の関係はすでに周知のものとなっている。ましてや情にほだされやすいと思われがちな女王のそば近くに、ともに育ち心を許している従姉がづねにはべつているとなれば、必ずそこにつけ込もうとするものが出てくるだろう。

政治にはいっさい関わらないとしたところで、二人の親しいつながらりをどんな風に利用しようとするものがあるか。それはいかに聡明な雪蘭であっても、防ぎきれるとは限らない。

ましてや東葉王家出身である碧柊を王配として迎えたことに反感を抱くものは多く、そんな西葉貴族と東葉貴族の溝は深い。

今は翼波という共通の敵を目の当たりにしているため、顕著な問題とはなっていない。しかし、国内が治まれば、真つ先に、そして長く深刻な問題として引きずることになるのは明らかだ。

そして雪蘭は女王の従姉というだけでなく、紅桂王太子の忘れ形見でもある。人望の厚かった亡き王子のその血筋に、想いを寄せるものは未だに少なくない。

そんな事情を持つ碧柊と雪蘭が、ともにようやく統一なった“葉”の女王のそばにあるのは、いつか火種となるかもしれない。たとえば、雪蘭と碧柊、当人たちにそんなつもりはなくても、だ。

西葉女王という立場のため、統一された葉の女王としての即位という思いがけない選択を迫られた青蘭には、それがわかつている。

雪蘭が皆まで云ってきかせなくても、青蘭は伏し目がちに寂しげに微笑んだ。

「……そうね、わかつていたわ。わかつていたけれど……駄目ね、やはり私はあなたに頼ってしまう。これは私の弱さ　あなたが近くにおいてくれる限り、私は必ず無意識であれどうであれ、きつと頼ってしまうわね」

「おそらくはそうなると思うわ。あなたが頼るべきは私ではない。

碧柩殿であり、信頼できるほかの人たち。けれど、私はいつまでのあなたの姉で、従姉で、友人よ　なにがあっても私はあなたの味方。それだけは忘れないで」

「……忘れないわ」

そういつて微笑む青蘭の頬を伝う滴が、雲の切れ間からさしこんだ陽光をはじいた。雪蘭はまぶしげにかすかに眼を細め、静かに従妹を抱擁した。

「私は女王としての役目を全うするわ　雪蘭、あなたは どうするの？」

青蘭のために、父の命で奥の宮に入ったのは八つの時。それからずっと雪蘭は従妹のために生きてきた。それは青蘭も承知していた。本来なら、雪蘭はずっと青蘭のそばにいるはずだった。彼女自身そのつもりでいたし、だからこそ東葉に輿入れする青蘭につき従ったのだ。それが思いがけないことから想定していた未来が狂い、一時はもう二度と生きて会うこともできないと覚悟すらした。

それは杞憂で終わったが、やはり女王となった青蘭のそばにいつまでもいるべきではない。何事も青蘭のためと思うなら、身の引き際も弁えるべきだと、雪蘭は離れていた時間に思い定めていた。

「それはこれから考えるわ。思いがけず機会を得たのも、有意義に使わなくてはね」

さびしさをにじませず、むしろ楽しげに考え込むような素振りをしてみせる従姉を、青蘭はものいたげな表情で見つめている。

雪蘭にとって青蘭が大切であるように、その逆も同じだった。

文字通り姉妹のように育った青蘭には、雪蘭の心中をうかがうこととはある意味容易い。雪蘭が青蘭の前でだけ見せる顔があることも承知している。いくら上手に雪蘭が自分の心を偽っても、本質的な意味でごまかすことはできない。それが二人の絆の証でもあった。

「いつでも会いに来るわ」

「本当に？」

「ええ、本当よ」

きつぱりと雪蘭は断言して微笑んだが、それでも青蘭は不安そうだった。

彼女の言葉を疑っているわけではない。雪蘭が必要もないのに青蘭に嘘をつくことはない。それでも素直にその言葉を受け取れなかったのは、なにかしら予感めいたものを感じていたためかもしれない。

そんな不安とも予感ともつかない感慨に、複雑な表情をせざるをえない。そんな青蘭の心のうちまでも、さすがの雪蘭も読みとることはできなかつた。

けれど青蘭にはそれ以上追求する言葉も手がかりもなく、ただなんとなく不満というよりは心細げに、不承不承うなずいた。

互いに納得したわけではないという空気を感じつつも、二人は意味もなくほほえみを交わす。

そこでふと思いついたように、青蘭がつぶやいた。

「 明柊殿の本当のねらいはなんだったのかしら」

その表情に負の感情はない。それを雪蘭は静かに見つめる。

「 何故、今さら、そんなことを？」

一連の争乱を仕掛けた張本人である明柊の狙いは、東葉の王権、ひいては西葉をも含む“葉”であつたとされている。

それが青蘭をはじめとする新たな“葉”政権の見解である。それに基づき、翼波に対して明柊の身柄を引き渡すように、正式な申し入れもなされている。

翼波からの回答はなかつたが、まるでその返答のように、当の明柊を対葉戦の要職にとりたてている。葉側はそれを回答とみなし、翼波を攻める根拠の一つとしている。

翼波の手先となつた明柊への王族や貴族たちの憎悪は増すばかりで、戦いを勢いづける一因ともなっている。

青蘭もあえて、それに水をさすような言動をとつたことはない。

しかしそれはあくまで表向きのことであり、こうして雪蘭と話している彼女の気色はあくまで穏やかだった。



「碧椏殿は明椏殿に対して恨みは抱いておられないようなの上を喪われたとしても」 父

「……だから？」

「明椏殿の行動に おかしな言い方もしれないけれど、納得できるだけの根拠をお持ちのように思うの」

「それについて話し合ったことはないの？」

「あるわ けれど、はつきりしなくて。身内のことだから、と」

「 お二人の間だけで通じるなにかがあるのかしらね」

「 そうなのだと思うわ」

「 たとえば、私たちのように？」

「 ええ」

青蘭は小さく頷き、まっすぐに従姉を見つめ

言葉にはせずとも、“ なにか ” は伝わる。その確信を、雪蘭にも同意を求めるような眼差しだった。

雪蘭は、青蘭のかわりに明椏の元に身柄のあつた間のことをほとんど語らない。

その間に明椏や蒼杞がどのような言動をとったかということは、公の場で詳細に証言している。それらは他の情報とも矛盾していないため、疑われることはない。

だが、雪蘭と明椏の、個人の間のこととなると、彼女は静かに何事もなかったと微笑むだけだった。その真相を勘ぐる者もいたが、青蘭は彼女の言葉を信じていた。

青蘭が明椏とかかわったのはほんの短い間であり、そのほとんどが碧椏とともにからかわれていただけのようなものだ。それでもそのときだけの印象で、彼が女性にむごい真似をするとは思えなかった。

何事もなかったという雪蘭の言葉は、おそらく本当なのだろう。だが、何事もなかったということが、どんな影響も及ぼさなかったということにはならない。

「 雪蘭、あなたにとって明椏殿はどんな方だったの？」

遠慮のない言葉は、この二人の間柄だからこそ許されるものだった。これ以上はないというほど、互いに互いを大切に思っている。それは無遠慮な言葉が許されるというものではない。

核心を明らかにせず曖昧にはぐらかすのではなく、互いのことには真摯に向き合う。それが重要だと確信したとき、二人は昔から曖昧なまま問題を回避することはしてこなかった。

まっすぐな従妹の言葉に、雪蘭はわずかに眼を伏せ、小さく息をついた。

それがごまかすための時間稼ぎなのか、本当に戸惑っているのかを見分けることは、青蘭にとっては他愛もないことだ。

雪蘭は思わせぶりな態度で他人を翻弄するような真似はしない。とっさに言葉が返ってこないということは、すなわちそういうことなのだろう。

「……一言で表すなら、つかみ所のない方だったわ。人を翻弄するのを楽しんでおられるようでいて、それが本当に彼の真意なのかと疑ってしまうような節もあって。それすらも他人を惑わせるための彼の演技なのか、それとも偽るところのない本意なのか、結局、見極めることはできなかった」

それは雪蘭の本音のようだった。

困惑気味の眼差しと、うすい苦笑が口角を歪める。青蘭とてそう何度も眼にしたことはない表情。実年齢にふさわしいあどけないものだった。

「なにがあつたというの　それとも、なにがなかったの？」

青蘭はかすかに首を傾げる。好奇心などではなく、純粹に従姉を思いつての言葉であることは、雪蘭にもわかつている。

「なにも　世の人たちが噂しているようなこともなかったわ。あの人は私を言葉でなぶりはしても、体には触れてこなかった。言葉でなぶるにしても、それは残酷なものではなかったわ。からかいの範疇を越えることはなかった」

「明柊殿らしいわね」

「そうね　あくまでからかって楽しむだけの……どれが冗談で、なにが本音なのかさえ、見当もつかなかった」

青蘭は、そこに碧柊と同じ複雑な逡巡を見いだした。

明柊を憎む理由を、彼らはそれぞれに持っている。碧柊に至っては、それが烈しいものであってもおかしくない。けれど、彼の口から従兄を罵る言葉はついにでてこなかった　ただ一点、彼より先に青蘭に触れたということのをのぞいては。

雪蘭は、明柊の罪状をあげる公の場では確かに彼を告発した。それは間違いなく彼が重ねた国を裏切る数々の行為であり、責められるべき罪状であった。

だが、こうして私的に言葉を交わす場面で、彼女が彼を責めたことはない。それは碧柊と共通している。

彼は確かに罪をおかしたが、その当事者からそれを責める言葉が、彼ら自身の言葉として出てこない。

むろん、明柊が引き込んだ蒼杞によつて、甚大な犠牲をだした東葉貴族たちにあつてはそうではない。家長を喪つた次代の家長たちは肉親を殺された恨みを最大の源に、翼波との戦いにのぞんでいる。これまで以上に翼波との戦いが激しいものとなっているのは、故国を守るといふ目的だけでなく、明柊をかくまっていることへの憎悪の深さがある。

その分、感情的になりすぎて無謀な戦い方をするものが少なからしい。それが碧柊の悩みのもなっている。

それが大方の見解であり、雪蘭と明柊が特殊な事情だということ、青蘭もわかっている。

そして碧柊は彼ともっとも親しかった人間であり、雪蘭もあいつ状況にあつたとはいえ、彼と過ごした時間は短いものではない。

そんな二人から憎悪する言葉が出てこないことに、青蘭はそれこそが明柊の本音や真意を知る手がかりとなるではないかと思つていった。

「一つだけいえることがあるとすれば、約束は守る方だったわね」

しばらく無言で空を見つめた末に、ぽつりと雪蘭の口からこぼれた言葉だった。

その約束は青蘭も知っている。そもそもそれは本来、苓南れいなんの皆で青蘭と明柊の間で交わされたものであり、雪蘭はそれを彼の口から知らされていた。

「そうだったわね。彼は私との約束を果たしてくださいました」

青蘭はそつと従姉の手に触れる。

それにも気づかず、深く考え込むようすで、遠くを見つめる彼女の視点は定まっていな。青蘭はその不安定さに不安をおぼえる。

「あれはあなたとの約束だったわね、そういえば」

「そうよ」

青蘭の返答に、雪蘭はゆっくりと視線をもどして従妹の面をとらえる。不思議なほど深い眼差しだった。

その深さに青蘭はかすかに肌の粟立つのを感じた。

「私は……」

雪蘭のふっくらとした形のよい唇が止まる。それ以上の言葉を紡ぐのをためらうように。

その逡巡の正体を、青蘭は本能的に悟った。

「彼はあなたともなにか約束を？」

「いえ、なにかを約したわけではないわ……ただ……」

「ただ？」

青蘭の繰り返しに、雪蘭は無言で首をふった。まるでその続きを拒絶するように。

やがて、彼女は薄く笑った。

「約束などしてはいないわ」

しずかな言葉に、青蘭は曖昧に微笑んだ。

共に育った時間。共有する想いは多く、それ故に互いのことをまるで己のことのように感じることはたやすかった。

だが、別離を強いられた時間にそれは喪われてしまった。互いに共有できない想いを重ね、ついには隣にすらいられないほどに立場

も異なってしまうた。

逃亡の日々のこと、西葉に帰りついてからのこと、そして雪蘭と再会できるまでのことを、青蘭は従姉に語るには言葉が足りないほどの想いを抱えているはずだった。だが、実際に二人きりの時をもつても、あふれるはずの言葉は出てこなかった。想いはあふれず、かわりにただ言葉少なに互いの無事を喜び、静かにけれどしっかりと抱擁を交わせば、それで気持ちはおさまってしまった。

言葉のあふれ出なかったことに寂しさは感じてても、不思議には思わなかった。そして雪蘭が語る言葉も淡々としたものだった。そこに嘘はないが、あふれるような想いもない。もともと言葉数の少ない雪蘭ではあるが、そんな彼女にしても語られることはわずかだった。

心が離れたわけではない。雪蘭よりも大切な人ができたわけではない。それでも、もはや想いを共有する必要のないことに、互いに納得している風であるのは、寂しいことではあっても、それ以上のことではなかった。

青蘭は青蘭であり、雪蘭は雪蘭であり。互いに姉妹のようであり、親友であっても、それ以上にはなりえない。

もし、雪蘭だったらどうするか。青蘭はいつしかその思考方法から脱却していた。

「なにがあっても私はずっとあなたを想っているわ」

従妹の言葉に雪蘭はわずかに目をみはった。彼女の言葉はひたすらかたく秘してきた雪蘭のなにかを、確実に明らかにしていた。

雪蘭は伏し目がちに小さく微笑むと、言葉の代わりに抱擁をかえした。

## 幕間（後書き）

これにて終幕となります。

他にご希望のエピソードなどお聞かせいただけると参考にさせていただきます。ただし、申し訳ありませんが、ご希望に必ず添えるとは限りませんので、あらかじめご了承ください。

後日譚 徒花のしずく(紅蘭のお話)(前書き)

救いのない後味の悪いお話です。事前にご了承ください。

## 後日譚 徒花のしずく（紅蘭のお話）

私がお仕えした姫さまの御名は、葉紅蘭さま。葉王家直系の姫さまです。

お母上は先代女王葉青蓮さまの同母妹であられた、紅蓮さまです。お父上も王族であり、お従姉にあたられる青蘭さまに次ぐ王位継承権をお持ちでした。

青蓮さまと紅蓮さまは姉妹そろって生来お体が弱く、姫君をご出産されると間もなく逝去なさいました。

特に青蓮さまは第一子である男御子をご出産なさったあと、ひどく健康をそこなわれ、床に伏せておられることが多くなられたそうです。その状況が一年ほど続いた末に、第二子をご懐妊なされました。

ご出産までお命が保たないのではないかと周囲のものたちは心配しましたが、辛うじて無事に姫君がお生れになりました。

青蓮さまはその日のうちに息を引き取られたそうです。まるで今生の役目を果たし終えられたかのように。

紅蓮さまも同じような運命をたどられました。

ご懐妊を機に床につかれることが多くなり、紅蘭さまをご出産なされたのちは、枕から頭をあげることさえ難しいほどの衰弱ぶりでした。そしてほどなくして、お姉君のあとを追うように儂くなられました。

享年18。まだ咲き初めの花のような乙女であられました。

「女神の血脈は、その親の血と肉と命をくらってはびこるのだな」妻の死を看取ったのち、うまれたばかりあどけない娘の寝顔を見て、禍言を呟いたのは青蓮さまの背の君、翠桂さまだったそうです。翠桂さまは兄君にあたる紅桂さまが王太子の地位を自ら退かれたため、急遽王太子とられました。

もともと青蓮さまは紅桂さまとご婚約なさっておられたのですが、



紅桂さまの廃太子にともない、弟の翠桂さまとご結婚なされたのです。

そのような経緯にもかかわらず、お二人の仲睦まじさは王城では有名でした。

翠桂さまは、その後二度と青蓮さまの忘れ形見である青蘭さまの顔を見ようとはなさらなかったそうです。

もともと青蓮さま以外の女性を身近にお寄せになられなかった翠桂さまは、後宮に足をお運びなさらなかったそうです。

前置きが長くなってしまいました。

葉王家直系の王女は、王城でお育ちになるのがしきたりです。紅蘭さまも父上とは離れて後宮の一角でお暮らしでした。

青蓮さまと紅蓮さま亡き後の後宮の主は青蘭さまでしたが、父上から見捨てられたような形の姫君は軽く見られがちでした。

それに引き換え、紅蘭さまはお父上から大切にされておられましたが、たとえ父親であってもそう度々後宮を訪れることは許されません。

お母上を早くに亡くされ、お父上とも頻繁にお会いすることもかなわず。紅蘭さまも親子の縁は薄かったと言えましょう。

私はもともと紅蓮さまにお仕える女官でした。紅蓮さまが亡くなられたのちは、そのまま紅蘭さまのお世話をさせていただくこととなりました。

お仕える身でこのようなことを申し上げるのは無礼なことかもしれませぬが、紅蘭さまは赤子の頃からたいそう美しい姫さまでいらっしやいました。

今やご即位なさった青蘭さまこそが当代一の美女という評判ですが、紅蘭さまも決して引けをとられぬはずです。

透けるように滑らかな白い肌は瑞々しく、たつぷりと背を覆う髪は漆黒でまるで濡れたような艶を保っております。くつきりとし

た二重の目元は涼しく、やや物憂げでもありますが、烏玉おぼたまの瞳は底知れぬほど透徹です。お顔立ちやお容貌すがたは、神殿を飾る遠つ御祖みおやでもある女神の像に生き写しです。まるで古くからあるはずのご神像が、紅蘭さまのお姿を写し取ったようですらありました。

王家直系の姫君は、容易く縁づくことはできません。その高貴なお血筋に見合うお相手があれば幸い。その生涯を独身でお過ごしになることも珍しくありませんでした。

紅蘭さまには、青蘭さまの兄上にあたられる蒼杞そうけいさまというふさわしいお相手がいらっしやいました。

それを幸いと言っべきかどうか。

本来はこのような身の私が申し上げるべきことではありませんが、紅蘭さまにとっては幸いとは言い難いことでした。

紅蘭さまと蒼杞さまのご縁組みはごく自然なものでありました。

むしろ、青蘭さまと釣り合う王族のいらっしやらないことが問題となっておりました。

当然のようにしてご夫婦となられたお二人ですが、少なくとも紅蘭さまにとっては幸せなご結婚ではありませんでした。

その初夜からして無残なものでした。

もともと口数の少ない内気で物静かな姫さまでしたが、蒼杞さまを背の君となさってからは、表情というものをいっさい失っておしまいに、やがては生ける屍のようになってしまわれました。

蒼杞さまの周辺には怪異な噂が常に付きまっております。

紅蘭さまのお命があっただけ幸いだったというべきなのかもしれません。

青蘭さまと同母兄妹関係であられた蒼杞さまは、まさしく麗しい若君でいらっしやいました。目を奪われぬ者はなく、女たちはただただ溜息をつくしかないほどの男ぶりでした。

そのような蒼杞さまにとって、紅蘭さまの常ならぬ美貌も取るに足りぬものだったのかもしれませぬ。

毎夜のようにおとないがありました。紅蘭さまのご懐妊が明ら

かとなるとその足はびたりと絶えてしまいました。

月満ちて、紅蘭さまは姫君をお産みになられました。

その報せに蒼杞さまはお喜びになられたそうですが、ただの一度もわが子の顔を見ようとはなさいませんでした。

ご出産ののちも、蒼杞さまが紅蘭さまのご寢所に足を運ばれることはありませんでした。

そのことに紅蘭さまにお仕えする者たちは皆、胸をなでおろすような次第でございました。

それからほどなくして蒼杞さまは王権を狙って東西の葉を巻き込む争乱を企てになったものの、結局は妹である青蘭さまを奉戴する勢力に破れました。囚われの身となった蒼杞さまは、父である翠桂さまを害した尊属殺人と国を裏切った罪で、処刑されてしまわれま

した。紅蘭さまは罪人の妻という立場に立たされてしまわれましたが、罪に問われることはありませんでした。そばにお仕えするものたちは、完全に蒼杞さまと縁が切れたことに安堵するばかりでした。

問題となったのは、お二人の間にお生まれになった姫さまの処遇です。

青蘭さまが王女をお産みになるまでは、次の世代の王位継承権を持つのは紅蘭さま所生の姫さまとなります。しかし、その父君は罪人である蒼杞さま。それでも直系の血筋であることに重きが置かれるのです。

けれど、その問題も間もなく青蘭さまが姫君をお産みになられたことで解決となりました。青蘭さまはその後も次々と姫さまをご出産なされ、王位継承にまつわる懸念は解消されることとなりました。それでもなお、紅蘭さまとそのご息女である姫さまが王位に近いことに変わりはありませんでした。

罪を問われることがなかったからこそ、そのお立場は微妙なものとなり、ついには母娘ともども聖地に隠棲という形での幽閉ということになりました。

いよいよ王城をあとにするという前夜、その事件は起こったのでございます。

深更の頃でございました。

いつもはお子様と寝所を別になさっておられる紅蘭さまでしたが、その夜は珍しく枕を並べておられました。

いつものようにそおつと女官がお休みのご様子をうかがいに参ったところ、紅蘭さまはまだご起床でした。その傍らで幼い姫さまは熟睡なさっておられるようでしたが、実はすでにこと切れておられたのでした。

手を下したのは紅蘭さまでした。自らその罪をお認めになられたのです。

幼い姫さまは愛らしく、母君ゆずりの美貌のお美しい方でした。

紅蘭さまにお仕える女官たちは皆、その母君と同等に幼い姫さまを溺愛しておりました。

紅蘭さまの早まった仕儀を、女官たちは口々に嘆きました。

紅蘭さまはただ静かにこう仰せられたのみでした。

「誰がただ純粹にこの子を愛してくれるかというのです。損得抜きでこの子を愛してくれるものがあるかというのですか。この子にはただ、駒という以上の価値はないのです」

ご出産ののち、紅蘭さまがそのお腹を痛めたお子様を腕にお抱きになったのはただ一度、その稚いお命をその手におかけになったその時のみでございました。

<了>

## 後日譚 幾重の時（碧柙と綾羅）

長い回廊を、彼は感慨深そうな面持ちで歩いていった。

到着後すぐに、長旅の汚れを落とすよう指示された。

用意されていたやわらかな湯は、疲れを癒す薬湯だった。

体のあちこちにあった傷はふさがったが、完全に回復したわけではない。後遺症が残った上に体力の落ちた身には、楽な道中ではなかった。

風呂上がりにも薬湯で割った酒が供され、誂えられた衣も肌ざわりはやわらかく、軽く暖かいものだった。略装に気がつけば、問いかける前に女官が応じた。

「あくまで非公式なものですから、これをとということご配慮です。一晩ゆっくりお休みいただくべきところを、無理をさせるのだからとの仰せでした」

彼の主人は、今回の訪問についても無理をせずとも良いと、何度となく念を押してくれたのだか、いざ到着してみればその日のうちに顔を見せると伝えてきた。それは彼にとっても願ってもないことだったのだが、こうして気遣いを感じると面映ゆくもある。情に流されやすい一面は相変わらずらしい。

確かに正装は今の彼の体には堪える上に、疲労も増す。略装の許しはありがたかった。

それと同時に、短期間のうちに彼らの関係が、以前ほど気軽なものではなくなってしまったことも痛感する。

内乱に次ぐ建国にも相当する制度の一新で、彼は主人のそばに侍る資格をもつ役職を失ってしまった。

改めて側近として遇されることは決まっているが、それは以前と同じにということではない。彼の主人の身分ももとのままではない。国の統一は両国の優れた人材の集結であり、女王の周囲にはこれまで名の知られることのなかった顔触れも散見する。

小姓の手を借りて支度を終えると、控えていた女官が先導にたつ。彼女は女王夫妻の身辺に仕えているらしい。

これまで女官は私的な生活の場を支えるもので、公に姿をあらわすことはなかった。東西どちらにおいても、王城におけるその線引きは厳密なものだったが、内乱で城でも多くの人材が失われ、どの部署も人手不足に悩まされている。

これまでその存在を後宮に隠されてきた女王が、往古のように表舞台に立つこととなったため、彼女に仕える女官も公の場に姿をみせるようになったらしい。

彼女もそんな変化の一端なのだろう。旧習にこだわり顔をしかめる老臣はほとんど肅正されてしまったこともあり、古いしきたりより合理性が優先されつつある。

王城以外の場、王統家ですら女性も公的な場所に姿をみせる。やがては王城でもそれが当然となるのかもかもしれない。

彼が西葉の王都を訪ねるのははじめてではない。

戦勝国の将の一人として来たことが何度かある。しかしこうして城の奥深く、私的な空間を歩くのははじめてだった。無残な廃墟となった東葉の王城とは異なり、精練された美を誇る西葉王宮は彼の目を奪う。

改築と増築を繰り返されてきた王宮内部は複雑極まりない。女官は迷うことなく彼を主人のもとまで案内した。

そこは私的な居住空間であるが、奥の宮ではなかった。

代々の王が使用してきた空間を、女王夫妻も住まいとしている。非公式の私的な客はこちらに案内されるものらしい。警備は厳重だがものものはない。近衛たちの間を忙しそうに行き来する女官たちの姿が、その空気を和らげている。

二人の近衛が扉の前に立っていた。女官の姿を確認すると、彼らは一礼し扉を開いた。

通されたのは日当たりの良さそうな南向きの部屋だった。すでに

夕暮れが迫っているため、窓の向こうは薄暗い。

豪華さよりも居心地の良さがより強く感じられる部屋だった。中央に置かれた円卓と椅子には二人の姿があり、立ち上がった方が彼の主人であり兄弟同然でもある人物だった。

彼は浅く一礼する。主は足早に歩み寄ると、そんな彼を軽く抱擁した。

「真に無事だったのだな」

その声には万感の想いがこめられている。あまり感情をあらわにすることのない主だが、共に育った彼には手に取るように伝わってくる。

「はい、再びお目にかかることができませんでした」

「疲れておるだろうに無理をさせてすまぬな。どうしても早くそなたの顔を見たいとおっしゃられてな」

「あら、人のせいになさるのですか」

気がつけば傍らには華やかな姿があった。春を想わせるやわらかな色合いの衣を重ね、横の髪を小分けにして飾りを編みこんでいる。後ろの髪は長いままに背へと流されているが、通常の女性の髪としては明らかに短い。それで彼女が誰なのか、彼には一目で分かった。彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべて、二人を見つめていた。

目があったとたん、彼は慌てて膝をつこうとした。それを二人が止める。

「そのようなことは不要です」

いったん曲げかけた膝を、そのままの角度で保持することは今の彼には難しいことだった。そのまま前のめりに崩れそうになった体を、主が両腕で支える。その手を借りてなんとか立ち上がり、あらためて二人に頭を垂れた。

「不調法いたしました。申し訳ありません」

「無理をいたすな。そなたの状態は吾らも承知しておる。なによりそなたがその傷を負った責めは吾にある」

「なにを仰られます」

「はいはい、そこまでになさって」

二人の間に割って入ったのは、女王その人だった。

まだお互いに言い足りなさそうな二人を、円卓へ導いて椅子にかけるように促した。

彼は恐縮しながらその言葉に従った。

「あなたに会うのを、今日にするか明日にするか、間際まで迷っておられたのは碧柊殿です。結局なんだかんだと会うための理由を並べたてられて、拳句に私のせいになさるのですから」

女王はいかにも呆れたように溜息をついてみせる。

ここまでの経緯を暴かれてしまった夫の方は、なんとおぼつこの悪そうな様子でいる。

彼は思わず小さく笑ってしまった。

以前、彼が彼女に会ったのは、半年以上前のことになる。そのとき彼女は自分を偽っていた。いかにも世慣れぬ様子で、しかも男装させられた上に主に振り回されていた記憶はまだ新しい。

そんな彼女もいまや主と夫婦となり、ぎこちない乳兄弟の再会の不自然さを和らげようとしてくれている。それを思うと感慨は深まるばかりだった。

「お二人の睦まじいというお噂はかねがね耳にいたしておりましたが、まさか尻に敷かれていらっしやるとは思いませんでした」

「綾霖

りょうりん

、口だけは相変わらず達者なようだな」

女王の夫は不愉快そうに腕を組み、彼を見据えている。

彼の主であり、乳兄弟であり、かつての東葉王太子でもあった碧柊へきしゅう

は、今は青蘭

せいらん

女王の夫として彼の目の前にいた。

「じきに体の方もそうなります」



碧柊の恨みごとに軽口で返し、綾霖はようやく以前のようになんか笑うことができた。

綾霖の方が季節を一つ先にして生まれた。それからあの争乱が起きるまで、彼は碧柊とは兄弟のように育ち、これほど長く離れていたことはない。表立っては主従の体面を守りながらも、信頼関係や絆は深い。人目がなければ、気安く口をきいていたものだった。

それがこの半年ほどの間にすべてが大きく変貌し、碧柊と綾霖の立場も変わってしまった。だが、その絆までがそうなくなってしまったわけではなかったらしい。

綾霖の前で、青蘭は女王である前に碧柊の妻としてふるまっている。それもまたその証左なのだろう。

「その様子なら心配するだけ無駄だったようだな」

碧柊も苦笑しつつ、安堵したようすものぞかせる。

「はい、おかげさまで」

綾霖も大げさにありがたそうな顔をしてみせる。

青蘭は小さく笑っていたが、じきに立ち上がった。

「あなたのその様子を見て私も安心しました。あとはお二人で」

積もる話もあるでしょう、と言外に付け足して、彼女は踵を返す。なにを思ったか、碧柊がそのあとを追い、肩に手を置かれて驚いた様子の妻の頬にさっと顔を寄せた。とたんに白く秀麗な横顔が朱に染まる。青蘭は反射的に綾霖を気にしてか視線を泳がせたが、じきに抗議するように碧柊を睨みつける。

小声での応酬がなされたのち、怒りのおさまらない様子で青蘭は部屋を出ていった。

戻ってきた碧柊は、まんざらでもない様子でいる。

綾霖は呆れたように声をかけた。

「いったい何をなさったのです」

「なに、挨拶のようなものだ」

いっこうに妻の怒りがこたえているようすはない。

「陛下はお怒りのようでしたが」

「仲が悪いと噂されるよりは良からう　それだけでなくも色々行き違いもあってな、苦労したのだ」

もとの椅子に腰を落ちつけると、碧柊はそういつてかすかに苦笑した。

「あれから、ですか？」

「そう、あれからだ」

碧柊は一瞬視線を落としたが、じきにまっすぐに綾霖をみる。彼もそれに応じるように微笑した。

「よく助かってくれた」

「助かったのかどうか」

綾霖は小さく首をかしげた。

碧柊はその返答を予想していたように、小さく息をつき、肩をおとした。

「……やはり、明柊か」

「はい」

綾霖は言葉少なに経緯を語った。あの皆で碧柊たちを見送ったのち、綾霖は結局苅家の兵に捕らえられてしまった。その時点ですでに深手を負っており、意識朦朧だった。碧柊かとあえて苦労して生かさず殺さずで捕らえてみれば、乳兄弟の方だった。しかも半死半生で肝心の王太子の行く先を糾すこともできない。

いっそ殺してしまえとの意見を、明柊はそれでは面白くないと容れなかった。そのまま皆の外に綾霖を放置し、去ったのだという。去りぎわにこう囁いて。

「せいぜいあがいて俺を楽しませてくれ」と。

綾霖も明柊とは幼い頃から面識がある。年下の幼い碧柊を共に遊ぼうとって池の畔までおびき寄せた。碧柊は案の定足を滑らせ溺れるはめにあつた。助けたのは乳母たち側近だった。

濡れ鼠になり肩で息をする碧柊に、明柊は「だから危ないから近づくなといわれてたんだよ」と笑つたのだ。溺れる碧柊を助けようとはしなかった。

幼心にぞつとしたものだが、碧柊はなぜか明柊になついていた。次第に意地悪くからかいからんでくる明柊を避け、表向きは嫌うようになったが、根本的なところではどうだったのだろうか。

戦にあたって、碧柊は従兄の策を採用し、共によく戦っていた。戦場における信頼に偽りはなく、時に衝突することもあった。たいしては明柊が従弟の甘さを指摘し、された方も納得しながらも抗弁していた。傍で聞く者にはどちらも正論であり、つまりは考え方が異なりすぎていた。

「……あれは大人の目のないところで吾に無茶をさせることはなかった」

同じようなことを思っていたのか、碧柊はぽつりとつぶやいた。

「あいかわらず苓公には好意的でいらっしやる」

「少々の怪我や火傷で子供は死なぬ」

「あのかたのやり方を少々とは、いいかねます」

綾霖の言葉に碧柊はただ苦笑する。乳兄弟の意見を否定もしないが、おのれの見解をあらためる気もないのだろう。何度も繰り返された問答でもある。

「どちらにせよ、事態に変わりはありません」

「わかつておる。あれが捕らえられればわれが処断する」

「本気でそのようにはお考えではないでしょうに」

「あれがたやすく捕まるような玉か」

うんざりしたような口振りに、綾霖は思わず笑った。

「でしょうな」

碧柊もそれにつられるように声もなく笑っていたが、やがてそれをおさめて呟いた。

「これからが本番だ、頼むぞ」

「もちろんです」

綾霖は即答し、うやうやしく頭を垂れた。



聖地の朝は遅い。

背後に横たわる長大な山の背が、東からの陽射しを阻むのだ。

季節によって多少は前後するものの、実質的な日の出は昼近くとなる。

だからといって、それまで聖地の朝が来ないわけではない。

ほの暗いながらも徐々に世界は明るさを増していき、山の背の尾根を超えた陽射しはまず、遠くの西の湖面を照らす。聖地の人々がその日最初に目にする朝日は、その湖の沖合の輝きだ。

雪蘭せつらんの部屋からも、その輝きは望める。

朝、起床するとしばらく窓辺に立ち、その最初の輝きが現れるのを待つ。

暗いうちから湖に漕ぎだした漁師たちの小舟がその沖合に達するころ、その煌めきは現れる。

そうしているうちに、対岸から多くの小舟が姿を現す。

それは聖地を訪れる人々を乗せた小舟の群れだ。

1000年近く戦火を交えてきた西葉さいはと東葉とうはが、青蘭女王のもとで一つの“葉”ようとしてまとまったのは、東の脅威である翼波の侵入とほぼ同時期だった。

誕生したばかりの国は、その前におこった内乱が終息する間もなく、次なる翼波との戦いに挑むこととなった。

屈強な兵の揃う翼波の前に、まとまったばかりで混乱の最中にあつた“葉”は脆かった。

その侵入を阻むことはできず、東葉をおもな戦場に、未だに戦いは続いている。唯一の救いは、冬が近づけば彼らは引き揚げていく

ことだけだった。

翼波の国土の大半が山間部であり、葉との国境にも高い峰々がそびえている。その峠道は秋の半ばから雪がちらつきはじめ、冬には深い雪に閉ざされる。さすがの翼波の人々であっても、死を前提としなければ越えることはできない。

秋が深まると、彼らは兵を引き、帰国する。そして、雪解けともにもまたやってくる。それは、東葉との戦いのころから変わらない。そして今は初秋。そろそろ葉の人びとがほっと息をつける季節が近づいている。

そのはずだった。

聖地は狭い。背後に峻嶮な山がそびえ、前には広大な瑳衣湖が迫っている。

居住地は限られている。王統家といえども、その別邸が手狭なものとなるのも仕方のないことだった。

雪蘭にあてがわれた部屋も、広くはない。だが、聖地の土地事情を考えれば、個室をもてるだけありがたい。

着替えを済ませて、部屋を出る。廊下も階段も狭いが、その分、贅がつくされている。

階段を下りる途中で、ふと足が止まる。

食堂の方から、にぎやかな声が響いてきた。

子どもたちの高い声に、それをたしなめる落ち着いた女性の声。

寄州候里桂の妻子たちのものだ。

邸のものたちは、雪蘭の正体知らない。青蘭が聖地を訪れたときは王侯貴族専用的高级宿に滞在したため、彼らは青蘭の姿を知らないままだった。

邸の執事や里桂の妻は、雪蘭の正体を知っている。それ以外の邸の者たちは、雪蘭を高貴な客人と認識している。王族に次ぐ準王族である王統家にあつて、さらに“高貴な”とされる身分は限定される。

雪蘭にとってそれは不本意なことであったが、身分をふせて身を隠すには、寄州公邸ほど適したところはない。

執事をはじめ、別邸で働く者たちは、先祖代々寄州候につかえている。彼らは由緒ある勤めに誇りを持っており、寄州候に対する思慕も深い。

信頼できるものたちばかりであり、彼らはいったん主から命じられれば詮索することもなく、口を滑らせることもない。主に仕えるのと同じ態度で、賓客にも忠実に奉仕する。

食堂の入口に控えていた家人けいんが、雪蘭に気付く。

雪蘭の食事は、直接彼女の部屋に運ばれることとなっている。里桂の妻と語らう時以外、雪蘭が食堂に足を踏み入れることはめったとない。

そんな彼女が部屋を出たということは、目的は限られる。

問いかけるような家人の眼差しに、雪蘭は薄くほほ笑む。その手には薄い羽織りものを畳んでかけている。それが家人の目につくように腕をあげてみせる。

彼女の意図をさっした家人は、小さく一礼して階段の下に寄ってきた。

「お供を」

「供はいりません。じきに戻ります」

「しかし……」

「心配無用です。今の聖地ほど安全な地はないのですから」

「おっしゃる通りではございますが、そういうわけには……」

これまでも何度か繰り返されてきた押し問答だ。最後には押し切られると分かっているのに、彼は毎回律儀に異議を唱える。確かに忠義者に違いないが、もう少し柔軟さも持ち合わせてほしいものだった。

雪蘭もまた、いつものようにそんな感慨を抱きつつ、微笑んだままきっぱりと彼の申し出を拒絶した。

「じきに戻ります」

にこやかに断言されてしまえば、執事もそれ以上食い下がることはできない。里桂から預かった賓客である雪蘭は、主その人にも等しい。

彼の弱みにつけこむようで良心が痛まないわけではない。従妹の従者として仕えてきたこれまでの年月を思い返してしまふ。

できれば目の届くところにいてほしいと思いい心には、忠義とともに従者としての都合もある。気ままな散策を望むのが勝手なら、彼らの都合も勝手ではある。

しぶしぶと見送る執事の開けた扉のすぐ前が、いきなり階段となっている。庭を設けるような余裕は聖地にはない。

邸をあとにした雪蘭は、まっすぐに湖畔へ向かう。背を向けた方には、神殿がある。通りを歩く人びとが向かうのは、そちらだ。雪蘭だけがその流れに逆らっている。

彼らは雪蘭が部屋で目にした、小舟の一団に乗っていた人々だ。

翼波との戦いがはじまっても、聖地を訪れる人々の数は減らない。むしろ、戦乱の暗い影に参拝者は増える傾向にある。

そして、その天然の要害ともいえる立地条件に目を付けた王侯貴族が、続々と妻子たちを聖地へ避難させる傾向にある。

今朝の一団にも、そんな人々が混じっていたらしい。華やかな衣を身に付けた人びとが、家財をもった家人けいじんを従えて通りを行く。質素な身なりの参拝者の中で、彼らの姿はいやでも目を引く。

「翼波が西葉へも迫っているとか」

「おお、怖いこと。いったい、どうなってしまうのかしら」

不安げな囁きが、通りすがりにいくつも聞こえる。

翼波の西葉への接近は、すでに噂になっていっているらしい。

事態は噂を先行している。もう翼波は西葉の大地を踏み荒らしている。その報は、寄州公邸に昨日届けられたばかりだ。

翼波の秋は、葉よりもはやく訪れる。彼らがそろそろ帰国する時季が迫っている。にもかかわらず、なぜ、今ごろ西葉まで深入りしてきたのか。



雪蘭は通りの途中で足を止め、なにかを探すような視線を巡らせた。

2

今の聖地ほど安全な地はない。

それは本当だった。各王侯貴族が妻子とともに、彼らを守る護衛も付いてきている。

戦況の深刻化に伴い、参拝に訪れる人々もとすれば動揺しやすい精神状態にある。いつ混乱が生じるか知れない。そのため、神殿側も普段は敷地の外へ出ることのない神兵を、聖地全体に配置して目を光らせている。

しかし、相変わらず人の流動は激しい。出て行く人、やってくるもの、日々同じだけの数が出入りを繰り返している。

厳密に安全といえるのかどうか、雪蘭には疑問だった。

聖地と対岸を行き来する小舟の発着時間も、一定の時刻に定められている。それ以外の時刻に出入りできるのは、聖地に湖の魚を提供する地元の漁師と、神殿から特別に許可を受けた便に限られる。

厳しい規制が課せられている一方で、信者を拒めないという、聖地の事情もある。この矛盾。それは彼が見逃すとは思えなかった。人の流れに逆らって、ようやく湖のほとりにたどりつく。

湖畔は浅瀬になっていて、いくつもの棧橋が湖中にのびている。舳われた小舟が波に揺れ、時々ぶつかり合う。

雪蘭は棧橋の手前で足を止め、そんな風景をしばらく見つめる。波は穏やかだ。小舟もぎつちりと隙間なく舳われているわけではない。それでも、無人のそれらは緩やかな波に翻弄され、ぶつかり、きしむ。

瑳衣湖は広大な湖だ。対岸は遠く、見えない。その見えない岸の向こうには、そろそろ実りの季節を迎える平野が広がっているはず

だった。

寄州公邸の執事とわずかな押し問答を繰り返したのち、湖畔を訪れる。

それは雪蘭の日課でもあった。

彼女の遠い後祖みぢやでもある女神をまつた神殿に参ったことは、実は一度もない。それは日々あらたにやってくる参拝者たちに遠慮してのことではない。

彼女には見も知らぬ祖先への尊崇の想いはなく、だからといって冒瀆するつもりもない。冷害や洪水、日照り等と同じで、神とは人に寄り添うものではない。天災と大差ないものと考えていた。

山の背の溪流を下ってきた砂と砂利の堆積した浜は、濡れた岩の色をしている。

棧橋から離れ、門前の賑わいから遠ざかると、そこには緑陰がある。

その木陰でほっと息をついた雪蘭に、静かに歩み寄る影があった。

「ようやくのお出ましですね」

「やはり、気付いておいででしたか」

雪蘭はゆつくりと振り返る。

「あなたがそう仕向けたのでしょうか」

冷やかな眼差しを受ける男は、まるで拜謁でもするかのように厳かに微笑んでいる。

すつきりとした体躯を包むのは、貴族の旅装。聖地参拝のため華美さは抑えられているが、服地や仕立ては身分にふさわしいものだ。腰に太刀を佩き、面を隠すこともせず。いかにも貴公子然としたたずまいは、人目を引くには十分な魅力を備えている。

あまりに堂々とした登場に、雪蘭は内心呆れつつも納得していた。こそこそするのは彼らしくない。ばかばかしいほどのおおっぴらさは、彼を知る人間にとつては驚くに値しない。

「よくもまあ憚りもせず」

感情を含まない冷たい声音に、彼は光栄ですと口の端を歪める。

「俺が姿を現すことは、とっくに分かっておられたのでしょ  
まったく憎らしいほどの落ち着きぶりですね」

「このような時期に、翼波が西葉まで侵入する必要性はないはずで  
すから」

「それがそうでもないのですよ。西葉北部の収穫は他より半月以上  
早いですからね。帰国のついでに実りを持ちかえれば、皆、“葉”  
の国土の豊かさを実感するでしょう。そうなれば、来年の戦いには  
ますます熱が入るといふものです」

得意げなもののいいに、雪蘭は目を細めただけだった。

「あなたはそれから俺の意図するところを察してください。たわけだ。  
あいかわらず聡明でいらつしやる。そしてわざわざこうして、俺に  
機会を作ってください。たわけですか」

「この時間帯の散歩は、私の日課に過ぎません。あなたこそ、それ  
くらいのことなら探り出すのはたやすかったのではありませんか」  
「買い被っていたら、光栄ですが、もはや俺は苓公でもなんでも  
ありませんのでね。葉で動くとなると、ずいぶんと不自由なんです  
よ」

彼はかつて東葉の王子だった。それが今や国を裏切った大罪人。  
彼を恨み、その命を狙うものはいくらでもいる。

そんな彼が、故国を裏切つて与した翼波から離れ、葉のなかでも  
もつとも動きを制限される聖地に姿を現すなど。とても正気の沙汰  
とは思えない。しかし、それは一般論にすぎない。

彼ならば、明後ならば、そんな愚とも戯れともつかない危険を易  
々とおかしてもおかしくはない。それも、つまらない目的のため  
に。

雪蘭は愚問だと分かり切っている台詞を、口にせざるを得なかつ  
た。そうしなければ、このばかばかしい問答にきりはないだろう。

「なにが目的なのです」

「それはあなたのご想像の通りですよ」

彼は艶めいた笑みを浮かべると、そつと雪蘭の手をとり、うやう

やしくその甲に口づけをおとした。

3

雪蘭はその手をふりほどきはしなかった。眉ひとつ動かさず、虫でもとまったかのように冷たい顔で通した。

明柊は大げさに切なげな溜息をついてみせる。

「相変わらずつれない方だ」

いかにも悲しそうな嘆き節も以前と変わらない。雪蘭は取りつく島のない態度を守りつつも、内心苦く笑っていた。

悪びれるわけでもない一方で、自分がお尋ね者であることもさりりと口にする。

実際、彼がこの国にもたらした害ははかりしれない。今、この時も、戦場で命を落とそうとしている者がいるかもしれない。翼波の手にかかるうとしていた葉の民がいるかもしれない。収穫期に被害をこうむれば、次の冬を越せないものもあるう。

それでなくともすでに多くの命が落とされた。失われたものは多い。東葉は国土のほとんどが戦場となり、多くの人々が西葉に逃れてきている。

翼波の残虐さは噂以上で、彼らの驚異はすでに西葉の人々にとっても他人事ではない。

彼らの侵攻以来得られたものといえば、対立していた東西の葉の民の絆が深まったことくらいのものだ。

翼波と葉の戦いの戦況は一進一退を繰り返していたが、夏頃から急に翼波の攻

勢が増し、今は葉が押され気味になっている。西葉までの侵入を許してしまつた

背後にはそんな状況もあつた。

苦しい戦いが続いているが、葉の人々はよく持ちこたえている。

彼らの誇りを守り、国土死守の闘志を鼓舞し、その求心力となつて

いるのは女王青蘭であり、兵をまとめる碧柊であり、彼らの間に生まれたばかりの王女の存在だった。

次期女王でもある第一王女の誕生は、女神の祝福の証でもある。葉がひとつにまとまったことを女神が言祝いでいるのだと、神殿が中心となつて各地で説いたこともあり、疲弊し沈みがちだった人々に久しぶりに明るいう希望をもたらした。

それを支えるように、王配である碧柊が健闘を続けている。彼の率いる軍は辛勝することがあつても、一度として破れたことはない。彼を頂点とする葉軍は、組織としても着実に立て直されつつある。

雪蘭は聖地でその変化を見守つてきた。

青蘭からは定期的に書状がよこされる。内容は子供や夫のことから政治的なものまでと多岐にわたる。なかには政治的判断に迷っていることを明らかに匂わせているものもあつたが、雪蘭がそれに応えることは一度としてなかつた。

政治的な関わりはいっさい持たない。それを雪蘭は私信においても徹底した。その線引きの難しいこともあつたが、じきに青蘭の方からそういうことは避けるようになった。

彼女の周囲の人間は、信頼してもいいと雪蘭も考えていた。

東西の“葉”が結束したからこそ、それだけの人材が集まつたともいえる。

1000年の憎悪を募らせてきた老臣たちは蒼杞の手で肅清され、長く残るはずの溝と禍根は翼波と明柊への憎悪の前に、今のところは棚上げにされている。覇気のなかつた西葉の王はとりのぞかれ、問題の多かつた蒼杞は自らその身を滅ぼした。優れた支配者であつた東葉王ももういない。東葉に併合されるはずだった西葉は、その正統な王家から新たな“葉”をまとめる女王を排出し、優勢にあつた東葉は今や戦場となつている。その元王太子は女王の夫として、そして待望の“葉”王家の直系の王女の父として、その存在を確かなものとしている。

その結果をもたらしたのは彼ら自身の働きだが、引き金となつた

のは“彼”だった。

雪蘭はそつと視線を湖面の方へ滑らせた。

彼を責めるなら、こんなところで徒に言葉を重ねるよりも、大きな声をあげればすむ。姿は見えずとも、叫び声の届くところに神兵がいる。それはこちらへ来る前に確認してあった。

一声あげれば、彼らがじきに駆けつけよう。

たとえ明柊が手練れであったとしても、数の前にはかなうまい。逃げるにしても、ここは聖地。外界とは隔絶されている。一時は逃れたところで、完全に逃げ切ることはできないだろう。

明柊ならば、そのあたりの算段も付けているかもしれないが。雪蘭とて、むざむざと彼を逃しはしない。

「此度はなにを狙っておられるのです？ 私にその心当たりなどあるうはずがないでしょう」

あえて、目を合わさずに問う。  
人を呼ぶのはたやすい。

そつ自分に言い聞かせつつ、さらに言葉を重ねようとしているのは、はたしていったい何故なのか。

自問自答を押し殺し、雪蘭はじつと答えを待つ。

明柊はじきにこたえるかと思っただが、なかなか言葉は返ってこなかった。

雪蘭は訝しく思いながらちらと振り返る。そしてそれを後悔した。彼は薄い笑みを浮かべたまま、まっすぐに雪蘭を見つめていた。

彼が微笑しているのはいつものことだが、それは彼の真意を曖昧にするばかり笑みのはずだった。

このとき、彼女に向けられていた笑みは、そういう類たぐいのものではなかった。

「お心当たりのないお顔ではないようだ」

「……自分に都合のよい解釈はご自由ですけれど、あいにく違ちがうようですわね」

「ではなぜ、目をそむける。まことにお言葉通りなら、いつものよ

うに俺を冷笑してくださればいいでしょう」

「ばかばかしい どうしようが、私の勝手です」

何故、このように愚かしいばかげた言葉しか出てこないのだろう。雪蘭は内心、困惑していた。

理由は分かっているつもりだった。青蘭が暗示したように、己の愚かしい心の奥底の想いには気づいていた。そんなばかげて浅はかな想いに、己のことながら失笑してしまったほど。それですべては終わるはずだった。まともにとりあう気にもなれないほどに、くだらない想い。

そんなものに振りまわれるほど、愚かな人間ではないはずだった。つんと顔をそむけ、そうしながら彼の視線から顔を隠そうとして

いる。  
それが自分でも嫌というほど分かるほどに、雪蘭は狼狽してしま

う。  
そしてそれは、いくら隠そうとしてもごまかしきれるものではな

かった。  
相変わらず自分に注がれたままの視線と、動こうとしない彼のま

とう雰囲気変わらずに変化したことすら分かってしまう。  
「俺はこれでも誠実な人間ですよ。特に約束したことは必ず守る  
それが女性とかわしたものならなおさらです。男ならば、当然で

しょう」  
口ぶりと言い回しは、彼らしいふざけたものだった。

雪蘭はぐつと指を握りこみ、気を落ち着かせる。

ここで彼の流れに乗せられてしまっ

てはいけ

ない。  
「いったいどなたとなさった約束なのか、わかっていらっしやるの  
ですか」  
「あいにくとそれがわからないので そのために参上したのです  
よ」

風が吹いた。

ざざつと背後の緑が揺れざざめき、湖面に漣が生じる。陽射しは穏やかで、人の去った湖畔は静かだった。つい先刻まで参道にあればどあふれていた人びとの存在が、まるで幻だったかのよう。

明椋の口ぶりは穏やかだった。茶化するような、翻弄するような意図は感じられない。

口元に浮かぶ微笑も、静かな眼差しも、見覚えのないものだった。それだけに、雪蘭はさらに追い詰められた心地に陥る。

誤魔化そうとしていたのは、むしろ自分の方だった。それを明確に悟ると、困惑と慄きが背筋を走った。

なにを誤魔化そうとしているのか。

それはとうに分かっていたつもりだったが、一人で考え、片を付けたと思っていたことも、こうして現実となるとどうしていいかわからない。

なにがばかかっているのか、それは分かっているはずだった。分かっているながらも、何故、この場にいるのか。

神兵を呼ばず、彼とこうして対峙していることそのものが答えだと悟りつつ、それを受け入れることはできない。

彼は裏切りものであり、今もまた、彼の手により西葉まで侵入した翼波が故国の土地と人びとを踏みにじっている。

雪蘭は父の遺命をうけて奥の宮に入り、青蘭と共に育ってきた。

従姉妹であり妹にも等しい彼女のために身を呈ししたのは、決して愛国心のためではない。ひとえに大切な彼女のためだけだった。

そんな彼女を窮地に陥れ、今も数々の難局や危難の根源となりつづけているのは、目の前のこの若い男に他ならない。

どんなことがあっても認めるわけにはいかない。

真実、彼女のことを思うなら、神兵を呼ぶのが当然だ。それがわかっていながら、何故、できないのか。その理由をもっともよく知るの、ほかならぬ雪蘭当人。



頭では事態を冷静に把握しながらも、心がついてこない。混乱の際にやっとの思いで立ち止まりながら、雪蘭は彼を睨みつけていた。何故、聖地に逼塞することを選んだのか。それは青蘭の身边から自分の気配を消すためばかりではなかった。

どちらが本当の目的だったのか。

もう、こうなっては自分でもわからない。ただ、来てほしくなかった。会うべきではなく、会いたいと思うべきではなく、けれど、本当の願いはどうだったのか。

朝、目覚めるたびに湖面をみつめ、日に何度か湖岸まで足をのばしていたのは、何のためだったのか。

けれど、ここで崩れるわけにはいかなかった。

最後にかろうじて残った矜持を支えに、雪蘭は目を眇めたまま薄く笑った。

「いったい、どなたがどのような約束をなさったとおっしゃるのです。あなたなどと」

そのせいっぱいの嗤笑に、彼は笑みを深くしただけだった。

雪蘭は無駄な抵抗と悟りつつも、それでも辛うじてまだ立っていた。

「“青蘭”殿とある約束をしたはずなのですがね、どうやら、俺は彼の姫君に謀っていたらしい」

「あなたが自分で勝手に謀られただけでしょ」

「あの時はあれで良かったのですよ。彼女が真実は誰であろうが、あの時は“青蘭姫”であるということであれば、それで良かったのですよ」

「あなたにとっては、でしょう」

「そうかな？ あの方が“青蘭姫”であったからこそ、すべてがうまく回ったともいえる。なかなか健気でしたよ。それに堂に入っていた。推測するに、以前から頻繁に入れ替わっておられたのではないかと。あれほど似ておられるなら、そうしない手はないですかね。あなたはどうか考えになられますか、姫君」

「……私にはかわりがないことです」

「あいにくと、そうもいかないのですよ。どうやら、私の妻となつてくださった“青蘭姫”は名前を騙っていらっしやっただようなのでね」

「いつたい、なにを」

「名前を騙っておられたとしても、彼の君が俺の妻であることに違いない。夫として妻の真の名を知りたいと思うのは当然でしょう

それに、私が約束した方こそが、妻その人なのでね」

「いつたいなにが目的なのか。雪蘭をからかうためだけに、危険を冒して聖地に来たとは思えない。それとも従妹の名を騙り、彼をだましたことを、今ごろになって恨みを晴らしに来たともいうのか。

雪蘭は知らぬ間に一步後ずさっていた。踵が木の根を踏み、はじめてそんな自分に気付く。

「……なにが目的なのです」

雪蘭は深く息をつき、ようやっとの想いで言葉を紡ぐ。声がかすかに震えるのは、それ以上誤魔化しようがなかった。

明柝はちよつと首をかしげるようにして、愉快そうにそんな雪蘭を見つめる。

さも戸惑ったようにこめかみあたりをかいてみせる仕草がわざとらしく、憎らしい。

「それは先ほど何度も申し上げているでしょう　わざととぼけておられるわけですか。やれやれ、それほどまでに嫌われているのですね、俺は」

雪蘭は胸の前で軽く両手を重ね合わせていたが、いつの間にか衣をきつく握りしめていた。細い指先が白くなっている。

「ですから、なんのために約束を果たす必要があるのです」

「約束を果たすことそのものが目的だと、再三申し上げているつもりなのですがね、俺は」

さも困惑したような口ぶりがわざとらしく、雪蘭を苛立たせる。

人をこれほど狼狽させておいて、自分は悠々としている。それがこれ以上ないほど憎らしかった。

「私との約束は果たすためだけに、あなたはこのようなばかげたことを……」

言葉を途中で呑み込み口元を押さえたが、もう遅かった。

凍りついた雪蘭を見つめつつ、彼は一步近づく。雪蘭の背は幹にあたり、もう逃げる余地はない。

彼はにやりと口の端を持ちあげつつ、しかしその眼差しはからかうようでありながらもどこか熱っぽくもあつた。

「ようやく認めてくださいましたね 俺の姫君」

押掬するように囁きながら、腰を折って恭しく再び雪蘭の手を取ろうとする。

雪蘭はとっさにその手を振り払っていた。

5

雪蘭が乱暴に手を振り払っても、明柊は悠然と微笑んでいる。

それが己の優位を確信したもののように見えて、雪蘭は奥歯をかみしめた。まるで心の奥底まで見透かされているような気がするが、そんなことにいちいち動じてはいられない。

これ以上振り回されるのはごめんだつた。

彼の手を拒み、厳しい顔で対峙する雪蘭を、彼はまるで愛でるように見つめる。

「では、約束を」

「名を明かす約束をした覚えはありません」

第一、彼の言う約束も一方的なものにすぎない。

雪蘭が優位に立てる根拠があるとすればそのくらいのこと、彼はそれすら見透かしたように余裕のある態度を崩さない。

「それも含めて、あなたは答えてくださるかどうか、それだけのことでですよ」

「答えなくともよいと?」

雪蘭は油断なくやや目を眇ながら、明柊を見つめる。

「ええ、約束とは申せ、あくまで俺から言い出した一方的なものであることは承知していますから」

当然といえば当然だが、彼とてそれは弁えていたわけだ。だからといって、それを巧妙に言いつくろつて、雪蘭の言質を取ろうとはしない。彼にしては誠意ある態度ともいえるが、雪蘭の知る“彼”としては妙にも思える。

「そのためにわざわざ? 何故?」

「あなたの答えをどうしても聞いておきたかったのですね」

雪蘭は言葉に詰まった。答えないことも、また答えの一つであるに違いない。

明柊はどのような形であれ、雪蘭からの“答え”を求めていると  
いうのか。

「……何故?」

「あなたは何故、何故、ばかりですね」

「訝しく思うのは当然でしょう? 約束を守るのがあなたの信条と  
はいつでも、確かに私たちはそれを交わしたわけではありません。  
それなのにあえてこれほどの危険をおかす必要性がわかりません。  
このようなことに、どんな意味があるというのです?」

生真面目な面持ちで真剣に問う雪蘭に、明柊はたまらずといった  
風情の苦笑を浮かべた。

「こつこつ場合の理由は一つしかないと思いますがね」

「一つ?」

戸惑った様子で繰り返す。彼の言動はその意図を曖昧にするため  
か、意味ありげなくせに憶測しかできないことが多い。

その言葉もそうかと勘ぐるが、彼の表情からそんな思惑は感じら  
れない。

「見当もつかない、という顔をなさっておられますよ」

「ええ、つきません」



「それとも？」

「いや、あなたには関係のないことでしたね、失礼」

雪蘭の問いに、明柊は失笑を誤魔化すように口の端を歪めてみせた。それは見るからに意図的なもので、彼の軽侮を感じて雪蘭は思わず唇をかんだ。

「つまらない問答で煩わせてしまいましたね。あなたとしても早くなりをつけてしまいたいところでしょう。答えは簡単だ。あなたがどうしたいのか、またうかがいに参りますと、用件はそれだけだったはずですからね」

明柊はにこやかにそう告げたが、雪蘭には彼が笑っているようには見えなかった。

軽侮の影には、失望にも似たなにかが垣間見えたような気がした。それを雪蘭はあえて見ないようにした。彼はそれを彼女に見出してほしかったのか、それともそういうことではないのか。

雪蘭は内心ひどく動揺していた。取り返しのつかないことをしてしまったような後味の悪さを噛み締める。何故そんな想いが込み上げてくるのかは分からない。まさしく彼のいった通り、つまらないことはさっさと終わらせてしまいたかったはずなのに。

そんな狼狽を押し殺し、雪蘭は彼のいう“用件”に意識を集中した。答えなくても良いともいわれたが、結論を出す前に確かめておきたいことがあった。

「その前にききたいことがあります」

「また、“何故？”ですか。いいでしょう、なんでもお答えしますよ」

明柊は微笑して頷いた。それは見慣れた真意の知れない仮面の笑みだった。

「何故、このような真似を？」

「このような、とは？」

「この時季に翼波をわざわざ西葉まで侵入させたことです。じきに国境は雪に閉ざされるというのに」

「それにはすでにお答えしたはずですよ。翼波に西葉の旨味を教え  
て差し上げるためです。来年の春の戦いでは今年以上に奮戦なさっ  
てくださいるでしょう」

「あなたのその真意　本当の狙いです」

「……俺のそれをきいたところで何になる？　俺のやったことに変  
わりはないでしょう」

「確かにかわらない。ただ、私が知りたいだけです……あなたの質  
問に答えるために」

その言葉に明柊は片眉をあげ、口の端をつりあげた。

「おや、やつと俺に興味を持ってくださいましたか」

「答える気がないなら、私は神兵を呼びます。さっさと立ち去りな  
さい」

「怖い方だ」

「空言にこれ以上時間を浪費するつもりはありません」

「俺は楽しんでるだけですよ」「明柊殿」

やや強い口調に、明柊は苦笑して首を振った。

「習い性になっていているらしい、失礼」

そう詫びて小さく息を吐く。どこか力の抜けた表情を、雪蘭はは  
じめて目にした。

「俺の思惑はなんら変わっていませんよ」

「……国を裏切り、翼波を手引きしたただけでは十分ではなかったと  
？」

「西葉は翼波の脅威を知らないままだ」

「国全体が戦いに巻き込まれているというのに？」

「蹂躪されているのは東葉のみ」

「西葉の人々も出陣しています」

「それは一部だけでしょ　恐怖は全ての民に植え付けたほうが  
より効果が上がる。誰一人、他人事だとは考えられないように  
恐怖が深ければそれは語り継がれ、葉の民に刻み込まれる」

雪蘭は言葉もなく、小さく息を吐いた。確かに彼はなにも変わっ

ていない。もしその結果、葉が翼波の支配するところとなったとしても、自業自得だと笑うのだろう。

「そこまでしななければならぬのですか？」

「あなたは翼波をご存知ない」

「確かにそうですが、それでも他にやりようはあつたはずですよ」

「生ぬるいやりようは嫌いでした」

「なれど」

「あなたは俺の考えを知りたかつたのでしょうか？ それ以外の言葉は無用のはず。俺も無駄な応酬は望まない」

「……」

「俺はあなたの問いに答えた。その結果、あなたがどう考えようとあなたの自由だ」

取りつく島のない、揺るがない態度だった。雪蘭も言葉を重ねることの無駄を悟り、視線をおとした。

答える言葉が見つからない。彼の行いはとくに許されない結果をもたらしている。今さら取り繕うことはできない。彼にもそんな気はまったくないだろう。雪蘭には彼を止めることはできない。かといって咎めたところで、その意味もない。

止めるなら神兵を呼べばいい。彼も逃げられはしないだろう。だが、声をあげることもできない。

言葉を探しあぐね、顔をあげることもできない娘に、明柊はなんともいえない表情を浮かべる。何かをためらうような、望むような、立ちすくむような表情を。

その時だった。

気が付けば、見晴らしのきく湖岸に多くの人影が次々と姿を表し、皆一様に同じ方を向いてどよめいている。

異変は雪蘭にもじきわかった。山の背の威容を背景に、煙が立ち上っていた。幾筋ものそれを指差している人々の横を、神兵がかけしていく。

雪蘭は反射的に彼を振り返った。彼は腕を組んでその煙を見つめ



ている。無表情のまま、淡々と小さくつぶやいた。

「そろそろ潮時のようですね」

「火を放つなど……」

わずかな聖地の土地には家屋が密集している。火は瞬く間に広がる恐れがあった。

顔を強ばらせる雪蘭に、明柊は涼しい顔であっさり受け流す。

「小火ですよ」

その騒動に紛れて逃げるため、あらかじめ手配してあったのだらう。

聖地ではこれまでも何度か火事が起こっている。大火となり、神殿以外のすべてが灰塵にきしたこともある。聖地に暮らす人々もっとも恐れている事態でもある。

雪蘭は煙に気をとられていた。その前を駆け抜け、棧橋へと急ぐ人影があった。避難を促す呼び掛けや、実際に舟に乗り込み漕ぎだす人たちがあらわれると、湖岸は急に騒然となり人が増えてきた。

「これにてお暇いたします」

明柊は深々と腰を折り、馬鹿に丁寧な礼をとる。雪蘭は慌てて彼の袖をつかんだ。

「私はまだ答えていません」

「無理にお答えいただなくてもよろしいのですよ」

明柊は微笑して、雪蘭の指を外そうとする。彼女はそれに抗い、強く握りこんだ。

「……では、答えてくださるのですね」

明柊はまっすぐ静かに雪蘭を見つめる。雪蘭も目を逸らさず、かすかに頷く。

「あなたがこれ以上、葉に害を成すのを見逃すことはできません」

「神兵をお呼びになれば良い」

「その間にあなたは逃げてしまってください。私一人であなたを捕らえておくことは無理です」

「ではどうなさる？ 俺がそれに付き合う義理はありませんよ」

「あなたが逃げるといふのなら、私が追うより他ないでしょう」

「共に来てくださると？」

悪戯つぼく笑った明柎に、雪蘭は小さく首を振った。

「私は青蘭と約束したのです、葉を守ることを。その約束を果たすだけのことです。あなたが葉に仇なすといふのなら、私はそれを阻みます」

「そのためには俺と共に来ていただくしかありませんね。俺は神兵に身柄を引き渡される気はない」

「それしか方法がないのなら、そうするしかないでしょう」

雪蘭は険しい顔でため息を吐いた。明柎はそんな彼女に小さく笑い、それから袖をつかむ細い腕を引き寄せた。

思いがけない行動に、雪蘭は身をかわすこともできなかつた。かたく抱き寄せられ、逃れようともがく耳元に低い囁きがかかる。

「もつと簡単で確実な方法があるでしょう？ 護身用の短刀でこの胸を一突きすればいい。俺にとってはそれも一興」

そうして、拘束する力が緩められる。彼は彼女の両肩をわずかに押しやり、その言葉が実行できるだけの距離をあけた。

雪蘭は呆然とその空隙を見つめている。確かに懐中には護身用の短刀を忍ばせてある。それはいつも当然のように身につけているもので、このような事態を想定していたわけではない。

彼の言葉はもつともだった。それが一番確実な方法に違いない  
実行できるのならば。

聖地のはずれから立ち上った煙はその勢いを増し、火の手もかすかに見える。人びとの動きは激しくなり、その数は増えていくばかり。棧橋よりやや離れた岸边の二人に注意を払う者はいない。

明柎はちらと視線を走らせて、煙の方角と棧橋の様子を確かめる。雪蘭はうつむいたまま動かない。明柎は小さく息をつく、袖口から細い刀子さしを取り出し彼女の手に握らせようとした。

「これでも十分可能でしょう」

強引に細い指にそれを握らせ、刃先を己の胸に向ける。それを取

り落とさないように彼女の手の上からしっかり支え、彼は笑った。

「さあ、どうぞ。それとも俺から動きましようか？」

笑みを含んだ声が耳朶にかかる。それは笑っているが、決して冗談を言っているわけではないことも、雪蘭は感じていた。

無理矢理握らされた刀子の先に彼の胸があたる。それは確実に左の拍動を狙っている。やわらかな手ごたえの中に、その刃先が沈んでいく感触が伝わってきた途端、雪蘭はそれを渾身の力で振り払っていた。

乾いた音を立てて刀子が地面に転がる。あたりは騒然としているのに、その金属質の音がイヤにはつきりと耳に残った。

「できない」

小さな呟きには、はっきりと深い絶望が宿っていた。

明柊はその響きに切なげに眼を細めたが、それは雪蘭には見ることはできなかった。

「では、仕方ありませんね」

溜息と共に鼓膜を震わせた声は、これまでになく優しいものだった。同時に再びかたく抱き寄せられる。今度は雪蘭も抗わなかった。ただ呆然と放心したように身をゆだね、ただ静かに涙をこぼす。

白皙の頬を濡らすそれを拭う、生温かくやわらかな感触が移ろっていくのを虚ろな眼差してただ感じていると、やがてそれは唇にたどりつき、軽くついばむように数度重ねられたのち、遠慮がちに、だが深く重ねられた。

応じもせず、だが拒みもしない華奢な体を強く抱擁したまま、彼は静かに囁く。

「俺が愚かな真似をした理由はただ一つ　あなたですよ」

雪蘭は麻痺したような心の片隅でその意味をようやく悟り、また一つ滴をこぼす。それは彼女にも、誰にも、どうしようもないことだった。

岑雪蘭しんせつらんの名は、史書にわずかに散見するのみ。青蘭女王の従姉であり、内乱の際に女王の身代わりをつとめたこと。彼女にまつわる記事はそれだけに限定され、その後の消息はおろか、生没年すら定かではない。

<了>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2243f/>

---

まだ見ぬ君に

2010年10月17日09時40分発行